

宮城県文化財調査報告書第 258 集

# 彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡

国道 4 号大衡道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書 I

令和 6 年 3 月

宮 城 県 教 育 員 会  
国 土 交 通 省 東 北 地 方 整 備 局

# 彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡

国道 4 号大衡道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書 I



## 序 文

海・山・平野など豊かな自然環境に恵まれた宮城県には、多くの文化財が伝わっています。これらは、私たちの先祖が苦難を克服しながら築き上げ、大切に守り伝えてきたもので、これからの地域社会継承の基盤となるものです。

しかしながら、近年は過疎化や少子高齢化などを背景に、地域の文化財の滅失等が危惧されています。さらには、東日本大震災や新型コロナウイルスの感染症流行等の非常時対応を経験する中で、日常的な体制整備・理解促進・保存と活用こそが重要であることを、私たちは身をもって学びました。

なかでも土地と結びつきの強い埋蔵文化財は、各種開発行為により影響を受ける恐れが常にあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関りが生じた場合には、市町村教育委員会と協力しながら貴重な文化財を積極的に保護することに努めています。

本書は、国道4号大衡道路4車線化建設に先立って実施した彦右エ門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡の発掘調査報告書です。今回の調査により奈良・平安時代の土器づくりの様相を解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明と社会継承の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚くお礼申し上げる次第です。

令和6年3月

宮城県教育委員会

教育長 佐藤 靖彦



## 例言

1. 本書は、宮城県教育委員会が令和元年～5年度に実施した彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の主体は宮城県教育委員会で、担当は宮城県教育庁文化財課である。
3. 発掘調査および報告書作成に際して、国土交通省東北地方整備局仙山河川国道事務所、大衡村教育委員会から多大な協力をいただいた。また、以下の方々および機関からご指導・ご協力を賜った（五十音順、敬称略）なお、所属は当時のものである。  
及川謙作（仙台市教育委員会）、名久井伸哉（加美町教育委員会）、早川文弥（大崎市教育委員会）、藤木海（南相馬市教育委員会）、宮城県多賀城跡調査研究所
4. 本書の遺跡位置図は国土交通省国土地理院発行の地形図を複製して使用した。
5. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位Nは座標北を表している。
6. 土色の記述に当たっては「新版 標準土色帖 1996年版」（小山・竹原1996）を使用した。
7. 各年度の現場の担当者は以下の通りである。  
令和元年度 佐藤涉 村田晃一  
令和2年度 佐藤涉 伊東博昭 風間啓太 古田和誠  
令和3年度 佐藤涉 風間啓太 古川一明  
令和4年度 佐藤涉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平  
令和5年度 黒田智章 手代勝巳 村上景亮 古川一明
8. 本書の整理は、佐藤涉、黒田智章、高橋透、熊谷亮介、伊東博昭、手代勝巳、風間啓太、村上景亮、村田晃一、佐久間光平、古川一明が行い、安齊香、遠藤友美、長田由佳、加藤紗和子、木村奈保美、小林由美、佐々木みゆき、佐藤せい子、鈴木美由紀、只木一美、永井優子、林澄江、伏見裕味子、湯元文子、吉田幸子、與名本京子が補助した。
9. 本書の執筆は、調査を担当した各職員の協議を経て、第IV章を佐久間・佐藤、第III章－3－(3)「瓦埴類についての総括」を古川が、その他の部分を廣谷和也、古川、熊谷亮介、黒田智章、佐藤が執筆し、佐藤が全体を編集した。
10. 発掘調査成果の一部は、現地説明会、宮城県教育庁文化財課ホームページ、みやぎ文化財チャンネル（YouTube）令和元・2・3・4・5年宮城県遺跡調査成果発表会、第46・47回古代城柵官衙遺跡検討会でその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
11. 墨書土器は、吉野武氏（宮城県多賀城跡調査研究所）に釈読を依頼した。
12. 遺跡の航空写真は、日本特殊撮影株式会社、株式会社サングラフィックス、遺物写真の一部は、株式会社アートプロフィール、に委託した。
13. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。



# 目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	5
3. 既往の調査・報告	6
4. 基本土層	7
第Ⅲ章 彦右工門橋窯跡	12
1. 調査区ごとの経過と概要	12
2. 発見した遺構と遺物	15
(1) 掘立柱建物跡・柱穴列跡	15
(2) 竪穴建物跡	22
(3) 土坑	96
(i) 土坑	96
(ii) 土師器焼成遺構	112
(iii) 焼成土坑	125
(4) 溝跡	131
(5) その他の遺構	135
3. 彦右工門橋窯跡小括	178
第Ⅳ章 吹付窯跡	269
1. 調査の経過と概要	269
2. 各区の調査	269
3. まとめ	271
第Ⅳ章 吹付 C 窯跡	278
1. 調査の経過と概要	278
2. 発見した遺構と遺物	281
3. 吹付 C 窯跡小括	294
第Ⅵ章 彦右工門橋窯・吹付窯跡・吹付 C 窯跡まとめ	309



# 目次

第 1 図	報告する遺跡の位置	1	第 32 図	SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (3)	47
第 2 図	事業範囲と遺跡	2	第 33 図	SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (4)	48
第 3 図	彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡調査 区配置図	3	第 34 図	SI24a 竪穴建物跡 出土遺物	49
第 4 図	報告対象遺跡と周辺の遺跡	4	第 35 図	SI25・26 竪穴建物跡	51
第 5 図	彦右工門橋窯跡基本層 (1)	8	第 36 図	SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	52
第 6 図	彦右工門橋窯跡基本層 (2)	9	第 37 図	SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	53
第 7 図	1～6・11 区遺構分布図	13	第 38 図	SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (3)	54
第 8 図	3 区 SD1 溝跡	14	第 39 図	SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (4)	55
第 9 図	6～9 区 遺構分布図	16	第 40 図	SI26 竪穴建物跡 出土遺物	56
第 10 図	6 区南～7 区北 遺構配置図	17	第 41 図	SI27 竪穴建物跡	57
第 11 図	7 区南～8 区 遺構配置図	18	第 42 図	SI29 竪穴建物跡	59
第 12 図	SB48 掘立柱建物	19	第 43 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	61
第 13 図	SB50 掘立柱建物跡 SA49 柱列 SK28 焼成 土坑 SK47 土坑	20	第 44 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	62
第 14 図	SB79 掘立柱建物跡	21	第 45 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (3)	63
第 15 図	SI21 竪穴建物跡	23	第 46 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (4)	64
第 16 図	SI21 竪穴建物跡 出土遺物	24	第 47 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (5)	65
第 17 図	SI22 竪穴建物跡	26	第 48 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (6)	66
第 18 図	SI22 竪穴建物跡	27	第 49 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (7)	67
第 19 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	28	第 50 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (8)	68
第 20 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	29	第 51 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (9)	69
第 21 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (3)	30	第 52 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (10)	70
第 22 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (4)	31	第 53 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (11)	71
第 23 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (5)	32	第 54 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (12)	72
第 24 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (6)	34	第 55 図	SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (13)	73
第 25 図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (7)	35	第 56 図	SI60 竪穴建物跡 SD84 溝	74
第 26 図	SI23 竪穴建物跡	37	第 57 図	SI60 カマド煙道遺物 出土状況	75
第 27 図	SI23 竪穴建物跡 出土遺物	39	第 58 図	SI60 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	76
第 28 図	SI24 a 竪穴建物跡、SI24b 掘方	42	第 59 図	SI60 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	77
第 29 図	SI24b 竪穴建物跡	43	第 60 図	SI60 竪穴建物跡 出土遺物 (3)	78
第 30 図	SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	45	第 61 図	SI60 竪穴建物跡 出土遺物 (4)	79
第 31 図	SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	46	第 62 図	SI62 竪穴建物跡	81
			第 63 図	SI62 竪穴建物跡 出土遺物	82
			第 64 図	SI76 竪穴建物跡 SK56 土坑	83
			第 65 図	SI76 竪穴建物跡 出土遺物	83
			第 66 図	SI78 竪穴建物跡	85

第 67 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・	86	第 97 図	SX15 土師器焼成遺構	出土遺物 (3)	118		
第 68 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・	87	第 98 図	SX33 土師器焼成遺構	SK32 焼成土坑	120		
第 69 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (3)	・ ・	88	第 99 図	SX34 土師器焼成遺構	・ ・ ・ ・ ・	120		
第 70 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (4)	・ ・	89	第 100 図	SX34 土師器焼成遺構	SK32 焼成土坑	出 土遺物 ・ ・ ・ ・ ・	121	
第 71 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (5)	・ ・	90	第 101 図	SX38・39 土師器焼成遺構	・ ・ ・ ・	122		
第 72 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (6)	・ ・	91	第 102 図	SX38 土師器焼成遺構	出土遺物	・ ・	123	
第 73 図	SI78 竪穴建物跡	出土遺物 (7)	・ ・	92	第 103 図	SX46 土師器焼成遺構	・ ・ ・ ・ ・	124		
第 74 図	SI90 竪穴建物跡	SX92 土師器焼成遺構			第 104 図	SX92 土師器焼成遺構	SK85 焼成土坑	出 土遺物 ・ ・ ・ ・ ・	125	
第 75 図	SI90 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	・ ・	94	第 105 図	SK12・16 焼成土坑	出土遺物	・ ・ ・	126	
第 76 図	SI90 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	・ ・	95	第 106 図	SK16・17 焼成土坑	・ ・ ・ ・ ・	127		
第 77 図	SK9・10・13 土坑	SX3・7・8 土師器焼成遺構 (1)	・ ・ ・ ・ ・	97	第 107 図	SK40 焼成土坑	・ ・ ・ ・ ・	129		
第 78 図	SK9・10・13 土坑	SX3・7・8 土師器焼成遺構 (2)	・ ・ ・ ・ ・	98	第 108 図	SK40 焼成土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・	129	
第 79 図	SK9・13 土坑	SX3・8 土師器焼成遺構	出 土遺物 (1)	・ ・ ・ ・ ・	99	第 109 図	SK85・86 焼成土坑	・ ・ ・ ・ ・	130	
第 80 図	SK9・13 土坑	SX3・8 土師器焼成遺構	出 土遺物 (2)	・ ・ ・ ・ ・	100	第 110 図	SK85 焼成土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・	130
第 81 図	SK14 土坑	SX15 土師器焼成遺構	・ ・	101	第 111 図	SD11 溝	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	132	
第 82 図	SK14 土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	102	第 112 図	SD54 溝	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	133	
第 83 図	SK18 土坑	SK12 焼成土坑	・ ・ ・ ・	102	第 113 図	SD54 溝	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	134	
第 84 図	SK30 土坑	SX31 土師器焼成遺構	・ ・	103	第 114 図	SD73 溝	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	134	
第 85 図	SK36・45 土坑	SX37 土師器焼成遺構	104		第 115 図	SK67・68 土坑	SD54・73 溝跡	SX71 整 地層 SX53 堆積層	・ ・ ・ ・ ・	135
第 86 図	SK36 土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	105	第 116 図	SX71 整地層	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	136	
第 87 図	SK47 土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	105	第 117 図	SX71 整地層	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	137	
第 88 図	SK51・66 土坑	SK74 焼成土坑	・ ・ ・	107	第 118 図	SX71 整地層	出土遺物 (3)	・ ・ ・ ・	138	
第 89 図	SK55 土坑	SX82 土師器焼成遺構	・ ・	108	第 119 図	SX71 整地層	出土遺物 (4)	・ ・ ・ ・	139	
第 90 図	SK56 土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	109	第 120 図	SX71 整地層	出土遺物 (5)	・ ・ ・ ・	140	
第 91 図	SK65 土坑	SK70 焼成土坑	・ ・ ・ ・	110	第 121 図	SX53 堆積層	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	141	
第 92 図	SK66 土坑	出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	111	第 122 図	SD11 溝・SD2 河川跡	・ ・ ・ ・ ・	142		
第 93 図	SX4 土師器焼成遺構	・ ・ ・ ・ ・	113		第 123 図	SD11 溝・SD2 河川跡	断面図	・ ・ ・	143	
第 94 図	SX4 土師器焼成遺構	出土遺物	・ ・ ・	113	第 124 図	SD2 河川跡	出土遺物 (1)	・ ・ ・ ・	144	
第 95 図	SX15 土師器焼成遺構	出土遺物 (1)	116		第 125 図	SD2 河川跡	出土遺物 (2)	・ ・ ・ ・	145	
第 96 図	SX15 土師器焼成遺構	出土遺物 (2)	117		第 126 図	SD2 河川跡	出土遺物 (3)	・ ・ ・	146	
					第 127 図	SD2 河川跡	出土遺物 (4)	・ ・ ・ ・	147	
					第 128 図	SD2 河川跡	出土遺物 (5)	・ ・ ・ ・	148	

第 129 図	SD2 河川跡	出土遺物 (6)	149	第 164 図	軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合位置のバラエ	ティ	187
第 130 図	SD2 河川跡	出土遺物 (7)	150	第 165 図	瓦当と丸瓦の接合位置の比較		188
第 131 図	SD2 河川跡	出土遺物 (8)	151	第 166 図	軒平瓦製作技法模式図		189
第 132 図	SD2 河川跡	出土遺物 (9)	152	第 167 図	特徴的な製作技法		190
第 133 図	SD2 河川跡	出土遺物 (10)	153	第 168 図	遺構の年代・新旧関係		194
第 134 図	SD2 河川跡	出土遺物 (11)	154	第 169 図	吹付窯跡調査区配置図		268
第 135 図	SD2 河川跡	出土遺物 (12)	155	第 170 図	4 区自然流跡断面図		269
第 136 図	SD2 河川跡	出土遺物 (13)	156	第 171 図	吹付 C 窯跡調査区		279
第 137 図	SD2 河川跡	出土遺物 (14)	157	第 172 図	吹付 C 窯跡遺構配置図		280
第 138 図	SD2 河川跡	出土遺物 (15)	158	第 173 図	SR1 窯跡		281
第 139 図	SD2 河川跡	出土遺物 (16)	158	第 174 図	SR1 窯跡 出土遺物 (1)		283
第 140 図	SD2 河川跡	出土遺物 (17)	159	第 175 図	SR1 窯跡 出土遺物 (2)		284
第 141 図	SD2 河川跡	出土遺物 (18)	160	第 176 図	SR1 窯跡 出土遺物 (3)		285
第 142 図	SX95 堆積層断面図		161	第 177 図	SR2 窯跡 SK4・5 土坑		287
第 143 図	SX95 堆積層	出土遺物 (1)	162	第 178 図	SR1 SR2 その他出土遺物		288
第 144 図	SX95 堆積層	出土遺物 (2)	163	第 179 図	灰原 出土遺物 (1)		290
第 145 図	SX95 堆積層	出土遺物 (3)	164	第 180 図	灰原 出土遺物 (2)		291
第 146 図	SX95 堆積層	出土遺物 (4)	165	第 181 図	灰原 出土遺物 (3)		292
第 147 図	SX95 堆積層	出土遺物 (5)	166	第 182 図	灰原 出土遺物 (4)		293
第 148 図	SX95 堆積層	出土遺物 (6)	167	第 183 図	吹付 C 窯跡出土土器・個数と重量の比		295
第 149 図	SX95 堆積層	出土遺物 (7)	168	第 184 図	彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡遺		
第 150 図	SX95 堆積層	出土遺物 (8)	169		構分布図		311
第 151 図	SX95 堆積層	出土遺物 (9)	170				
第 152 図	SX95 堆積層	出土遺物 (10)	171				
第 153 図	SX95 堆積層	出土遺物 (11)	172				
第 154 図	遺構検出面	出土遺物 (1)	173				
第 155 図	遺構検出面	出土遺物 (2)	174				
第 156 図	その他	出土遺物	175				
第 157 図	SX95 堆積層	その他出土瓦	176				
第 158 図	表採・カクラン	出土遺物	177				
第 159 図	石器・縄文土器		177				
第 160 図	彦右工門橋窯跡出土土器分類図		180				
第 161 図	年代の検討資料		183				
第 162 図	鬼板集成		185				
第 163 図	道具瓦集成		186				

# 表目次

表 1	対象遺跡周辺の遺跡分布	5
表 2	SI24 竪穴建物跡 土層表	44
表 3	図示した瓦搏類の出土状況	184

# 写真図版目次

図版 1	遺跡全景	198	図版 34	SI25 出土遺物 (1)	231
図版 2	6区 全景	199	図版 35	SI25 出土遺物 (2)	232
図版 3	7区 全景	200	図版 36	SI29 出土遺物 (1)	233
図版 4	8・9区 全景	201	図版 37	SI29 出土遺物 (2)	234
図版 5	SB48・50・79 掘立柱建物跡	202	図版 38	SI29 出土遺物 (3)	235
図版 6	SI21 竪穴建物跡	203	図版 39	SI29 出土遺物 (4)	236
図版 7	SI22 竪穴建物跡	204	図版 40	SI29 出土遺物 (5)	237
図版 8	SI22 竪穴建物跡	205	図版 41	SI29 出土遺物 (6)	238
図版 9	SI23 竪穴建物跡	206	図版 42	SI60 出土遺物 (1)	239
図版 10	SI24b 竪穴建物跡	207	図版 43	SI60 出土遺物 (2)	240
図版 11	SI24a・b 竪穴建物跡・SK36・45	208	図版 44	SI60 出土遺物 (3)	241
図版 12	SI25 竪穴建物跡	209	図版 45	SI78 出土遺物 (1)	242
図版 13	SI26・27・29 竪穴建物跡	210	図版 46	SI78 出土遺物 (2)	243
図版 14	SI29 竪穴建物跡	211	図版 47	SI78 出土遺物 (3)	244
図版 15	SI60 竪穴建物跡	212	図版 48	SI78 出土遺物 (4)	245
図版 16	SI60・62・76・90 竪穴建物跡	213	図版 49	SI62・76・90 竪穴建物跡 出土遺物	246
図版 17	SI78 竪穴建物跡	214	図版 50	SX4・8・SK9・13 出土遺物	247
図版 18	土師器焼成遺構	215	図版 51	SX4・15・34 出土遺物	248
図版 19	土師器焼成遺構・焼成土坑	216	図版 52	SK12・32・47・66・SX38・92 出土遺物	249
図版 20	土師器焼成遺構・焼成土坑・土坑	217	図版 53	SX16・SX53・SD2 大別1層 出土遺物 (1)	250
図版 21	整地層・土坑	218	図版 54	SD2 大別1層 出土遺物 (2)	251
図版 22	土坑・溝・河川	219	図版 55	SD2 大別3層 出土遺物 (1)	252
図版 23	彦右工門橋窯跡1区・3区	220	図版 56	SD2 大別3層 出土遺物 (2)	253
図版 24	彦右工門橋窯跡4区・5区	221	図版 57	SD2 大別3層 出土遺物 (3)	254
図版 25	彦右工門橋窯跡10区・11区	222	図版 58	SD2 大別4層 出土遺物 (1)	255
図版 26	SI21・22 出土遺物	223	図版 59	SD2 大別4層 出土遺物 (2)	256
図版 27	SI22 出土遺物 (1)	224	図版 60	SX95 出土遺物 (1)	257
図版 28	SI22 出土遺物 (2)	225	図版 61	SX95 出土遺物 (2)	258
図版 29	SI22 出土遺物 (3)	226	図版 62	SX95 出土遺物 (3)	259
図版 30	SI23・26 出土遺物	227	図版 63	SX95 出土遺物 (4)	260
図版 31	SI24b 出土遺物 (1)	228	図版 64	基本層 瓦1	261
図版 32	SI24b 出土遺物 (2)	229	図版 65	SD2 出土遺物	262
図版 33	SI24b 出土遺物 (3)	230	図版 66	遺構検出面 遺物	262

図版 67	SD11・54・75 出土遺物	263
図版 68	焼台 集合写真	264
図版 69	縄文土器と石器	264
図版 70	石製品 集合写真	265
図版 71	粘土 集合写真	265
図版 72	鉄滓 集合写真	265
図版 73	墨書拡大写真	266
図版 74	吹付窯跡 1・2区	274
図版 75	吹付窯跡 2～4区	275
図版 76	吹付窯跡 5・6区	276
図版 77	吹付 C 窯跡 SR1	300
図版 78	吹付 C 窯跡 SR2	301
図版 79	吹付 C 窯跡 灰原	302
図版 80	吹付 C 窯跡 全景 トレンチ	303
図版 81	SR1 出土遺物	304
図版 82	灰原 出土遺物 (1)	305
図版 83	灰原 出土遺物 (2)	306
図版 84	灰原・SR2 出土遺物 (1)	307
図版 85	灰原・SR2 出土遺物 (2)	308



## 第Ⅰ章 調査に至る経過

国道4号は、東京都から青森県を結ぶ総延長836.4kmの一般国道である。当県には、南部の白石市から県庁所在地の仙台市を経て、北部の栗原市に至る124.4kmが所在し、県を南北に縦貫する交通・物流の主要幹線道路となっている。このうち、交通量の多い仙台市から大崎市の間で、唯一2車線であった大衡村大衡柵木から駒場字蕨崎間の延長4.5kmを4車線に拡幅する事業が、国道4号大衡道路として計画された(第1図)。

これを受けて、平成29年11月に宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は協議を行

い、事業範囲内に所在する周知の遺跡については確認調査を実施すること、それ以外の部分については未発見の遺跡が存在する可能性もある事から分布調査を実施することとした。

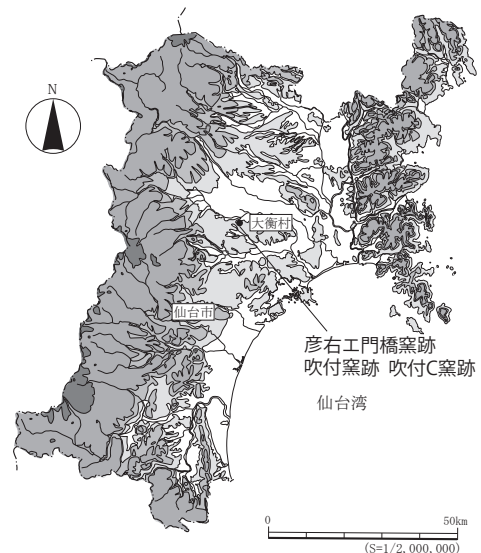
平成30年3月に実施した分布調査の結果、新たに柵木E遺跡を発見・登録し、吹付窯跡・彦右エ門橋窯跡・河原遺跡で遺跡範囲を拡大した。また、平成30年10月には、遺跡範囲からは離れるものの、地形から遺跡の存在が想定された彦右エ門橋窯跡南側の事業範囲内で試掘調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった(第2図)。これらに基づいて、遺跡保存と事業との調整について協議を重ねたが、計画変更等が困難であることから、やむを得ず工事前に記録保存のための発掘調査を実施する事となった。調査対象となった遺跡は、吹付窯跡・彦右エ門橋窯跡・河原遺跡・大衡中学校東遺跡・柵木E遺跡と、これに令和3年に不時発見した吹付C窯跡を加えた、計6遺跡である。

発掘調査は平成31年度に着手し、用地買収の進捗や工事工程との調整を図りながら、条件の整った地点から順次実施した。本書ではこのうち、彦右エ門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡の調査成果について報告する。これら3遺跡の調査は、平成31年度は彦右エ門橋窯跡(8・9区本調査、1・4・10区確認調査)と吹付窯跡(1区確認調査)、令和2年度は彦右エ門橋窯跡(6区本調査、3・5区確認調査)と吹付窯跡(2・3区確認調査)、令和3年度は彦右エ門橋窯跡(7区本調査)と吹付窯跡(5区確認調査)および吹付C窯跡(本調査)、令和4年度は彦右エ門橋窯跡(7区本調査、11区確認調査)と吹付窯跡(4・6区確認調査)および吹付C窯跡(本調査)でそれぞれ実施した。詳細な地点毎の調査経過については、各章の「調査方法と経過」の項に記載した。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

彦右エ門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡の所在する大衡村は、宮城県のほぼ中央に位置し、南は大和町、東は大郷町、北東は大崎市、北西は色麻町と隣接する(第1図)。県庁所在地である仙台市



第1図 報告する遺跡の位置





第2図 事業範囲と遺跡

大衡村役場から北に約4 kmに位置する。遺跡範囲は、東西620 m、南北410 mほどである。遺跡内は、東半が尾根を境に南斜面と北斜面に大別でき、西半は西から入る沢によって尾根が二分される。今回の調査では、西半を南北に縦貫するように計画された道路幅の範囲を調査した。

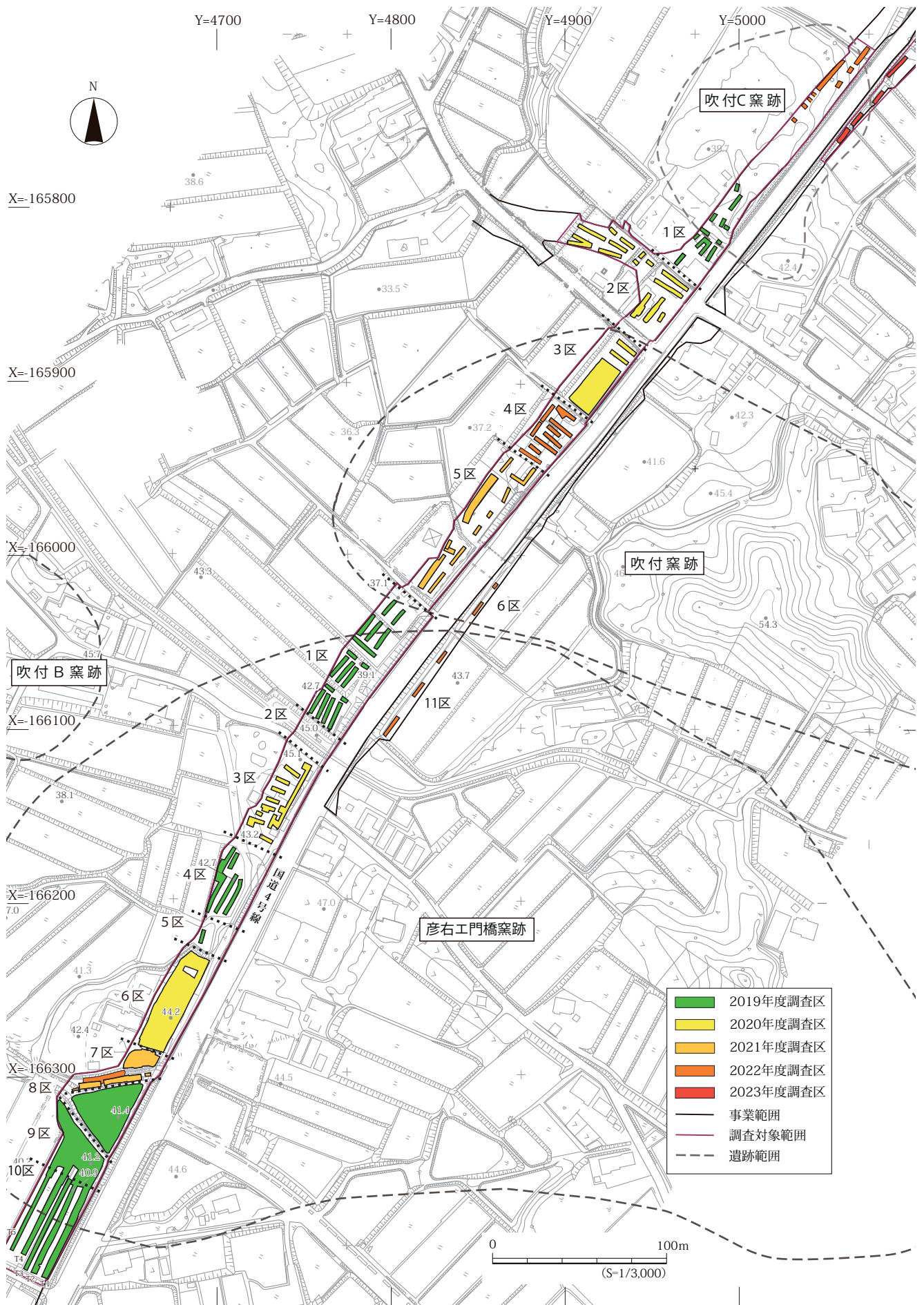
吹付窯跡は、黒川郡大衡村駒場字欠下に所在する。彦右工門橋窯跡の北に隣接する。遺跡範囲は、東西540 m、南北180 mほどである。遺跡内は、東西方向の尾根を境に南斜面と北斜面に大別できる。今回の調査では、西側の丘陵尾根西端と沢部分について、計画された道路幅の範囲を調査した。

吹付C窯跡は、黒川郡大衡村駒場字蕨崎に所在する。吹付窯跡の北に隣接する。遺跡範囲は、東西100 m、南北140 mほどである。遺跡は、低地に面した丘陵斜面北端の北東緩斜面に立地する。今回の調査では、その南東部分について、計画された道路幅の範囲を調査した。

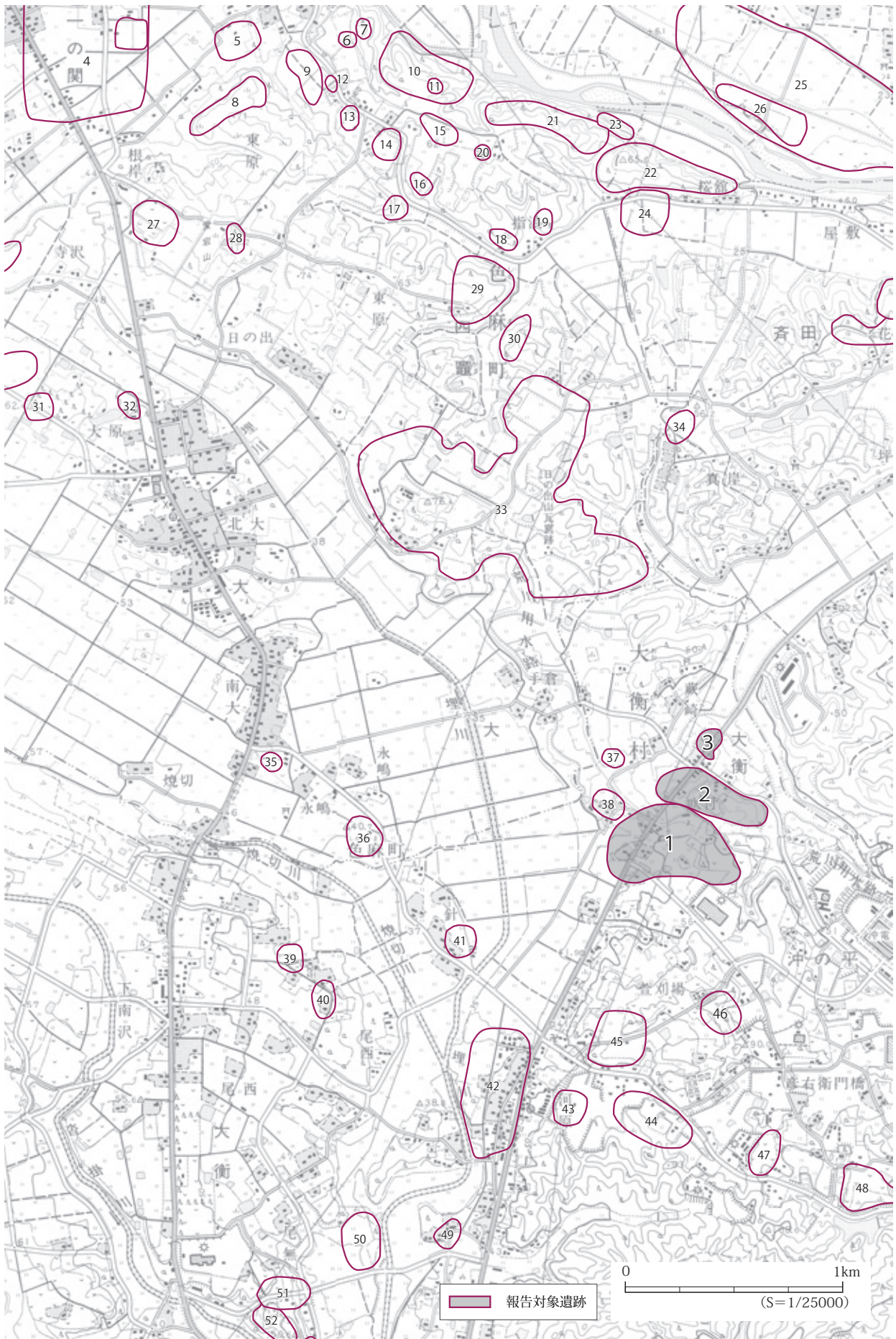
中心部から北へ約25 kmに位置する。村内を国道4号、国道457号、東北自動車道が縦貫しており、交通アクセスの良さから、近年では第二仙台北部中核工業団地などの工業団地の開発が行われ、自動車や精密機械などの製造工場が多数立地している。

大衡村の所在する県中央部は、西側に奥羽山脈の山々が南北に連なり、そこから東に向かって徐々に標高を下げながら山地と丘陵が延びている。それらは吉田川によって形成された低地や沖積地をほさんで、北側の大松沢丘陵と南側の富谷丘陵に分かれている。大衡村の地形は、大松沢丘陵と、鳴瀬川や吉田川の支流が形成した低地や沖積地からなる。本書で報告する3遺跡は、大松沢丘陵の北西部に立地し、北は鳴瀬川の支流、西は吉田川支流の埋川へそれぞれそそぐ、いくつもの小河川の開析によって樹枝状に分かれた、ゆるやかな丘陵尾根やその緩斜面地に広がっている。

彦右工門橋窯跡は、黒川郡大衡村駒場字彦右工門橋、大衡字吹付ほかに所在す



第3図 彦右工門橋窠跡・吹付窠跡・吹付C窠跡調査区配置図



第4図 報告対象遺跡と周辺の遺跡

表 1 対象遺跡周辺の遺跡分布

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	彦右衛門橋窯跡	窯跡	古代	27	愛宕山遺跡	散布地	縄文・古代
2	吹付窯跡	窯跡	古代	28	愛宕山窯跡	窯跡	奈良
3	吹付 C 窯跡	窯跡	平安	29	杉山館跡	散布地・城館	中世
4	一の関遺跡 (色麻榎跡)	官衙	奈良・平安	30	東原横穴墓群	横穴墓群	古墳後
5	真山館跡	散布地・城館	平安・中世	31	大原 C 遺跡	散布地	縄文
6	官林埴輪窯跡	窯跡	古墳	32	上新町遺跡	散布地	古代
7	熊野神社古墳群	前方後円墳・円墳	古墳	33	日の出山窯跡群	窯跡・住居跡	奈良
8	根岸遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代	34	齊田野山遺跡	窯跡・散布地	奈良・平安
9	官林瓦窯跡	窯跡	奈良	35	前原遺跡	散布地	古代
10	鴻ノ巣館跡	散布地・城館	縄文・平安・中世	36	長島遺跡	散布地	縄文晩・古墳・古代
11	東原岡古墳	円墳	古墳	37	横前遺跡	窯跡	古代
12	東原古墳	古墳	古墳後	38	吹付 B 窯跡	窯跡	古代
13	東原古墳	古墳	古墳後	39	尾西 A 遺跡	散布地	古代
14	東原古墳	古墳	古墳後	40	尾西 B 遺跡	散布地	縄文・古代
15	東原古墳群	円墳	古墳後	41	針遺跡	散布地	古代
16	東原 A 遺跡	散布地	縄文	42	河原遺跡	散布地	縄文・古代
17	東原 B 遺跡	散布地	縄文	43	待井沢窯跡	窯跡・散布地	古代
18	東原 C 遺跡	散布地	縄文	44	待井沢 B 窯跡	窯跡	奈良
19	指浪遺跡	散布地	縄文	45	萱刈場窯跡	窯跡	古代
20	東原夷塚横穴墓群	横穴墓群	古墳後	46	萱刈場 B 窯跡	窯跡	奈良
21	県史跡 念南寺古墳群	前方後円墳・円墳	古墳中・後	47	萱刈場 C 窯跡	窯跡	奈良
22	齊田館跡	城館	中世	48	彦右工門橋南遺跡	散布地	古代
23	根谷地横穴墓群	横穴墓群	古墳後	49	座府遺跡	散布地	古代
24	桜館遺跡	散布地	古代	50	座府 C 遺跡	散布地	前・晩・縄文
25	堤根遺跡	散布地・官衙?・墓	古墳中・古代・中世・近世	51	松原霊園前遺跡	散布地	古代
26	堤根西遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	52	尾無 A 遺跡	散布地	縄文・古代

## 2. 歴史的環境

本書で報告する遺跡の周辺には、縄文時代から近世の遺跡が知られている。それらの多くは、吉田川支流の善川・埋川とそれらにそそぐ小河川が形成した、低地や沖積地に面した丘陵上またはその裾部に立地する。以下、時代別に述べる（第3図・表1）。

### 〔縄文時代〕

調査対象遺跡周辺で、内容の明らかな縄文時代の遺跡は知られていない。大衡村内では、奥田金沢遺跡で中期中葉の大木 8 b 式期の竪穴建物跡（大衡村教育委員会 2009）、上深沢遺跡で中期後葉の大木 9 式期の竪穴建物跡（宮城県教育委員会 1978）、梅木遺跡では中期末葉の大木 10 式期の複式炉を持つ竪穴建物跡や早期後葉の土器が出土している（大衡村教育委員会 1998a）。

### 〔古墳時代〕

遺跡の北 3.5km ほどの鳴瀬川南岸の丘陵上には大形古墳が分布する。熊野神社古墳（7）は墳丘長 63 m の前方後円墳で、測量調査が行われている。墳丘形態、立地、埴輪をもたないことから前期と推定されている（藤原・小野寺・辻・東北学院大学 1999）。念南寺古墳群（21）は、前方後円墳 1 基と円墳 30 基以上からなる古墳群である。このうち、念南寺古墳は墳丘長 56 m の前方後円墳で、発掘調査が行われている。調査の結果、埋葬施設に家形石棺を採用し、埴輪を持つ古墳であることが明らかになっており、中期後葉に位置付けられている（宮城県教育委員会 1998）。埴輪窯は、熊野神社古墳・念南寺古墳と同一丘陵上にある官林埴輪窯跡（6）が知られている（古川市史編さん委員会 2008）。

### 〔奈良・平安時代〕

彦右工門橋窯跡（1）・吹付窯跡（2）・吹付 C 窯跡（3）も含めて、窯跡が数多く知られている。周辺には、待井沢窯跡 A・B 地点（43・44）、萱刈場窯跡 A・B・C 地点（45・46・47）、吹付 B

窯跡（38）、横前窯跡（37）が知られており、大衡窯跡群と総称されている。これらのうち、萱刈場窯跡A地点では、8世紀中葉に位置付けられる須恵器窯が調査されている。坏、高台坏、高台埴、高台盤、坏蓋、壺蓋、鉢、壺、甕などの須恵器を生産していた。瓦は出土していない（宮城県教育委員会 1995）。3遺跡の北西約 1.4km には、多賀城創建期の瓦を生産した窯跡として著名な日の出山窯跡群（33）がある。多賀城の創建年代から8世紀前半に位置付けられており、おもに瓦を生産しているが須恵器も一定数生産する瓦陶兼用窯である（宮城県教育委員会 1970）。また、窯跡の他に、ロクロピットがみられる建物を含む多数の竪穴建物跡が検出されており、窯業生産の具体的様相が判明している（色麻町教育委員会 1993）。

窯跡以外にも、いくつかの遺跡で調査が行われている。推定色麻柵の一の関遺跡（4）では、建物基壇跡、掘立柱建物跡、竪穴建物跡が調査され、多量の瓦、土師器、須恵器、円面硯などの遺物が発見されており、遺構・遺物の検討から、古代の寺院、城柵、官衙のいずれかの可能性が指摘されている（宮城県教育委員会 1977）。一の関遺跡から出土した瓦のうち、珠文縁単弁蓮華文軒丸瓦は、本書で報告する彦右エ門橋窯跡の今回の調査でも出土している（本報告中では「珠文鋸歯文縁素弁四葉蓮華文」）。亀岡遺跡では掘立柱建物と竪穴建物跡が検出されており、出土した土器から9世紀初頭を中心とした頃の遺構とみられている。遺跡の性格は、遺構と遺物の検討から一般集落とは異なり、官衙に関わる施設もしくは須恵器製作集団との密接な関わりをもった集落の二つの可能性が提示されている（大衡村教育委員会 1995）。このほか、集落遺跡としては、寺沢遺跡で8世紀中葉～後葉に位置付けられる竪穴建物跡などが調査されている（大衡村教育委員会 1998b）。

[中世以降]

真山館跡（5）、斉田館跡（22）などの中世城館が知られている。

### 3. 既往の調査・報告

彦右エ門橋窯跡では遺跡東半にあたる蕨崎公民館の周辺で3回の発掘調査が行われているほか、吹付窯跡では採集遺物の報告が行われている。

[彦右エ門橋窯跡]

昭和30年代には畑地を中心に多くの須恵器やその焼成不良品が採集されていたことが紹介されている（村田 1988）。

昭和63（1988）年、送電用鉄塔工事に伴い発掘調査された（宮城県教育委員会 1989）。遺跡東半の北斜面で再堆積層を検出し、須恵器坏や甕が出土した。再堆積層の上層で灰白色火山灰が認められた。須恵器はヘラ切無調整の坏底部破片、甕の口縁部と胴部破片がみられ、伊治城跡出土の土器、胆沢城跡I期の土器にヘラ切無調整の坏がみられることを挙げて、8世紀後半頃を中心とする時期の土器として報告されている。

平成7（1995）年、道路改良工事に伴い発掘調査された（宮城県教育委員会 1996）。遺跡東半の北東緩斜面で土坑3基、溝状土坑1基が調査された。灰白色火山灰の堆積が確認されたSK1土坑では、須恵器坏、高台坏、埴、双耳坏、坏蓋、甕が出土した。これらの土器は、法量、器形、製作技法、胎土、

焼成がほとんど同じであることから、同一窯の製品が廃棄されたものとみられている。年代は、長根窯跡群 B 地点 1 号窯、杉の入裏窯跡 3 号窯、安養寺下窯跡、伊治城跡 SI173 住居跡で出土した土器を類例として、8 世紀後半から 9 世紀初頭と報告されている。

平成 8（1996）年、前年度に引き続き道路改良工事に伴い発掘調査された（宮城県教育委員会 1997）。遺跡東半の北斜面で窯跡 1 基が調査された。調査で検出されたのは焼成部先端のみで、須恵器坏、蓋、甕が出土した。年代は、前年度調査の SK1 土坑に近いものの、甕頸部の櫛描波状文が比較的丁寧に施されており、日の出山窯跡や次橋窯跡などで出土した土器を類例として、8 世紀後半頃と報告されている。

[吹付窯跡]

畑地を中心に須恵器坏、高台坏、盤、蓋、甕、長頸壺、丸瓦、平瓦、スサ入りの窯壁片などが採集されている（村田 1988）。ヘラ切が主体で、これに再調整が施された坏や高台坏がみられる。年代は、長根窯跡群 B 地点 1 号窯や御駒堂遺跡 22 号住居跡などで出土した土器を類例として、8 世紀後半頃と報告されている。

#### 4. 基本土層

3 遺跡の基本土層は共通することから、ここでまとめて記述する。基本土層は第 5 図のとおりである。なお、谷や沢の堆積状況は、各遺跡の報告内で述べる。

I 層：表土、耕作土、盛土などの近現代の土。

II 層：黒褐色（10YR3/1）シルト。旧表土。

III 層：暗褐色（10YR3/4）シルト。地山漸移層。古代の遺構検出面。

IV 層：黒色（10YR2/1）粘土質シルト。沢や谷で確認した自然堆積土。

V 層：明黄褐色（10YR6/6）シルト～粘土。地山。古代の遺構検出面。

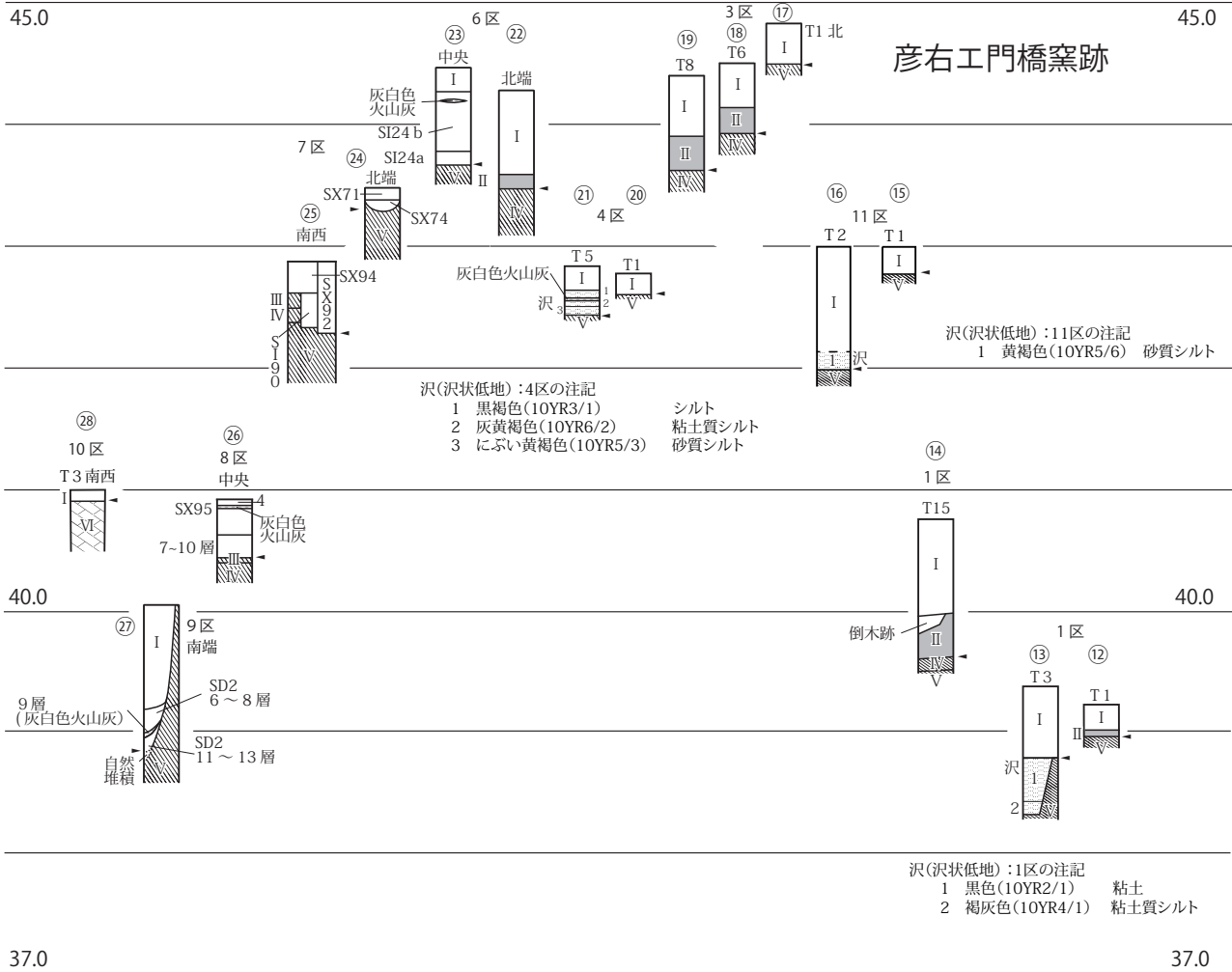
VI 層：岩盤。

I 層は調査区によって粒径・含有物や層厚が大きく異なる。II 層は元の地形が他より低くなっている沢や斜面など、主に I 層が 100cm 以上と厚く堆積する調査区で確認できる。厚さは 10～20cm 前後である。III 層は残存状況が良好な調査区で、厚さ 20～30cm 前後である。古代の遺構は、この面を掘り込んでいる。IV 層は元の地形が他より低くなっている沢や谷など、周囲より低い地点で確認できる。V 層は地山で、大部分の地点で古代の遺構検出面となっている。VI 層は岩盤で、I 層下でこの面が検出された調査区は、近現代に大きく削平を受けていると考えられる。

第 5 図に示した柱状図および地形断面図を見ると、調査対象の 3 遺跡周辺はやや起伏のある微地形を有することが分かる。

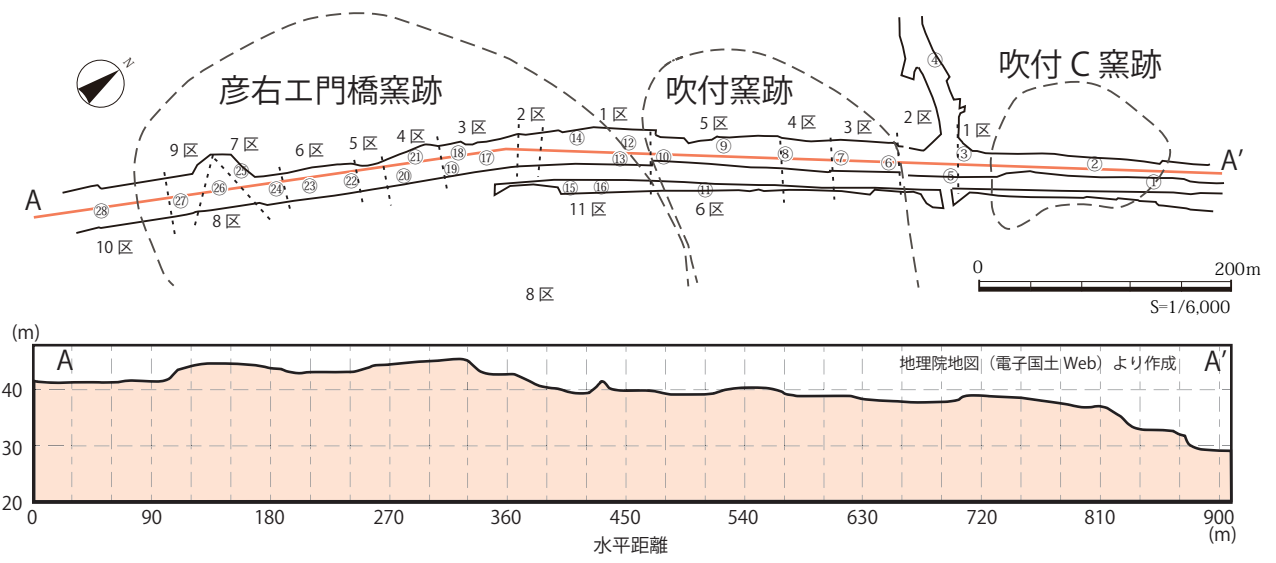
吹付 C 窯跡は北側が鳴瀬川支流の小河川による沖積地に面しており、今回の調査区は北側へ向かって標高が下がる緩斜面の手前に立地している。調査区現地表面の標高は 35 m だが、その北側の沖積地に接する丘陵裾の標高は 26 m である。

その南に広がる吹付窯跡は、現地表面がおおむね標高 40 m 弱ではあるが、調査では数箇所沢跡



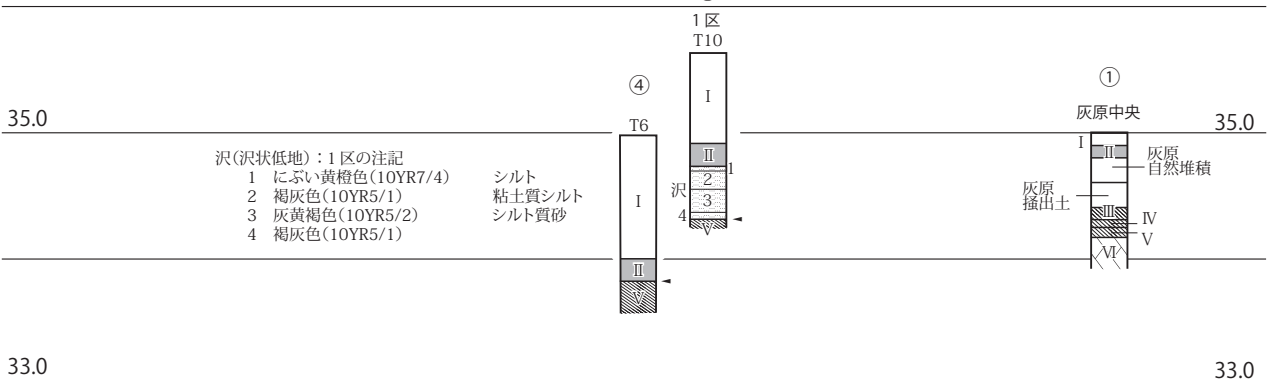
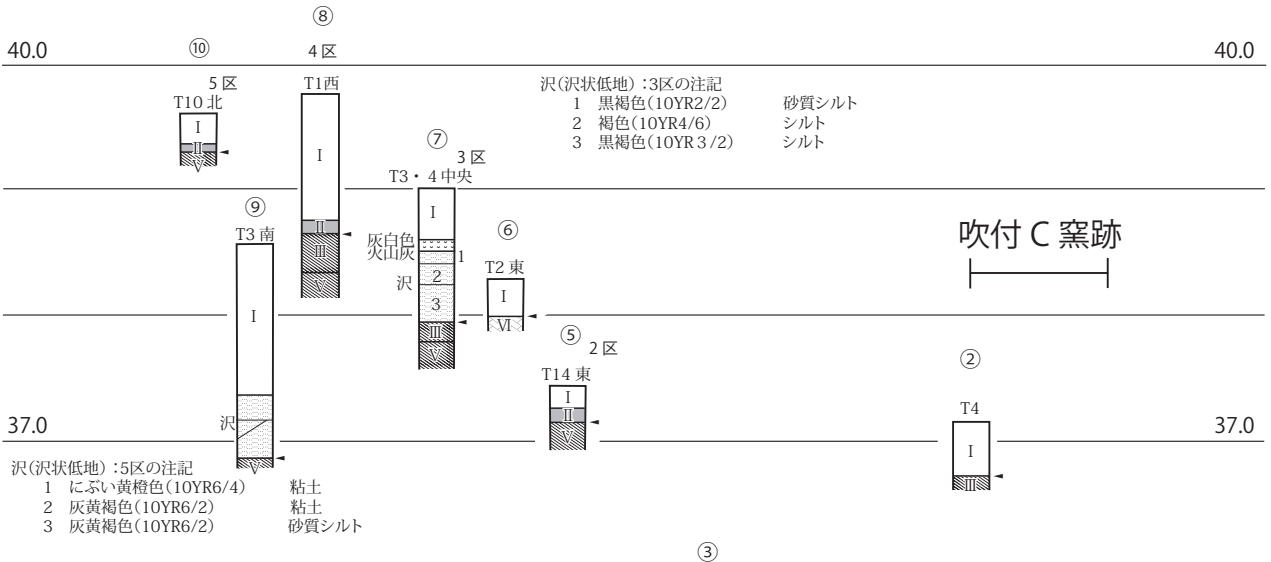
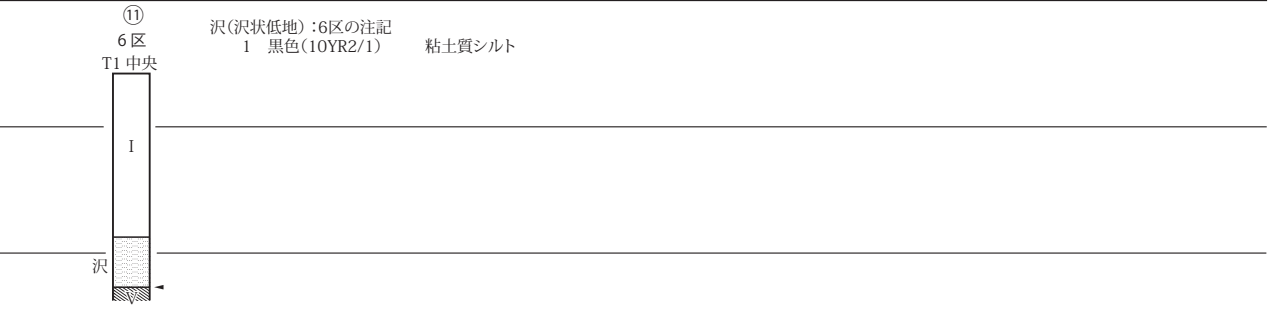
▶ : 掘り下げレベル  
(沢などは部分的に掘り下げた場合あり)

0 2m  
(S=1/60)



第5図 彦右工門橋窯跡基本層(1)

### 吹付窯跡



▶ : 掘り下げレベル  
(沢などは部分的に掘り下げた場合あり)

0 2m  
(S=1/60)

第 6 図 彦右工門橋窯跡基本層 (2)



の堆積層が確認されている。旧地形は西流する幾筋かの沢により開析を受けた小規模な谷と尾根が広がっており、それを近現代に大規模に盛土して道路や宅地としたとみられる。

彦右工門橋窯跡は西側中央部が標高 43 ～ 44 m で最も高く、北側の現在荒川流水路となっている部分や、南側の埋川による沖積地は標高 40 m 以下となっており、全体的にゆるやかな山なりの起伏を呈する。ただし、調査では数箇所では沢跡による堆積層が確認されている。

地形全体を見ると、吹付窯跡で確認された沢跡は北の鳴瀬川支流へ、彦右工門橋窯跡で確認された沢跡は西の吉田川支流埋川へそそいでいたとみられる。

# ひこ う え もん ばし かま あと 彦 右 工 門 橋 窯 跡

## 調 査 要 項

遺 跡 名：吹付窯跡（宮城県遺跡地名表記載番号：26010）

所 在 地：宮城県黒川郡大衡村駒場字彦右工門橋、大衡字吹付

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

佐藤渉、伊東博昭、風間啓太、手代勝巳、村上景亮、佐久間光平、古川一明、  
村田晃一、古田和誠

調査期間：令和元年 8 月 3 日～ 12 月 27 日 佐藤渉 村田晃一

令和 2 年 9 月 3 日～ 10 月 2 日 佐藤渉 伊東博昭 風間啓太 古田和誠

令和 3 年 7 月 1 日～ 10 月 31 日 佐藤渉 風間啓太 古川一明

令和 4 年 12 月 18 日 佐藤渉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

調査対象面積：約 13010㎡

調査面積：約 4937㎡

## 第三章 彦右工門橋窯跡

### 1. 調査区ごとの経過と概要

調査対象地は遺跡範囲の西端付近にあたる（第2図）。現道の東西に並行する拡幅部のほかに取り付け道路や、国道と県道との合流部分を含む。調査は、事業地内における遺跡内および隣接地を対象として、幅2mの調査区において遺構・遺物の有無を確認しながら進め、遺構・遺物を発見した場合には調査区を拡張した。各調査区は、調査年度と地形をもとに、便宜的に北から南に向かって1～11区に分けた。

#### 1区（第7図）

令和元年11月19日～11月29日に調査した。遺跡北西とその隣接地にあたり、丘陵北側の北に向かって傾斜する斜面から谷に立地する。調査前は水田である。この水田は対象地内で4段に分かれており、最上段は標高42.7m、最下段は標高37.1mである。

遺跡内と隣接地にT1～17の調査区を設定した。調査深度は40～130cmである。このうち、南側のT7～17ではI層直下が平坦な地山であったのに対して、北側のT1～4では沢跡の堆積層を確認した。

#### 2区（第7図）

現況は農業用水路と道路で、範囲が狭小であり、1区・3区の隣接部分で遺構・遺物の発見がなかったことから、調査対象から除外した。

#### 3区（第7図）

令和2年9月3日～10月2日に調査した。遺跡の西側で2つに分かれる尾根のうち北側の尾根にあたり、西に舌状に張り出す丘陵尾根に立地する。調査前は宅地である。

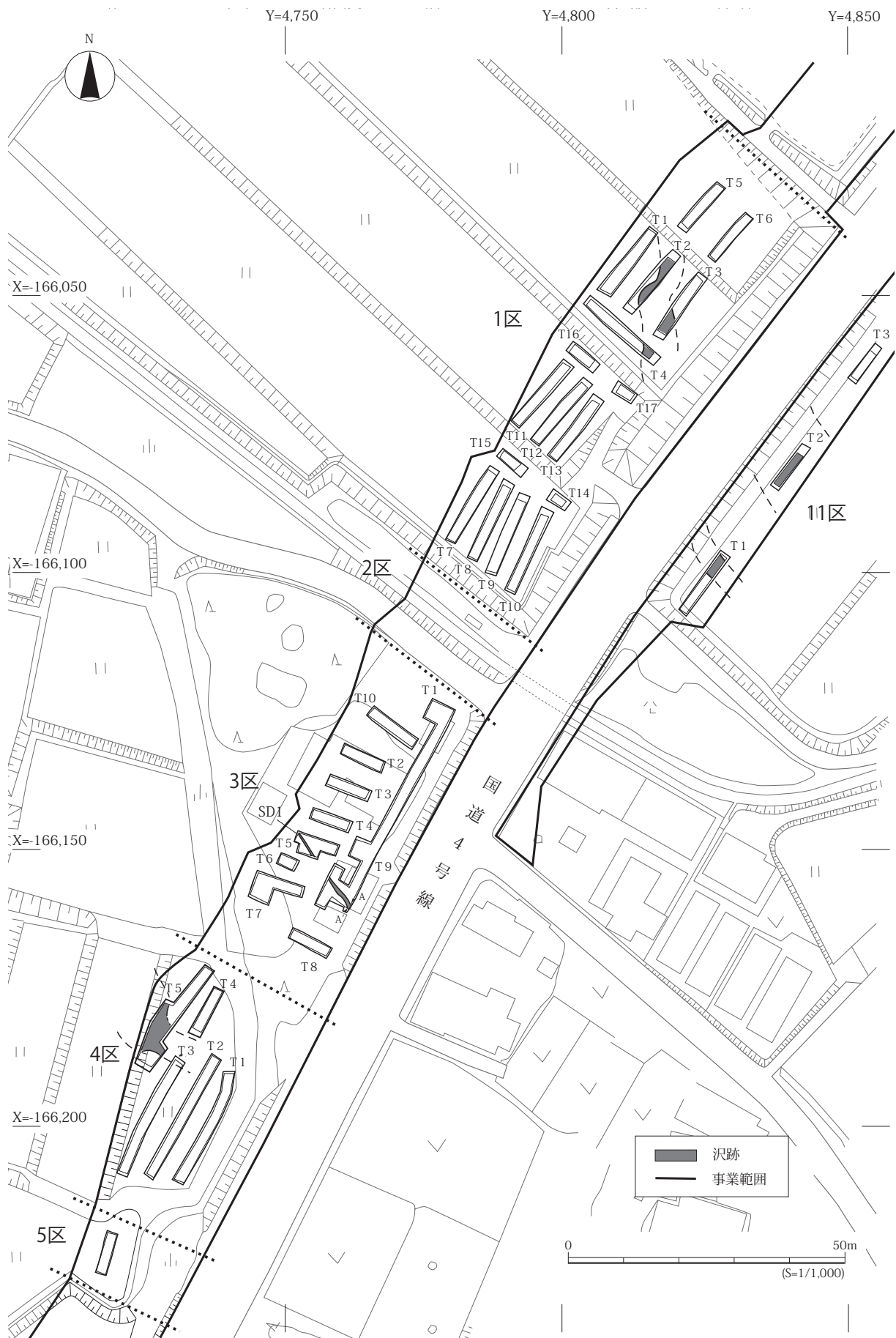
3区ではT1～10の調査区を設定した。調査深度は50～120cmである。T1～5・10ではI層直下でV層を確認しており、II～III層は削平されたと考えられる。南側のT6～9では地形が南に向かって低く傾斜しており、II～III層の堆積を確認した。

遺構は、T5～9でSD1溝跡を検出した（第8図）。北西—南東方向に延びる溝跡で、規模は検出長9.8m、T9の調査区東壁で上幅156cm、深さ40cmである。断面は逆台形である。堆積層は2層に細分されるが、すべて自然堆積層である。遺物は出土していない。他の調査区でも遺物の出土は無かった。

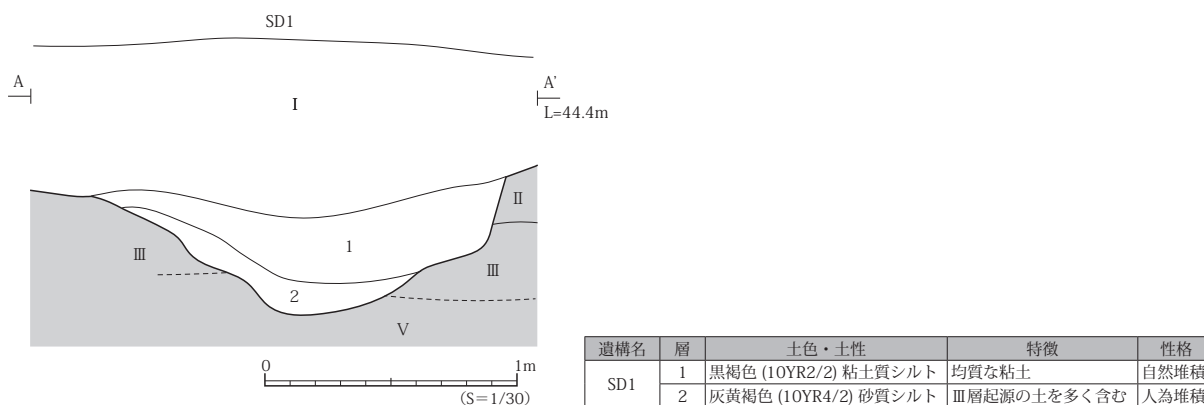
#### 4・5区（第7図）

4区は令和元年11月12日～11月15日、5区は令和2年9月29日・30日に調査した。調査年度の都合で分けたものであるため、以下ではまとめて記述する。

4・5区は、丘陵尾根にあたる3区と6区に挟まれた低地部である。調査前は水田である。4区はT1～T5の調査区を設定し、5区は1か所のみ調査区である。調査深度は20～40cmである。4区のT3北端からT5南半部にかけて、灰白色火山灰が堆積する沢およびII～III層を確認したが、それ以外の場所ではI層直下でV・VI層を確認した。沢跡を確認した調査区以外ではII～III層は削平



第7図 1～6・11区遺構分布図



第8図 3区 SD1 溝跡

されていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。

#### 6区 (第9図)

令和2年9月3日～12月25日に調査した。調査区は遺跡範囲西の中央、2つに分かれる尾根のうち南の尾根にあたり、東から西に向かって延びる丘陵尾根平坦面に立地する。調査前は、北半が畑地、南半が宅地である。調査区中央付近が最も標高が高く、北と南に向かってそれぞれ緩やかに傾斜する。南側の斜面は7区に続き、8区で埋川の沖積低地に接している。

前年度の8・9区の調査成果から、事前に遺構・遺物が密であることを想定し、路線範囲全体に調査区を設定した。調査深度は20～50cmである。調査区中央ではI層直下でV層を確認しており、Ⅲ層は削平を受けているとみられる。調査区の南と北ではそれぞれ標高が低くなっていくが、それに伴ってⅢ層が徐々に厚く残っており、Ⅱ層は調査区北側でのみ確認している。

遺構は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土師器焼成遺構、焼成土坑、土坑、柱穴・ピットを検出した。遺物は主に土師器・須恵器で、他に瓦や陶製の紡錘車、錘などと合わせ、整理用コンテナ100箱分が出土した。

#### 7区 (第9図)

令和3年7月1日から10月31日に調査した。調査区は、東から西に向かって延びる丘陵尾根上の平坦面とその南側の緩斜面に立地する。調査前は宅地、農道、基幹水路用地である。元の地形が南緩斜面で低かったのに対して、現地表面が6区中央と同程度の標高になるよう盛土されていたため、I層が厚く、その下には竪穴建物跡の窪みに由来する堆積層や古代以降の整地層が残っていた。遺構は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、焼成土坑、土坑、整地層、溝、柱穴・ピットを検出した。遺物は土師器・須恵器のほか、瓦が少量あり、整理用コンテナ14箱分が出土した。

#### 8・9区 (第8図)

令和元年8月3日～12月27日に調査した。調査区は遺跡南西側にあたり、丘陵南緩斜面から低地部に立地する。調査前は水田である。

調査深度は10～120cmである。8区の現地表面は平坦であったが、北側ではI層直下でV層を確認したのに対し、南側ではⅡ～Ⅲ層が残っていた。旧地形は北が高く南が低かったとみられる。9

区はその緩斜面下の低地部にあたる。

遺構は、土師器焼成遺構、焼成土坑、土坑 1 基のほか、堆積層や河川跡を検出した。遺物は主に土師器・須恵器・瓦、ほかに陶製の錘、縄文時代の石器など、整理用コンテナ 100 箱分が出土した。なお、調査当初は 8 区を北区、9 区を中区と呼称していたため、遺物の注記がそれぞれ北区・中区となっている。

#### 10 区 (第 9 図)

令和元年 8 月 3 日～8 月 14 日に調査した。調査区は遺跡南西端および遺跡隣接地にあたり、低地に立地する。調査前は水田である。

10 区では T 1～5 の調査区を設定した。掘削深度は 10～30cm である。すべての調査区で、I 層直下で V 層を確認した。V 層にはバックホーのバケットの爪痕やキャタピラの痕が残っており、現代に地形が大きく削平されたとみられる。遺構・遺物は発見されなかった。

#### 11 区 (第 7 層)

令和 4 年 12 月 18 日に調査した。遺跡北端部にあたり、調査前は荒蕪地 (旧水田) である。

11 区では T 1～3 の調査区を設定した。調査深度は 30～120cm である。I 層直下で V 層を確認したが、II～III 層はほとんど残存していない。開田時の切土で削平を受けているとみられる。T 1・T 2 では、厚い I 層の下で黒色砂質シルト層を確認した。また、T 1 では一部に灰白色火山灰を検出した。これらは、西側の 1 区で確認された沢跡の堆積土と類似しており、沢跡の堆積土の一部と考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。

## 2. 発見した遺構と遺物

丘陵尾根平坦面から低地部分にあたる 6 区～9 区で、掘立柱建物跡 3 棟、竪穴建物跡 14 棟、土師器焼成遺構 14 基、焼成土坑 10 基、土坑 22 基、溝 5 条、多数の柱穴・ピットを検出した。

### (1) 掘立柱建物跡・柱穴列跡

丘陵南緩斜面にあたる 6 区南と 7 区で計 3 棟検出した。

【SB48 掘立柱建物跡】(第 12 図・図版 5)

〔位置・検出面〕 6 区・7 区の南緩斜面に位置し、III 層で検出した。

〔重複〕 SI22、SX39、SK66、SX71、SK74 と重複し、これより古い。

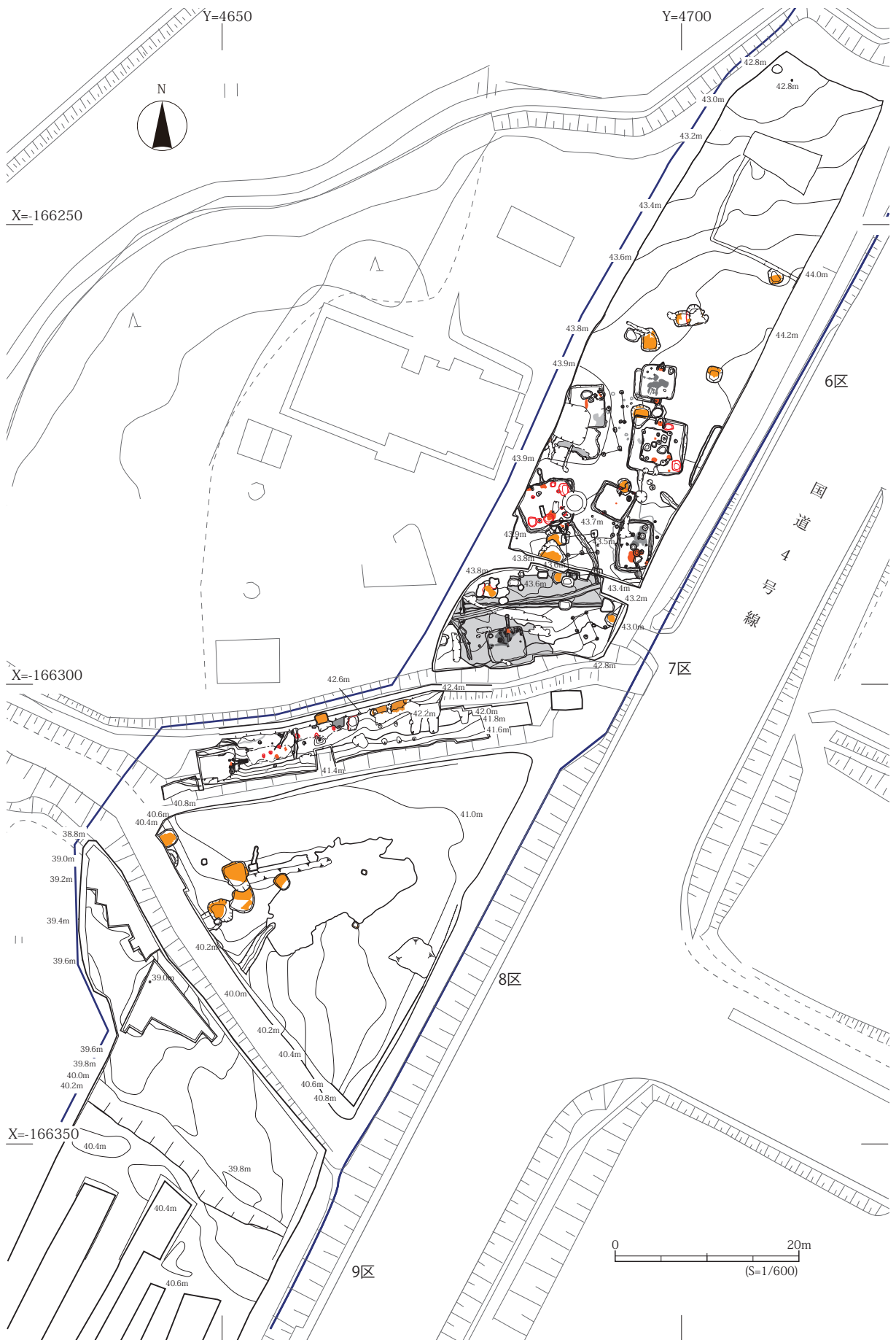
〔柱間数・棟方向〕 南北 2 間、東西 1 間の南北棟建物である。

〔検出状況〕 柱穴を 7 個検出し、このうち 5 箇所 で柱痕跡、1 箇所 で抜き取り穴を検出した。調査区の制約により P4 の一部が未調査である。

〔平面規模〕 桁行は、西側柱列で柱間寸法が北から 2.0m、2.3m で総長 4.3m、梁行は北側柱列で総長 3.1m である。

〔方向〕 西側柱列で測ると N-5°-W である。

〔柱穴〕 四隅の柱穴 (P 1～4) は長軸 0.8～1.0m、短軸 0.7～0.8m の隅丸長方形で、深さは 0.8

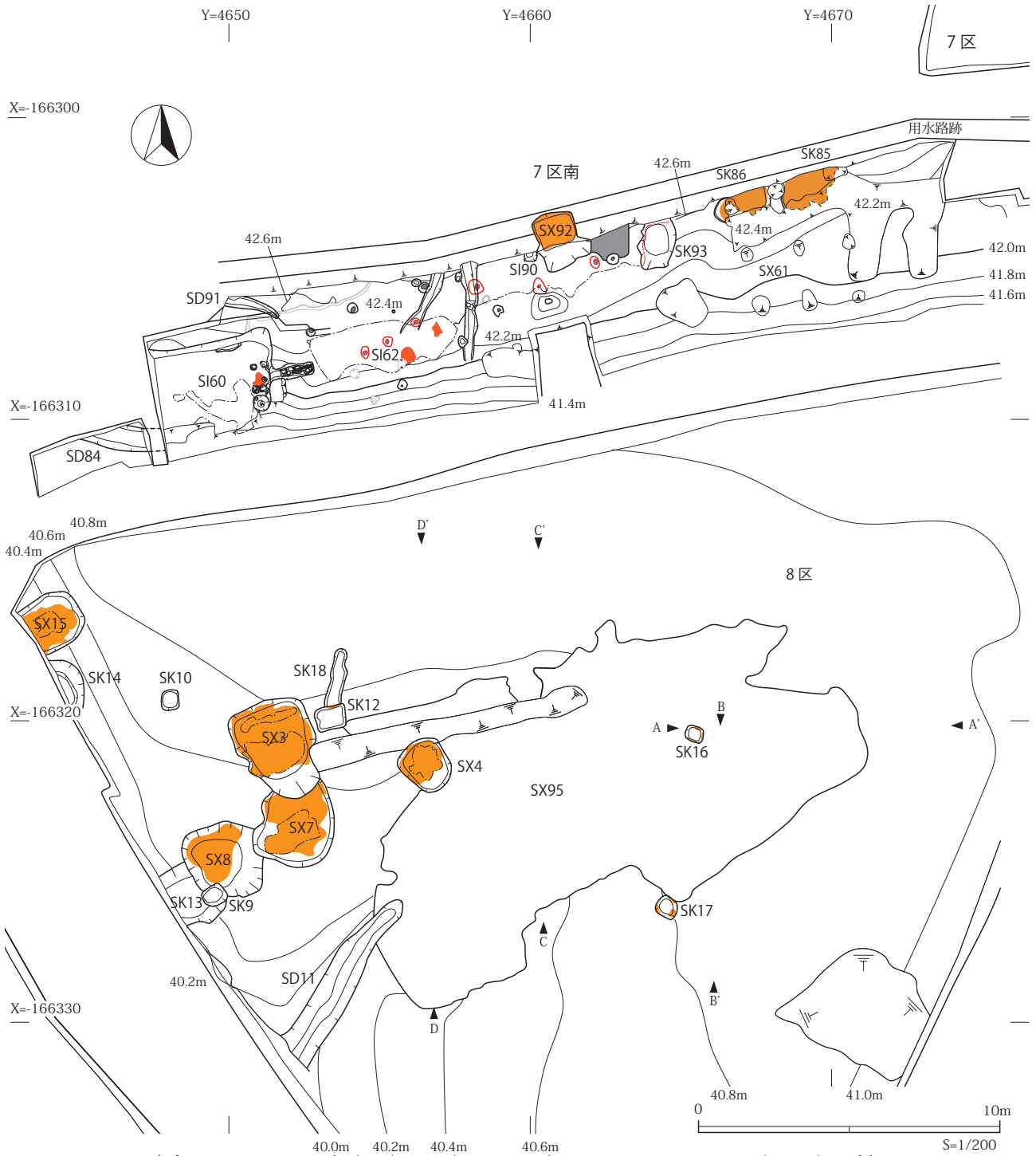


第9図 6～9区 遺構分布図



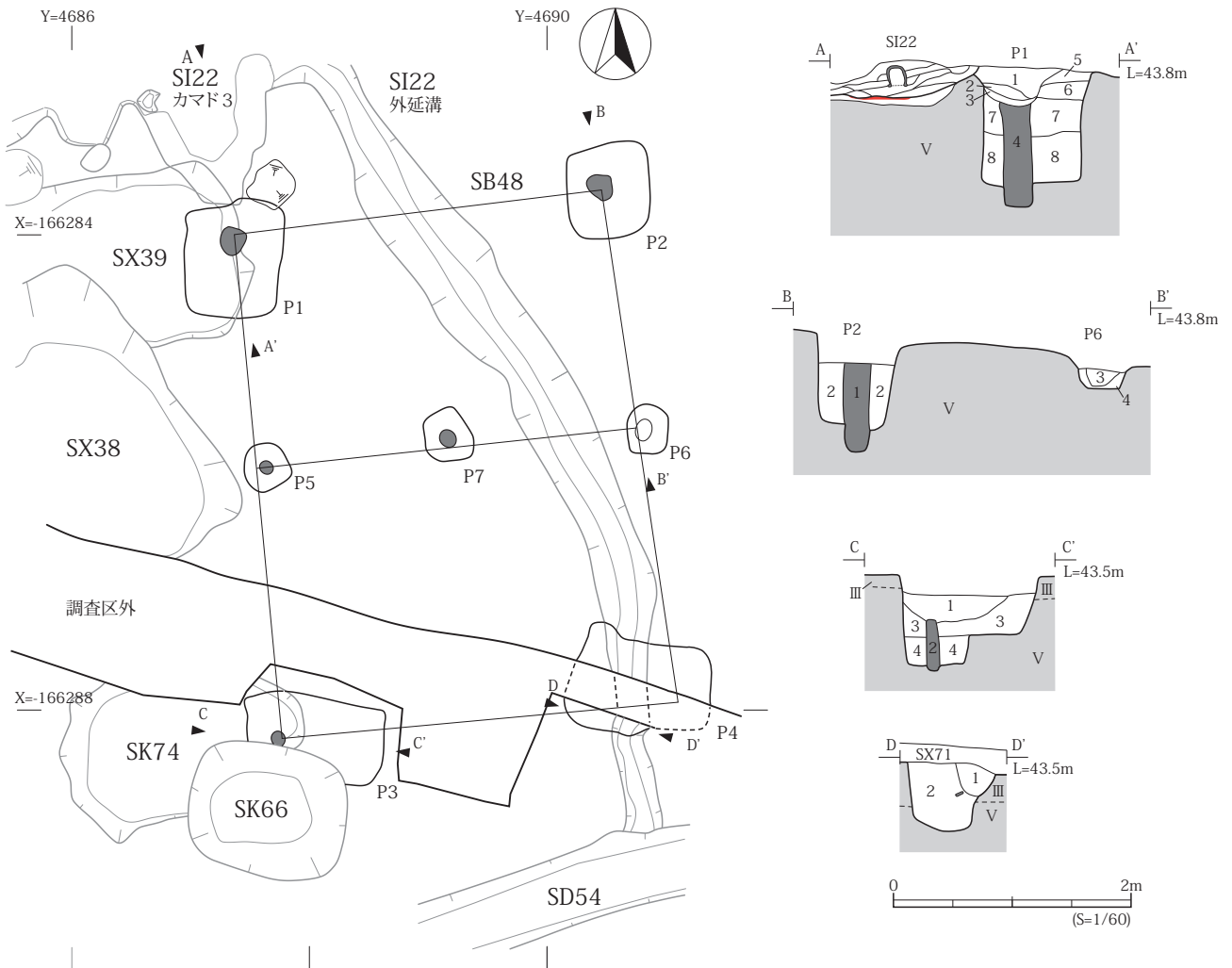
第10図 6区南~7区北 遺構配置図





第 11 図 7 区南～8 区 遺構配置図

m～1mである。掘方埋土はV層を主としてⅢ層ブロックを含む土を主体とする。柱痕跡は直径0.15～0.2mの円形である。北から2列目の柱列は、長軸0.4～0.5m、短軸0.4mの隅丸方形あるいは円形で、深さは0.1mから0.2mである。掘方埋土はⅢ層を主体として地山（V層）ブロック小を少

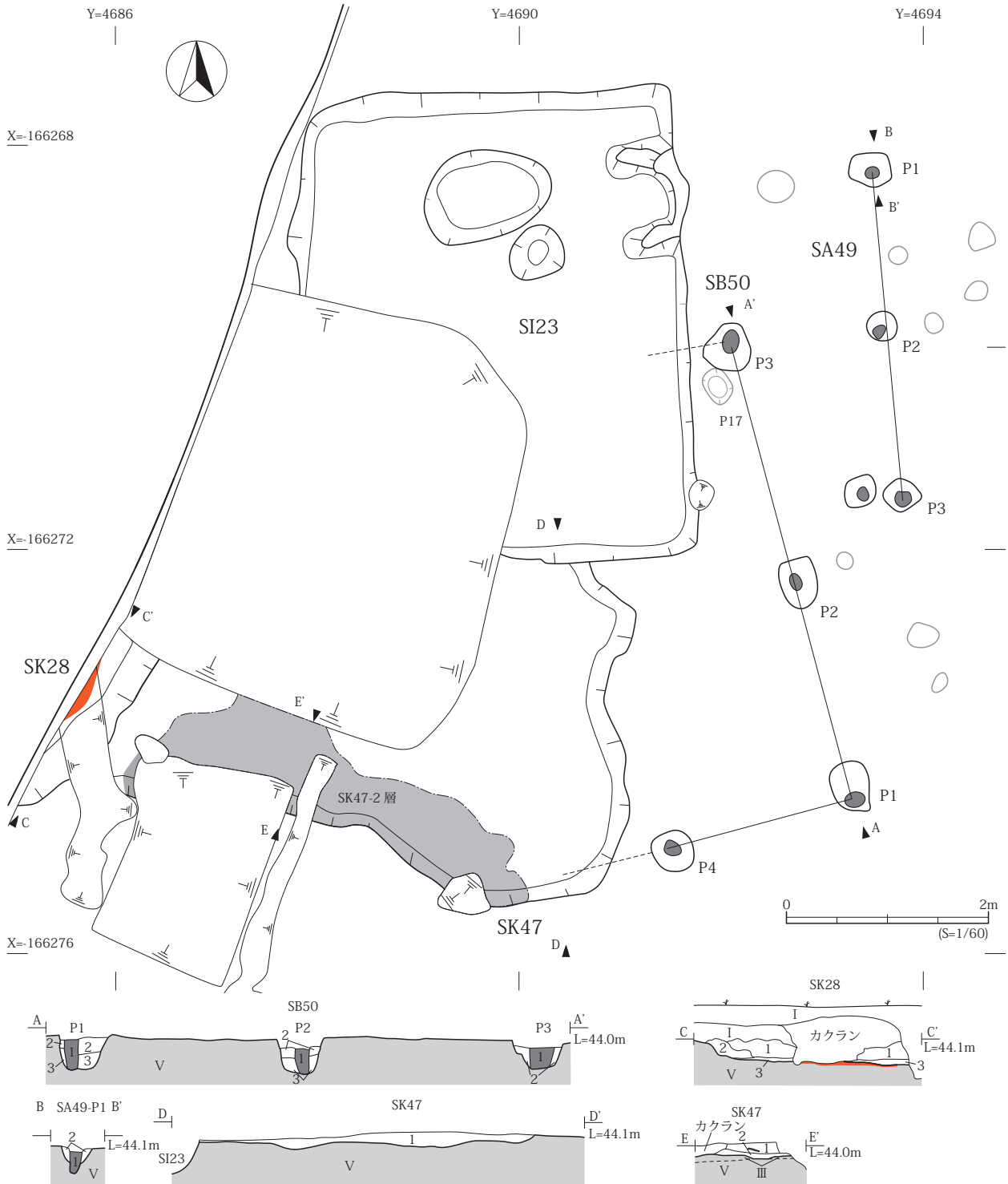


遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
P1	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	炭化物小、地山 (V層) 粒を少し含む	抜取穴
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	抜1 とほぼ同様、焼土粒を多く含む	抜取穴
	3	灰黄褐色 (10YR4/3) シルト	抜1 とほぼ同様、焼土塊、地山 (V層) ブロック小を多く含む	抜取穴
	4	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	柱痕跡
	5	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	掘方埋土
	6	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	掘方埋土
	7	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小～大を多く含む	掘方埋土
	8	明褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック中を少し含む	掘方埋土
P2	1	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大を大量に含む	掘方埋土
P3	1	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	黄褐色 (10YR8/6) 地山 (V層) ブロック中を多く含む 炭化物粒、焼土粒を少し含む	抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト		柱痕跡
	3	黄褐色 (10YR8/6) 粘土質シルト	黄褐色 (10YR7/8) 地山 (V層) ブロック中を多く含む	掘方埋土
P4	1	浅黄褐色 (10YR8/4) 粘土	褐色 (10YR4/4) 粘土ブロック大を多く含む	掘方埋土
	4	浅黄褐色 (10YR5/4) シルト	炭化物粒を多く含む	掘方埋土
P6	2	にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト	地山 (V層) ブロック大～小を多く含む	掘方埋土
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック中を大量に含む	抜取穴
P8	4	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	掘方埋土

第 12 図 SB48 掘立柱建物

し含む土を主体とする。柱痕跡は直径 0.1m の円形である。四隅の柱穴に対し、それ以外の柱穴が小規模である特徴があり、P 7 は間仕切りを作るための柱穴である可能性がある。

〔出土遺物〕 抜取穴、掘方から須恵器・土師器片が少量出土した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SB50	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を微量含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	Ⅲ層とV層からなる	掘方埋土
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/2) シルト	Ⅲ層とV層からなる	掘方埋土
SA49	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	Ⅲ層とV層からなる	掘方埋土
SK28	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山 (V層) ブロック小を微量含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒を多く含む	炭層
SK47	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土質シルト	粘土ブロックからなり、炭化物粒、白色粒子を少し含む	人為堆積

第13図 SB50 掘立柱建物跡 SA49 柱列 SK28 焼成土坑 SK47 土坑

【SB50 掘立柱建物跡】（第 13 図・図版 5・9）

〔位置・検出面〕 6 区中央西寄りの丘陵平坦面に位置し、V 層で検出した。

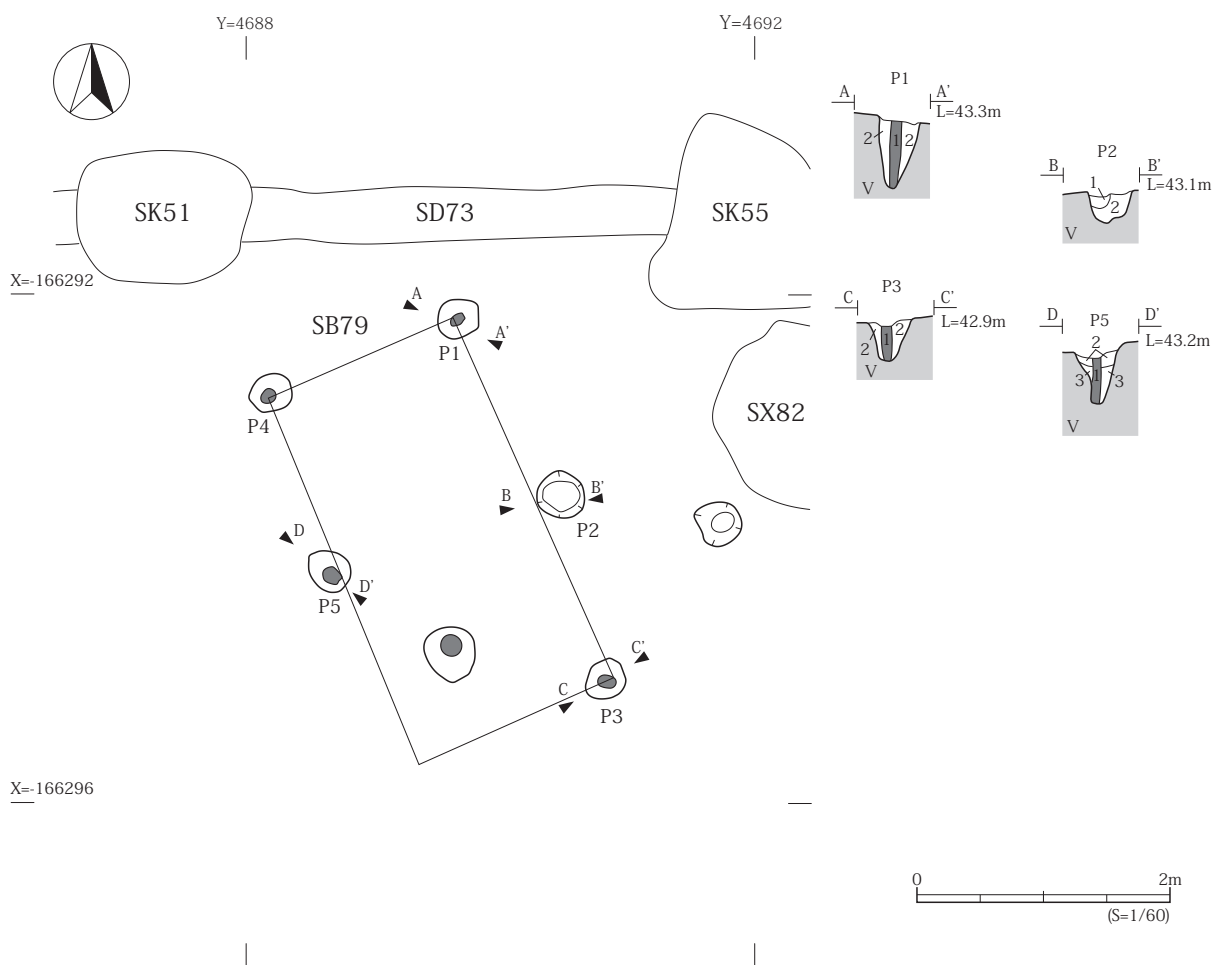
〔重複〕 SI23、SK47 と位置が重複する。遺構同士の重複は無いため前後関係は不明であるが、P3 の西側は SI23 竪穴建物跡造成時に削平された可能性がある。

〔柱間数・棟方向〕 南北 2 間、東西 1 間以上の南北棟建物である。

〔検出状況〕 柱穴を 4 個検出し、このうち 4 箇所柱痕跡を検出した。

〔平面規模〕 桁行は、東側柱列で柱間寸法が北から 2.4m、2.3 m で総長 4.7m、梁行は南側柱列で総長 1.8m 以上である。

〔方向〕 西側柱列で測ると N- 4° -W である。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
P1	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	Ⅲ層を多く、地山 (V層) を少し含む	掘方埋土
P2	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を多く含む	自然堆積
	2	明黄褐色 (10YR7/6) シルト	Ⅲ層を少し、地山 (V層) を多く含む	掘方埋土
P3	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	明黄褐色 (10YR7/6) シルト	Ⅲ層を少し、地山 (V層) を多く含む	掘方埋土
P5	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	Ⅲ層を多く、地山 (V層) を少し含む	掘方埋土
	3	明黄褐色 (10YR7/6) シルト	Ⅲ層を少し、地山 (V層) を多く含む	掘方埋土
P	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	明黄褐色 (10YR7/6) シルト	地山 (V層) を少し、V層を多く含む	掘方埋土

第 14 図 SB79 掘立柱建物跡

〔柱穴〕掘方は直径0.3～0.5 mの不整円形で、深さは0.2～0.3 mである。掘方埋土はⅢ層とⅤ層ブロックからなる土を主体とする。柱痕跡は直径0.1～0.15 mの円形である。

〔出土遺物〕掘方から須恵器・土師器片が少量出土した。

#### 【SB79 掘立柱建物跡】（第14図・図版9）

〔位置・検出面〕7区南緩斜面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔柱間数・棟方向〕南北2間、東西1間の南北棟建物である。

〔検出状況〕柱穴を5個検出し、このうち4箇所で見跡を確認した。南西隅の柱穴は、南西に向かって緩やかに傾斜する斜面にあり、ほかの柱穴の底面標高からみて削平された可能性が高い。

〔平面規模〕桁行は、東側柱列で柱間寸法が北から1.6m、1.5mで総長3.1m、梁行は北側柱列で総長1.6mである。

〔方向〕西側柱列で測るとN-22°-Wである

〔柱穴〕掘方は直径0.3～0.4 mの不整円形で、深さは0.2～0.6 mである。掘方埋土はⅢ層とⅤ層ブロックからなる土を主体とする。柱痕跡は直径0.1 mの円形である。

〔出土遺物〕掘方から須恵器・土師器片が少量出土した。

#### 【SA49 柱穴列跡】（第13図）

〔位置・検出面〕7区南緩斜面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔柱間数・棟方向〕南北2間である。

〔検出状況〕柱穴3個を検出し、いずれも柱痕跡を確認した。柱間隔は北から1.6 m、1.7 mで、総長3.3 mである。

〔方向〕N-6°-Wである。

〔柱穴〕掘方は直径0.3～0.4mの円形もしくは楕円形で深さは0.1～0.2cmである。掘方埋土はⅢ・Ⅴ層由来のにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする。柱痕跡は直径0.1mの円形である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

### （2）竪穴建物跡

丘陵尾根平坦面にあたる6区南で8棟、丘陵南緩斜面にあたる7区で5棟検出した。

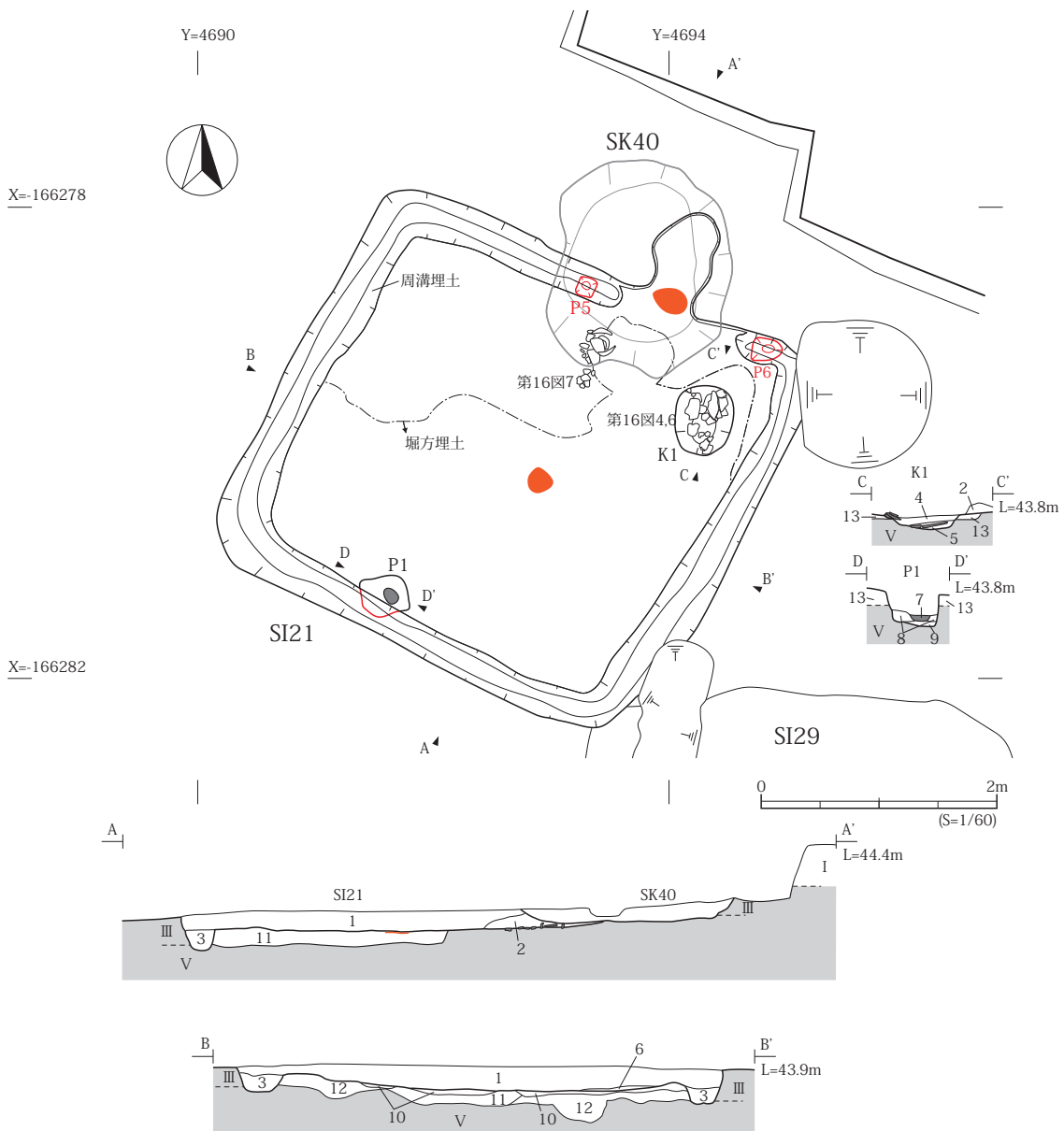
#### 【SI21 竪穴建物跡】（第15・16図・図版6）

〔位置・検出面〕6区南の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK40・SI29と重複し、前者より古く、後者より新しい。

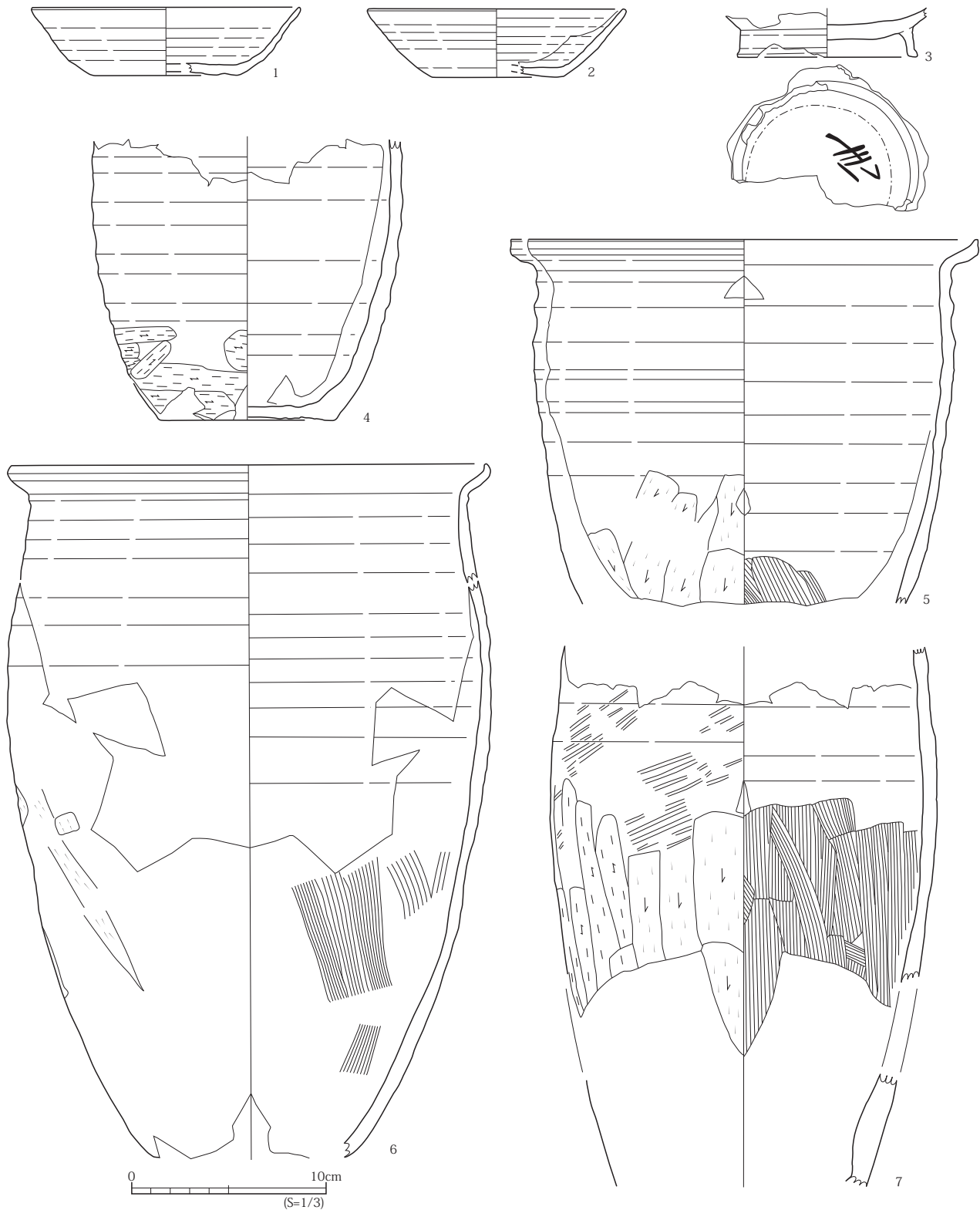
〔規模・平面形〕東西4.1 m、南北3.6 mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-30°-Eである。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI21	1	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	炭化物粒を微量、地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大を大量に含む	自然堆積 カマド崩落土由来か?
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	周溝埋土 人為堆積
	4	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト	炭化物粒を少し、焼土ブロック中を多く含む	K1 人為堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる 暗褐色土ブロック小を少し含む	K1 人為堆積カマド崩落土由来か?
	6	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト	炭化物が主体となる層	人為堆積
	7	暗褐色 (10YR3/3) シルト		P1 柱痕跡
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	P1 掘方埋土
	9	黄褐色 (10YR5/6) 粘土	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粒を少し含む	P1 掘方埋土
	10	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	掘方埋土
	11	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) ブロック小、灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック小を少し含む	掘方埋土
	12	黄褐色 (10YR5/6) シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック小を多く含む	掘方埋土

第 15 図 SI21 竪穴建物跡



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	壁周溝	1/4	(13.7)		(7.5)	3.5	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		636
2	須恵器 坏	1層	1/2	(13.1)		(6.8)	3.5	外内：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 火ダスキ十字		641
3	須恵器 高台坏	1層	底 1/2			(9.1)	2.5~	墨書か？	26-1.73-3	632
4	土師器 甗	K1	1/2 下半			(9.0)	14.4-	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ケズリ 内：ロクロナデ 底部：静止糸切り		633
5	土師器 甗	壁周溝	1/5	(24.0)			18.7-	外：ロクロナデ→ケズリ スス 内：ロクロナデ→ナデ		638
6	土師器 甗	K1	1/2	(24.4)			35.7-	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		634
7	土師器 甗	2層	1/4					外：平行タタキ→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		635

第 16 図 SI21 竪穴建物跡 出土遺物

〔堆積土〕 2層認められ、1層は灰黄褐色粘土質シルトの自然堆積土、2層はカマド崩落土由来とみられる灰黄褐色粘土質シルトの自然堆積土である。

〔壁〕 垂直気味に立ち上がる。高さは最も残りの良い東辺中央付近で18cmある。

〔床〕 北半は地山、南半は掘方埋土を床としている。

〔柱穴〕 主柱穴は確認していない。

〔カマド〕 北壁の中央やや東寄りに付設される。SK40によって大部分が壊されており、燃烧部焼け面付近と煙道の最下部のみが残存する。煙道は長さ0.8mである。本体の規模や構造は不明瞭であるが、カマド崩落土由来とみられる層（2層）が燃烧部焼け面の南側にのみ広がることから本体部分は建物内にあったとみられる。2層が広がる範囲の床面および2層から出土した土師器甕（第16図-7）はカマドの構築に使用された可能性がある。

〔周溝〕 カマド部分を除くほぼ全体で検出した。建物の掘方埋土およびP1の構築後に掘り込まれており、内部にはぶい黄褐色粘土質シルトで人為的に埋め戻されている。幅は20～40cm、深さは15cm前後である。

〔土坑〕 床面で1基確認した。K1は北東隅に位置し、平面形が長軸59cm、短軸48cmの楕円形で、深さは12cmある。断面形は不整な逆台形である。堆積土は2層認められる。いずれも人為的に埋め戻されており、下層からは土師器甕（図14-4・6）が横位で出土した。

〔そのほかの施設〕 建物中央付近の床面で焼け面、南辺中央でP1、北辺中央でP5、北東隅でP6を確認した。焼け面は径20cmの円形である。P1は床面で検出しており、掘方の一部が周溝埋土に覆われる。掘方が径45cmの楕円形で深さ27cmである。柱痕跡は径10cmの円形である。壁際でカマドと相対する位置にあること、主柱穴にはならないとみられることから、出入り口に関連する施設である可能性がある。

P5・P6は周溝底面で検出した。P5は深さ10cmで一辺15cmの正方形を呈し、褐色シルトで人為的に埋め戻されている。P6は長軸25cmの楕円形で深さ10cmで、褐色シルトで人為的に埋め戻されている。カマド燃烧部に対して左右対称の位置にあることから、カマドに関わる施設である可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土、床、周溝から須恵器坏、高台坏、土師器甕などが出土した。量が少なく全容の分かるものが限られる。

#### 【SI22 竪穴建物跡】（第17～25図・図版7・8）

〔位置・検出面〕 6区南西の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。建物北西隅は調査区外にある。

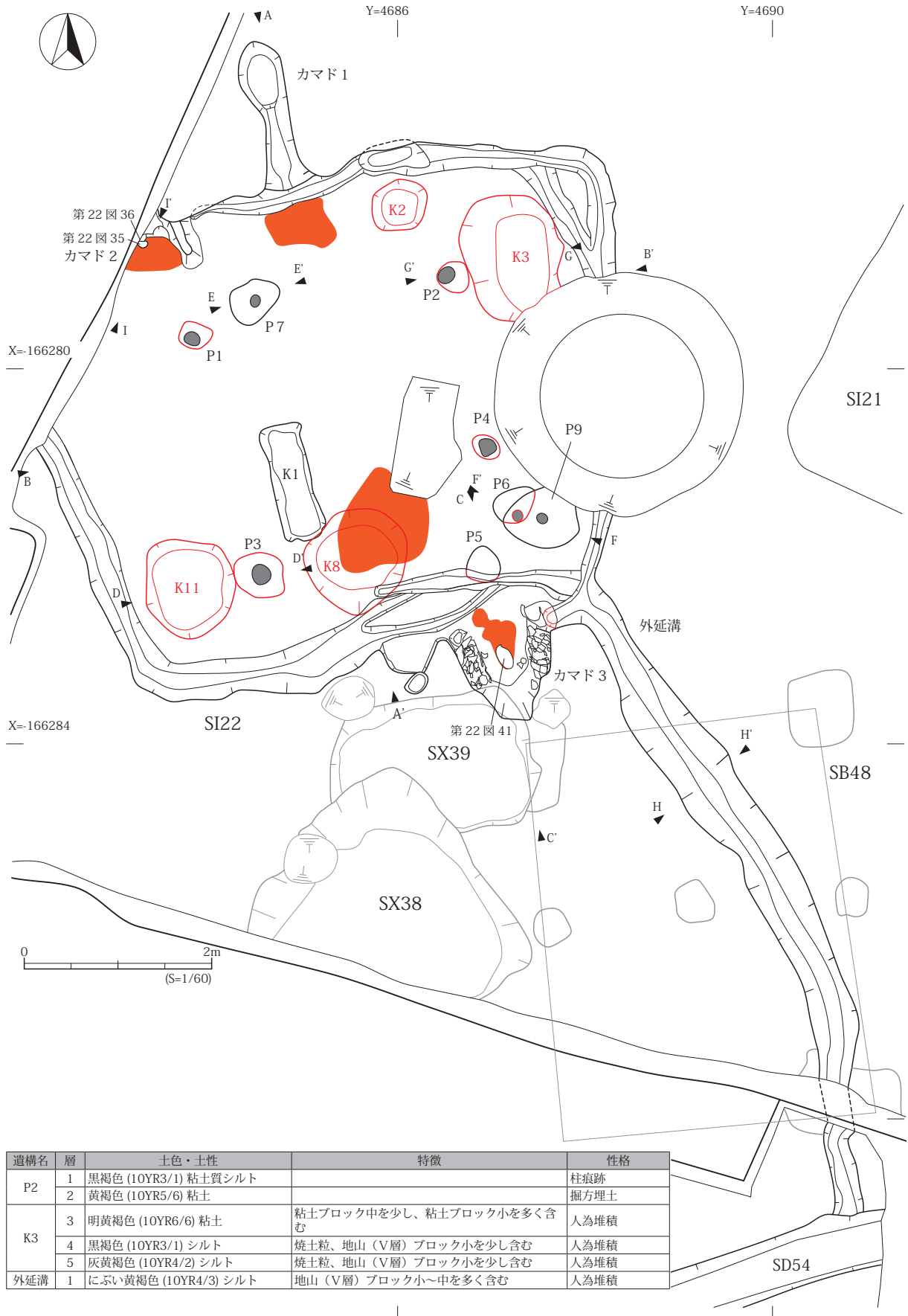
〔重複〕 SX39、SB48、SD54、SX71と重複し、SX39、SX71より古く、SB48より新しい。SD54との新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕 東西6.4m、南北5.2mの隅丸方形である。

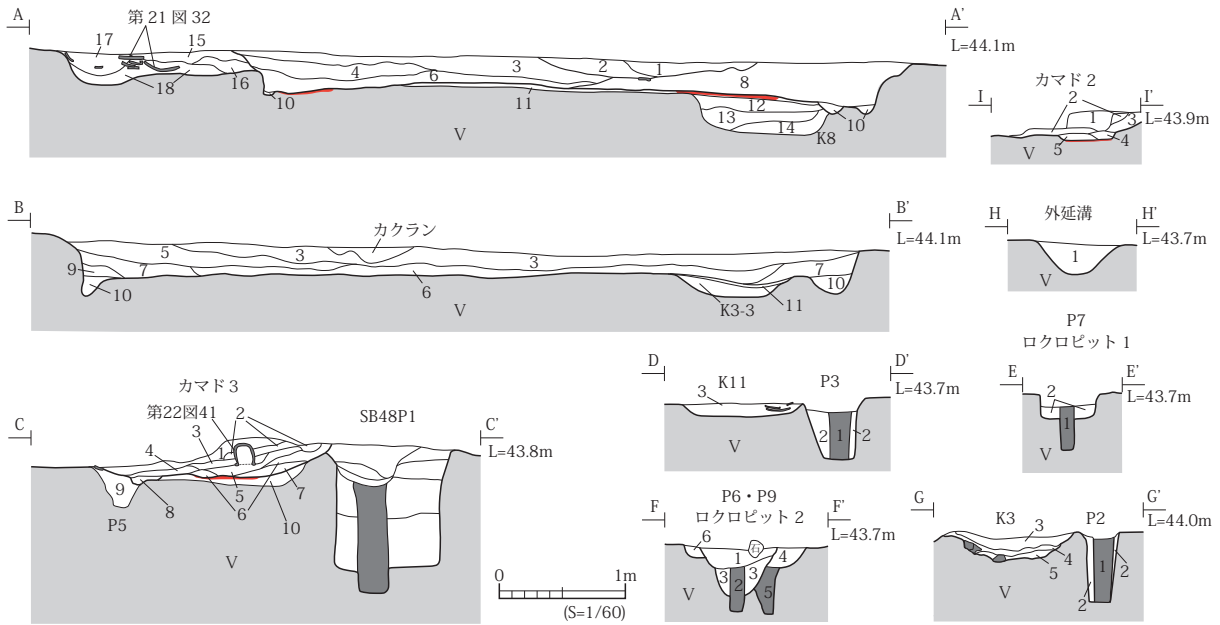
〔方向〕 西辺で測るとN-22°-Wである。

〔堆積土〕 カマド部分を除いて9層に分けられた。1・2層は土器片を多く含む人為的埋戻し土、3



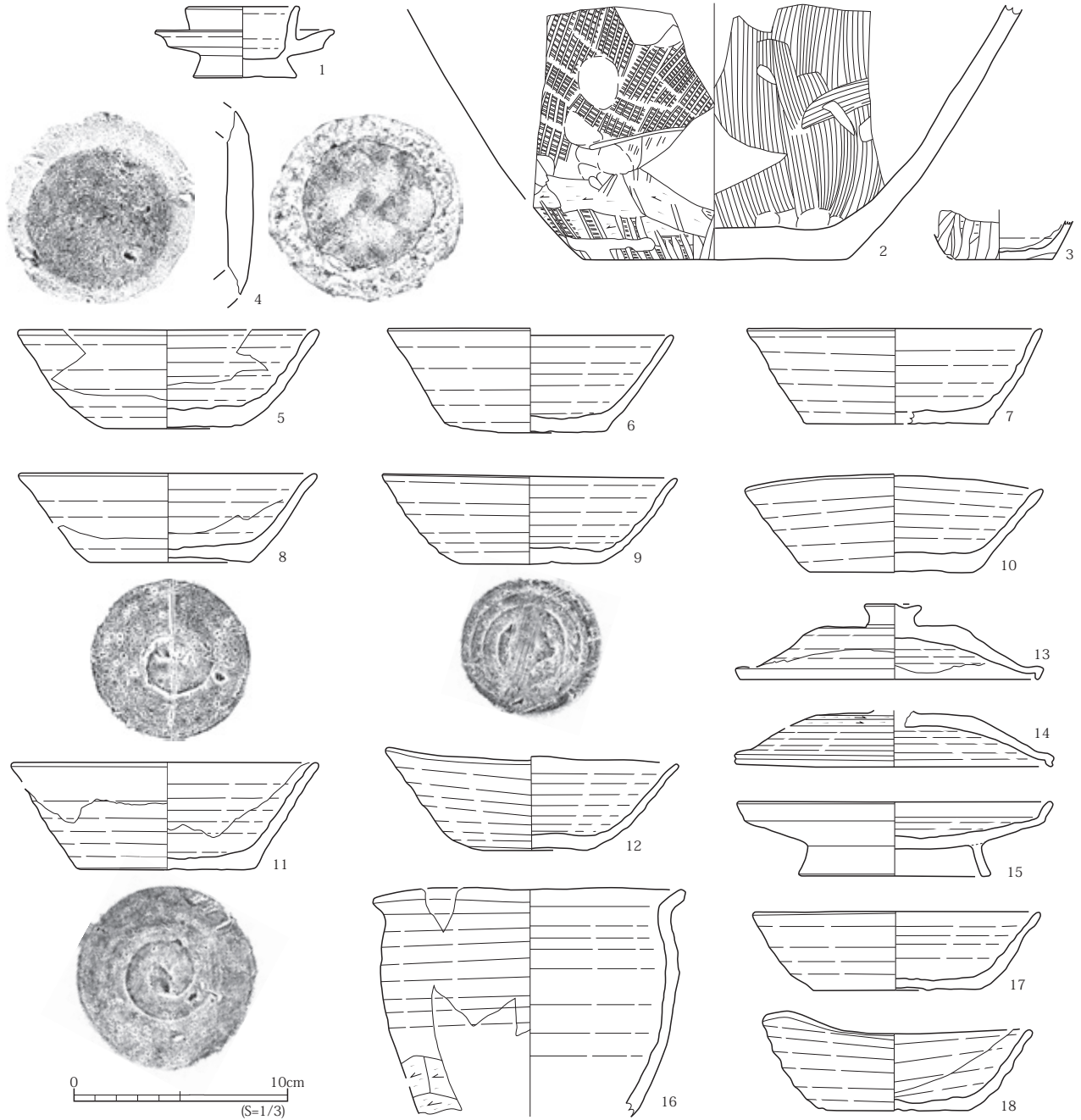


第17図 SI22 竪穴建物跡



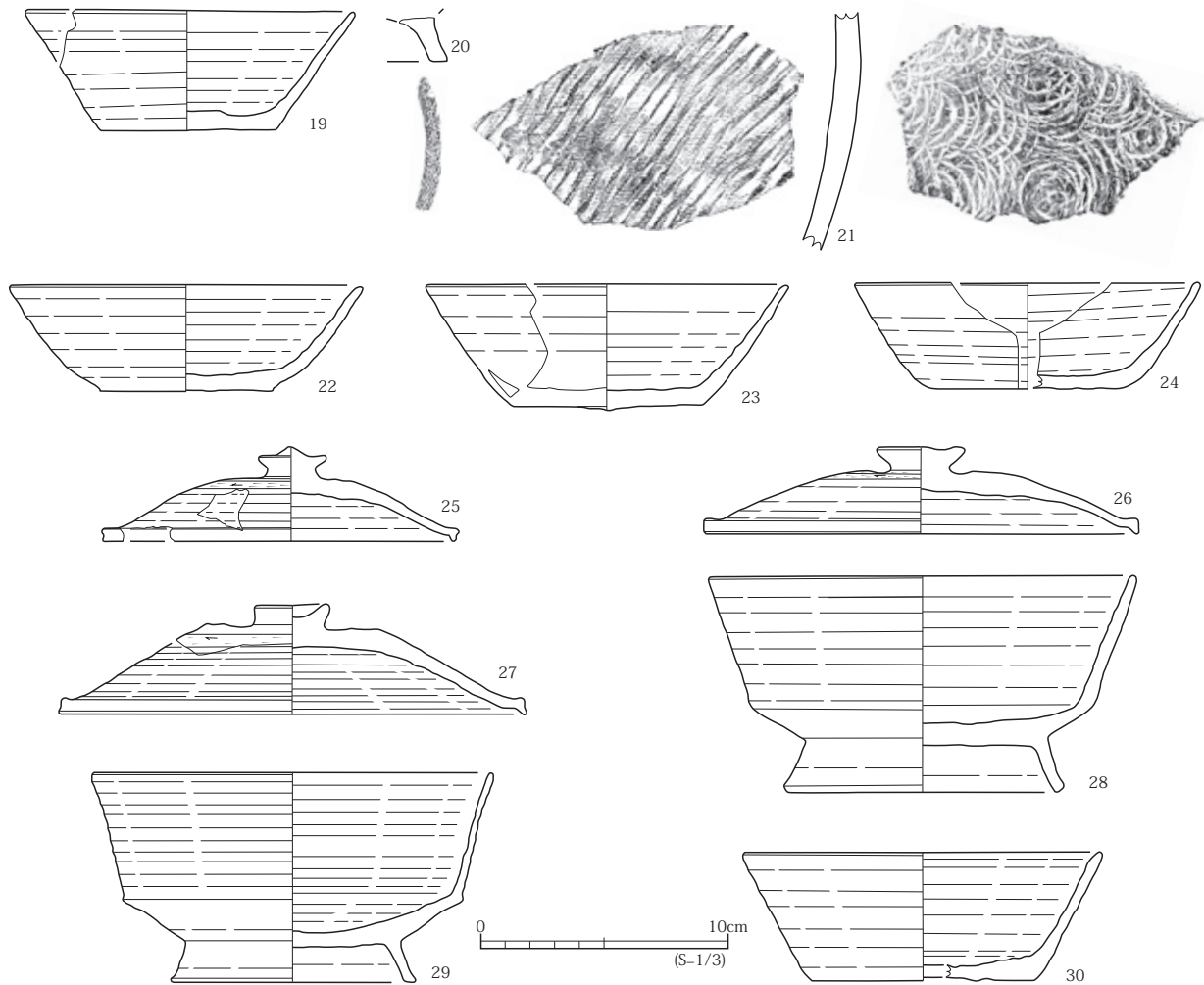
遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI22	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物小、焼土小を多く含む	焼成遺構由来か？ 人為堆積
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒を少し、焼土粒を微量含む	焼成遺構由来か？ 人為堆積
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト		自然堆積
	4	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土ブロック中を多く含む	人為堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒を少し含む	自然堆積
	6	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒を少し含む	自然堆積
	7	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒を少し含む	自然堆積
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	Ⅲ層と地山 (V層) ブロック、粘土ブロックからなり、炭化物粒を少し含む。	建物跡南 1/3 を埋め戻す 排土処理か？ 人為堆積
	9	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土	地山 (V層) ブロック大からなる	壁崩落土
	10	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	11	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		貼床
	12	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土ブロック小を多く含む	K8 人為堆積
	13	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	焼土粒を多く、にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土粒を少し含む	K8 人為堆積
	14	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土ブロック中を多く含む	K8 人為堆積
	15	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック中を多く含む	煙道埋戻し土 人為堆積
	16	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土ブロック小を少し含む	煙道埋戻し土 人為堆積
	17	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
	18	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	炭化物粒を微量含む	機能時堆積土 自然堆積
SI22 カマド 2	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		人為堆積
	3	明赤褐色 (5YR5/6) 粘土	被熱土主体の層、褐色 (10YR4/4) シルト粒を少し含む	煙道崩落土？
	4	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	焼土粒を少し含む	カマド機能時の堆積土
	5	明赤褐色 (5YR5/6) シルト		カマド機能時の堆積土
SI22 カマド 3	1	SI22-8 層と同じ		人為堆積
	2	明赤褐色 (5YR5/6) 粘土	強い被熱を受ける	カマド天井崩落土
	3	黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト	焼土粒を微量含む	カマド廃棄後の堆積土
	4	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト	炭化物粒、焼土粒を多く含む	カマド機能時の堆積土
	5	暗褐色 (10YR3/3) シルト	焼土粒を少し含む	カマド機能時の堆積土
	6	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	焼土粒を少し含む	カマド機能時の堆積土
	7	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土粒を少し含む	カマド機能時の堆積土
	8	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山 (V層) ブロック小を多く含む	カマド掻き出し土 人為堆積
	9	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	P5 人為堆積
	10	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	Ⅲ層ブロックと地山 (V層) ブロックからなる。	掘方埋土
P3	1	黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト	白色粘土ブロック小をまだらに少し含む	柱痕跡
	2	黄褐色 (10YR5/6) 粘土	白色粘土ブロック小を多く含む	掘方埋土
K11	3	黄褐色 (10YR5/6) 粘土	灰黄褐色土粒を多く含む	人為堆積
	3	黄褐色 (10YR5/6) 粘土		人為堆積
P7 (ロクロビット 1)	1	灰黄褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト		軸木痕跡
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	炭化物粒、地山 (V層) 粒を微量含む	掘方埋土
P9 (ロクロビット 2)	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	切取穴 人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	軸木痕跡
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土	地山 (V層) ブロック小を多く含む	掘方埋土
P6	4	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	炭化物粒を微量、地山 (V層) ブロック小を多く含む	切取穴 人為堆積
	5	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を多く含む	軸木痕跡？
	6	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	SI22-11 層と同じ	貼床

第 18 図 SI22 竪穴建物跡



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 托	1層	ほぼ完形	5.0	8.4	4.7	3.3	外内：ロクロナデ 受け下部：ケズリ→ナデ 底部：ケズリ	26-2	362
2	須恵器 甕	1層	底部完存			12.2	11.9~	外：平行（擬格子）タタキ→ケズリ 内：ナデ		363
3	土師器 壺	1層	底部片			4.9		外：ケズリ→ナデ（ミガキに近い） 内：ロクロナデ 底部：ナデ		463
4	須恵器 横瓶？	3層						閉塞円盤	29-1	386
5	須恵器 坏	床	底部完存	(13.9)		6.5	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ		462
6	須恵器 坏	P9 1層	完形	13.2		7.6	4.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		464
7	須恵器 坏	堆積土	3/4	(13.7)		(8.5)	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		423
8	須恵器 坏	堆積土	1/3	(13.6)		(7.5)	4.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「一」字ヘラ描き		415
9	須恵器 坏	外延溝	完形	13.5		6.6	4.2	外内：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→ナデ		421
10	須恵器 坏	堆積土	ほぼ完形	13.7		7.6	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ		413
11	須恵器 坏	外延溝	1/2	(14.0)		8.3	5.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		416
12	須恵器 坏	外延溝	完形	13.5		4.8	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 底切れ	26-3	1148
13	須恵器 蓋	壁周溝	3/4	(13.8)			3.6	擬宝珠 外内：ロクロナデ 内面にヒビ		424
14	須恵器 蓋	8層	1/3	(15.0)				外：ロクロナデ→天井ケズリ 内：ロクロナデ 火ダスキ S121・1層出土片と接合		477
15	須恵器 盤	外延溝	1/3	(14.5)		(8.8)	3.5	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ		417
16	土師器 甕	壁周溝	2/3	(14.4)			10.7~	外：ロクロナデ 下部ナデ 被熱 スス 内：ロクロナデ		418
17	須恵器 坏	6層	3/4	13.2		7.8	3.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ十字	26-4	389
18	須恵器 坏	6層	2/3	(12.2)		7.0	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	26-5	422

第19図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物（1）



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
19	須恵器 坏	6層	3/4	(13.1)		7.0	4.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ		390
20	須恵器 高台坏	6層	高台破片					高台底面に布目	29-2	391
21	須恵器 甕	6層	胴部破片					外：平行（擬格子）タタキ 内：同心円文当て具痕	29-3	392
22	須恵器 坏	8層	1/2	(14.0)		(6.9)	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		410
23	須恵器 坏	8層	2/3	(14.4)		7.7	5.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		403
24	須恵器 坏	8層	1/2	(13.7)		(7.5)	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		396
25	須恵器 蓋	8層	2/3	(14.2)			3.8	擬宝珠状ツマミ 外：ロクロナデ→天井回転ケズリ 内：ロクロナデ		408
26	須恵器 蓋	5・8層	1/4	17.4			3.5	ボタン状ツマミ 外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 天井ナデ		393
27	須恵器 蓋	8層	1/3	(18.7)			4.4	擬環状ツマミ 外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ		407
28	須恵器 高台坏	8層	2/3	(17.0)		(10.8)	8.8	外内：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 赤褐色	26-6	395
29	須恵器 高台坏	8層	1/2	(16.0)		(9.7)	8.5	外内：ロクロナデ	26-7	409
30	須恵器 坏	10層	1/2	(14.3)		(9.0)	5.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		411

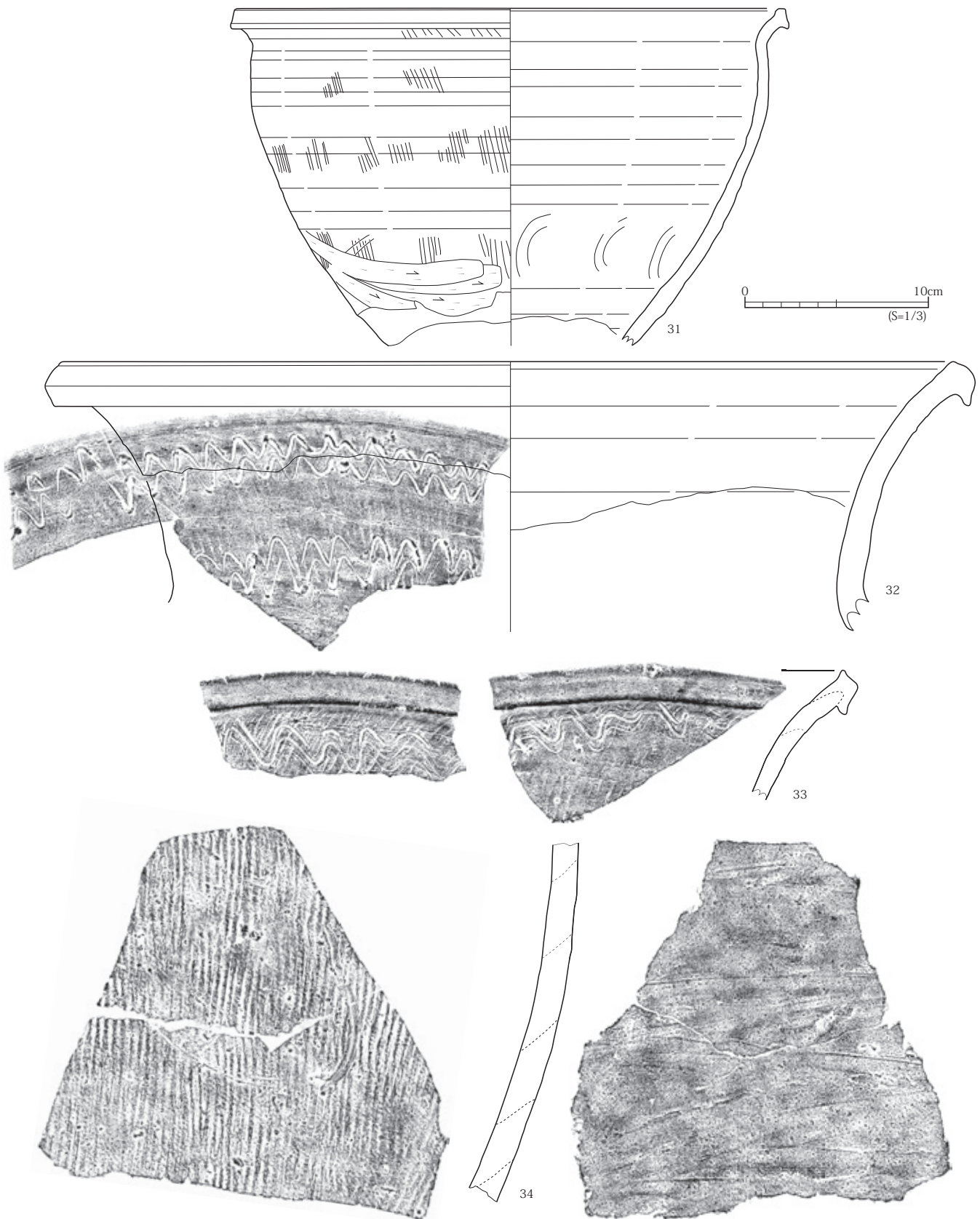
第20図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物（2）

層は自然堆積土、4層は人為的埋め戻し土、5～7層は自然堆積土、8層は地山ブロックや粘土ブロックからなる人為的埋め戻し土である。4層は建物跡北側に堆積する。8層は建物跡南半に厚く堆積し、北側ほど厚さを減ずる。

〔壁〕 垂直気味に立ち上がる。北壁や西壁の一部は壁周溝がオーバーハングする。高さは、最も残りの良い西辺で36cmある。

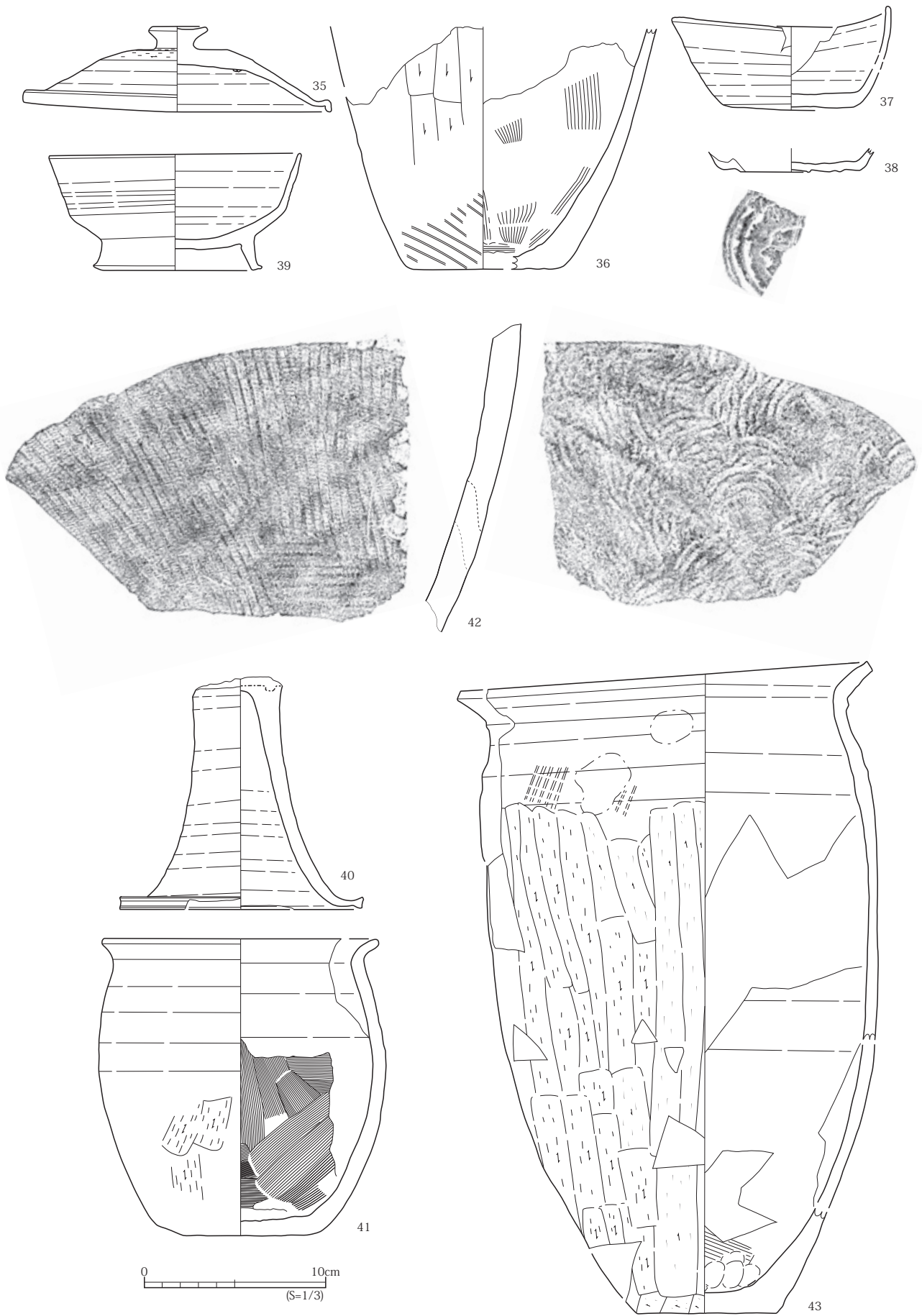
〔床〕 カマド1の周辺を除いて、ほぼ全面が明黄褐色粘土主体の貼床である。貼床の厚さは1～3cmほどで南ほど厚い傾向にある。

〔柱穴〕 P1・2・3・4の4個を確認した。建物平面形の対角線上に位置しており支柱穴と考えられ

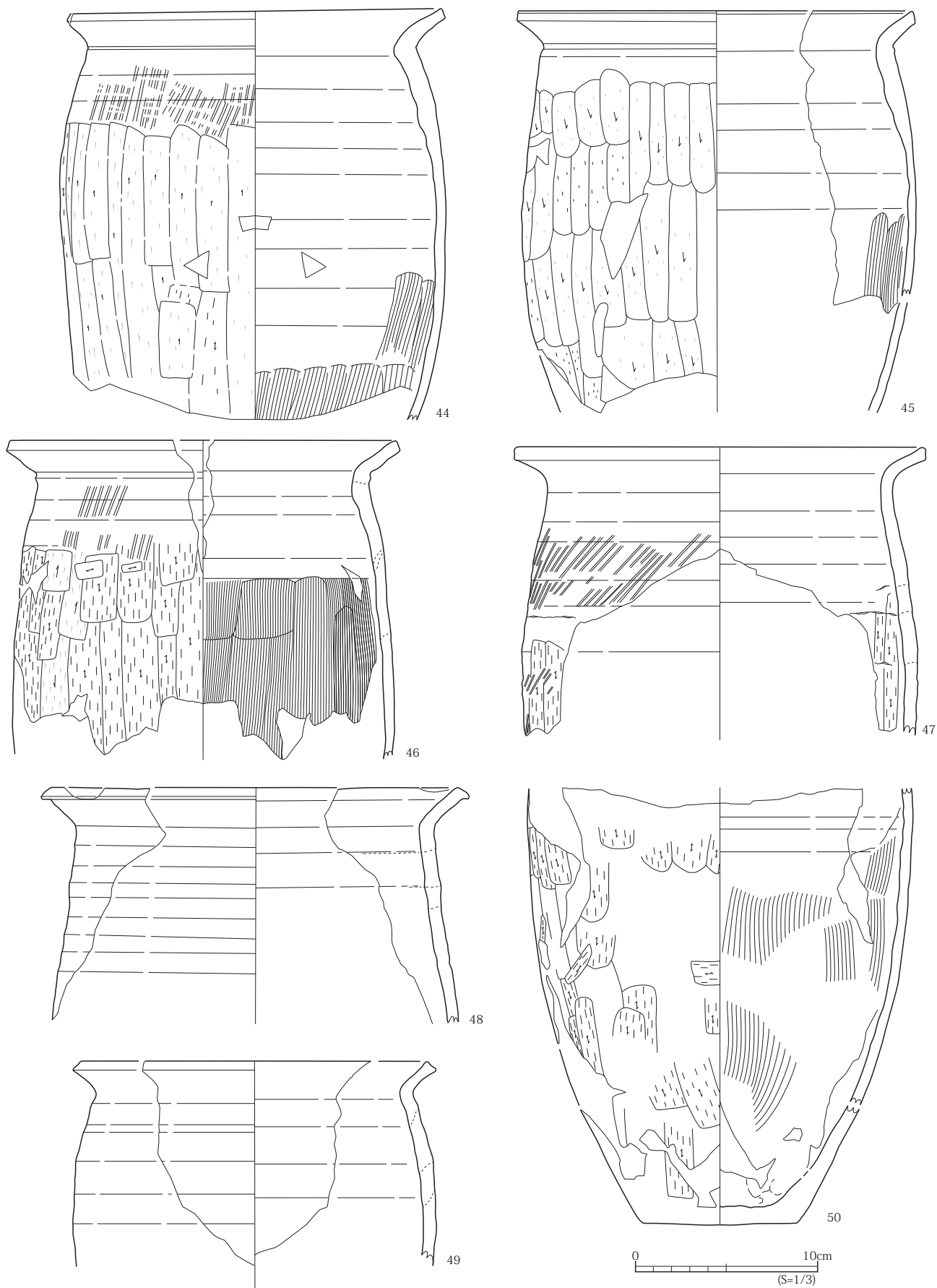


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
31	須恵器 鉢	煙道	1/3	(29.5)			18.3-	外：平行タタキ→ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ 下部当て具痕		441
32	須恵器 甕	煙道 18層	口縁部片	48.6			14.7-	外：波状文2線×2段 平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	27-1	442
33	須恵器 甕	煙道 18層	口縁部					外：櫛描波状文（櫛歯数2） 平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	29-4	444
34	須恵器 甕	煙道 18層	胴部破片					外：平行（擬格子）タタキ 縄痕 内：ナデ		443

第 21 図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物（3）



第 22 図 SI22 豎穴建物跡 出土遺物 (4)



第 23 図 SI22 豎穴建物跡 出土遺物 (5)

No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
35	須恵器 蓋	カマド2床	ほぼ完形	16.7			4.8	ボタン状ツマミ 外：ロクロナデ→天井回転ケズリ 内：ロクロナデ 高台の痕跡 赤褐色(2次被熱か?)	27-2	431
36	土師器 甕	カマド2 2層	胴部中～底部				8.4 13.4~	外：平行文叩き→ケズリ 内：ナデ 摩擦	27-5	433
37	須恵器 坏	カマド3付近 8層	3/4	(11.8)		6.7	5.8	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→一部手持ちケズリ 外内に自然釉		438
38	須恵器 坏	カマド3付近貼床内	底部1/4			(7.6)	1.1~	外内：ロクロナデ 底部：へら切り 「十」字へら描き		437
39	須恵器 高台坏	カマド3付近床	3/4	(13.8)		(8.2)	6.5	外内：ロクロナデ 底：回転ケズリ 赤褐色	27-3	435
40	須恵器 高坏	カマド3支脚	脚			13.2	12.3~	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 外内：自然釉	27-4	439
41	土師器 甕	カマド3 3層	3/4	(15.0)		6.9	16.4	外：ロクロナデ→下半ケズリ 内：ロクロナデ→下部ナデ	27-6	440
42	須恵器 甕	カマド3付近堆積土	胴部破片					外：平行(擬格子)タタキ 内：同心円文当て具痕 外内：釉	29-5	434
43	土師器 甕	カマド右袖横位	ほぼ完形	(22.5)		7.7	36.0	外：上平行タタキ→ロクロナデ 下ケズリ 内：上ロクロナデ 下ロクロナデ→一部ナデ	28-1	471
44	土師器 甕	カマド3	1/3	20.2			22.6~	外：上叩き→ロクロナデ 下：ケズリ 内：上ロクロナデ ナデ	28-2	465
45	土師器 甕	カマド左袖横位	1/2	21.6			21.8~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		467-1
46	土師器 甕	カマド3右袖横位	1/4 口縁部片	(21.1)			17.5~	外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		470
47	土師器 甕	カマド3右袖	口縁部片	(22.2)			15.9~	外：叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		468
48	土師器 甕	カマド3 3層上面	口縁部付近	(22.3)			12.9~	外内：ロクロナデ		466
49	土師器 甕	カマド3 3層	口縁部片	(19.0)			11.2~	内外：ロクロナデ		469
50	土師器 甕	カマド右袖横位	1/2 胴部中～底部			8.5	24.0~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		467-2

る。発掘調査時の断面図作成上の不備により貼床との重複を明示できないが、いずれも柱痕跡は貼床上、掘方は貼床下で確認した。掘方は径30～50cmの楕円形あるいは不整形円形で、深さは46cmである。柱痕跡は径15～20cmの円形である。

〔カマド〕北壁中央のカマド1、北壁西寄りのカマド2、南壁南東隅付近のカマド3の計3基を検出した。カマド1が最も古く、カマド2・3が新しい。

カマド1は煙道と燃焼部底面のみを残して本体が除去されている。煙道は長さ1.5mで、上層は人為的に埋め戻されている。

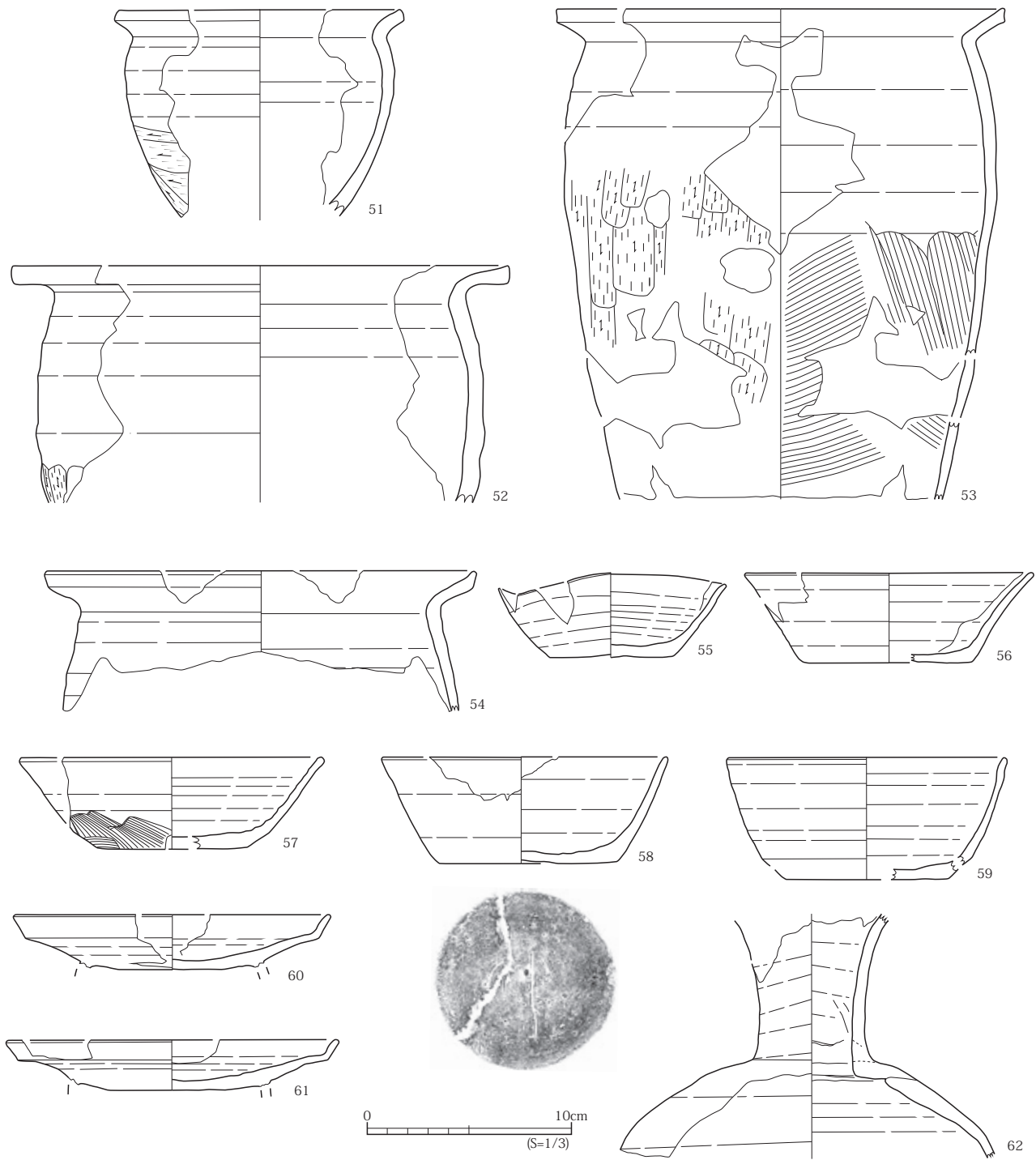
カマド2は燃焼部・本体右側壁・煙道の一部を確認した。左側壁と煙道の大部分が調査区外にある。右側壁は明黄褐色粘土を主体として構築されている。高さ10～15cm、基部の幅15～20cmが残っていた。燃焼部は周囲より5cm程低く窪んでおり、その上面はほぼ平坦である。燃焼部内の堆積土は5層認められる。1層は自然堆積土、4・5層は機能時の堆積土である。2層は、調査区外の状況次第では天井崩落土の可能性が残るものの、被熱痕跡が無いこと、層の厚さが1～3cm程で厚くないことから、カマド2廃絶後人為的ににぶい黄褐色粘土を用いて埋め戻したものとみておきたい。

カマド3は建物南壁の外側に突出して構築されており、本体部分と煙道部を確認した。南壁から煙道先端までの長さは、約1.1mである。左右の側壁は黄褐色粘土を主体として構築されている。にぶい黄褐色シルトの掘方埋土上を燃焼部としており、上面はほぼ平坦である。残存する煙道は奥壁側に向かって緩やかに立ち上がる。右側壁では、土師器長胴甕(第23図-43・46・47・50)が横位で出土した。側壁先端側に口縁部を向けた状態で連結されていた可能性がある。左側壁前端では、土師器甕口縁部片(第23図-45)が逆位で出土している。いずれも構築材の一部として使用されたとみられる。燃焼部中央奥壁寄りの位置では、坏部を欠いた高坏脚部(第22図40)が正位で出土した。被熱痕跡などはみられず、器面は良好な状態を保っている。

カマド2・3の前後関係は不明確だが、カマド2燃焼部が粘土で埋め戻されていると考えられることから、この上面を建物の床とした段階に、カマド3を使用していたものとみておきたい。

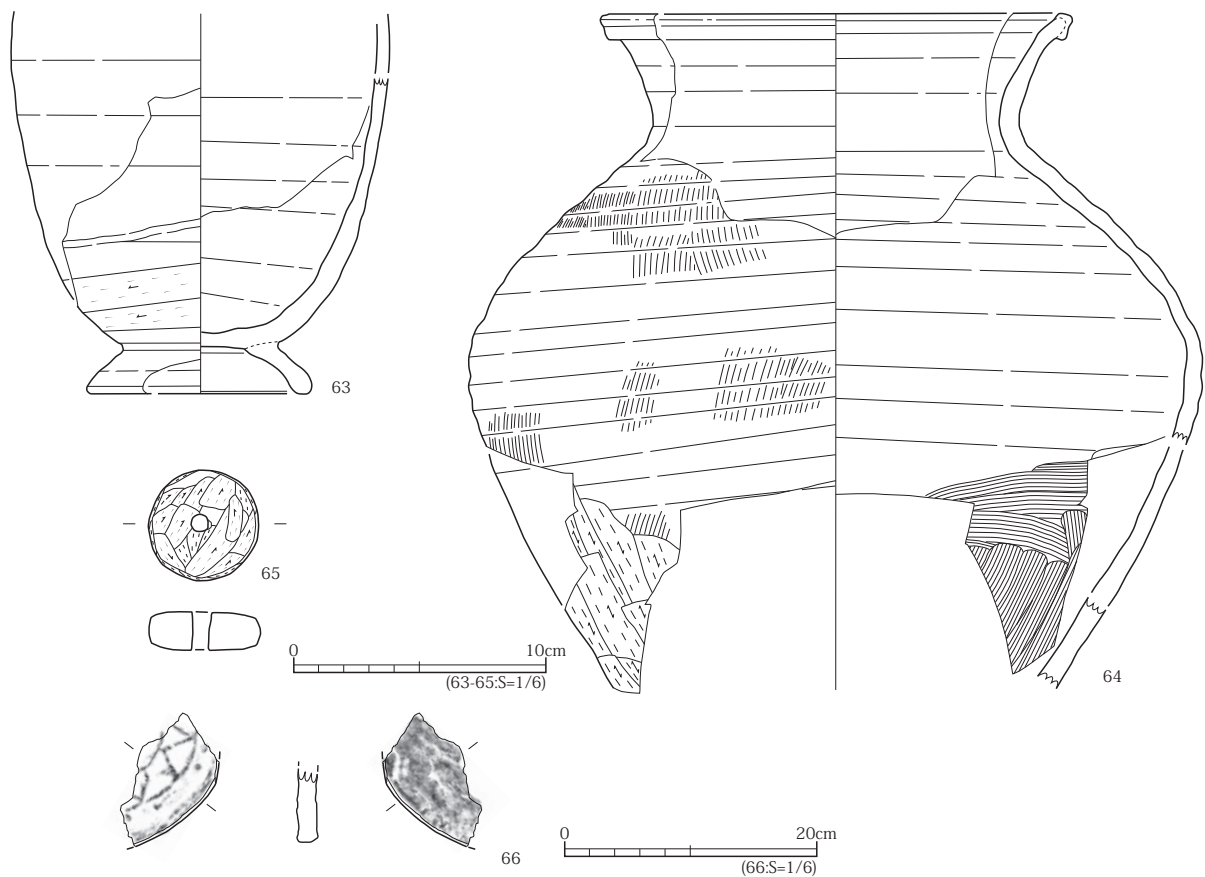
〔周溝〕検出した壁の直下ではカマド2部分を除いて全周する。北東壁付近と南壁東側では部分的に





No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
51	土師器 甕	K11 1層	1/5 側面	(13.8)			10.1~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		455
52	土師器 甕	K11 1層	口縁部片	(24.3)			11.6~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		453
53	土師器 甕	K11 1層	1/5 口縁部~ 胸部	(21.8)			24.0~	外：ロクロナデ→胸部中~下部ケズリ 内：ロクロナデ→胸部中~下部ナデ		472
54	土師器 甕	K3	口縁部片	20.9				外内：ロクロナデ		473
55	須恵器 坏	K11	1/2	(10.5)		(6.0)	4.2	外内：ロクロナデ 釉 底部：手持ちケズリ?	28-3	450
56	須恵器 坏	K11 1層	1/2	(13.9)		(8.0)	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		457
57	須恵器 坏	貼床	1/3	(14.6)		(7.4)	4.5	外内：ロクロナデ 外面下部不整方向ナデ 底：ヘラ切り→ナデ		449
58	須恵器 坏	K11 1層	3/4	13.8		8.6	5.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「一」字ヘラ描き 風化 黄褐色	28-5	458
59	須恵器 坏	K3	1/3	(13.4)		(7.8)	(6.0)	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ		447
60	須恵器 盤	K3	1/4	(15.3)			2.7~	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ		446
61	須恵器 盤	K11 1層	3/4	16.0			2.5~	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ	28-4	456
62	須恵器 長頸瓶	K11 1層	頸部~肩部					外内：ロクロナデ 接合部3段		451

第 24 図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (6)



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
63	須恵器 瓶?	K3	胴部下半~底部			8.5		外:ロクロナデ→下部回転ケズリ 内:ロクロナデ 底部:ロクロナデ : 橙褐色	28-6	448
64	須恵器 甕	K11 1層	1/4	(18.0)				口縁:ロクロナデ 胴:平行タタキ→ロクロナデ 下部:平行タタキ→ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ		459
65	土製紡錘車	K11 1層	完形					ケズリ 長径4.4 短径4.3 厚さ1.4 孔径0.7 重量36.7g : 灰色		452

No	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
66	軒丸瓦	II	1・2層	瓦当破片 右下部?	周縁:ケズリ 瓦当裏:ナデ			K13

### 第25図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物(7)

建物内側方向に二股に分かれ、南東隅では外延溝と接続する。幅は、15cm～50cm、深さは16cmで、断面形U字形である。北から南の外延溝に向かって緩やかに低く傾斜しており、標高はカマド1付近で43.5m、南東隅の外延溝との接続部で43.3mである。堆積土は自然堆積土である。

〔外延溝〕建物南東隅から南東方向に向かって延びる。長さは約5.7m分確認した。幅は30～70cmほどで断面形は逆台形である。南端の底面標高は43.1mで、建物北辺周溝底面との比高は約40cmである。建物内8層と同様の土で人為的に埋め戻されている。

〔土坑〕5基確認した。このうち1基は床面上(K1)、4基は貼床下で(K2・3・8・11)確認した。K1は中央南西よりに位置し、平面形が長辺128cm、短辺28cmの長方形で、深さは10cmある。断面形は箱形である。堆積土は建物跡の8層で人為堆積層である。

K2は建物北東よりに位置し、平面形が長軸55cm、短軸52cmの楕円形で、深さは10cmある。断面形は皿状である。堆積土は人為堆積層である。K3は建物北東隅に位置し、平面形が長軸132cm、短軸100cmの楕円形で、深さは18cmある。断面形は皿状である。堆積土は3層認められ、いずれも人為堆積層である。K8は建物中央南よりに位置し、平面形が長軸108cmの円形で、深さは28cm

ある。断面形は長方形である。堆積土は3層認められ、いずれも人為堆積層である。K11は建物南西隅に位置し、平面形が長軸96cmの円形で、深さは9cmある。断面形は浅い皿状である。堆積土は1層のみ認められ、人為的に埋め戻されている。

〔そのほかの施設〕ロクロピットの可能性があるピット2基、焼け面1カ所を検出した。

P7（ロクロピット1）は支柱穴P1の東側に位置する。平面形は長軸55cm、短軸40cmの楕円形で、断面形は箱形である。中央に径10cm、長さ34cmの棒状の痕跡があり、掘方内は灰黄褐色粘土質シルトで埋め戻されている。

P9（ロクロピット2）は建物南東に位置する。平面形は直径60cmほどの楕円形で、断面形は漏斗状である。中央に径10cm、長さ36cmの棒状の痕跡があり、掘方内は暗褐色粘土質シルトで埋め戻されている。

支柱穴とは配置や規模が異なり、棒状の痕跡があることから、P7とP9はロクロピットとみられる。建物中央南寄りの位置で長軸1.1m、短軸0.9mほどの焼け面を検出した。

〔出土遺物〕堆積層、埋戻土、カマド、土坑から土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、高台坏、盤、高坏、鉢、長頸瓶、横瓶、甕、托など多量の土器のほか、土製紡錘車、瓦が出土した。大部分は堆積土や掘方、土坑、カマドから出土している。床からの出土は少ない。

1は仏器の托を模倣した須恵器である。3～7層から出土した遺物は多くない。4は横瓶側面の閉塞盤とみられる。埋戻土である8層では須恵器坏、蓋、高台坏（7～11）のほか須恵器・土師器片が多く出土した。32の甕口縁は、カマド1の煙出しピットとその周囲から落ち込んだ状態で出土した。後述するSI24やSI60の例を踏まえると、煙出しピットの構築材として用いられたものとみられる。同位置で出土した須恵器鉢と甕片も同様に構築材として用いられたとみられる。35はカマド2の燃焼部に正位で置かれていた。一部赤化しており、熱を受けている。43～50はカマド3の構築材として転用された甕である。40は坏部を欠く高坏脚部でカマド3の燃焼部に正位で置かれていた。41は逆位で、40の真上からややずれた位置で内面が土で満たされた状態で出土している。K3、K11から土師器甕、須恵器がまとまって出土している。

#### 【SI23 竪穴建物跡】（第26～27図・図版9）

〔位置・検出面〕6区中央西辺の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。建物南西は攪乱で大きく壊されている。

〔重複〕SK47・SB50と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形〕東西3.8m、南北4.7mの方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-4°-Wである。

〔堆積土〕カマド部分を除いて6層に分けられた。1～4層は地山ブロックや炭化物を含む自然堆積層、5層は壁が崩落した自然堆積層、6層は機能時に堆積した炭化物層である。

〔壁〕垂直気味に立ち上がる。最も残りの良い西辺で高さ28cmである。

〔床〕中央は地山、周辺は掘方埋土を床とする。掘方埋土は黄褐色シルトを主体とし、各辺に沿って



第 26 図 SI23 竪穴建物跡

30～70cmの幅で廻る。

〔柱穴〕 確認していない。

〔カマド〕 東壁の北東隅寄りに付設される。本体と燃焼部を確認した。本体は建物内にあり、黄褐色粘土で構築されている。左側壁先端で土師器甕胴部片（第 27 図－ 11）が出土しており、側壁の構築材として使われていた可能性がある。燃焼部内部はカマド崩落土（7～10 層）で覆われており、掘方埋土の上面を焼け面としている。焼け面中央では土師器甕底部 2 個体（第 27 図－ 7・8）が逆位で重ねられた状態で出土した。これらは支脚として転用されたものである。

〔土坑〕 床面で 2 基確認した（K1・K2）。K1 は中央やや北辺よりに位置し、長軸 129cm、短軸 90cm

遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI23	1	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山 (V層) ブロック中を少し含む	自然堆積
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	暗褐色 (10YR3/3) シルト	部分的に炭化物粒を少し含み、地山 (V層) 粒を微量含む	自然堆積
	5	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
	6	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物が広がる層、暗褐色シルト、地山 (V層) ブロック小を少し含む	人為堆積
	7	褐色 (7.5YR4/4) 粘土	被熱、にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土ブロック小を少し含む	カマド崩落土
	8	黄褐色 (10YR8/6) 粘土	被熱、にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土ブロック小を少し含む	カマド崩落土
	9	明赤褐色 (5YR5/6) 粘土	焼土粒ブロック小・粒を多く含む	カマド崩落土
	10	褐色 (7.5YR4/4) 粘土	焼土粒を多く含む	カマド崩落土
	11	褐色 (10YR4/4) 砂質シルト	焼土粒を微量含む	自然堆積
	12	黄褐色 (10YR5/6) シルト	焼土粒を少し、褐色ブロック小、黄褐色ブロック小を多く含む	K2 人為堆積
	13	暗褐色 (10YR3/3) シルト	焼土粒を多く、黄褐色 (10YR5/6) ブロック小を少し含む	K2 自然堆積
	14	暗褐色 (10YR3/4) シルト	黄褐色ブロック小を多く、炭化物粒、焼土粒を少し含む	K1 人為堆積
	15	黄褐色 (10YR8/6) 粘土	地山 (V層) 黄褐色粘土ブロックからなる	カマド構築土
	16	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	浅黄褐色、黄褐色ブロック小を少し含む	掘方埋土
	17	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	明黄褐色ブロック小を少し含む	掘方埋土
SA49	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	Ⅲ層と地山 (V層) からなる	掘方埋土
SB50	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を微量含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	Ⅲ層と地山 (V層) からなる	掘方埋土
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/2) シルト	Ⅲ層と地山 (V層) からなる	掘方埋土

の楕円形で、深さは 13cm ある。断面形は浅い皿状である。堆積土は 1 層のみで、地山ブロックを含む土で埋め戻されている。K2 は K1 のすぐ南に隣接し、径 52cm の円形で、深さは 6cm ある。断面形は逆台形である。堆積土は 2 層認められ、底に薄く焼土粒を含む暗褐色土が自然堆積した後、地山ブロックを含む土で埋め戻されている。

〔そのほかの施設〕床面上で焼け面と粘土を検出した。焼け面は建物中央の床面で検出され、長軸 1.2 m、短軸 0.4 m の長楕円形である。粘土は南東隅の床面で検出され、東西 1.2 m、南北 1.5 m の範囲に広がっている。厚さは 1～5 cm である。

〔出土遺物〕カマドとその周辺の床から須恵器坏、土師器甕、砥石が出土した。全体の出土量は多くない。坏の底部は 1～3 が回転糸切り、4 がヘラ切りである。6 の甕は被熱による明確な使用痕がある。9～11 はカマド堆積土、崩落土その周囲の床から出土した甕で、残存率が低く、器面も摩滅・風化が進んでいるため、使用、あるいは構築にかかわるかの判断がつかない。7 と 8 はカマド燃焼部からそれぞれ逆位で 8 に 7 が重なった状態で出土した支脚転用品である。

#### 【SI24 竪穴建物跡 a・b】(第 28～34 図・図版 10・11)

〔位置・検出面〕6 区中央やや南寄りの丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。新旧 2 時期あり、SI24a を埋め戻して SI24b に拡張している。SX37、SK36、SK45 と重複しいずれよりも古い。方向は、西辺で測ると N-10° -E である。

《SI24a 竪穴建物跡》(第 28・34 図)

〔規模・平面形〕東西 3 m、南北 3.6 m の長方形である。

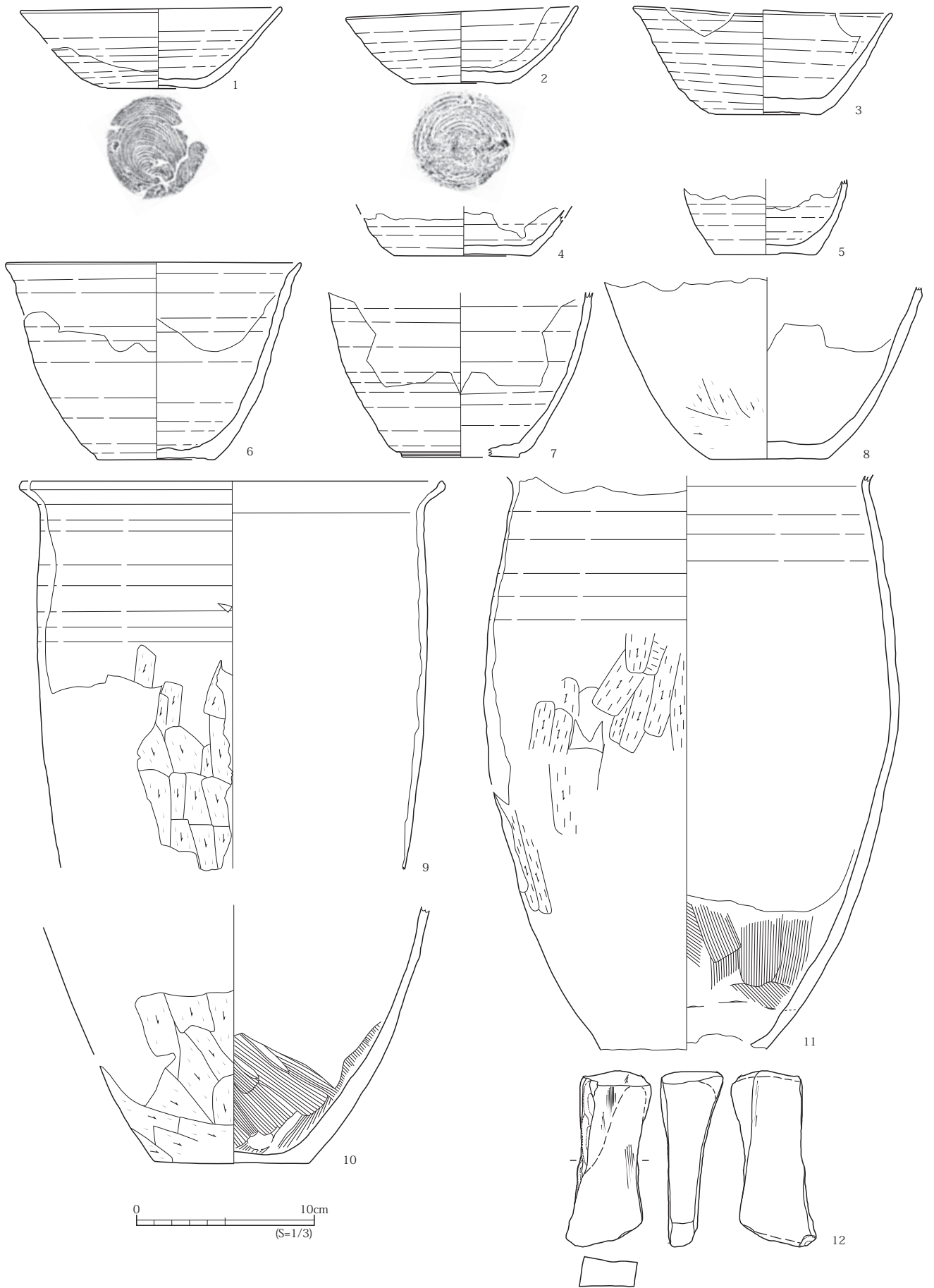
〔堆積土〕SI24b の掘方埋土で埋め戻される。

〔壁〕垂直気味に立ち上がる。深さは最も残りの良い北辺で 10cm ある。

〔床〕地山を床とする。

〔柱穴〕支柱穴は確認していない。

〔カマド〕東壁南東隅寄りに付設される。SI24b 構築時に大部分が壊されたとみられ、燃焼部、側壁



第 27 図 SI23 竪穴建物跡 出土遺物

No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	カマド付近床	2/3	(14.5)		(5.1)	4.6	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	30-2	614
2	須恵器 坏	カマド付近床	3/4	12.9		5.5	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右→ナデ	30-1	616
3	須恵器 坏	カマド付近堆積土	3/4	(14.4)		5.9	6.1	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	30-3	618
4	須恵器 坏	カマド付近床	底			7.7		外内：ロクロナデ 底部：へら切り		615
5	土師器 甕	カマド前床	底部			5.7	4.3-	外内：ロクロナデ 内：コゲ 外：スス		610
6	土師器 甕	5層	3/4	(16.5)		6.5	11.1	外：ロクロナデ スス 被熱痕 内：ロクロナデ 喫水線コゲ 底部：回転糸切り右	30-4	611
7	土師器 甕	カマド支脚	底部			(6.5)	(10.3)	外内：ロクロナデ 底部：糸切り		624
8	土師器 甕	カマド支脚				6.4		外：ケズリ 内：著しく風化		625
9	土師器 甕	カマド左袖付近床	1/4	(23.6)				外：ロクロナデ→ケズリ 内：著しく風化		620
10	土師器 甕	カマド床	底完存			8.7		外：ケズリ 内：ナデ		617
11	土師器 甕	カマド前床	2/3				32.3-	外：ロクロナデ→ケズリ(ナデに近いケズリ) 内：ロクロナデ→ナデ		621
12	砥石	2層						砂岩 長：99mm 幅：43mm 重さ：134.6g	70-2	627

の構築に使用されたとみられる瓦が残存する。本体の規模や構造は不明瞭であるが、側壁は明黄褐色粘土で構築されており、両壁前端には芯材として使われた丸瓦（第34図-2）が玉縁を下にして据えられていた。煙道は奥壁側に向かって緩やかに立ち上がる。瓦の欠損部はSI24bの床面やや下で、長さ17cmが残存する。

〔周溝〕北辺と西辺の一部で検出した。

〔建物内土坑〕3基確認した（K1～K3）。K1は建物中央に位置し、平面形が60cmほどの円形で、深さは10cmある。断面形は浅い皿状である。堆積土は人為堆積層である。K2は建物西辺よりに位置し、平面形が長軸81cmの円形で、深さは17cmある。断面形は逆台形である。堆積土は人為堆積層である。K3は建物北よりに位置し、平面形が長軸36cm、短軸30cmの楕円形で、深さは5cmある。断面形は浅い皿状である。

〔その他の施設〕建物中央やや北東よりの位置で、P1を確認した。掘方は径45cmほどの円形で、深さは33cmである。柱痕跡は径10cmの円形である。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、瓦が出土している。この建物跡に明確に伴うといえる遺物は、カマド焚口補強材に転用された丸瓦2点36・37のみである。建物の大部分がSI24b掘方によって床面が壊され、掘方埋土で埋め戻されているため、SI24aに伴うといえる土師器・須恵器はない。

【SI24b 竪穴建物跡】（第29～33図・図版10・11）

〔規模・平面形〕東西6.1m、南北6.1mの方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-10°-Eである。

〔堆積土〕10層に分けられた。1から7層はいずれも自然堆積層で、2層は灰白色火山灰である。8・9層がカマド部分の堆積である。10層は建物北辺を除く範囲の床面上に分布する黄褐色粘土である。厚さは1cmから10cmで上面は凹凸があり、一部10cm以上のまとまりとして残る箇所が数か所ある（平面図「粘土塊」部分）。これらは土器制作の素地として使用された粘土の残滓である可能性がある。

〔壁〕西壁は垂直気味に立ち上がり、東壁は緩やかに立ち上がる。北壁は東側ほど緩やかに立ち上がる。南壁の立ち上がり角度は不明である。高さは最も残りの良い南東壁で24cmである。

〔床〕地山（V層）ブロックを主体とする掘方埋土である。SI24bとして新たに拡張された部分では掘方埋土が厚さ1～3cmで貼床土になっている。

〔柱穴〕竪穴平面形の対角線上でP2、P3、P4、P5の4基を確認した。掘方は貼床下で、柱痕跡は床

上で確認した。掘方は長軸が 24cm～36cmの楕円形で、深さ 35～48cmである。柱痕跡は径 15～20cmほどの円形である。掘方埋土はⅢ・Ⅴ層ブロックを多く含む明黄褐色粘土で埋め戻されている。〔カマド〕北壁中央に付設される。煙道の西側は、SK36・SK45 によって壊されている。本体は建物内にあり、側壁は明黄褐色粘土で構築される。右壁前端で土師器甕胴底部が出土しており、側壁構築材の一部として使われていた可能性がある。掘方は確認していない。煙道は長さ 1.3 mの長煙道で、掘方内に粘土と土器で構築されている。掘方は、長さ 1.2 m、残存幅 0.4 m、深さ 0.4 mでⅢ・Ⅴ層からなる土で埋め戻されている。燃焼部側先端で土師器甕口縁部（9）を芯材としていた状況を確認した。また、煙道堆積土や SK36 から土師器甕片が出土していることから、掘方に甕を連結して据えて煙道を構築していたとみられる。煙道先端の煙出しピットから 28、30 の須恵器甕が出土した。それぞれ潰れた状態で出土しているが、30 は底部を建物側に向けて原則、28 より下から出土している。SK45 の掘削によって元の位置は失われているものの、出土状況と土器の状態からみて、30 の上に底部を打ち欠いた 28 を乗せて煙突を構築したとみられる。

なお、燃焼部中央では燃焼部床からわずかに浮いた状態で、円筒状の土製専用支脚（35）が出土している。

〔周溝〕カマド下部を含めて壁面下の全周で検出した。幅 20～50cm、深さは 15cm前後である。東辺・西辺を中心に幅約 10cm、深さ 12cm の壁在痕跡を検出しており、掘方はにぶい黄褐色土で埋め戻されている。カマド下部の溝内埋め戻し土中からは、須恵器甕の破片（32・33・34）が、体部上面を上にして並んだ状態で出土した。カマド下の暗渠蓋として転用されたものとみられる。

〔外延溝〕建物南辺西寄りから南に向かって延びる。長さは約 2.2 m分確認した。幅は 30～90cmほどで断面形は緩やかな U 字状で深さは 20cm ある。堆積土は 2 層に分けられた。2 層（外延溝 2 層）は自然堆積層である。建物と接続する付近に 2 層上部には明黄褐色粘土（外延溝 1 層）が分布する。建物に近接した位置の天井構築などにかかわる可能性がある。

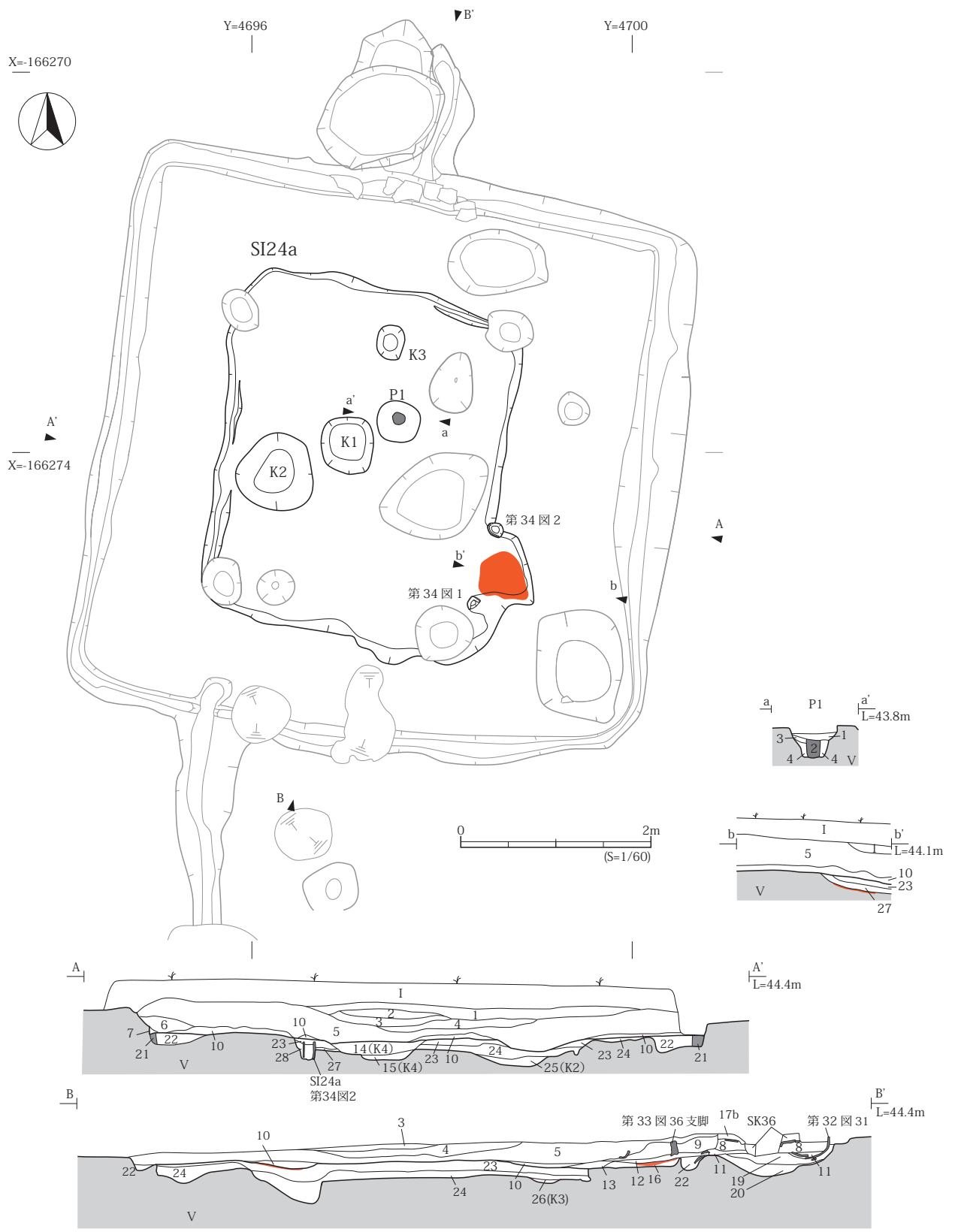
〔建物内土坑〕床面で 1 基（K4）、貼床・掘方埋土下で 2 基（K5・K6）を確認した。K4 は、長軸 108cm、短軸 94cm の不整形の土坑で、断面形は皿形、深さ 18cm である。人為的に埋め戻されている。K5 は長軸 116cm、短軸 92cmの楕円形の土坑で、断面形は箱形で深さは 45cm である。人為的に埋め戻されており上面が貼床で覆われている。K 6 は長軸 102cm、短軸 72cmの楕円形の土坑で、断面形は箱形で深さは 50cm である。人為的に埋め戻されており上面が貼床で覆われている。

〔そのほかの施設〕ロクロピットの可能性のあるピット 2 基、焼け面 3 カ所を検出した。

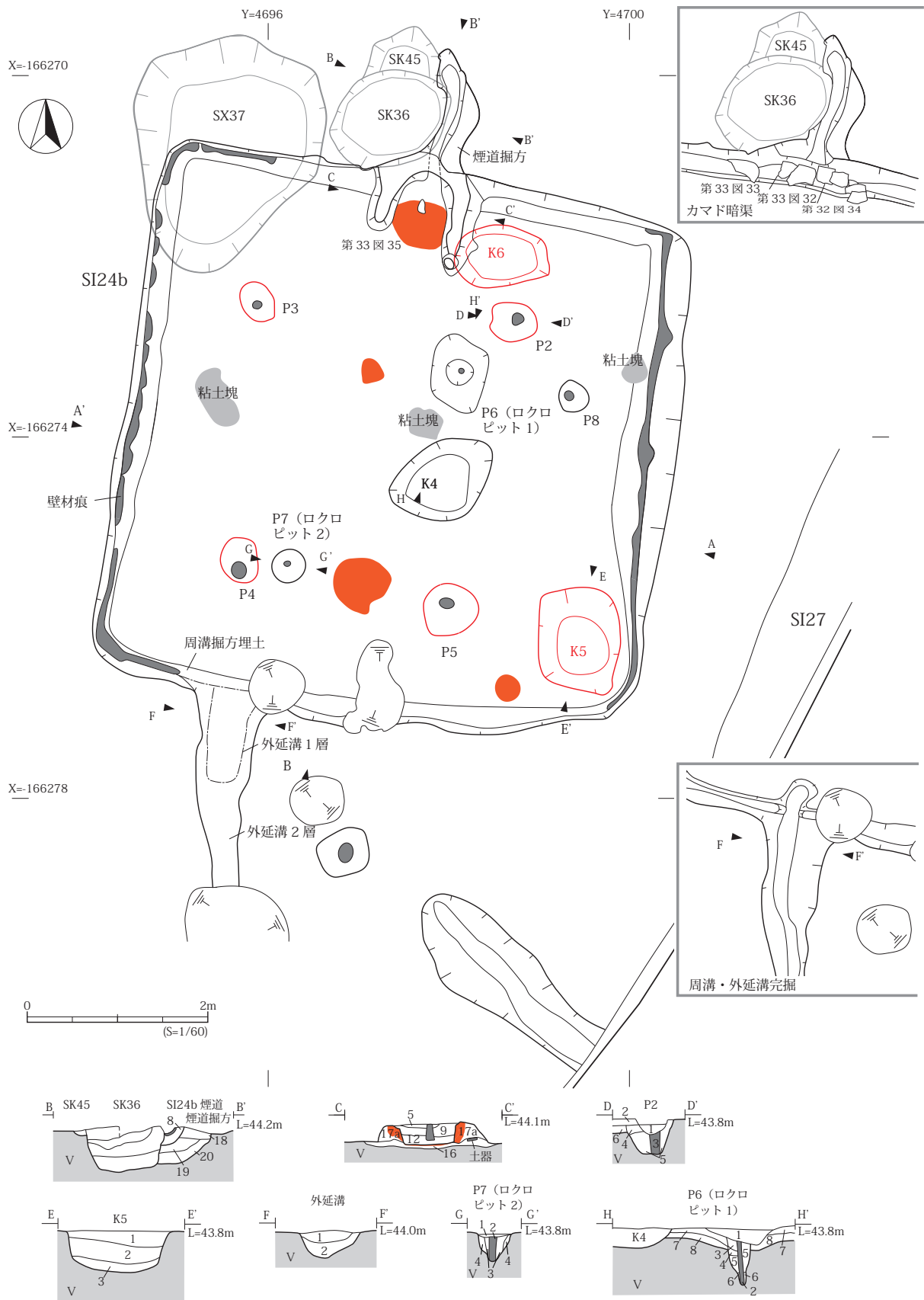
P6 は主柱穴 P2 の南西側に近接し、平面形は長軸 66cm、短軸 45cmの楕円形で、断面は漏斗状を呈する。中央に径 6 cm、長さ 49cmの棒状の痕跡があり、主ににぶい黄褐色粘土を用いて埋め戻されている。

P7 は主柱穴 P4 の東側に近接し、平面形は直径 40cmの円形で、断面は漏斗状を呈する。中央に径 9cm、長さ 28cmの棒状の痕跡があり、主ににぶい黄褐色粘土質シルトを用いて埋め戻されている。主柱穴とは配置や規模が異なり、棒状の痕跡があることから P6 と P7 はロクロピットとみられる。建物中央北よりの位置で、直径 25cm、建物中央南よりの位置で直径 60cm、建物南東隅の位置で直





第28図 SI24 a 竪穴建物跡、SI24b 掘方



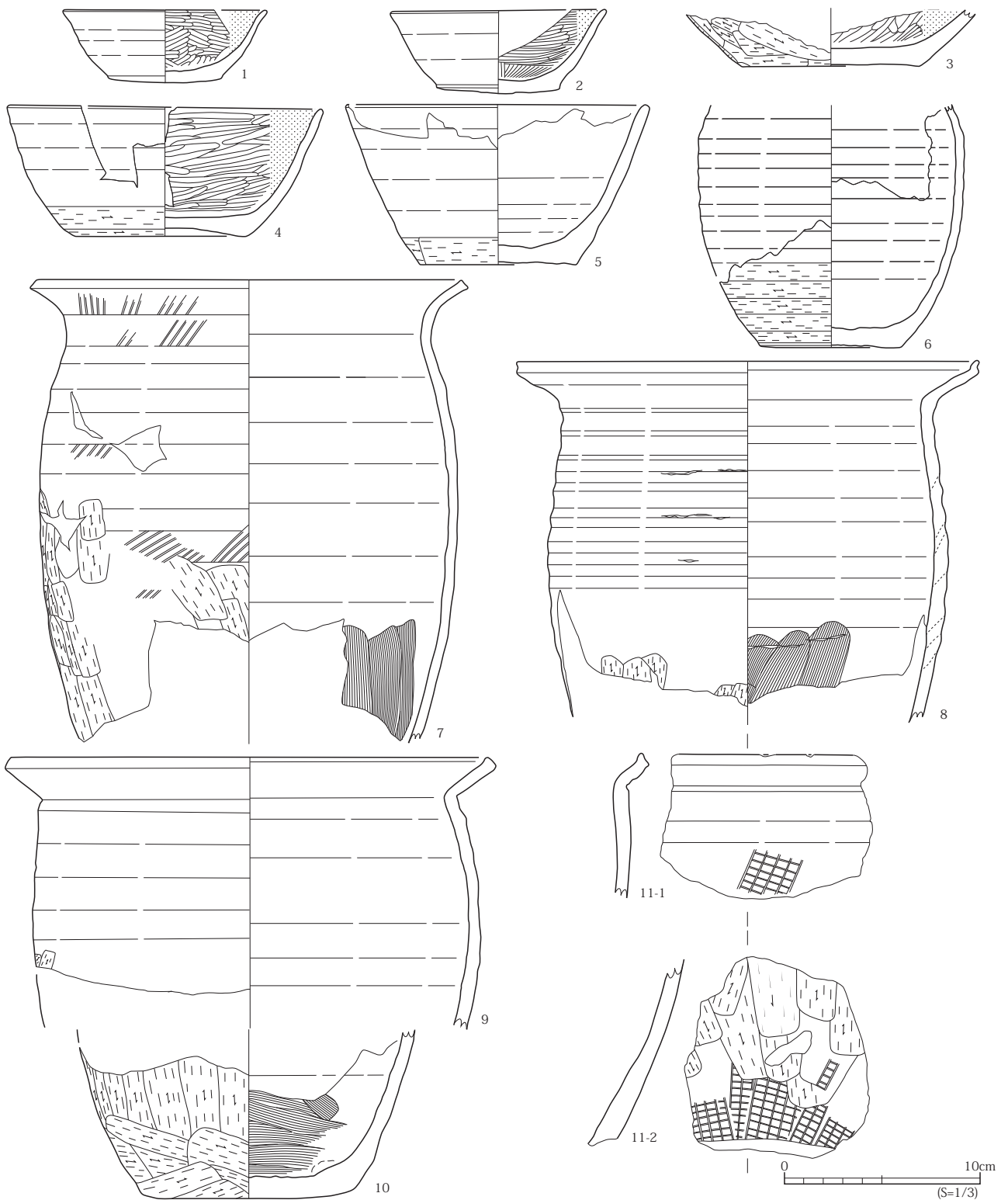
第 29 図 SI24b 竪穴建物跡

表2 SI24 竪穴建物跡 土層表

遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI24b	1	黒色 (10YR1.7/1) シルト		自然堆積
	2	灰白色 (10YR8/1)	灰白色火山灰	一次堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト		自然堆積
	4	褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	自然堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を微量、にぶい黄褐色ブロック小を少し含む	自然堆積
	6	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	7	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		壁崩落土
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	焼土粒を少し含む	自然堆積
	9	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土		カマド天井崩落土
	10	黄褐色 (10YR8/6) 粘土	粘土	人為堆積 粘土残滓 粘土塊
	11	黒褐色 (10YR3/1) シルト		煙道機能時堆積土
	12	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	カマド機能時堆積土
	13	黒色 (10YR3/1)	炭層	人為堆積
	14	にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粘土	炭化物粒、地山 (V層) 粒を多く含む	K4 人為堆積
	15	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒、地山 (V層) 粒を多く含む	K4 人為堆積
	16	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	被熱	カマド掘方埋土
	17a	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	被熱	カマド構築土
	17b	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	被熱	煙道構築土
	18	褐色 (10YR4/4) シルト		煙道掘方
	19	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	地山 (V層) 由来のブロックからなる III層ブロック小を微量含む	煙道掘方
	20	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	III層由来のブロックからなる 地山 (V層) 粒を微量含む	煙道掘方
	21	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	壁材痕	壁材痕
22	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) 由来のブロックからなる 暗褐色土ブロック小を少し含む	周溝埋土	
23	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト		貼床・掘方埋土	
24	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小、地山 (V層) 粒を少し含む	掘方埋土	
SI24a	25	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小～大、暗褐色ブロック大を多く含む	K2 人為堆積
	26	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	K3 人為堆積
	27	暗褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物粒、焼土粒からなる層	SI24a カマド機能時堆積土
	28	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックからなる	カマド構築土
SI24a P1	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト	暗褐色 (10YR3/3) ブロック小を含む	抜取穴
	2	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	柱痕跡
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	掘方埋土
	4	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	掘方埋土
K5	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒を少し、焼土粒を多く含む	人為堆積
	3	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小～中を多く含む	自然堆積
	1	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大を少し含む	切取穴 自然堆積?
P6 (ロクロピット1)	2	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	層の下部に炭化材が残存	軸木痕跡
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土	炭化物小、地山 (V層) 粒を少し含む	軸木掘方埋土
	4	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土	白色粘土をまだらに少し含む	軸木掘方埋土
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	軸木掘方埋土
	6	にぶい黄色褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を多く含む	軸木掘方埋土
	7	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	22層対応	貼床
	8	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	23層対応	掘方埋土
	P7 (ロクロピット2)	1	褐色 (10YR4/4) シルト	
2		黒褐色 (10YR3/2) シルト		軸木痕跡
3		暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	掘方埋土
4		にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト	III層と地山 (V層) ブロックからなる	掘方埋土
SI24 P2	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	抜取穴
	2	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	22層対応	貼床
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト		柱痕跡
	4	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	III層ブロック小～中を多く含む	柱穴掘方埋土
	5	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土	III層ブロック小～中を多く含む	柱穴掘方埋土
	6	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	23層対応	建物掘方埋土
外延溝	1	明黄褐色 (10YR6/8) 粘土	地山 (V層) ブロックからなり、灰褐色ブロック小を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積

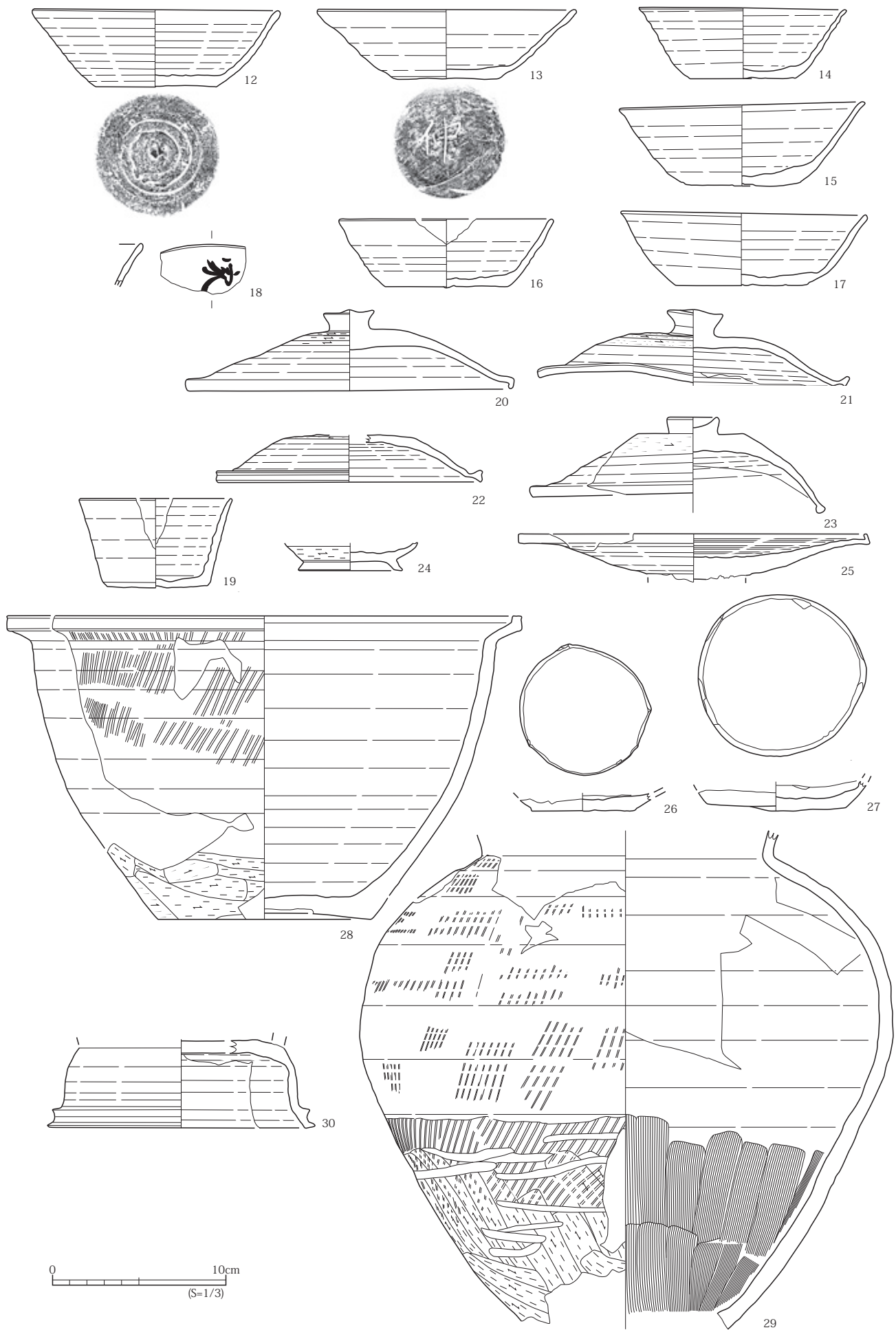
径 30cm の焼け面を検出した。

〔出土遺物〕 堆積土、床、カマド、掘方から土師器坏、鉢、甕、須恵器坏、蓋、高台坏、高坏、鉢、円面硯、甕のほか土錘、土製支脚が出土した。土師器坏は 4 のほか 1、2 のような小形の坏がある。須恵器坏の底部はヘラ切り、あるいはヘラ切り→ナデ調整である。26 と 27 は体部を打ち欠いて円形に整えられている。なお、堆積土中から出土した須恵器坏口縁部片 18 は「家」の墨書がある。31 の須恵器甕は、カマド下の周溝で蓋として用いられていた複数の破片が接合したほか、SI29 堆積土上層から出土した破片も接合した。

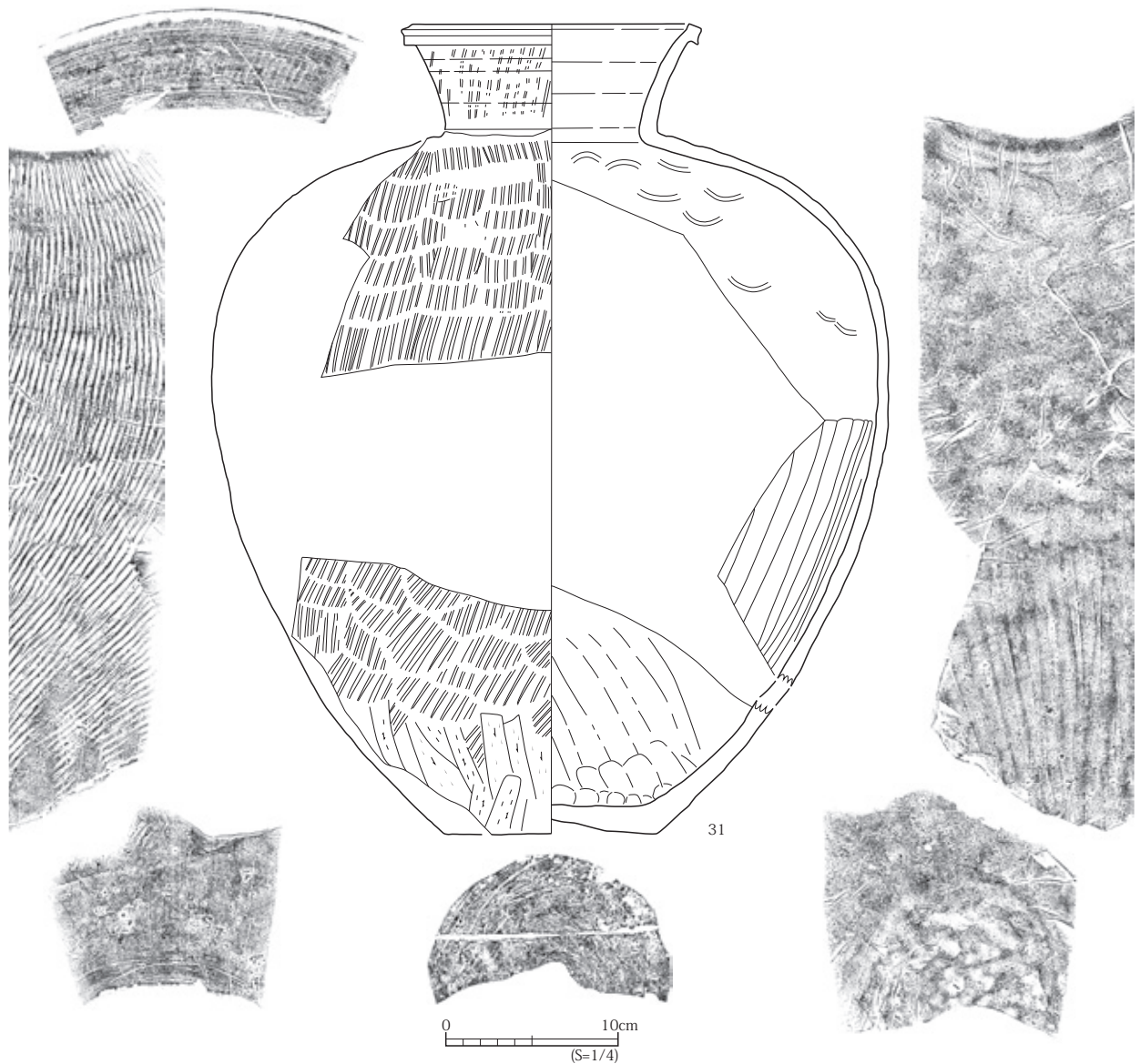


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	5層	1/3	(10.2)		5.7	3.8	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：ナデ	31-1	521
2	土師器 坏	検出面	3/4	10.9		6.3	4.3	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：ヘラ切り→ナデ	31-2	930
3	土師器 鉢	5層	1/3 底部片			(9.0)	2.9~	外：ケズリ 内：黒色処理		511
4	土師器 坏	床	1/2	15.9		8.7	6.7	外：ロクロナデ 下端回転ケズリ 内：黒色処理 底部：回転糸切り右→回転ケズリ	31-3	528
5	土師器 甕	カマド前床	胴部中~底部	(15.2)		7.9	8.2	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 底部：ナデ		519
6	土師器 甕	5層	肩部~底部			7.2	12.4~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		504
7	土師器 甕	カマド煙道	1/2 上半	(21.7)			23.6~	外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		539
8	土師器 甕	煙出堆積土	上半弱	(23.4)			18.5~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		544
9	土師器 甕	煙道	口縁部付近	(24.3)				外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		543
10	土師器 甕	カマド側壁	胴部下端~底部			10.8	8.6~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		537
11	土師器 甕	床	部分破片				残存高 7.4 9.4	外：ロクロナデ 下部擬格子叩き→ケズリ 内：上部ロクロナデ 下部ナデ		529

第30図 SI24b 竪穴建物跡 出土遺物(1)

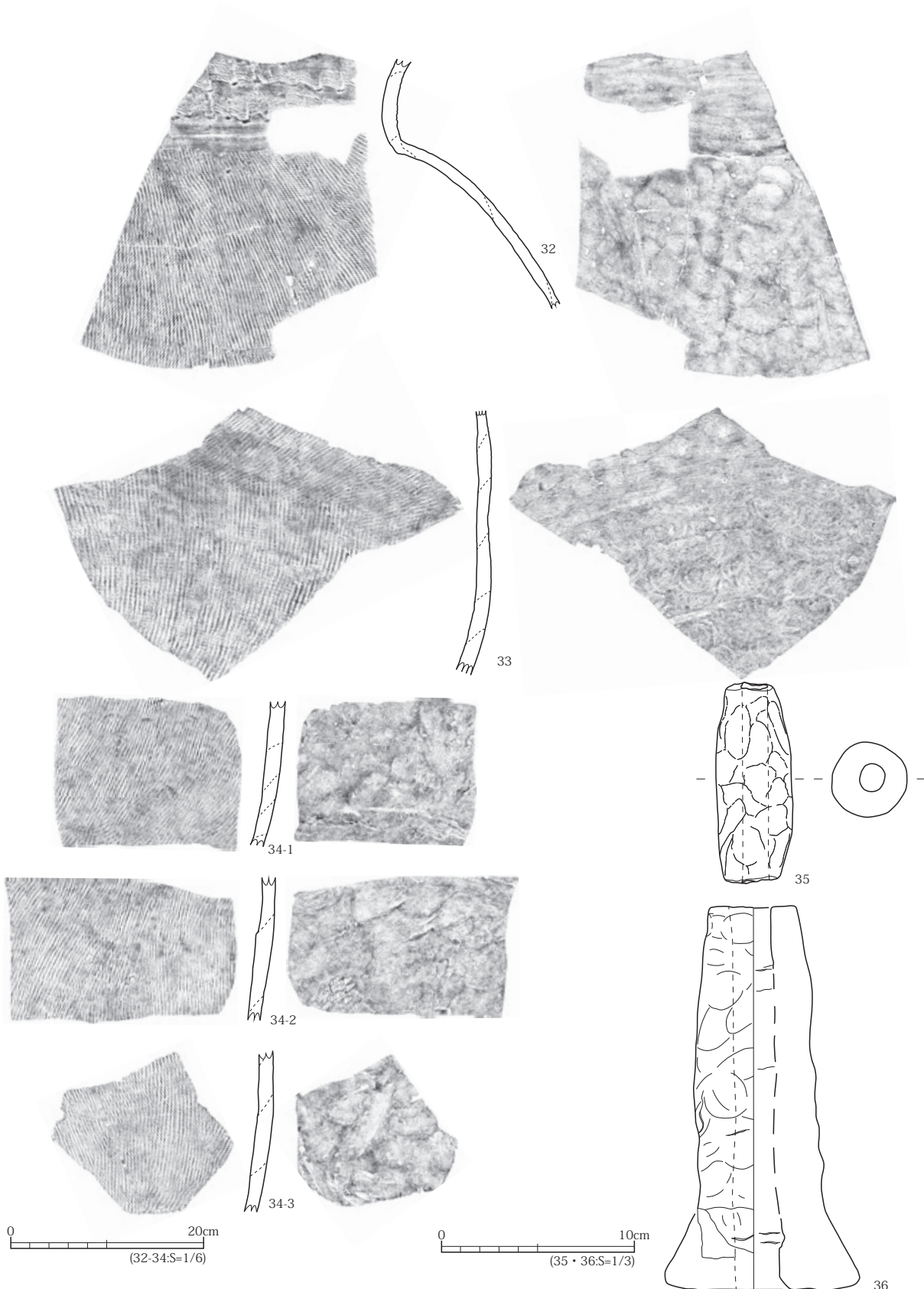


第 31 図 S124b 竪穴建物跡 出土遺物 (2)



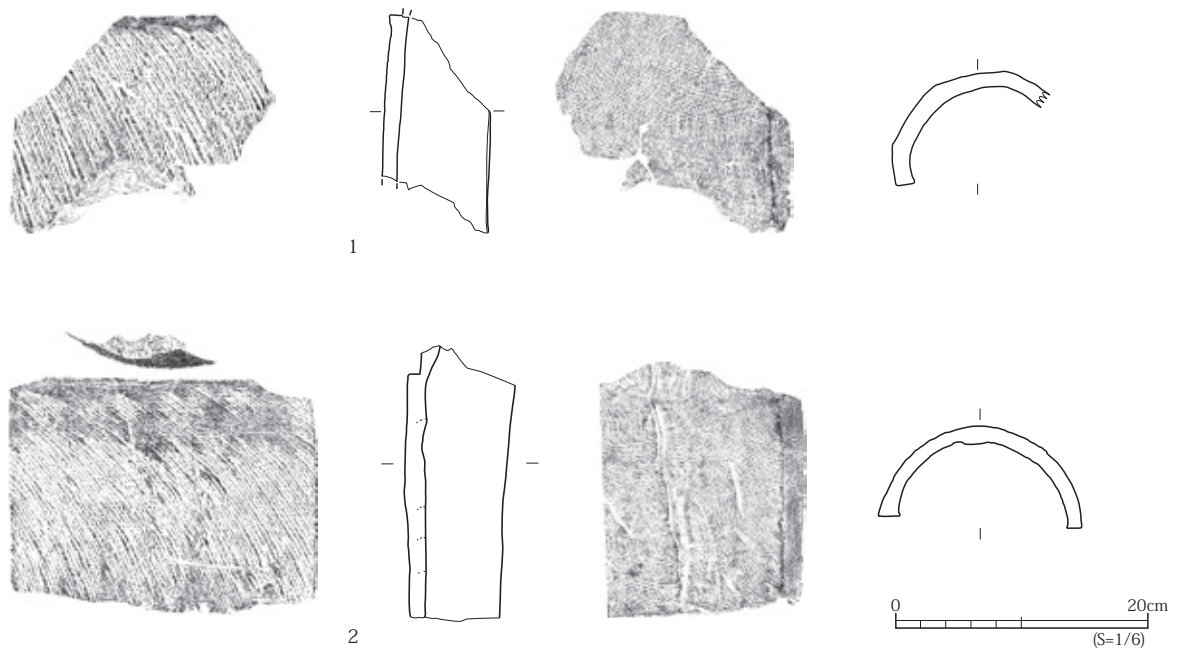
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
12	須恵器 坏	床	ほぼ完形	14.1		7.0	4.5	外内：ロクロナデ 底部：へら切り		923
13	須恵器 坏	堆積土	1/3	(14.8)		6.0	4.0	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ→ナデ 「伸」へら描き		931
14	須恵器 坏	カマド崩落土	完形	11.9		6.0	4.1	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ	31-4	536
15	須恵器 坏	土坑 1 1層	ほぼ完形	13.9		6.7	4.9	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ	31-5	548
16	須恵器 坏	3層	1/2	(12.1)		7.1	4.0	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		500
17	須恵器 坏	床	3/4	(14.1)		7.6	4.3	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ 赤褐色		530
18	須恵器 坏	4層	破片					墨書「家」	73-1	502
19	須恵器 坏	床	1/3	(8.8)		5.8	5.2	外内：ロクロナデ 底：へら切→ナデ 胎土：密 焼成：良好		1451
20	須恵器 蓋	カマド左袖崩落土	完形	18.5			4.7	擬宝珠状ツマミ 外内：ロクロナデ→天井付近回転ケズリ→ナデ	31-6	542
21	須恵器 蓋	外延溝	2/3・ツマミ半分	17.6			4.4	擬宝珠状ツマミ 外：ロクロナデ→天井ケズリ 内：ロクロナデ 外内袖かかる 焼台転用の可能性		920
22	須恵器 蓋	床	1/3	(15.1)			2.7~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		532
23	須恵器 蓋	2層	3/4				(5.5)	環状ツマミ 外：ロクロナデ→体部上ケズリ 体部中～下部ロクロナデ 摘み外側回転糸切り 内：ロクロナデ 摘み部位置ずれ 歪んで著しい	31-7	927
24	須恵器 高台坏	床	底部			5.9	1.6~	外：回転ケズリ 底部：回転ケズリ→高台貼り付けナデ		526
25	須恵器 高坏	23層	1/2	20.0			2.8~	外：ロクロナデ 回転ケズリ→ロクロナデ		932
26	須恵器 坏	床	底部			5.9		底部：へら切り		533
27	須恵器 坏	24層	底部			7.9		底部：へら切り		550
28	須恵器 鉢	検出面	1/4	(29.6)		12.3	17.5	外：タタキ→ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ	32-1	925
29	須恵器 甕	煙道	胴部				28.9~	外：平行タタキ→上半ロクロナデ 下半ケズリ→ナデ 内：無文当て具痕→上半ロクロナデ 下半ナデ 平底	32-2	547
30	須恵器 円面碗	掘方埋土	1/5	(14.6)				外内：ロクロナデ	32-5	928
31	須恵器 甕	煙道	1/2	(16.0)	(12.5)	(39.2)	47.0	外：口：タタキ→ロクロナデ 胴：平行タタキ→ケズリ 内：口：ロクロナデ 胴：無文当て具痕→ナデ 平底	32-3	540 541

第 32 図 SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (3)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
32	須恵器 甕	カマド下22層・カマド天井崩・5層・表土・検出面・SI29上層	頸部～胴上部				残存高 25.9	頸部径(推定) 41.0 外: 櫛描波状文(櫛歯数7) 2段～ロクロナデ 胴部擬格子タタキ 内: 無文当て具痕 ※No.177(SI29)と接合	32-4	546
33	須恵器 甕	カマド下22層	胴部片					外: 擬格子タタキ 内: 同心円文当て具痕→カキメ	33-2	552
34	須恵器 甕	カマド下22層	胴部破片				残存高 15.3	外: 擬格子タタキ 内: 無文当て具痕→ナデ	33-1	545
35	土錘	床	完形					長さ: 10.5 最大幅: 3.9 孔径: 1.3 重量 153.6 g 指頭圧痕	32-6	525
36	土製品 支脚	カマド	一部欠損					高: 19.8 径(幅)先端: 4.5 下部最大: 10.0	32-7	538

第33図 SI24b 竪穴建物跡 出土遺物(4)



NO.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
1	丸瓦	I	SI24a カマド 右袖	1/4	残長：13.5cm 残幅：13.0cm 重量：0.5kg 凸面：縄目目→ロクロナデ 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	5Y7/1 灰白		K17
2	丸瓦	I	SI24a カマド 左袖	3/4	残長：20.2cm 残幅：15.9cm 凸面：縄目目→一部ナデ 凹面：粘土紐 積痕 側端・小口：ケズリ 色調：灰白色 (10YR8/1)	2.5Y8/2 灰白		K18

第 34 図 SI24a 竪穴建物跡 出土遺物

【SI25 竪穴建物跡】(第 35 ～ 39 図・図版 12)

〔位置・検出面〕6 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。床面上に炭化物、炭化材、焼土の広がりを確認したことから焼失建物と考えられる。

〔重複〕SI26 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形〕東西 3.6 m、南北 3.6 m の隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測ると N-4° -E である。

〔堆積土〕カマド部分を除いて 7 層に分けられた。1 ～ 4 層は自然堆積土である。このうち 2 層は灰白色火山灰 (To-a) からなる層で、床から 15cm ほど上に堆積している。7 層は炭化物・焼土層で、火災時の堆積とみられる。火災後、南辺から中央にかけては 5 層で埋め戻され、残りの窪みに火山灰や流入土が堆積したとみられる。

〔壁〕やや外傾して立ち上がる。高さは、最も残りの良い北壁で 36cm ある。

〔床〕中央から南西隅にかけては掘方埋土、そのほかの部分では地山を床とする箇所が不規則に混在する。北東隅に近づくほど地山床の占める割合が大きくなる傾向にある。

〔柱穴〕確認していない。

〔カマド〕北壁中央に付設される。本体部分と煙道を確認した。本体部分は建物内にあり、明黄褐色粘土で構築される。両側壁の先端に土師器甕 (20・21) が逆位で埋設されていた。これらの間にあたる位置のカマド焚口崩落土の中からも土師器甕 (16・19) が出土しており、これらはカマド側壁・天井の構築材として使われていたものが崩落したものとみられる。カマドの中央では完形に近い土師器甕 2 個体 (17・18) が出土しており、左側の甕 (17) は支脚に転用された土師器甕 (7) の上に乗っ



た状態であった。これらは、並べて横掛けにされた状態を一定程度保っているものとみられる。燃焼部内部の堆積は3層に分けられた。8層は焼土塊を多く含むカマド焚口の崩落土、9層は自然堆積土、10層は炭化物粒・焼土粒を含むカマド機能時の堆積土である。煙道からは、底部がない土師器甕(22)が底部側を建物に向け、潰れた状態で出土している。その上では煙道を構築していた明黄褐色粘土の崩落土(11層)を確認した。底部を打ち欠いた甕の外側を粘土で覆って煙道を構築していたとみられる。

〔土坑〕床面で1基確認した。K1は建物北東隅に位置し、長軸75cm、短軸57cmの楕円形で、断面は挿鉢状で深さは20cmある。埋土は自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面から土師器坏、甕、須恵器甕胴部片、砥石、カマドから土師器甕が出土した。須恵器は堆積土を含めて少ない。床面から出土した1～3はいずれもロクロ土師器で平底、内黒で1の底部が回転糸切り、2、3は底部から体下部が回転ケズリである。甕は2点出土しているが、5に被熱による明確な使用痕がみられるのに対して、6は使用痕がなく、器面の状態がよく変色もみられない。7はカマド支脚への転用品である。17と18はカマドに掛けられていた甕で、16、19～22はカマドの芯材として転用された甕である。ほかに床から人頭大の河原石が出土している。

#### 【SI26 竪穴建物跡】(第35・40図・図版13)

〔位置・検出面〕6区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕SI25・SK45と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕東西3.2m以上、南北3.4mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-4°-Eである。

〔堆積土〕カマド部分を除いて1層のみ認められる。16層はにぶい黄褐色シルトの自然堆積土である。

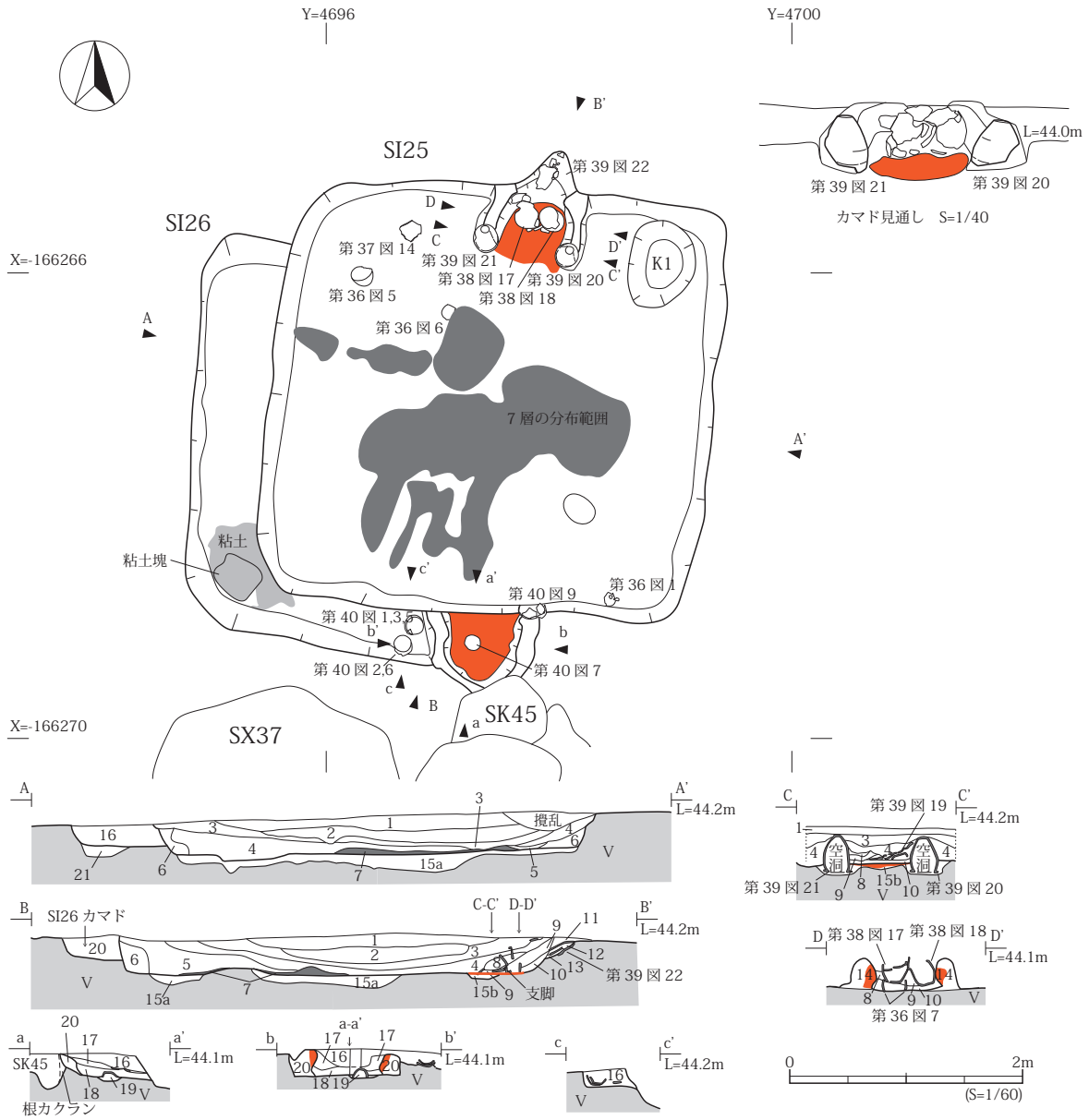
〔壁〕やや外傾して、緩やかに立ち上がる。高さは最も残りの良い西辺で18cmである。

〔床〕地山(V層)ブロックを主体とする掘方埋土を床とする。

〔カマド〕南壁南東隅に付設される。本体と燃焼部焼け面の一部を確認した。本体の先端はSI25によって壊されている。本体は南壁を掘り込んで外側にやや突出し、明黄褐色粘土で構築されている。左側壁の焚口側で逆位の土師器甕片(9)が出土しており、構築材として使用されたとみられる。燃焼部焼け面の中央には、土師器甕底部(7)が逆位で据えられており、支脚に転用されたものとみられる。燃焼部内の堆積土は3層認められる。17層はカマド崩落土、18層は炭化物粒・焼土粒を含む機能時の堆積土、19層は支脚内に充填されていた粘土質シルト土である。

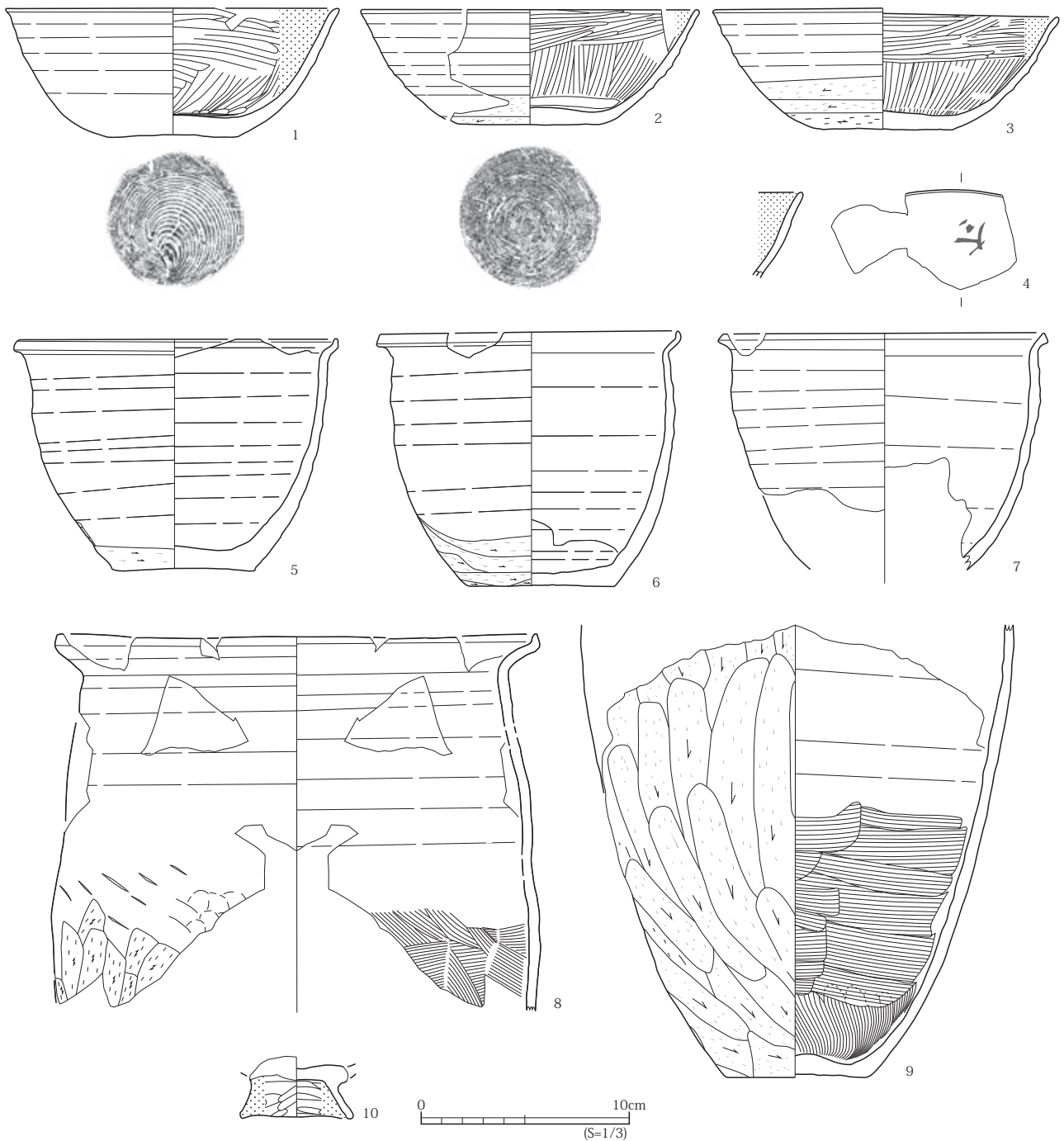
〔そのほかの施設〕南西隅で粘土のまばらな広がりとその中で一部粘土塊を確認した。粘土の範囲は長軸72cm、短軸45cm以上で、北東側はSI25に壊されている。その中央に粘土塊があり、径40cmの円形で、厚さは約10cmである。

〔出土遺物〕カマド周辺の床面から須恵器坏、カマドから土師器甕が出土した。須恵器坏は全容のわかるものが6個体出土している。底部は3と6がヘラ切り、ほかは糸切りである。坏はカマド左壁寄りの床に上から1、3、5の順で逆位、建物壁際の床に上から2、6の順で正位で置かれていた。4



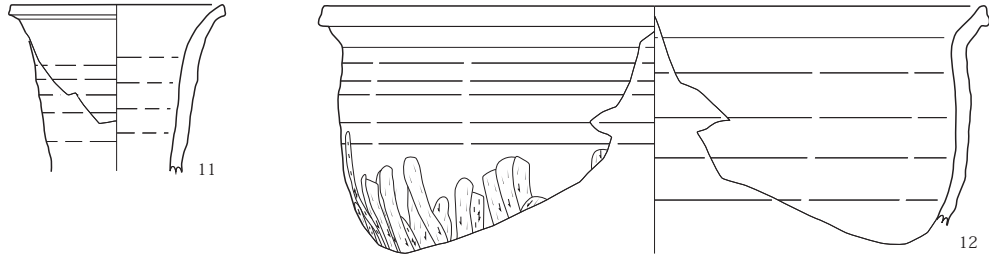
遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI25	1	黒色 (10YR1.7/1) シルト		自然堆積
	2	灰白色 (10YR8/1) シルト	灰白色火山灰	一次堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト		自然堆積
	4	暗褐色 (10YR3/3) シルト		自然堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小〜中を多く含む	人為堆積
	6	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
	7	黒色 (10YR2/2) シルト	炭化物、焼土からなる層	火災時の堆積
	8	にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘土質シルト	焼土塊を多く含む	カマド崩落土
	9	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土質シルト		自然堆積
	10	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	カマド使用時の堆積
	11	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		煙道崩落土
	12	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	カマド機能時堆積
	13	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒を少し含む	カマド機能時堆積
	14	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		カマド構築土
SI26	15a	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックが主体、にぶい黄褐色ブロック小〜中を多く含む	掘方埋土
	15b	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		掘方埋土 カマド周辺
	16	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を微量含む	自然堆積
	17	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土		カマド崩落土
	18	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	炭化物粒・焼土粒を多く含む	カマド機能時の堆積
	19	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト		支脚内充填土
	20	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		カマド構築土
	21	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大が主体、にぶい黄褐色ブロック小〜大を多く含む	掘方埋土

第35図 SI25・26 竪穴建物跡



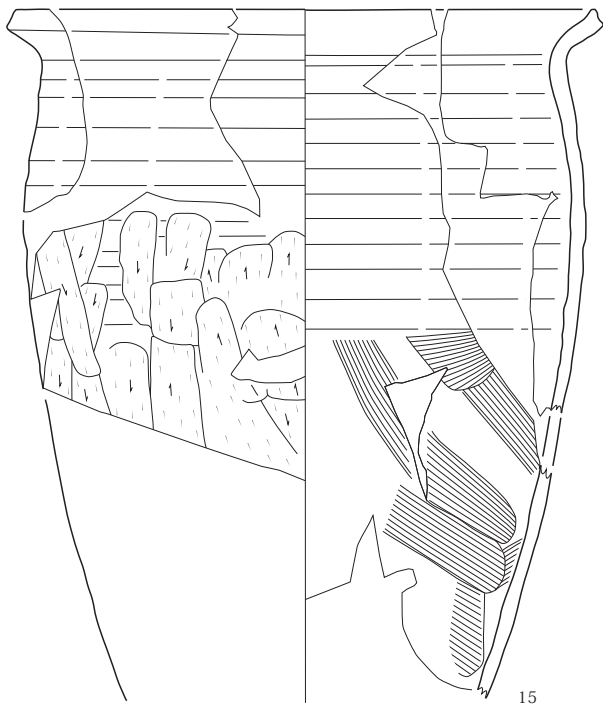
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	床	ほぼ完形	15.9		6.2	6.2	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：回転糸切り	34-1	569
2	土師器 坏	床・堆積土下層	2/3	15.9		6.7	5.5	外：ロクロナデ→体下部回転ケズリ 内：黒色処理 底部：回転ケズリ		577
3	土師器 坏	床・6層	ほぼ完形	16.3		6.2	5.8	外：ロクロナデ→体下部回転ケズリ 内：黒色処理 底部：回転ケズリ	34-2	562
4	土師器 坏	4層	破片					内：黒色処理 墨書か	34-6.73-6	586
5	土師器 甗	床	ほぼ完形	15.2		6.8	11.2	外：ロクロナデ→体下部ケズリ ふきこぼれ痕 内：ロクロナデ 上半スス附着 底部：回転糸切り右	34-3	566
6	土師器 甗	床	3/4	14.2		7.0	12.3	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 スス・コゲなし	34-4	568
7	土師器 甗	カマド	3/4	15.4			11.3-	外内：ロクロナデ		580
8	土師器 甗	カマド 4層	口縁 - 胴部	(22.9)			17.9-	外：ロクロナデ 下ケズリ・指頭圧痕 内：ロクロナデ 下ナデ		570
9	土師器 甗	北側 5層	1/4	(20.4)		6.8	21.9-	外：ケズリ 内：ロクロナデ→下部ナデ		564
10	土師器 耳皿	6層	底部付近			5.3	3.0-	外内：黒色処理	34-5	563

第 36 図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (1)

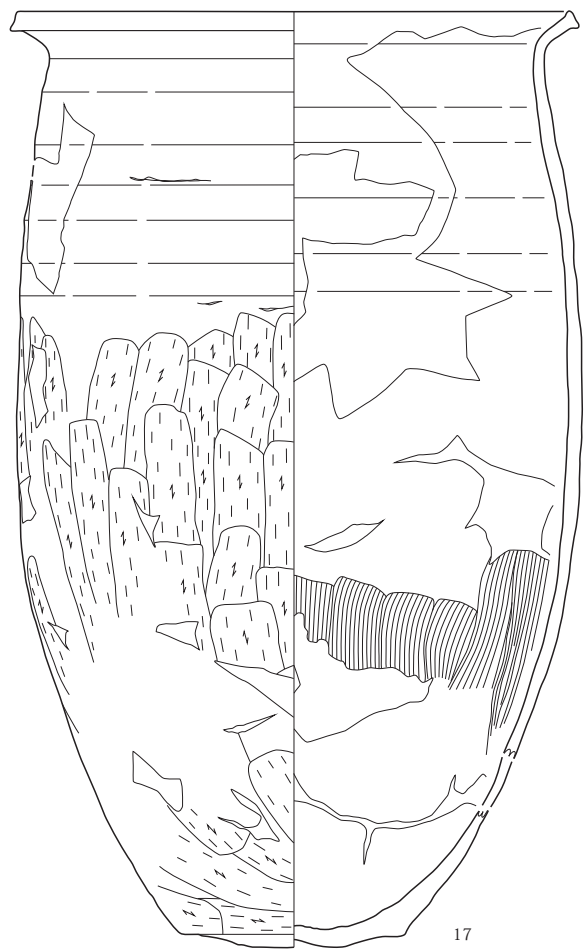


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
11	須恵器 長頸瓶	1層	口縁部～頸部	8.4			6.6～	外内：ロクロナデ（全体に自然軸）		584
12	須恵器 鉢	カマド4層	口縁部	(26.0)			9.8～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		571
13	須恵器 甕	1層	頸～胴上					外：平行タタキ 内：平行当て具痕		560
14	須恵器 甕	床	胴部破片					外：平行タタキ 内：無文当て具痕		567

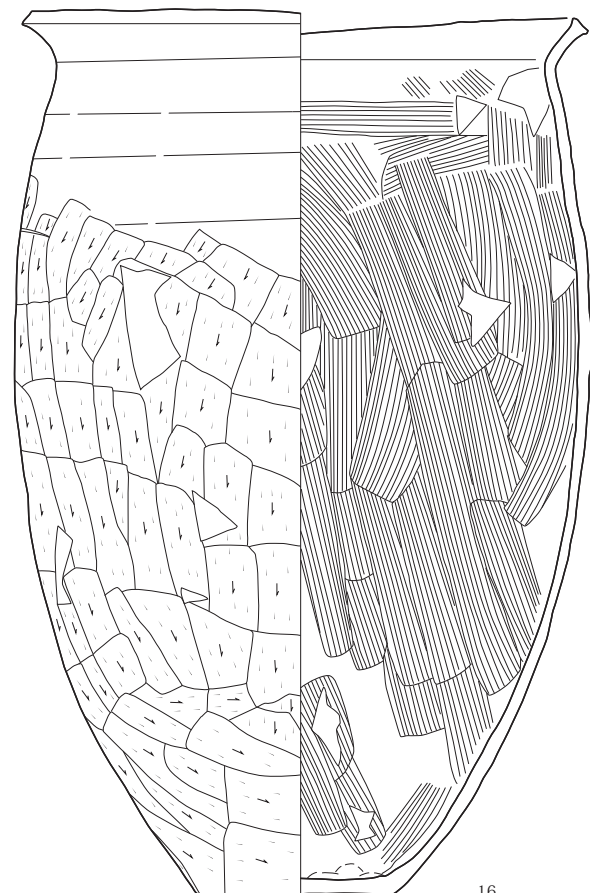
第37図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物（2）



15

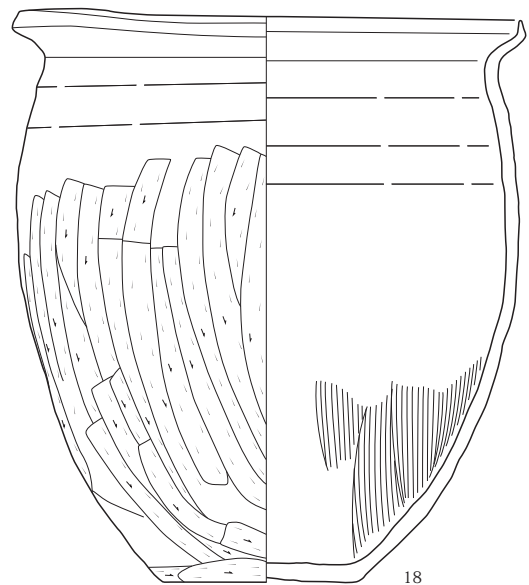


17



16

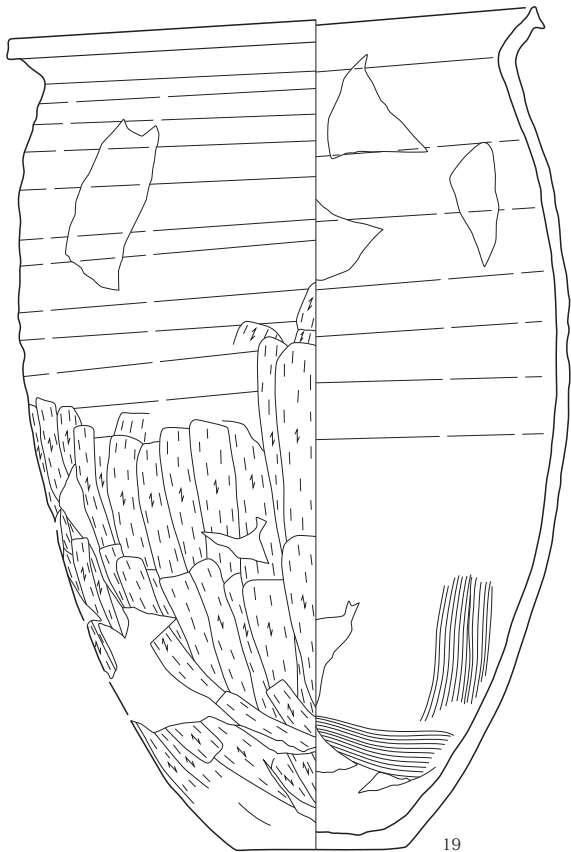
0 10cm  
(S=1/3)



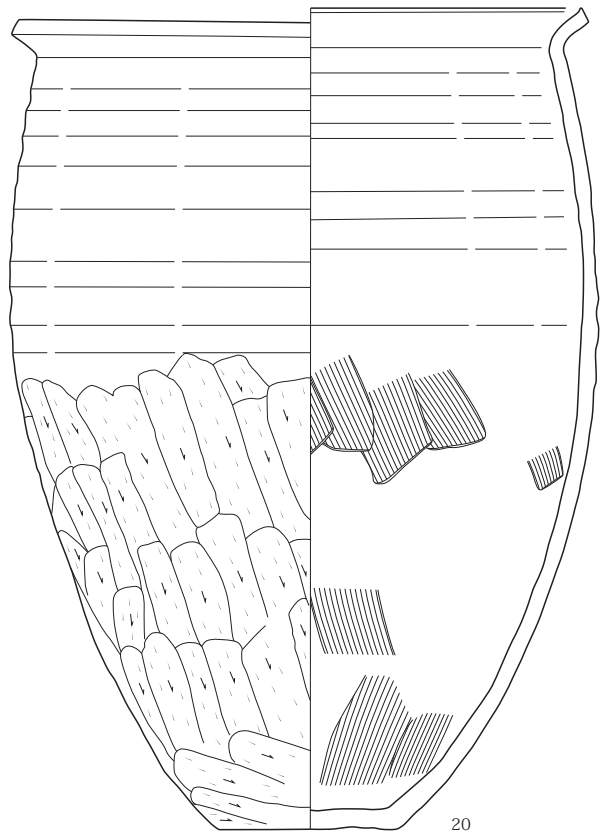
18

No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
15	土師器 甕	カマド	1/2	(23.0)			27.3~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ (ススあり)		574
16	土師器 甕	カマド	3/4	21.4		7.3	35.2	外：ロクロナデ 下ケズリ 内：ロクロナデ 下ナデ		572
17	土師器 甕	カマド	3/4	21.9		8.7	37.1~	外：ロクロナデ→3/4ヘラケズリ 全体的にスス付着 内：ロクロナデ→ナデ 底部：ヘラで形成してる	35-1	575
18	土師器 甕	カマド	ほぼ完形	19.8		7.6	22.5	外：ロクロナデ→ケズリ (体部~底部にスス付着) 内：ロクロナデ→ナデ (体部~底部に黒色に変色)	35-2	579

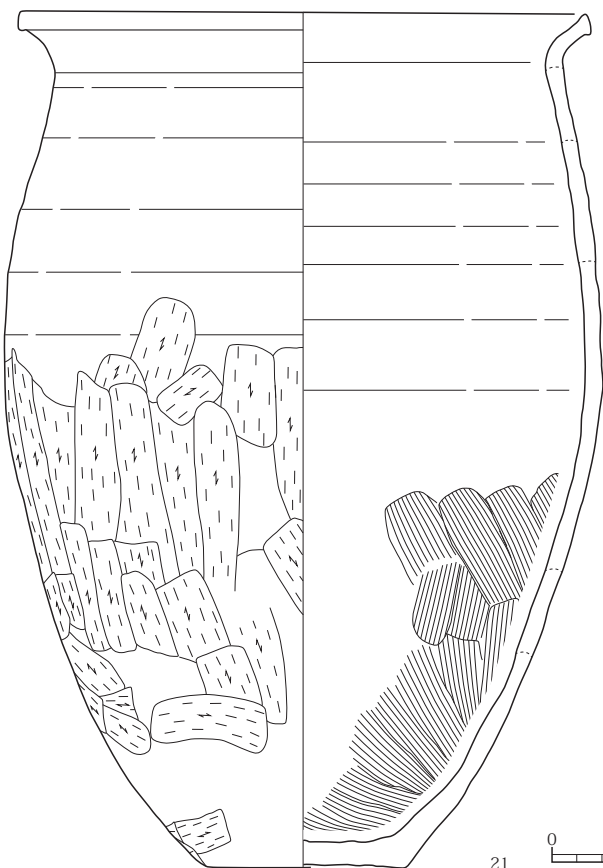
第 38 図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (3)



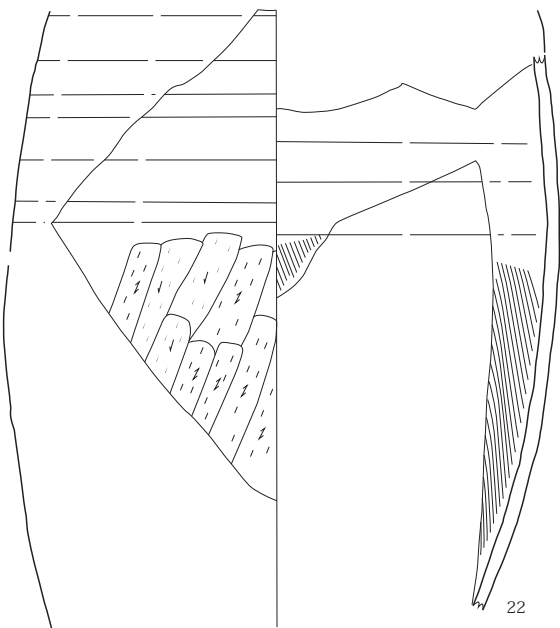
19



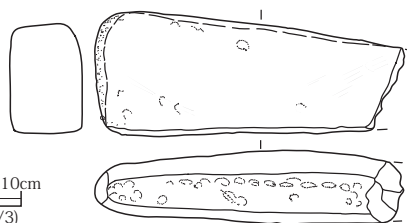
20



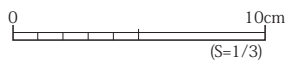
21



22

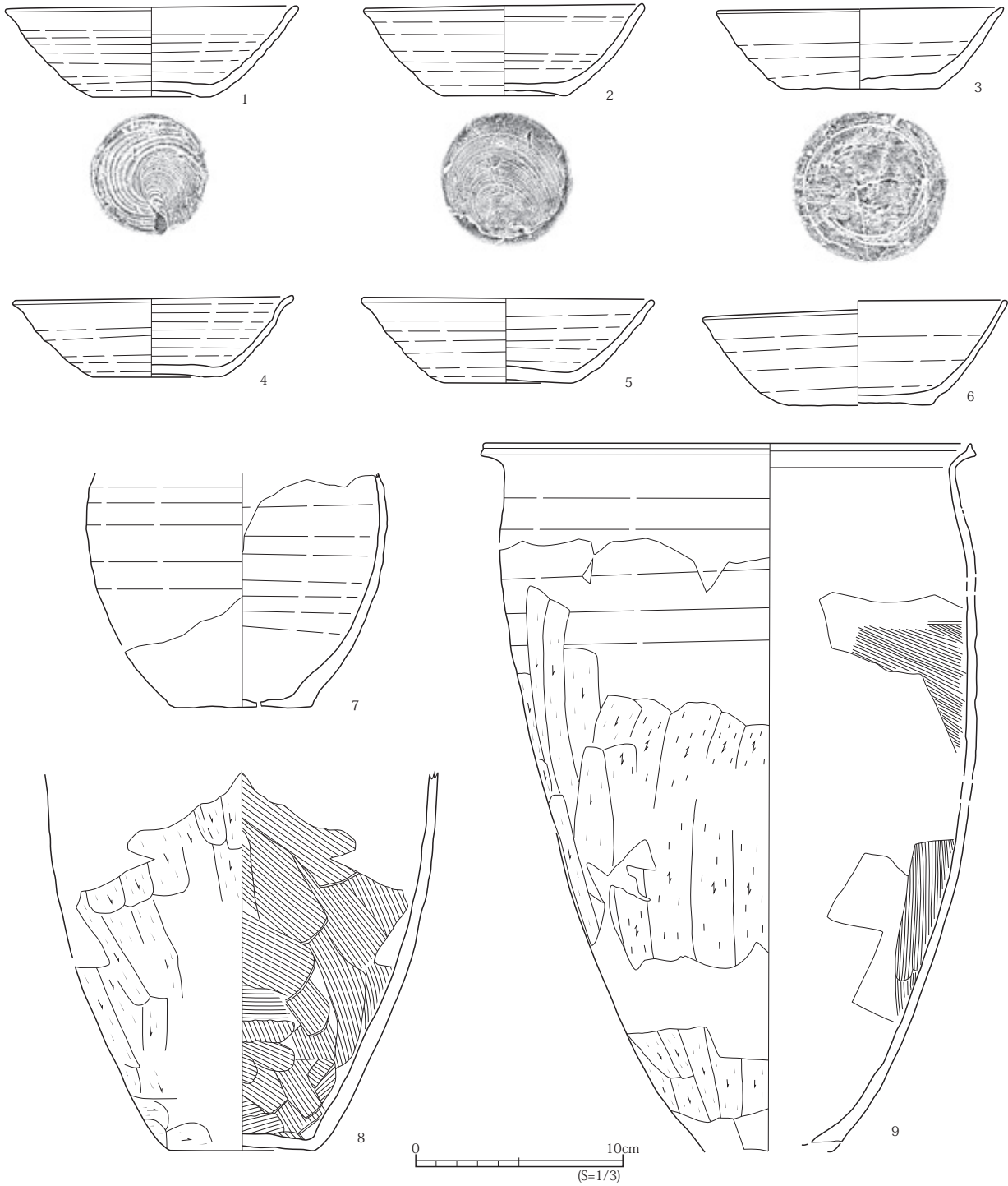


23



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
19	土師器 甕	カマド 4 層	ほぼ完形	20.9		6.7	33.4	外：ロクロナデ→下半ケズリ 内：ロクロナデ→下部ナデ	35-3	581
20	土師器 甕	カマド右袖	ほぼ完形	22.3		7.1	32.6	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		582
21	土師器 甕	カマド左袖	ほぼ完形	22.4		7.8	33.8	外：ロクロナデ→下半ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	35-4	583
22	土師器 甕	煙道	破片					外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		578
23	砥石	床	一部欠					砥石未成品？前面敲打、一部研磨 砂岩 長：121 幅：49 重さ：283.0g	70-3	587

第 39 図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物 (4)



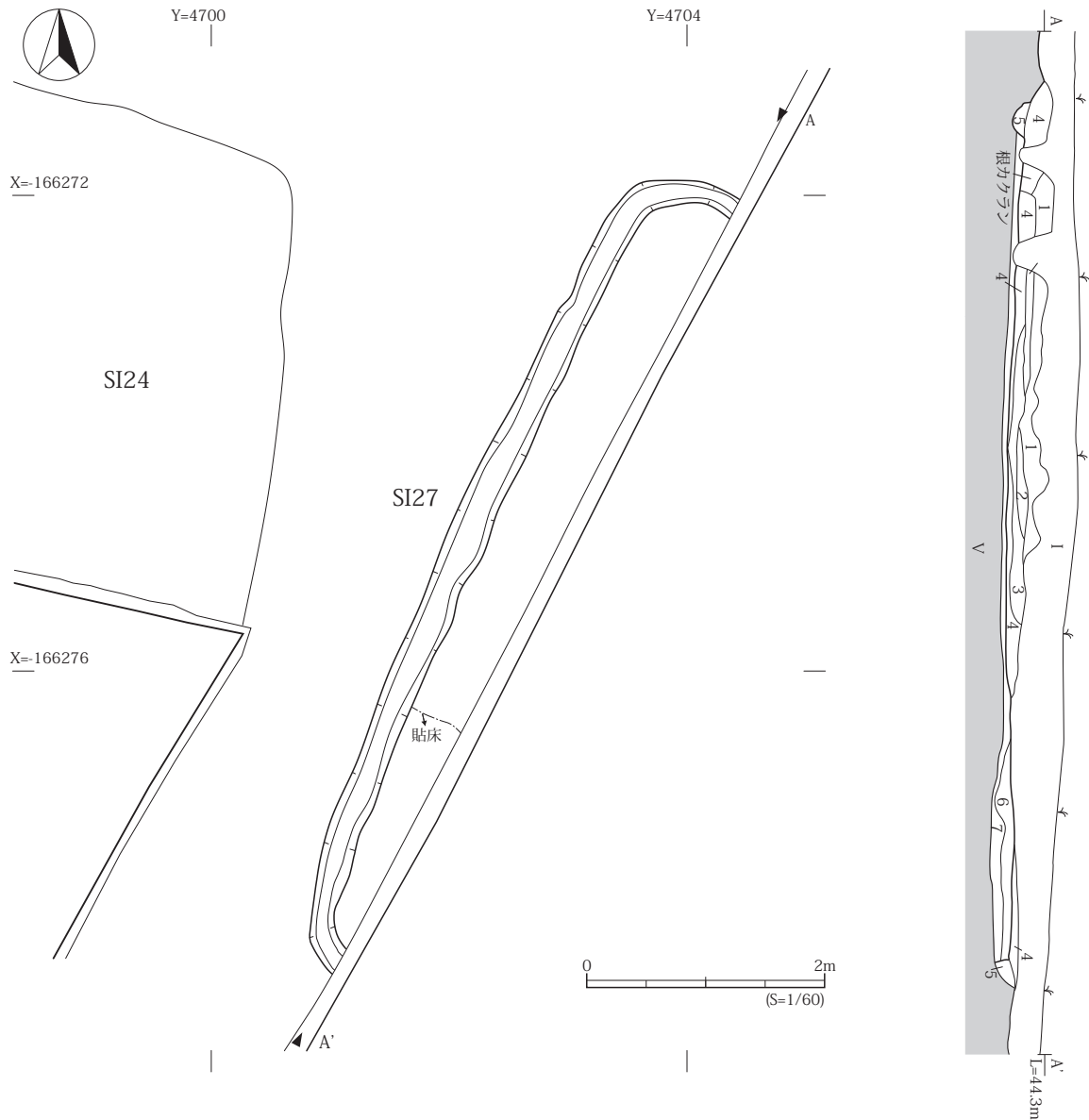
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	床	完形	13.9		5.6	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		591
2	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.5		6.1	4.5	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り		594
3	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.8		7.3	4.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		592
4	須恵器 坏	カマド2層直上	3/4	13.4		6.1	4.0	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 底切れ・灯明皿		597
5	須恵器 坏	床	ほぼ完形	14.0		6.2	4.1	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		593
6	須恵器 坏	床	ほぼ完形	14.5		6.8	5.1	外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		595
7	土師器 甕	カマド支脚	底部			6.6	11.3-	外：ロクロナデ 体部ケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り		599
8	土師器 甕	カマド崩落土	底部付近			7.0	18.2-	外：ケズリ 内：ナデ		600
9	土師器 甕	カマド左袖	2/3	(23.4)				外：ロクロナデ→ケズリ 内：ナデ 摩滅しているところあり		598

第40図 SI26 竪穴建物跡 出土遺物

はカマド機能時堆積土の18層直上から出土している。底部が裂けているが、内面上部に燈明として用いた際に付いたとみられる痕跡がある。7は燃焼部から逆位で出土した甕で支脚転用品である。9はカマド本体の芯材に用いられた甕で左前壁から逆位でSI25側の胴部を欠損した状態で出土した。

【SI27 竪穴建物跡】(第41図・図版13)

〔位置・検出面〕6区中央東辺の丘陵平坦面に位置し、V層で検出した。建物西辺が調査区内にかかり、他の大部分は調査区外にある。



層	土色・土性	特徴	性格
1	黒色 (10YR2/1) シルト		自然堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト	灰白色火山灰	二次堆積
3	黒褐色 (10YR3/1) シルト	褐灰色 (10YR4/1) 土を多く、褐色 (10YR4/6) 土を少し含む	自然堆積
4	褐色 (10YR4/4) シルト	暗褐色 (10YR3/3) 土、にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土を少し含む	自然堆積
5	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	焼土粒を少し、にぶい黄褐色 (10YR6/4) ブロック中を少し含む	壁周溝自然堆積
6	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト		貼床
7	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	Ⅲ層・V層ブロックからなる	掘方埋土

第41図 SI27 竪穴建物跡



〔重複〕 なし。

〔規模・平面形〕 東西 0.8 m以上、南北 7.2 mの隅丸方形とみられる。

〔方向〕 西辺で測ると N-25° -E である。

〔堆積土〕 5層に分けられた。1～5層は自然堆積層である。そのうち2層は灰白色火山灰 (To-a) の二次堆積層である。2層は床から 10cmほど上にレンズ状に堆積しており、灰白色火山灰の降下時には建物跡が窪んだ状態であった可能性がある。

〔壁〕 高さは、最も残りの良い南辺の調査区壁付近で 12cmある。

〔床〕 北側 3分の2 が掘方埋土を床とし、南側 3分の1 が掘方埋土の上に粘土で貼床としている。

〔周溝〕 幅は 15～20cm、深さは 15cm前後で、断面 U 字形である。堆積土は明黄褐色粘土質シルトの自然堆積層である。

〔出土遺物〕 堆積土、掘方埋土から土師器・須恵器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

#### 【SI29 竪穴建物跡】 (第 42～55 図・図版 13・14)

〔位置・検出面〕 6区南東隅付近の丘陵頂部～南東緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。南東隅に付設されるカマドの大部分は調査区外にある。

〔重複〕 SI21、SD54 と重複し、SI21 よりも古い。SD54 との新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕 東西 3.9 m、南北 5.7 mの隅丸長方形である。

〔方向〕 西辺で測ると N-7° -E である。

〔堆積土〕 9層に分けられた。いずれも自然堆積層で、このうち1・2層は、建物が廃絶した後の窪地に堆積した暗褐色シルトで、その範囲は建物輪郭外側の東西 5 m以上、南北 7 m以上の楕円形の範囲に広がる。8・9層は建物の壁およびカマド本体部分の崩落土である。

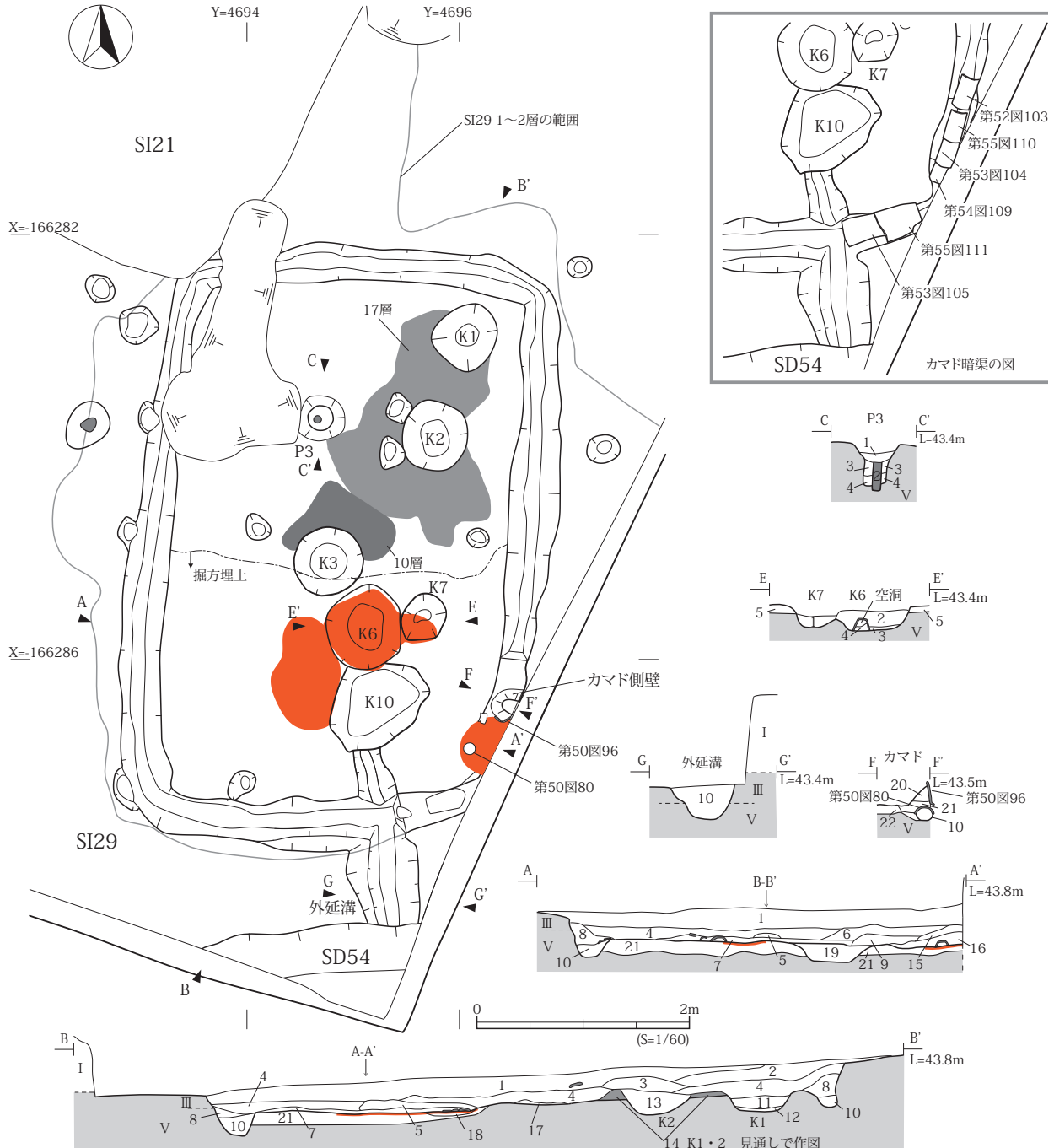
〔壁〕 垂直気味に立ち上がる。高さは最も残りの良い北辺で 26cmである。

〔床〕 北半が地山、南半がⅢ・Ⅴ層からなる土を主体とする掘方埋土を床とする。建物中央付近には、床機能時の堆積とみられる炭化物・焼土粒を含む暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土質シルト (17層) が広がる。

〔柱穴〕 支柱穴は確認していない。

〔カマド〕 南東隅付近に付設される。本体の大部分と煙道は調査区外にあり、本体左側壁の一部と燃焼部焼け面のみを検出した。側壁は、にぶい黄褐色粘土を主体として構築されている。左壁先端にあたる位置からは須恵器鉢口縁部破片 (第 50 図- 96) が逆位で出土しており、カマド構築に使われた可能性がある。燃焼部上で、カマド機能時の堆積とみられる黒褐色シルト (16層) とその上部の炭化物層 (15層) を確認している。

〔周溝〕 検出した壁の直下を全周する。南辺中央東寄り以南に延びる外延溝と接続する。幅は 30～40cm で、断面は逆台形である。溝底面は、北から南の外延溝に向かって緩やかに低く傾斜しており、その標高は北辺で 43.23 m、西辺中央で 43.05 m、周溝と外延溝の接続部 42.95 m、南北の比高は約 30cmある。カマド下とその周辺では瓦と土器を用いた暗渠を確認した。凸面を上にした丸瓦・平瓦 (第 52～55 図- 101～111) を連結して設置し、瓦同士のつなぎ目上部を土師器甕片により覆っ



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI29	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物小、焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土塊小を少し、にぶい黄褐色粘土ブロック小～大を多く含む	自然堆積
	3	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物小を少し、焼土粒を微量含む	自然堆積
	4	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	炭化物小を微量、にぶい黄褐色粘土ブロック小を少し含む	自然堆積
	5	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	黒色土を多く含む粘土塊	自然堆積
	6	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、明黄褐色ブロック小を多く含む	自然堆積 カマド崩落土由来
	7	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト		自然堆積
	8	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック中を少し含む	壁崩落土を含む
	9	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	カマド崩落土を含む
	10	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を多く含む	自然堆積 壁周溝・外延溝堆積土
	11	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	K1 自然堆積
	12	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土	地山 (V層) 粒を少し含む	K1 自然堆積
	13	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物粒を少し含む	K2 自然堆積
	14	黄褐色 (10YR7/8) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックからなる、固く締まる	人為堆積
	15	黒色 (10YR2/1)	炭化物層	自然堆積
	16	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	カマド機能時堆積
	17	暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土質シルト	炭化物小を少し、焼土粒を微量含む	床機能時の堆積
	18	K6-2層と同じ		K6
	19	暗褐色 (10YR3/4) シルト	Ⅲ層ブロック主体で地山 (V層) ブロック小～大を少し含む	K10 人為堆積
	20	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土	被熱	カマド構築材
	21	暗褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト		カマド構築材
	22	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト	Ⅲ層と地山 (V層) ブロックからなる	掘方埋土

第 42 図 SI29 竪穴建物跡

遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
K7	1	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	炭化物粒を少し、焼土粒を多く、にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質シルト粒を少し含む	人為堆積
K6	2	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土ブロック中を多く、地山 (V層) ブロック大、にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂質シルトブロック小を少し含む	人為堆積
	3	にぶい黄橙色 (10YR5/4) 粘土	地山 (V層) ブロック小を多く含む	人為堆積
	4	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土		人為堆積 土師器裏内土
	5	SI29-22層と同じ		掘方埋土
	P3 (ロクロピットか)	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山 (V層) 粒を微量含む
2	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト			軸木痕跡か
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒を微量、地山 (V層) 粒を少し含む		掘方埋土
4	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土	地山 (V層) ブロック小を少し含む		掘方埋土

て暗渠の天井部としている。その上部を建物床面の高さまで暗褐色粘土質シルトで埋め戻している。堆積土は、暗渠内も含めて自然堆積土である。

〔外延溝〕長さ 0.9 m、幅 50～70cmである。深さは 0.3 mで、断面は底面に丸みのある逆台形である。底面標高は 42.92 mである。堆積土は自然堆積層である。

〔建物内土坑〕6基確認した。このうち4基 (K3、K6、K7、K10) は床面上で、2基 (K1、K2) は黄橙色粘土質シルト (14層) 上で確認した。K6とK10は重複し、K6が新しい。

K3は建物中央に位置し、平面形が直径 60cmの円形で、深さは 10cm以下である。断面は浅いレンズ状である。堆積土はⅢ層とⅤ層からなるにぶい黄橙色シルトの人為堆積層である。土坑北側では輪郭の外側に沿うように 10層が広がる。K6は建物中央南寄りに位置し、平面形は直径 80cmの円形で、深さは 25cmである。断面は箱形である。堆積土は2層認められ、焼土ブロック、地山ブロックを含む土の人為堆積層である。K7はK6の東隣に位置し、平面形は直径 40cmの円形で、深さは 20cmである。断面形は逆台形である。堆積土は炭化物粒や焼土粒などを含む暗褐色シルトである。

K10は建物南側に位置し、平面形が直径 80cmの円形で、深さは 20cmである。断面は逆台形である。堆積土はⅢ層とⅤ層からなるにぶい黄橙色シルトの人為堆積層である。

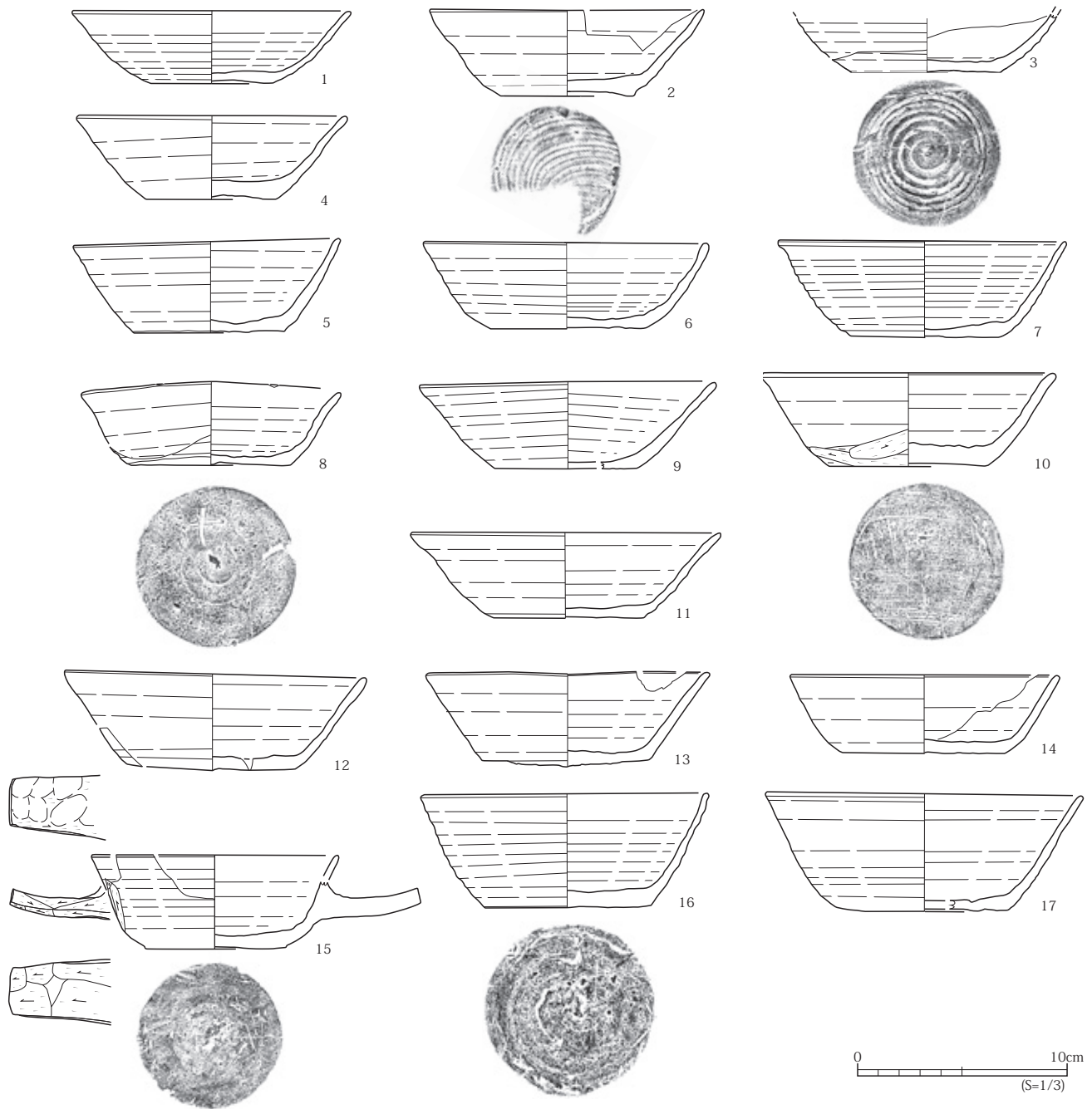
K1は北東隅、K2中央北東よりに位置し、いずれも建物北東部に分布する人為堆積土 (地山ブロック (Ⅴ層) からなり、固く締まる黄橙色 (10YR7/8) 粘土質シルト) 上から掘り込まれている。いずれも平面形は直径 60～70cmほどの円形で、深さは 20cmである。断面は擂鉢状である。堆積土は自然堆積層である。

〔そのほかの施設〕ロクロピットの可能性があるピット 1基、焼け面 2カ所を検出した。

P3は建物中央北よりに位置する。平面形は、長軸 45cmの楕円形で、断面形は箱型を呈する。中央に径 10cm長さ 30cmの棒状の痕跡があり、掘方内は黄褐色シルトで埋め戻されている。建物内にほかに組み合う柱穴がなく、棒状の痕跡があることからロクロピットと判断した。

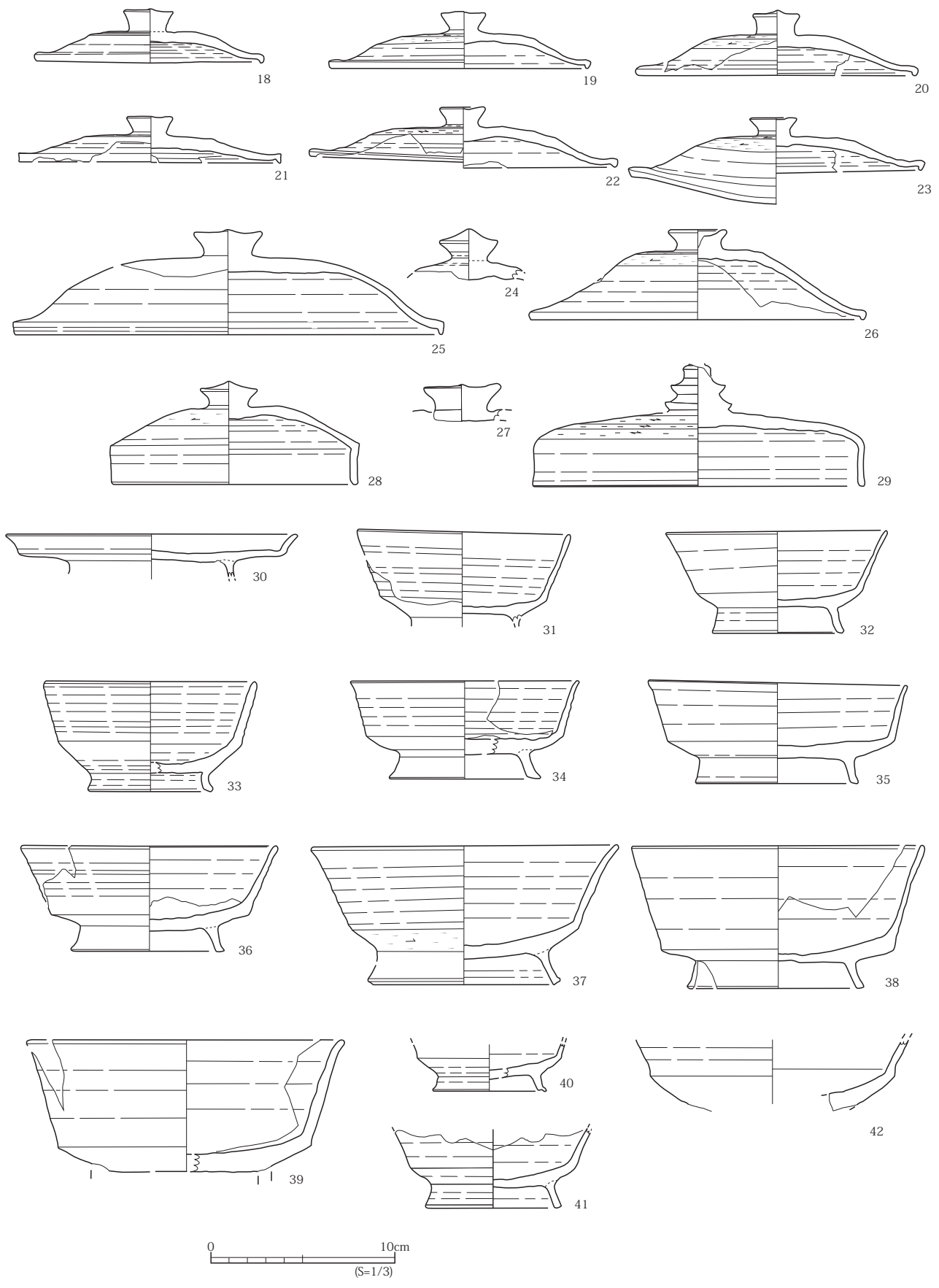
K6・7・10上の東西 150cm、南北 70cmの範囲で焼け面を確認した。

〔出土遺物〕1～7層から須恵器は坏、蓋、高台坏、盤、高坏、鉢、壺、長頸瓶、甕、土師器は坏、甕など大量の土器が出土した。また、おもにカマド周りの壁周溝から周溝蓋に転用された丸瓦と平瓦が出土した。須恵器坏は底部切離し・調整が糸切りのものが2点出土したほかは、ヘラ切りか再調整である。80はカマド燃焼部から倒位で出土した須恵器坏である。この坏は小形、厚底底部で一般的な器形ではない。1～7層から出土した土器は接合関係をもつものが多く、完形に近くなるものが多い。

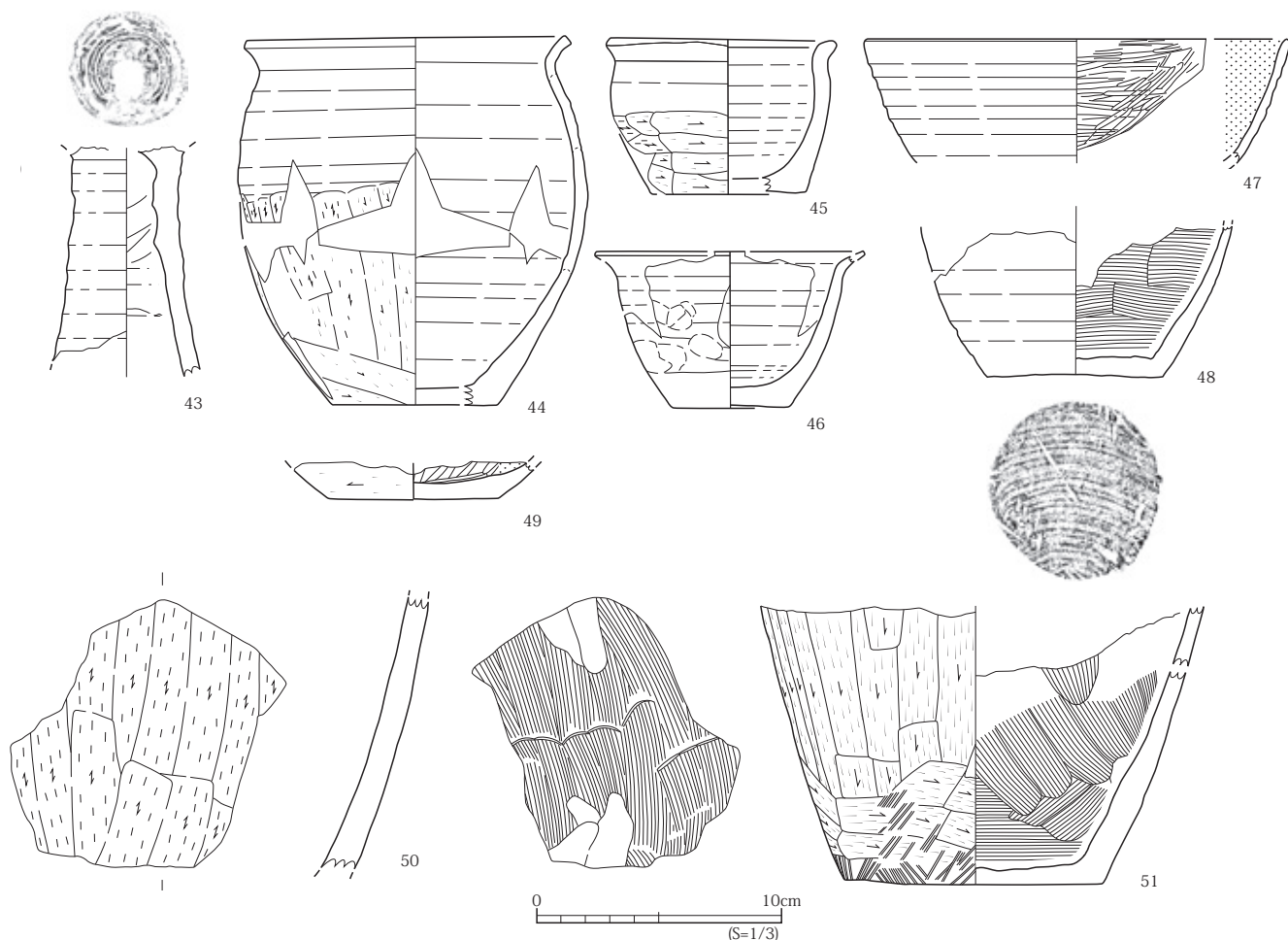


No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	検出面	1/2	(13.2)		(5.9)	3.5	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	36-1	204
2	須恵器 坏	上層(1・2層)	1/3	(13.0)		(6.4)	4.1	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		221
3	須恵器 坏	4層	底完存			7.0	2.7~	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		316
4	須恵器 坏	下層(3・4・7層)	完形	12.7		6.2	4.0	外内：ロクロナデ 火ダスキ 底部：ヘラ切り→ナデ	36-2	216
5	須恵器 坏	上層(1・2層)	2/3	(12.6)		7.3	4.5	外：ロクロナデ 火ダスキ 内：ロクロナデ 釉あり 底部：ヘラ切り	36-3	117
6	須恵器 坏	上層(1・2層)	3/4	(13.5)		7.2	4.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ	36-4	116
7	須恵器 坏	上層(1・2層)	2/3	(13.6)		7.0	4.6	外内：ロクロナデ 火ダスキ十字 底部：ヘラ切り 胎土：やや粗	36-5	119
8	須恵器 坏	1層	2/3	(12.3)		7.6	4.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「十」ヘラ描き		89
9	須恵器 坏	6層	2/3	14.1		6.7	4.3	外内：ロクロナデ 火ダスキ十字 底部：ナデ 胎土：海綿骨針わずかに含む	36-6	296
10	須恵器 坏	7層	2/3	(13.8)		7.4	4.5	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ	36-7	22
11	須恵器 坏	1・2・7層	2/3	14.6		7.2	4.1	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ 胎土：やや粗		43
12	須恵器 坏	7層	2/3	(14.3)		8.1	4.8	外内：ロクロナデ 火ダスキ十字 底部：ヘラ切り		31
13	須恵器 坏	1・2層	完形	(13.4)		8.0	4.6	外内：ロクロナデ 火ダスキ 底部：ヘラ切り 底切れ ヒビ	36-9	341
14	須恵器 坏	10層	3/4	(12.7)		7.7	3.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→一部ナデ	36-8	212
15	須恵器 坏	下層(3・4・7層)	2/3	(11.7)		6.6	4.5	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 把手：ケズリ 指おさえ 底部：手持ちケズリ 外内：自然釉 双耳坏	36-10	215
16	須恵器 坏	7層	口一部欠	(13.5)		7.9	5.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「十」ヘラ描き 外：自然釉		4
17	須恵器 坏	7層	口一部欠	(15.0)		8.2	5.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 赤褐色	36-11	21

第 43 図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (1)

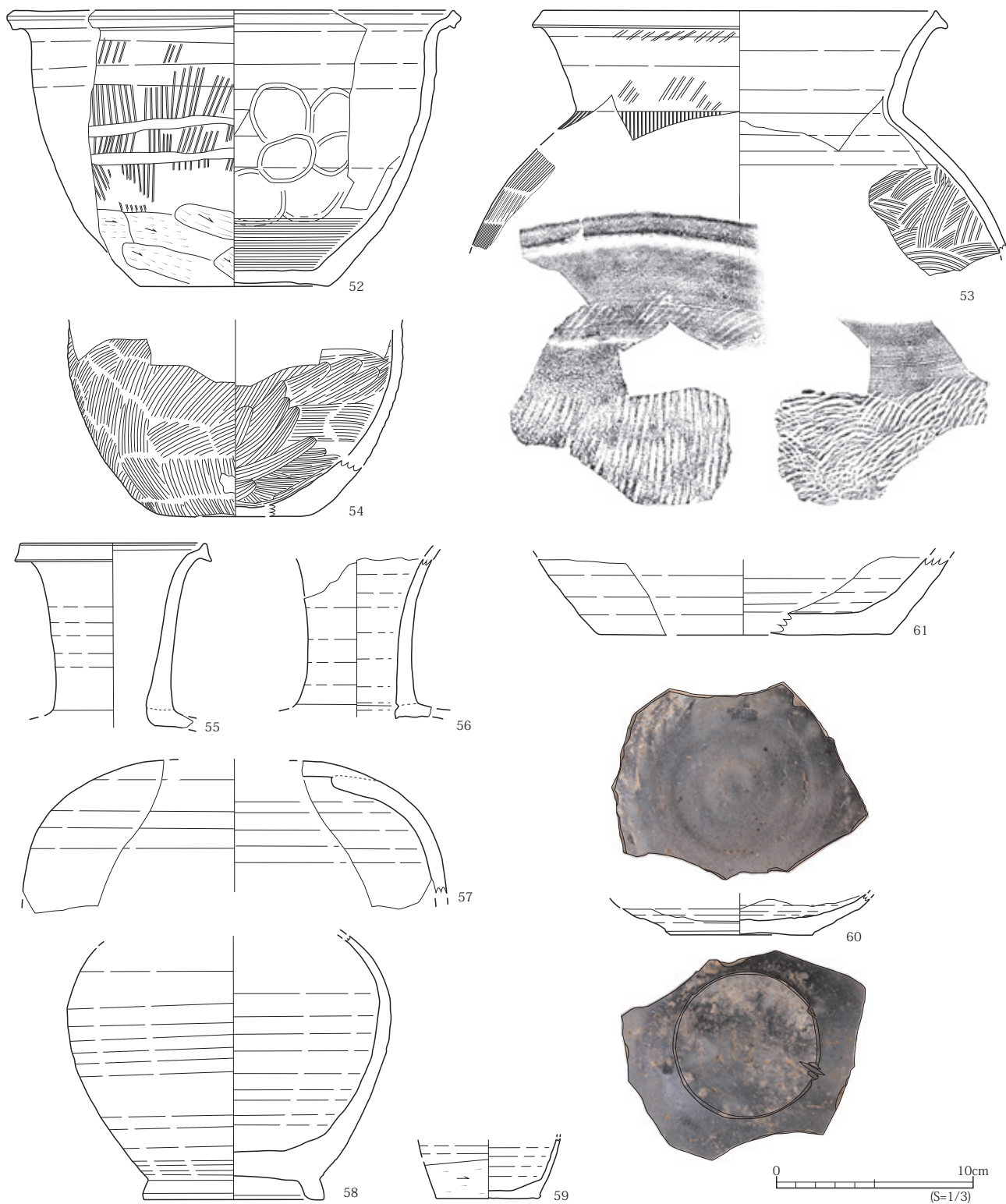


第 44 图 SI29 竖穴建物跡 出土遺物 (2)



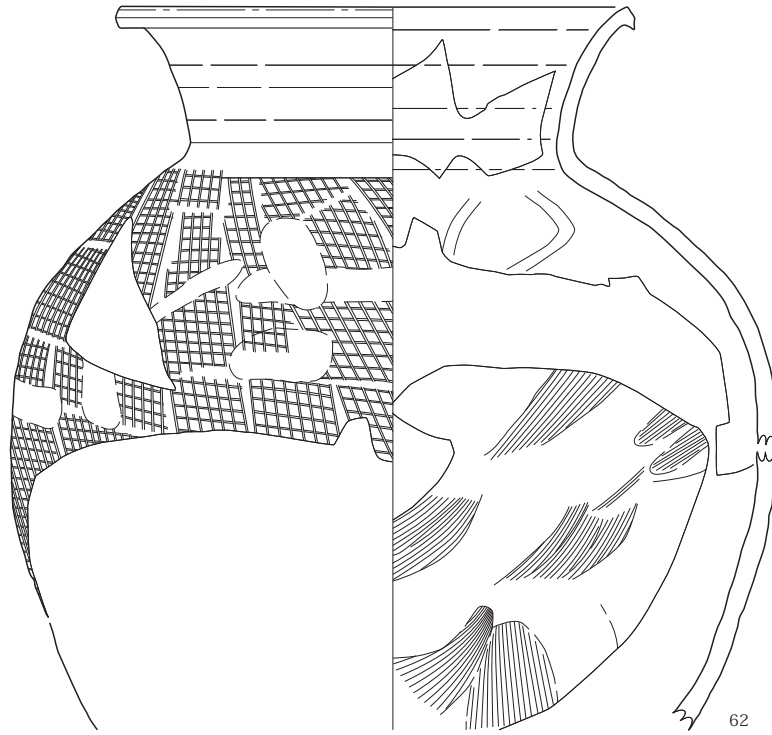
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
18	須恵器 蓋	7層	ほぼ完形	12.2			2.9	擬宝珠 外:ロクロナデ→天井回転ケズリ 内:ロクロナデ	37-1	295
19	須恵器 蓋	4層	3/4	(13.9)			3.1	ボタン 外:ロクロナデ→天井回転ケズリ 内:ロクロナデ	37-2	303
20	須恵器 蓋	4層	2/3	(15.1)			3.6	擬宝珠 外:ロクロナデ→天井回転ケズリ 内:ロクロナデ		302
21	須恵器 蓋	4層	2/3	14.1			2.5	ボタン 外:ロクロナデ→天井回転ケズリ 内:ロクロナデ	37-3	304
22	須恵器 蓋	10層	3/4	16.5			3.3	ボタン 外:ロクロナデ→天井回転ケズリ 内:ロクロナデ	37-4	209
23	須恵器 蓋	7層	3/4	15.7			4.6	ボタン 外内:ロクロナデ→天井付近回転ケズリ	37-5	294
24	須恵器 蓋	5層	つまみ				2.8~	宝珠		301
25	須恵器 蓋	上層 (1・2層)	1/2	(23.1)			5.7	擬宝珠 外:ロクロナデ→回転ケズリ→ナデ 内:ロクロナデ	37-6	125
26	須恵器 蓋	7層	3/4	18.0			4.9	ボタン 外:ロクロナデ→天井回転ケズリ 内:ロクロナデ	37-7	18
27	須恵器 蓋	7層	つまみ					擬宝珠		213
28	須恵器 蓋	2層	2/3	(13.2)			5.6	擬宝珠 外:ロクロナデ→回転ケズリ→ナデ 内:ロクロナデ	37-9	69
29	須恵器 蓋	1・2層	1/4	(17.8)			6.7~	ツマミ三重 外:ロクロナデ→ケズリ 上面に自然釉 内:ロクロナデ	37-8	274
30	須恵器 盤	1層・4層・上層	1/2	(15.6)			2.3~	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ	37-10	42
31	須恵器 高台坏	7層	1/2	(11.5)	(6.2)		5.8~	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ 外内全面に自然釉かかる	37-12	44
32	須恵器 高台坏	7層	口一部欠	(11.9)	7.0	5.6	外内:ロクロナデ 底部:ナデ 内面~口縁外面に自然釉かかる	37-11	11	
33	須恵器 高台坏	1層	2/3	11.3	(6.6)	6.0	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ	37-14	88	
34	須恵器 高台坏	4層	1/3	(12.2)	8.2	5.3	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ		308	
35	須恵器 高台坏	7層	2/3	(13.9)	(8.7)	5.6	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ 赤褐色	37-13	211	
36	須恵器 高台坏	7層	1/2	(13.2)	8.2	5.8	外内:ロクロナデ 底部:高台貼り付け→ロクロナデ	37-15	291	
37	須恵器 高台坏	7層	2/3	16.5	9.8	7.6	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ	38-1	293	
38	須恵器 高台坏	上層 (1・2層)	2/3	15.6	9.5	7.8	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ロクロナデ	38-2	112	
39	須恵器 高台坏	1層	2/3 高台欠	17.0			7.2~	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ	38-3	87
40	須恵器 高台坏	1層	底部 1/2		(6.1)			外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ		94
41	須恵器 高台坏	検出面	底 1/2		(7.0)	4.3~	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ		241	
42	須恵器 高台坏	1層	破片					外内:ロクロナデ		86
43	須恵器 高坏	1・2層	脚部片				9.4~	外内:ロクロナデ 絞り		258
44	土師器 甕	上層・下層	2/3	12.9	6.8	15.1	外:ロクロナデ →下部ケズリ 被熱痕 内:ロクロナデ 噴水線スス	38-5	300	
45	土師器 甕	7層	1/2	(9.1)	(6.3)	6.5	外:ロクロナデ→下部ケズリ 内:ロクロナデ 底部:ケズリ	38-4	292	
46	土師器 甕	下層 (3・4・7層)	1/3	(10.9)	4.7	6.4	外:ロクロナデ→指おさえ痕 内:ロクロナデ 噴水線スス 底部:ヘラ切り		234	
47	土師器 坏	上層 (1・2層)	口縁部一部	(17.1)			5.0~	外:ロクロナデ 内:黒色処理		171
48	土師器 坏	検出面	底 1/2		7.0	1.6~	外:ケズリ 内:黒色処理 底部:回転ケズリ		277	
49	土師器 甕	7層	底部片		7.1	6.2~	外:ロクロナデ→下部回転ケズリ 内:ナデ スス 底部:静止糸切り?		20	
50	土師器 甕	4層	底部付近破片					外:ケズリ 内:ナデ (ハケメ) →一部ナデ 色調:灰黄褐色		320
51	土師器 甕	7層	底部片		10.5	11.3~	外:平行タタキ→ケズリ 内:ナデ→下部回転ケズリ		337	

第45図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (3)

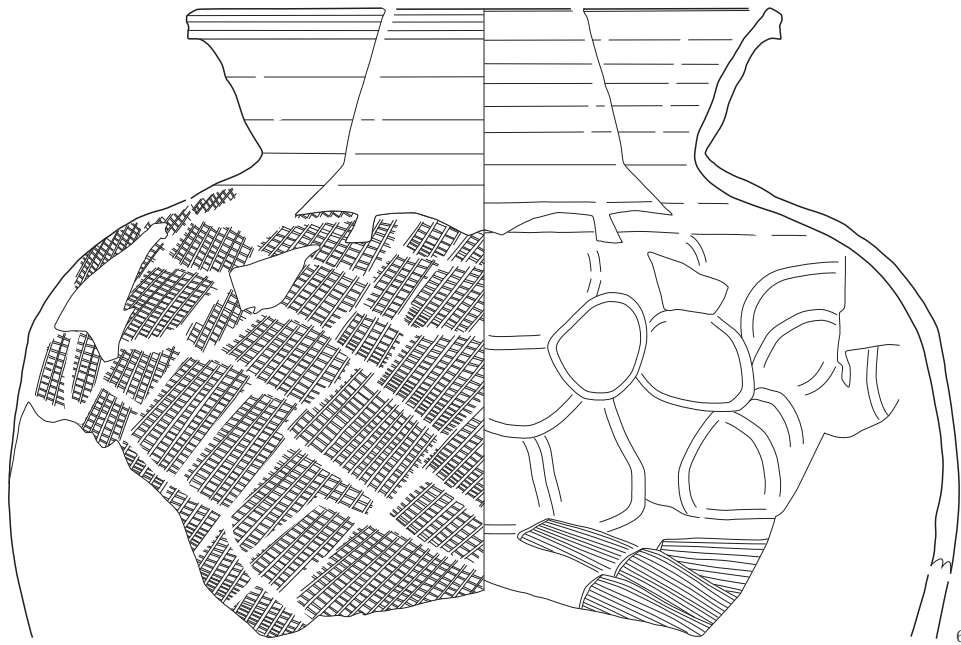


No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
52	須恵器 鉢	7層	3/4	(22.4)		9.5	14.0	外：平行タタキ→部分的にナデ→下部ケズリ 内：無文当て具→ナデ	38-6	9
53	須恵器 甕	1層	口～肩	(20.0)			13.4~	外：ロクロナデ→平行タタキ→口縁ロクロナデ 内：口縁部ロクロナデ 胴部：同心円文当て具痕	39-1	93
54	須恵器 甕	上層(1・2層)	底部片					外：平行タタキ 内：無文当て具痕→ナデ		179
55	須恵器 長頸瓶	上層(1・2層)	口縁部片	(9.3)			9.4~	外内：ロクロナデ 釉かかる		173
56	須恵器 長頸瓶	1・2層	一部				8.0~	頸部径：6.0 外内：ロクロナデ 3段		251
57	須恵器 長頸瓶	検出面	胴部口					胴部径(21.6) 外内：ロクロナデ 3段 円盤 自然釉		205
58	須恵器 長頸瓶	7層	胴～底部		16.5	9.1	13.4~	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	38-7	2
59	須恵器 壺	1層	底部付近			5.1	3.1~	外：ロクロナデ→下部回転ケズリ 内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		92
60	須恵器 坏	2層	底部			7.3	2.1~	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 外内自然釉かかる 焼台に転用	38-8	75
61	須恵器 甕	4層	底部付近		(14.9)		3.9~	外内：ロクロナデ		321

第46図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(4)



62



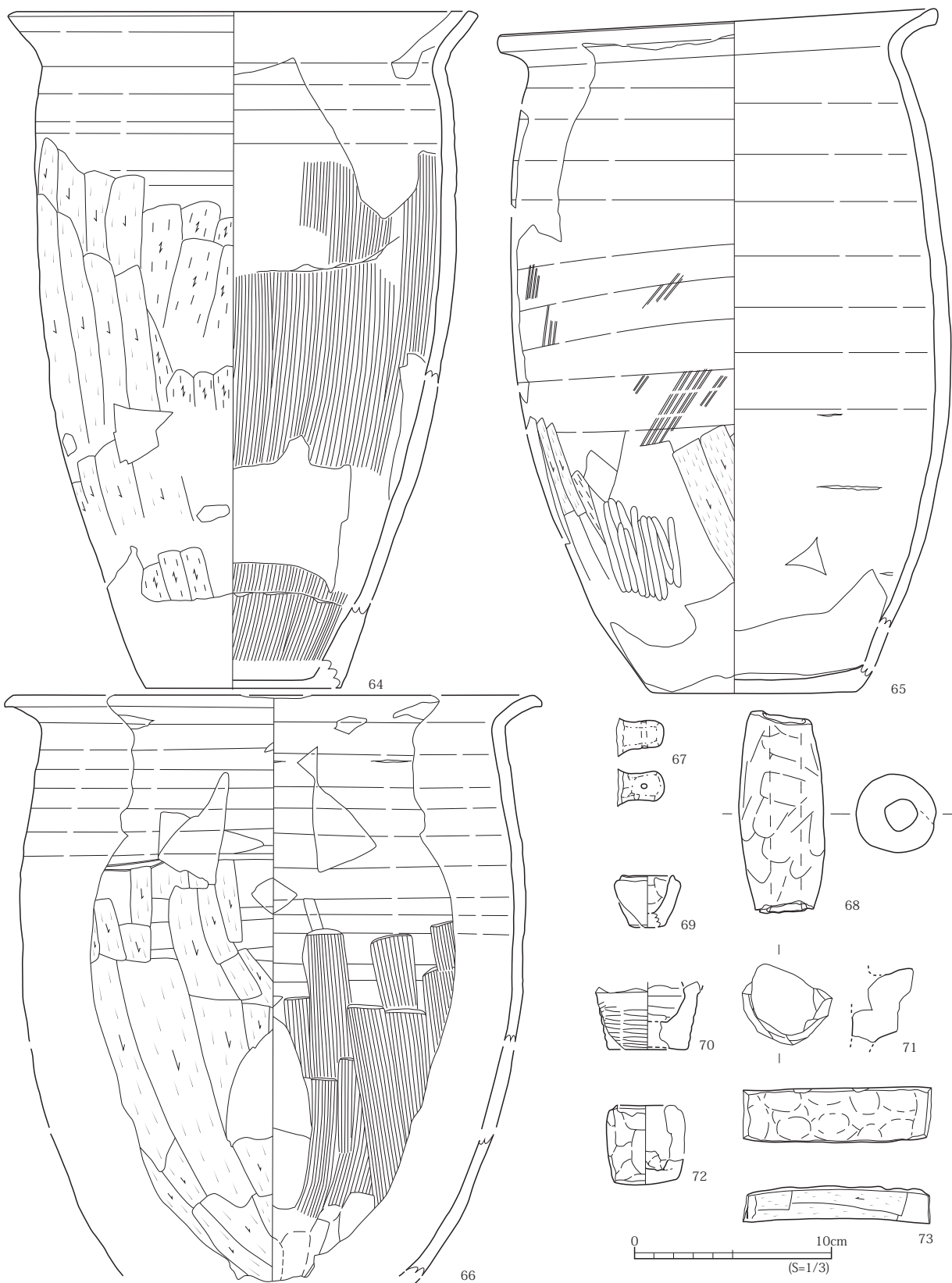
63



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
62	須恵器 甕	7層	口縁部~胴部中	20.2			28.9~	口：ロクロナデ 外：擬格子タタキ 内：無文当て具痕→ナデ	39-2	5
63	須恵器 甕	上層(1・2層)・下層(3・4層)・7層	口~胴中	(22.6)	(37.3)		25.0~	口縁(外内：ロクロナデ) 胴部(外：擬格子タタキ 内：無文当て具痕→下部のみナデ)	39-3	7

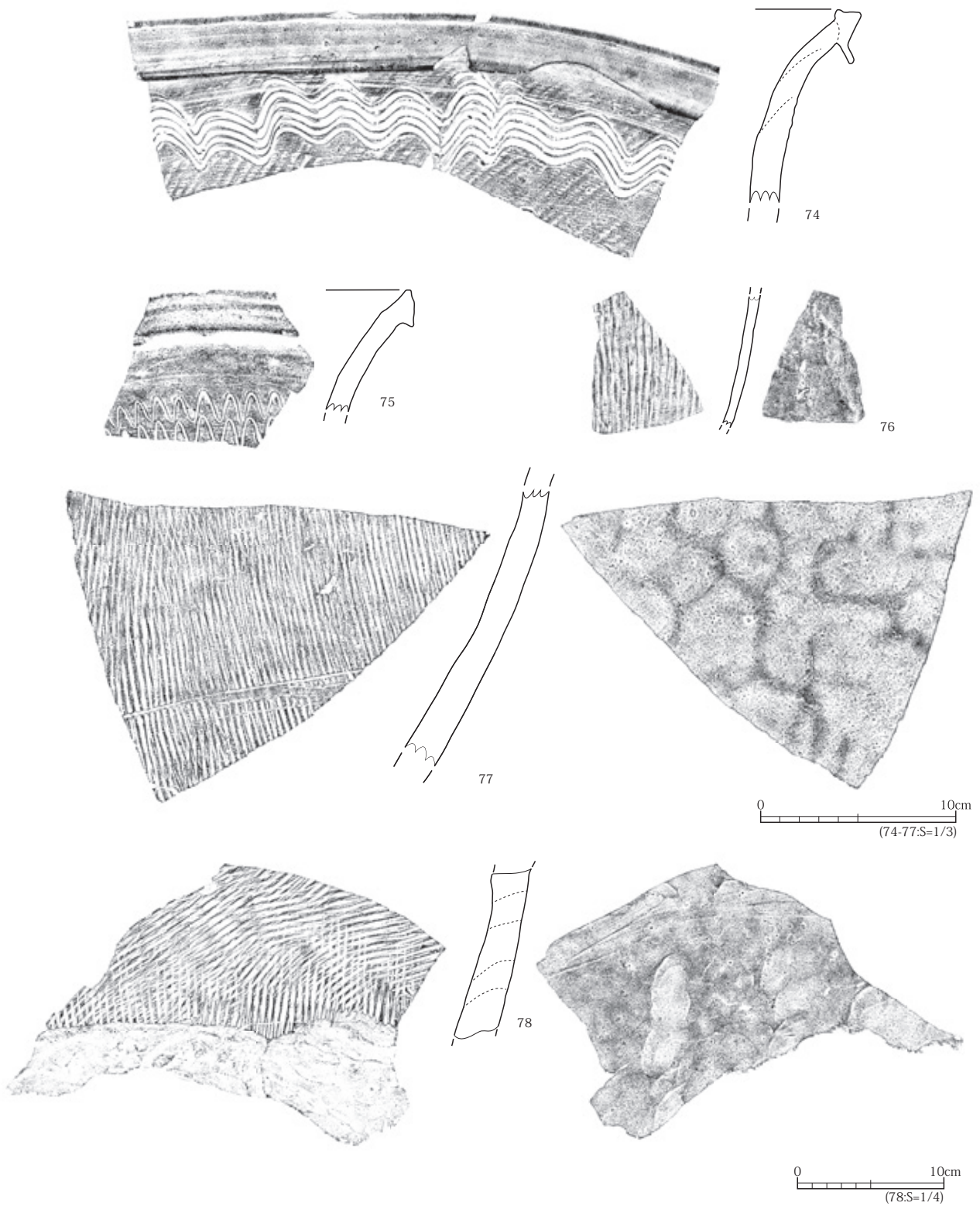
第47図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(5)





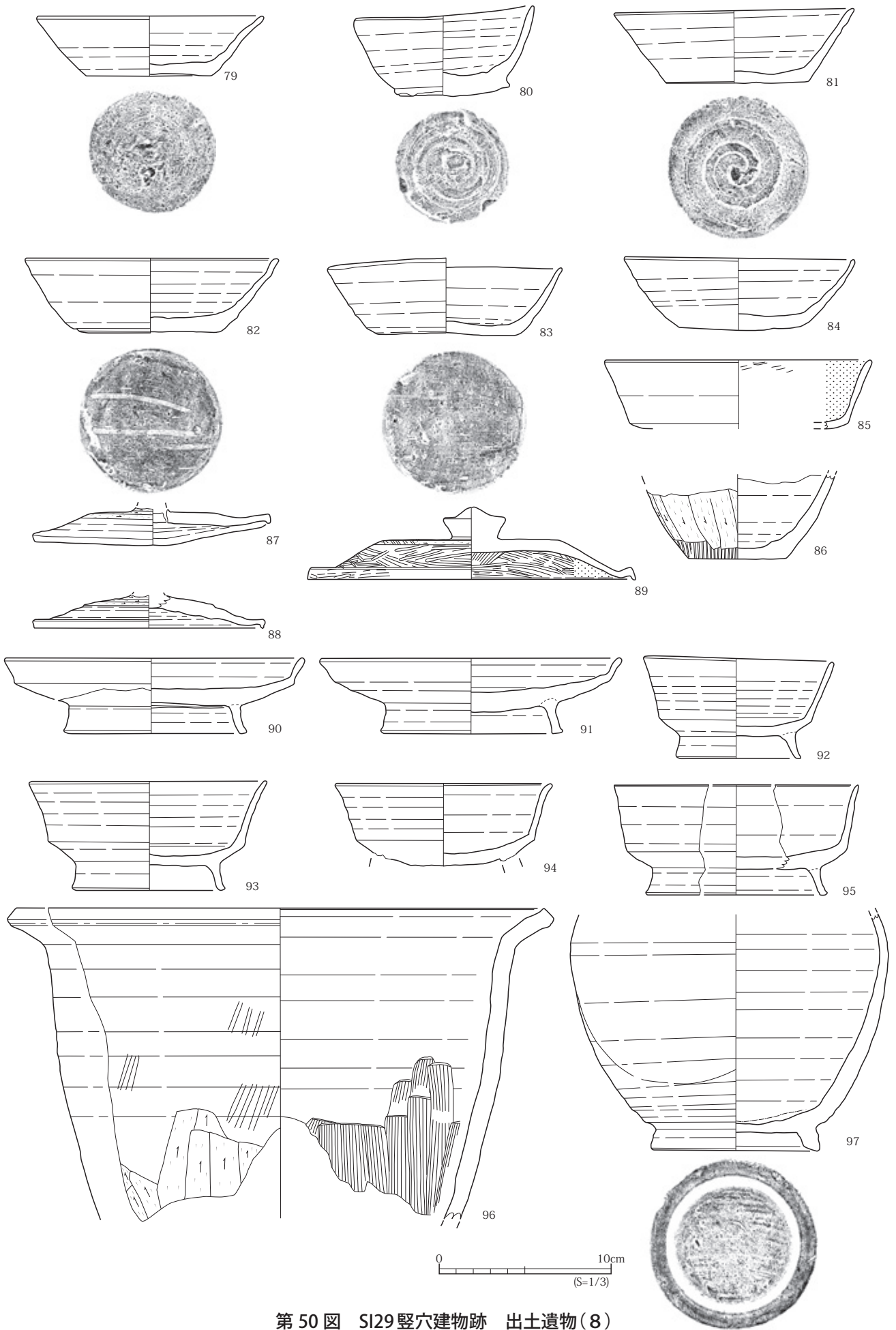
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
64	土師器 甕	焼面	3/4	(22.9)			(34.6)	外:ロクロナデ →ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ 未使用か?		27
65	土師器 甕	床	3/4	22.2		10.4	34.5	外:平行タタキ ロクロナデ→ケズリ→ミガキ 内:ロクロナデ→ナデ	40-1	13
66	土師器 甕	上層(1・2層)・ 下層(3・4・7層)	1/4	(26.4)			29.7~	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ 薄いコゲ		25
67	土製品 把手	1層	破片					残長:2.2 高:1.4		107
68	土錘	上層(1・2層)	完形		4.2			長:10.2 内径:1.6 外内:ナデ 指頭圧痕残す 重さ:167.8g	41-5	123
69	土製品 ミニチュア土器	上層(1・2層)	破片	2.6		0.8	2.6	風化により調整不明		122
70	土製品 ミニチュア土器	2層				(3.9)		外:平行タタキ→一部ナデ 内:ナデ		74
71	土師器 甕把手?	上層(1・2層)	把手のみ							194
72	土製品 ミニチュア土器	2層				3.0	4.0	外:ナデ オサエ		73
73	甕底部か?	5層						長さ:9.5 厚さ:1.6 ケズリ 指頭圧痕		298

第48図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(6)

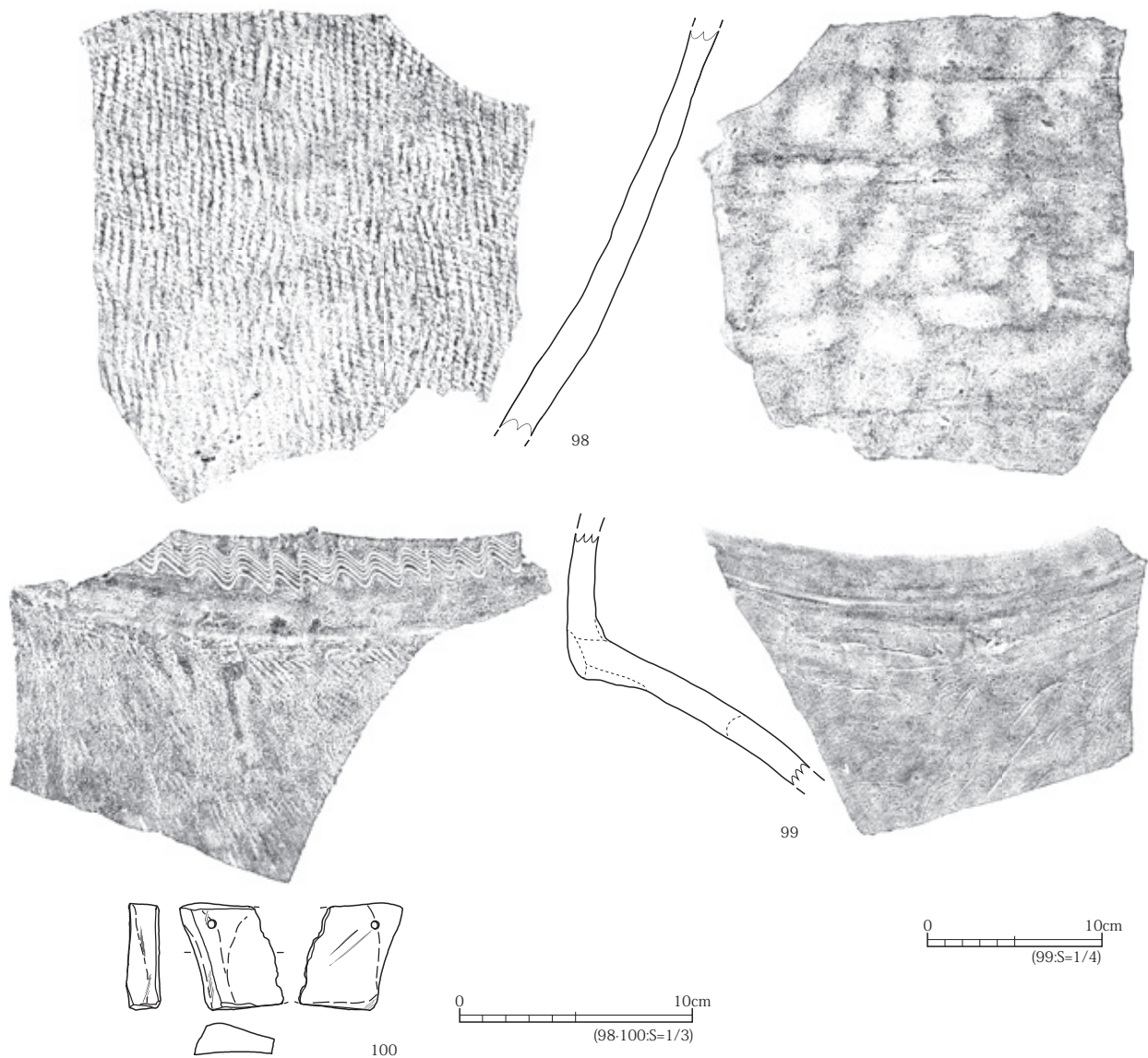


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
74	須恵器 甕	上層(1・2層)	口縁破片					櫛描波状文(櫛歯数5) / 平行タタキ→ロクロナデ	41-3	170
75	須恵器 甕	1層	口縁破片					外:一本描波状文2段~ /ロクロナデ	41-4	84
76	須恵器 甕	上層(1・2層)	胴部破片					外:擬格子タタキ 内:無文当て具痕		180
77	須恵器 甕	4層	胴部破片					外:平行タタキ 内:無文当て具痕	41-1	318
78	須恵器 甕	上層(1・2層)	胴下部破片					外:平行タタキ 内:無文当て具痕→ナデ		175

第49図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(7)

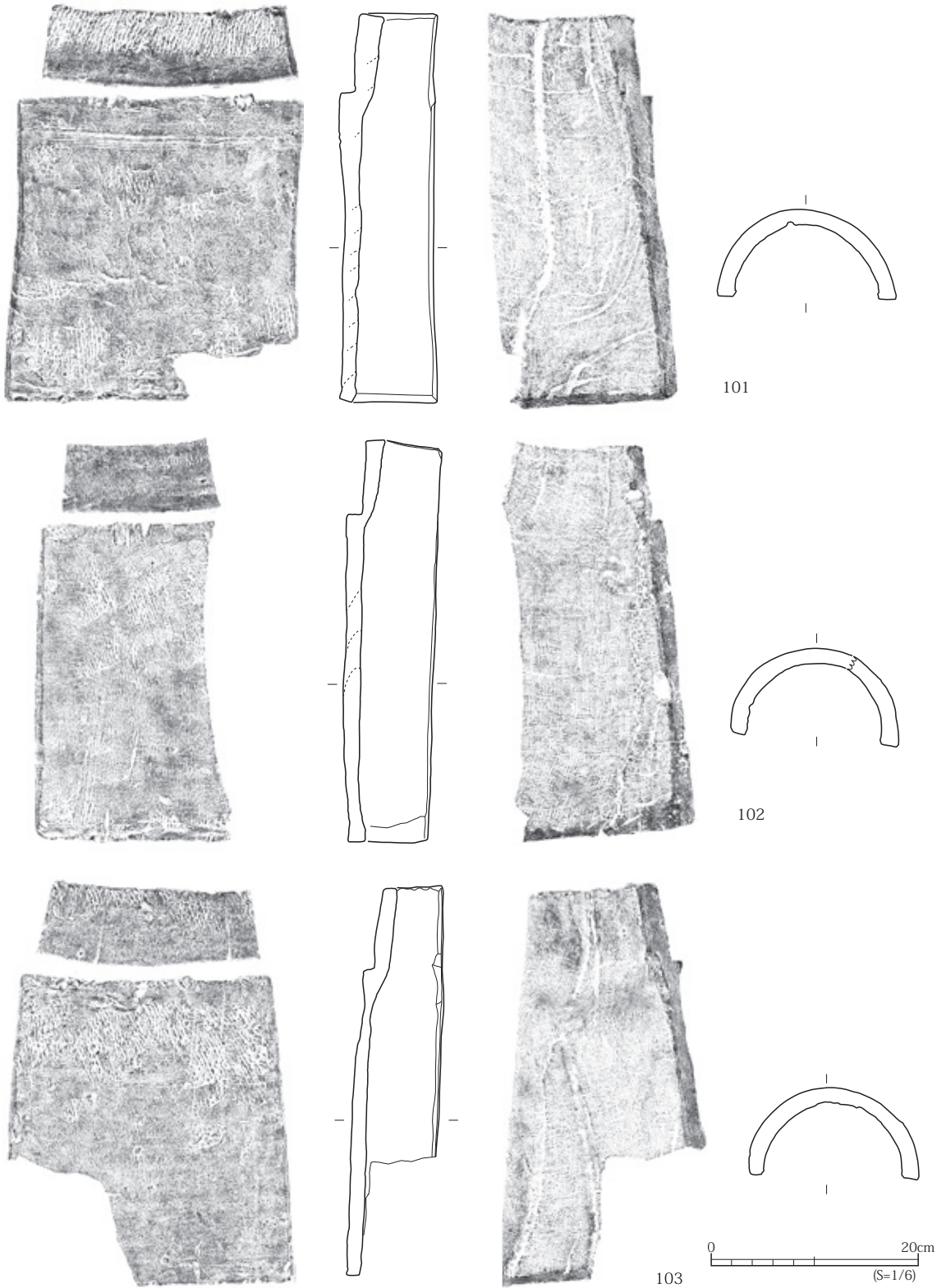


第 50 図 SI29 豎穴建物跡 出土遺物 (8)



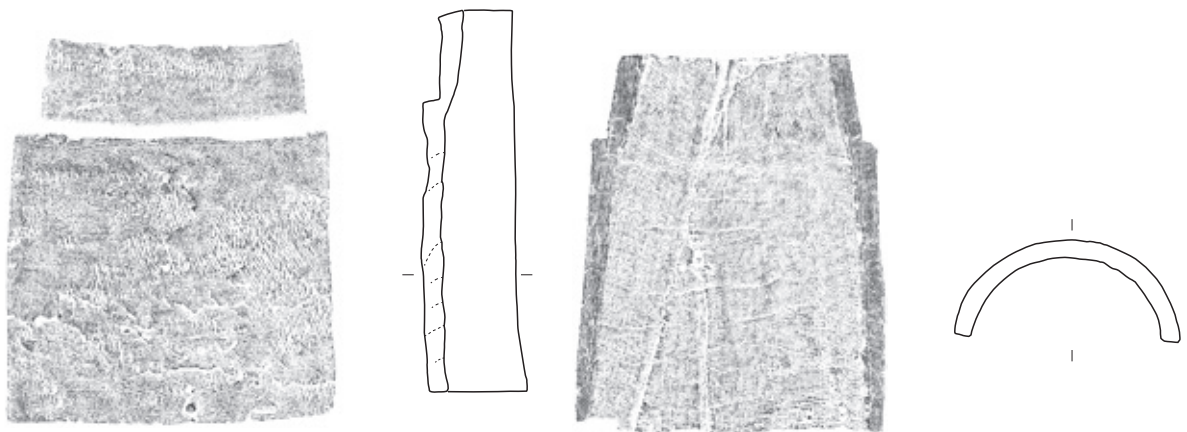
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
79	須恵器 坏	7層	ほぼ完形	12.9		7.2	3.5	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ	40-2	8
80	須恵器 坏	カマド燃烧部	完形	10.4		6.4	5.3	外内：ロクロナデ 底部：へら切り	40-3	34
81	須恵器 坏	7層	完形	13.8		8.3	4.3	内外：ロクロナデ 底部：へら切り 火ダスキ	40-4	16
82	須恵器 坏	7層	ほぼ完形	14.6		7.7	4.4	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ 火ダスキ ヒビ	40-5	19
83	須恵器 坏	外延溝	完形	13.5		8.1	4.5	外内：ロクロナデ 内面全面自然釉（降灰） 外面火ダスキ 底部：手持ちケズリ	40-6	38
84	須恵器 坏	7層	ほぼ完形	(13.3)		7.1	4.2	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ 火ダスキ	40-7	14
85	土師器 高台坏	外延溝	1/4	(15.4)			4.0~	外：ロクロナデ 内：黒色処理		36
86	土師器 鉢	外延溝	底部片			5.7	4.9~	外：叩き→ケズリ 内：ロクロナデ		37
87	須恵器 蓋	K2 1層	ツマミ以外完存	13.6			2.2~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ ヒビ・ユガミ		39
88	須恵器 蓋	K2 1層	1/3	13.3			1.9~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ		40
89	土師器 蓋	10層		(19.0)			4.2	宝珠ツマミ 外：天井回転ケズリ→ミガキ 下ミガキ 内：黒色処理	40-10	208
90	須恵器 盤	7層	2/3	17.1		10.0	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 高台内側はがれる	40-9	10
91	須恵器 盤	7層	1/2	(17.3)		10.5	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ	40-8	12
92	須恵器 高台坏	7層	完形	10.9		7.1	6.0	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 内面重ね痕・ヒビ	40-11	24
93	須恵器 高台坏	7層	ほぼ完形	13.5		8.5	6.5	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ ヒビ		17
94	須恵器 高台坏	7層	高台欠	12.4			4.8~	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ		6
95	須恵器 高台坏	カマド前床	1/3	(14.0)		(10.5)	6.4	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 赤褐色		33
96	須恵器 鉢	カマド袖	口~体	(30.7)				外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 赤褐色		35
97	須恵器 長頸瓶	7層	胴~底部			18.4	9.5	外内：ロクロナデ 底部：静止糸切り？		3
98	須恵器 甕	7層	胴部破片					外：擬格子タタキ 内：無文当て具痕 外内釉かかる	41-2	1
99	須恵器 甕	7層	頸~肩の一部					頸部径：(57.0) 残高：14.3 口：櫛描波状文（櫛歯数6） ナデツケ 胴部外：平行タタキ 内：当て具痕 自然釉		15
100	砥石	5層						凝灰岩 裏面に刃物の痕 左肩部に穿孔、金属の錐か 幅：46mm 重さ：29.6g	70-4	343

第 51 図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物（9）

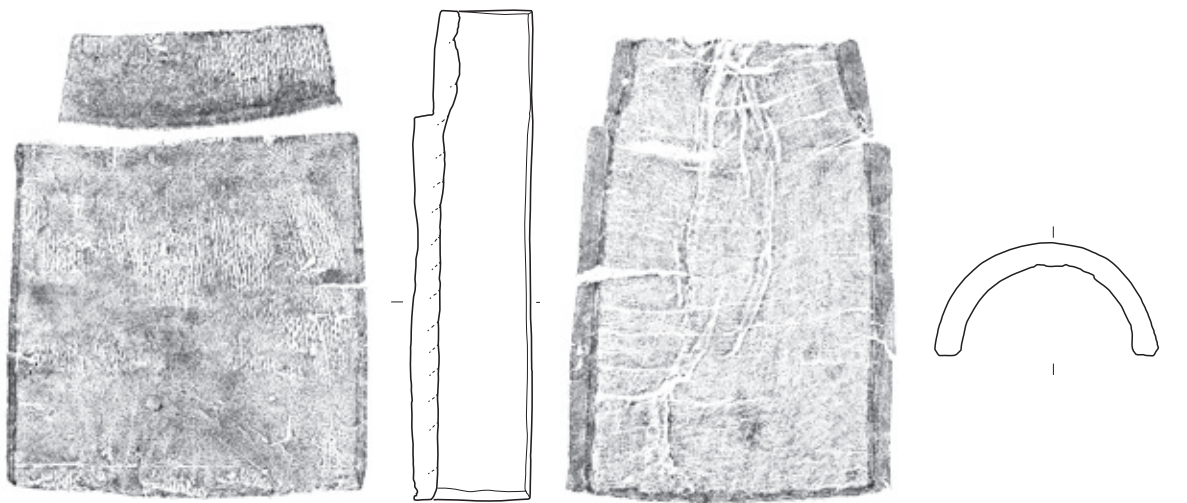


No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
101	丸瓦	I	10層	完形	全長：37.5cm 丸瓦部長さ：30.0cm 丸瓦部広端幅：(17.0)cm 狭端幅：12.5cm 玉縁部広端幅：15.0cm 狭端幅：14.0cm 重量：2.7kg 凸面：縄叩目→ロクロナデ 凹面：布目（布のとじ紐部有り）側端・小口：ケズリ	5YR5/2 灰褐		K11
102	丸瓦	I	10層	完形	全長：38.0cm 丸瓦部長さ：31.0cm 丸瓦部広端幅：17.0cm 狭端幅：14.5cm 玉縁部広端幅：13.8cm 狭端幅：8.5cm 重量：2.3kg 凸面：縄叩目→ロクロナデ 凹面：布目（布のとじ紐部の痕有り）側端・小口：ケズリ 歪みにより接合できず	2.5Y7/2 灰黄		K9
103	丸瓦	II	10層	ほぼ完形 狭端一部欠	全長：37.5cm 丸瓦部長：29.5cm 丸瓦部狭端幅：15.5cm 玉縁部広端幅：14.5cm 狭端幅：12.4cm 重量：2.0kg 凸面：縄叩目→ロクロナデ 凹面：布目（布の合わせ目痕有り）側端・小口：ケズリ	7.5Y5/3 にぶい褐		K4

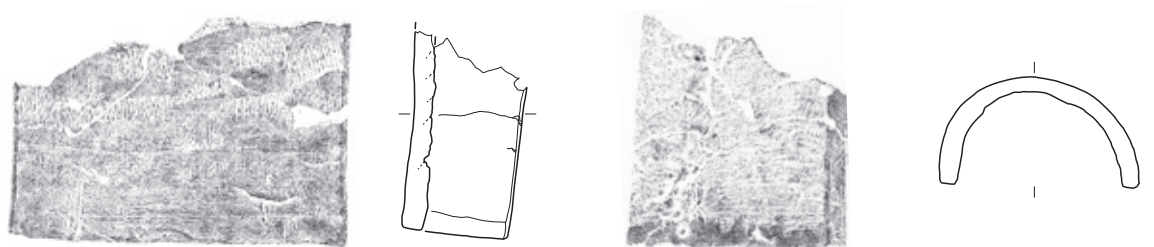
第52図 S129 竪穴建物跡 出土遺物 (10)



104



105

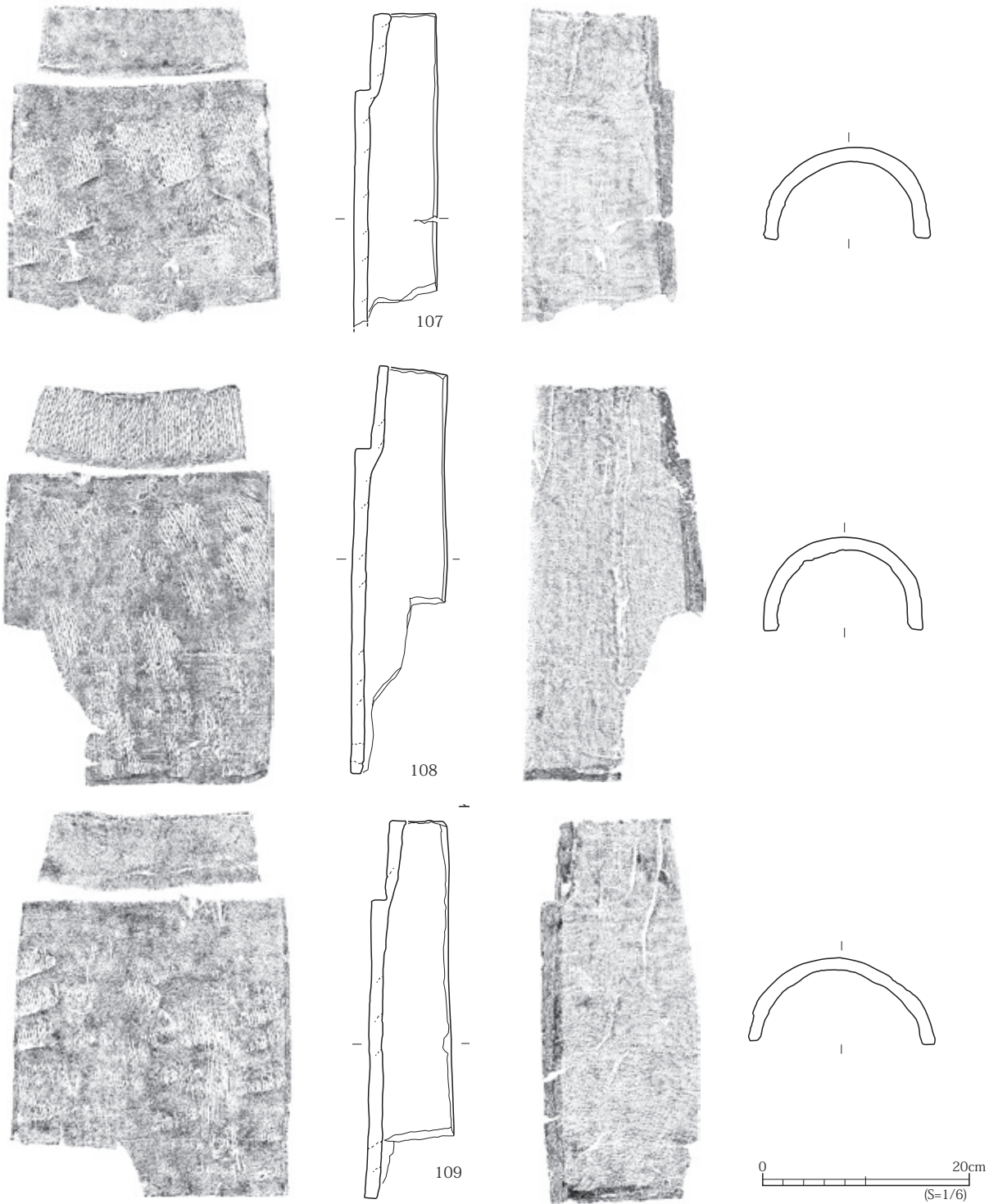


106

0 20cm  
(S=1/6)

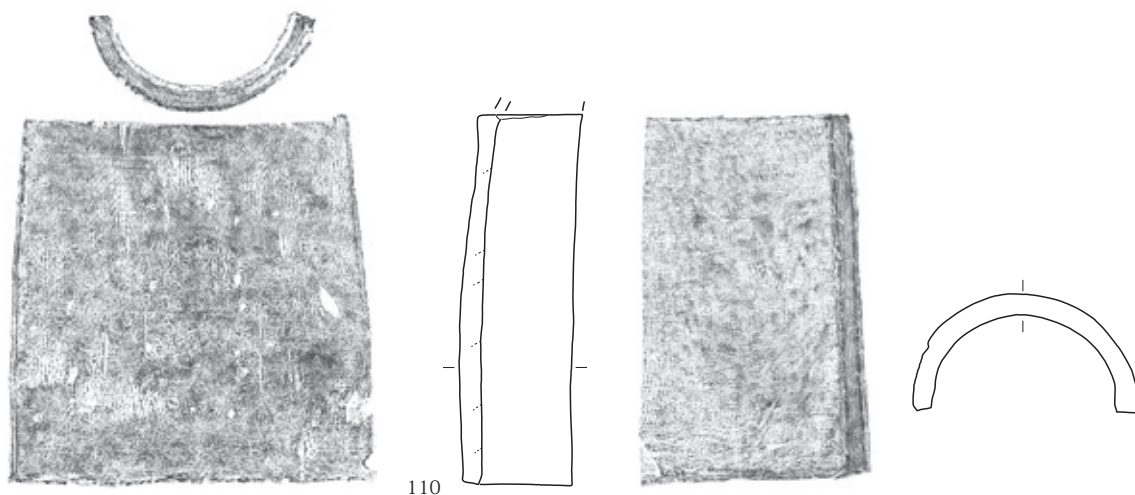
No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
104	丸瓦	II	10層	完形	全長：30.0cm 丸瓦部長さ：23.2cm 広端幅：18.1cm 狭端幅：13.3cm 凸面：縄目→ロクロナデ 凹面：粘土紐積痕（明瞭）・布目 側端・小口：ケズリ 色調：褐灰色（10YR4/1）	7.5Y6/1 灰	41-7	K6
105	丸瓦	II	10層	完形	全長：36.0cm 丸瓦部広端幅：19.0cm 狭端幅：17.5cm 玉縁部広端幅：15.0cm 狭端幅：13.2cm 重量：2.7kg 凸面：縄目→ロクロナデ 凹面：布目（布の合わせ目痕有り） 側端・小口：ケズリ	7.5Y7/1 灰白	41-6	K5
106	丸瓦	II	10層	1/3 欠 玉縁	丸瓦部長：（16.5）cm 丸瓦部広端幅：16.5cm 重量：1.1kg 凸面：縄目→ロクロナデ 凹面：布目（布のと同じ紐部の痕有り） 側端・小口：ケズリ	2.5YR5/1 赤灰		K2

第 53 図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物（11）

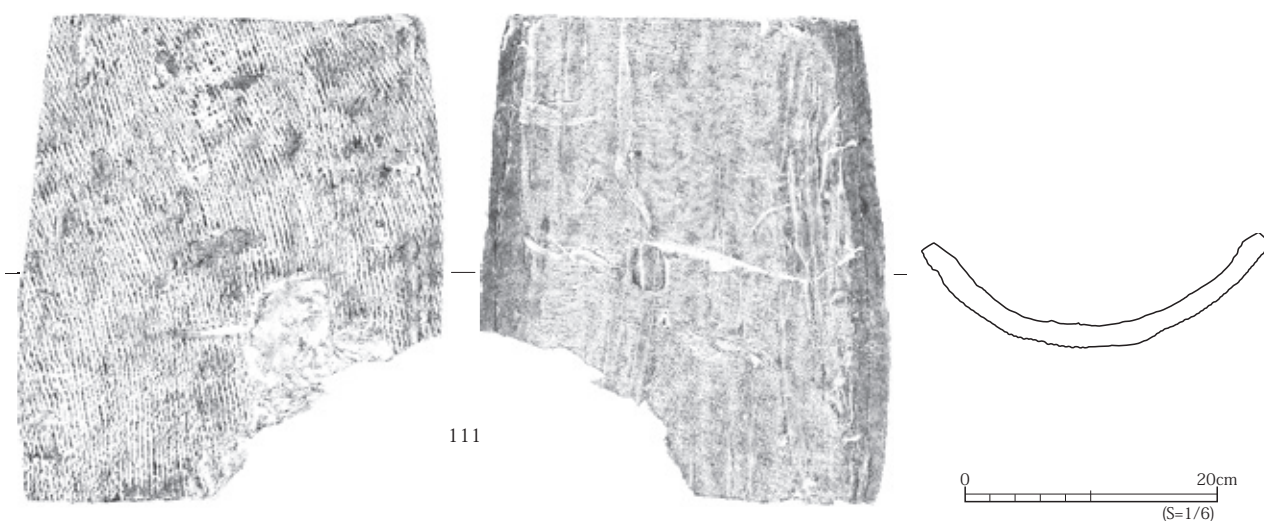


No	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
107	丸瓦	II	10層	ほぼ完形 広端欠	全長：30.1cm 丸瓦部長：(22.5)cm 丸瓦部狭端幅：15.5cm 玉縁広端幅：13.0cm 狭端幅：12.6cm 重さ：1.7kg 凸面：縄叩目→ロクロナデ 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	10Y6/1 褐灰		K1
108	丸瓦	I	10層	ほぼ完形 広端一部欠	全長：38.0cm 丸瓦部長：30.0cm 丸瓦部狭端幅：15.0cm 玉縁部広端幅：12.0cm 狭端幅：10.1cm 重量：18.5kg 凸面：縄叩き→ロクロナデ 凹面：布目（合わせ目痕有り）側端・小口：ケズリ	2.5Y8/2 灰白		K10
109	丸瓦	II	10層	ほぼ完形 広端一部欠	全長：36.5cm 丸瓦部長：29.0cm 丸瓦部狭端幅：18.0cm 玉縁部広端幅：15.0cm 狭端幅：13.5cm 重量：2.3kg 凸面：縄叩目→ロクロナデ 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	7.5Y6/2 灰褐		K7

第 54 図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (12)



110



111

0 20cm  
(S=1/6)

No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
110	丸瓦	I	10層	3/4 玉縁欠	全長：29.4cm 広端幅：18.3cm 狭端幅：15.9cm 凸面：縄叩き→ロクロナデ 凹面：粘土紐積痕（あまり見えない）・布目 側端・小口：ケズリ 色調：にぶい黄橙色（10YR7/3）	2.5Y8/2 灰白		K8
111	平瓦	II	10層	ほぼ完形 広端隅欠	長さ：38.5cm 狭端幅：23.8cm 重量：3.8kg 凸面：縄叩目+凹型台端部痕 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	10Y6/1 褐灰		K3

第 55 図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (13)

【SI60 竪穴建物跡】（第 56～61 図・図版 15）

〔位置・検出面〕7区南西の丘陵南緩斜面に位置し、V層で検出した。西辺は調査区外、南辺は削平により失われている。

〔重複〕SD84 と重複し、これより古い。

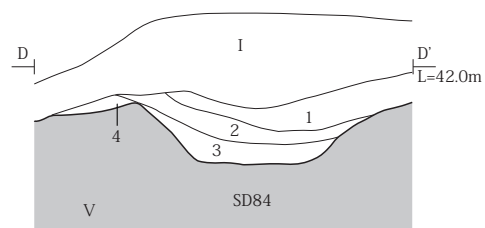
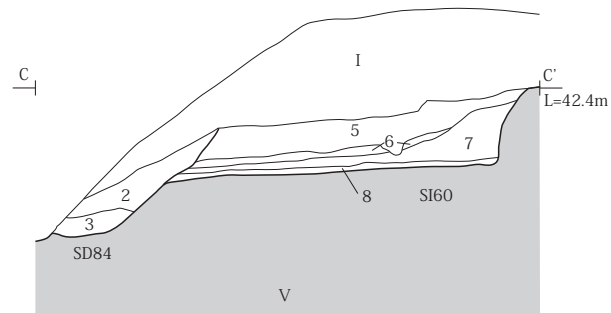
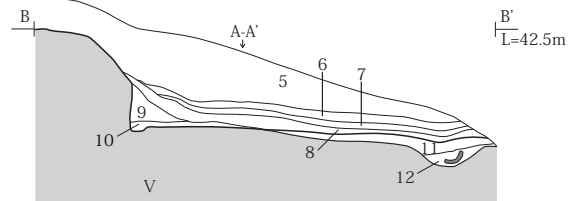
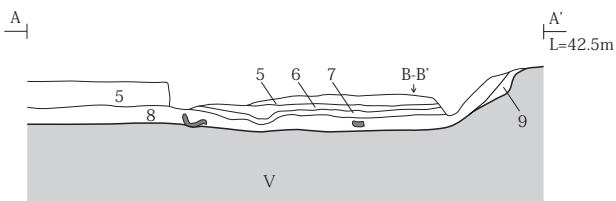
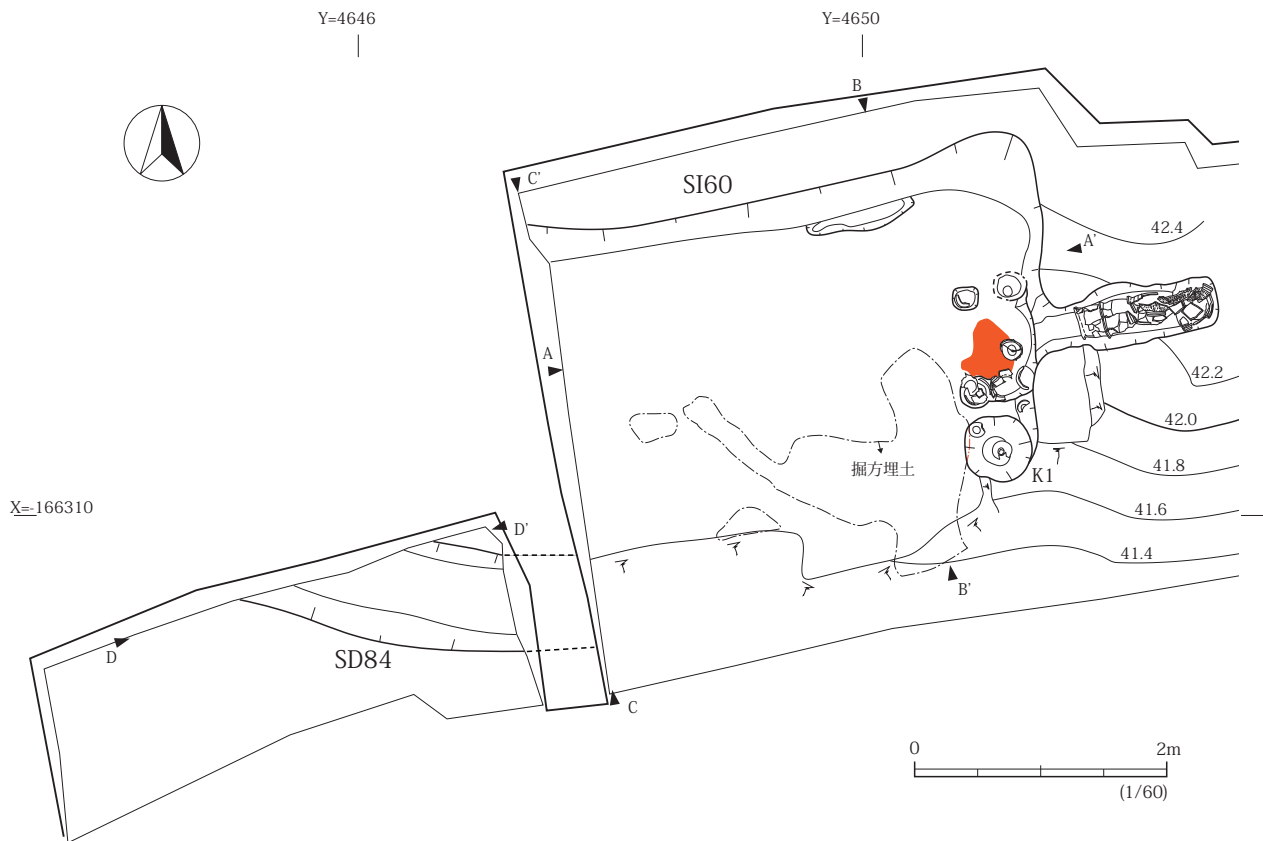
〔規模・平面形〕東西 3.9 m 以上、南北 3.0 m 以上である。

〔方向〕北辺で測ると N-83° -E である。

〔堆積土〕カマド・煙道を除いて 6 層に分けられた。5～10 層は自然堆積層である。6 層は黒色土と灰白色火山灰 (To-a) ブロックからなる層で床から 10cm ほどの高さで北から南に向かって傾斜する。

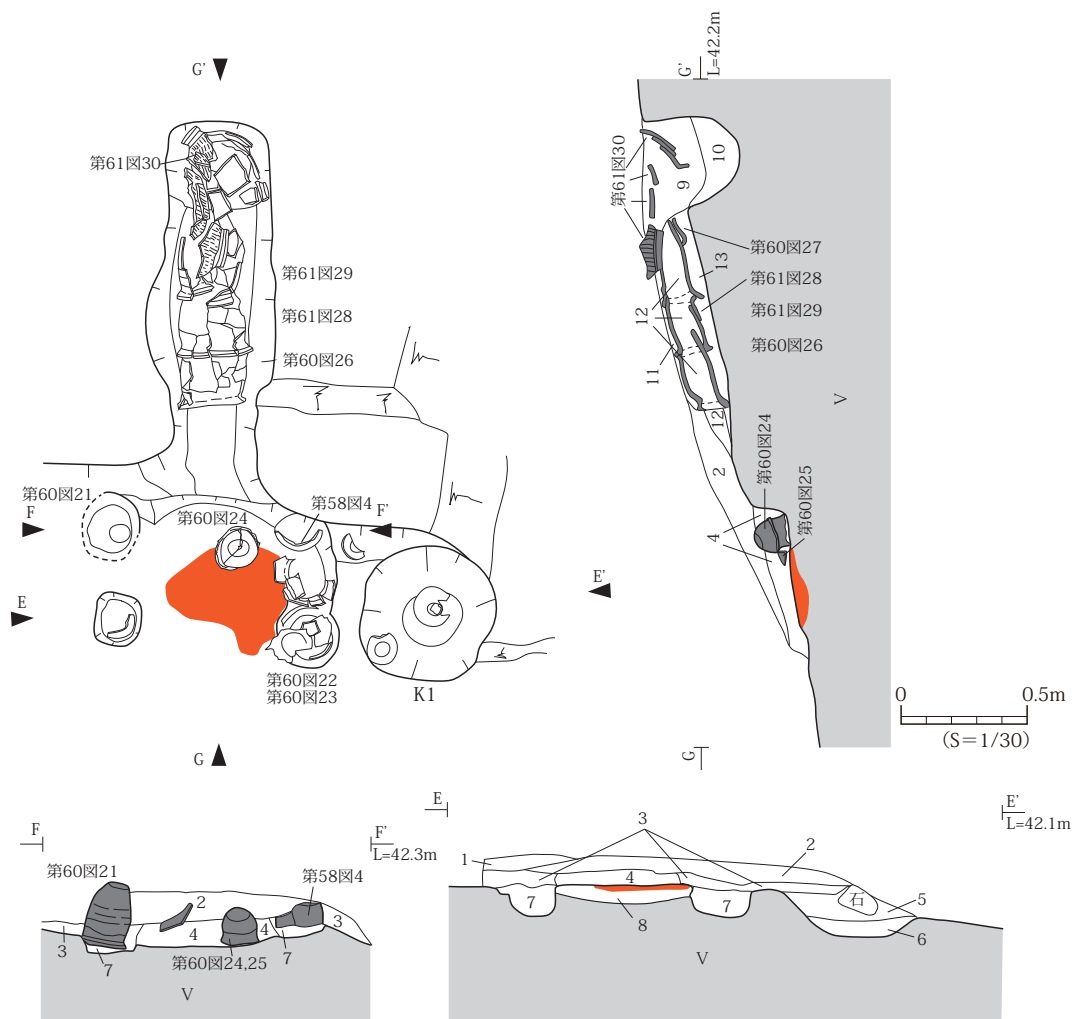
〔壁〕北壁はほぼ垂直に立ち上がり、途中から大きく外傾する。東壁は緩やかに立ち上がる。北東隅付近ではややオーバーハング気味になる。高さは、最も残りの良い北壁中央付近で 46cm ある。





遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SD84	1	黒色 (10YR1.7/1) シルト	炭粒・焼土粒を少し含む 土器片を含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭粒・焼土粒を多く含む 土器片を含む	自然堆積
	3	暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト	木炭片・焼土粒を多く含む 水成堆積	自然堆積
	4	褐色 (10YR4/4) シルト	木炭片・焼土粒を多く含む	自然堆積
SI60	5	黒色 (10YR1.7/1) シルト		自然堆積
	6	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	灰白色火山灰がブロック状に混じる	自然堆積
	7	黒褐色 (10YR2/3) シルト	木炭粒を少し含む	自然堆積
	8	褐色 (10YR4/4) シルト	木炭片・焼土塊を少し含む	自然堆積
	9	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	地山 (V層) ブロックを多く含む	自然堆積
	10	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック・焼土塊を多く含む	自然堆積
	11	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト	Ⅲ層ブロック、地山ブロックからなる	床 掘方埋土
	12	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	Ⅲ層ブロック、地山ブロックからなる	掘方埋土

第 56 図 SI60 竪穴建物跡 SD84 溝



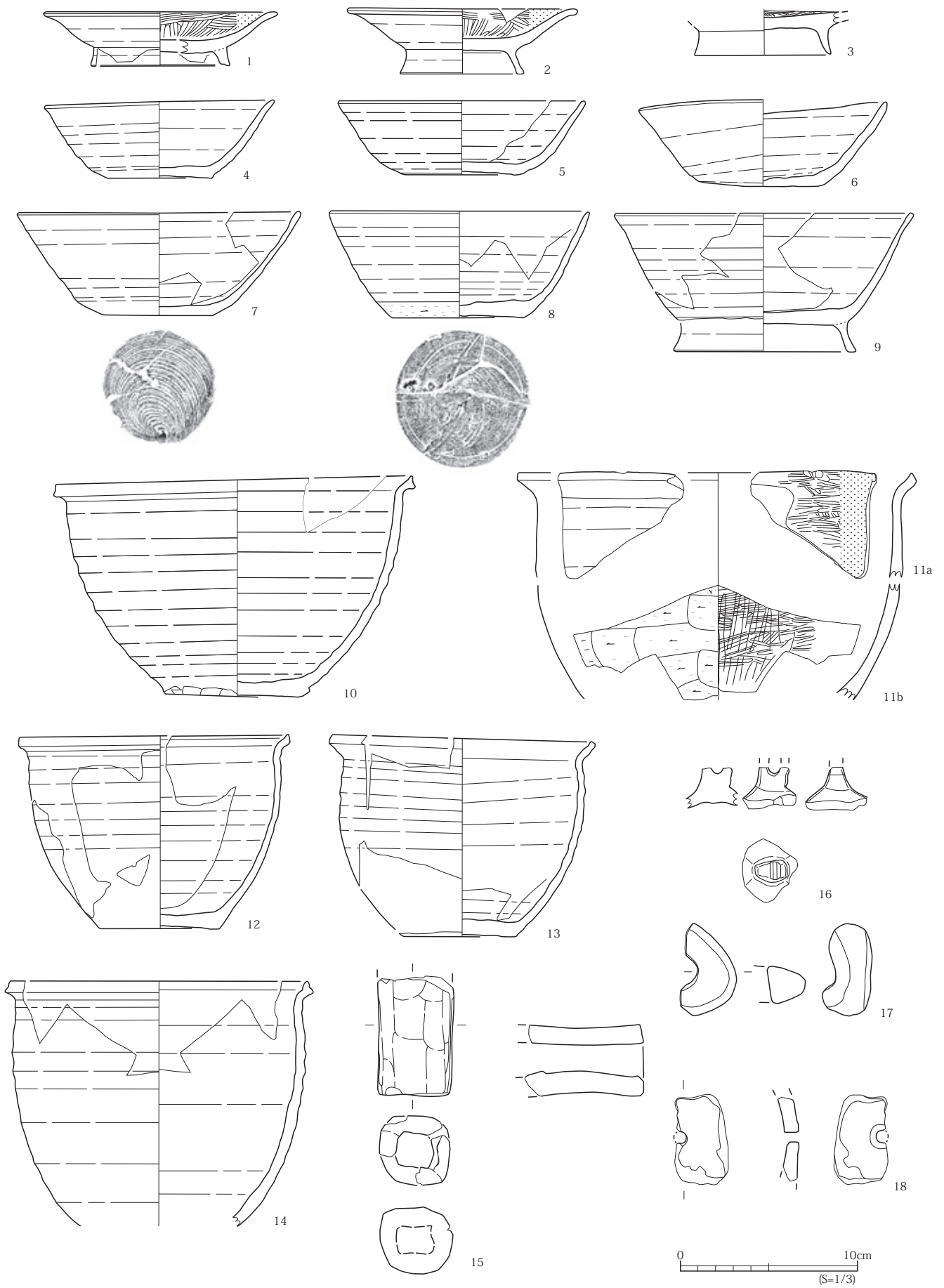
遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI60 カマド	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト		自然堆積
	2	褐色 (10YR4/5) シルト		自然堆積
	3	黒褐色 (10YR2/3) シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	自然堆積
	4	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	木炭粒・焼土粒を多く含む	機能時堆積土 自然堆積
	5	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	K1 自然堆積
	6	褐色 (10YR4/4) シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	K1 自然堆積
	7	暗褐色 (10YR3/3) シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	カマド袖芯材掘方埋土
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		掘方埋土、SI60-12層と同質
SI60 カマド 煙道ピット	9	黒褐色 (10YR2/3) シルト	木炭粒を多く含む	煙出ピット 自然堆積
	10	暗褐色 (7.5YR2/3) シルト	木炭片・焼壁片を少し含む	煙出ピット 自然堆積
	11	にぶい褐色 (7.5YR5/3) シルト	焼壁片を少し含む	煙出上部被覆土由来 自然堆積
	12	暗褐色 (10YR3/4) シルト		煙道 (土器内) 自然堆積
	13	暗褐色 (10YR3/3) シルト	焼壁片を少し含む	煙道掘方埋土

第 57 図 SI60 カマド煙道遺物 出土状況

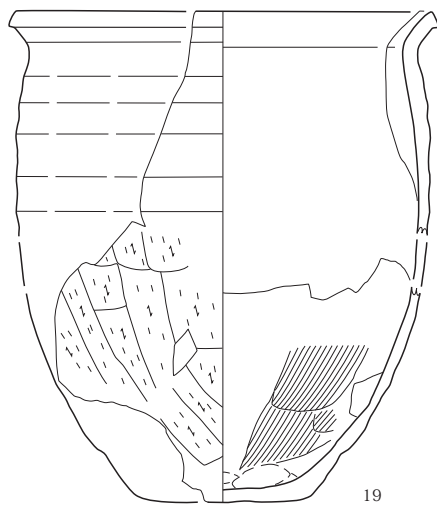
〔床〕 北半は地山、南半は掘方埋土を床としている。

〔柱穴〕 確認していない。

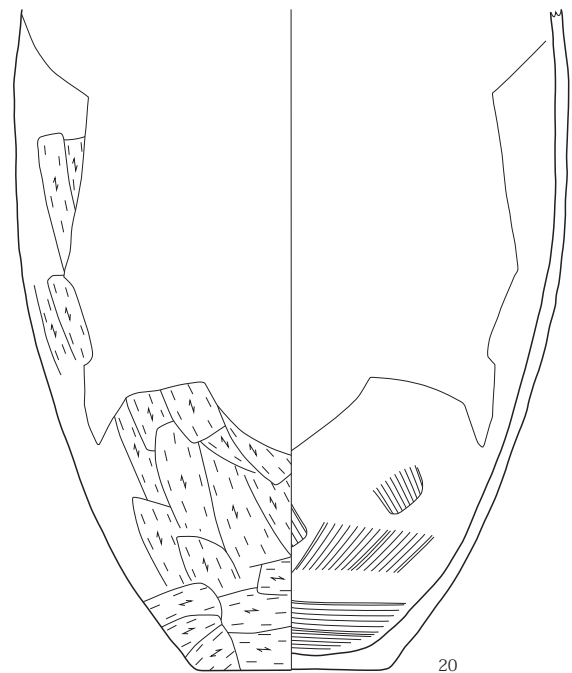
〔カマド〕 東壁の北東隅寄りに付設される。本体部分と煙道を確認した。東壁から煙道先端までの長さは約 1.5 m である。本体は建物内にあり、明黄褐色粘土で構築されている。両側壁の構築土からは土師器甕 (第 60 図- 21 ~ 23) が逆位で 2 個体ずつ出土した。これらは焚口に向かって手前側の 2 個体は直径 40cm、深さ 10cm の掘方に、奥側の 2 個体は地山を削り出した床に据えられている。いずれも側壁の構築材として使用されたとみられる。掘方埋土上面および地山上面を燃焼部焼け面としており、強く被熱して赤変・硬化している。燃焼部内の堆積土は 4 層に分けられた。1 ~ 3 層は



第 58 图 SI60 竖穴建物跡 出土遺物 (1)



19

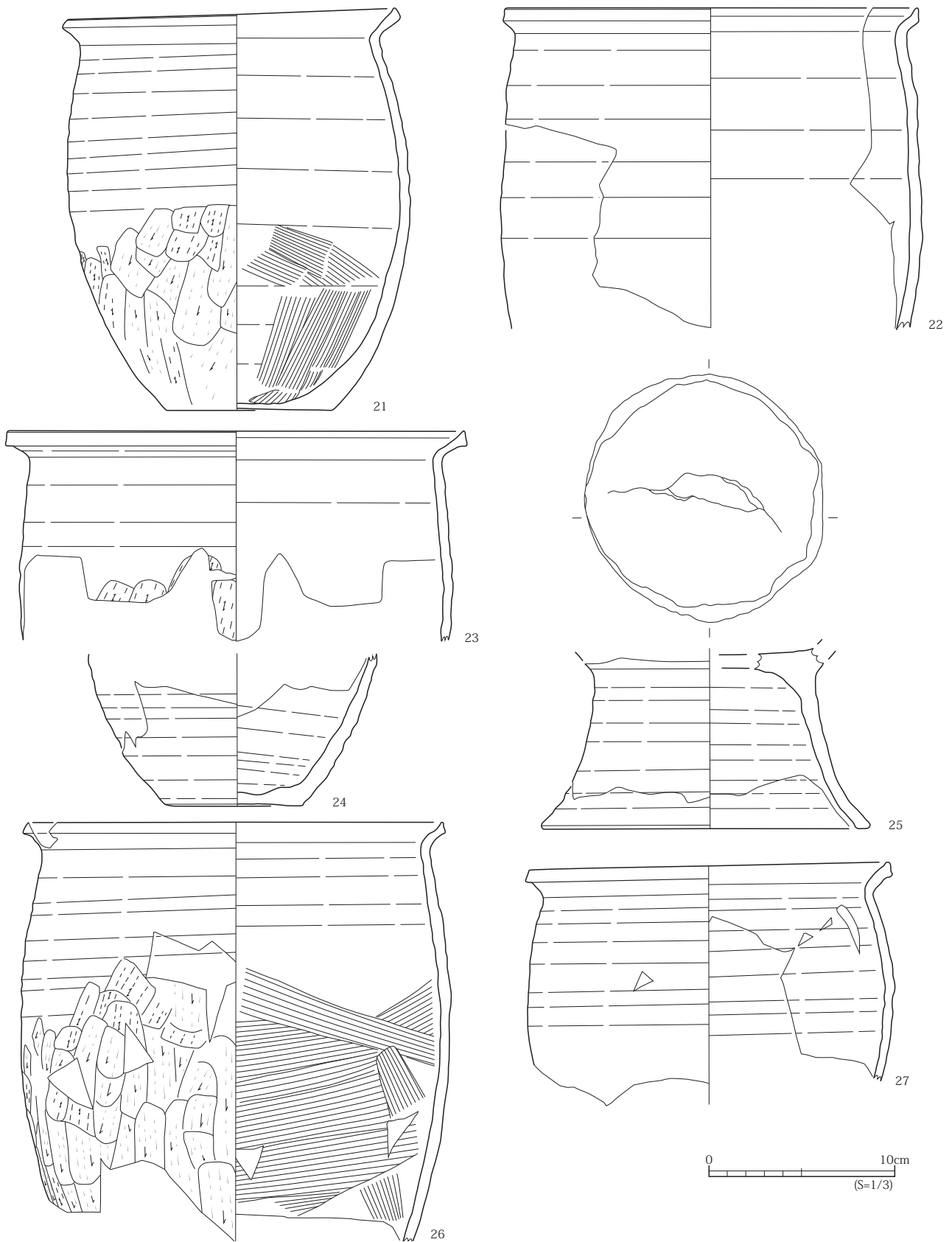


20

No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 高台皿	K1	1/2	(13.0)		(7.8)	3.1	外：ロクロナデ 内：黒色処理 高台歪む（高台貼付の内径で計った）		1200
2	土師器 高台皿	K1	ほぼ完形	12.8		6.9	3.8	外：ロクロナデ 内：黒色処理	42-1	1201
3	土師器 高台皿？	床	底部			7.3		内：黒色処理		1169
4	須恵器 坏	床掘方埋土	完形	12.9		5.8	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	42-2	1172
5	須恵器 坏	6層北西	1/4	(13.8)		(6.2)	4.2	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り 底切れ		1161
6	須恵器 坏	床掘方埋土	完形	13.8		6.8	4.9	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		1171
7	須恵器 碗	K1	2/3	15.8		6.0	5.8	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	42-3	1202
8	須恵器 碗	床掘方埋土	ほぼ完形	14.4		7.4	6.0	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 底部：糸切り→回転ケズリ→「十」字のナデ 底切れ	42-4	1170
9	須恵器 高台坏	床掘方埋土	1/2	16.5		10.1	7.8	外内：ロクロナデ	42-5	1175
10	須恵器 鉢	7層北東	1/2	(20.0)		7.5	12.5	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右→手持ちケズリ	42-6	1160
11	土師器 鉢	5層北西	部分					外：ケズリ 内：黒色処理		1163
12	土師器 甕	床掘方埋土	2/3	15.1		6.7	10.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 風化著しい 喫水線コゲ	43-3	1176
13	土師器 甕	8層南西	1/2	14.6		6.3	11.4	外：ロクロナデ ススカコゲ ふきこぼれ？ 著しい2次被熱 内：ロクロナデ 喫水線コゲ		1178
14	土師器 甕	8層南西	1/2	(16.8)			13.8-	外内：ロクロナデ 摩滅 風化著しい		1179
15	土師器 手付鍋	堆積土	把手			4.2		長さ：(6.8) 孔径：2.1 ケズリ	43-1	1162
16	土師器 土鈴	上層	紐					残高：2.3	43-2	1173
17	土製品 把手	8層南西	把手							1164
18	土製品 ?	上層	破片					孔径：(1.2) 胎土：砂粒多い、直径2mmの石英粒 器形等不明 風化強く、器面と欠損部との境不明瞭		1174
19	土師器 甕	床	1/2	(16.5)		6.7	19.4	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 表面風化著しい 下部コゲ		1165
20	土師器 甕	床	1/5			7.6	26.2-	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 表面風化著しい		1177

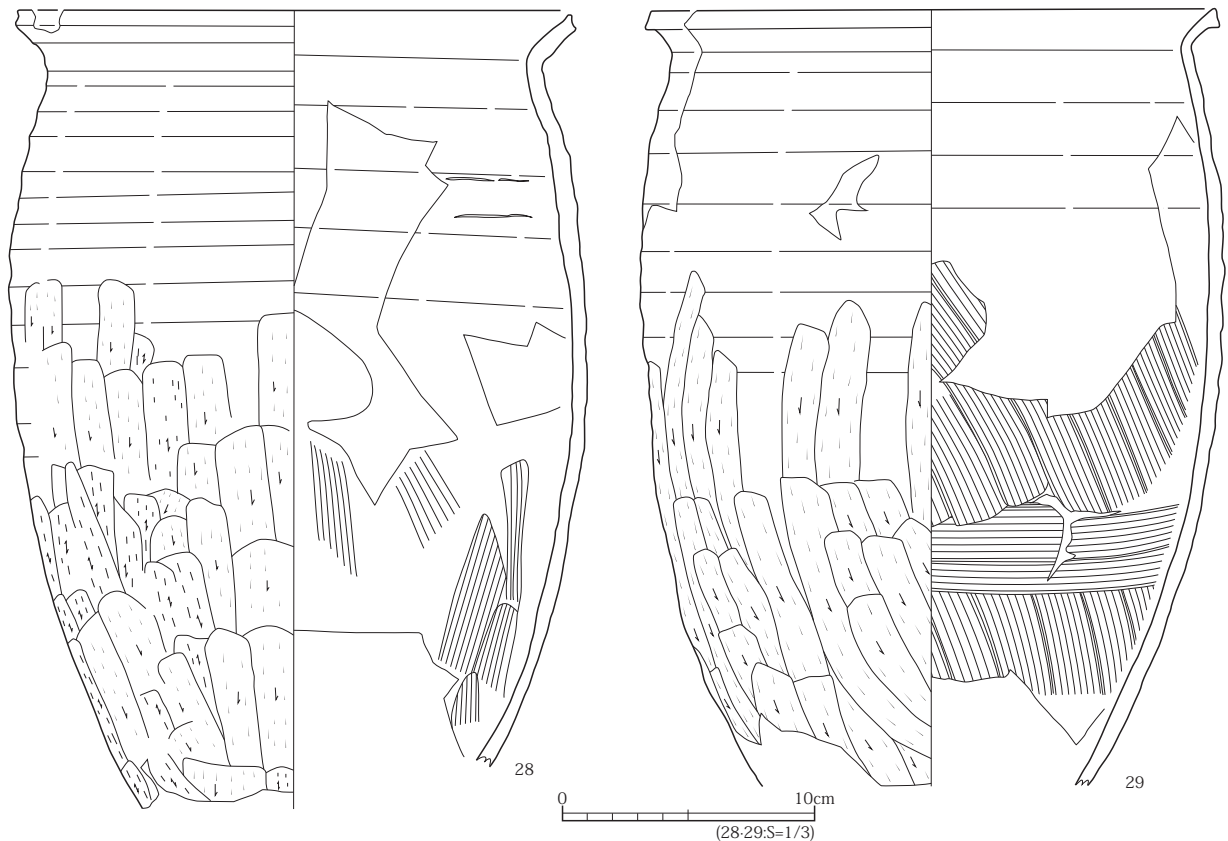
### 第 59 図 SI60 竪穴建物跡 出土遺物（2）

自然堆積土で、4層は木炭粒・焼土粒を含む機能時の堆積である。焼け面中央からは赤焼土器台付鉢（第60図-25）の台が出土しており、摩滅・風化の様子から支脚として転用されたものとみられる。煙道は長さ1.5m、幅0.4～0.5m、深さ0.2mの掘方から、掘方埋土（13層）の上に底のない土師器甕3個体（第60・61図-26・28・29）が連結された状態で出土した。これらは口縁部を燃焼部側に向けて横位で置かれ、底部を隣り合う甕に5cmほど差し込まれていた。甕同士が接する部分の下部では、土師器甕の破片（第60図-27）が出土しており、高さ調整などに使われたとみられる。煙道の先端には直径36cmほどの煙出しピットが設けられており、内部の自然堆積土（9・10層）から大形の須恵器鉢（第61図-30）が逆位で出土した。出土状況からみて、これらの土師器甕は



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
21	土師器 甕	カマド左袖	ほぼ完形	17.5	18.5	8.9	21.6	外：ロクロナデ→下部ケズリ 内：ロクロナデ→下部ナデ 中空やや摩滅 風化	43-4	1189
22	土師器 甕	カマド右袖	1/6	(22.1)			17.3~	外内：ロクロナデ		1193
23	土師器 甕	カマド右袖	口縁部	(24.5)			11.3~	外内：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		1194
24	土師器 甕	カマド支脚	底部			7.1	8.2~	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		1188
25	赤焼土器 台付鉢	カマド支脚	脚のみ			(17.4)	9.7~	外内：ロクロナデ	43-6	1187
26	土師器 甕	煙道	3/4	(22.2)	23.2		23.0~	外：ロクロナデ→下部ケズリ 内：ロクロナデ→下部ナデ 薄いコゲ コゲなし部分みだら	43-5	1182
27	土師器 甕	煙道	口縁部	19.4			13.0~	外内：ロクロナデ	43-7	1199

第 60 図 SI60 竪穴建物跡 出土遺物 (3)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
28	土師器 甕	煙道	底部欠損	22.0	22.8		31.7	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	44-1	1181
29	土師器 甕	煙道	3/4	22.0	23.1		30.8	外：ロクロナデ→下半ケズリ 内：ロクロナデ→下半ナデ	44-2	1183
30	須恵器 鉢	煙出堆積土	3/4	(50.4)				外：ロクロナデ 擬格子叩き→ロクロナデ 下部擬格子叩き→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	44-3	1184

第 61 図 SI60 竪穴建物跡 出土遺物 (4)

煙道の構築材として使用されたものとみられる。

〔周溝〕北壁の東側付近に沿って、部分的に長さ 0.9 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 mほどの底面が凹凸な溝が認められた。自然堆積土で覆われていた。

〔土坑〕床面で 1 基確認した。K1 はカマドのすぐ南側に隣接し、平面形が直径 50cm ほどの円形、断面形は挿鉢状である。深さは 20cm である。埋土は自然堆積であり、土師器高台皿（第 58 図－1・2）、須恵器坏（第 58 図－7）が出土した。

〔出土遺物〕カマドとその周辺の床、土坑、掘方から土師器高台皿、甕、須恵器坏、高台坏、鉢、赤焼土器台付鉢が出土した。土師器長胴甕など大形の土器はカマドの構築にかかわるもので、供膳具は主に土坑から出土した。

#### 【SI62 竪穴建物跡】（第 62・63 図・図版 16）

〔位置・検出面〕7 区中央の丘陵南緩斜面に位置し、V 層で検出した。壁が確認できなかったが、貼床の残存とみられる粘土の広がり、その下から掘方埋土を確認したほか、床面とした面に焼け面を確認したことから竪穴建物跡として報告する。

〔重複〕SX94 と重複し、これより古い。

〔規模・平面形〕不明。貼床とみられる粘土の残存は、東西 4.9 m、南北 1.7 m ほどの範囲に広がる。

〔方向〕不明。

〔堆積土〕壁と床の一部が壊されたのち、SX94 が堆積する。

〔壁〕確認できなかった。

〔床〕にぶい黄褐色粘土質シルト主体の貼床である。貼床の厚さは、建物跡とした範囲の西半では最大 10cm 程度残っていたが、東半では大部分が 1 cm 未満である。掘方埋土はⅢ層とⅤ層ブロックからなる。

〔柱穴〕支柱穴は確認していない。

〔カマド〕確認できなかった。

〔そのほかの施設〕焼け面を 2 か所確認した。南の焼け面は径 50cm の円形で熱を受けて赤変するとともに一部は硬化していた。東の焼け面は長軸 50cm、短軸 25cm ほどの範囲が熱を受けて赤変していた。

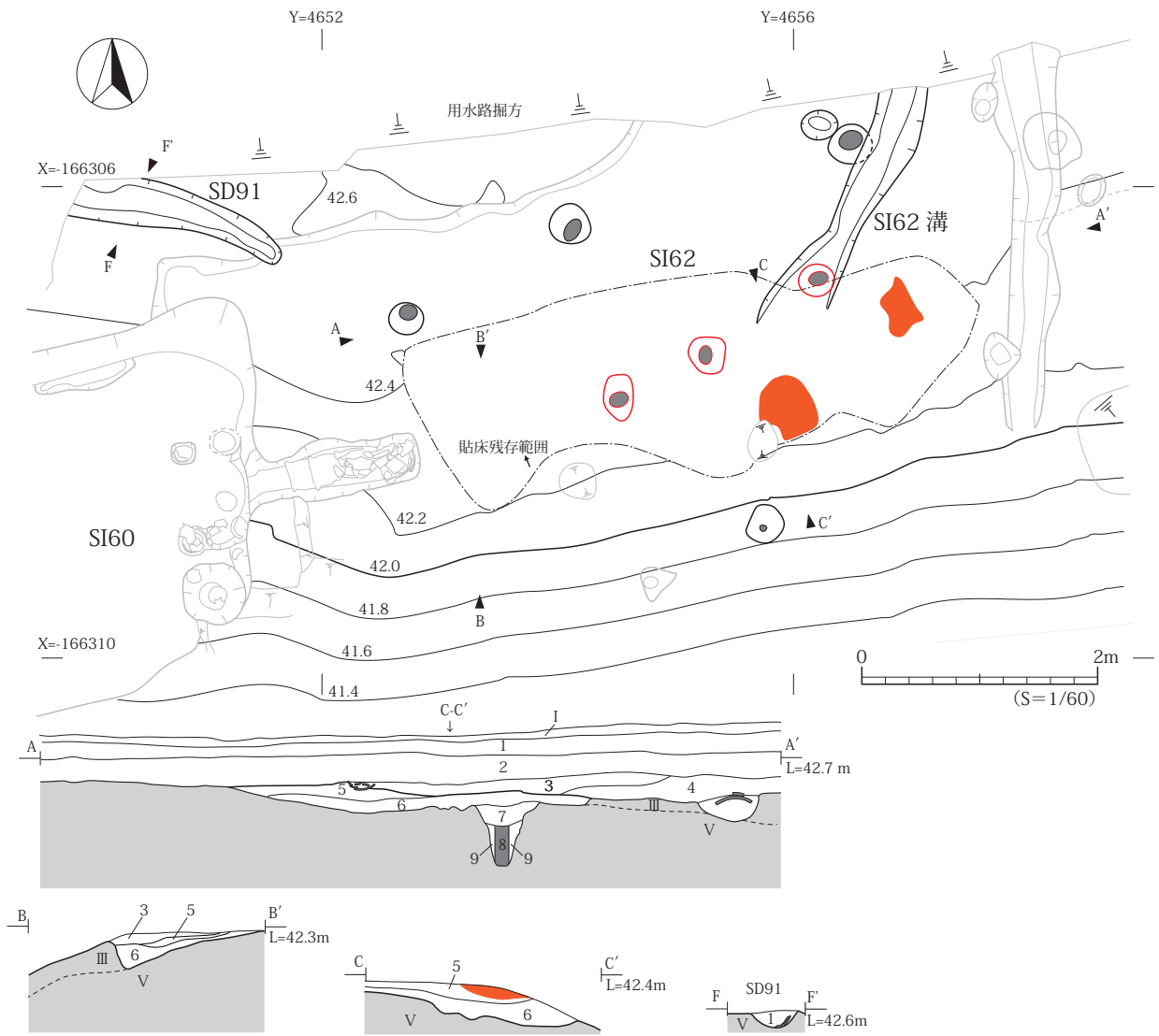
〔出土遺物〕床から土師器甕が出土したほか、堆積土から須恵器坏、壺、土師器甕などが出土した。6 は小形の坏である。

#### 【SI76 竪穴建物跡】（第 64・65 図・図版 16）

〔位置・検出面〕7 区西の丘陵平坦面に位置し、V 層で検出した。南東隅付近と外延溝とみられる溝を検出したのみで、大部分は調査区外にある。

〔重複〕SX53、SD54、SD73 と重複し、これらより古い。

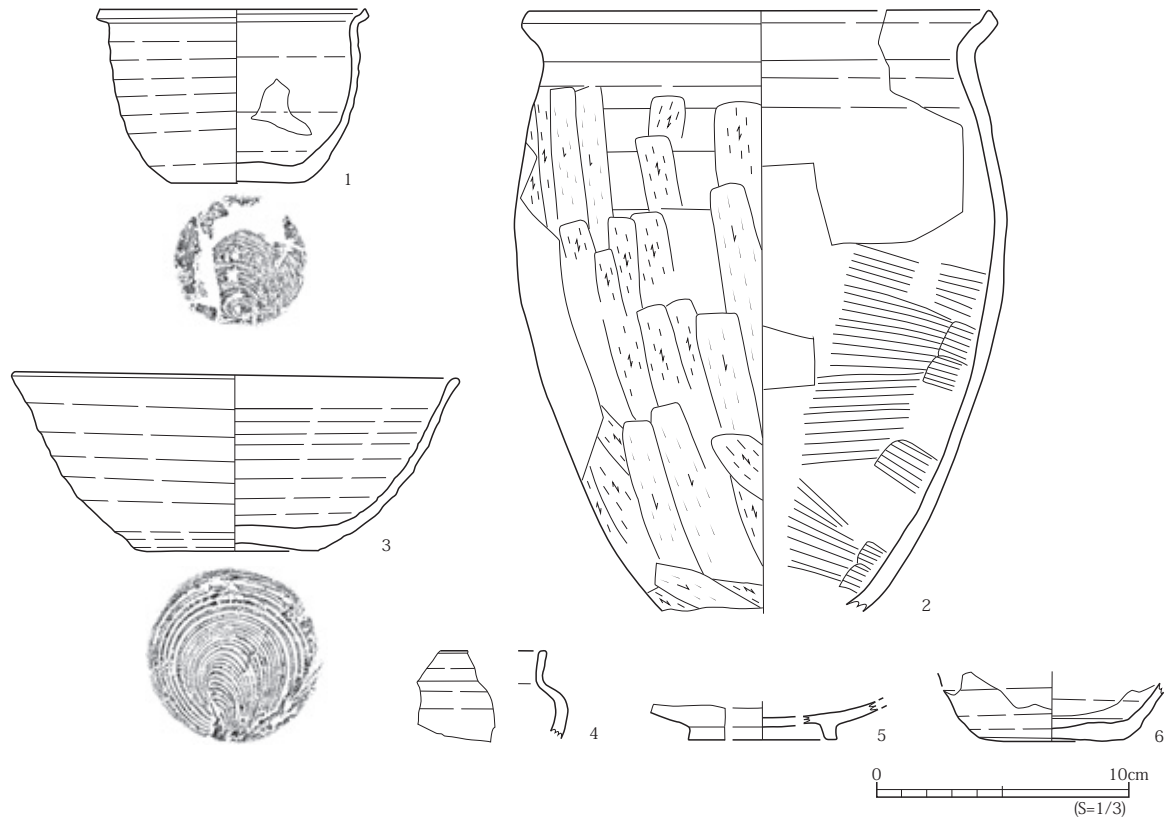
〔規模・平面形〕南東隅付近の東西 1.8 m、南北 2.8 m の範囲を確認した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI62	1	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト		自然堆積 SX94
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト		自然堆積 SX94
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト		自然堆積 SX94
	4	褐色 (10YR4/4) シルト		自然堆積 SX94
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	炭化物粒を少し含む	貼床
	6	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	Ⅲ層と地山 (V層) からなり、炭化物粒を少し含む	掘方埋土
	7	にぶい黄褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	溝 人為堆積
	8	暗褐色 (10YR3/3) シルト		P4 柱痕跡
	9	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	P4 掘方埋土
P1	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト		柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	炭化物粒を微量含む	掘方埋土
	3	にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト		掘方埋土
SI62-P3	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト		柱痕跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	炭化物粒を微量含む	掘方埋土
SD91	1	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックからなり、黄褐色ブロック小を少し含む	人為堆積

第 62 図 SI62 竪穴建物跡





No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕	床南西	ほぼ完形	10.5		5.1	6.9	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り・右 スス付着 内：喫水線コゲ	49-1	1267
2	土師器 甕	4層	1/2	(18.0)			23.8-	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		1386
3	須恵器 坏	1層西	4/5	17.5		6.7	7.2	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		1385
4	須恵器 壺	4層	破片					外：ロクロナデ 蓋の可能性もある		1409
5	須恵器 瓶?	4層	破片			(5.8)	1.5-	外内：ロクロナデ		1387
6	須恵器? 坏	2層	底部片			5.7		外内：ロクロナデ 底部：ナデ 色調：にぶい黄橙色		1390

第 63 図 SI62 竪穴建物跡 出土遺物

〔方向〕 東辺で測ると N-6° -W である。

〔堆積土〕 地山ブロック小、炭化物粒を少し含む黄褐色シルトの自然堆積層である。

〔壁〕 ほとんど残っていなかった。高さは最も残りの良い P3 付近で 10cm である。

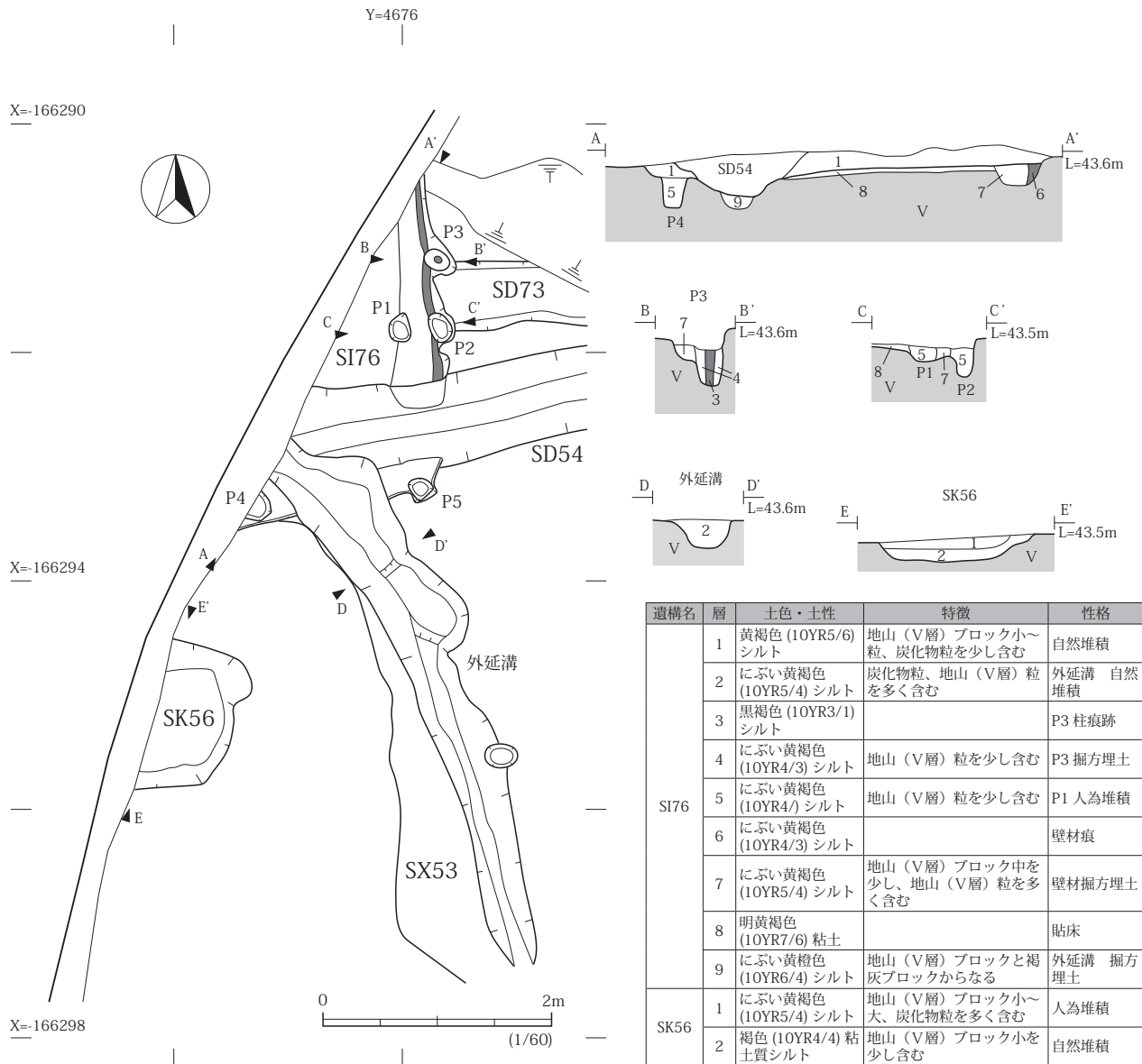
〔床〕 IV層ブロックからなる貼床である。地山のわずかな凹凸を整えたとみられる。厚さは 1～2 cm ほどで、壁周溝付近では地山が床面となっている部分もあった。

〔柱穴〕 東壁に沿う柱穴 (P3)・ピット (P 2・4・5) を確認した。柱穴・ピットの掘方は径 20cm ほどの楕円形である。P3 の柱痕跡は径 10cm ほどの円形である。掘方埋土は V層を主体とする。ピットも位置からみて柱穴であったとみられるが柱痕跡は確認できなかった。

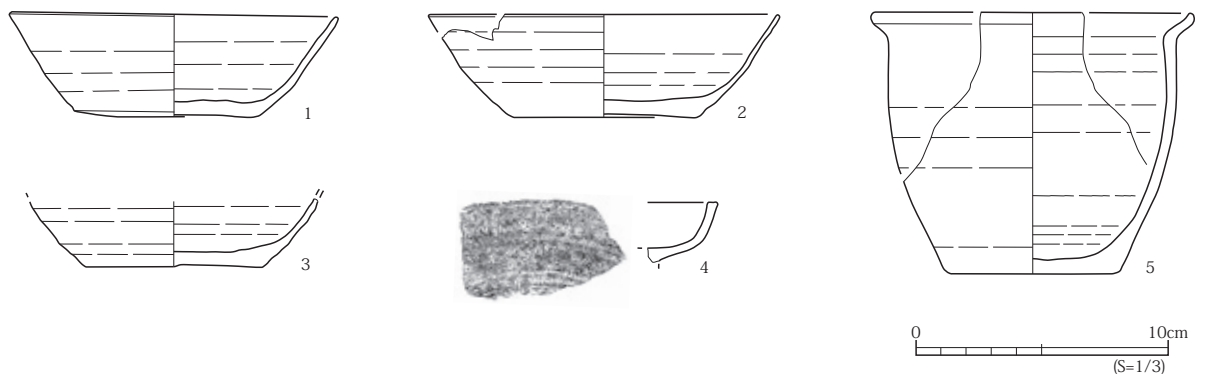
〔カマド〕 確認できなかった。

〔周溝〕 壁材の掘方である。掘方は幅 30～50cm、深さは 20cm である。

〔外延溝〕 建物南東隅から南東方向に向かって延びる。長さは約 4.4 m 分確認した。南端は斜面の傾斜に吸収されて途切れる。幅は 40～80cm で断面形は逆台形である。底面標高は南端で 42.84 m、外延溝北端の周溝底面との比高は 20cm ほどある。建物内で溝の延長を確認しているが、上半は



第 64 図 SI76 竪穴建物跡 SK56 土坑



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	床	ほぼ完形	12.9		7.2	4.2	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	49-2	1308
2	須恵器 坏	床	2/3	(13.8)		7.2	4.1	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		1311
3	須恵器 坏	床	1/4			7.0	2.6~	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		1312
4	須恵器 盤?	外延溝	破片					外内：ロクロナデ へら描「  」	49-6	1313
5	土師器 甕	床	1/3	(12.5)		(6.4)	10.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り 摩滅著しい		1309

第 65 図 SI76 竪穴建物跡 出土遺物

SD54によって壊されていた。その下で残っていた部分は建物の掘方埋土(9層)で埋め戻されていた。〔出土遺物〕床から土師器甕、須恵器坏のほか堆積土からも土師器・須恵器片が出土している。1は床とした面から出土しているがSD54やカクランと接する位置から出土しており、紛れ込みの可能性が高い。4の須恵器は器種が判然としない。外面に「Ⅱ」のヘラ描がある。

【SI78 竪穴建物跡】(第66～73図・図版17)

〔位置・検出面〕7区丘陵部分中央の南側、丘陵南緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。発見当初はSX53に覆われていた。床面北半から炭化物、炭化材、焼土塊などがまとまって出土したことから焼失建物とみられる。

〔重複〕直接の重複はないが、SD54がSX53を掘り込むことからSD54より古い。

〔規模・平面形〕東西4.1m、南北3.7mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-15°-Wである。

〔堆積土〕6層に分けられた。水がたまりやすい場所だったようで、堆積土下層(4～6層)から床はグライ化していた。1・2層は火災後の自然堆積層で、大量の須恵器が出土している。この層では西辺付近でとくに土器が出土している。火災層の3層は、カマド周辺から建物北東隅付近では炭化材が残る。4、5、6層は火災以前の自然堆積である。とくに5層はカマド周辺のみ堆積しており、煙道から流入した自然堆積とみられる。以上の堆積状況から建物の廃絶から火災まで一定の時間があつたことが分かる。

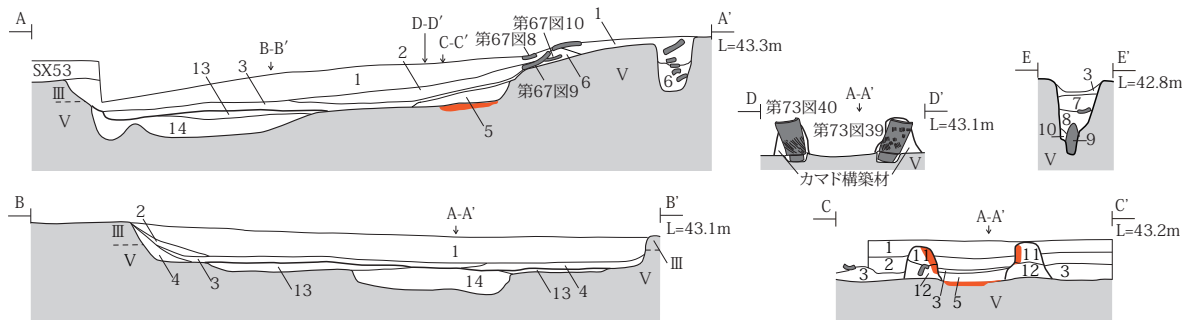
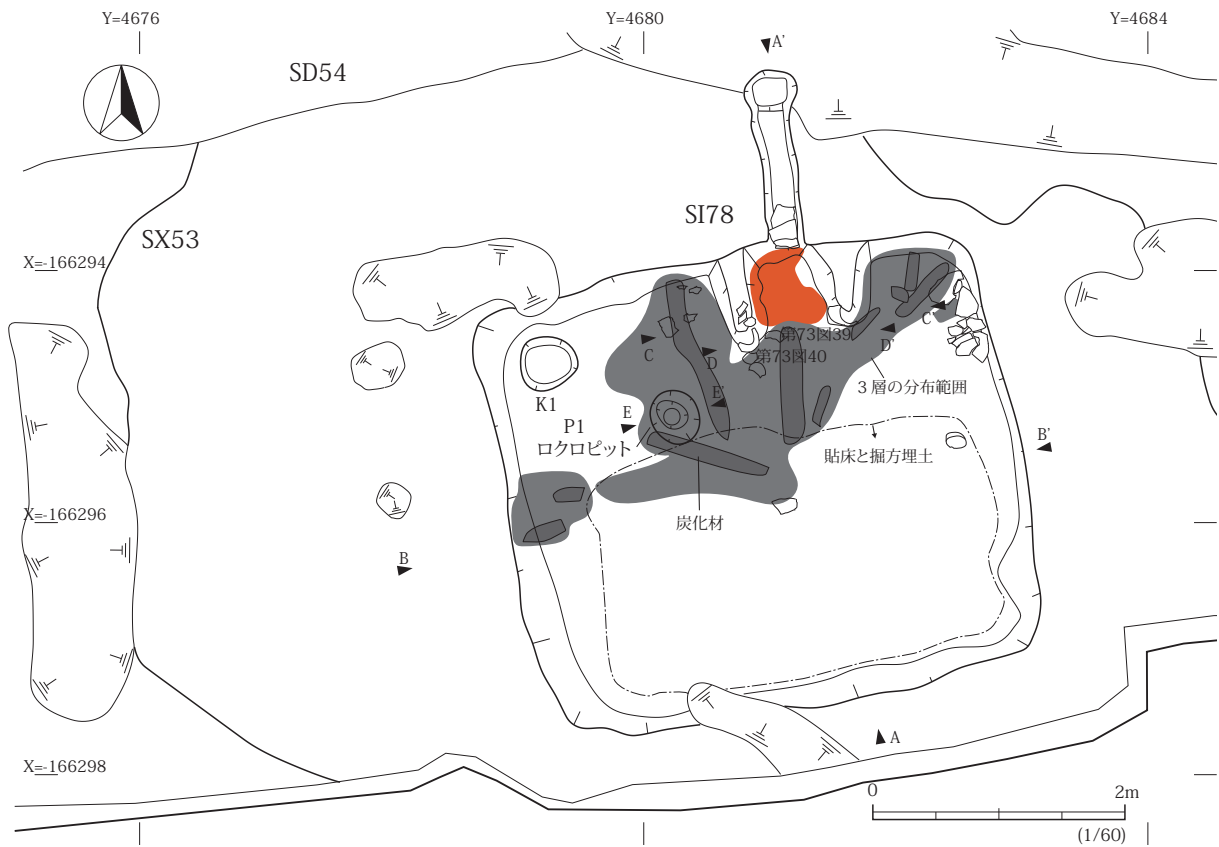
〔壁〕やや外傾して立ち上がる。高さは、最も残りの良い北壁で36cmある。

〔床〕西辺と北辺沿いが地山、それ以外ではⅤ層ブロック主体の掘方埋土、一部では掘方埋土の上に明黄褐色粘土の貼床である。

〔柱穴〕支柱穴は確認していない。

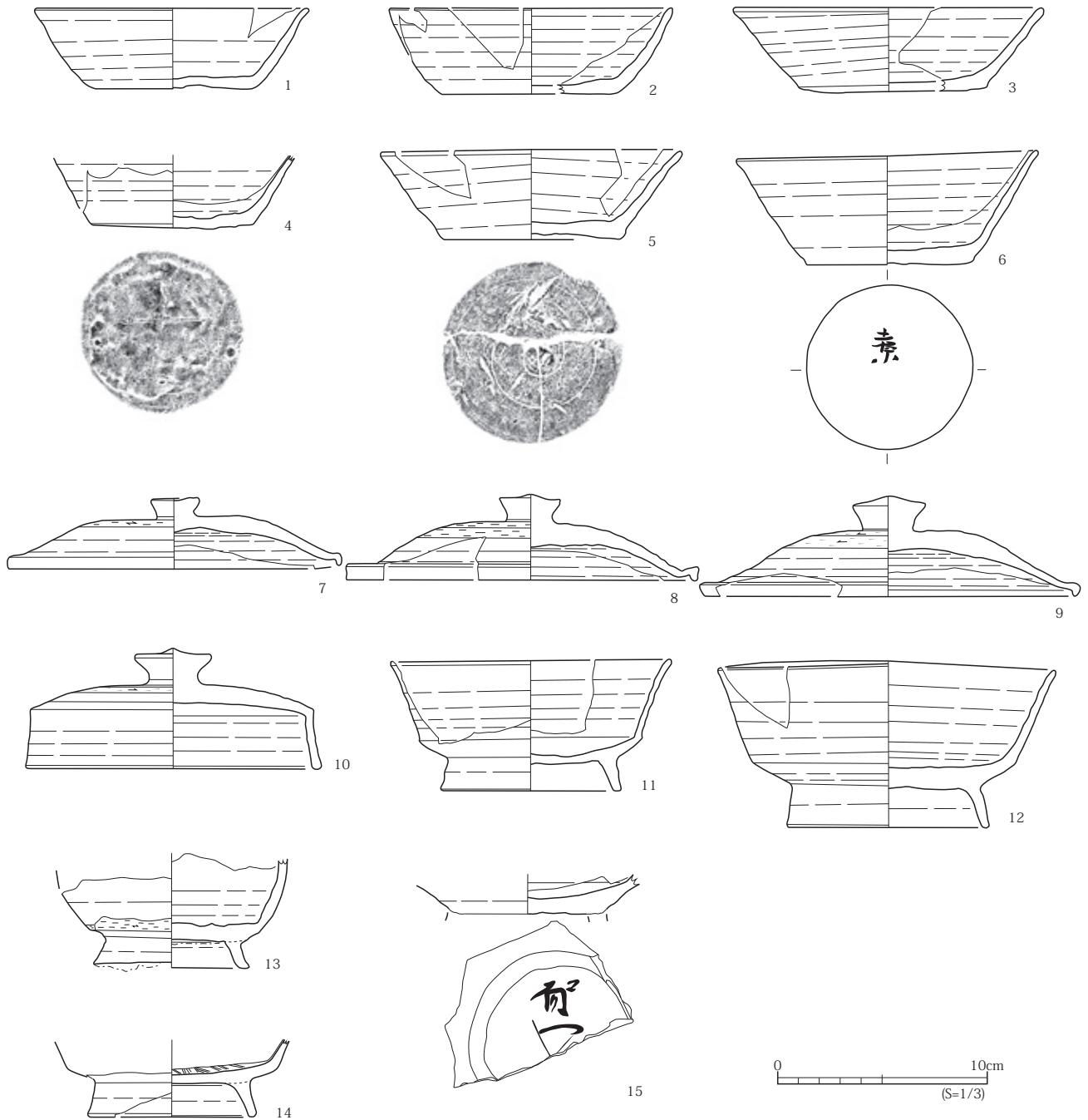
〔カマド〕北壁中央のやや東寄りに付設される。本体部分と煙道部を確認した。本体部分は建物内にあり、左右の側壁は明黄褐色粘土で構築されている。両側壁前端には丸瓦39・40を玉縁部を下にして据えて芯材としている。左側壁では検出面で須恵器壺片が構築粘土から露出していたほか、断ち割り時に断面でも須恵器坏片・壺片が出土した。土器片を補強材として使っていた可能性がある。煙道は長さ1.5mで先端に直径36cmの煙出しピットを設ける。煙出しピットの底面は煙道の底面から40cm深い位置にある。

〔そのほかの施設〕P1がある。建物中央やや北西よりにあり、長軸66cm、短軸45cmの楕円形、断面は漏斗状である。軸径6cm、軸長49cmである。ピットの位置と形態、建物内にほかに組み合うピットがないことからロクロピットと判断した。検出時には円形の窪みに3層(火災層)が堆積しており、これを除去した後も軸木痕跡は確認できなかった。下層で壁寄りにわずかに残っていた軸木痕を確認したが、大部分は軸木が腐食して空洞となっていた。



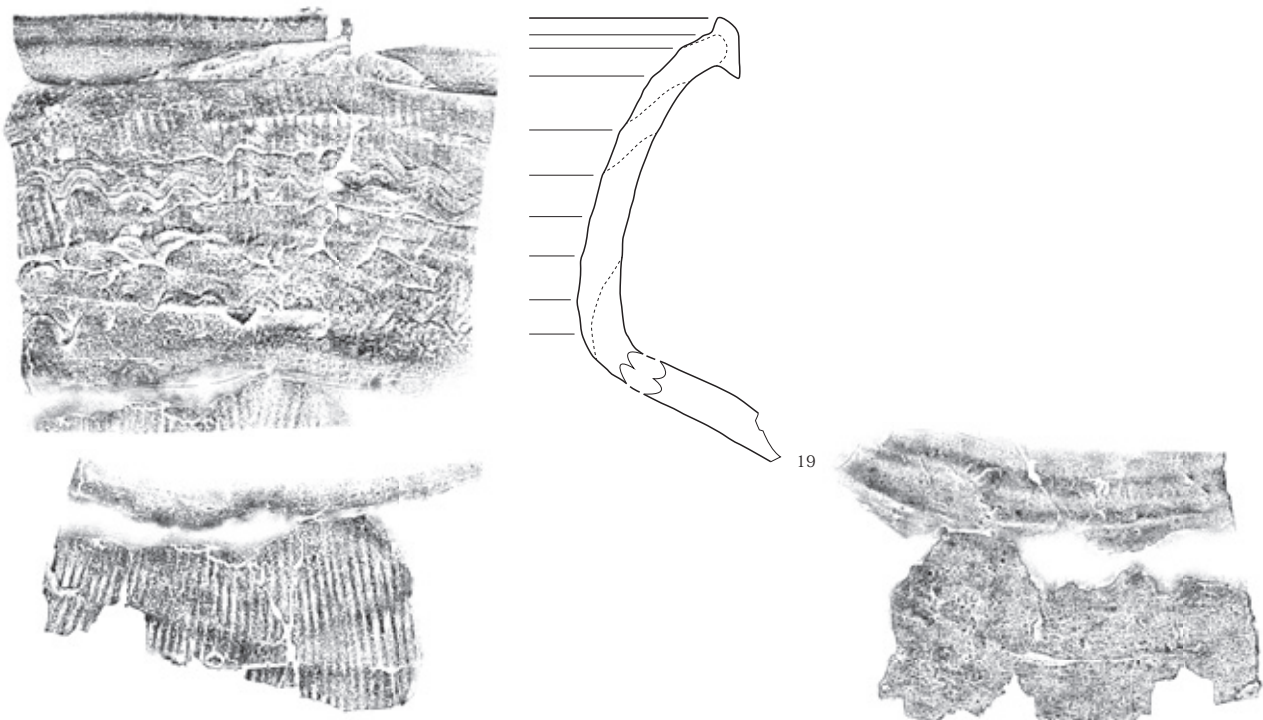
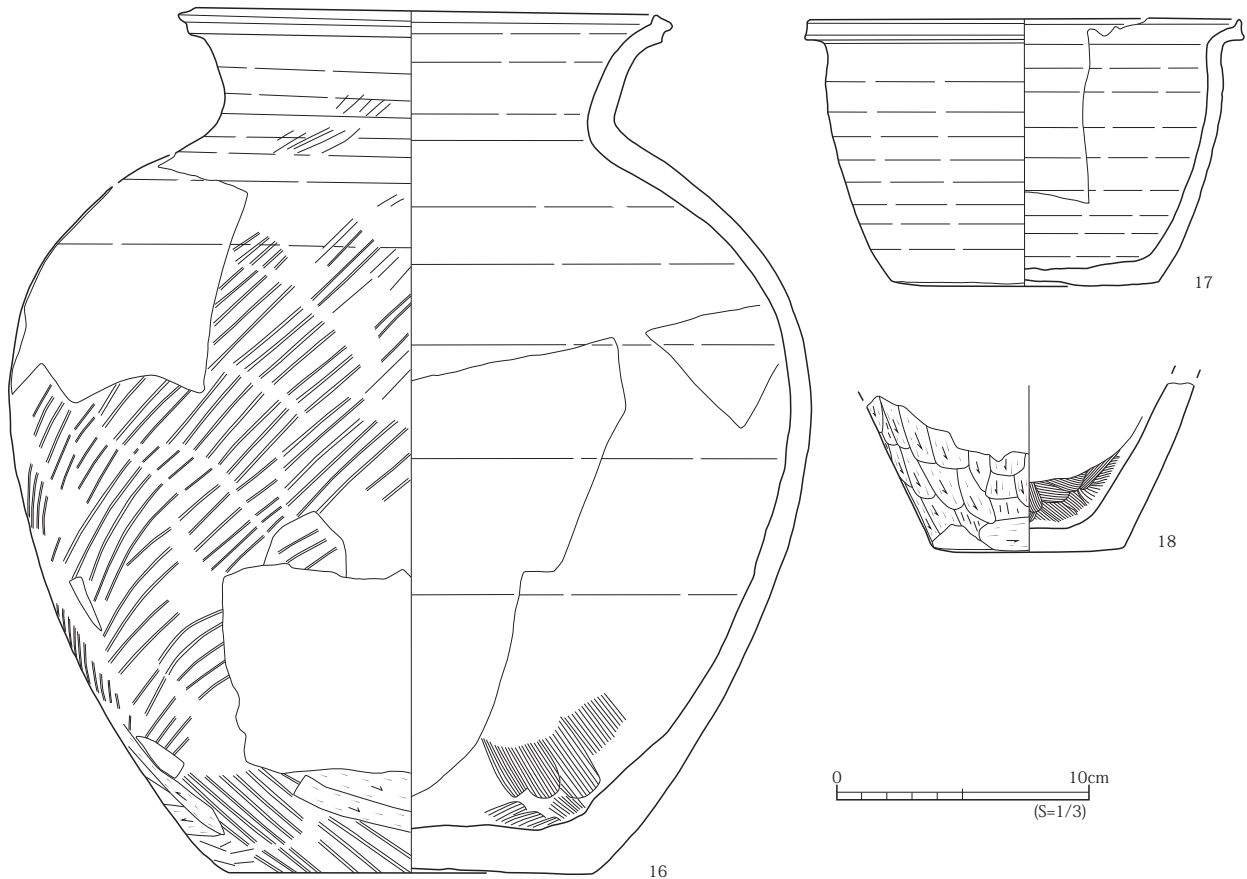
遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI78	1	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小、炭化物粒を少し、鉄・マンガンを多く含む	自然堆積
	2	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR3/1)	炭層	火災時の堆積
	4	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト		自然堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	地山 (V層) ブロック小〜大を多く、焼土塊小を少し含む	自然堆積
	6	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) ブロック大、Ⅲ層ブロック小、炭化物粒・焼土粒を多く含む	自然堆積
	7	にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる	P1 人為堆積
	8	褐灰色 (10YR4/1) 粘土	グライ化した地山 (V層) ブロック小を多く含む	P1 人為堆積
	9	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土		軸木痕跡
	10	褐灰色 (10YR4/1) 粘土		P1 掘方埋土
	11	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト		カマド構築材
	12	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト		カマド構築材
	13	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる	貼床
	14	暗褐色 (10YR3/3) 粘土	地山 (V層) ブロックと黒褐色土からなる	掘方埋土

第 66 図 SI78 竪穴建物跡



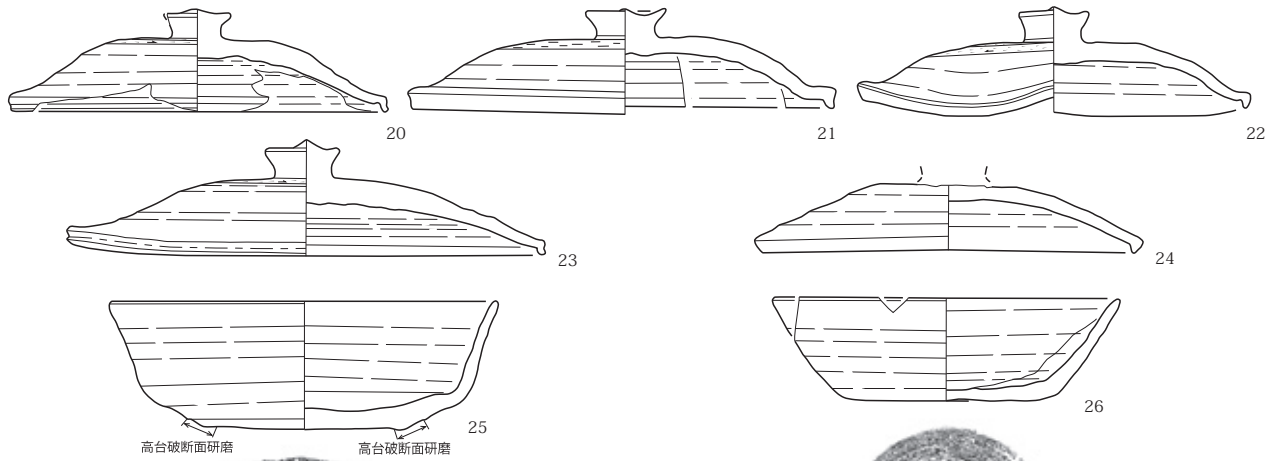
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	堆積土	2/3	12.9		7.4	3.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ十字	45-1	1212
2	須恵器 坏	2層北西	1/2	13.4		8.2	4.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 赤褐色		1234
3	須恵器 坏	1層	1/3	14.6		8.6	4.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1230
4	須恵器 坏	2層	1/4			7.6	3.6-	外内：ロクロナデ 底部：内外指頭圧痕 「十」ヘラ描き		1224
5	須恵器 坏	3層南西	ほぼ完形	14.2		8.4	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ	45-2	1236
6	須恵器 坏	2層	2/3	14.2		7.9	5.5	外内：ロクロナデ 底部：墨書「煮」 内面のみ火ダスキ十字	46-5.73-5	1219
7	須恵器 蓋	2層	ほぼ完形	15.7			3.4	ボタン 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ 外面自然釉かかる	45-3	1215
8	須恵器 蓋	2層	2/3	16.6			4.1	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1217
9	須恵器 蓋	2層	3/4	17.6			4.8	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	45-4	1237
10	須恵器 蓋	1層	ほぼ完形	13.8			5.8	擬宝珠 外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ	45-5	1229
11	須恵器 高台坏	1層	1/3	13.3		8.4	6.3	外内：ロクロナデ 底：回転ケズリ→ナデ		1226
12	須恵器 高台坏	堆積土	ほぼ完形	15.9		9.4	7.9	外内：ロクロナデ 赤褐色	45-7	1225
13	須恵器 高台坏	堆積土	底部~体部			7.4		外内：ロクロナデ 外内自然釉かかる		1213
14	土師器 高台坏	1層・2層南西	胴部~底部			7.8	3.7-	外：ロクロナデ 内：黒色処理		1233
15	須恵器 高台坏	1層	底部			1.9-		墨書「賀」ヘラ描「十」	46-6.73-2	1228

第 67 図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物 (1)



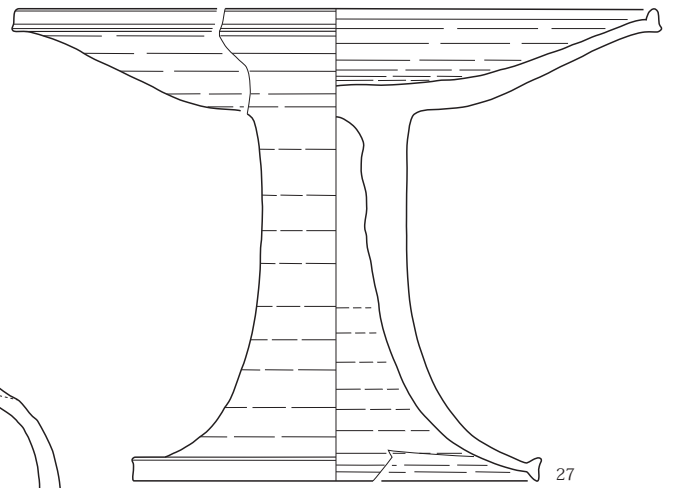
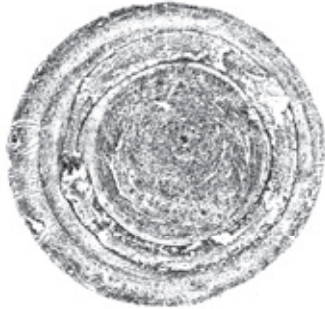
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
16	須恵器 甕	2層 下	3/4	18.2	31.7	14.3	34.4	外：ロクロナデ→平行叩き→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	46-1	1259
17	須恵器 鉢	検出面	1/5	(17.0)		10.5	10.6	外内：ロクロナデ	45-8	1210
18	土師器 甕	2層	体部～底部			7.6		外：ケズリ 内：ナデ		1366
19	須恵器 甕	2層	口縁部片	推定 50 ～ 55			残存高 17.6	外：口縁部～胴部上平行叩き→波状文 胴部平行叩き 内：無文当て具痕 外内自然釉付着	46-2	1291

第 68 図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物 (2)

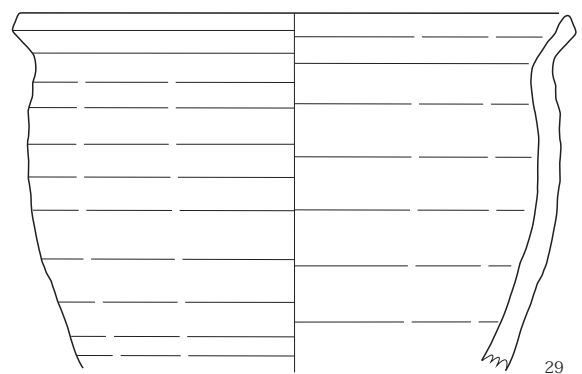
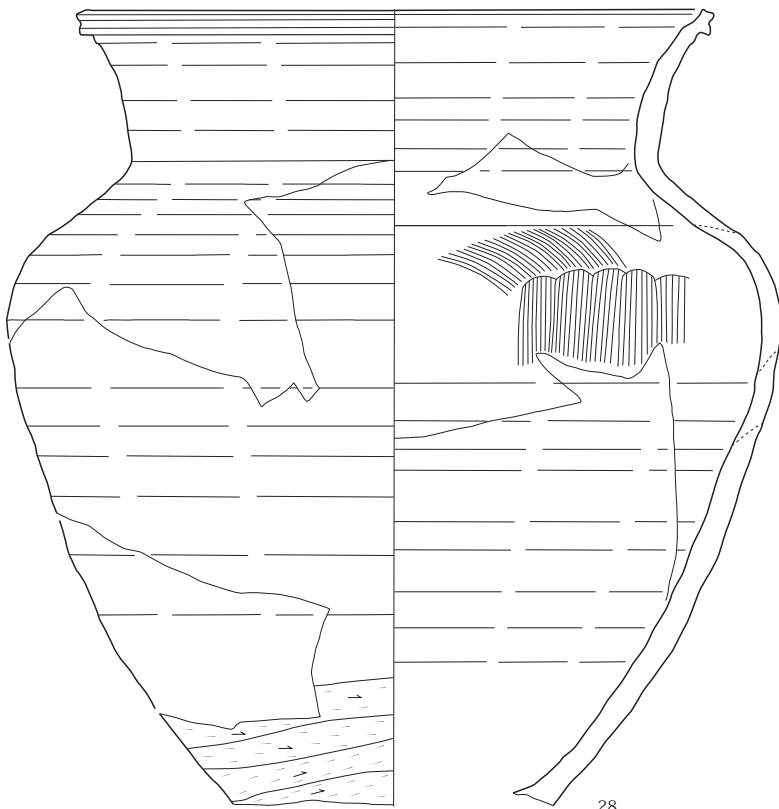


高台破断面研磨

高台破断面研磨

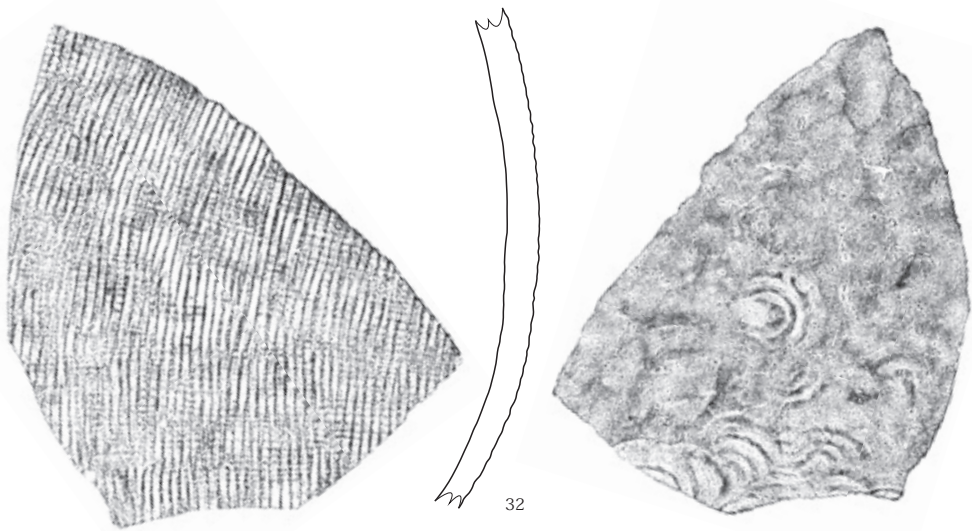
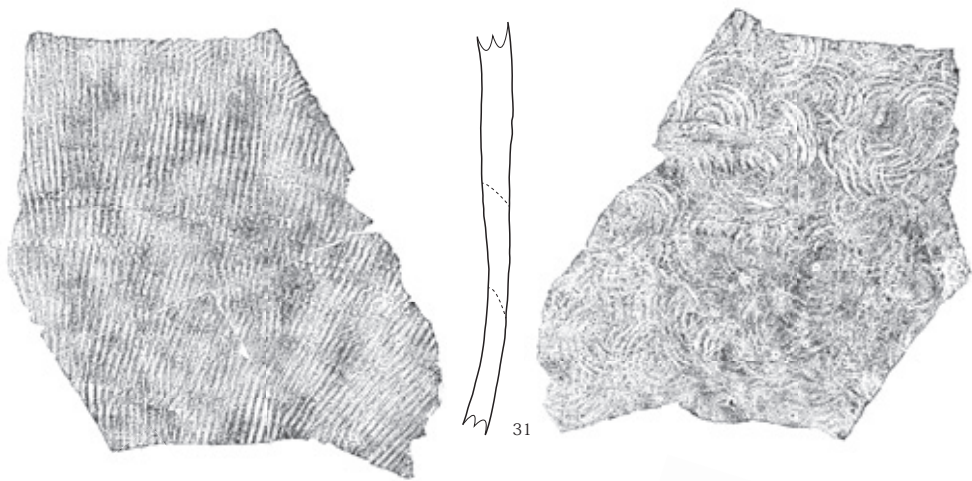
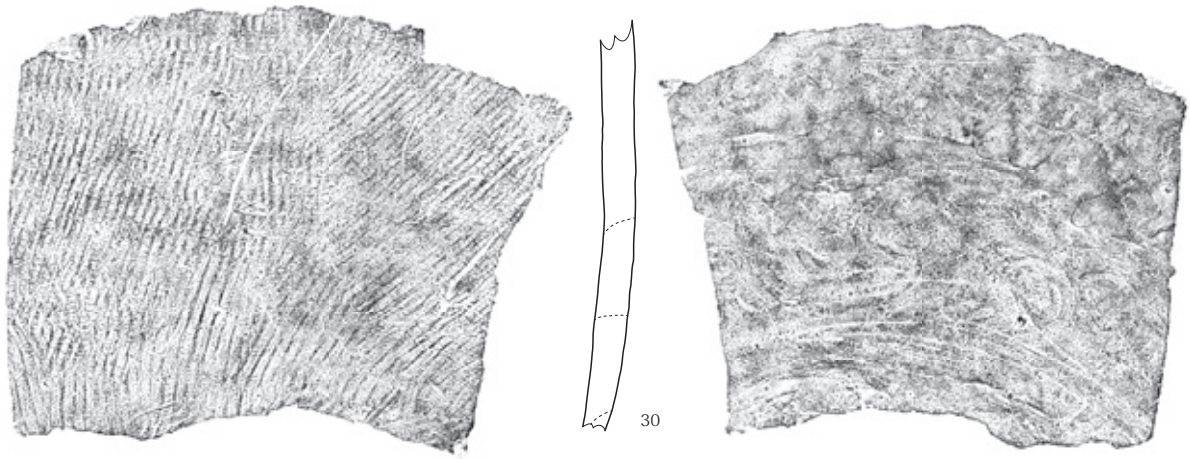


0 10cm (S=1/3)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
20	須恵器 蓋	床	ほぼ完形	14.8			4.0	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井ケズリ 焼けムラあり		1245
21	須恵器 蓋	床	2/3	16.6			4.2	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1246
22	須恵器 蓋	7層	完形	15.2			4.3	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	45-6	1243
23	須恵器 蓋	床	ほぼ完形	18.7			4.6	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1257
24	須恵器 蓋	床	摘まみ欠	14.6			2.7~	外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ 重ね焼き痕明瞭		1258
25	須恵器 高台坏	床	高台欠	15.2			(5.1)	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ 高台破断面研磨	46-3	1250
26	須恵器 坏	床	1/2	(13.6)		8.3	4.1	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		1248
27	須恵器 高坏	床	3/4	(25.2)		16.0	18.7	外：ロクロナデ 坏部と脚部の接合部分回転ケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	46-4	1254
28	須恵器 壺	床	1/3	22.4	28.7		31.5~	外：ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	47-1	1253
29	土師器 鉢	床	1/5	21.7			14.2~	外内：ロクロナデ		1251

第 69 図 S178 竪穴建物跡 出土遺物 (3)

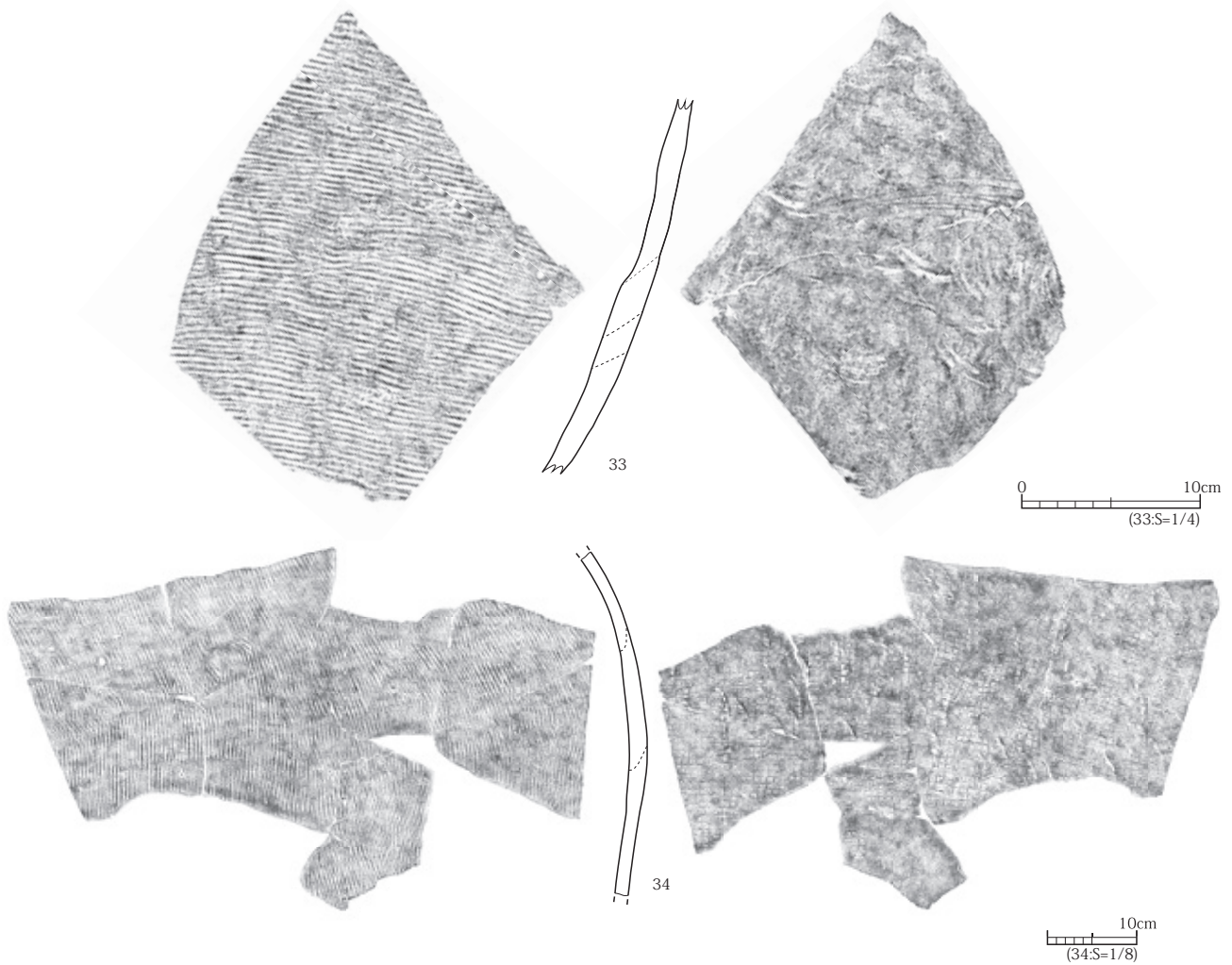


0 10cm  
(S=1/4)

No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
30	須恵器 甕	床	破片					外：擬格子叩き 内：同心円文当て具痕		1255-1
31	須恵器 甕	床	破片					外：擬格子叩き 内：同心円文当て具痕	48-1	1255-2
32	須恵器 甕	床	破片					外：擬格子叩き 内：同心円文当て具痕 破断面に釉付着、焼き台転用か		1255-3

第70図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物（4）





No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
33	須恵器 甕	床	大型破片					外：擬格子叩き 内：同心円文当て具痕	48-2	1249
34	須恵器 甕	床	体部破片 大形					外：擬格子叩き（斜め） 内：格子文当て具痕	47-2	1241

第 71 図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物（5）

【SI90 竪穴建物跡】（第 74 ～ 76 図・図版 16）

〔位置・検出面〕 7 区丘陵平坦面南端に位置し、Ⅲ層で検出した。壁が確認できなかったが、貼床とみられる粘土の広がり、その下から掘方埋土を確認したほか、西側で壁周溝を確認したことから竪穴建物跡として報告する。全体の南側の一部を確認したと考えられる。竪穴建物跡の北側と考えられる部分では、用水路掘方があり、その北側で断面検出を試みたが用水路掘方が調査区外まで続いていたため、確認できなかった。

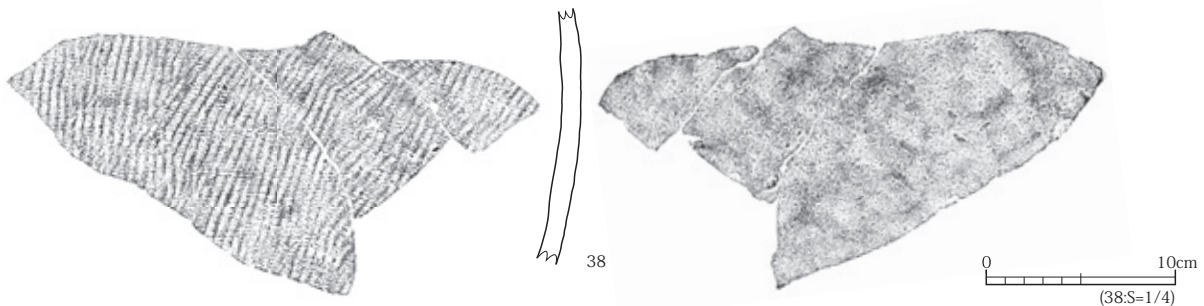
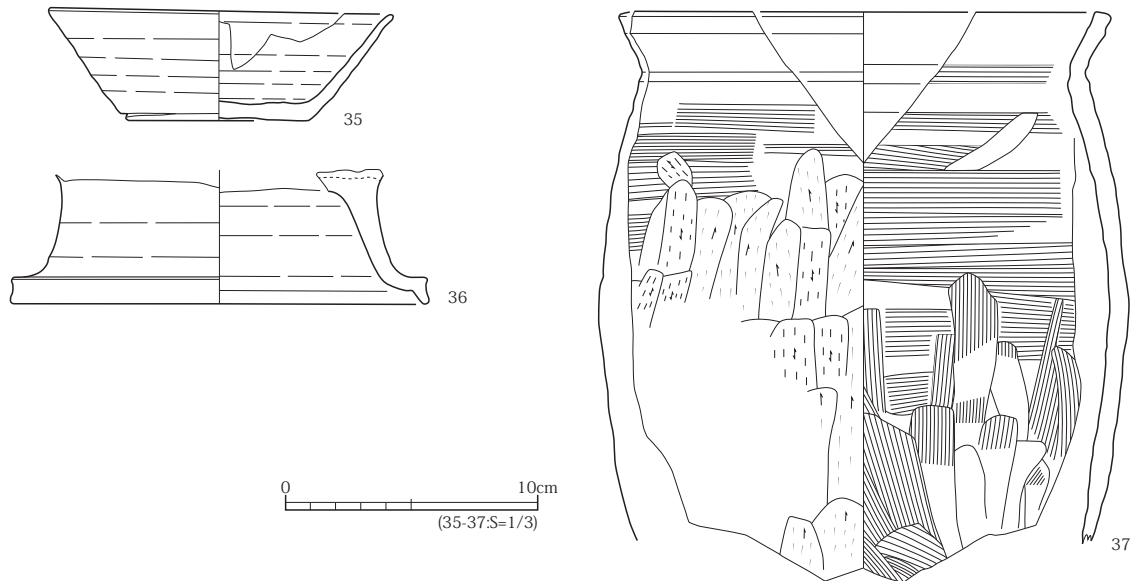
〔重複〕 SX92、SK93、SX94 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕 東西 7.4 m、南北 1.7 m 以上である。

〔方向〕 壁周溝で測ると N-3° -E である。

〔堆積土〕 SX94 が堆積する。このことから SI90 と SI62 は、10 層を掘り込む SX92 の構築以前の古代に壁、床の一部まで削平されたことが分かる。

〔壁〕 残っていない。



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
35	須恵器 坏	カマド左側壁内・ロクロピット1層	ほぼ完形	13.3		7.1	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ十字	47-3	1244
36	土師器 脚付壺	1層	脚部のみ			(16.3)	5.3~	外内：ロクロナデ	47-4	1227
37	土師器 甕	6層	1/6	(18.4)			22.6~	外：ナデ（カキ目状）→ケズリ 内：ナデ（カキ目状）→ケズリ外にスス		1242
38	須恵器 甕	1層	破片					外：擬格子叩き 内：無文当て具痕		1239

第72図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物（6）

〔床〕黄褐色粘土からなる貼床である。厚さは1～3cmである。掘方埋土はV層ブロックを主体とする。

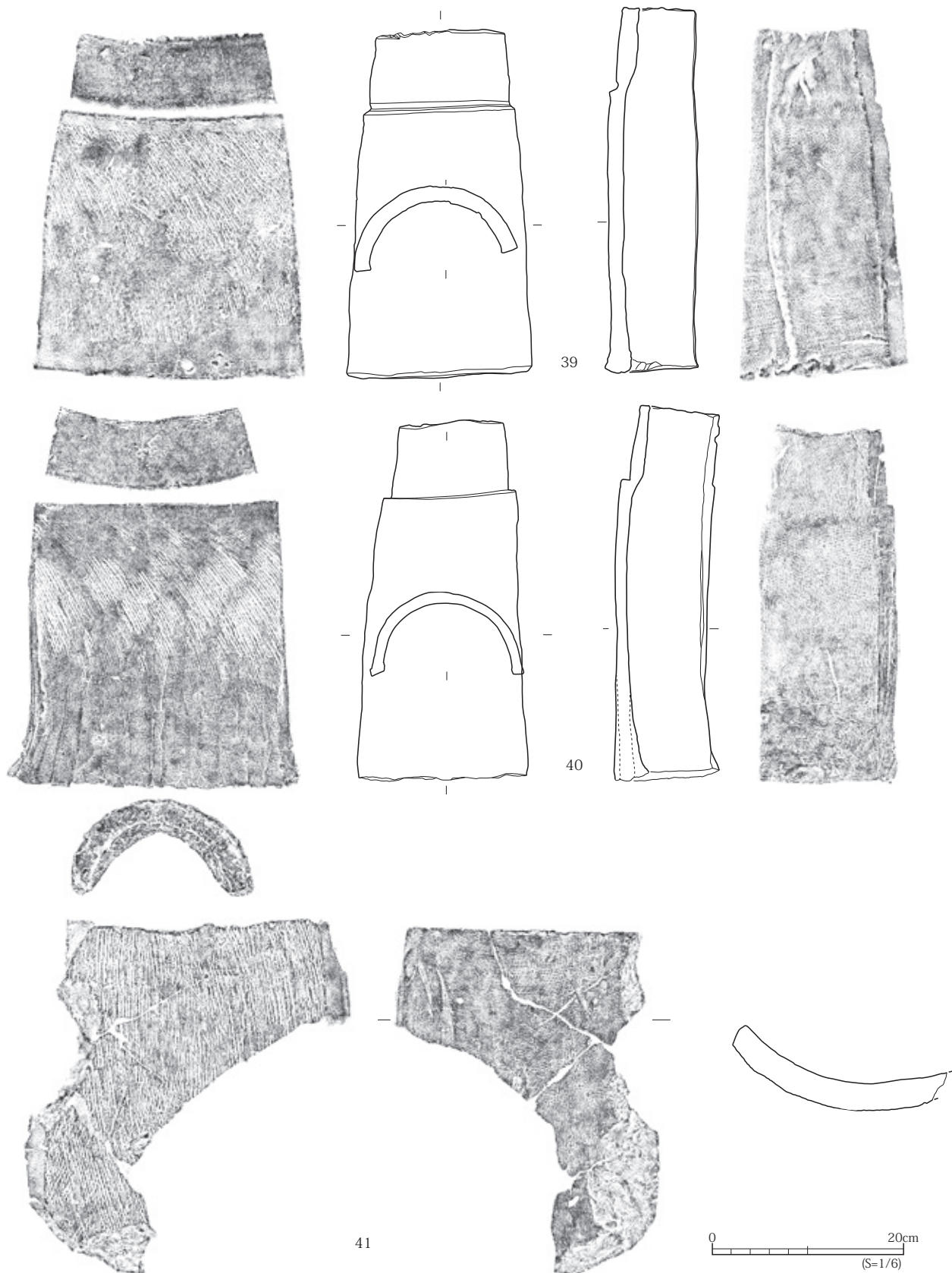
〔柱穴〕支柱穴は確認していない。

〔カマド〕確認していない。

〔周溝〕西辺で検出した排水溝である。後述する瓦の位置の東側の延長上が竪穴建物跡の掘方埋土の南端であることから、瓦周辺が周溝と外延溝の境と判断した。西辺南西隅とみられる位置で南に延びる外延溝と接続する。外延溝と接続する位置では12の軒平瓦が凸面を上向けて、さらにその上から9の大甕片と平瓦片が出土した。これらの土器、瓦はもとの位置からやや動いたとみられるものの、溝に架けて暗渠蓋にしていたと考えられる。また、瓦の上に貼床が認められた。このほかにも西辺で瓦が出土したほか、東辺を壊すSK93でも平瓦が出土している。堆積土は自然堆積層である。

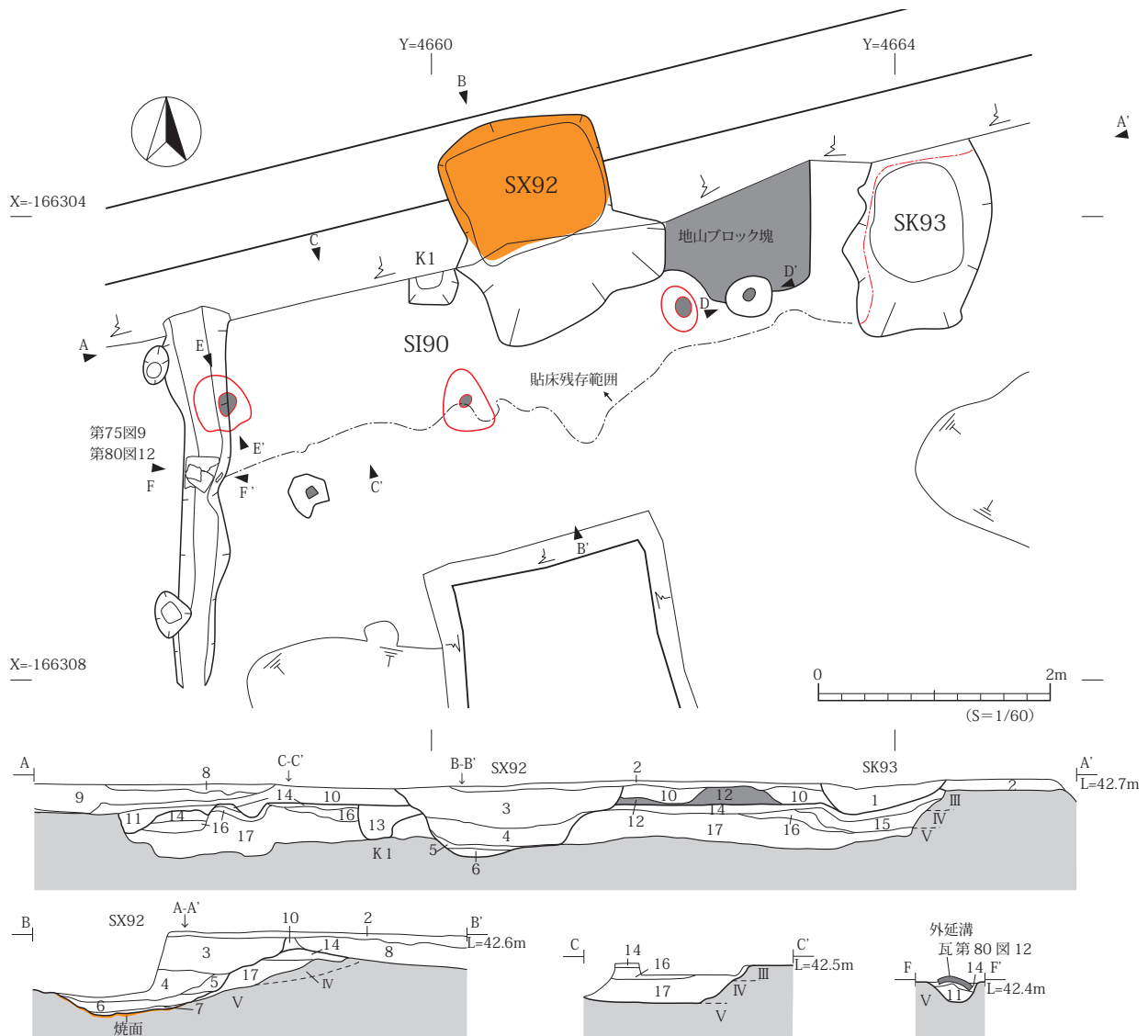
〔外延溝〕貼床残存範囲南西端からの長さ1.8m、幅30～40cmほどである。断面は逆台形である。

〔出土遺物〕堆積土と床から土師器高台皿、甕、須恵器坏、蓋、高台坏、平底甕、鬼板、周溝から軒平瓦、平瓦、須恵器大甕、土製品が出土した。須恵器坏は底部が再調整とヘラ切りのものが出土している。



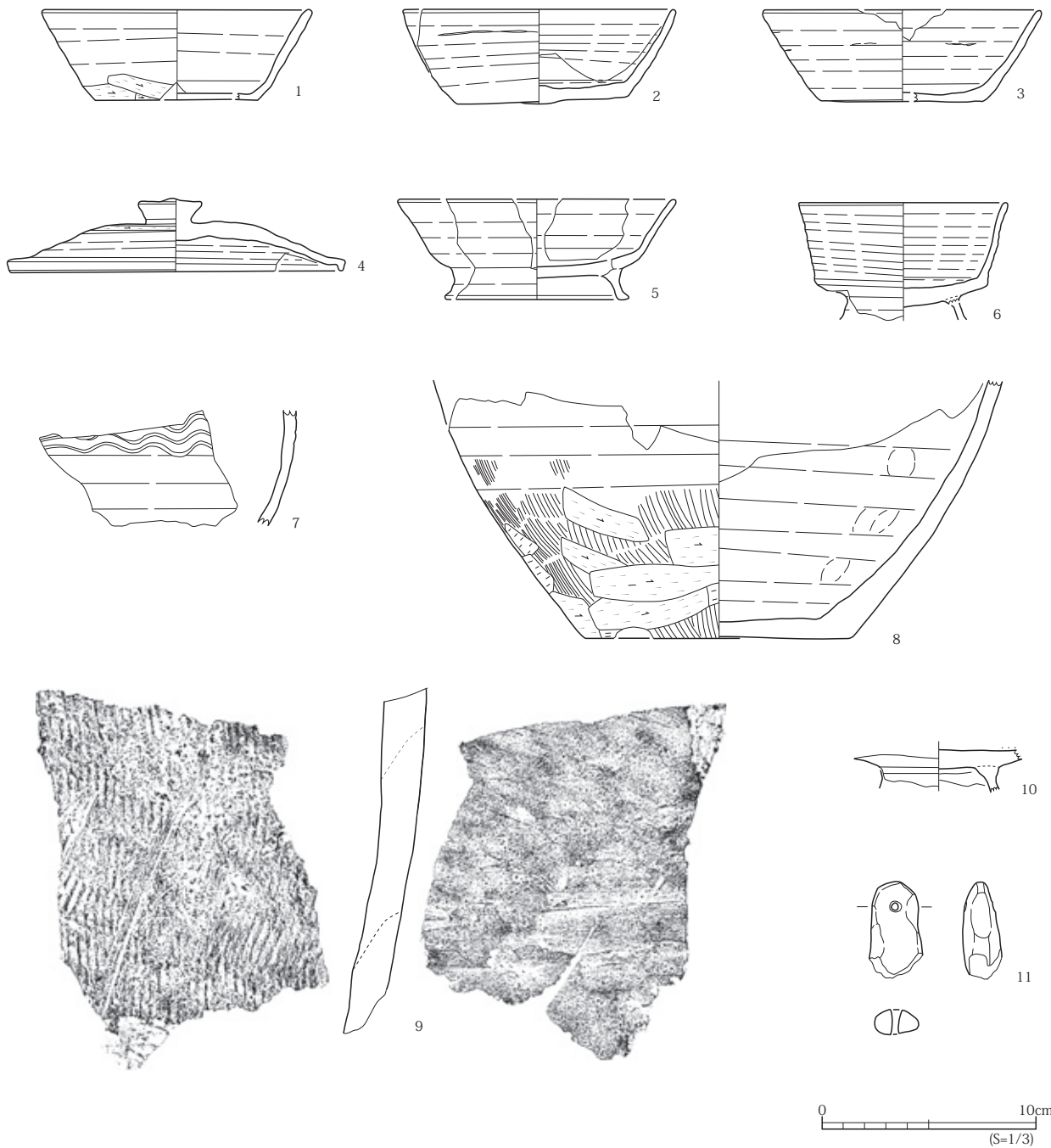
No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
39	丸瓦	I	カマド 右袖	完形	全長：36.2cm 丸瓦部長：28.0cm 丸瓦部広端幅：19.0cm 狭端幅：16.0cm 玉縁部広端幅：14.7cm 狭端幅：13.7cm 重量：2.1kg 凸面：縄目→ロクロナデ 凹面：布目（布の合わせ目痕有り） 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白	48-3	K14
40	軒丸瓦	III	カマド 左袖	4/5 瓦当部欠損	全長 37.0cm 丸瓦部長：29.7cm 丸瓦部広端幅：17.3cm 玉縁部広端幅：12.0cm 狭端幅：10.6cm 重量：2.3kg 周縁：ケズリ 【丸瓦】凸面：縄目→ロクロナデ 凹面：布目	7.5Y8/1 灰白	48-4	K15
41	平瓦	I	SI78	1/3	長：36.5cm 重量：2.3kg 凸面：縄目 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白		K16

第 73 図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物（7）



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK93	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	砂を多く含む	SK93 堆積土 自然堆積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物多く含む	SX92 堆積土 人為堆積
SX92	3	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物、地山 (V層) ブロック小を多く含む	SX92 堆積土 人為堆積
	4	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	焼土ブロック、地山 (V層) ブロック小を含む	SX92 堆積土 人為堆積
	5	黒色 (10YR2/1) シルト	炭化物を多く含む、土器片を含む	SX92 堆積土 人為堆積
	6	褐灰色 (10YR4/1) シルト	炭化物、土器片を少し含む	SX92 堆積土 人為堆積
	7	黒色 (10YR2/1)	炭層	炭層 自然堆積
	8	黒褐色 (10YR3/2) シルト		SX94
	9	黒褐色 (10YR3/2) シルト		SX94
SI90	10	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物少し 土器多く含む	SX94
	11	暗褐色 (10YR5/2) シルト	床由来のにぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土ブロック小を少し含む	壁周溝自然堆積
	12	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	地山 (V層) (上層の粘土とその下層のやや硬い土) からなる	掘削残土
	13	褐色 (10YR4/4) シルト	SI90-4 層より炭化物多く含む 土器少し含む	K1 自然堆積
	14	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		貼床
	15	暗褐色 (10YR3/3) シルト	焼土・炭化物を多く含む	掘方埋土
	16	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土	暗褐色 (10YR3/3) シルトを多く含む	掘方埋土
	17	黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックと黒褐色土からなる	掘方埋土

第 74 図 SI90 竪穴建物跡 SX92 土師器焼成遺構 SK93 土坑



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	床	破片	(12.4)		(7.6)		外：ロクロナデ 下部持ちケズリ 内：ロクロナデ 底部：持ちケズリ		1397
2	須恵器 坏	8層	2/3	(12.6)	8.0	4.4	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ十字	49-3	1393
3	須恵器 坏	床	1/2	(12.8)		(7.4)	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1400
4	須恵器 蓋	床	ほぼ完形	15.2~ 15.5 (最大)			3.5	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	49-4	1401
5	須恵器 高台坏	4層	破片	(12.8)		(8.4)	4.7	外内：ロクロナデ		1408
6	須恵器 高台坏	床	1/2	9.6				外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ		1398
7	須恵器 壺か瓶	8層	破片					外内：ロクロナデ 櫛描波状文(櫛歯数3)		1395
8	須恵器 甕	床	体部中~底部			12.3		外：平行叩き→ロクロナデ 体部下2/3 平行叩き→持ちケズリ 内：当て具痕→ロクロナデ		1399
9	須恵器 甕	堆積土						外：平行叩き 内：ナデ		1413
10	土師器 高台皿	1層	底部片					外：ケズリ→ナデ 内：黒色処理		1394
11	土製品 錘?	壁周溝	破片						49-5	1396

第75図 SI90 竪穴建物跡 出土遺物(1)



No	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
12	軒平瓦	II	壁周溝	完形	長：38.5cm 広端幅：28.0cm 狭端幅：25.0cm 重量：4.2kg 【瓦当】 瓦当面：ケズリ→無文 顎面：縄叩目→鋸歯文 段頸 【平瓦】凸面：縄叩目 凹面：糸切痕→布目 側端・小口：ケズリ	2.5Y7/1 灰白	49-7	K19
13	道具瓦(磚?)	II	堆積土	1/3	長：17.0cm 幅：24.5cm 厚さ：2.2cm 凸面：縄叩目 凹面：糸切痕→布目→平行(叩板状) 圧痕?→指ナデ	7.5YR6/1 褐灰	49-8	K20
14	鬼板	I	堆積土	破片	表：縄叩目→布目(かすか) 裏：縄叩目 側端：ケズリ	7.5YR6/1 褐灰	49-9	K22

第76図 SI90 竪穴建物跡 出土遺物(2)

### (3) 土坑

土坑は 44 基検出され、これらには被熱の痕跡が認められるものと、認められないものがある。

前者のうち、SX 3・4・7・8・15・31・33・34・37・38・39・46・82・92 の 14 基は、平面形が長軸 1.5m 以上の方形・円形を基調とし、斜面上方に位置する壁が比較的急角度で立ち上がる特徴を持つ。これらには、斜面上方側の壁が下方側に比べて長いもの、被熱範囲が底面中央から斜面上方側にかけて認められ その一部がより強く被熱しているもの、底面直上に炭化物層が薄く堆積するもの、堆積土から土師器小片や焼成粘土塊などが出土するものが認められる。このような構造上の特徴と出土遺物から、これらを土師器焼成遺構とした。なお、被熱痕跡が認められるもののうち土師器焼成遺構以外の 10 基を焼成土坑、被熱痕跡が認められない 22 基を土坑とする。

以下では、(i) 土坑、(ii) 土師器焼成遺構、(iii) 焼成土坑の順で報告する。

#### (i) 土坑

##### 【SK9 土坑】(第 77～80 図・図版 20)

〔位置・検出面〕 8 区西端付近の緩斜面に位置し、SX8 上面で検出した。

〔重複〕 SX8・SK13 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 0.8m、短軸 0.6m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、炭化物・焼土・鉄滓を多く含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できたものは第 80 図 -7 の土師器甕のみである。周囲の土師器焼成遺構に由来するとみられる。

##### 【SK10 土坑】(第 77・78 図・図版 20)

〔位置・検出面〕 8 区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 0.7m、短軸 0.6m、確認面からの深さは 15cm である。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形である。

〔堆積土〕 2 層に分けられた。いずれも炭化物を含む人為堆積層である。1 層は鉄滓を多く含む。

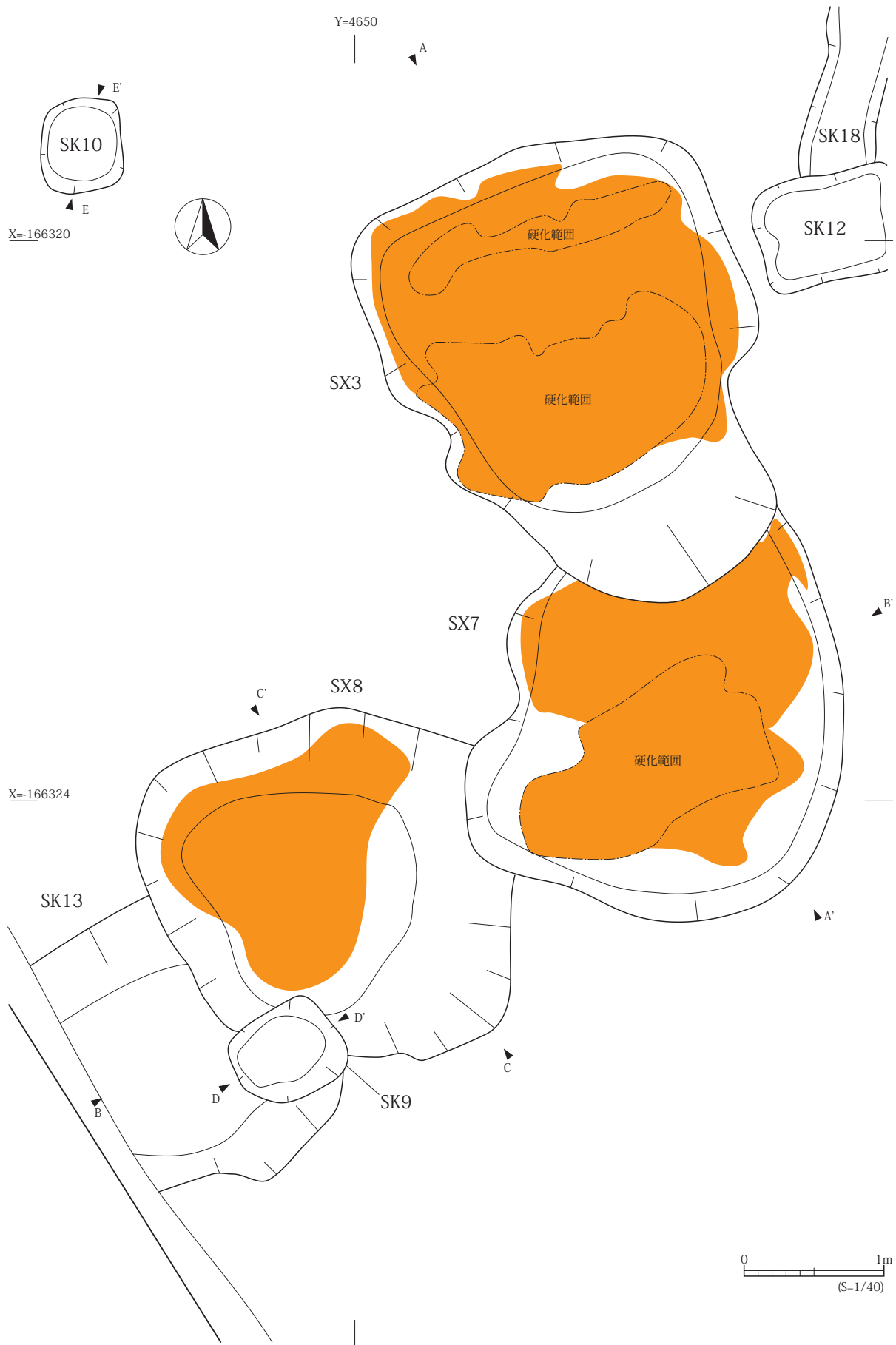
〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できる遺物はなかった。

##### 【SK13 土坑】(第 77～80 図)

〔位置・検出面〕 8 区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

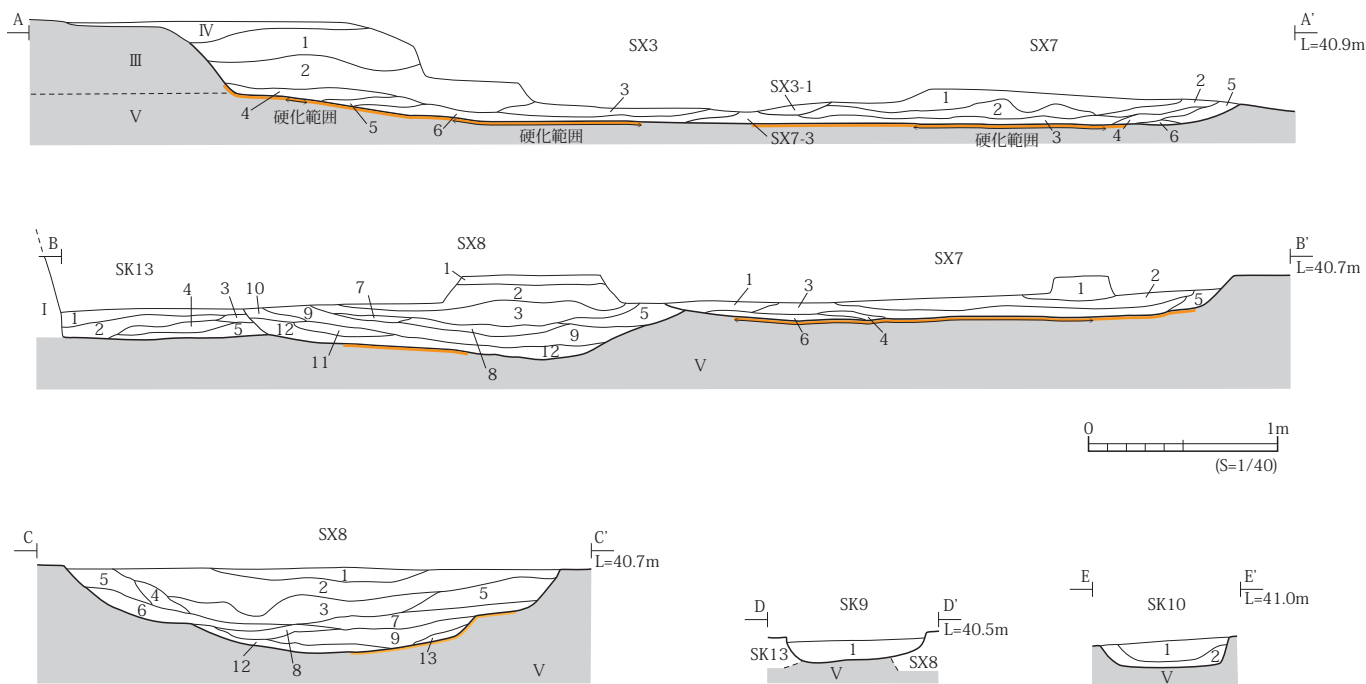
〔重複〕 SK9・SX8 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形・断面形〕 遺構西側が、調査区外にあるため平面形は調査区壁と切り合いのため分からない。東西 1.6m 以上、南北 1.8m、確認面からの深さは 16cm である。壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。



第77図 SK9・10・13土坑 SX3・7・8土師器焼成遺構 (1)



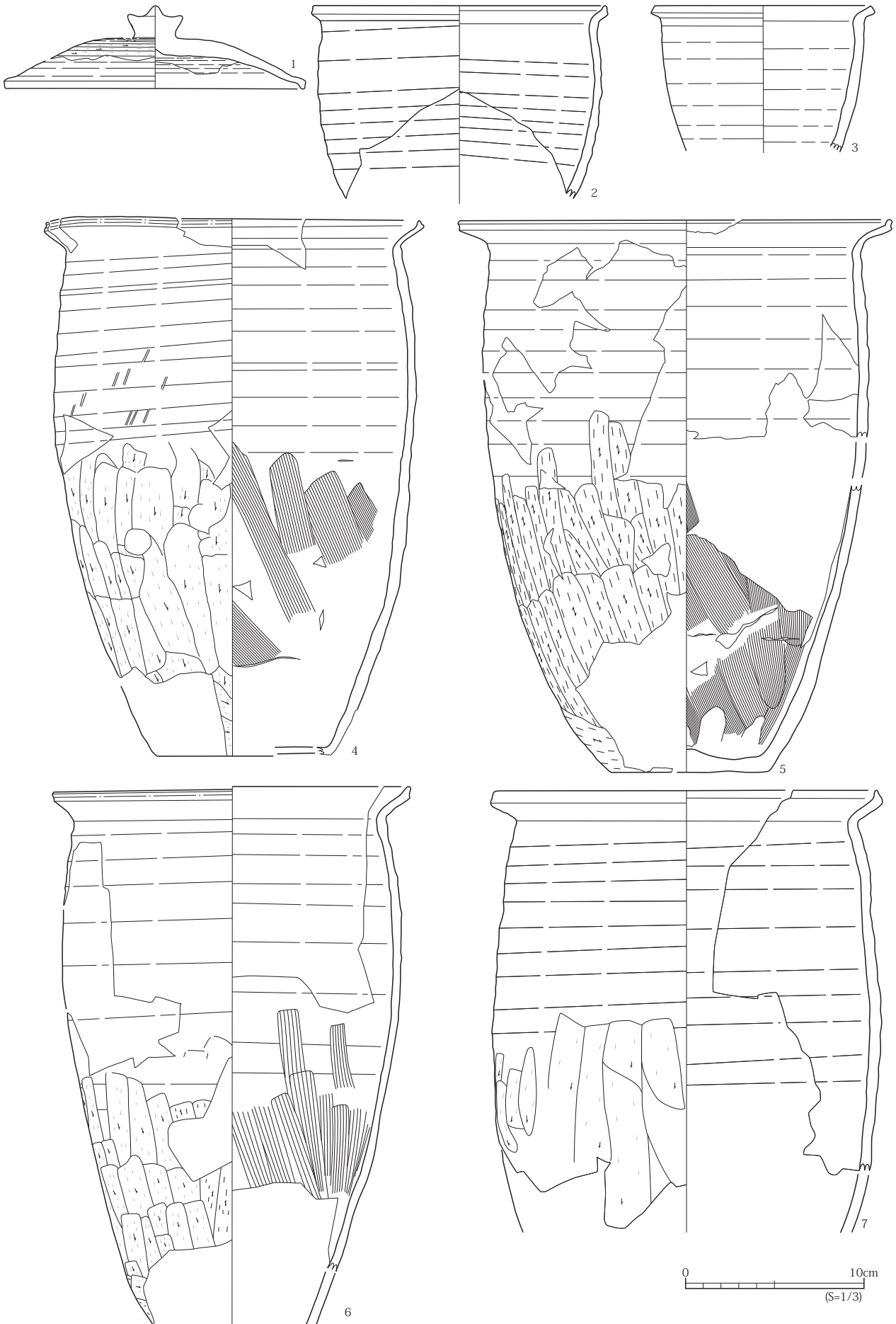


遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX3	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック小~大を大量に含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物ブロック小を大量に含む	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物ブロック小を多く含む	自然堆積
	5	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	灰からなる層	灰層
	6	黒色 (10YR2/1) シルト	炭化物からなる層	炭層
SX7	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト		自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック中を少し含む	人為堆積
	3	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	4	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物、焼土ブロック小を多く含む	自然堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土	地山 (V層) ブロック小を多く含む	自然堆積
	6	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
SX8	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック大を多く含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック小を多く含む	人為堆積
	4	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック小を少し含む	人為堆積
	5	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	6	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック中、地山 (V層) ブロック小を少し含む	人為堆積
	7	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	8	明赤褐色 (5YR5/6) シルト		天井の崩落土
	9	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック大を多く含む	自然堆積
	10	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む (5層と同一)	自然堆積
	11	暗赤褐色 (5YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土塊を多く含む	自然堆積
	12	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	13	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土粒を多く含む	自然堆積
SK13	1	褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	2	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	3	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	4	極暗褐色 (7.5YR2/3) 粘土質シルト	焼土ブロック大を多く含む	人為堆積
	5	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
SK9	1	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒、鉄滓を多く含む	人為堆積
SK10	1	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒、鉄滓を多く含む	人為堆積
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積

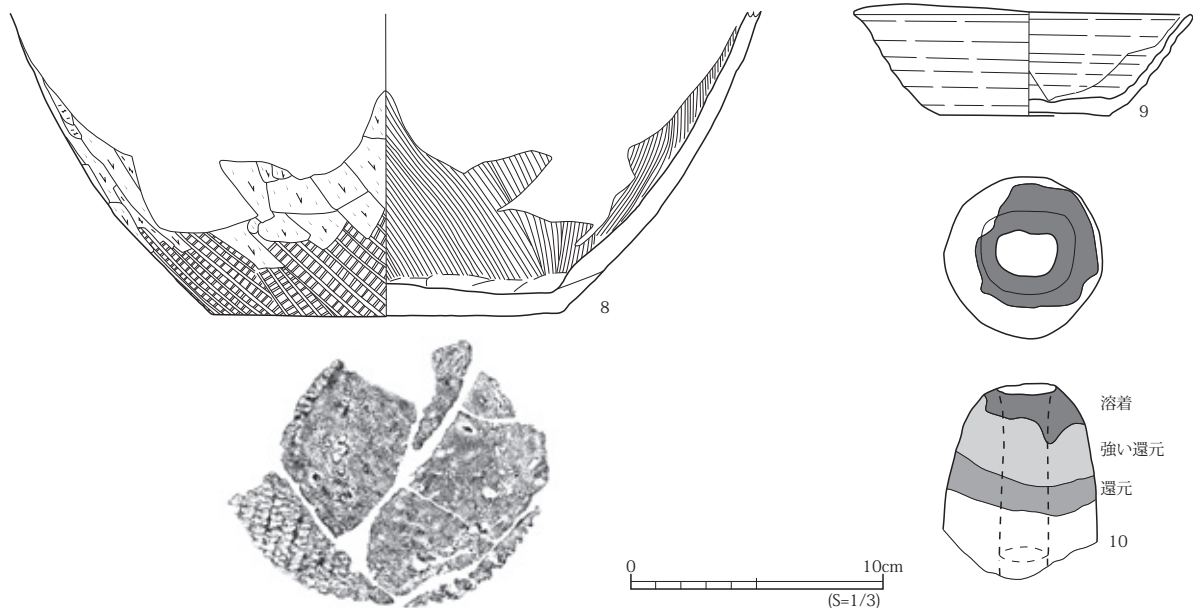
第78図 SK9・10・13土坑 SX3・7・8土師器焼成遺構(2)

〔堆積土〕5層に分けられた。1層は炭化物・焼土を含む人為堆積層である。2層は炭化物が主体となる層である。3～4層は炭化物・焼土を含む人為堆積層である。5層は炭化物が主体となる層である。〔被熱〕部分的にわずかに赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土している。堆積土から出土した遺物のうち、特徴的なものを図化した。81-10の羽口はSK13を切るSK9の流れ込みの可能性がある。



第79図 SK9・13土坑 SX3・8土師器焼成遺構 出土遺物(1)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 蓋	SX3 検出面	2/3	17.8			4.9	擬宝珠 外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 外内に火ダスキ		787
2	土師器 甕	SX8 堆積土	口縁部～体部	15.8			10.4～	外内：ロクロナデ 明確な使用痕なし		721
3	土師器 甕	SX8 6～13層	口縁部付近	12.1			8.3～	外内：ロクロナデ 明確な使用痕なし		726
4	土師器 甕	SX8 6～13層	3/4	20.8		(9.8)	30.2～	外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用品	50-2	722
5	土師器 甕	SX8 6～13層	1/5	(24.0)		(8.8)	31.4	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用品	50-3	780
6	土師器 甕	SX8 6～13層	3/4	20.0		(8.5)	30.1～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用品	50-4	781
7	土師器 甕	SK9 堆積土	口縁部～胴部	21.4			24.8～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ	50-5	727
8	須恵器 甕	SX8 6～13層	底付近			(13.7)		外：ナデ 外：擬格子叩き→ケズリ 底：擬格子叩き		724
9	須恵器 坏	SK13 4・5層	2/3	13.4		6.4	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	50-6	729
10	土製品 羽口	SK13 堆積土						残高：7.8 残径：6.5 孔径：2.5	50-7	728

第80図 SK9・13土坑 SX3・8土師器焼成遺構 出土遺物(2)

【SK14土坑】(第81・82図・図版20)

〔位置・検出面〕8区西端の丘陵西側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし

〔規模・平面形・断面形〕長軸2.0m、短軸0.8m以上、確認面からの深さは86cmである。平面形は楕円形で、断面形は台形を呈する。

〔堆積土〕7層に分けられた。1～2層は炭化物などを少し含む自然堆積層である。3・5・7層は含有物のない自然堆積層であり、4・6層は遺構壁面の崩落土である。

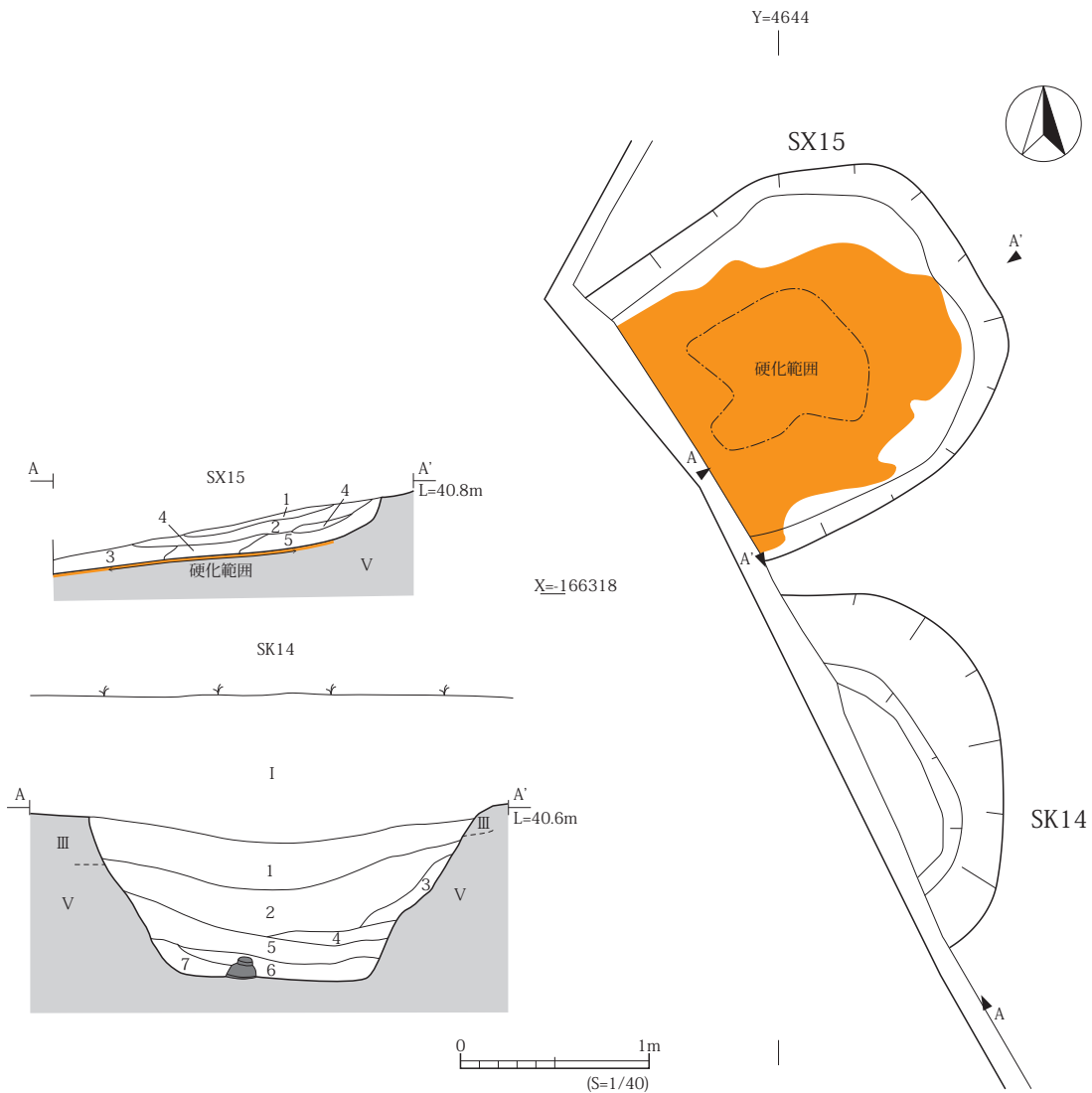
〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。108-1は甗の口縁部とみられる破片である。108-3は土坑底部から出土した。

【SK18土坑】(第83図)

〔位置・検出面〕8区西側の平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK12と重複し、これより古い。

〔規模・平面形・断面形〕長軸1.9m、短軸0.4m、確認面からの深さは20cmである。平面形は長楕円形で、断面形は逆台形を呈する。

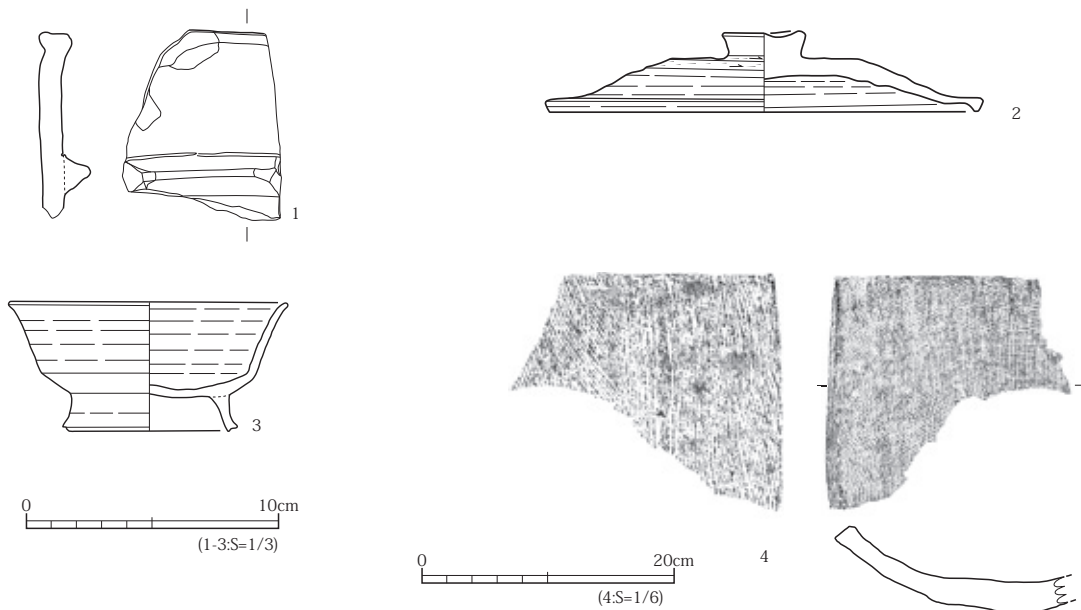


遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX15	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物小を多く含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒を少し、地山ブロック大を多く含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	4	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	5	暗褐色 (10YR3/3) シルト	焼土ブロック小を多く含む	人為堆積
SK14	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物中、焼土粒を多く含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物小を少し含む	自然堆積
	3	暗褐色 (10YR3/3) シルト		自然堆積
	4	明黄褐色 (2.5YR7/6) 粘土質シルト		崩落土
	5	黒褐色 (10YR2/3) シルト		自然堆積
	6	にぶい黄褐色 (2.5YR6/4) 粘土		崩落土
	7	黒褐色 (10YR3/2) シルト		自然堆積

第 81 図 SK14 土坑 SX15 土師器焼成遺構

〔堆積土〕 3層に分けられた。いずれも地山（V層）ブロックなどを含む然堆積層である。

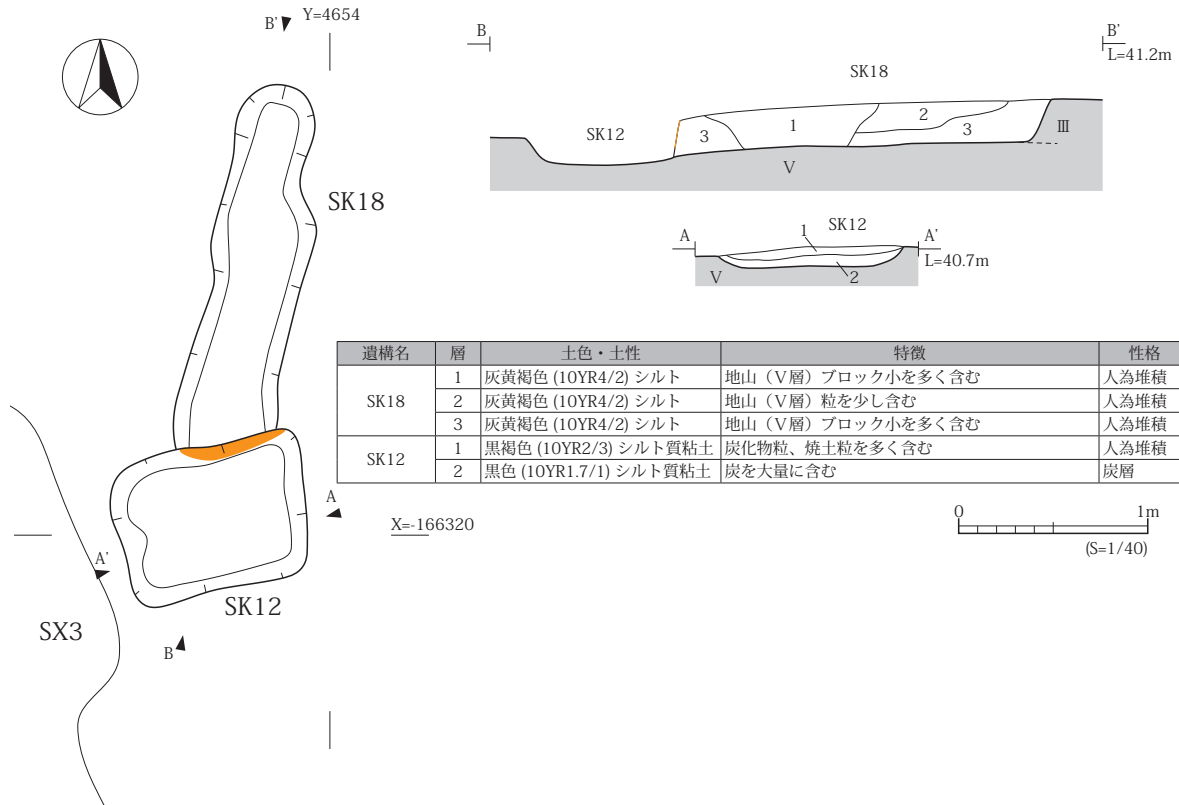
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕?	SK14 堆積土	口縁部				7.7	外内：ロクロナデ		733
2	須恵器 蓋	SK14 堆積土	1/3	(15.4)			3.9	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井ケズリ 暗赤褐色		732
3	須恵器 高台杯	SK14 底面	ほぼ完形	11.8		7.5	5.5	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ 底びび割れ		735

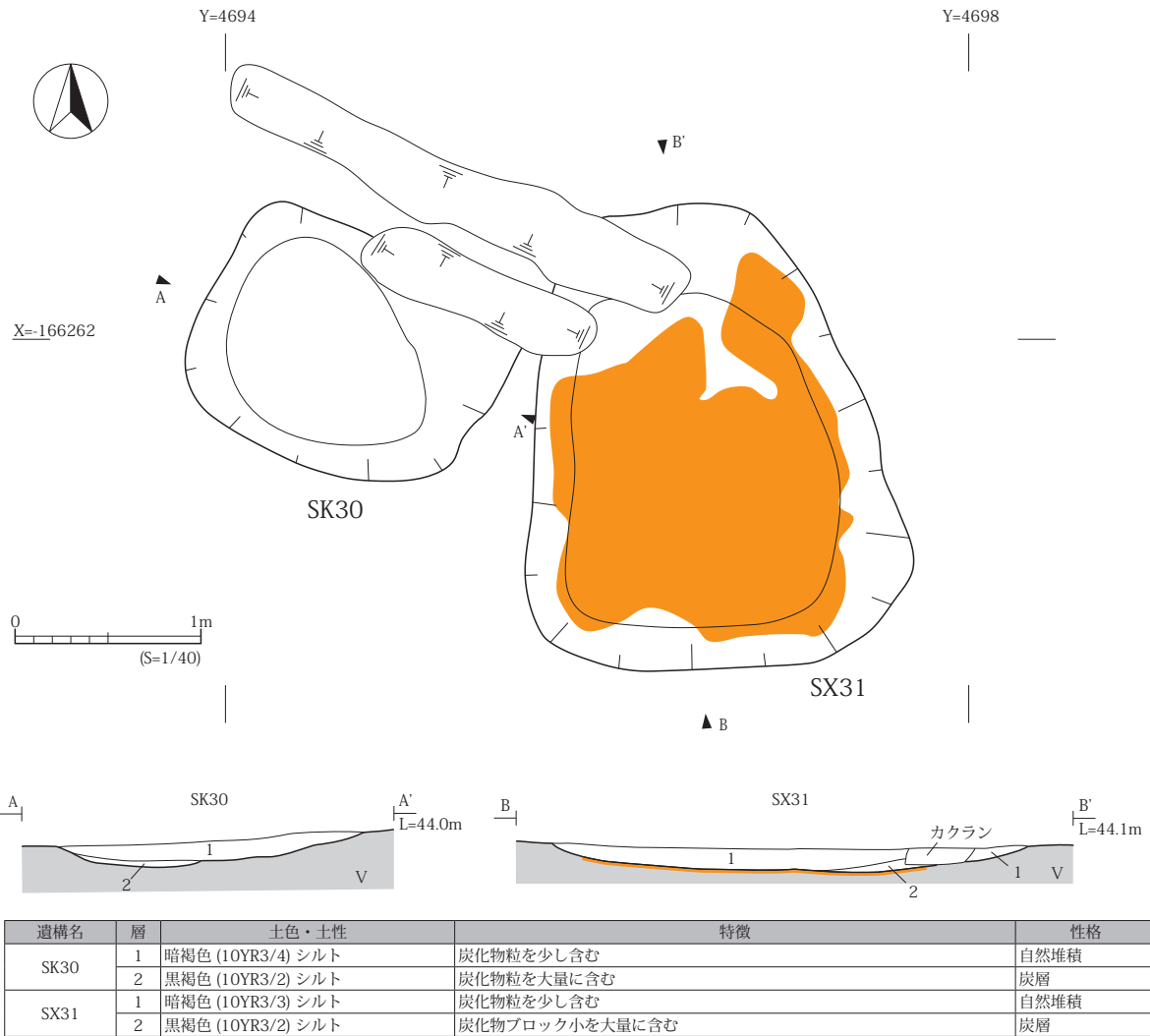
No	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
4	平瓦	I	SK14 堆積土	1/6	凸面：縄叩目 凹面：模骨痕→細かい布目 側端・小口：ケズリ	5Y8/1 灰白		K49

第 82 図 SK14 土坑 出土遺物



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK18	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	人為堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	人為堆積
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	人為堆積
SK12	1	黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土	炭化物粒、焼土粒を多く含む	人為堆積
	2	黒色 (10YR1.7/1) シルト質粘土	炭を大量に含む	炭層

第 83 図 SK18 土坑 SK12 焼成土坑



第 84 図 SK30 土坑 SX31 土師器焼成遺構

【SK30 土坑】(第 84 図・図版 18)

〔位置・検出面〕 6 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.6m、短軸 1.3m、確認面からの深さは 12cm ある。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿状を呈する。

〔堆積土〕 2 層に分けられた。1 層は自然堆積層で炭化物を少量含む。2 層は炭化物粒を大量に含む層で、底面西側の一部で確認した。

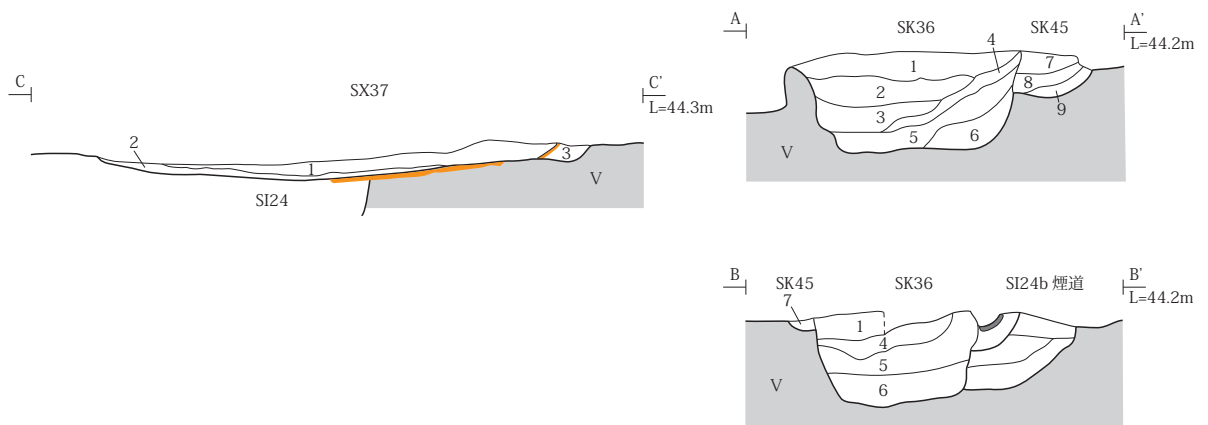
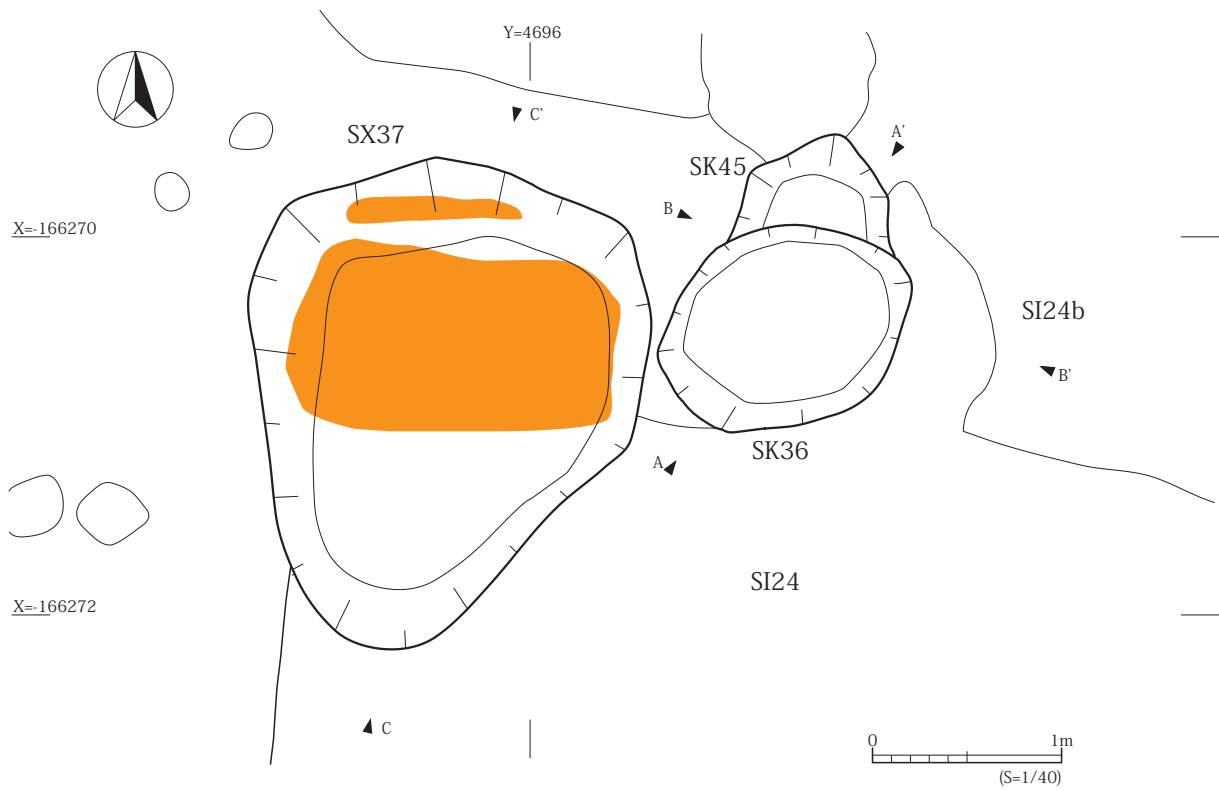
〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK36 土坑】(第 85・86 図・図版 11)

〔位置・検出面〕 6 区中央南側の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

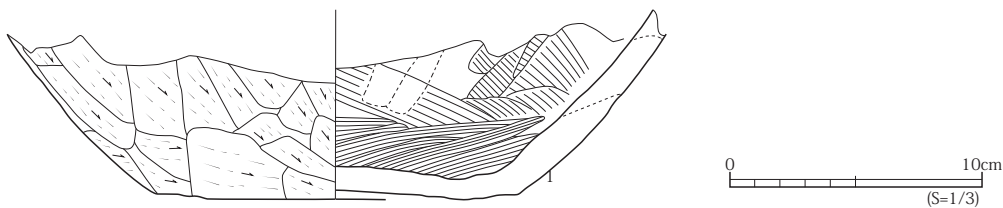
〔重複〕 SI24b・SK45 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.2m、短軸 1.1m、確認面からの深さは 52cm である。平面形は楕円形で、



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX37	1	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト	炭化物ブロック大を多く、焼土粒と灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック小を少し含む	炭層
	3	暗褐色 (10YR3/3) シルト		壁崩落後堆積
SK36	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト		自然堆積 SI24b 煙道由来か?
	5	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト		自然堆積
	6	黒褐色 (10YR2/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積 SI24b 煙道由来か?
SK45	7	暗褐色 (10YR3/3) シルト		自然堆積
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		自然堆積
	9	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積

第 85 図 SK36・45 土坑 SX37 土師器焼成遺構



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 平底甕	1層	底部			14.4	(7.6)	外:ケズリ 内:ナデ 赤褐色		645

第 86 図 SK36 土坑 出土遺物

断面形は箱形である。

〔堆積土〕 6層に分けられた。1～6層は地山粒や焼土粒を少量含む自然堆積層である。4層と6層は、SI24のカマド煙道堆積土（図28-10層）由来とみられる土からなる。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。赤変した須恵器甕 110-1 が出土している。

【SK45 土坑】（第 85 図）

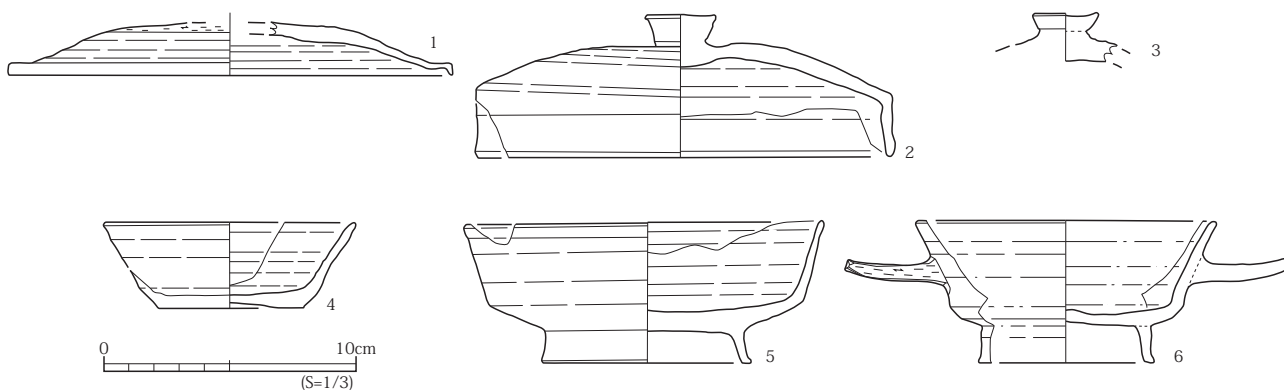
〔位置・検出面〕 6区中央南側の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕 SK36、SI24 と重複し、SK36 より古く、SI24 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 0.7m、短軸 0.5m、確認面からの深さは 20cm である。平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。

〔堆積土〕 3層に分けられた。すべて自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 蓋	SK47 1層	1/3	17.6			2.1～	外:ロクロナデ→天井ケズリ 内:ロクロナデ		688
2	須恵器 蓋	SK47 3層上面	3/4	16.3			5.6	ボタン 外内:ロクロナデ	52-3	694
3	須恵器 蓋	SK47 1層	つまみ					ボタン		693
4	須恵器 坏	SK47 1層	1/3	(9.6)		5.7	3.4	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り 外内:自然釉かかる		692
5	須恵器 高台坏	SK47 1層	3/4以上	(14.1)		8.3	5.7	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ 赤褐色	52-4	687
6	須恵器 坏	SK47 1層	1/3	(11.6)		(6.9)	5.6	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→内面ナデ 双耳坏	52-5	691

第 87 図 SK47 土坑 出土遺物



【SK47 土坑】(第 13・87 図・図版 22)

〔位置・検出面〕 6 区南西の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SI23、SK28 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 5.5m、南北 3.5m、確認面からの深さは最も深いところで 16cm である。平面形は不整形で、壁はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がある。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック・地山粒のほか、炭化物粒や白色粒子を含む自然堆積土である。

〔出土遺物〕 須恵器高台坏が底面から出土したほか、堆積土中から土師器・須恵器が出土した。

【SK51 土坑】(第 88 図)

〔位置・検出面〕 7 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SX71、SD73 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.4m、短軸 1.0m、確認面からの深さは 36cm である。平面形は隅丸長方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5 層に分けられた。1 層は、2・3 層は焼土粒・ブロック、炭化物、灰からなる人為堆積層、4 層はⅢ層主体の自然堆積層、5 層は炭化物からなる層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。

【SK55 土坑】(第 89 図)

〔位置・検出面〕 7 区東の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SD73 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.5m、短軸 1.4m、確認面からの深さは 17cm である。平面形は不整形で、断面形は壁がゆるやかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK56 土坑】(第 64・90 図・図版 21)

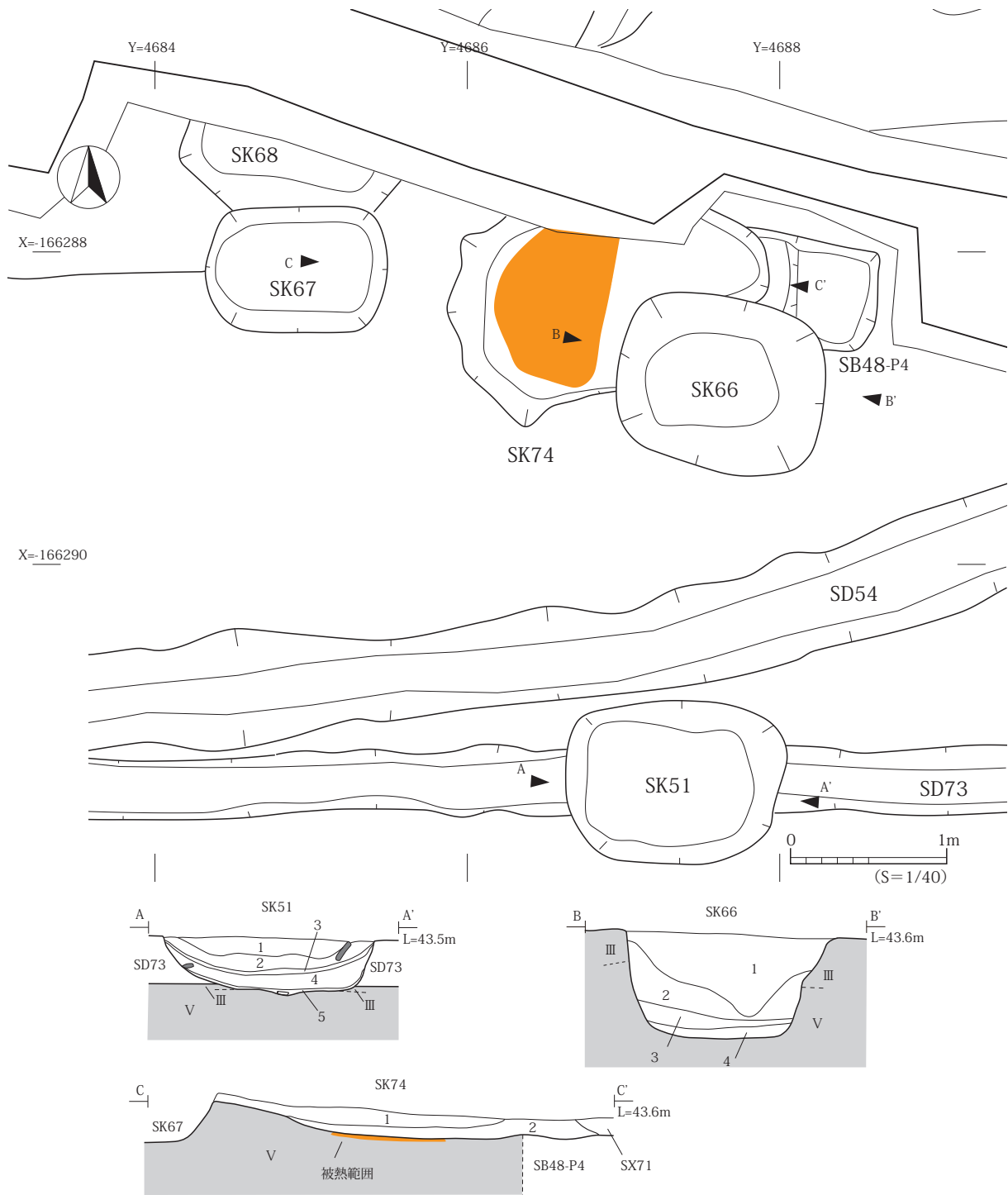
〔位置・検出面〕 7 区西の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 0.8m 以上、南北 1.4m、確認面からの深さは 20cm である。平面形は不整な方形で、断面形は皿形である。

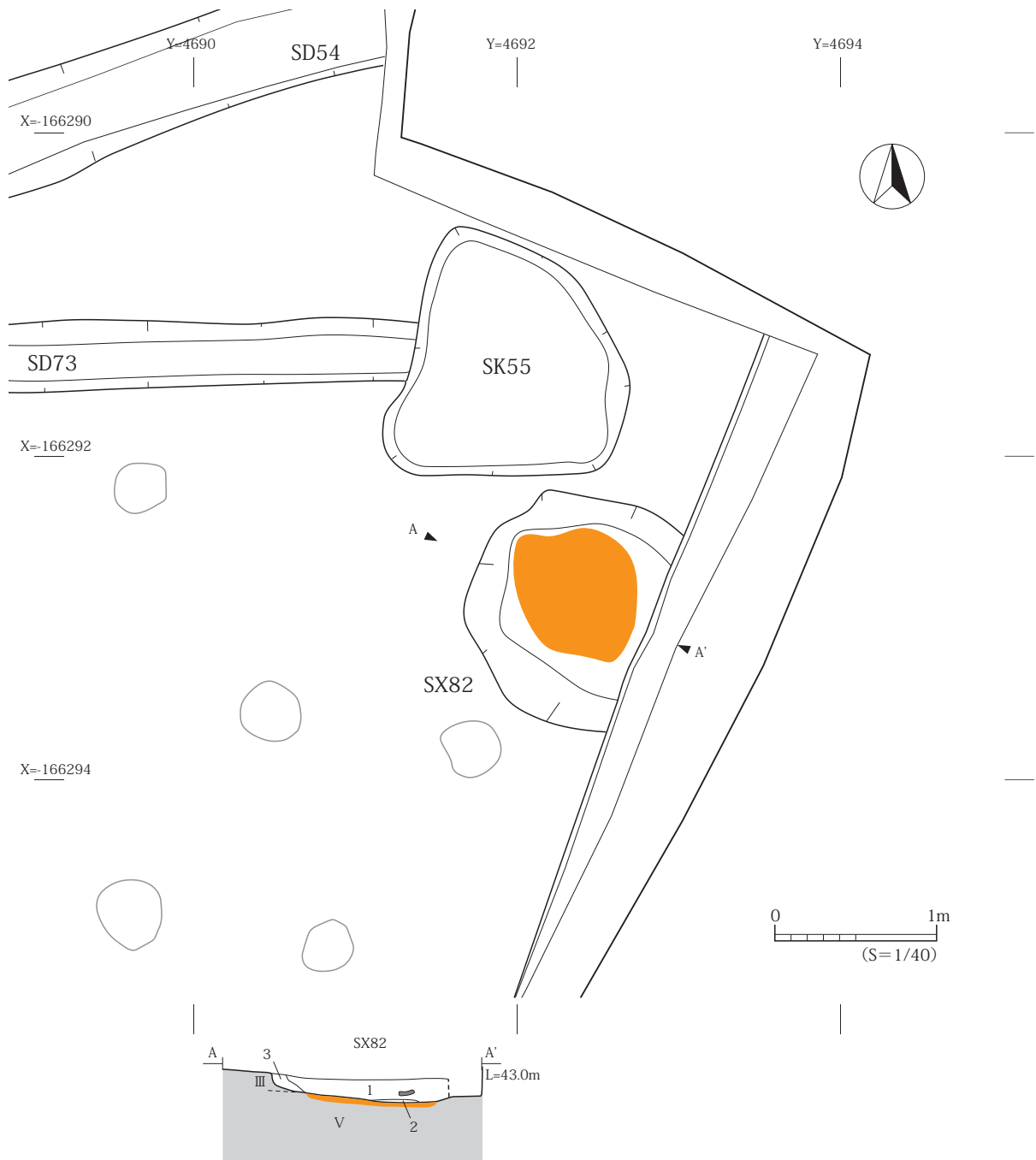
〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。1 は器形から高台坏の坏部とみられるが、高台を接着した痕跡が無い。ほかに須恵器の坏 2 点を図示した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK51	1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロックを少し含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	焼土ブロック小、炭化物粒、灰を少し含む	自然堆積
	3	明褐色 (7.5YR5/8) シルト	焼土塊、炭化材・粒、灰からなる層	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR3/2) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
	5	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭層	自然堆積
SK66	1	灰黄褐色 (10YR5/2) シルト	地山 (V層) ブロック大～小を多く、黒色土ブロック小を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR2/3) シルト		自然堆積
SK74	4	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	自然堆積
	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	明黄褐色粘土ブロック大～中、焼土塊小～粒、炭化物粒を多く含む	人為堆積
	2	褐灰色 (10YR4/1) シルト	焼土粒、炭化物粒を多く含む	自然堆積

第 88 図 SK51・66 土坑 SK74 焼成土坑



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX82	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒・焼土粒を少し含む	堆積土
	2	黒色 (10YR1/1) シルト	炭層	堆積土
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	Ⅲ層とⅤ層からなる	堆積土

第 89 図 SK55 土坑 SX82 土師器焼成遺構

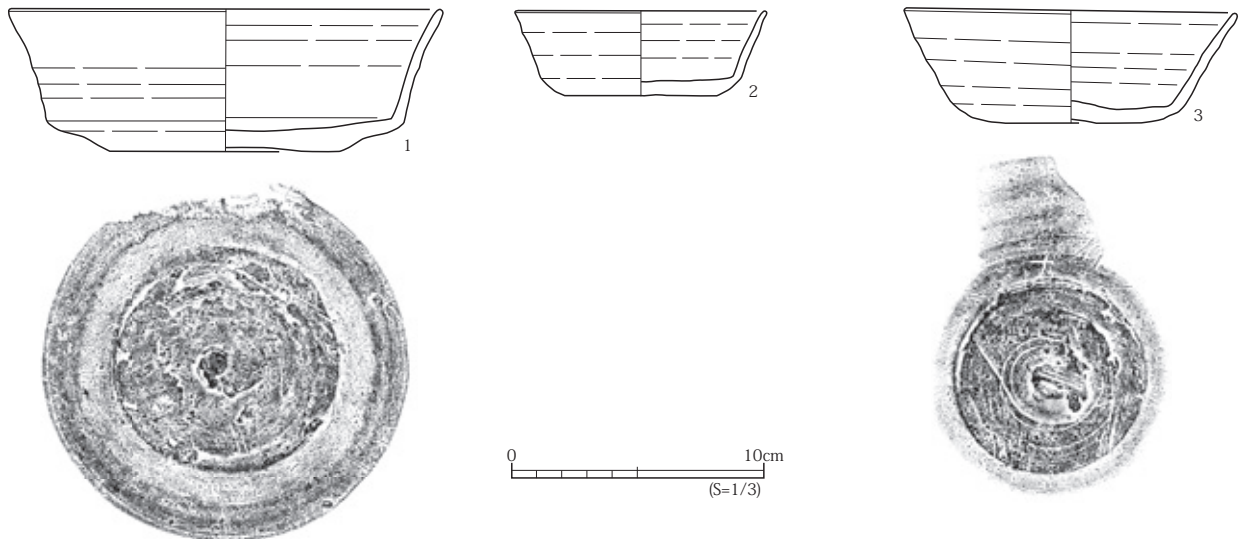
【SK57 土坑】(第 91 図)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕 SK70 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.4m、短軸 1.1m、確認面からの深さは 25cm である。平面形は不整形で、断面形は壁がゆるやかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 高台坏	1層	坏部ほぼ完形	17.2		9.1	5.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 高台坏坏部か？		1294
2	須恵器 坏	2層	3/4	10.0		6.0	3.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1296
3	須恵器 坏	3層	ほぼ完形	13.2		7.2	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ ヘラ描き「十」 底切れ		1295

第90図 SK56 土坑 出土遺物

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK58 土坑】（第91図）

〔位置・検出面〕 7区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕 SK70 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.6m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 15cm である。平面形は楕円形で、断面形は壁がゆるやかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕 1層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK59 土坑】（第91図）

〔位置・検出面〕 7区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 とV層で検出した。

〔重複〕 SX71、SD54、SD73 と重複し、これらより新しい。

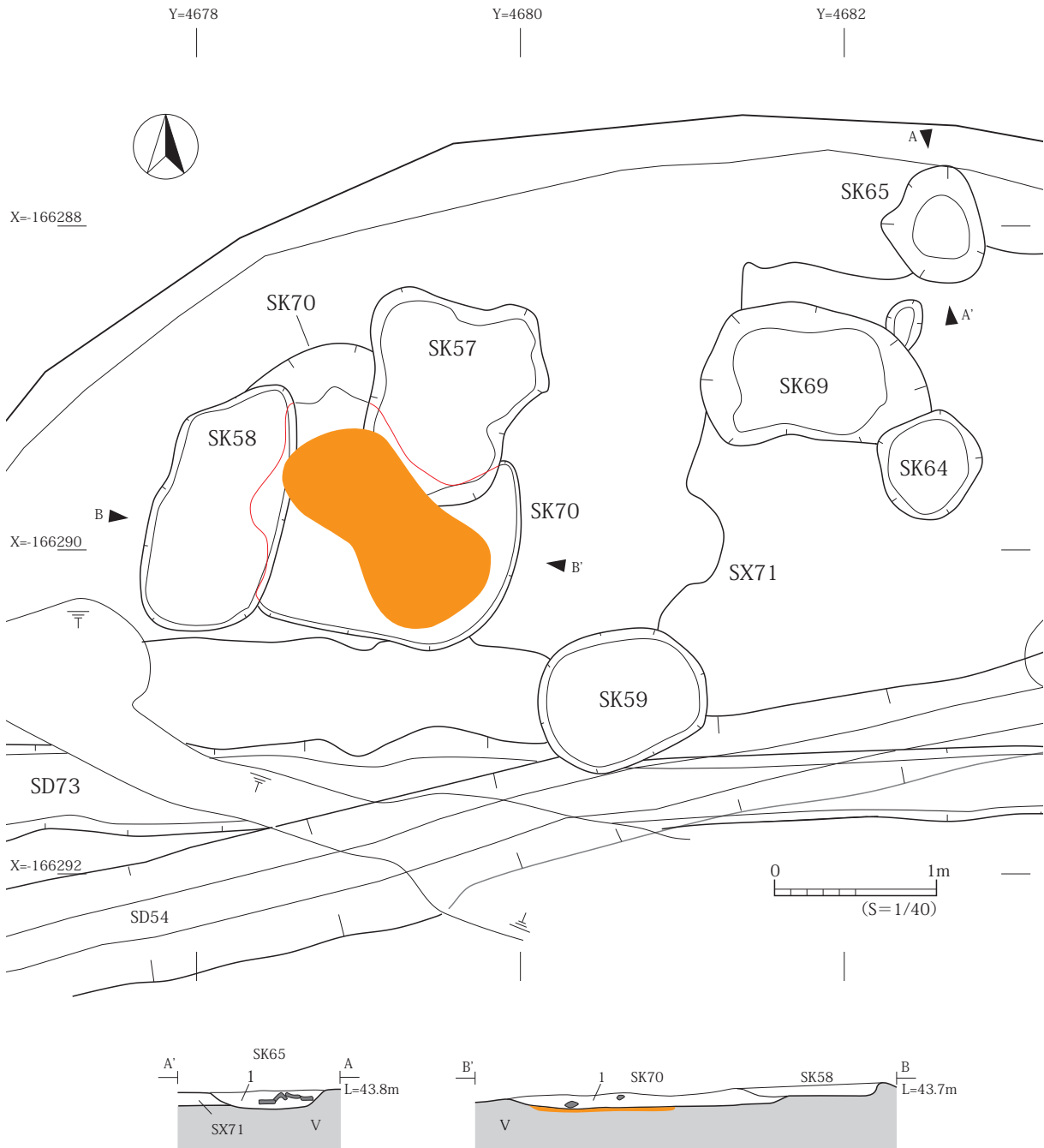
〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.1m、短軸 0.9m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は楕円形で、断面形は台形である。

〔堆積土〕 1層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK64 土坑】（第98図）

〔位置・検出面〕 7区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK65	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小と炭化物粒を少し、廃棄された土器を多量に含む	自然堆積
SK70	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) ブロック小を微量含む	堆積土

第 91 図 SK65 土坑 SK70 焼成土坑

〔重複〕 SX71、SK69 と重複し。これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 1.1m、短軸 0.9m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は隅丸方形で、断面形は台形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK65 土坑】(第 91 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 と V 層で検出した。

〔重複〕 SX71 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 0.7m、短軸 0.6m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は楕円形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む人為堆積層である。土器片を大量に含む。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK66 土坑】(第 88・92 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北中央の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SB48、SX71、SK74 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.4m、短軸 1.1m、確認面からの深さは 74cm である。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱形である。

〔堆積土〕 4 層に分けられた。1 層は地山ブロック小～大を含む人為堆積層、2 層は自然堆積層、3 層は炭層で、4 層は地山ブロックを微量含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片、硯が出土した。111-1 は土師器坏、111-2 は風字硯の破片とみられる。

【SK67 土坑】(第 88 図・図版 21)

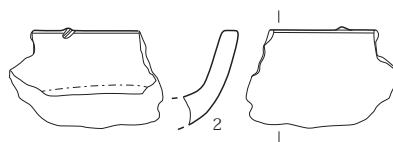
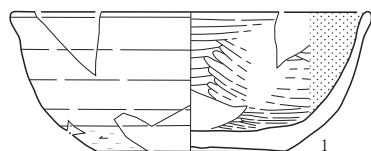
〔位置・検出面〕 7 区北中央の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SX71、SK68 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.2m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 31cm である。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～大、炭化物粒を多く含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	1 層	1/3	(14.0)		7.4	5.5	外：ロクロナデ 体下部回転ケズリ 内：黒色処理 底部：ヘラ切り?→回転ケズリ		1364
2	陶 硯	1 層	破片					口唇・外面ナデ(不明瞭) 内面に自然釉 風字硯か?	52-9	1363

第 92 図 SK66 土坑 出土遺物

【SK68 土坑】(第 88 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北中央の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SK67、SX71 と重複し、SK67 より古く、SX71 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 1.4m、南北 0.5m 以上、確認面からの深さは 35cm である。平面形は隅丸長方形か隅丸方形とみられ、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～大、炭化物粒を多く含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK69 土坑】(第 91 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SK64、SX71 と重複し、SK64 より古く、SX71 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.5m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 30cm である。平面形はやや不整な楕円形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK93 土坑】(第 74 図)

〔位置・検出面〕 7 区丘陵平坦面南端に位置し、SI90 で検出した。

〔重複〕 SI90 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.6m 以上、短軸 1.3m、確認面からの深さは 20cm である。平面形はやや不整な楕円形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、砂を多く含む黒色シルトの自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片、平瓦が出土したが、図化できるものはなかった。

(ii) 土師器焼成遺構

【SX 3 土師器焼成遺構】(第 77～80 図・図版 18)

〔位置・検出面〕 8 区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

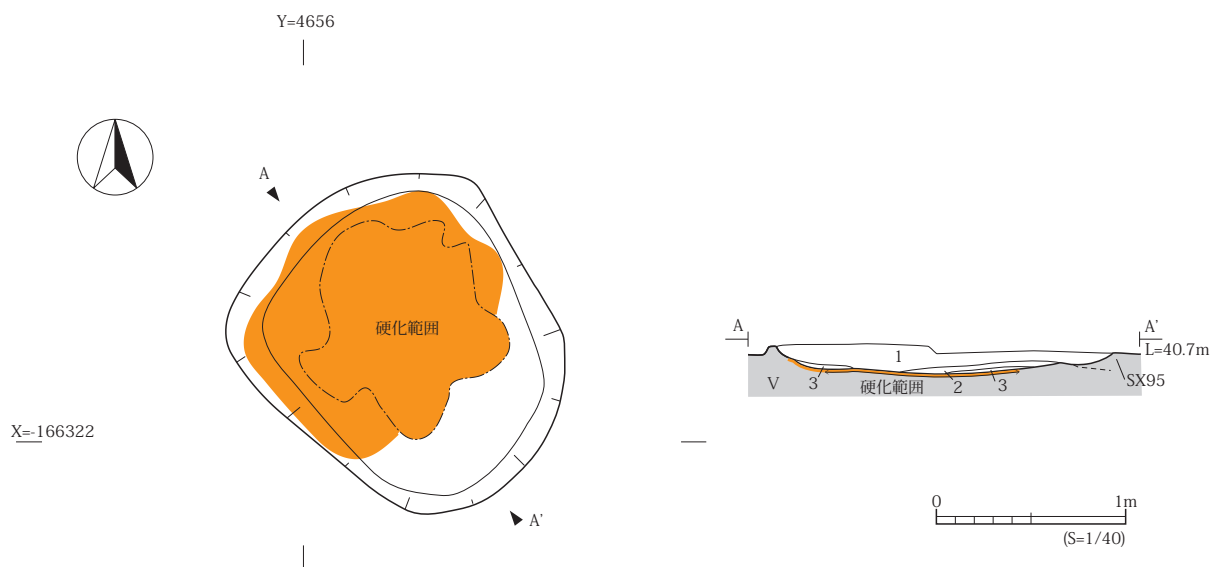
〔重複〕 SX7 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 平面形は、斜面下方の南側からみて逆台形を呈し、長軸 3.4m、短軸 2.6m である。斜面上方に位置し、比較的急角度で立ち上がる北辺を奥壁とする。それ以外の壁はなだらかに立ち上がり、南壁の傾斜が最も緩やかとなる。壁の高さは最大 44cm である。床面はほぼ平坦である。

〔方向〕 西壁で測ると N-35° -W である。

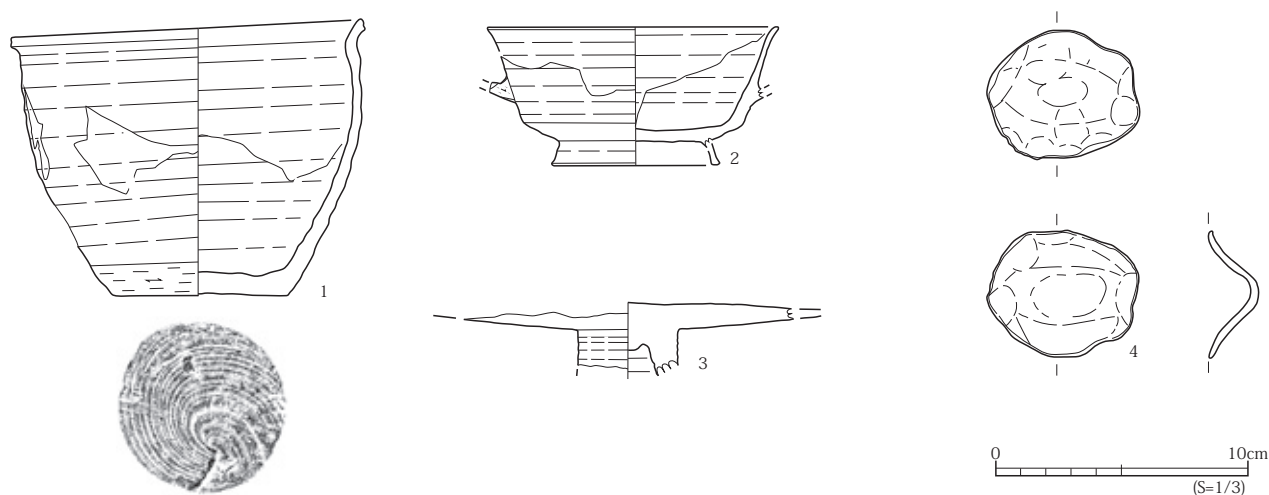
〔被熱〕 床面および奥壁と左右側壁の一部が熱を受けて赤変し、一部が強く被熱し硬化する。

〔堆積土〕 6 層に分けられた。1 層は炭化物を少し含む自然堆積層である。2 層は地山ブロックを大量に含む暗褐色シルトの人為堆積層である。3・4 層は炭化物を多く含む自然堆積層である。5 層は



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX4 南北	1	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を多く含む	人為堆積
	2	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層 機能時の堆積
	3	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭化物層 機能時の堆積

第 93 図 SX4 土師器焼成遺構



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕	SX4 1層	3/4	13.9		7.0	10.9	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 未使用	50-1	716
2	須恵器 双耳環	SX4 検出面	3/4	(11.6)		(6.7)	(5.5)	外内：ロクロナデ 耳欠損 暗赤褐色		715
3	須恵器 高環	SX4 1層	坏部					外内：ロクロナデ 脚一部残存 色調：暗赤褐色		713
4	不明	SX4 2層	完形					長さ：5.8 短：5.0 厚：0.3 焼成粘土盤	51-1,2,3	770

第 94 図 SX4 土師器焼成遺構 出土遺物

灰、6層は炭化物がそれぞれ主体となる層で、機能時の堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土しているが、遺構に伴うもので図化できる資料はなかった。

80-1 は検出面から出土した須恵器蓋である。

【SX 4 土師器焼成遺構】(第 93・94 図・図版 18)

〔位置・検出面〕8区中央西寄りの平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX95 と重複し、これより新しい。



〔規模・平面形・断面形〕長軸 1.8m、短軸 1.4m の逆台形で、長辺側に位置し、底面の被熱範囲から北壁が奥壁とみられる。残存する深さは 16cm である。壁はいずれもなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔被熱〕底面の中央から奥壁側が熱を受けて赤変し、その大半がより強く被熱し、硬化する。

〔方位〕西壁で測ると N-40° -W である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は炭化物や焼土を多く含む人為堆積層である。2・3層は炭化物層で機能時の堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土しているが、埋め戻し土に含まれるものなど遺構に伴うものではない。77- 1の土師器甕はスス・コゲ・赤変など使用痕跡がなく、SX 4に限定できないものの、土師器焼成遺構にかかわる可能性がある。77- 2と3は埋め戻し土に含まれていた須恵器のうち特徴的なものを図化して提示した。4は焼成された粘土円盤である。

#### 【SX 7 土師器焼成遺構】(第 77・78 図・図版 18)

〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX3、SX8 と重複し、SX3 より古く、SX8 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 2.9m、短軸 2.6m、確認面からの深さは 20cm である。平面形は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕6層に分けられた。1層は自然堆積層である。2層は地山ブロックを含む人為堆積層である。3層は炭化物が主体となる層である。4～5層は自然堆積層である。6層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕床のほぼ全体が熱を受けて赤変、中央南寄りが赤変硬化する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土したが、図化できるものはなかった。

#### 【SX 8 土師器焼成遺構】(第 77～80 図・図版 18)

〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX7、SK9、SK13 と重複し、SX7・SK9 より古く、SK13 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 2.6m、短軸 2.5m、確認面からの深さは 44cm である。平面形は不整形で、壁は北壁が外に開いて直線的に立ち上がりほかは、なだらかに立ち上がることから、北壁が奥壁とみられる。床はなだらかに窪んでいる。

〔方位〕北壁が奥壁とすると、左側壁(西壁)で N-24° -W である。

〔堆積土〕13層に分けられた。1～6層は炭化物や地山ブロックを含む人為堆積層である。7層は炭化物が主体となる層である。8層は天井の崩落土とみられる。9～11層は炭化物を含む自然堆積層である。12層は炭化物が主体となる層である。13層は焼土を多く含む自然堆積層である。

〔被熱〕奥壁(北西壁)側が熱を受けて赤変している。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。80- 4～6の土師器甕は器面の状態がよく、ケズリやロクロ目がシャープに残っているほか、スス・コゲがなく明瞭な黒斑が観察できる。いずれも下層から出土している。80- 2、3の甕も同様の特徴をもつ。

【SX15 土師器焼成遺構】(第 81・95～97 図・図版 18)

〔位置・検出面〕8区西端の丘陵西側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕遺構西側が調査区外に及ぶため全体の平面形や規模は不明であるが、東西 1.8m 以上、南北 1.6m の隅丸長方形を基調とし、北東側は直線状を呈する。斜面上方に位置し、比較的急角度で立ち上がる北東辺が奥壁と考えられる。壁の高さは最大 26cm である。

〔方位〕北西壁で測ると N-53° -E である。

〔被熱〕底面のほぼ全体が熱を受けて赤変し、その一部がより強く被熱し硬化する。

〔堆積土〕5層に分けられた。いずれも炭化物や焼土を含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕1～3層から遺物が多く出土しており、一括廃棄されたものとみられる。土師器坏、甕、壺、把手、須恵器坏、蓋、高台坏、鉢、甗、長頸瓶、甕、円面硯、土錘など、いずれも土師器焼成遺構を埋め戻した層から出土した。18～20はロクロ成形の薄手、丸底気味の土器でいずれも赤褐色を呈す。同時期の一般的な土器組成にはみられない器種だが薄手でロクロ目、回転ケズリともにシャープな仕上がりである。84-17は坏部と高台を打ち欠いて円形に整えられた高台坏で底部に「郷賀」の墨書がある。また、すべて埋戻しではあるものの、4・5層から土師器剥離破片が遺物取り上げ箆(内寸 21×28×5cm)1杯分出土した。

【SX31 土師器焼成遺構】(第 84 図・図版 18)

〔位置・検出面〕6区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 2.5m、短軸 2.0m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は逆台形、壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕左側壁(西壁)で測ると N-2° -W である。

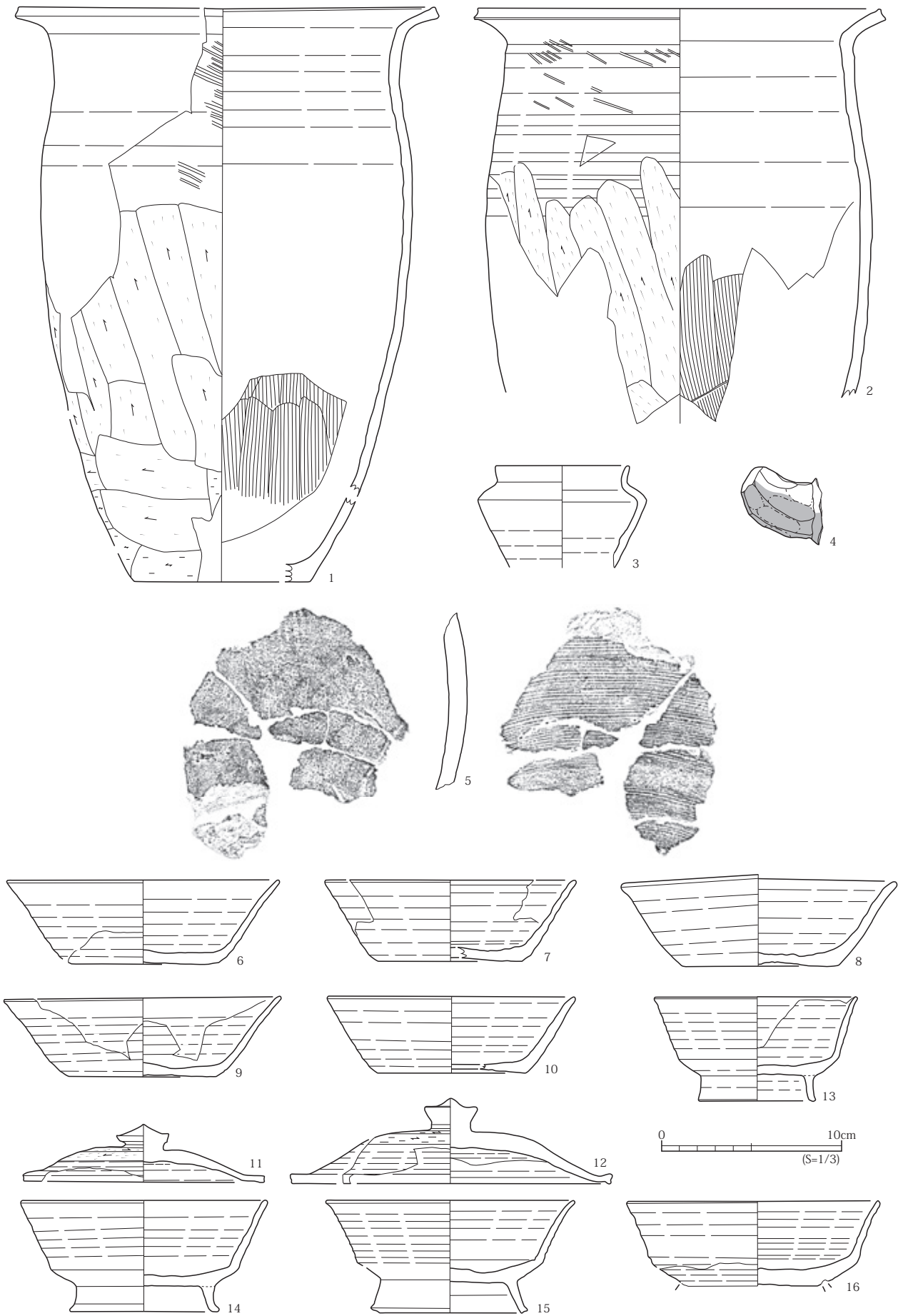
〔堆積土〕2層に分けられた。1層は炭化物を少量含む自然堆積層、2層は炭化物小ブロックが主体となる層である。

〔被熱〕前壁側を除く床全体と、北東壁・西壁の一部が熱を受けて赤変する。

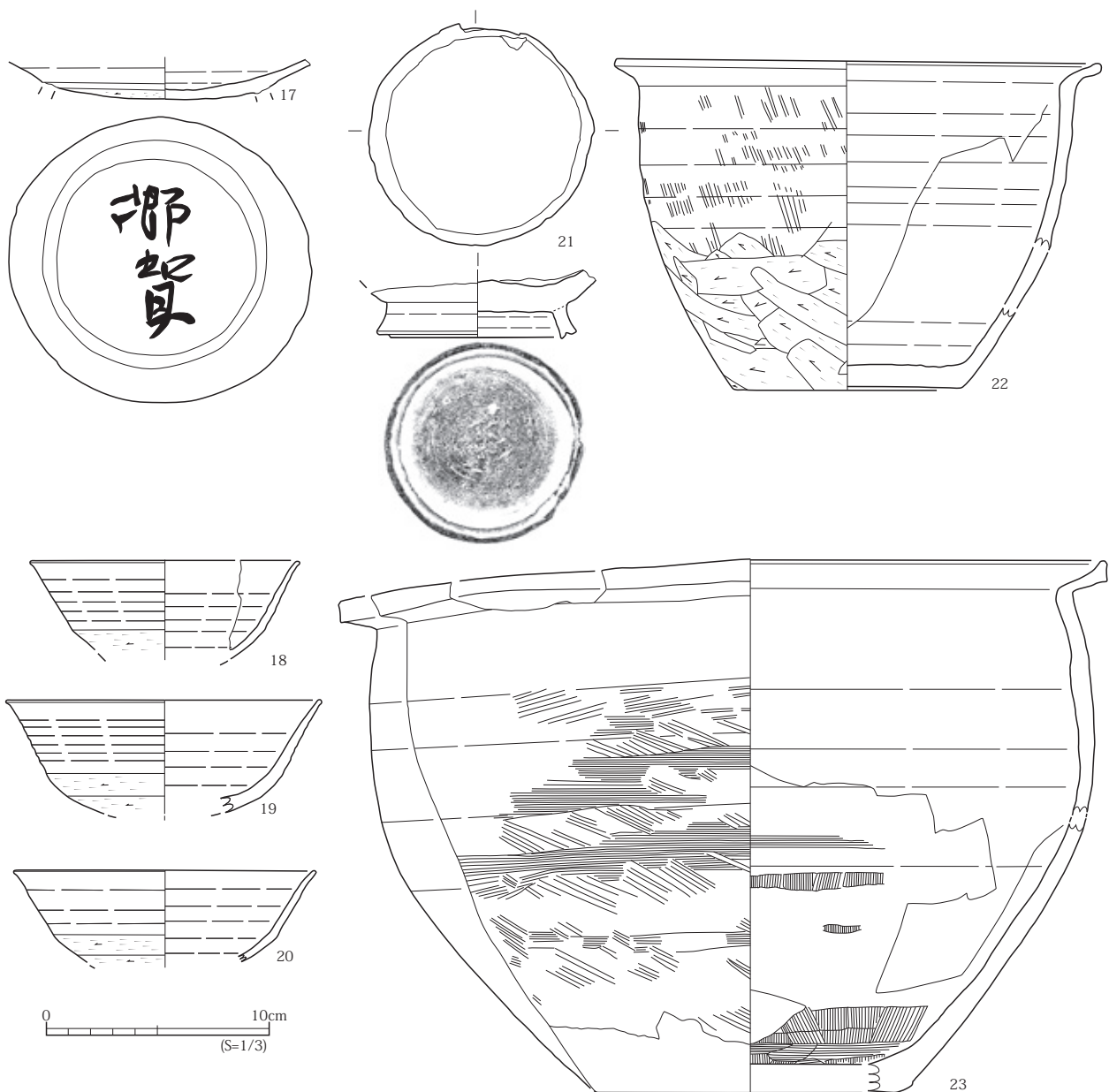
〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SX33 土師器焼成遺構】(第 94 図・図版 18)

〔位置・検出面〕6区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。中央から左側壁(東壁)がカクランで大きく壊されている。

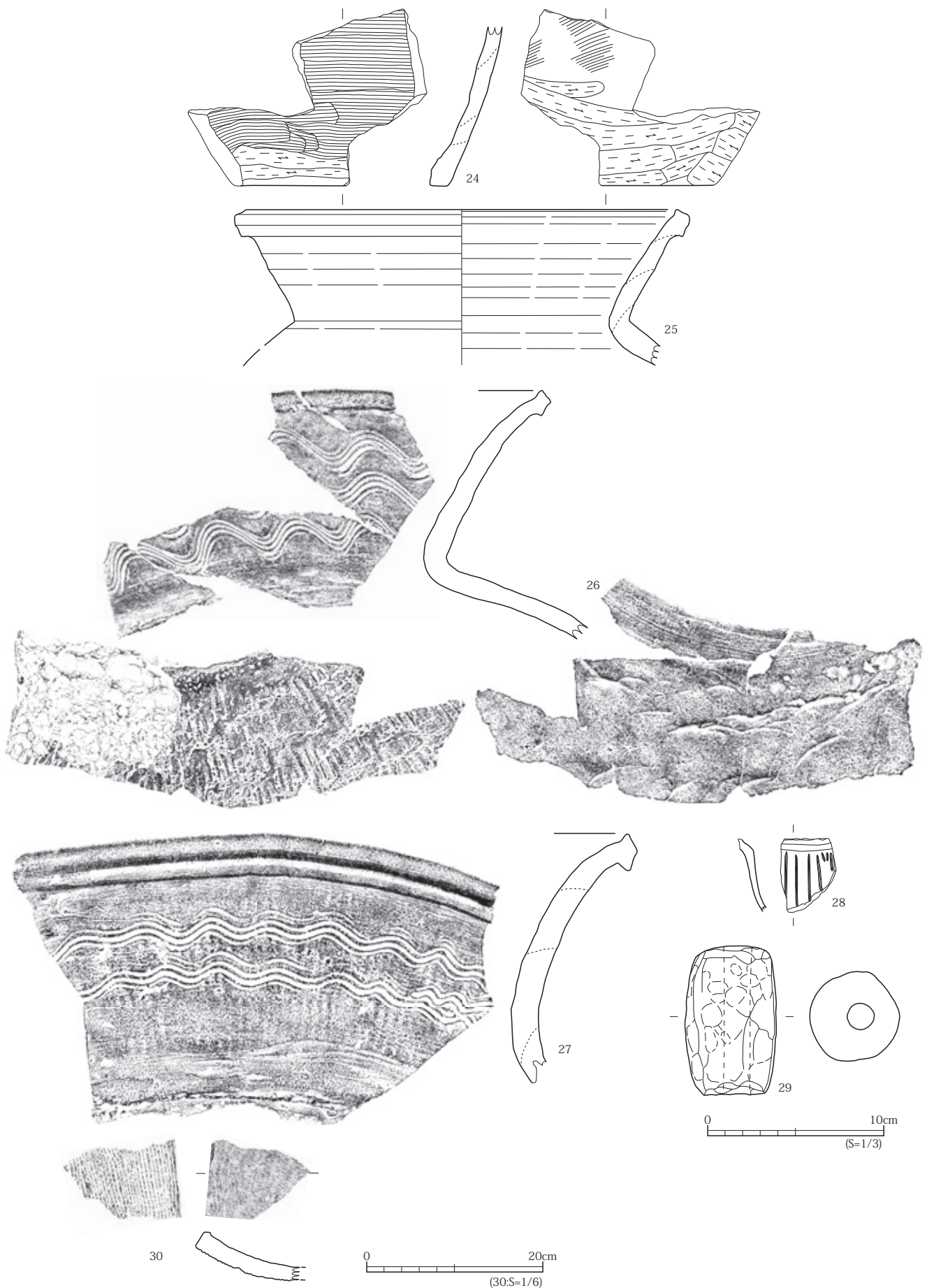


第95図 SX15 土師器焼成遺構 出土遺物 (1)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕	SX15 1~3層	1/3	(33.0)		(9.8)	31.9	外：平行叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 黒斑 スス・コゲなし	51-5	749
2	土師器 甕	SX15 4・5層	1/5	(22.4)			23.0~	外：ロクロナデ→ケズリ (叩きが残る?) 内：ロクロナデ→ナデ		748
3	須恵器 壺	SX15 1~3層	口縁部付近	7.4			5.7	外内：ロクロナデ		766
4	土師器 甕	SX15 4・5層	把手					長：5.1 厚さ：3.1		737
5	土師器 甕?	SX15 1~3層	底部付近					外：ケズリ 内：ハケ (木口工具痕)		745
6	須恵器 坏	SX15 1~3層	1/3	(15.0)		8.3	4.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 赤褐色		759
7	須恵器 坏	SX15 1~3層	1/3	(14.0)		(8.0)	4.5	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		763
8	須恵器 坏	SX15 1~3層	完形	14.9		8.7	5.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 底切れ	51-6	764
9	須恵器 坏	SX15 1~3層	3/4	(15.3)		8.3	4.5	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 赤褐色	51-7	767
10	須恵器 坏	SX15 1~3層	1/2	13.6		8.2	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		771
11	須恵器 蓋	SX15 1~3層	2/3	13.4			3.2	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ 内：ロクロナデ		743
12	須恵器 蓋	SX15 1~3層	1/3	(17.7)			6.4	擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		755
13	須恵器 高台坏	SX15 1~3層	3/4	11.1		6.1	5.8	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ	51-8	753
14	須恵器 高台坏	SX15 1~3層	3/4	13.4		8.3	6.1	外内：ロクロナデ 底部：ナデ 底切れ	51-10	754
15	須恵器 高台坏	SX15 1~3層	1/5	(13.8)		7.9	6.2	外内：ロクロナデ		756
16	須恵器 高台坏	SX15 1~3層	1/3	(13.9)			(4.3)	外内：ロクロナデ 底：ヘラ切り		762
17	須恵器 高台坏	SX15 1~3層		13.2				火ダスキ 釉かかる 墨書「郷賀」	51-12,73-4	772
18	坏 (薄手)	SX15 4・5層	1/3	(12.0)			4.4~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		752
19	坏 (薄手)	SX15 4・5層		14.0			5.1~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		752'
20	坏 (薄手)	SX15 4・5層	1/4	(13.6)			4.2~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		738
21	須恵器 長頸瓶	SX15 1~3層	底			7.6	3.0~	外内：ロクロナデ		741
22	須恵器 鉢	SX15 1~3層	3/4	21.7		10.3	14.8	外：平行叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ	51-9	736
23	須恵器 鉢	SX15 1~3層	2/3	(34.1)		(14.0)	24.8	外：平行叩き→ロクロナデ→回転ナデ 内：ロクロナデ→ナデ		747

第96図 SX15 土師器焼成遺構 出土遺物 (2)



第 97 図 SX15 土師器焼成遺構 出土遺物 (3)

No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
24	須恵器 甕	SX15 1～3層	底部付近				10.0	外：平行叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ケズリ		739
25	須恵器 甕	SX15 1～3層	口縁部	24.5			(8.8)	外内：ロクロナデ		774
26	須恵器 甕	SX15 1～3層	口縁部～肩					外：口：櫛描波状文（櫛歯数4）3段 ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：無文当て具痕		746
27	須恵器 甕	SX15 1～3層	口縁部					外：口：櫛描波状文（櫛歯数4）2段 平行叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ→ナデツケ		773
28	須恵器 円面硯	SX15 1～3層	脚						51-4	769
29	土錘	SX15 1～3層	完形					長：8.4 幅：5.1 重さ：245.2g		765

No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
30	平瓦	I	堆積土	1/6	凸面：縄叩目 凹面：（模骨痕）→細かい布目・小口：ケズリ	2.5Y8/2 灰白		K50

〔重複〕 SK32 と重複し、これより古い。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 2.2m、短軸 1.9m 前後、確認面からの深さは 20cm である。平面形は逆台形とみられる。壁は奥壁（南壁）が直に立ち上がるほかは、なだらかに立ち上がり、床は緩やかに窪む。

〔方位〕 右側壁（東壁）で測ると N-6° -W である。

〔堆積土〕 3層に分けられた。1～3層は炭化物や焼土などを含む自然堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕 床奥壁側と奥壁、左側壁が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

#### 【SX34 土師器焼成遺構】（第 99・100 図・図版 18）

〔位置・検出面〕 6区中央東寄りの丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.7m、短軸 1.6m、確認面からの深さは 10cm である。平面形は隅丸方形、壁は奥壁（北壁）がほかと比べて直立気味に立ち上がり、ほかはなだらかに立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔方位〕 左側壁（西壁）で測ると N-6° -E である。

〔堆積土〕 2層に分けられた。1・2層は、炭化物と焼土を少量含む自然堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕 奥壁側半分が熱を受けて赤変する。

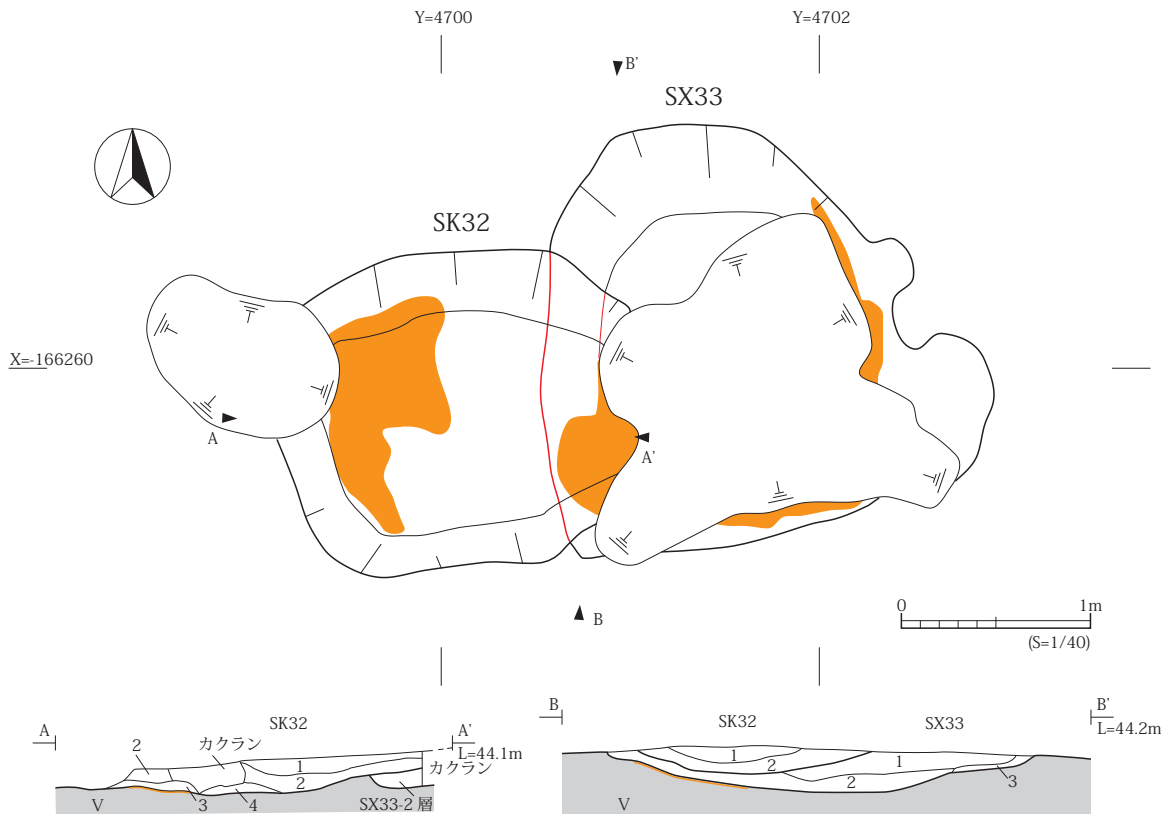
〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が多数出土した。89- 1 は風化や摩滅、スス・コゲの無い甕である。89- 2 の須恵器坏は 2 次的な被熱がみられ、床面から逆位で出土した。

#### 【SX37 土師器焼成遺構】（第 85 図・図版 19）

〔位置・検出面〕 6区中央南側の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

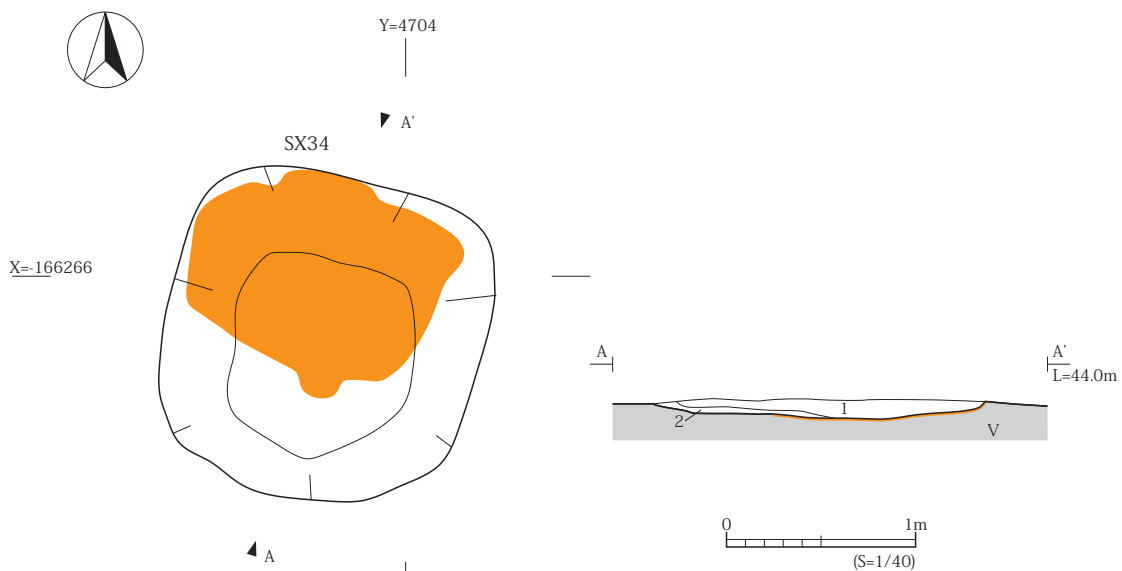
〔重複〕 SI24b と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 2.6m、短軸 2.1m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は二等辺三角形、壁は奥壁（北壁）が外に開いて直線的に立ち上がるほかは、なだらかに立ち上がり、床はほぼ平坦で、南半は SI24 b の堆積土を床面とする。



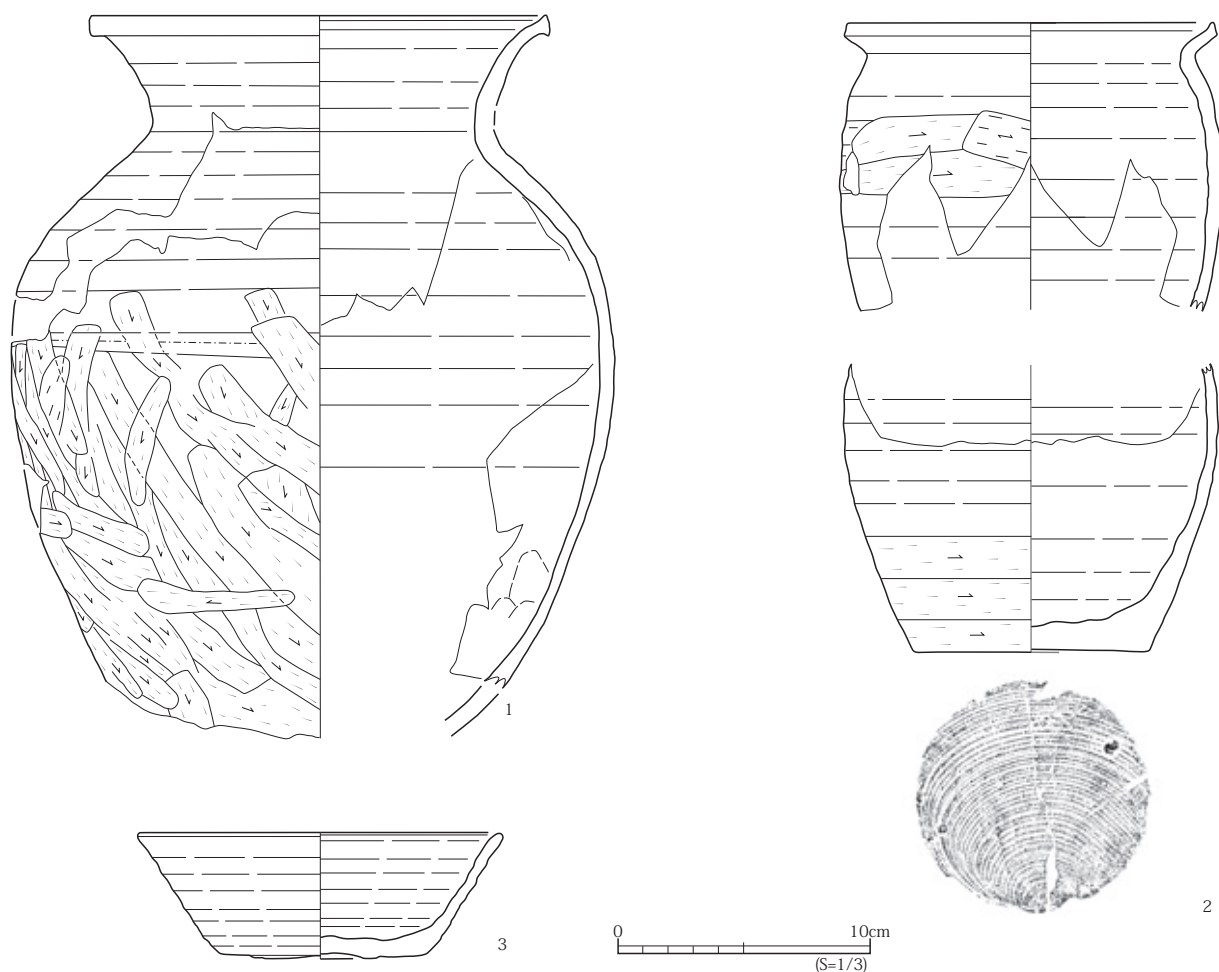
遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK32	1	にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト	灰白色火山灰 (To-a)	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/1) シルト	焼土粒を微量、火山灰ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	褐灰色 (10YR4/1) ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	黄褐色 (10YR5/6) シルト	黒褐色 (10YR3/1) 粒を少し含む	自然堆積
SX33	1	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	炭化物小、焼土粒を微量含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物小を多く含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	焼土粒を少し、暗褐色 (10YR3/4) ブロック小を微量含む	自然堆積

第 98 図 SX33 土師器焼成遺構 SK32 焼成土坑



層	土色・土性	特徴	性格
1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	炭化物粒を少し、地山 (V層) 粒を微量含む	自然堆積
2	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック小、焼土粒を少し含む	自然堆積

第 99 図 SX34 土師器焼成遺構



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 壺	SK32 2層	3/4	17.9	23.8		28.6	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	52-1	655
2	土師器 甕	SX34 床	3/4	14.7		9.4		外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		664
3	須恵器 坏	SX34 床	完形	14.1		8.3	5.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 赤褐色 二次被熱	51-11	662

第 100 図 SX34 土師器焼成遺構 SK32 焼成土坑 出土遺物

〔方位〕南北軸で測ると N-13° -E である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は炭化物粒などを少量含む自然堆積層、2層は炭化物が主体となる層、3層は自然堆積層である。

〔被熱〕床の奥壁側 2/3 が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔SX38 土師器焼成遺構〕(第 101・102 図・図版 19)

〔位置・検出面〕6区南端の丘陵南側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX39 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕東西 2.6m、南北 2.0m 以上、確認面からの深さは 18cm である。平面形は楕円形、壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

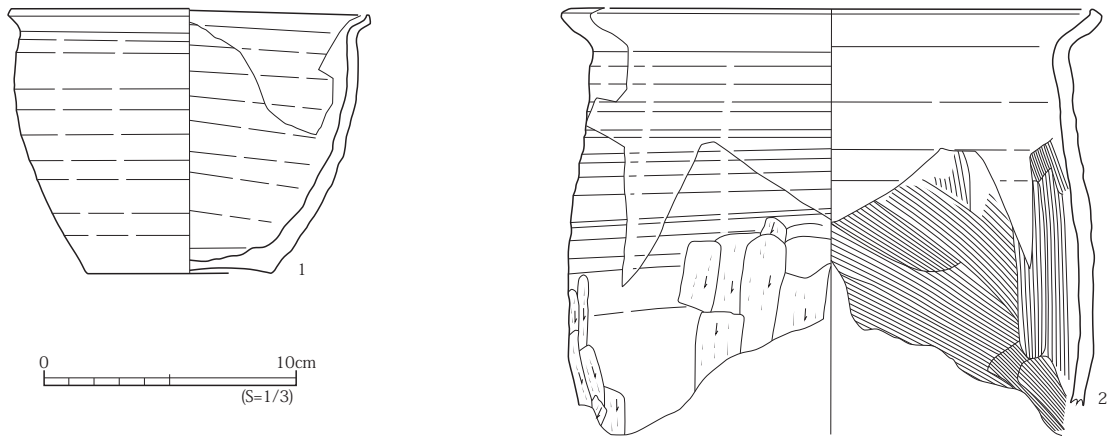
〔方位〕不明。





遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX38	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒を大量に、焼土ブロック中を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	人為堆積
	3	黒褐色シルト (10YR2/2) シルト	炭化物を部分的に大量に含む	人為堆積
SX39	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒を大量に、焼土ブロック中を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	炭化物ブロック中、焼土ブロック中を少し含む	人為堆積

第 101 図 SX38・39 土師器焼成遺構



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕	SX38 3層	1/3	(14.0)		7.3	10.5	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	52-2	648
2	土師器 甕	SX38 1層	破片	(20.6)			(16.8)	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		647

### 第 102 図 SX38 土師器焼成遺構 出土遺物

〔堆積土〕 3層に分けられた。1層と3層は炭化物を多く含む人為堆積層である。2層は地山粒を含み、西壁際で部分的に確認した人為堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕 床中央が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が多数出土した。遺構に伴う遺物としては、土師器甕がある。

### 【SX39 土師器焼成遺構】(第 101 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 6区南端の丘陵南側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SB48、SI22、SX38 と重複し、SX38 より古く、SI22・SB48 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 2.1m、短軸 1.4m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は隅丸長方形で、壁は直に立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕 奥壁が判然としませんが東西方向である。

〔堆積土〕 2層に分けられた。1・2層は炭化物と焼土ブロックを含む人為堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕 床西半が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

### 【SX46 土師器焼成遺構】(第 103 図)

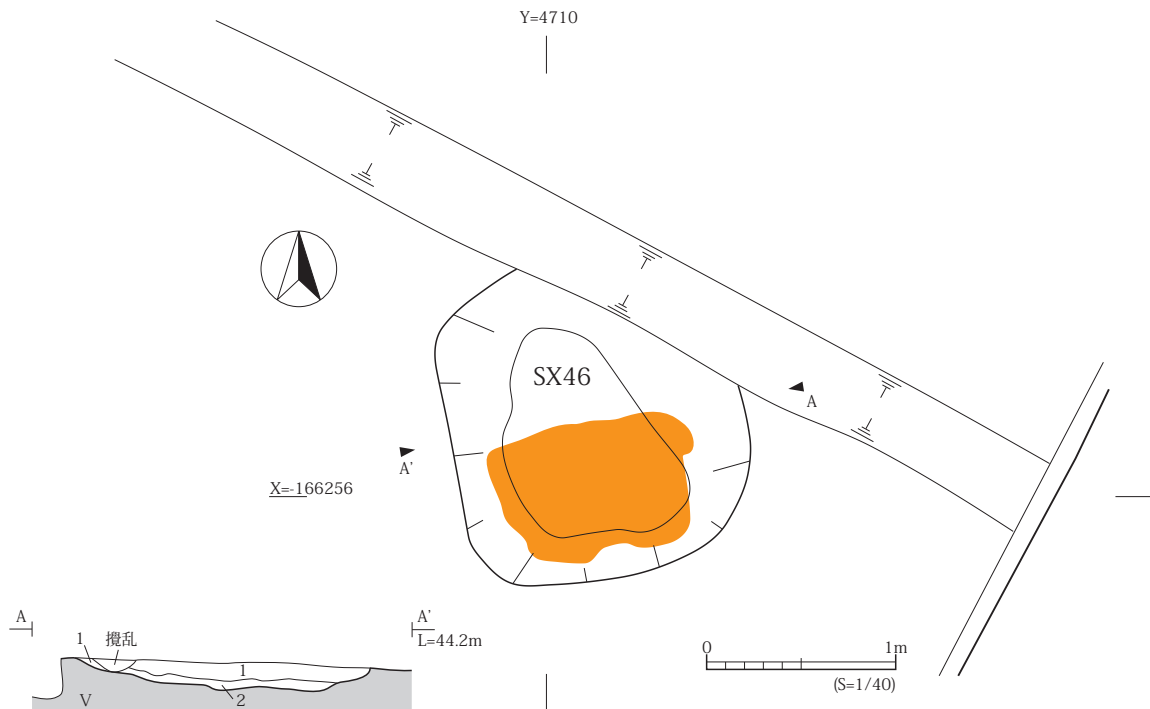
〔位置・検出面〕 6区北の北西斜面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.7m、短軸 1.6m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は隅丸長方形で、南壁が奥壁とみられる。壁は緩やかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕 左側壁（西壁）で測ると N-11° -W である。

〔堆積土〕 2層に分けられた。1層は焼土ブロックと地山ブロックを少し含む人為堆積層である。2



層	土色・土性	特徴	性格
1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	焼土ブロック小、地山 (V層) ブロック小を少し含む	人為堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積

第 103 図 SX46 土師器焼成遺構

層は炭化物粒や地山粒を少し含む自然堆積層である。

〔被熱〕床の奥壁側半分程度が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SX82 土師器焼成遺構】(第 89 図・図版 19)

〔位置・検出面〕7区北東の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕直接重複しないが、SX82 の窪みに由来する黒色土の堆積層を SK55 が掘り込む。

〔規模・平面形・断面形〕東西 1.4m 以上、南北 1.5m、確認面からの深さは 18cm である。平面形は楕円形で、壁は緩やかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕左側壁(西壁)で測ると N-11° -W である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は炭化物と焼土を少し含む自然堆積層である。2層は炭化物が主体となる層である。3層は遺構壁面の崩落土である。

〔被熱〕床の奥壁側半分程度が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SX92 土師器焼成遺構】(第 74・104 図・図版 19)

〔位置・検出面〕7区斜面、SI90、SX94 の検出面で検出した。奥壁側は用水路掘方によって上部が削平されていたが、その下で床から壁にかけて深さ 15cm 程度が残存していた。

〔重複〕 SI90、SX94 より新しい。

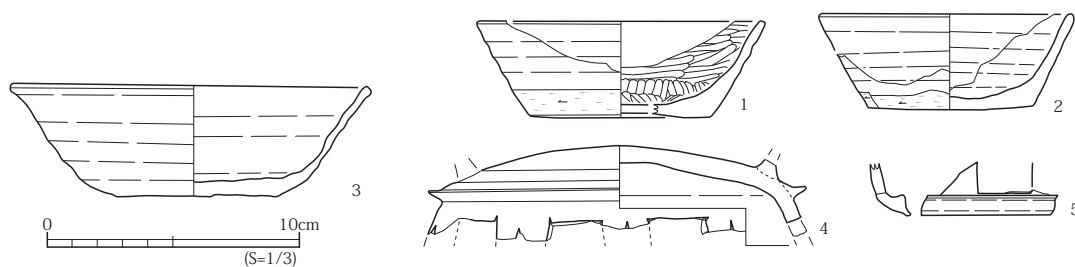
〔規模・平面形・断面形〕 東西 2.0m、南北 1.9m、確認面からの深さは 63cm である。平面形は隅丸長方形で、奥壁（北壁）と奥壁側の両側壁は東壁と西壁は直に立ち上がり、前壁側は緩やかに立ち上がる。床は前壁に向かって緩やかに立ち上がる。

〔方位〕 左側壁（西壁）で測ると N-20° -W である。

〔堆積土〕 6層に分けられた。1～5層は地山ブロック（Ⅲ・Ⅴ層）を含む人為堆積層、6層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕 床と奥壁、奥壁側の側面が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が多数出土した。凶化した遺物はいずれも堆積土中から出土した。103- 1 は土師器環として報告するが、器形が一般的な形ではなく、むしろ須恵器環に近い。内面はミガキ調整だが、内黒ではない。もともと内黒であったか否かを判断できる痕跡は観察できなかった。103- 2 は 1 と同形、近似した寸法だが、内面はロクロナデである。103- 4 と 5 は円形硯である。5 は 4 の脚とみても違和感ない器形だが、4 と比べると器壁がやや薄く、胎土が精緻で焼成もきわめて良好のため、4 の風化・摩滅の可能性を想定することもできるが、別個体として報告した。



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 環	SX92 3層	1/4 口縁部～底部	(11.0)		(7.2)	3.8	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ミガキ（黒色処理の痕跡見られず） 底部：回転ケズリ		1391
2	土師器 環	SX92 5層面	2/3	(10.0)		6.5	3.8	外：ロクロナデ→手持ちケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 内面風化	52-10	1392
3	須恵器 環	SX92 3層	2/3	13.8		6.8	4.5	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ 火ダスキ	52-6	1389
4	須恵器 円形硯	SX92 3層	1/3					硯面径：15.0 内径：10.8 外内：ロクロナデ 透し10 脚部に線文	52-8	1388
5	須恵器 円形硯	SX92 堆	脚部					4 と同一の可能性が高い	52-7	1388- ②

第 104 図 SX92 土師器焼成遺構 SK85 焼成土坑 出土遺物

### (iii) 焼成土坑

〔SK12 焼成土坑〕（第 83・105 図・図版 20）

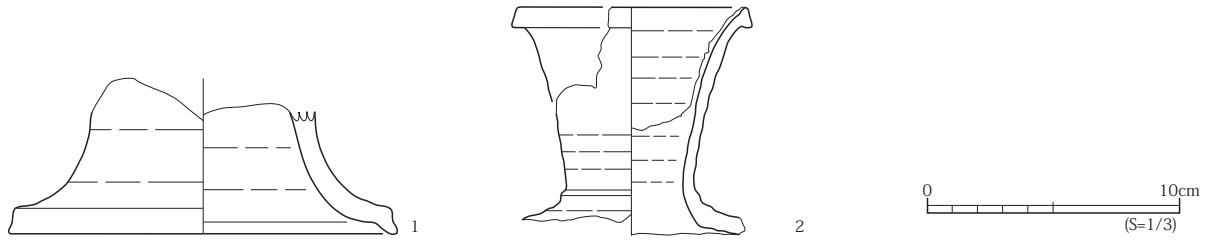
〔位置・検出面〕 8区西側の平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SK18 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.0m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 10cm である。平面形は隅丸長方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕 不明。

〔堆積土〕 2層に分けられた。1層は炭化物や焼土を多く含む人為堆積層である。2層は炭化物が主体となる層で、木炭を大量に含む。



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 脚付壺	SK12 堆	脚			15.3	(6.2)	外内：ロクロナデ 赤褐色	52-11	785
2	須恵器 長頸瓶	SK16 1層	口縁部片	9.0			9.0	外内：ロクロナデ リング状突帯	53-6	784

第 105 図 SK12・16 焼成土坑 出土遺物

〔被熱〕北壁の一部が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕堆積土中から須恵器脚付壺の脚部とみられる破片 106-1 が出土した。ほかに土師器・須恵器片が出土した。

【SK16 焼成土坑】(第 105・106 図・図版 20)

〔位置・検出面〕8区中央の平坦面、SX95、V層で検出した。

〔重複〕SX95 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 0.6m、短軸 0.5m、確認面からの深さは 18cm である。平面形は隅丸方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は地山（V層）由来のブロックを少量含む人為堆積層、2層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕西壁を除いて壁が部分的に熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕堆積土中からリング状凸帯のある須恵器長頸瓶 106-2 が出土した。ほかに土師器・須恵器片が出土した。

【SK17 焼成土坑】(第 106 図・図版 20)

〔位置・検出面〕8区中央の平坦面、SX95、V層で検出した。

〔重複〕SX95 と重複し、これより新しい。

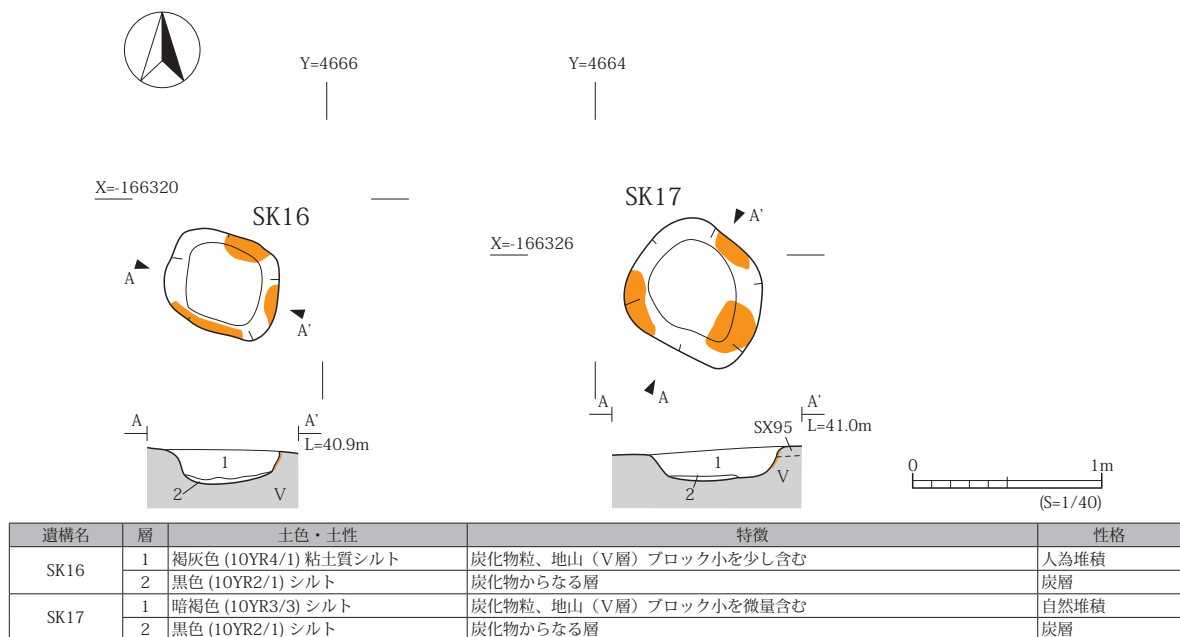
〔規模・平面形・断面形〕長軸 0.7m、短軸 0.7m、確認面からの深さは 16cm である。平面形は隅丸方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は地山（V層）由来のブロックを少量含む人為堆積層、2層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕北西壁を除いて壁が部分的に赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できる遺物は無かった。



第 106 図 SK16・17 焼成土坑

【SK28 焼成土坑】(第 13 図)

〔位置・検出面〕 6 区南の西壁際の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SK47 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 0.5m 以上、南北 2.0m、確認面からの深さは 24cm である。大部分が調査区外にあるため平面形は不明である。壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔堆積土〕 3 層に分けられた。1～2 層は炭化物粒や焼土粒・地山ブロックを少量含む自然堆積層である。3 層は炭化物粒が主体となる層で、床面全体に薄く堆積していた。

〔方位〕 不明。

〔被熱〕 床の一部が赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK32 焼成土坑】(第 98・100 図・図版 18)

〔位置・検出面〕 6 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SX33 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.8m 以上、短軸 1.6m、確認面からの深さは 18cm である。平面形は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がり、床はほぼ平坦である。

〔方位〕 奥壁が判然としないが、東西方向である。

〔堆積土〕 4 層に分けられた。1 層は灰白色火山灰 (To-a) の自然堆積層、2～4 層は地山ブロックや焼土粒を少量含む自然堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕 床の西寄りが熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が多数出土した。89- 1 は須恵器とみられるが、剥離が目立つ。

【SK40 焼成土坑】(第 107・108 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 6 区南東の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SI21 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.7m、短軸 1.4m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は不整形、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕 奥壁が判然としないが、南北方向である。

〔堆積土〕 3 層に分けられた。1～2 層は炭化物と焼土を少し含む自然堆積層である。3 層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕 床全体が熱を受けて赤変する。南西隅の一部は硬化する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。95- 1・2 は堆積土から出土した土師器甕である。

【SK70 焼成土坑】(第 91 図)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕 SK57、SK58 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.8m、短軸 1.7m、確認面からの深さは 18cm である。重複する土坑に削平されているため、平面形は不整形、ほぼ床面のみ確認のため壁は判然としない。床は平坦である。

〔方位〕 不明。

〔堆積土〕 1 層のみで、炭化物と焼土を少し含む自然堆積層である。

〔被熱〕 床の一部が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK74 焼成土坑】(第 88 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 7 区北の平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SB48、SK66、SX71 と重複し、SX71、SK66 より古く、SB48 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 2.0m、短軸 1.1m 以上、確認面からの深さは 24cm である。平面形は逆台形で、壁はなだらかに立ち上がる。奥壁は西壁とみられる。

〔方位〕 不明。

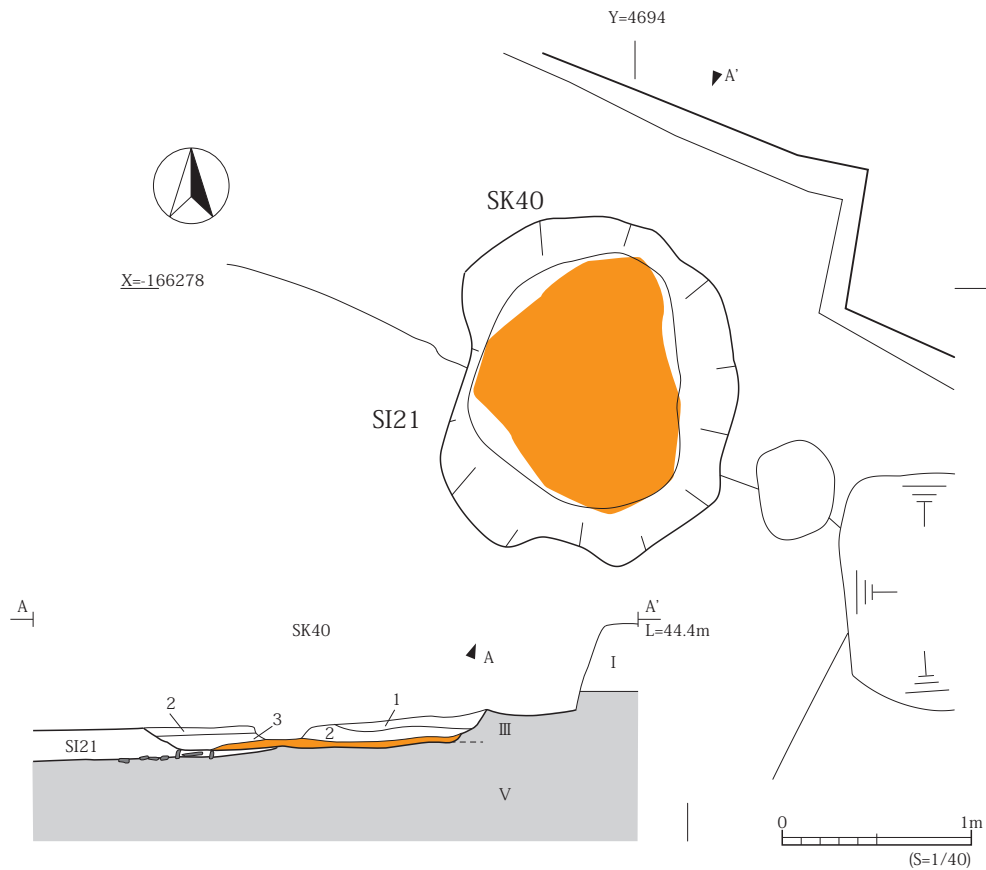
〔堆積土〕 2 層に分けられた。1 層は地山ブロック中～大、焼土塊を少し含む自然堆積層、2 層は炭化物と焼土を多く含む自然堆積層である。

〔被熱〕 床の奥壁側半分程度が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

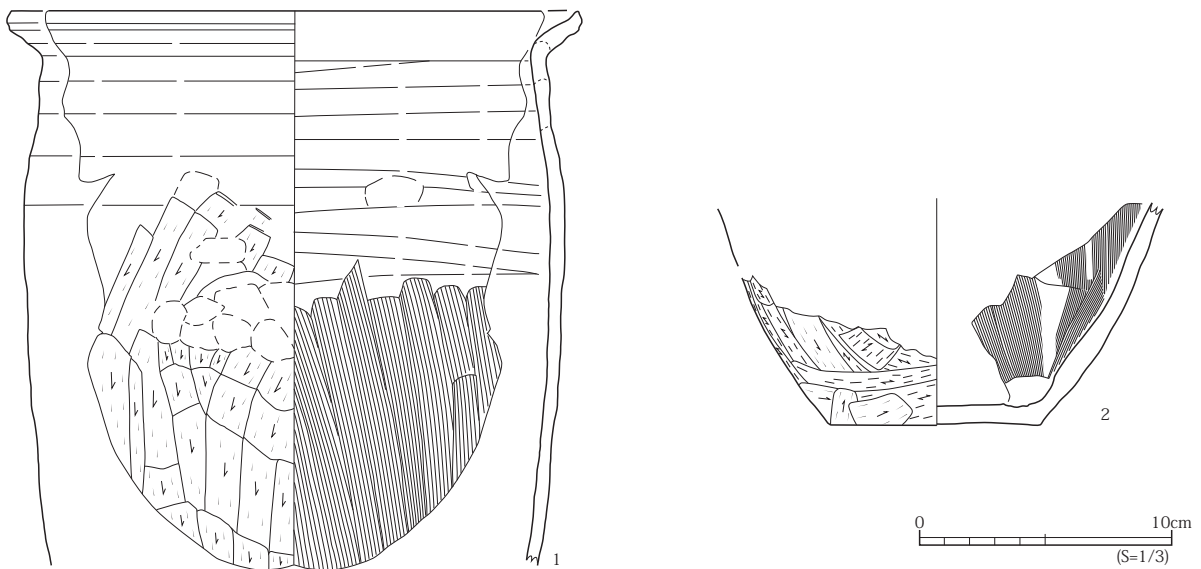
【SK85 焼成土坑】(第 109・110 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 7 区斜面に位置し、Ⅳ層で検出した。北側は用水路掘方、南側はカクランによって



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK40	1	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	炭化物小、焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	自然堆積
	3	黒色 (10YR1.7/1) 粘土質シルト	炭化物粒を大量に含む	炭層

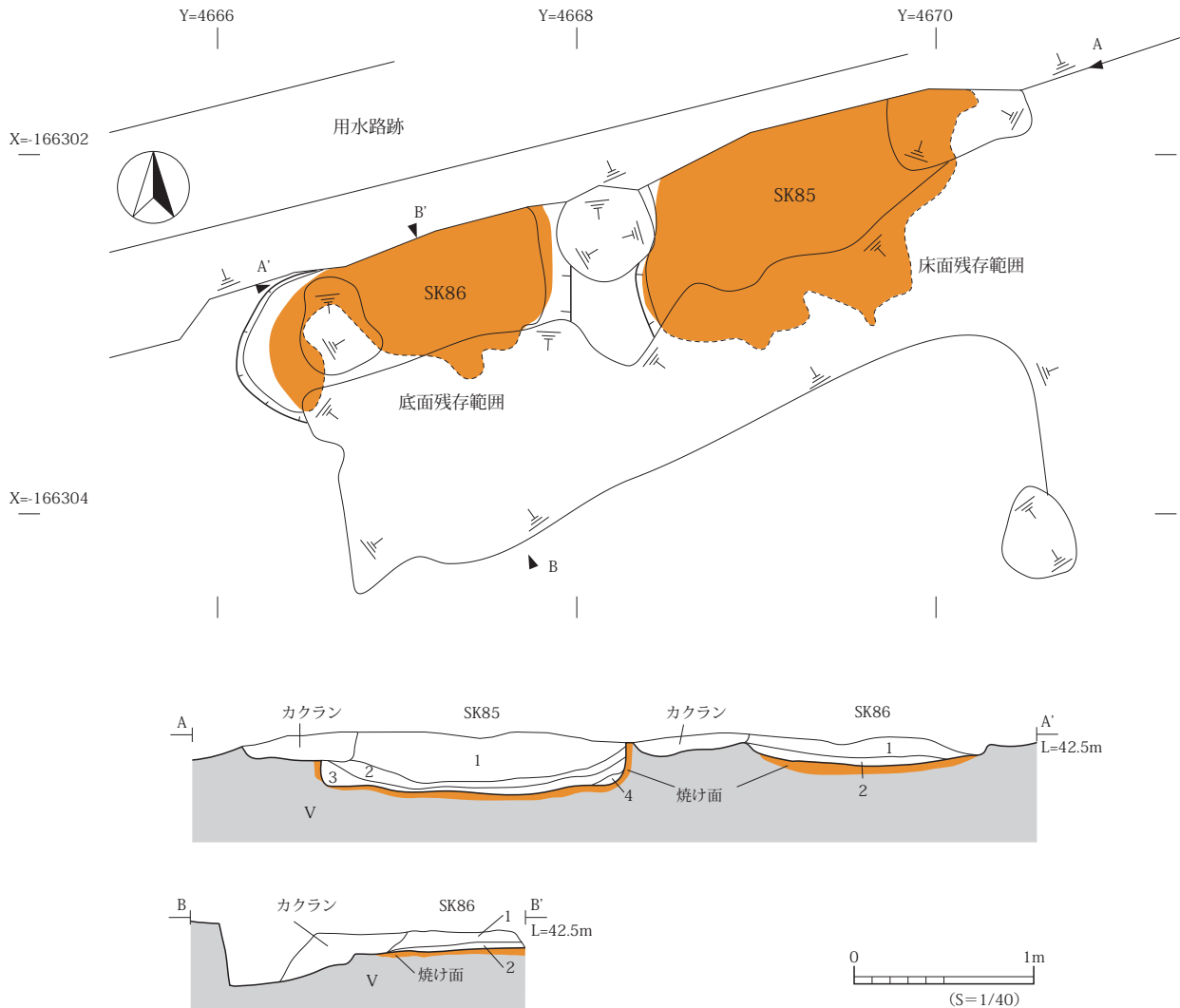
第 107 図 SK40 焼成土坑



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕	SK40 1層	口～胴下部	(22.4)			(22.0)	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		668
2	土師器 甕	SK40 1層	胴下部～底部			8.4	8.8	外：ケズリ 内：ナデ 黒斑		666

第 108 図 SK40 焼成土坑 出土遺物





遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK85	1	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小、炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	褐色土ブロック小を少し含む	人為堆積
	3	暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	黒褐色 (7.5YR3/2) 粘土質シルト		自然堆積
SK86	1	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	人為堆積
	2	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積

第109図 SK85・86 焼成土坑



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 高坏坏部 or 皿	SK85 3層	1/3	(20.0)			1.3	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		1411

第110図 SK85 焼成土坑 出土遺物

削平されていた。南側ではカクランの下で床面の一部が残存していた。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕東西 1.9m 以上、南北 1.2m 以上、確認面からの深さは 50cm である。平面形は不明で、東壁と西壁は垂直に立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕4層に分けられた。1層は地山ブロックを含む人為堆積層、2層は地山に近い黄褐色粘土

質シルトの人為堆積層である。3層および4層は自然堆積層である。

〔被熱〕床が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土した。102-1は須恵器として報告するが、赤褐色を呈す土器で器形・器種も判然としない。皿か高坏坏部とみられる。

#### 【SK86 焼成土坑】（第109図・図版19）

〔位置・検出面〕7区斜面に位置し、IV層で検出した。北側は用水路掘方、南側はカクランによって削平されていた。南側ではカクランの下で床面の一部が残存していた。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕東西1.9m以上、南北0.8m以上、確認面からの深さは24cmである。平面形は不明で、東壁と西壁は緩やかに立ち上がる。床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は地山ブロックを含む人為堆積層、2層は自然堆積層である。

〔被熱〕検出範囲の床が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

#### （4）溝跡

##### 【SD11 溝】（第122・123・111図・図版22）

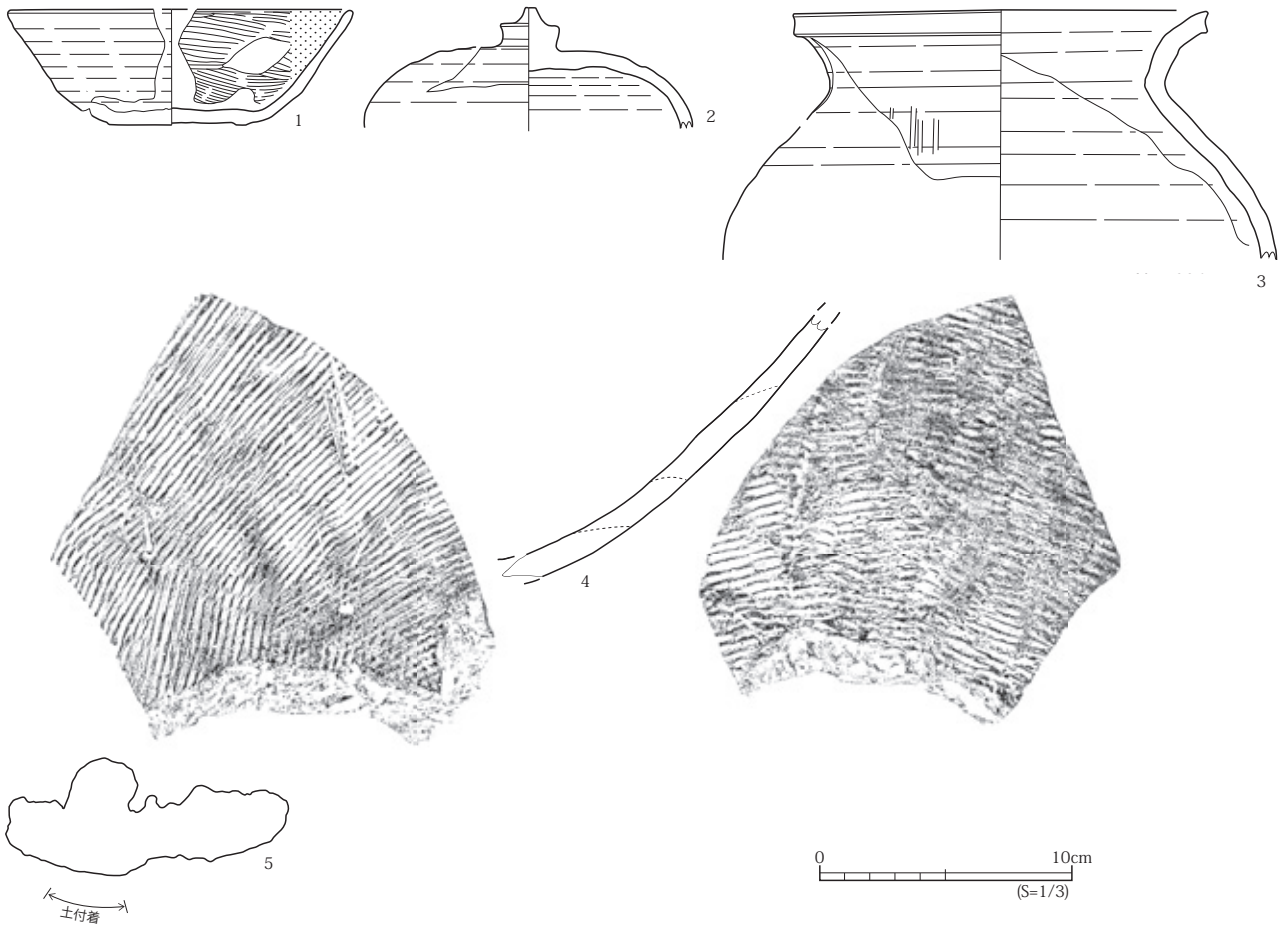
8区南端の丘陵南西側緩斜面に位置し、SX95と重複し、これより新しい。南西-北東方向で検出長は6.2m、規模は上幅1.15m、下幅0.35m、深さ0.3mである。断面形は台形である。堆積土は5層に分けられ、自然堆積層である。3層は灰白色火山灰（To-a）の自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が多く出土した。113-2は須恵器蓋、5は椀形鍛冶滓である。

##### 【SD54 溝】（第64・112・113図・図版22）

7区中央北寄りの丘陵南緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。SI22、SI29、SI76、SK59、SX53、SX71、SD73重複し、SX53、SI76より新しく、SK59、SX71、SD73より古い。SI22、SI29との新旧関係は不明である。南西-北東方向で検出長は16.9m、規模は上幅0.5～0.7m、下幅0.2～0.3m、深さ0.3mである。断面形は台形である。堆積土は2層に分けられ、自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が多量に出土した。それらのうち、特徴的なものを図化して提示した。114-7・8は横瓶側面の閉塞部の破片、114-10は風字硯の破片とみられる。

##### 【SD73 溝】（第88・114図）

7区中央北寄りの丘陵南緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。SK51、SK55、SK59、SX71、SD54と重複し、SD54より新しく、SK51、SK55、SK59、SX71より古い。東西方向で検出長は15.4m、規模は上幅0.3～0.4m、下幅0.2～0.3m、深さは0.2mである。断面形は箱形である。堆積土は、



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	2層	1/3	(13.5)		5.4	4.6	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：糸切り		1087
2	須恵器 蓋	2層					4.7～	摘まみ：宝珠 外内：ロクロナデ		956
3	須恵器 壺	2層	口縁部片	16.4			9.9～	外部：ロクロナデ→叩き 内：ロクロナデ		1086
4	須恵器 甕	1層	胴部片					外：平行叩き 内：平行線当て具痕	67-1	1085
5	椀形滓	堆積土						長さ：11.1 8.2 厚さ：4.6 2.3		952

第111図 SD11溝 出土遺物

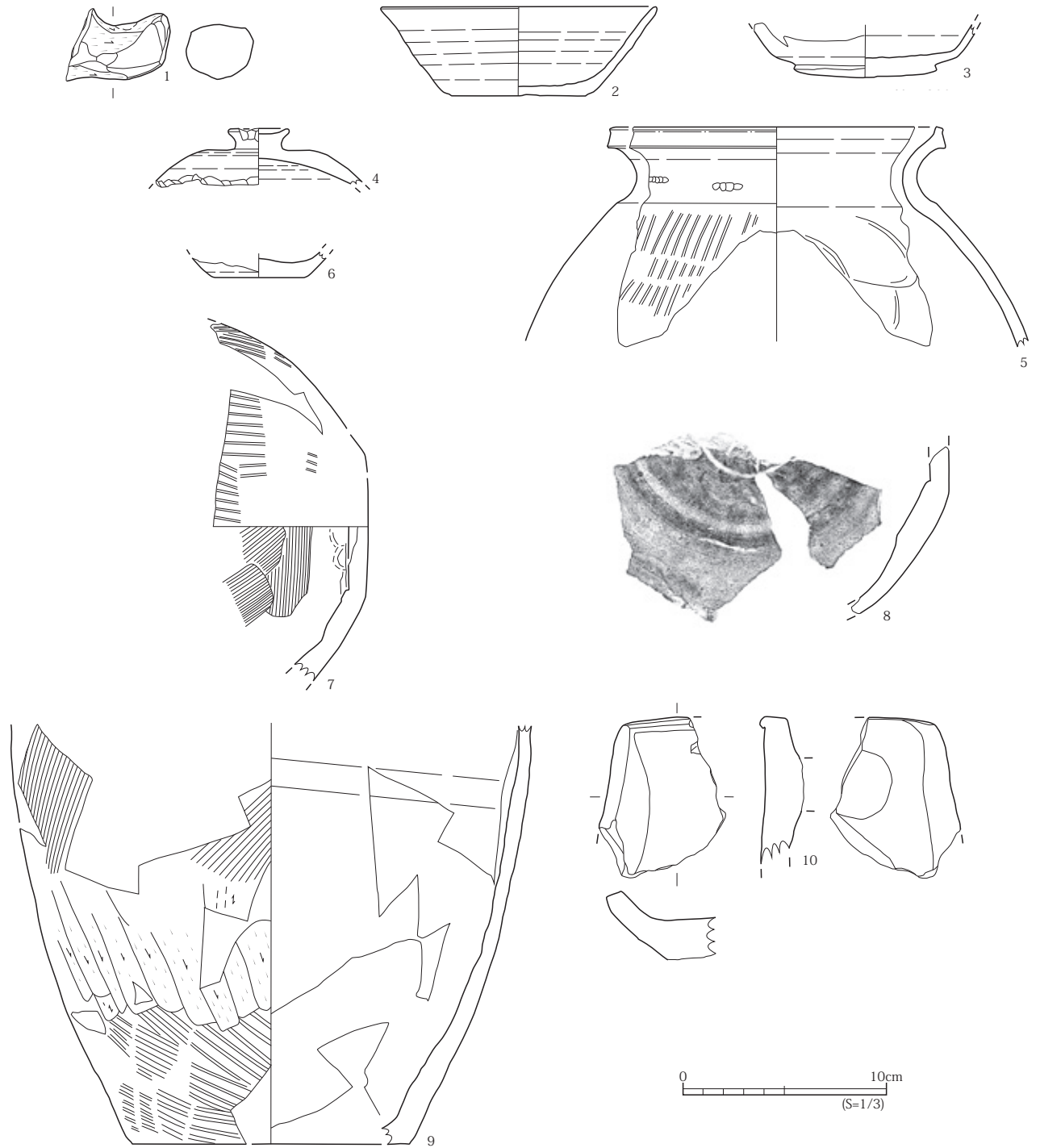
自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器、土製品が出土した。

【SD84溝】(第56図)

7区南西の丘陵南緩斜面に位置し、V層で検出した。SI60と重複し、これより新しい。東西方向で検出長は2.2m、規模は上幅2m、下幅1m、深さ0.4～0.8mである。断面形は台形である。堆積土は2層に分けられ、自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。

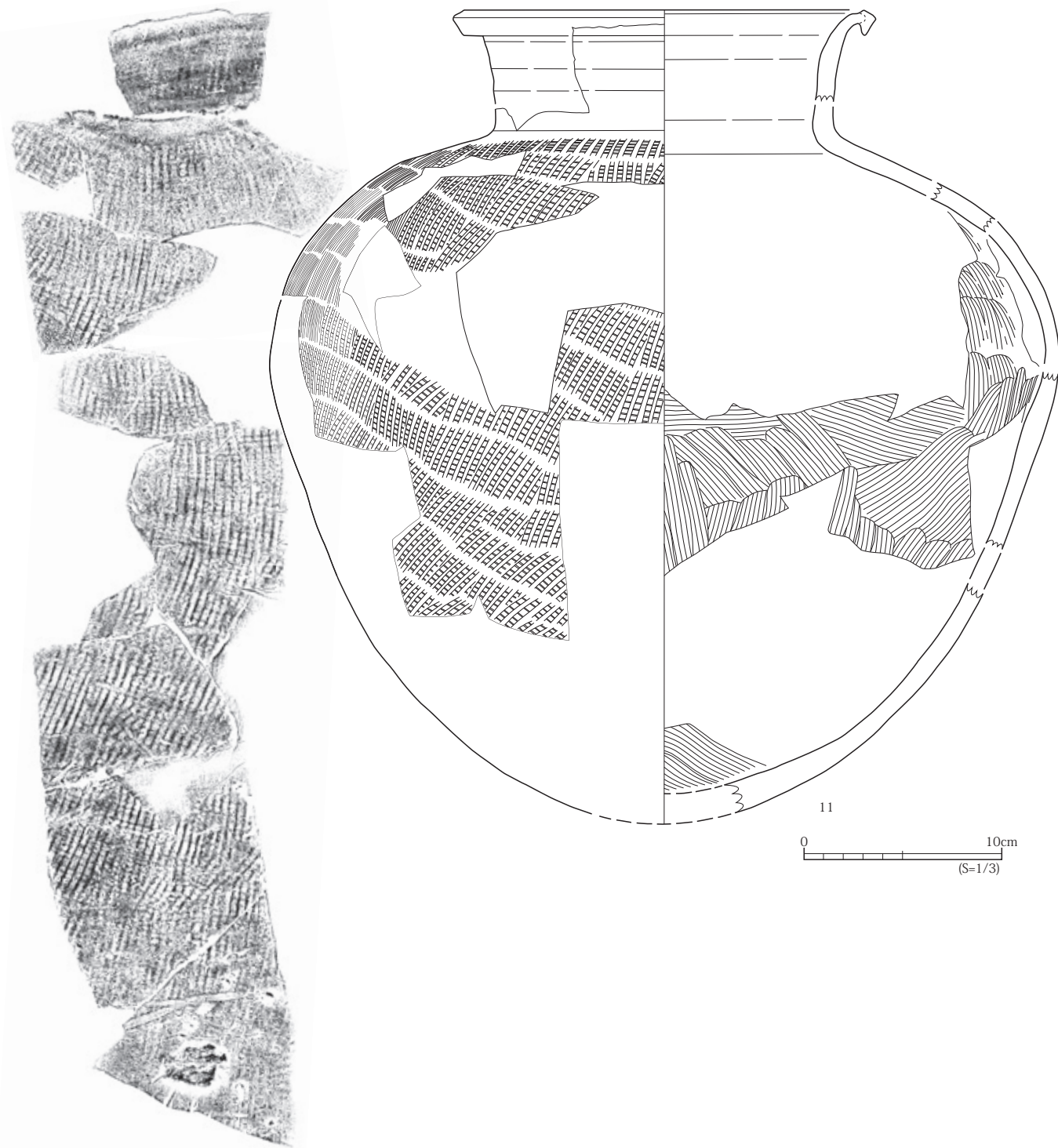
【SD91溝】(第62図)

7区中央の丘陵南緩斜面に位置し、V層で検出した。東西方向で検出長は1.8m、規模は上幅0.4m、下幅0.2m、深さ0.1～0.2mである。断面形は緩やかなU字形である。堆積土は地山(V層)からなる人為堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。



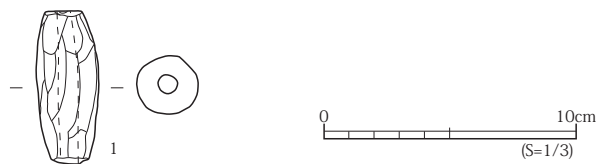
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甌	2層	把手							1379
2	須恵器 坏	1層	3/4	13.6		6.6	4.4	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		1297
3	須恵器 坏	1層	底部片			(7.0)	2.6～	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ 厚い 外内に重ね焼き痕有り		1298
4	須恵器 蓋	1層	2/3				2.3～	摘まみ：ボタン 外内：ロクロナデ 重ね焼き痕有り 端部打ち欠き		1301
5	須恵器 壺	1層	口縁部～肩部	16.4			10.8 ～	外：ロクロナデ→平行叩き 内：ロクロナデ→無文当て具痕 外面頸部に横位で4～5個1単位の圧痕有り		1292
6	須恵器 壺?	1層	底部片			4.2	1.2～	外内：ロクロナデ 自然釉付着 底部：へら切り		1302
7	須恵器 横瓶	1層	胴部側面					外：平行叩き ナデ 内：ナデ 指頭圧 閉塞円盤	67-2	1299
8	須恵器 横瓶	1層	胴部側面					外：ナデ 内：ロクロナデ 閉塞円盤	67-3	1300
9	須恵器 甕	SK51・SX71・SD54・SD73・SD75・7区検出面	底部～胴部			(13.6)	20.6 ～	外：叩き→ケズリ 内：ロクロナデ		1305
10	須恵器 硯	1層	破片					風字硯	67-4	1377

第112図 SD54溝 出土遺物(1)



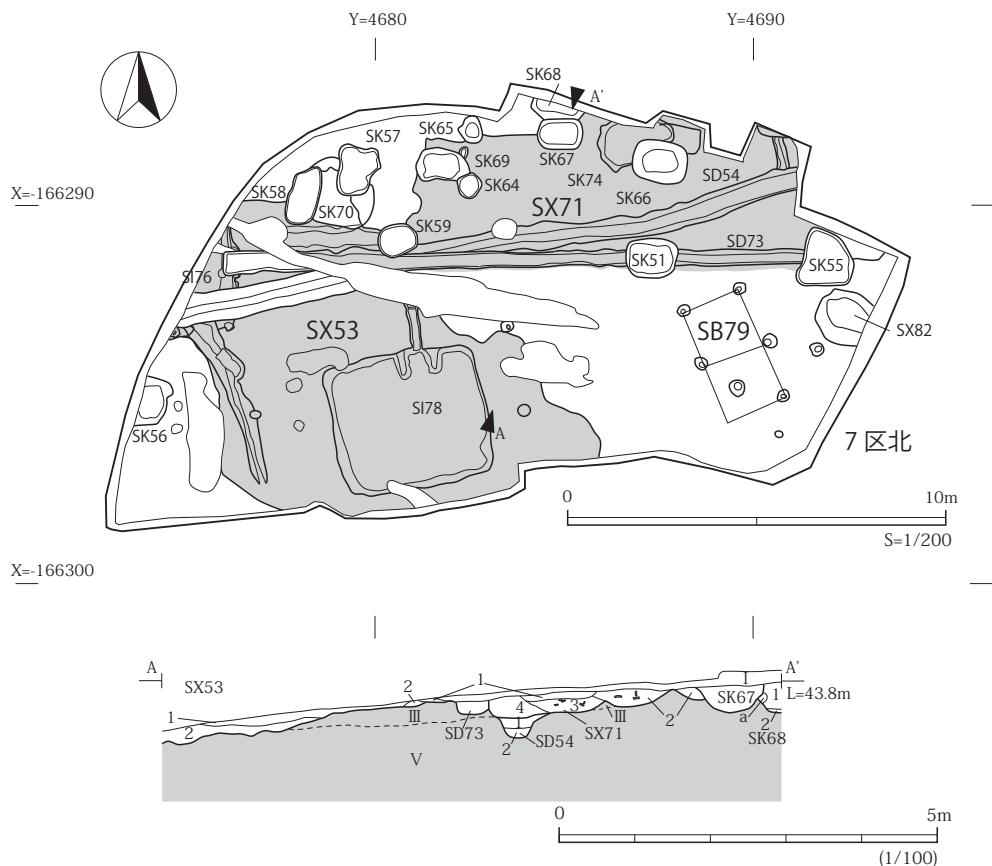
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
11	須恵器 中甕	1層・SK51・SX71・SD54・SD75・7区検出面		(20.2)				口縁(外内:ロクロナデ) 胴(外:平行叩き 内:無文当て具一部ナデ)		1304

第113図 SD54溝 出土遺物(2)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土錘	1層	完形					小形 長さ:6.0 最大幅:2.5 重さ:32 g		1376

第114図 SD73溝 出土遺物



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK67	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	Ⅲ・Ⅴ層ブロックからなり、炭化物粒を多く含む	人為堆積
SK68	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	Ⅲ・Ⅴ層ブロックからなり、炭化物粒を多く含む	人為堆積
	a	黒色 (10YR2/1) シルト		カクラン
SX71	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	黒色土ブロック中～小を多く含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	黄褐色土ブロック大～小を多く含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	黄褐色土ブロック中～小を少し含む	人為堆積
	4	黒色 (10YR2/1) シルト	黄褐色土ブロック小、明黄褐色土ブロック小を少し含む	人為堆積
SX53	1	黒褐色シルト (10YR3/1) シルト	褐色土粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	Ⅲ層ブロック中～小、白色粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む	自然堆積
SD73	1	暗褐色 (10YR3/1) シルト	黄褐色ブロック小・粒をわずかに含む	自然堆積
SD54	1	黒色 (10YR2/1) シルト	黄褐色土・明黄褐色土粒を少し含む	自然堆積
	2	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	明黄褐色土ブロック小・粒を多く含む	自然堆積

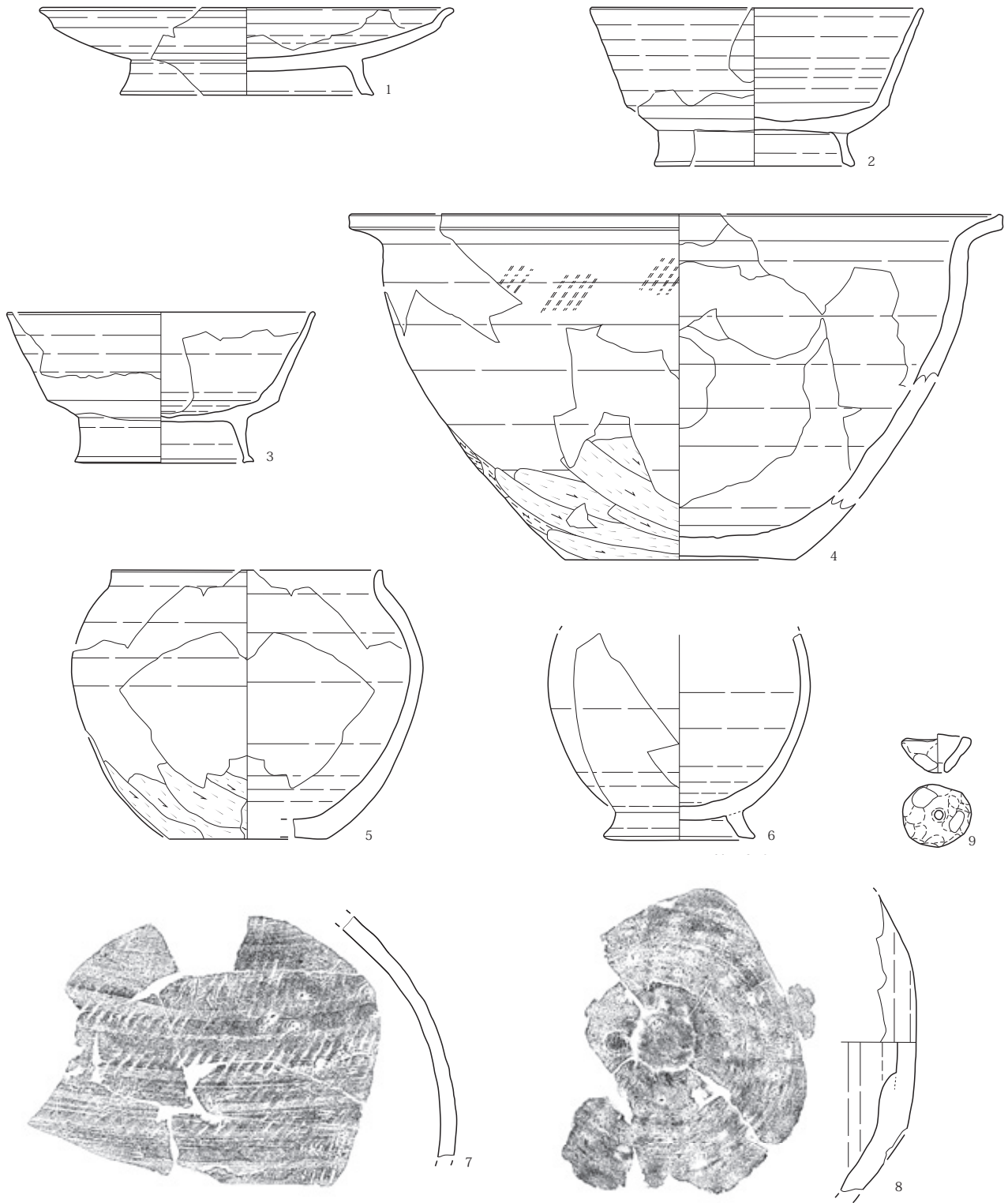
第 115 図 SK67・68 土坑 SD54・73 溝跡 SX71 整地層 SX53 堆積層

### (5) その他の遺構

#### 【SX71 整地層】(第 115～120 図)

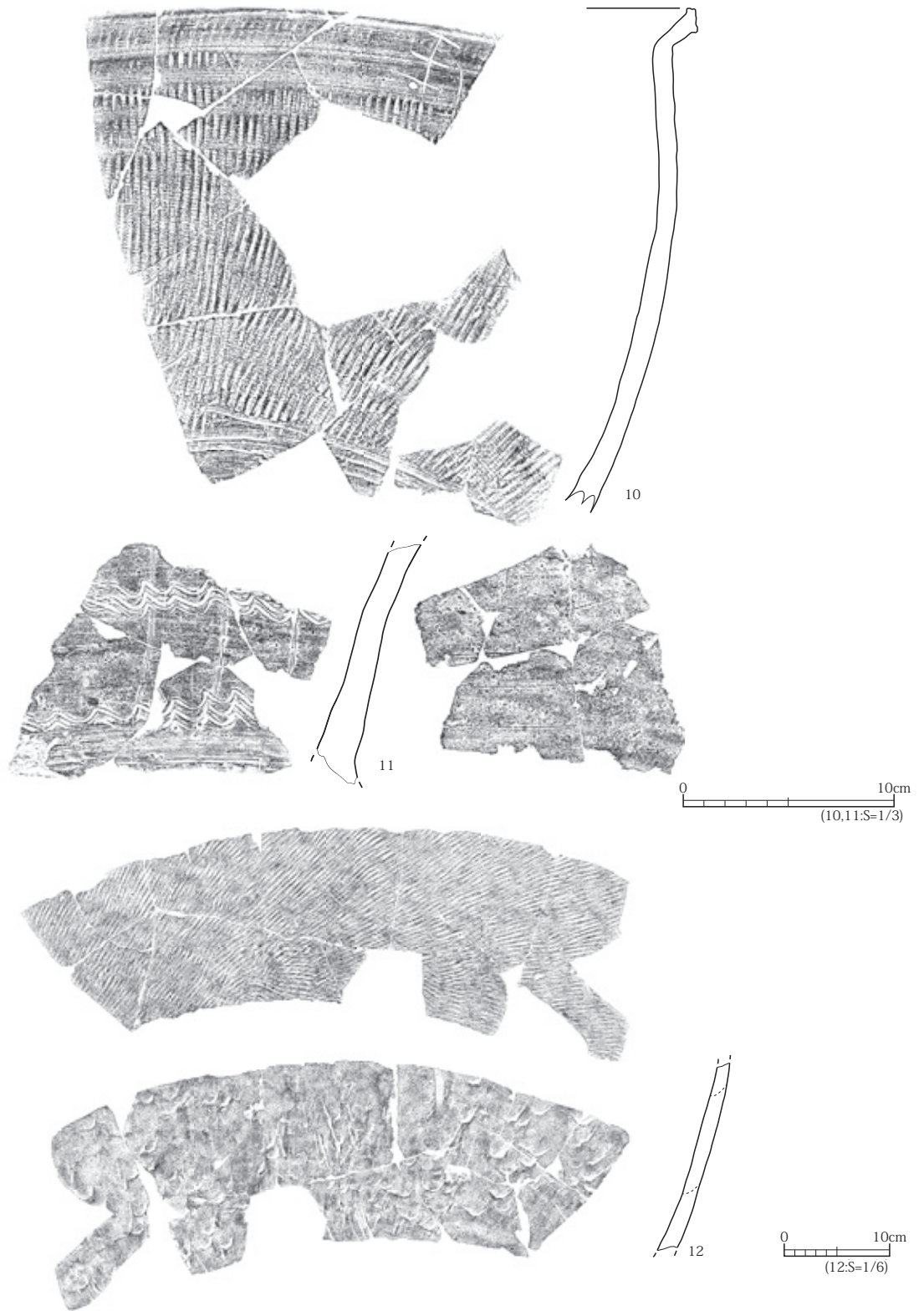
7 区北半の丘陵頂部平坦面の、Ⅲ・Ⅴ層上で確認した。SB48、SI22、SK51、SK70、SK74、SD54、SD73、SK55、SK59、SK65、SK66、SK67、SK68、SK69 と重複し、SB48、SI22、SK70、SK74、SD54、SD73 より新しく、SK51、SK55、SK59、SK65、SK66、SK67、SK68、SK69 より古い。

東西 15.5 m 以上、南北 4 m ほどの範囲に広がる。盛土は 4 層に分かれ、いずれもⅢ層を主体として黒色土やⅤ層ブロックからなり、厚さは最大 30cm ほど残存する。整地層の底面は、浅く掘り込まれて東西方向の溝状になっている。遺物は、土師器・須恵器が大量に出土した。それらのうち、特徴的なものを図化して提示した。



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 盤	1層	2/3	20.8		12.7	4.4	外：口縁部～体部ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ		1332
2	須恵器 高台杯	SX71	1/2	(16.6)		(10.0)	7.9	外：ロクロナデ (底部～体下部) 回転ケズリ→ナデ 釉付着 内：ロクロナデ		1371
3	須恵器 高台杯	2層	1/2	15.2		9.0	7.6	外：ロクロナデ 釉付着 内：ロクロナデ 全体に釉付着 底部：回転ケズリ 重ねの最上段と見られる		1373
4	須恵器 鉢	堆積土	2/3	32.5		11.6	17.4	外：ロクロナデ→下部ヘラケズリ 内：ロクロナデ		1303
5	須恵器 壺	2層	1/3	(13.7)	(17.7)	(8.0)	13.5	外：ロクロナデ 胴下部ヘラケズリ 内：ロクロナデ 短頸壺		1316
6	須恵器 瓶	2層	胴部片			7.6	10.4～	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り 水瓶？		1318
7	須恵器 横瓶？	2層	胴部片					外：叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		1319
8	須恵器 横瓶	2層	胴部側面					外内：ロクロナデ 円盤閉塞		1321
9	土製品	2層	完形					手づくね底部穿孔		1378

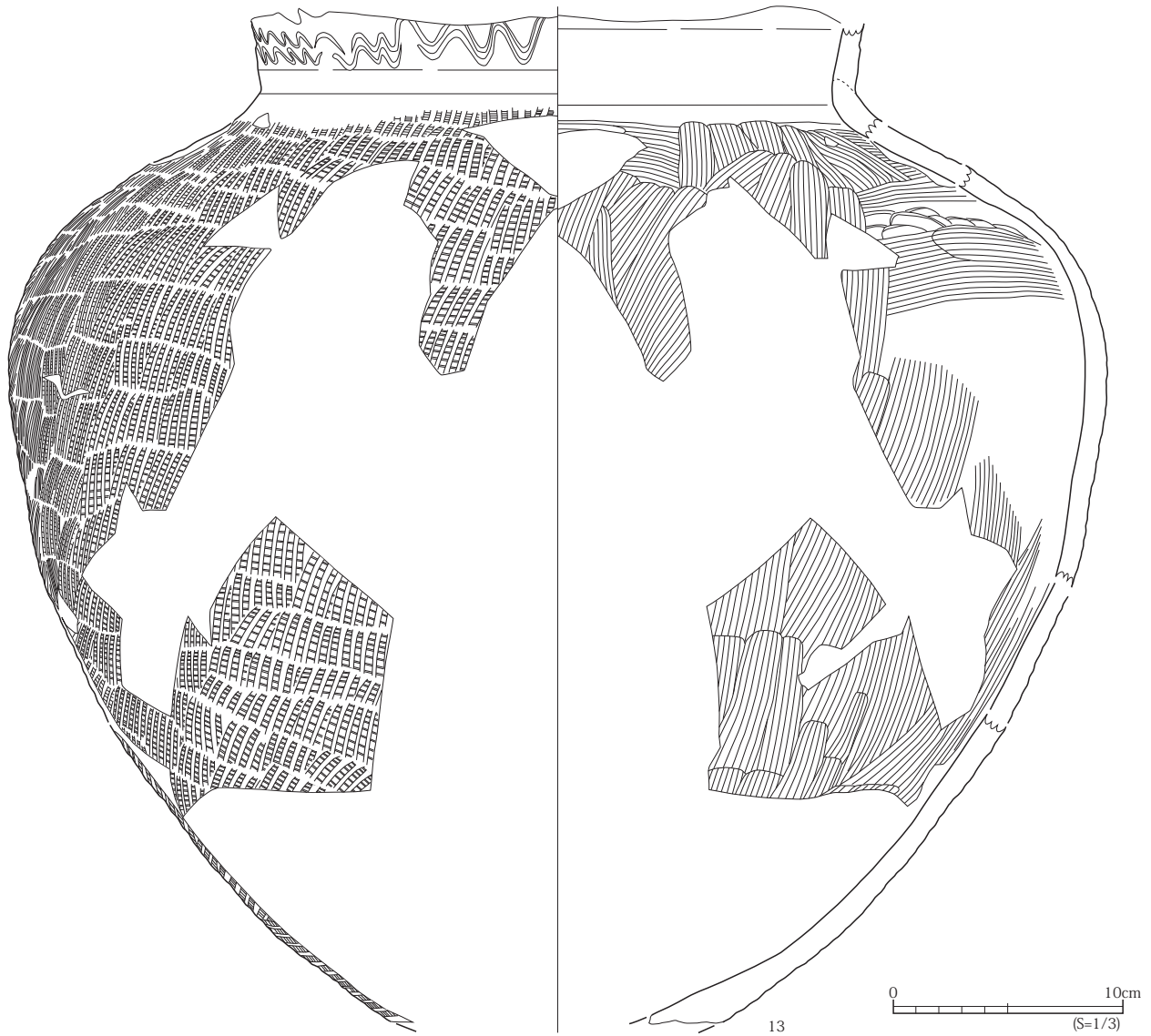
第 116 図 SX71 整地層 出土遺物 (1)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
10	須恵器 鉢	3層	1/4					外：口縁部下に「玉」へら描き 上部ロクロナデ 体部擬格子叩き 下部へらケズリ 内：ロクロナデ		1326
11	須恵器 甕	1層	口縁部細片					外：ロクロナデ→櫛描き波状文→縦線文 内：ロクロナデ		1314
12	須恵器 甕	SD54 1層・SX71 2層・3層・検出面 7区検出面	胴部片					破片復元径上：69.4 下：57.0 外：平行叩き 内：無文当て具痕→へらナデ		1374

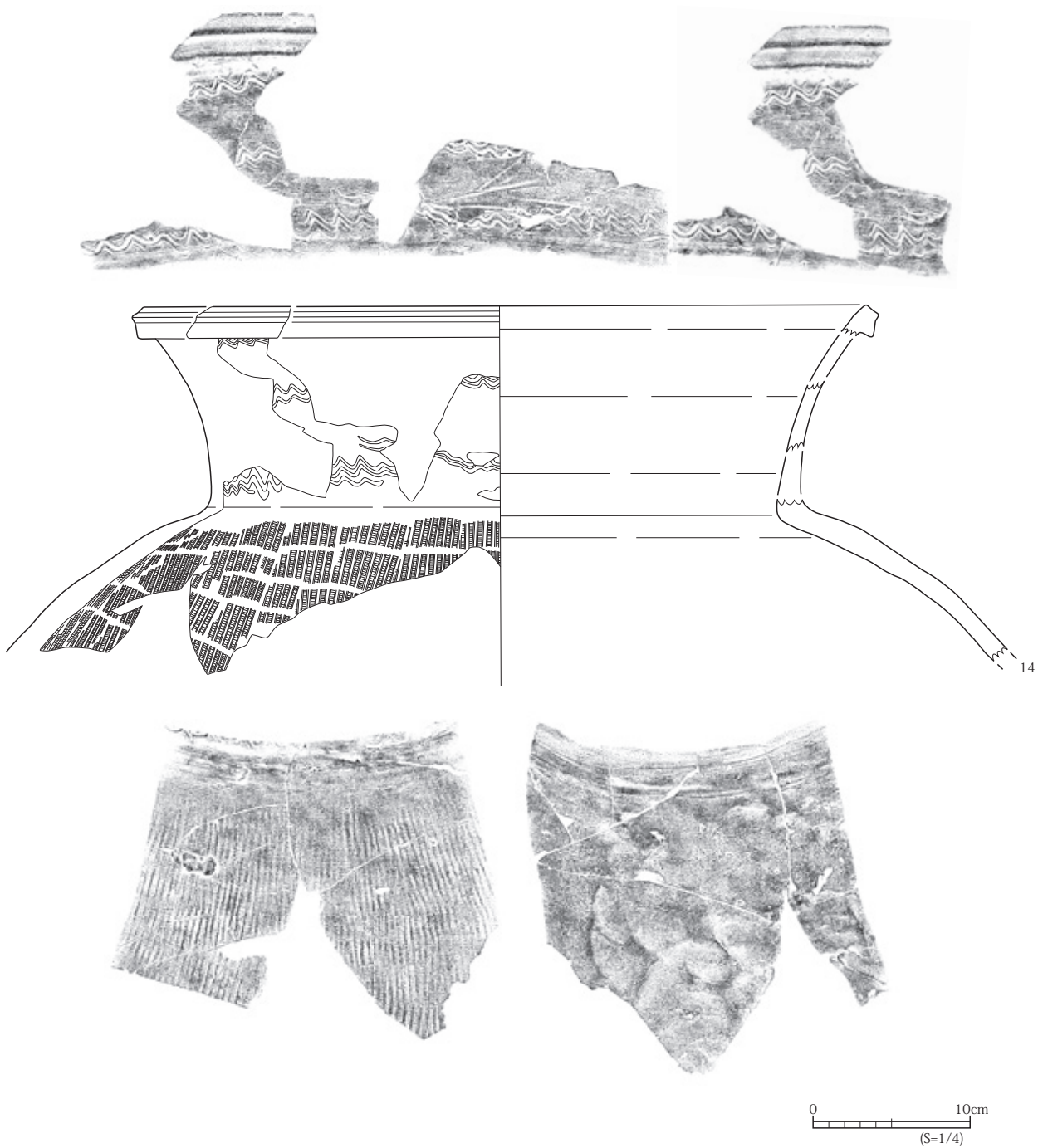
第 117 図 SX71 整地層 出土遺物 (2)





No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
13	須恵器 甕	SX71・SD54 7区検出面	頸~胴部 1/4		(47.8)		45.0 ~	頸(外:ロクロナデ→櫛歯数2櫛描波状文 内:ロクロナデ) 胴(外:平行叩き 内:無文当て具痕→ナデ)		1370

第 118 図 SX71 整地層 出土遺物 (3)

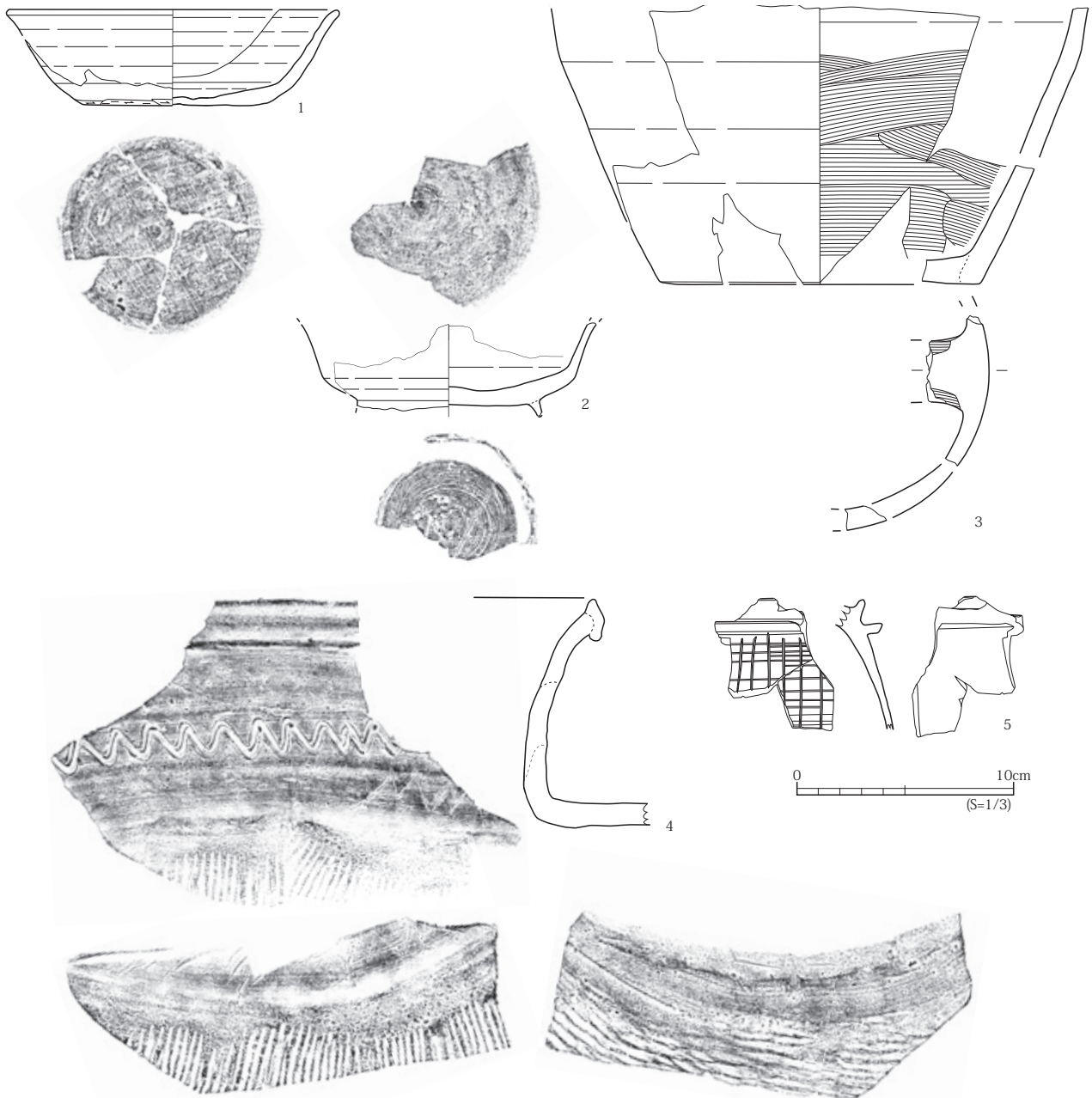


第 119 図 SX71 整地層 出土遺物 (4)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
14	須恵器 甕	SK51 2層 SX71 3層・検出面 SD73 SD54 1層 7区検出面	口縁部～体部破片					外：櫛歯数3 櫛描波状文3段 体部擬格子（細） 内：ロクロナデ 体部無文当て具痕		1375-1
15	須恵器 甕	SK51 2層 SX52 SX71 3層・検出面 SD73 SD54 1層 7区検出面	体部破片					外：擬格子 内：ナデ		1375-2
16	専用焼台	7区 SX71 1層						外内：自然釉	67-5	1482

第 120 図 SX71 整地層 出土遺物 (5)



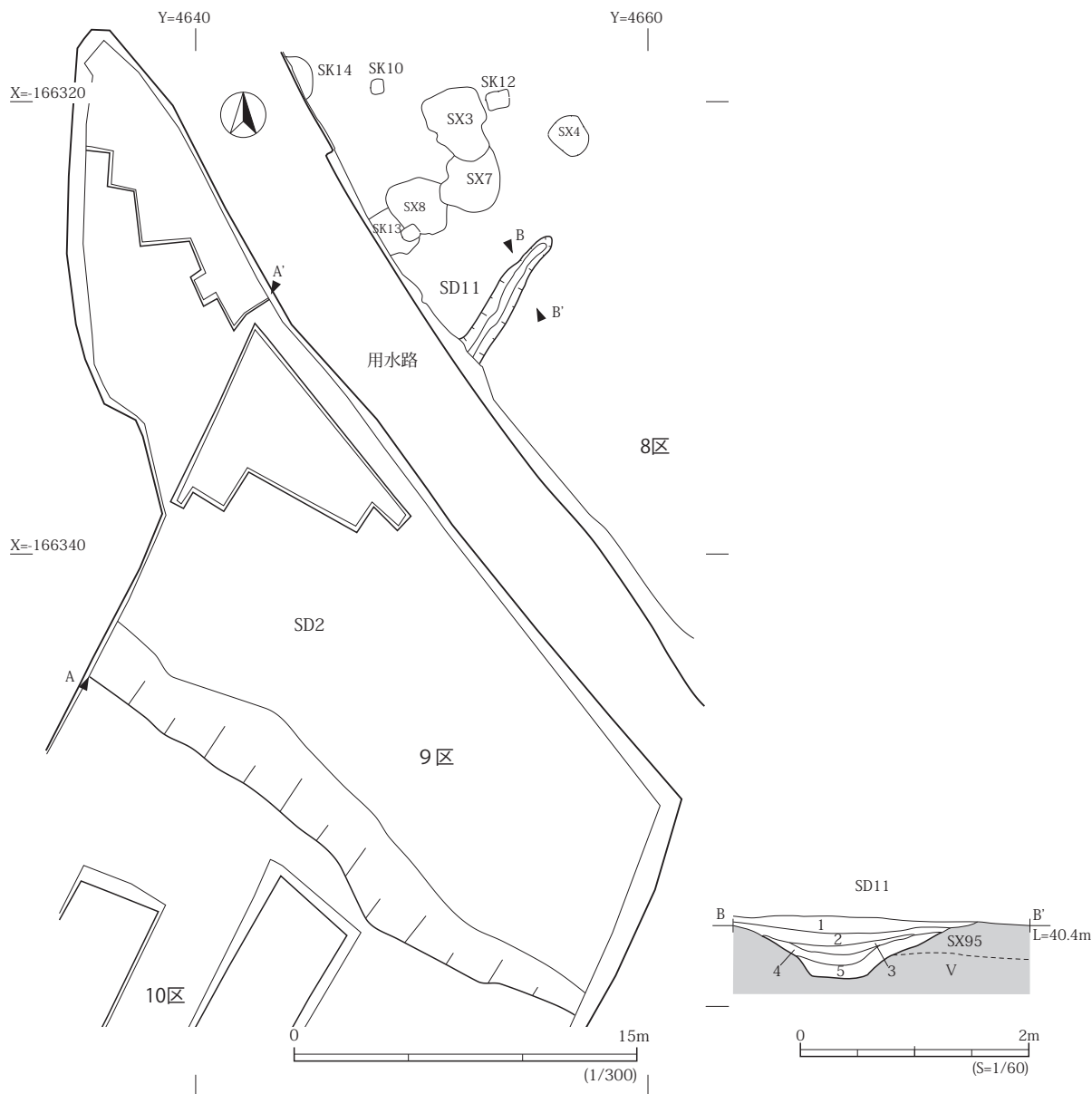
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	1層	1/3	(15.1)		8.5	4.4	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ		1347
2	須恵器 高台坏	1層	1/4 未満					外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 裏表にヘラ描き「×」		1333
3	須恵器 甗	1層	底部片			(14.8)		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ→ナデ 底部：ナデ(ケズリに近い) 大部分摩滅		1334
4	須恵器 甗	1層	口縁部~胴上					櫛描波状文(櫛歯数2) 外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：平行線当て具痕		1354
5	須恵器 円面碗	1層							53-7	1450

第121図 SX53 堆積層 出土遺物

【SX53 窪地】(第115・121図)

7区丘陵部分中央の南に位置し、SI78 廃絶後の窪地およびその周辺の地山上に形成される。範囲は、東西 15.5m 以上、南北 4m に広がり、最大 0.2 m の厚さが残存する。堆積層は 2 層に分かれ、褐色土粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む黒褐色シルト、Ⅲ層ブロック中～小、白色粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む灰黄褐色粘土質シルトからなる。

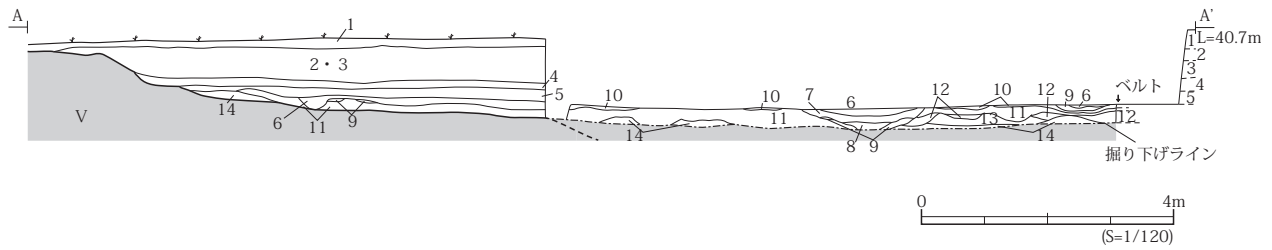
遺物は、土師器・須恵器が出土した。それらのうち、特徴的なものを図化して提示した。



第 122 図 SD11 溝・SD2 河川跡

【SD2 河川跡】（第 112 ～ 141 図・図版 22）

9区で検出した。長さは、北西-南東方向で44.5m検出した。上幅は18.0m以上、下幅は15.6m以上、深さは掘り下げた範囲で1.2m以上ある。東から北西に向かって緩やかに傾斜する。検出面での標高は調査区東壁周辺で39.9m、北西壁で38.7mである。堆積土は、いずれも自然堆積層で11層に分けられた。6層は灰白色火山灰層(To-a)である。遺物は土器と瓦が出土した。土器はまとまりをもって出土しており、堆積状況と合わせて大別4層に整理した。以下、層ごとに上層から順に提示する。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SD2	1		表土	基本層 I
	2		盛土	基本層 I
	3		旧水田土	基本層 I
	4	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト		自然堆積
	5	黒褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト		自然堆積
	6	黒色 (10YR2/1) 粘土		自然堆積 遺物大別 1A 層
	7	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		自然堆積 遺物大別 1A 層
	8	暗褐色 (10YR3/3) 砂	粘土を含む	自然堆積 遺物大別 1B 層
	9	灰黄褐色 (10YR6/2) シルト	To-a 灰白色火山灰層	一次堆積 遺物大別 2 層
	10	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		自然堆積
	11	褐灰色 (10YR4/1) 細砂		自然堆積 遺物大別 3 層
	12	黒褐色 (10YR3/2) 砂		自然堆積 遺物大別 3 層
	13	黄褐色 (2.5YR5/3) 砂	12 層より粗い砂	自然堆積 遺物大別 4 層
	14	オリーブ褐色 (2.5YR4/3) 砂礫		自然堆積
SD11	1	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト		自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/1) シルト		自然堆積
	3	灰白色 (10YR8/1) シルト	灰白色火山灰 (To-a) ブロックからなる	一次堆積
	4	褐灰色 (10YR4/1) シルト質粘土	鉄分を多く含む	自然堆積
	5	褐灰色 (10YR5/1) シルト質粘土	炭化物小、鉄分、沢由来の砂を含む	自然堆積

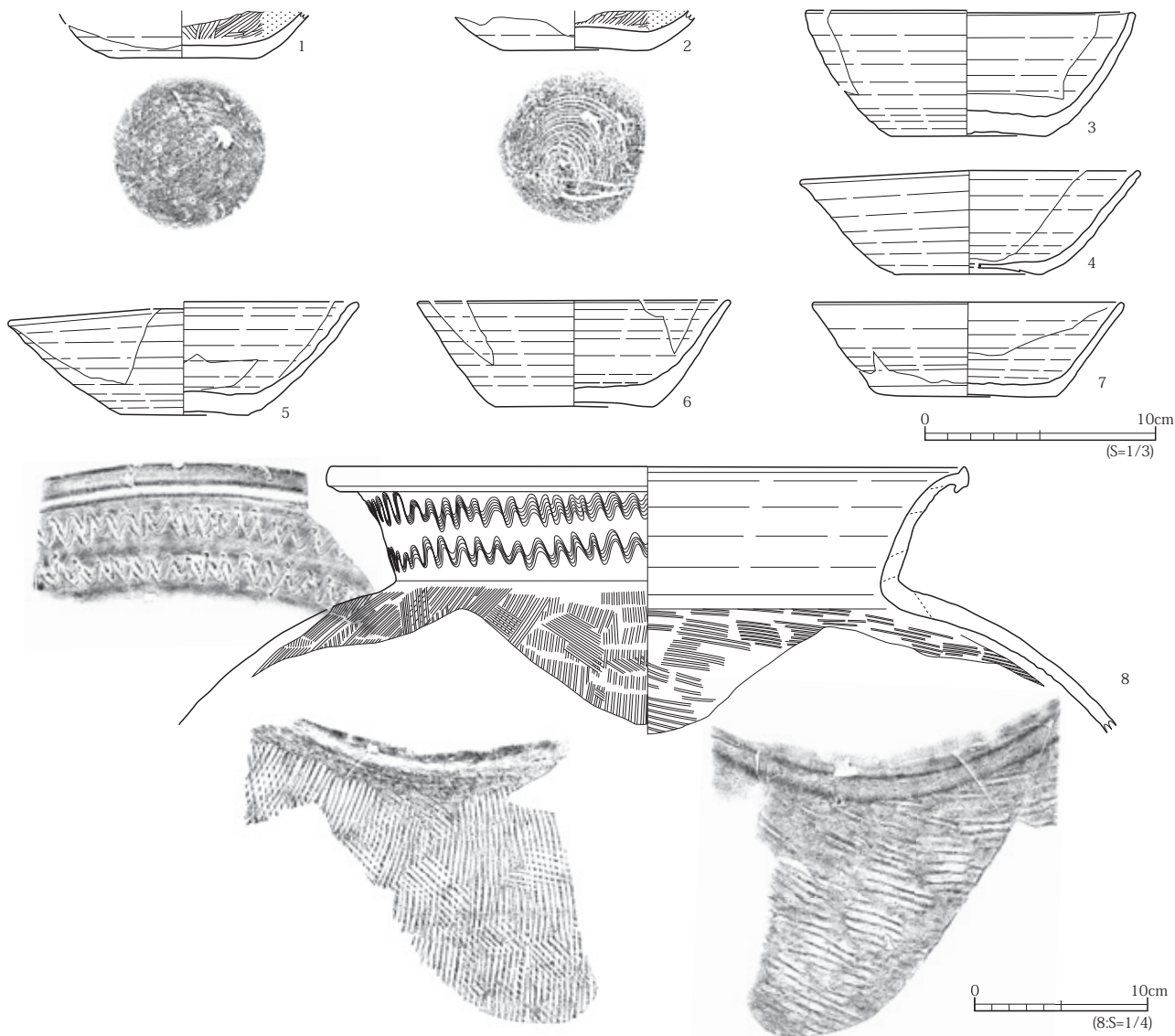
第 123 図 SD11 溝・SD2 河川跡 断面図

大別 1 層（6～8 層）からは土師器坏、甕、甑、丸底坏、盤、須恵器坏、蓋、甑、壺、甕ほか、土錘、土製の円盤などが出土した。須恵器坏は底部糸切り、ヘラ切りが混在して、器形や法量にもまとまりがみられない。

大別 2 層（9 層）は灰白色火山灰（To-a）で基本的に遺物を含まない層である。

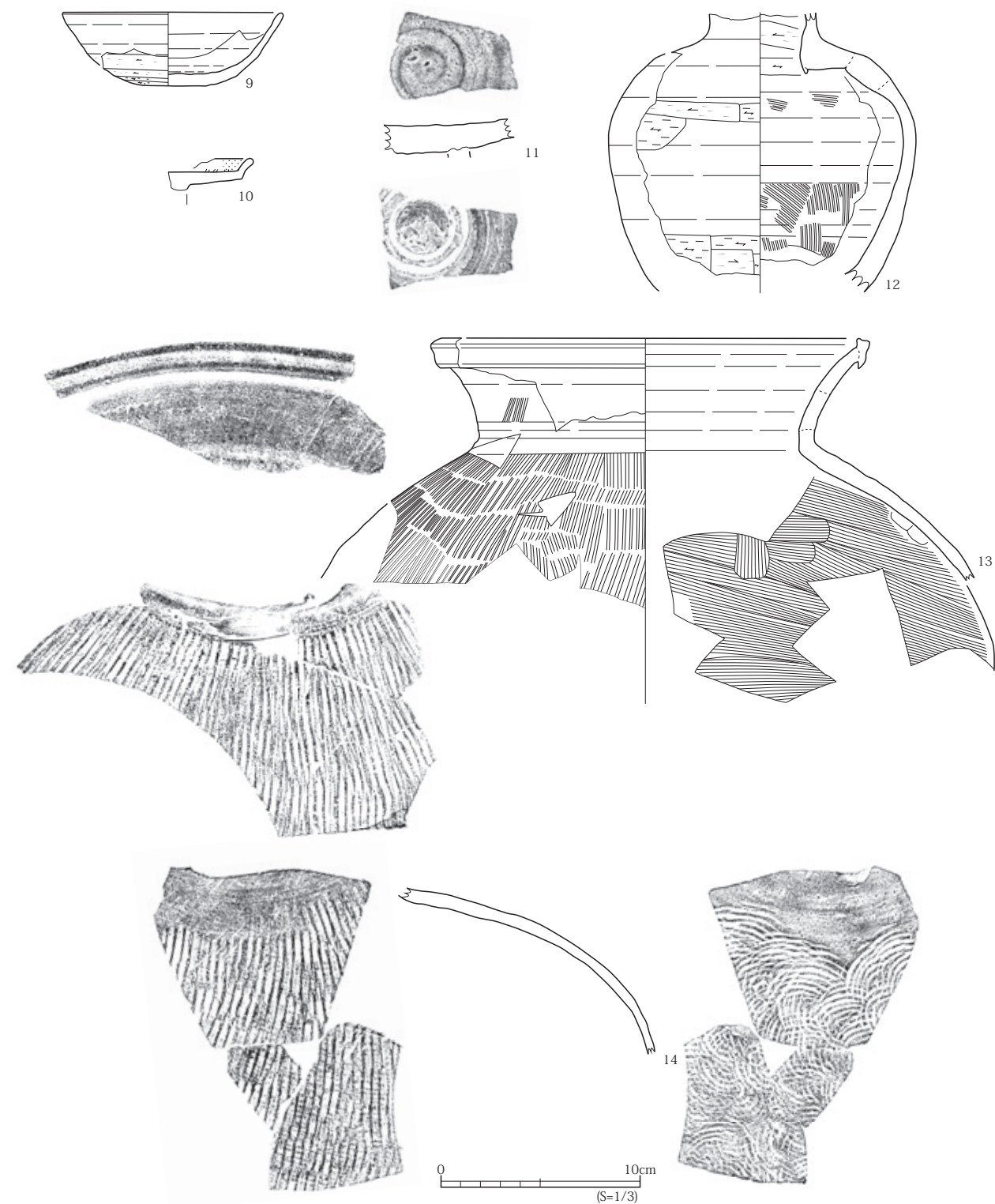
大別 3 層（11・12 層）からは、土師器坏、埴、小甕、甕、甑、壺、須恵器坏、高台坏、蓋、盤、高坏、壺、長頸瓶、甕のほか土製の紡錘車などが出土した。須恵器坏の底部は糸切りとヘラ切りの両方がみられ、その割合は 3：1 である。底部切離し技法の違いごとに器形・法量にまとまりがある。土師器の壺は外面ミガキののち、黒色処理が施されており、金属器を模倣した土器とみられる。

大別 4 層（13 層）からは、土師器坏、埴、盤、甕、須恵器坏、高台坏、蓋、高坏、盤、鉢、甕のほか、土錘、専用焼台が出土した。須恵器坏はごくわずかに底部回転糸切りがみられるものの、原則としてヘラ切りかヘラ切りの後、ナデや手持ちケズリを施すもので占められ、器形・法量が比較的揃っている。



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	大別 1層	底部			6.5	2.0~	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：糸切り→ナデ 著しい摩滅・風化		840
2	土師器 坏	大別 1層	底部			6.7	1.7~	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：回転糸切り右		842
3	須恵器 坏	大別 1層	2/3	13.9		6.7	5.5	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ	53-1	810
4	須恵器 坏	大別 1層	2/3	14.5		6.4	4.5	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	53-2	826
5	須恵器 坏	大別 1層	2/3	(15.0)		5.5	4.9	外内：ロクロナデ 底部：ナデ		812
6	須恵器 坏	大別 1層	2/3	(13.4)		6.8	4.6	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		809
7	須恵器 坏	大別 1層	1/3	(13.2)		8.8	4.1	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		836
8	須恵器 甕	大別 1層	口縁~胴上	(33.6)			15.4~	外：櫛描波状文(櫛歯数4)2段 胴部平行叩き 内：平行線当て具痕	53-3	837

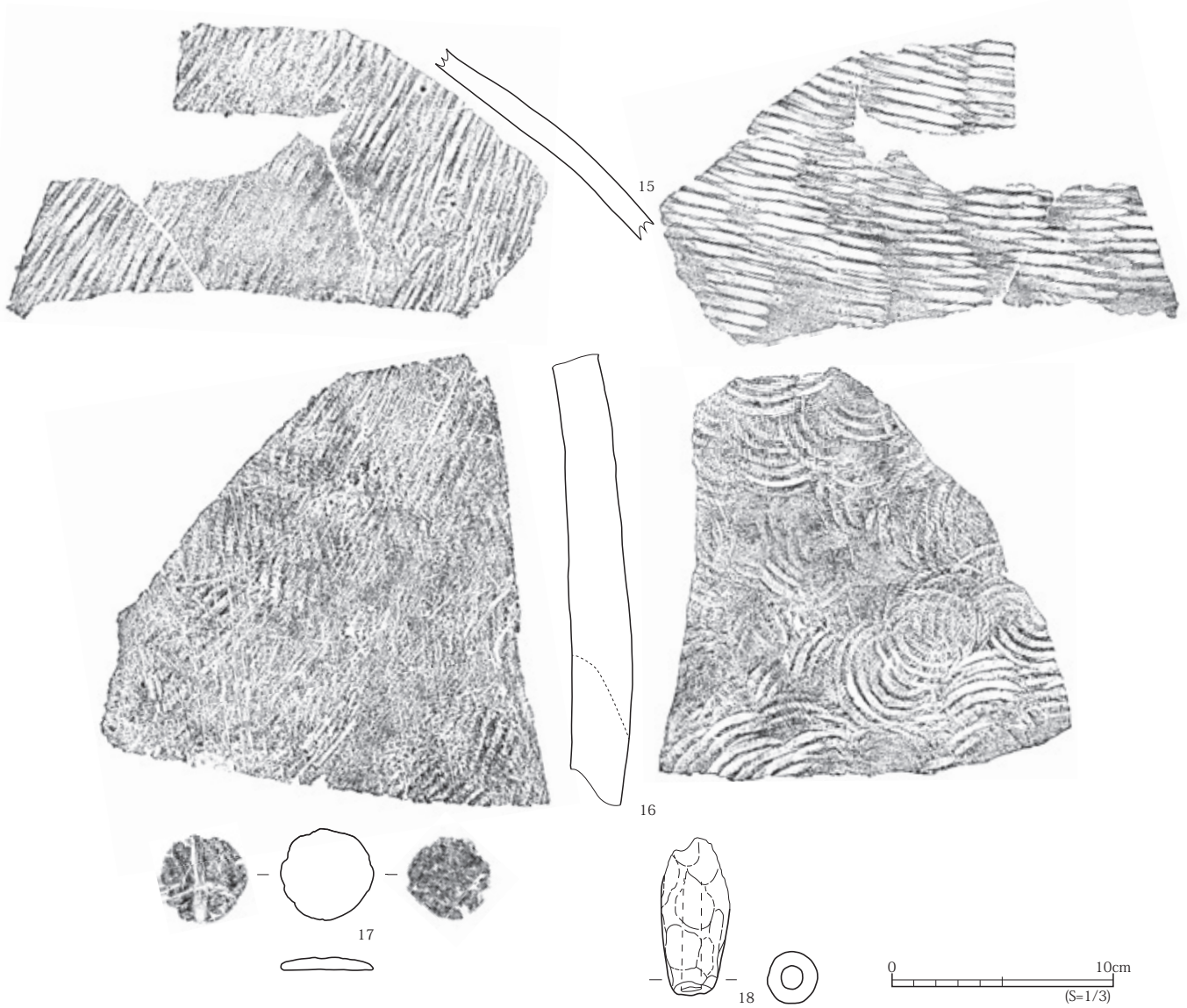
第 124 図 SD2 河川跡 出土遺物 (1)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
9	土師器 环(薄手)	大別1層	底部	(10.9)			(4.7)	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ	53-4	845
10	土師器 盤	大別1層	破片					外:ロクロナデ 内:黒色処理 著しい摩滅・風化		849
11	須恵器 高环	大別1層	坏部脚接合							866
12	須恵器 長頸瓶	大別1層	1/3				14.0 ~	外:胴の上部と下部にケズリ(ナデに近い) 内:口:ロクロナデ→胴部下半叩き にぶい黄橙色、焼成は土師器に近い		846
13	須恵器 甗	大別1層	口縁-胴上	(20.8)			18.2 ~	外:口:ロクロナデ 胴:平行叩き 内:口:ロクロナデ 胴:ナデ		859
14	須恵器 甗	大別1層	胴部片					外:擬格子叩き 内:同心円文当て具痕		860

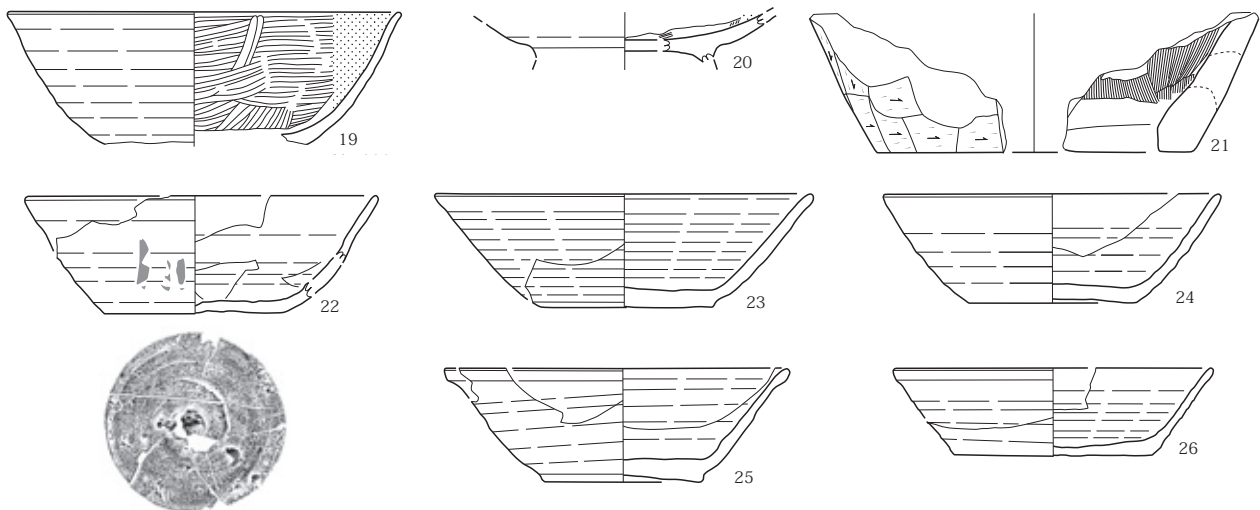
第125図 SD2河川跡 出土遺物(2)

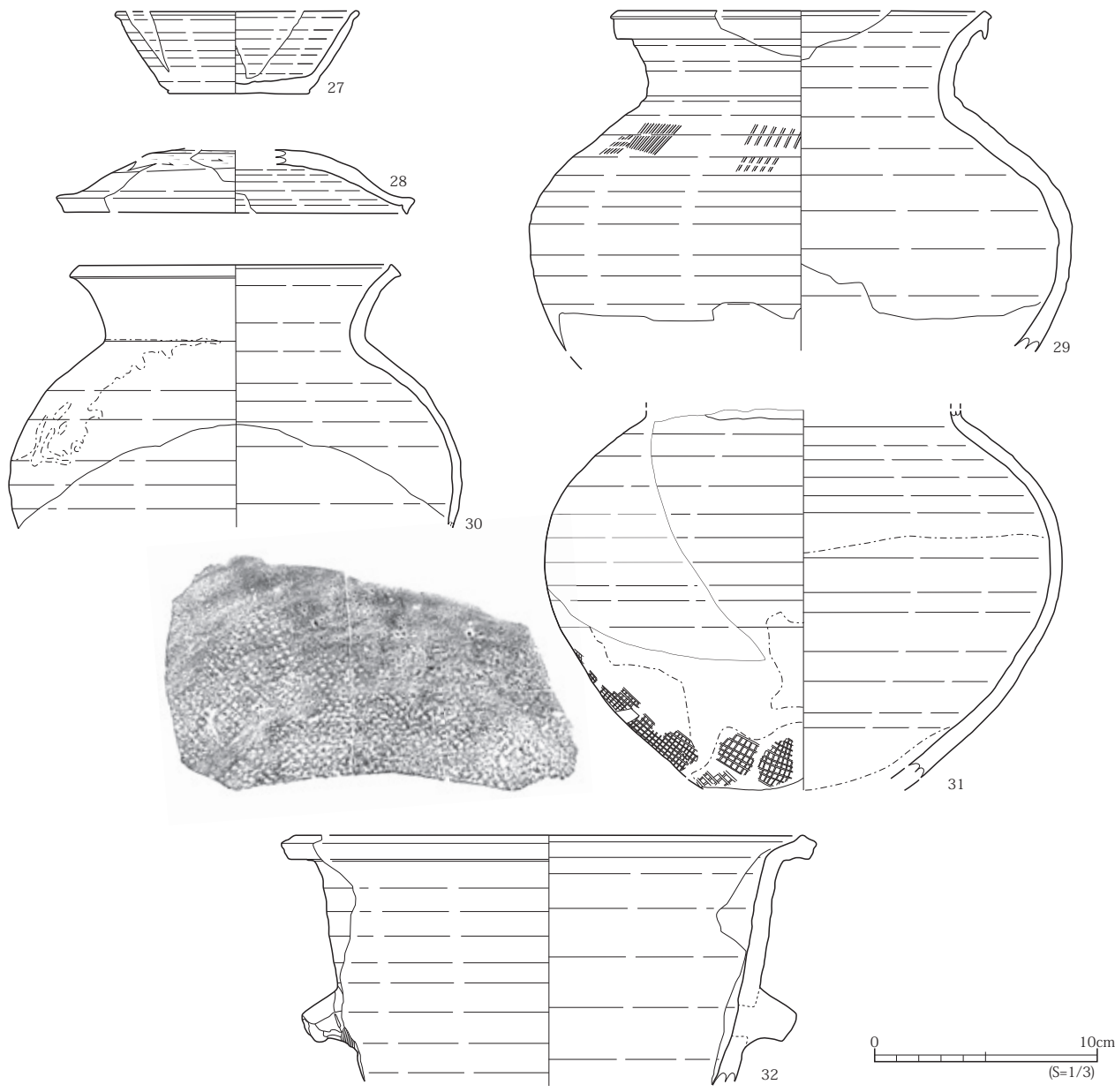




No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
15	須恵器 甕	大別1層	胴部片					外内：平行叩き	54-1	861
16	須恵器 甕	大別1層	胴部片					外：擬格子叩き 内：同心円文当て具痕（木目平行している）	54-2	865
17	土製品 円盤	大別1層	完形					スサの痕跡	54-3	908
18	土錘	大別1層	3/4					長：6.7 最大幅：2.9 孔径：0.8 指頭圧痕		867

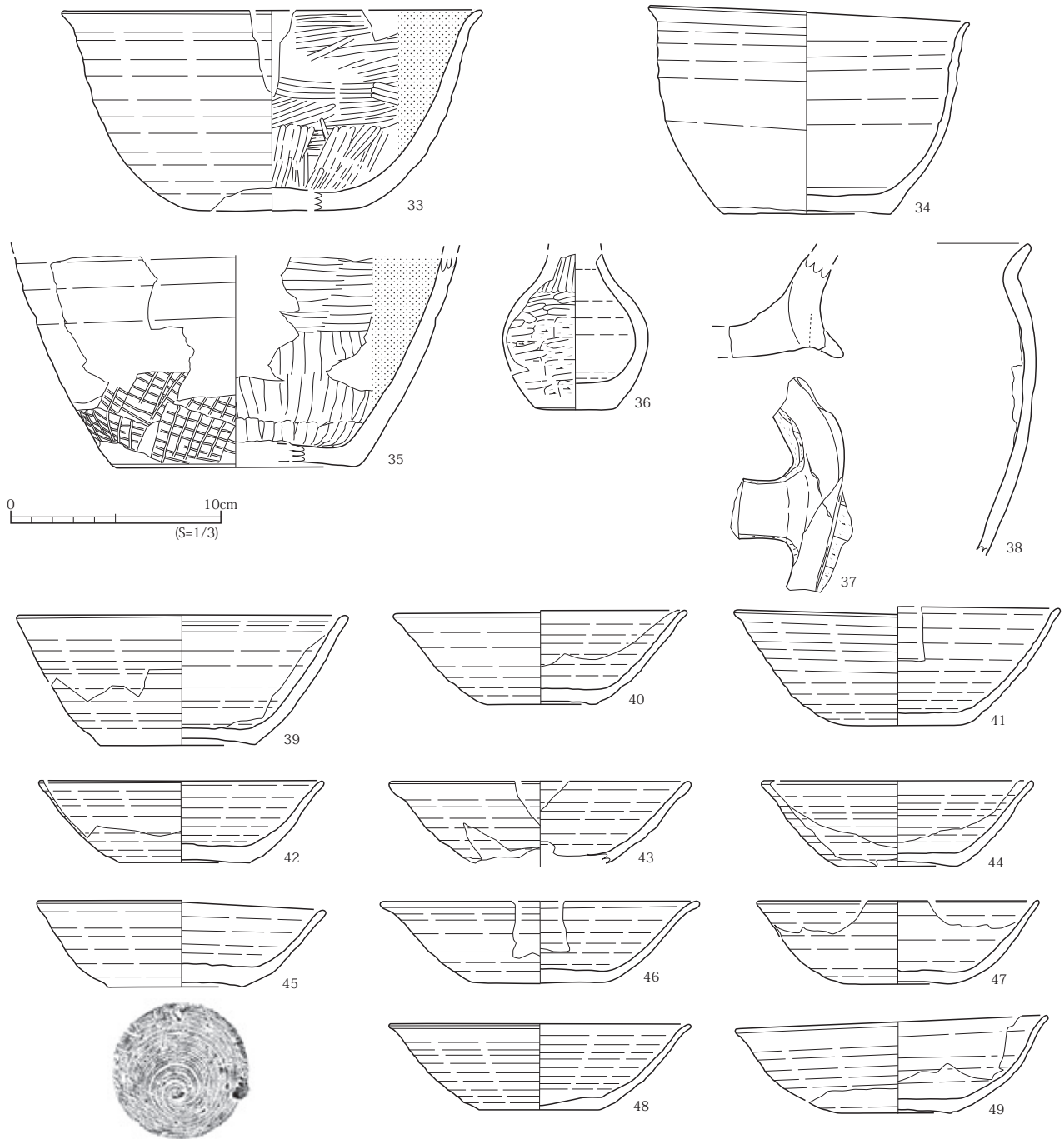
第126図 SD2河川跡 出土遺物（3）





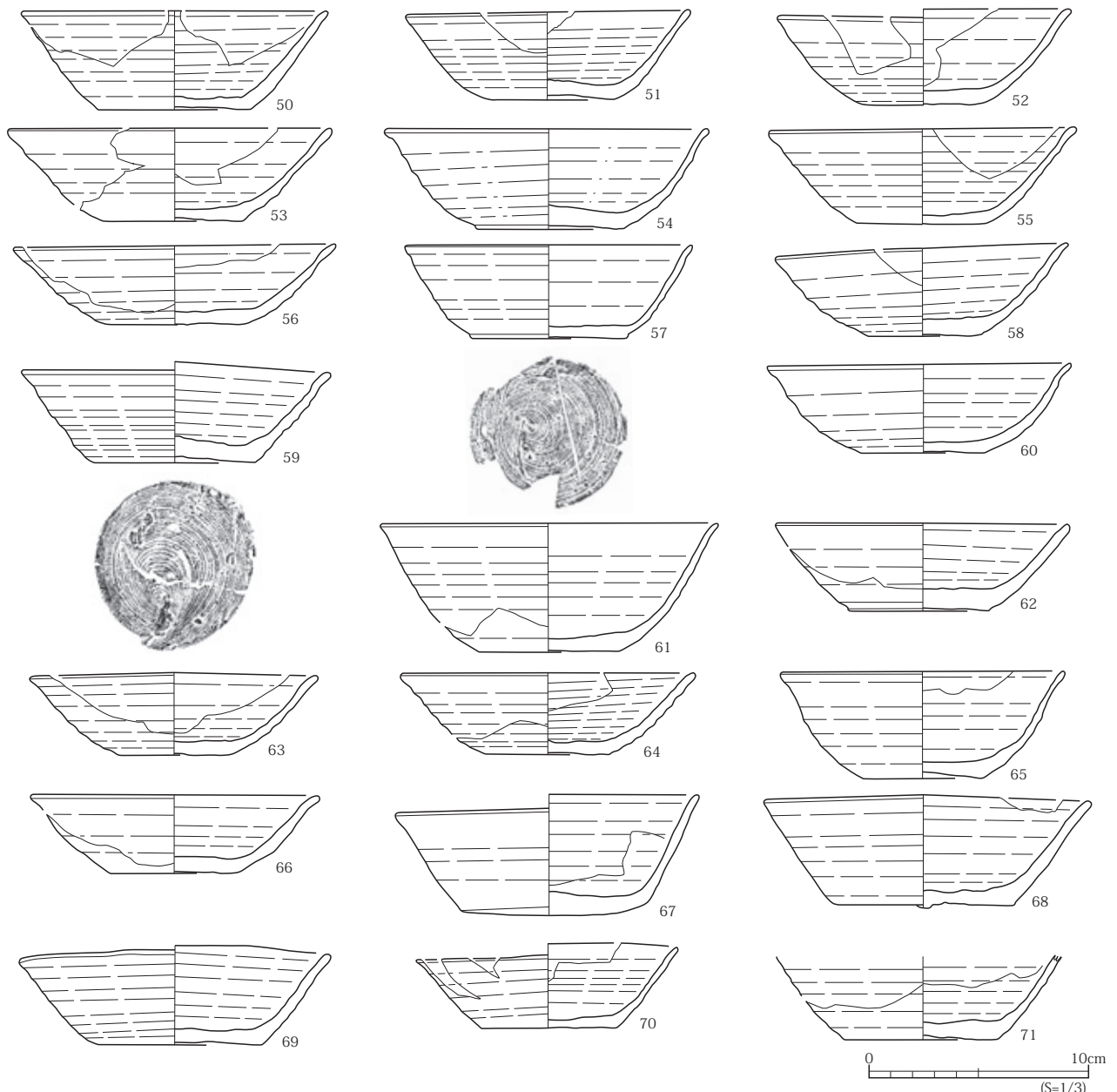
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
19	土師器 坏	大別1層	1/5	(15.4)			5.3	外：ロクロナデ 内：黒色処理		900
20	土師器 高台坏	大別1層	底部			(7.0)		外：ロクロナデ 内：黒色処理		902
21	土師器 甗	大別1層	底部					外：ケズリ 内：ナデ		903
22	須恵器 坏	大別1層	1/3	(13.8)		7.1	4.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 外面体部に墨書「三」		874
23	須恵器 坏	大別1層	2/3	(14.8)		7.0	4.5	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		875
24	須恵器 坏	大別1層	2/3	13.2		6.6	4.3	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		876
25	須恵器 坏	大別1層	2/3	(13.4)		6.2	4.5	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		886
26	須恵器 坏	大別1層	1/2	(12.5)		7.8	3.5	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		887
27	須恵器 坏	大別1層	3/4	10.7		6.3	3.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ	53-5	894
28	須恵器 蓋	大別1層	3/4 (摘まみ欠)	(15.4)			2.9~	外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		895
29	須恵器 壺	大別1層	口縁部~胴部中	(16.4)			15.3~	外：ロクロナデ 肩部平行叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ	53-8	884
30	須恵器 壺	大別1層	口縁~胴上	14.0			12.8~	外内：ロクロナデ 自然釉 胎土精良	53-9	885
31	須恵器 壺	大別1層	胴部破片		24.0			外：ロクロナデ・下部擬格子叩き残る 内：ロクロナデ 自然釉		870
32	須恵器 甗	大別1層	口縁部~把手	(23.0)			11.2~	外内：ロクロナデ 焼成不良		892

第127図 SD2 河川跡 出土遺物 (4)



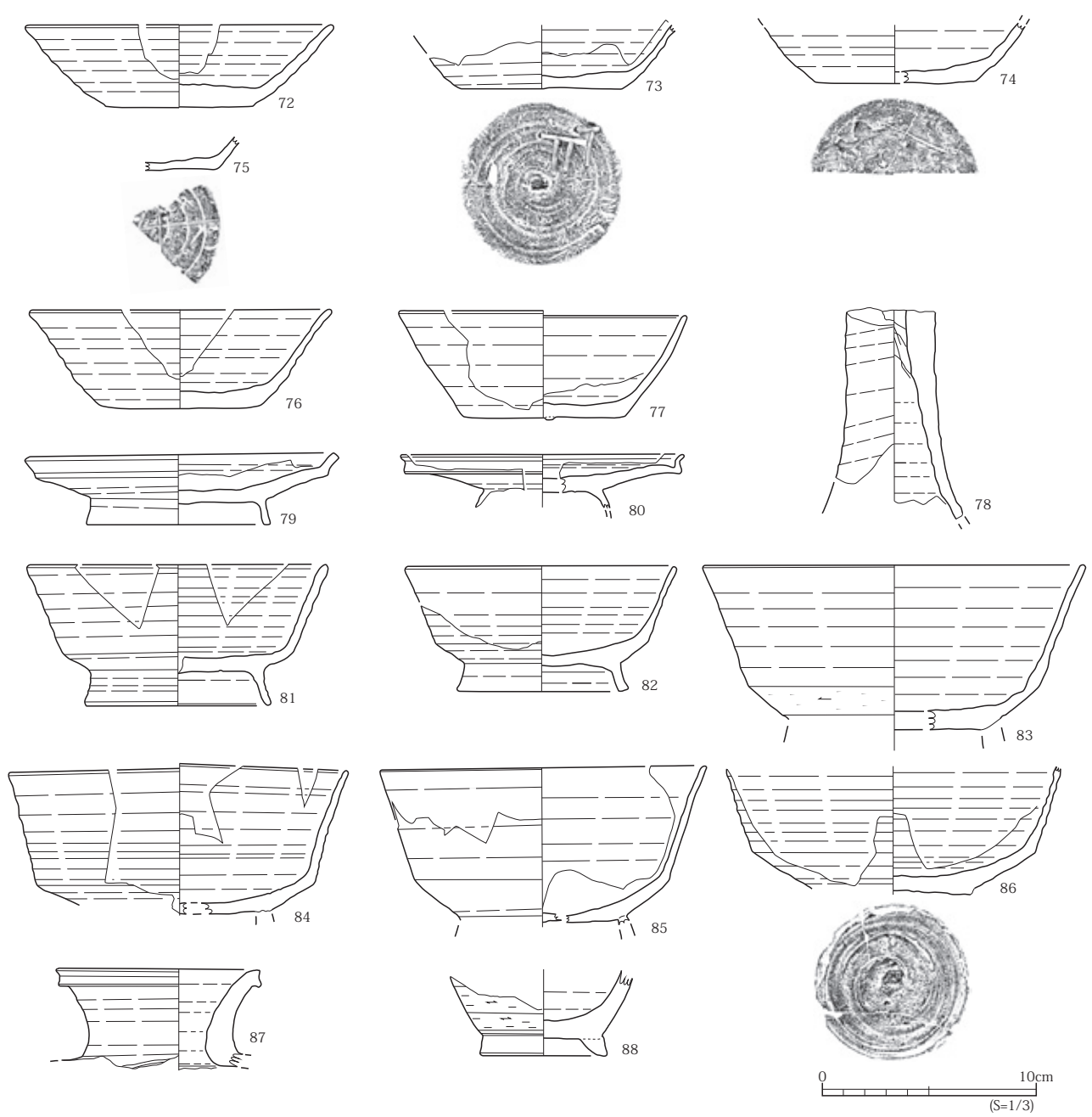
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
33	土師器 鉢	大別 3層	1/2	(10.0)		(6.0)	9.5	外:ロクロナデ 内:黒色処理		1432
34	土師器 鉢	大別 3層	2/3	15.0		8.2	9.9	外:上半ロクロナデ 下半ケズリ (摩滅のため不明瞭) 内:ロクロナデ 全体的に摩滅・風化 ふきこぼれ痕	55-1	1431
35	土師器 鉢?	大別 3層	1/4			(11.6)	10.0 ~	外:ロクロナデ→体下部擬格子叩き 内:黒色処理 底部:ケズリ? 周縁のみわずかに擬格子叩き痕が残る		1437
36	土師器 壺	大別 3層	3/4		6.9	3.9	7.4~	外:黒色処理 内:ロクロナデ 底部:回転糸切り 摩滅により体部調整不明瞭 No.1139と接合	55-2	998
37	土師器 甌	大別 3層	破片					外:ケズリ ナデ 内:ナデ 下ケズリ	55-3,4	1428
38	土師器 甕	大別 3層	破片					内面に漆附着		1007
39	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(15.6)		7.4	6.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 黄褐色		957
40	須恵器 坏	大別 3層	2/3	13.8		5.3	5.5	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	55-5	958
41	須恵器 坏	大別 3層	3/4	15.3		6.4	5.7	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	55-6	959
42	須恵器 坏	大別 3層	1/2	13.4		6.2	4.0	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		960
43	須恵器 坏	大別 3層	1/3	(14.1)		6.4	3.9~	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		962
44	須恵器 坏	大別 3層	1/3	(13.2)		(5.9)	4.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		964
45	須恵器 坏	大別 3層	3/4	13.5		6.4	4.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 剥離	55-7	965
46	須恵器 坏	大別 3層	2/3	(14.9)		6.6	3.9	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		966
47	須恵器 坏	大別 3層	2/3	(13.2)		5.5	4.0	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ		967
48	須恵器 坏	大別 3層	1/2	14.4		5.8	4.1	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		968
49	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(14.4)		5.6	4.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		969

第128図 SD2 河川跡 出土遺物 (5)



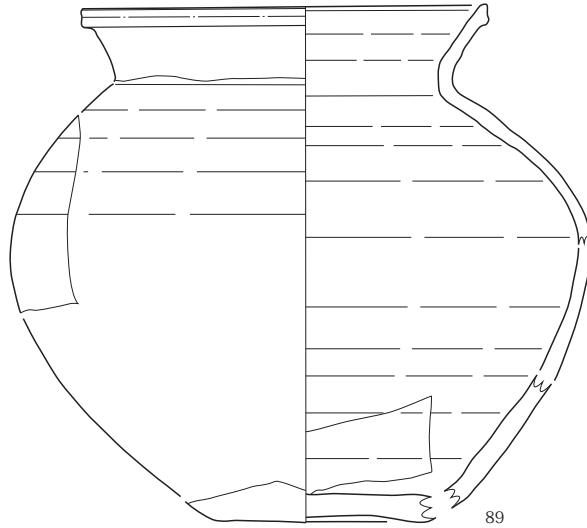
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
50	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(13.6)		7.0	4.5	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		970
51	須恵器 坏	大別 3層	3/4	12.9		5.6	4.1	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ		971
52	須恵器 坏	大別 3層	3/4	13.0		5.6	4.4	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		972
53	須恵器 坏	大別 3層	2/3	(14.5)		6.3	4.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		973
54	須恵器 坏	大別 3層	2/3	14.6		6.7	4.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ	55-8	974
55	須恵器 坏	大別 3層	2/3	13.9		6.0	4.4	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		975
56	須恵器 坏	大別 3層	1/3	(14.7)		6.3	3.7	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		976
57	須恵器 坏	大別 3層	1/2	13.0		7.0	4.3	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右「一」のへら記号		977
58	須恵器 坏	大別 3層	ほぼ完形	13.2		5.2	4.3	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		978
59	須恵器 坏	大別 3層	完形	14.0		7.4	4.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ	56-1	979
60	須恵器 坏	大別 3層	3/4	13.8		5.6	4.1	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		980
61	須恵器 坏	大別 3層	1/3	(15.3)		6.4	5.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		981
62	須恵器 坏	大別 3層	2/3	(13.2)		6.4	4.0	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		982
63	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(12.9)		5.4	3.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ		983
64	須恵器 坏	大別 3層	1/3	(13.2)		5.6	3.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		987
65	須恵器 坏	大別 3層	2/3	(12.8)		5.6	4.9	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ		988
66	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(13.1)		5.8	3.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		990
67	須恵器 坏	大別 3層	3/4	13.6		8.5	5.5	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ (部分的にケズリに見える)		992
68	須恵器 坏	大別 3層	ほぼ完形	14.6		8.2	5.2	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ	56-2	993
69	須恵器 坏	大別 3層	完形	14.0		7.4	4.5	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ 底切れ	56-3	994
70	須恵器 坏	大別 3層	3/4	(12.0)		6.2	3.7	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ 底切れ		996
71	須恵器 坏	大別 3層	2/3			7.0	3.8	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ 底切れ		1000

第 129 図 SD2 河川跡 出土遺物 (6)

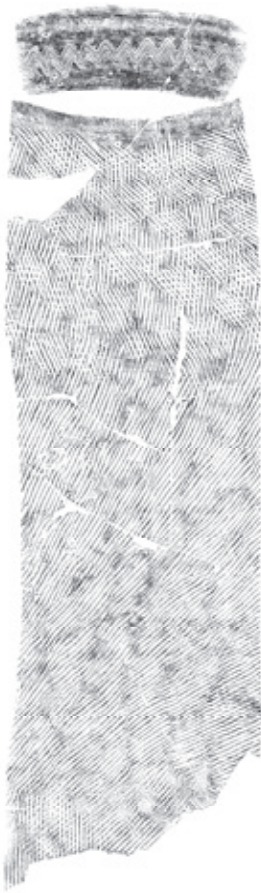


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
72	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(14.2)		7.0	3.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1001
73	須恵器 坏	大別 3層	底部			7.5		内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り ヘラ記号「乍」？ 赤褐色		1003
74	須恵器 坏	大別 3層	底部			7.5		内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り ヘラ記号「×」		1004
75	須恵器 坏	大別 3層	底部 1/2					内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り ヘラ記号あり		1005
76	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(13.8)		7.0	4.6	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1006
77	須恵器 坏	大別 3層	1/2	(13.2)		7.6	5.1	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ 赤褐色		1009
78	須恵器 高坏	大別 3層	脚のみ					内外：ロクロナデ		1022
79	須恵器 盤	大別 3層	2/3	(14.2)		8.6	3.3	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	56-4	1021
80	須恵器 盤	大別 3層	1/2	(13.2)			2.6～	内外：ロクロナデ		1017
81	須恵器 高台坏	大別 3層	1/2	(13.8)		(8.6)	6.6	内外：ロクロナデ		1011
82	須恵器 高台坏	大別 3層	1/2	(12.4)		8.0	5.9	内外：ロクロナデ 底切れ	56-5	1010
83	須恵器 高台坏	大別 3層	1/3	(17.7)				外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 黄褐色		1015
84	須恵器 高台坏	大別 3層	1/2	(15.5)			7.0～	内外：ロクロナデ		1012
85	須恵器 高台坏	大別 3層	1/3	(15.1)				内外：ロクロナデ		1014
86	須恵器 高台坏	大別 3層	1/2				6.0～	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り ナデ		1013
87	須恵器 横瓶？	大別 3層	口縁部	9.5			4.7～	外：ロクロナデ 体部平行叩き 内：ロクロナデ→体部横方向のナデ 穿孔後口縁部を取り付けている	56-6	1439
88	須恵器 瓶	大別 3層	底部破片			6.0	4.0～	外：ロクロナデ→体下部回転ケズリ 内：ロクロナデ→降灰・自然釉 底部：糸切り 周縁回転ケズリ	56-7	1440

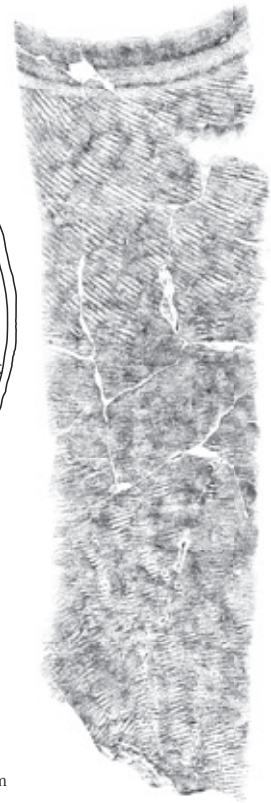
第130図 SD2 河川跡 出土遺物 (7)



0 10cm  
(S=1/3)

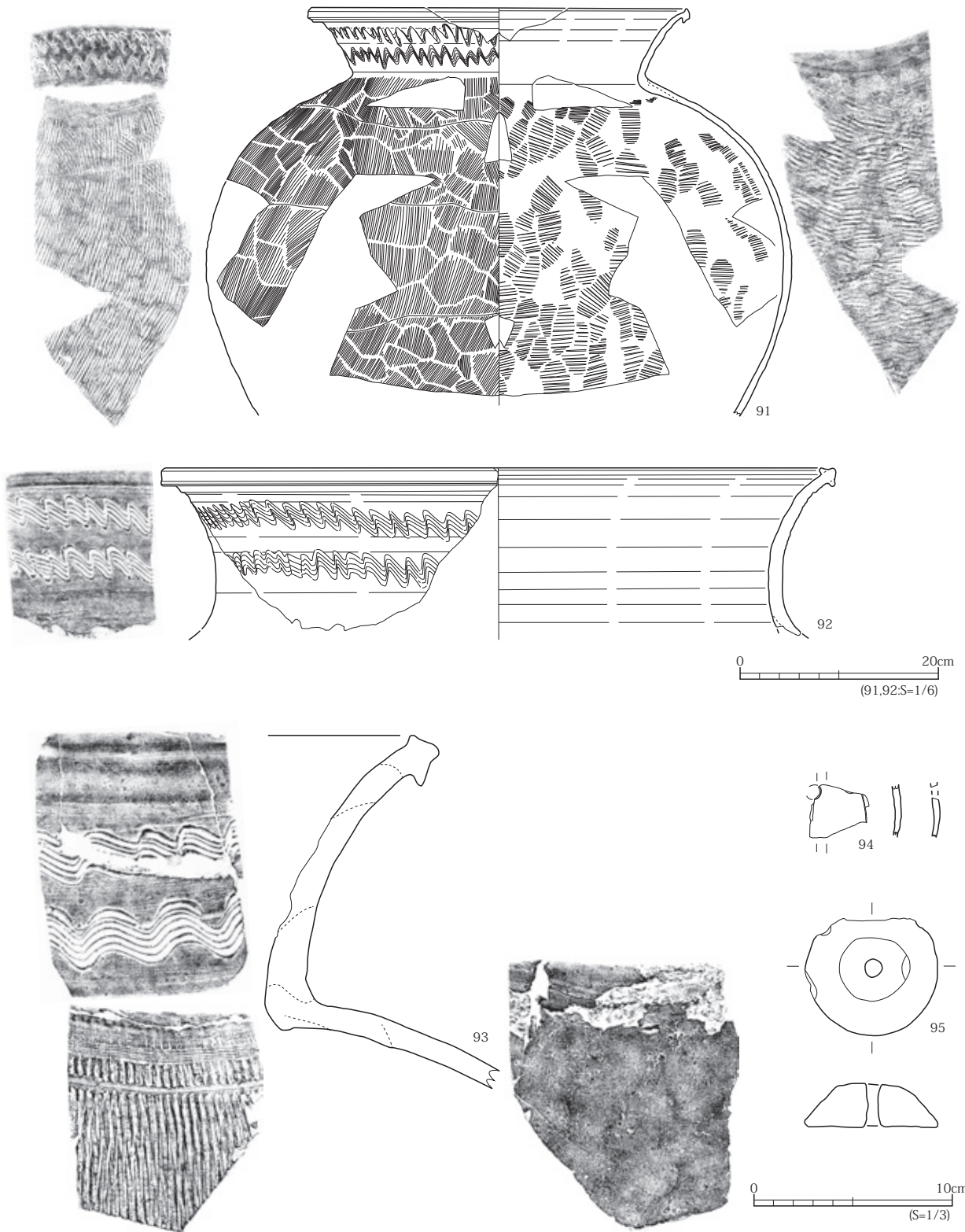


0 20cm  
(90:S=1/6)



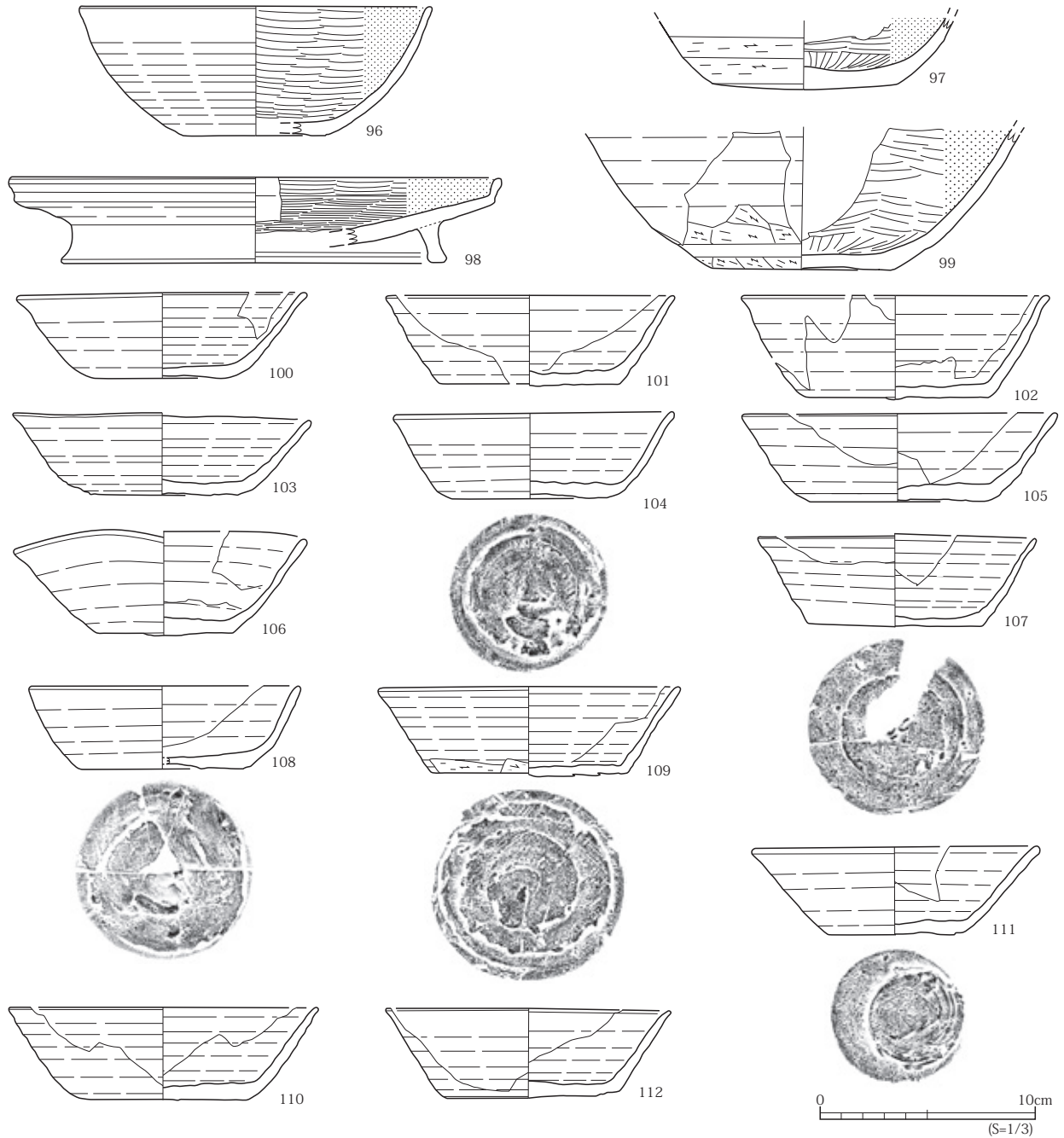
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
89	須恵器 壺	大別3層		15.8	23.0	8.7	20.5	外内：ロクロナデ 釉かかる	56-9	1424
90	須恵器 甕	大別3層	1/3	(40.0)	(56.5)		55.2 ~	櫛描波状文(櫛歯数8) 外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：平行線当て具痕→ナデ	57-1	1441

第131図 SD2河川跡 出土遺物(8)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
91	須恵器 甕	大別3層	1/2	(38.0)	(59.0)		41.0~	櫛歯波状文(櫛歯数4)2段 外:口:ロクロナデ 胴:平行叩き 内:口:ロクロナデ 胴:平行線当て具痕	57-2	1430
92	須恵器 甕	大別3層	1/4 口縁部片	(68.0)			16.6~	櫛歯波状文(櫛歯数4)2段 外内:ロクロナデ		1421
93	須恵器 甕	大別3層						櫛歯波状文(櫛歯数6)2段 外:口:ロクロナデ 胴:擬格子叩き 内:ロクロナデ 胴:無文当て具痕	56-10	1425
94	須恵器 硯?	大別3層	細片							1020
95	土製品 紡錘車	大別3層	3/4		6.6	2.2	83g以上		56-8	1016

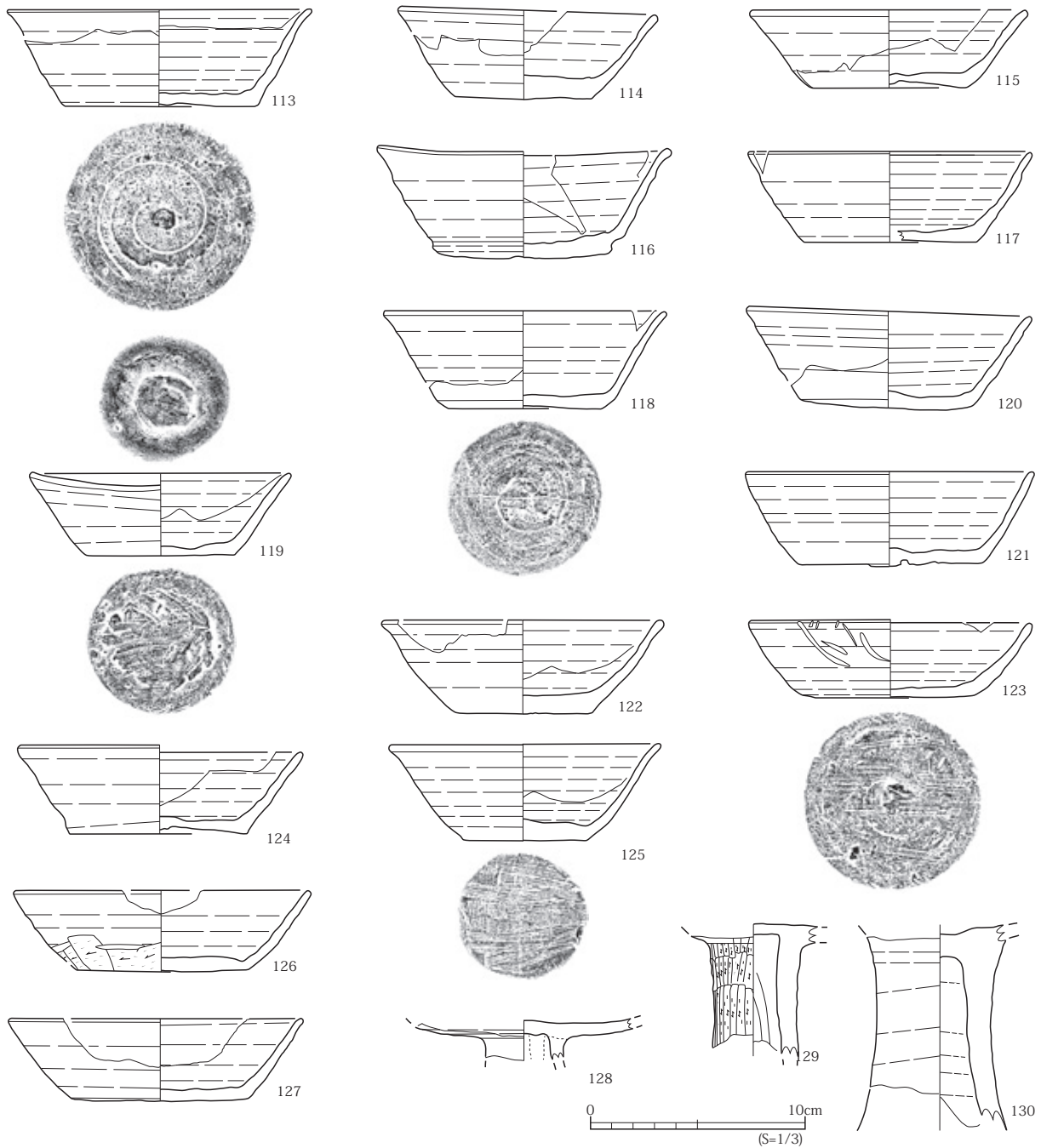
第132図 SD2 河川跡 出土遺物(9)



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
96	土師器 坏	大別 4層	1/4	16.5		6.9	6.0	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：回転糸切り→周縁のみ手持ちケズリ		1434
97	土師器 坏?	大別 4層	1/3			8.8	3.6~	外：回転ケズリ 内：黒色処理	58-1	1435
98	土師器 盤	大別 4層	1/4	22.8		17.6	4.0	外：ロクロナデ 内：黒色処理	58-2	1433
99	土師器 碗?	大別 4層	1/3			9.0	6.0~	外：ロクロナデ→下端手持ちケズリ 内：黒色処理		1436
100	須恵器 坏	大別 4層	3/4	13.1		6.2	4.0	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		1023
101	須恵器 坏	大別 4層	1/3	(13.2)		8.4	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ		1026
102	須恵器 坏	大別 4層	3/4	(13.9)		8.4	4.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		1027
103	須恵器 坏	大別 4層	ほぼ完形	13.6		6.5	3.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 底切れ	58-3	1028
104	須恵器 坏	大別 4層	ほぼ完形	12.8		7.3	4.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	58-4	1029
105	須恵器 坏	大別 4層	1/2	(14.6)		8.3	4.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		1030
106	須恵器 坏	大別 4層	3/4	13.4		6.3	4.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ ゆがみ		1031
107	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(12.9)		(8.2)	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		1032
108	須恵器 坏	大別 4層	3/4	12.5		8.2	3.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		1033
109	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(13.8)		9.1	4.2	外：ロクロナデ 下端に手持ちケズリ 内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1034
110	須恵器 坏	大別 4層	1/3	(14.2)		7.8	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 黄褐色		1035
111	須恵器 坏	大別 4層	ほぼ完形	13.2		6.2	4.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ	58-5	1036
112	須恵器 坏	大別 4層	2/3	13.2		8.2	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		1038

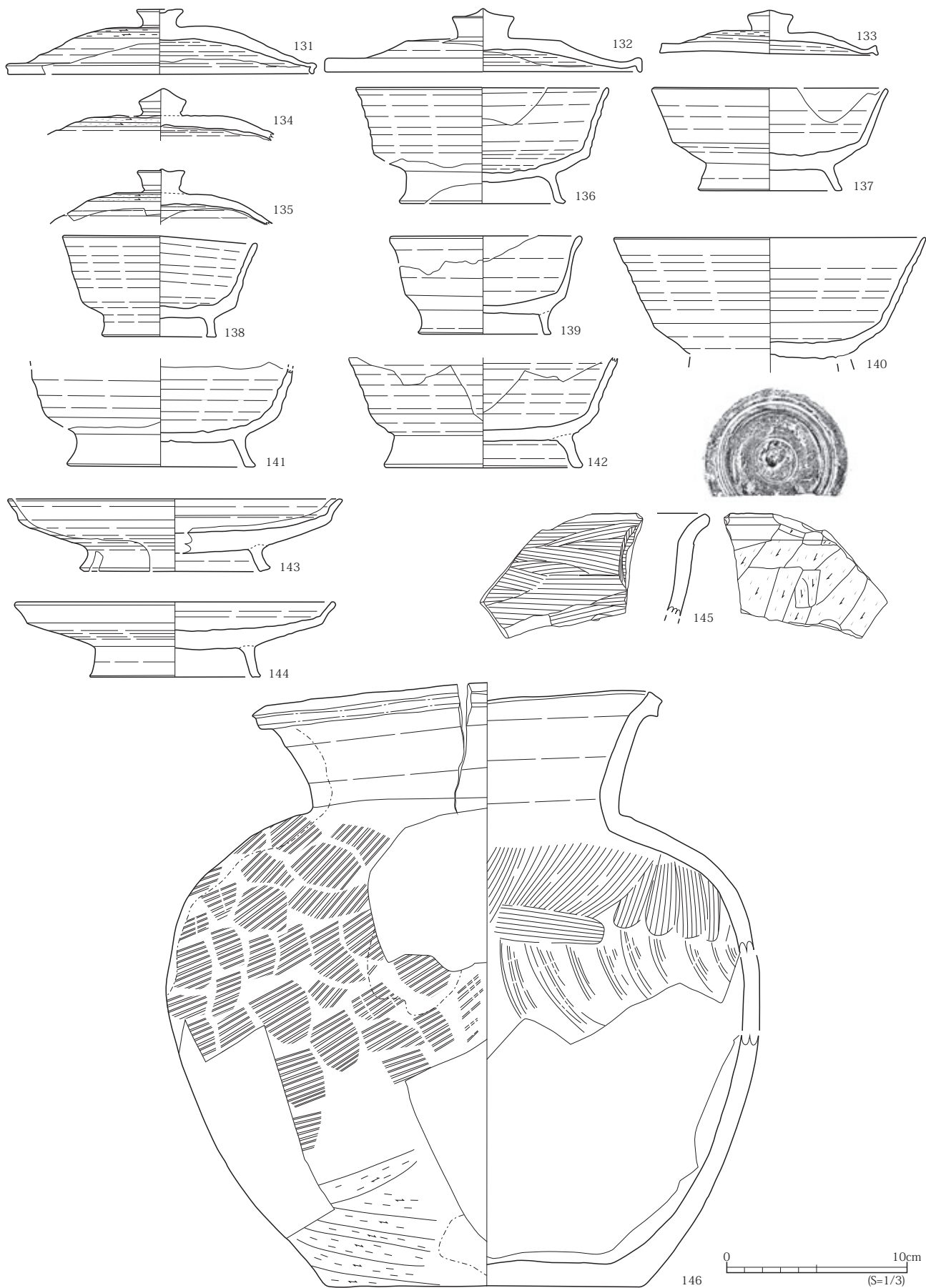
第133図 SD2 河川跡 出土遺物 (10)



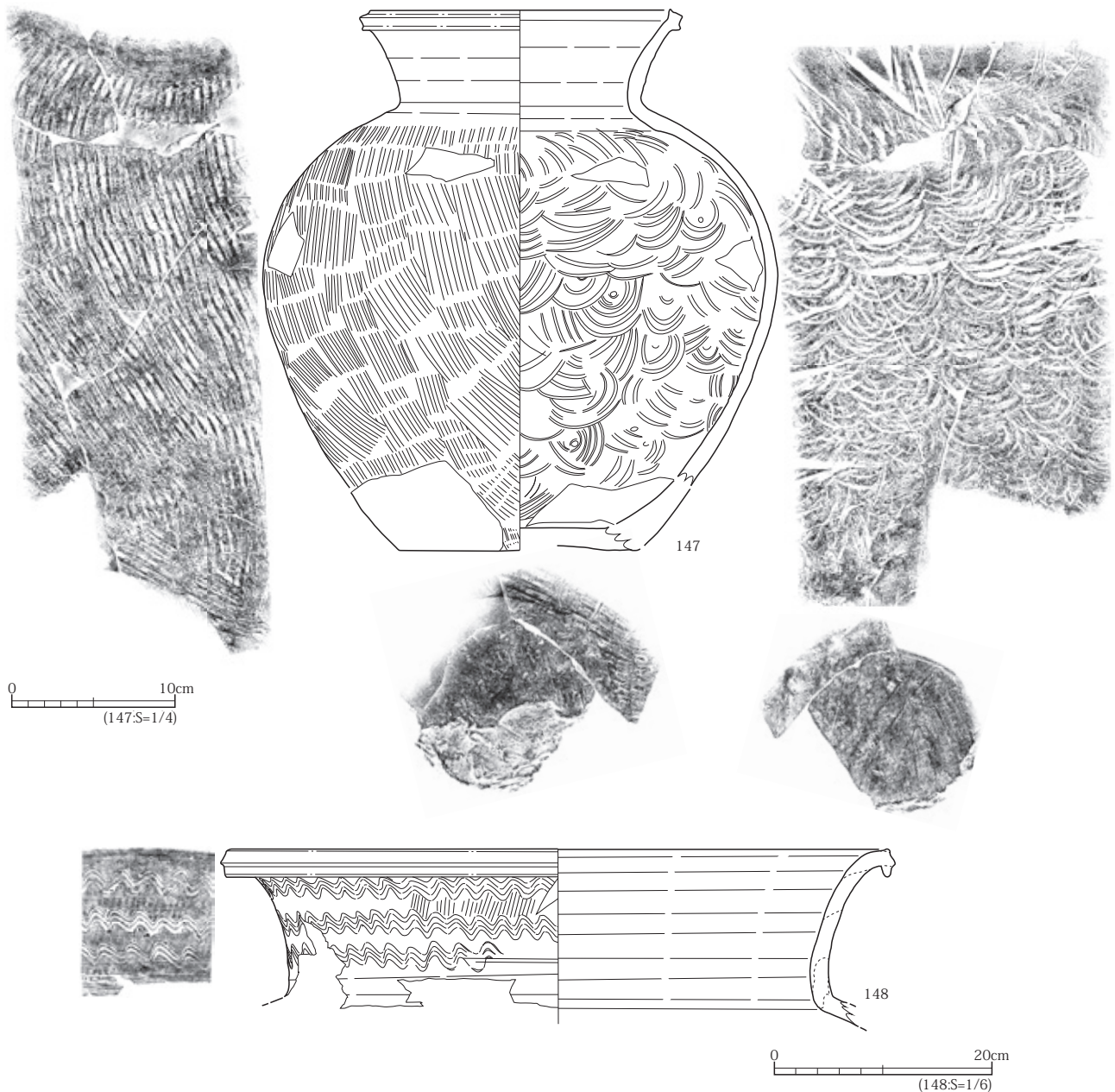


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
113	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(14.2)		8.8	4.5	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ十字		1037
114	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(12.0)		6.3	4.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ 内面に釉 ワラ痕	58-6	1039
115	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(12.7)		(7.2)	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ 内面に釉		1040
116	須恵器 坏	大別 4層	3/4	(13.6)		8.0	5.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ→ナデ 外：火ダスキ十字		1041
117	須恵器 坏	大別 4層	1/2	(13.0)		(8.0)	4.7	外内：ロクロナデ ヘラ切り→ナデ		1042
118	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(13.1)		7.2	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ ヘラ描き「一」 底切れ		1043
119	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(12.0)		7.0	3.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 底割れ	58-7	1044
120	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(13.3)		8.1	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1045
121	須恵器 坏	大別 4層	ほぼ完形	13.1		8.7	4.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 底切れ	58-8	1046
122	須恵器 坏	大別 4層	3/4	12.7		6.3	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1047
123	須恵器 坏	大別 4層	完形	13.0		8.1	3.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ 底切れ	58-9	1048
124	須恵器 坏	大別 4層	3/4	13.0		8.3	4.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1049
125	須恵器 坏	大別 4層	3/4	12.6		5.8	4.5	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ	58-10	1050
126	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(13.6)		(8.0)	3.7	外：ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ		1051
127	須恵器 坏	大別 4層	2/3	(13.6)		8.2	3.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 黄褐色 見た目は土師器		1438
128	須恵器 高坏	大別 4層	坏部片				1.9~	外内：ロクロナデ		1062
129	須恵器 高坏	大別 4層	脚					外：ミガキに近いケズリ 内：ロクロナデ		1063
130	須恵器 高坏	大別 4層	脚					外内：ロクロナデ 黄褐色		1064

第134図 SD2 河川跡 出土遺物 (11)

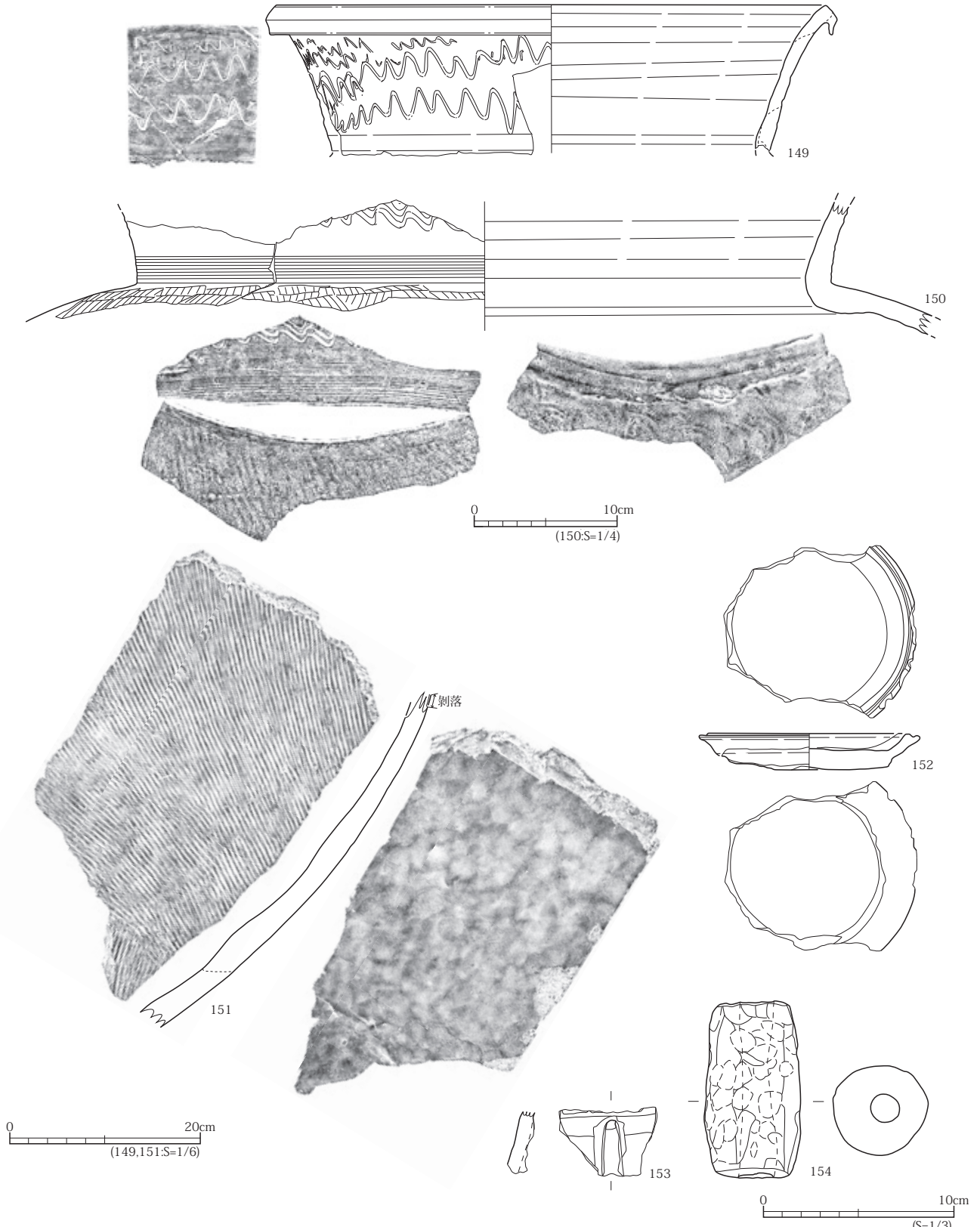


第 135 図 SD2 河川跡 出土遺物 (12)



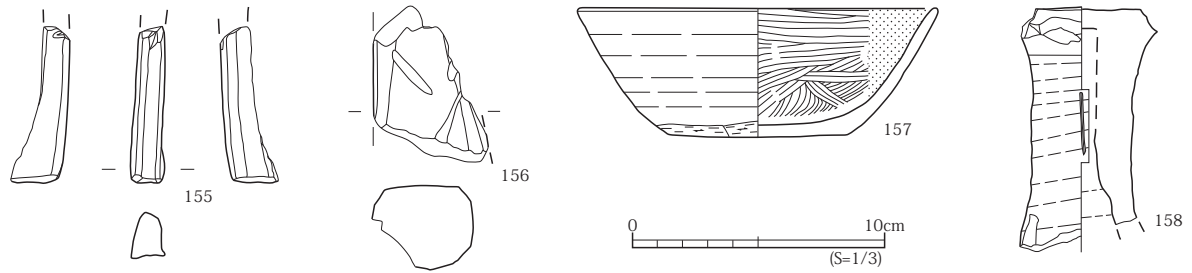
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
131	須恵器 蓋	大別 4 層	3/4	16.9			3.8	摘まみ：ボタン 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1070
132	須恵器 蓋	大別 4 層	1/3	(17.5)			3.5	摘まみ：擬宝珠 外内：ロクロナデ		1072
133	須恵器 蓋	大別 4 層	2/3	(12.1)			2.5	摘まみ：擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	59-1	1073
134	須恵器 蓋	大別 4 層	1/3				2.9～	摘まみ：擬宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1071
135	須恵器 蓋	大別 4 層	2/3				3.1～	摘まみ：ボタン 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1074
136	須恵器 高台杯	大別 4 層	2/3	13.8		9.0	6.4	外内：ロクロナデ 黄褐色		1055
137	須恵器 高台杯	大別 4 層	3/4	12.9		8.0	5.7	外内：ロクロナデ	59-3	1052
138	須恵器 高台杯	大別 4 層	完形	10.6		6.2	5.6	外内：ロクロナデ	59-4	1054
139	須恵器 高台杯	大別 4 層	2/3	(10.4)		7.4	5.4	外内：ロクロナデ		1056
140	須恵器 高台杯	大別 4 層	2/3	(17.4)				外内：ロクロナデ		1058
141	須恵器 高台杯	大別 4 層	2/3			10.4		外内：ロクロナデ		1057
142	須恵器 高台杯	大別 4 層	1/3			10.8	6.1～	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ロクロナデ		1059
143	須恵器 盤	大別 4 層	1/3	(18.4)		(10.4)	4.0	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ		1060
144	須恵器 盤	大別 4 層	1/2	(17.4)		9.5	4.2	外：ロクロナデ 底部：回転ケズリ	59-2	1061
145	須恵器 鉢	大別 4 層	口縁部付近					外：ケズリ 内：ナデ		1067
146	須恵器 甕	大別 4 層	2/3	21.3	32.8		33.5	外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 下部ケズリ 内：口：ロクロナデ 胴：無文当て具痕→ナデ		1422
147	須恵器 甕	大別 4 層	1/2	(18.5)	(31.5)	(15.0)	33.1	外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：同心円文当て具痕		1423
148	須恵器甕	大別 4 層	1/3 口縁部片	(62.0)			16.6 ～	櫛描波状文(櫛歯数3)3段 外：頸部平行叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		1427

第 136 図 SD2 河川跡 出土遺物 (13)



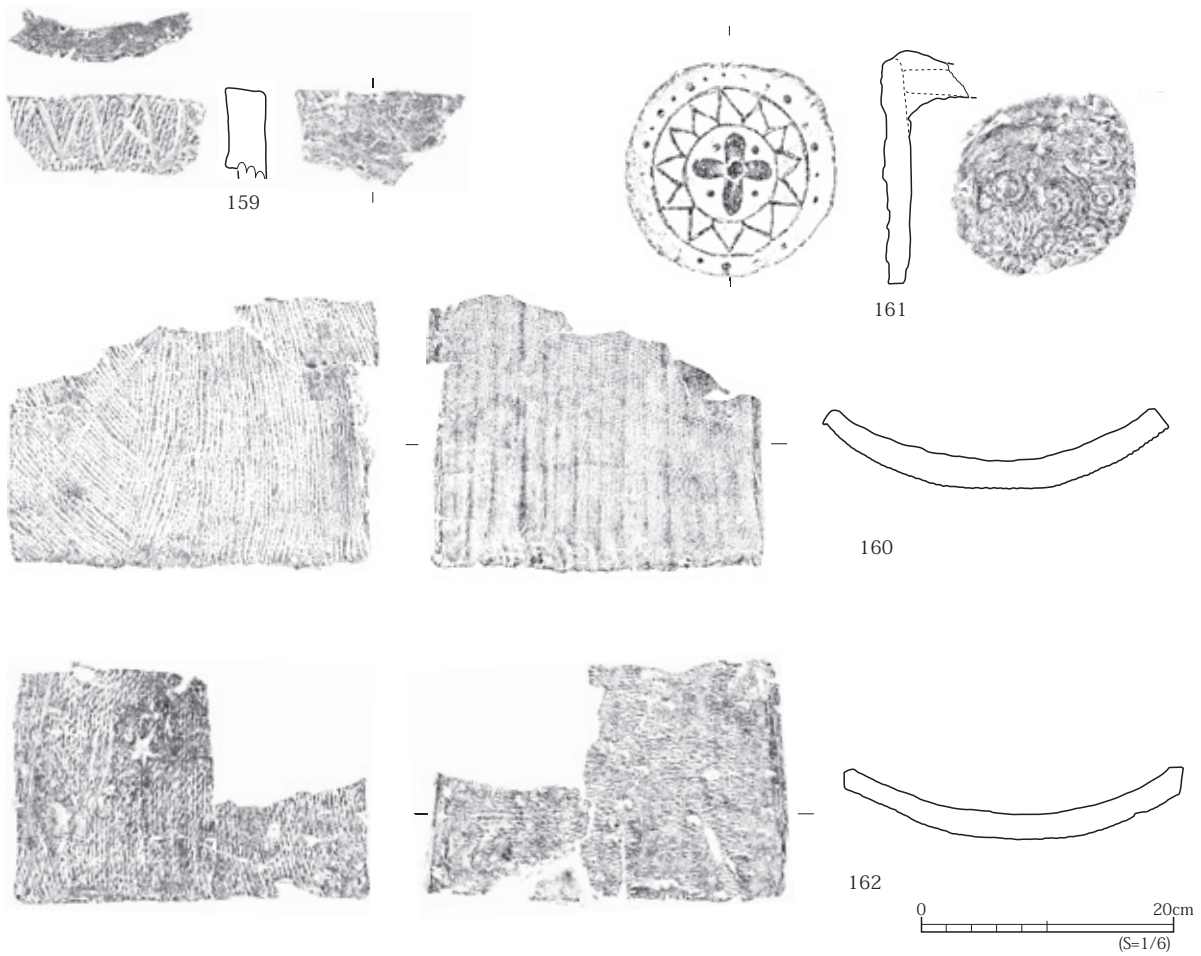
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
149	須恵器 甕	大別 4層	1/4 口縁部片	(60.0)			15.2~	不規則な1本描波状文3~4段 外内:ロクロナデ		1426
150	須恵器 甕	大別 4層	1/5 頸部片				9.2~	外:櫛描波状文(櫛歯数3) カキ目状沈線 胴:平行叩き 内:胴:同心円文当て具痕		1429
151	須恵器 甕	大別 4層	体部~底部付近破片					外:平行叩き 内:無文当て具痕		1420
152	須恵器 (専用焼台)	大別 4層	3/4	10.5		8.4	1.9	外内:ロクロナデ 内:釉 底部:へら切り 最大径:13.6	59-5	1075
153	須恵器	大別 4層						把手の剝離した破片		1065
154	陶鉢	大別 4層						長:9.2 幅:5.0 重さ:244.1g	59-6	1069

第137図 SD2河川跡 出土遺物(14)



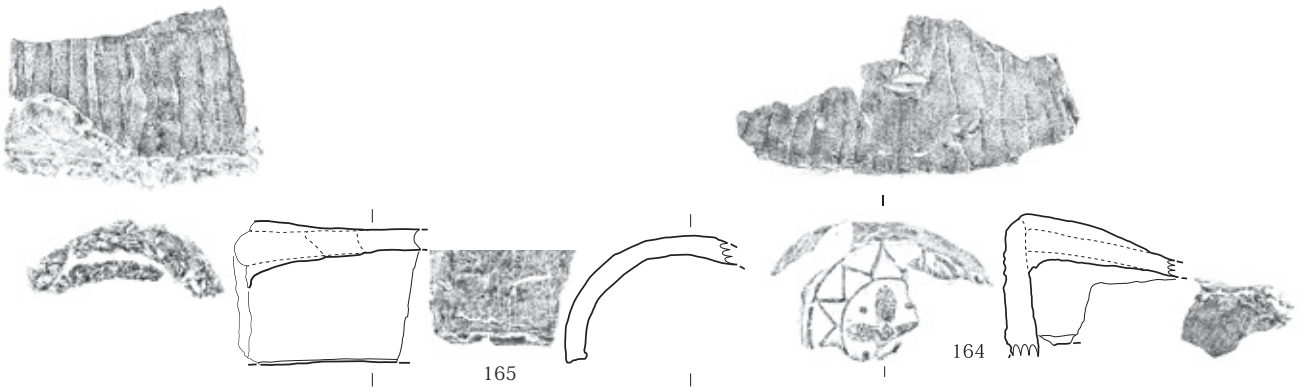
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
155	土製品	4層						残高：6.1 最大幅：1.8 長方形の破片 面はナデで整えられている		1066
156	土製品	脚？	堆	脚部？破片				長：(6.2) 最大径：(4.0) 面取り後ナデ？ 獣脚の破片？		778
157	土師器	坏	検出面	2/3	14.0		7.1 5.1	外：ロクロナデ→下端手持ちケズリ 内：黒色処理	59-7	777
158	須恵器	高坏	検出面	脚				ロクロナデ ヘラによる線文1条		776

第138図 SD2河川跡 出土遺物 (15)



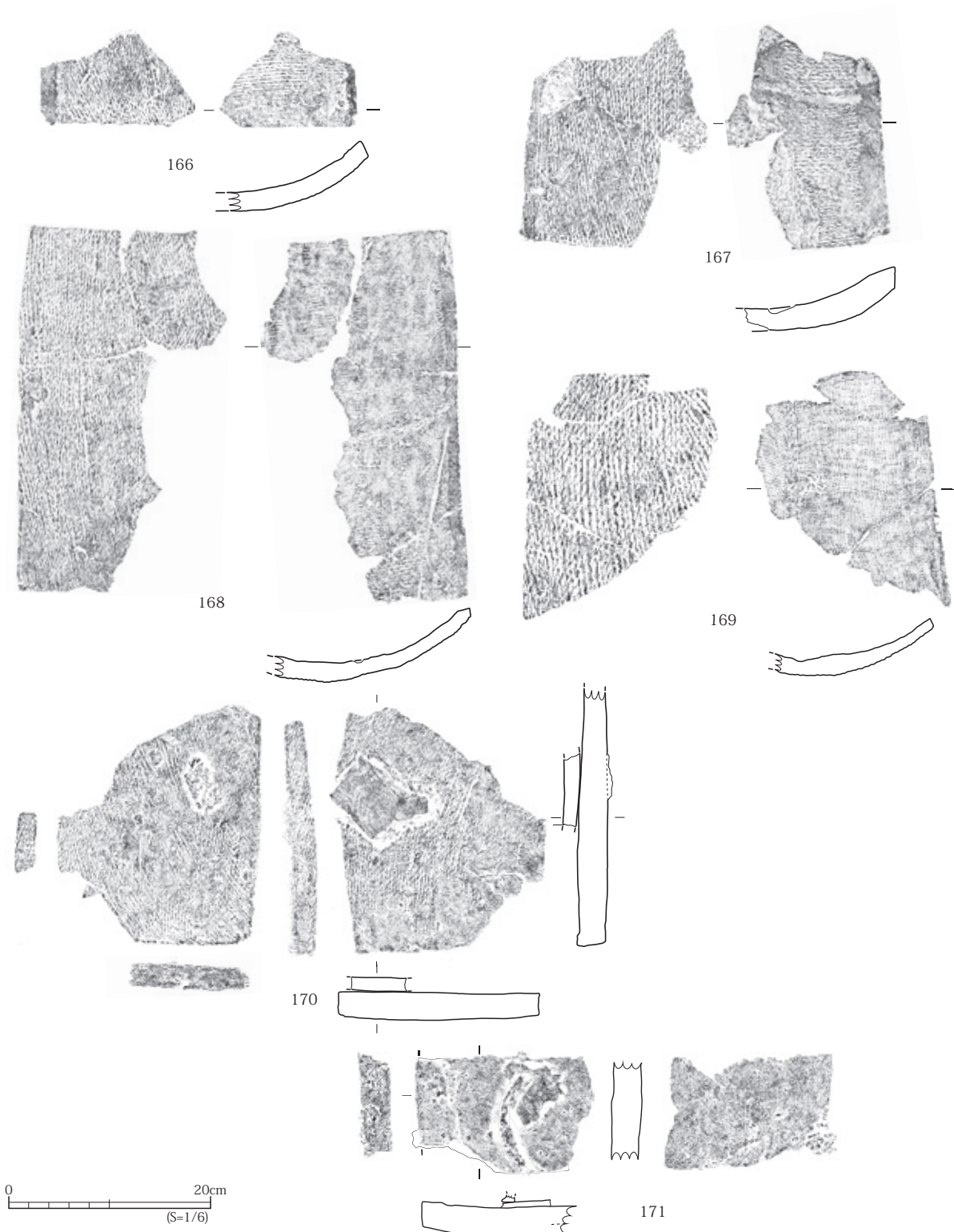
No	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
159	軒平瓦	II	検出面	破片 平瓦部欠損	【瓦当】瓦当面：ケズリ→無文 頸面：縄叩目→鋸歯文 段頸	5Y6/1 灰		K45
160	平瓦	I	検出面	1/2 広端側のみ半分	長：(22.0) cm 広端幅：26.0cm 重量：2.0kg 凸面：縄叩目 凹面：摸骨痕→布目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白	59-8	K29
161	軒丸瓦	I	大別1層	瓦当	周縁：ケズリ 瓦当裏：同心円文当て具痕 瓦当接合のためのナデ 【丸瓦】凸面：ナデ 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y8/1 灰白	65-3	K30
162	平瓦	II	大別3層	1/3	広端部：26.5cm 凸面：縄叩目→潰れ+凹型台端部痕 凹面：摸骨痕→布目→縄叩目 側端・小口：ケズリ	5Y6/1 灰		K39

第139図 SD2河川跡 出土遺物 (16)



No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
163	平瓦	I	大別4層	完形	長：38.0cm 広端幅 27.5cm 狭端幅 25.5cm 重量：3.3kg 凸面：縄叩目 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白	59-9	K31
164	軒丸瓦	II	大別4層	瓦当破片	周縁：ケズリ 外区珠文が削り取られてる 瓦当裏：ナデ 丸瓦接合のための横ナデ 【丸瓦】凸面：縦方向ナデ 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y8/1 灰白	65-1	K32
165	軒丸瓦	III	大別4層	破片 瓦当面欠損	【丸瓦】凸面：縄叩目→粘土付加→縦方向ナデ 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y8/1 灰白		K33

第140図 SD2河川跡 出土遺物(17)



No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
166	平瓦	II	大別4層	1/4	凸面：縄叩目→潰れ+凹型台端部痕 凹面：布目→縄叩目 側端・小口：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰		K35
167	平瓦	II	大別4層	1/4	凸面：縄叩目→潰れ 凹面：布目→縄叩目 側端・小口：ケズリ	5Y6/1 灰		K36
168	平瓦	II	大別4層	1/2	長：36.5cm 重量：1.5kg 凸面：縄叩目→潰れ 凹面：布目→縄叩目 側端・小口：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰		K37
169	平瓦	I	大別1層・大別4層	1/4	長：24.0cm 凸面：縄叩目(粗い縄目) 凹面：摸骨痕→布目 側端・小口：ケズリ	2.5Y8/1 灰白		K38
170	道具瓦(磚?)	II	大別4層	4/5	長：(24.0)cm 幅：20.0cm 厚さ：2.5cm 凸面：縄叩目 窯壁状破片付着 凹面：糸切痕→縄(叩板状)圧痕 須恵器裏体部破片融着(割れ口は窯入れ前の破断面) 両側辺：縄叩目 焼き台として転用したものか？ 融着した須恵器裏体部破片も焼き台かもしれない	5YR4/1 褐灰	65-4	K34
171	鬼板	III	大別4層	破片	表：須恵器高台環高台部と壺体部破片融着(高台環が製品で壺体部破片は高さ調整の 焼台) 裏：ナデ 焼台として転用 一側辺と高台環破断面を除くほぼ全面に自然釉	5YR4/1 褐灰	65-2	K52

第141図 SD2河川跡 出土遺物(18)

【SX94 堆積層】（第 62・74 図）

7 区南西の丘陵南緩斜面に位置し、IV 層上面で検出した自然堆積した層である。SI62、SI90、SX92、SK93 と重複し、SI62、SI90 より新しく、SX92、SK93 より古い。

正確な分布範囲は不明だが、SK93 付近から SI60 煙道東側までの範囲で確認した。厚さは最大 0.4 m 残存する。堆積層は 4 層に分けられ、1 層は黒褐色砂質シルト、2・3 層は黒褐色シルト、4 層は炭化物粒を少し含む褐色シルトからなる。

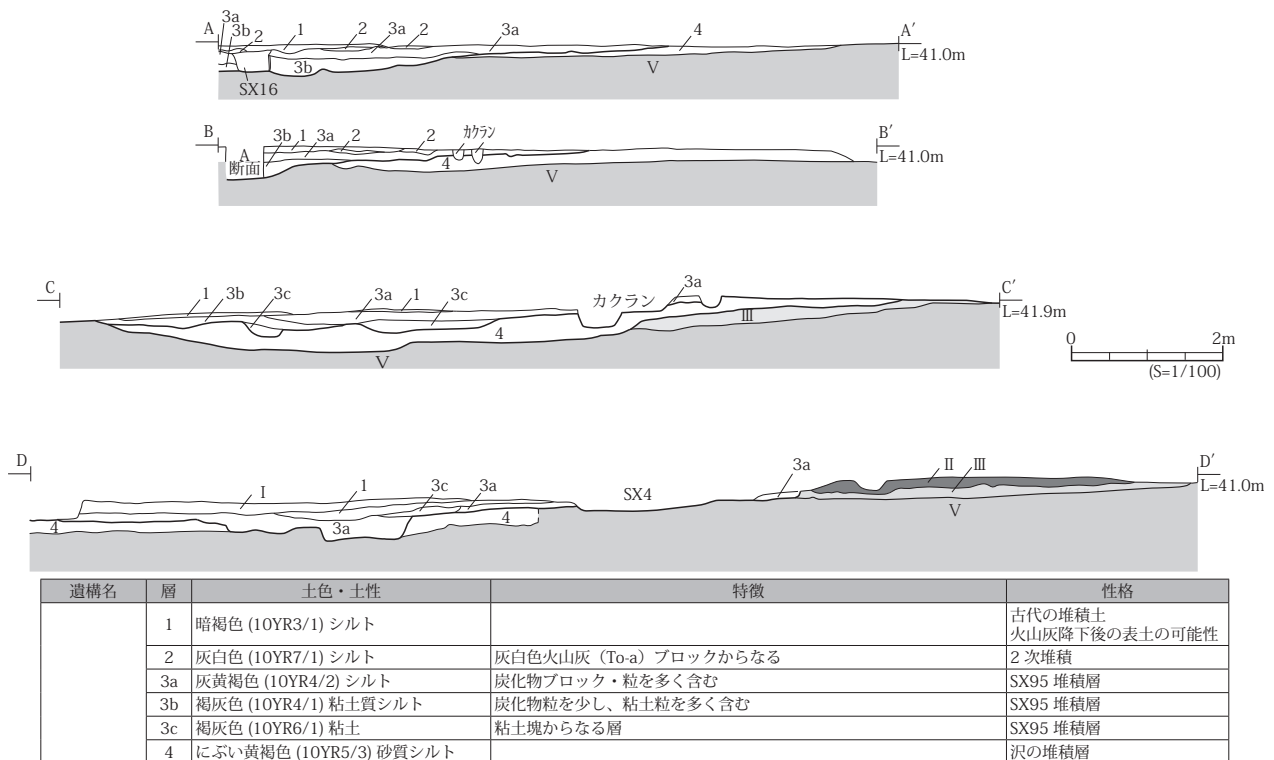
出土遺物は、須恵器・土師器が出土した。

【SX95 堆積層】（第 11・142・143～153 図・図版 22）

8 区中央に位置し、南西―北東方向の沢を埋めるように形成された遺物を含まない自然堆積層（第 142 図―4 層）上に自然堆積した層である。北東付近は灰白色火山灰（To-a）で覆われる。SX4、SK16、SK17、SD11 と重複しこれらより古い。

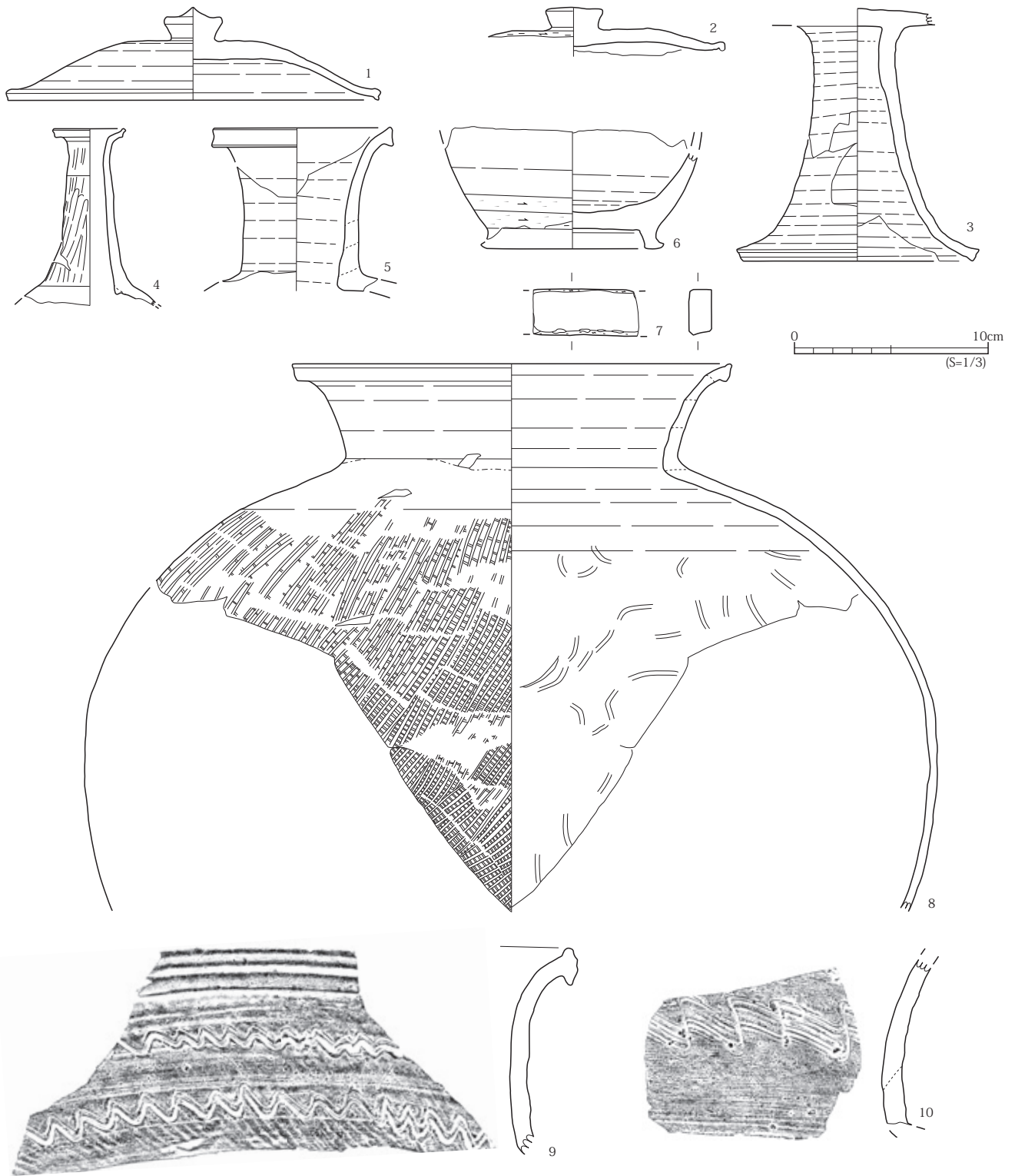
範囲は、東西 10m、南北 27m に広がり、最大 0.4 m の厚さが残存する。堆積層は 3 層に分かれ、3a 炭化物ブロック・粒を多く含む灰黄褐色シルト、3b 炭化物粒を少し、粘土粒を多く含む褐灰色粘土質シルト、3c 粘土塊層の褐灰色粘土からなる。

出土遺物には、土師器環、甕、甔、壺、須恵器環、蓋、高台環、高環、盤、鉢、長頸瓶、瓶、壺、甕、円面硯、赤焼土器、台付鉢、器台、獸脚や鈴などの土製品、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鬼板などの道具瓦、埴がある。



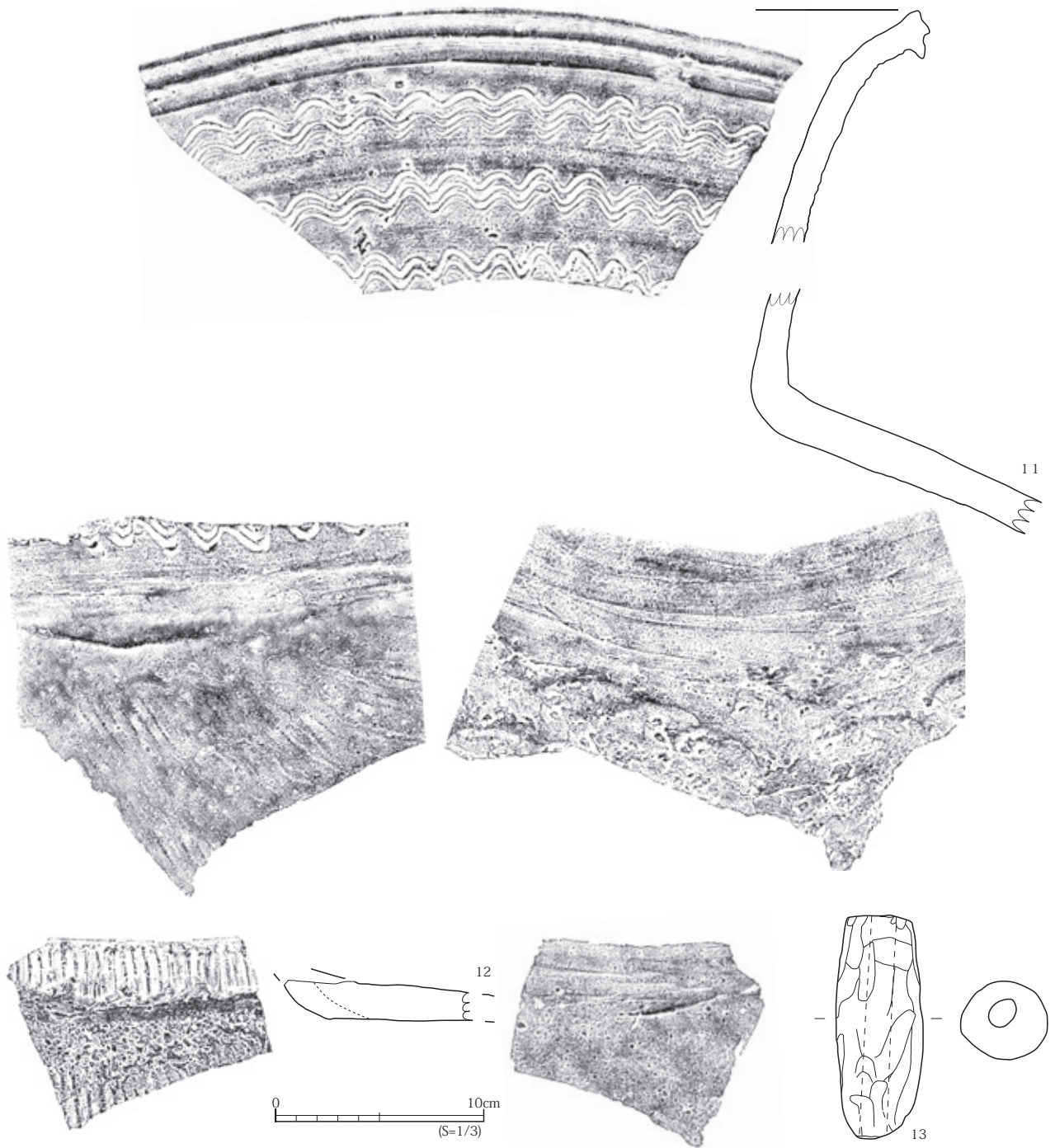
第 142 図 SX95 堆積層断面図





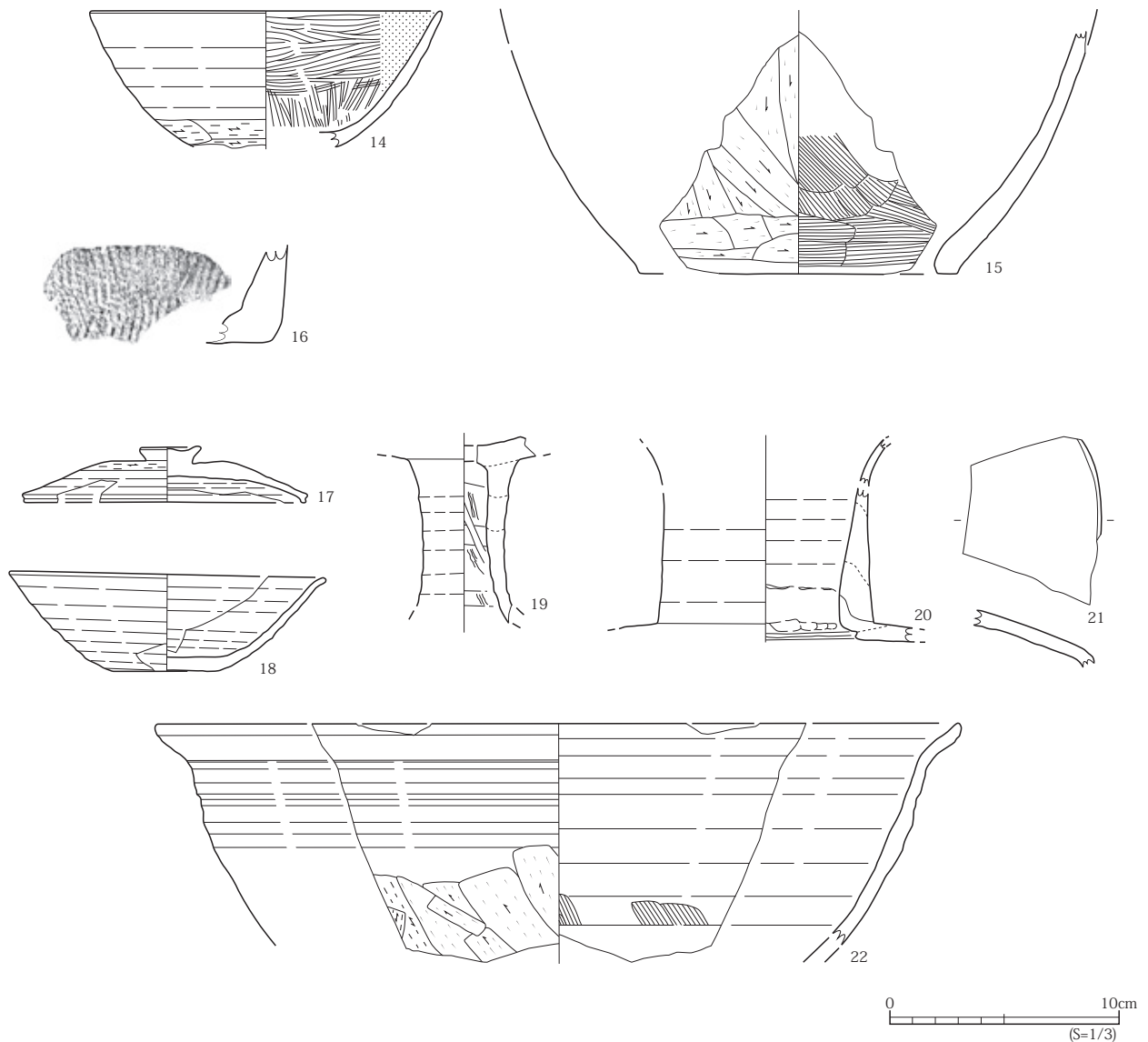
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 蓋	1層	1/3	19.4			4.8	外内：ロクロナデ 火ダスキ		934
2	須恵器 蓋	1層	2/3				2.6	外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ (焼き台転用か?)		1080
3	須恵器 高坏	1層	脚のみ					外内：ロクロナデ	60-1	938
4	須恵器 水瓶	1層	口縁部	3.7			9.0	外：ロクロナデ→ミガキ	60-2	953
5	須恵器 長頸瓶	1層	口縁部	(9.0)			(8.4)	外内：ロクロナデ		935
6	須恵器 長頸瓶	1層	底部～下部			(9.4)		外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 外面に自然釉		933
7	須恵器 甌	1層	底部					ケズリ		1084
8	須恵器 甗	1層	胴上半	22.2				外：口：ロクロナデ 胴：擬格子叩き 内：ロクロナデ 胴：無文当て具痕→ロクロナデ	60-3	939
9	須恵器 甗	1層	口縁部					櫛描波状文(櫛歯数2)2段 外：叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		944
10	須恵器 甗	1層	口縁部片					櫛描波状文(櫛歯数6) 外内：ロクロナデ		1076

第143図 SX95堆積層 出土遺物(1)



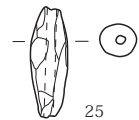
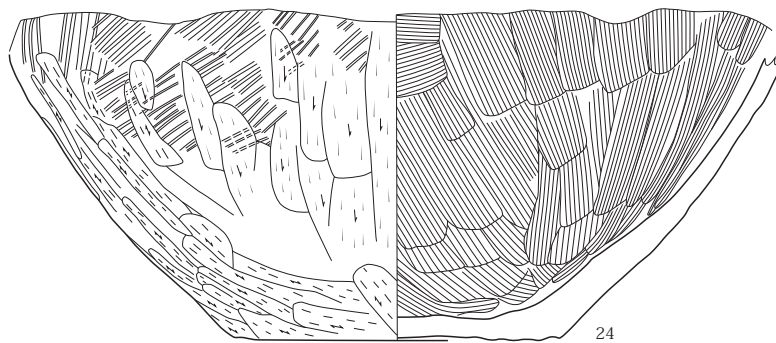
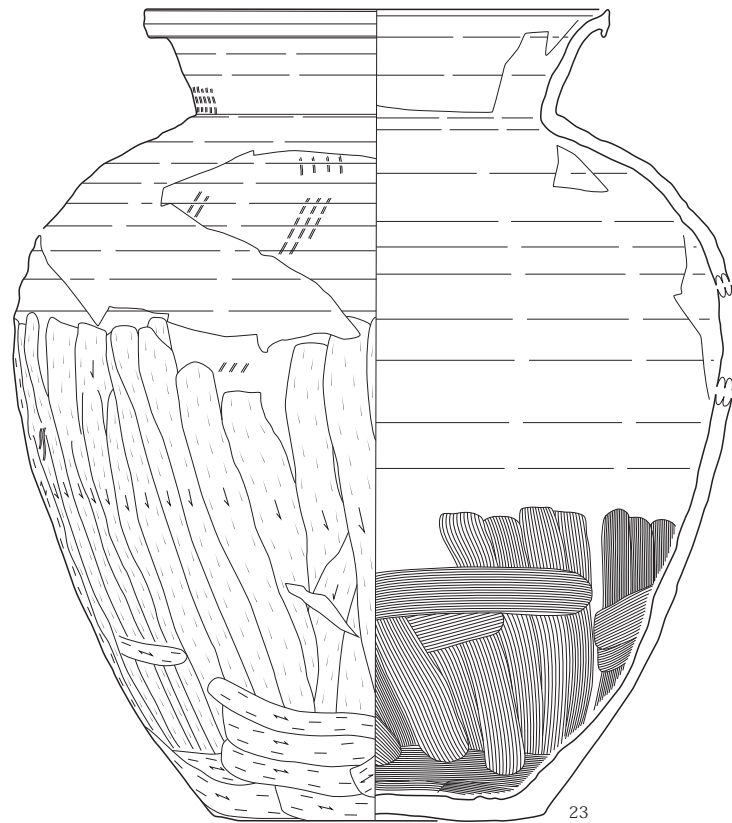
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
11	須恵器 大甕	1層	口縁部～肩部	68.2			残存高：12.2	櫛描波状文（櫛歯数4）3段 外：ロクロナデ 胴部平行叩き 内：ロクロナデ→ナデツケ 胴：同心円文当て具痕？		1079
12	須恵器 大甕	1層	胴端部片					外：平行叩き 口縁接続部剥離している 内：ナデ		1081
13	土錘	1層	ほぼ完形					長：10.7 幅：4.2 重さ：163.4g		936

第144図 SX95堆積層 出土遺物（2）



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
14	土師器 坏	1層	1/4	(15.2)			5.9～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：黒色処理	61-1	1130
15	土師器 甗	1層	底部					外：ケズリ 内：ナデ		1127
16	土師器 甗	1層	底部付近					外：叩き 内：ナデ		1126
17	須恵器 蓋	1層	3/4	12.0			2.5	ボタン 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	61-2	1102
18	須恵器 坏	1層	1/2	13.7		4.7	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 外：火ダスキ		1101
19	須恵器 高坏	1層	脚					外：ロクロナデ 内：ロクロナデ しぼり		937
20	須恵器 長頸瓶	1層	頸～肩					外内：ロクロナデ 接合3段明瞭		1103
21	須恵器 瓶	1層検出面	肩					外内：ロクロナデ 多口瓶の可能性		1147
22	土師器 鉢	1層	口縁部付近	(35.2)			10.4～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		1129

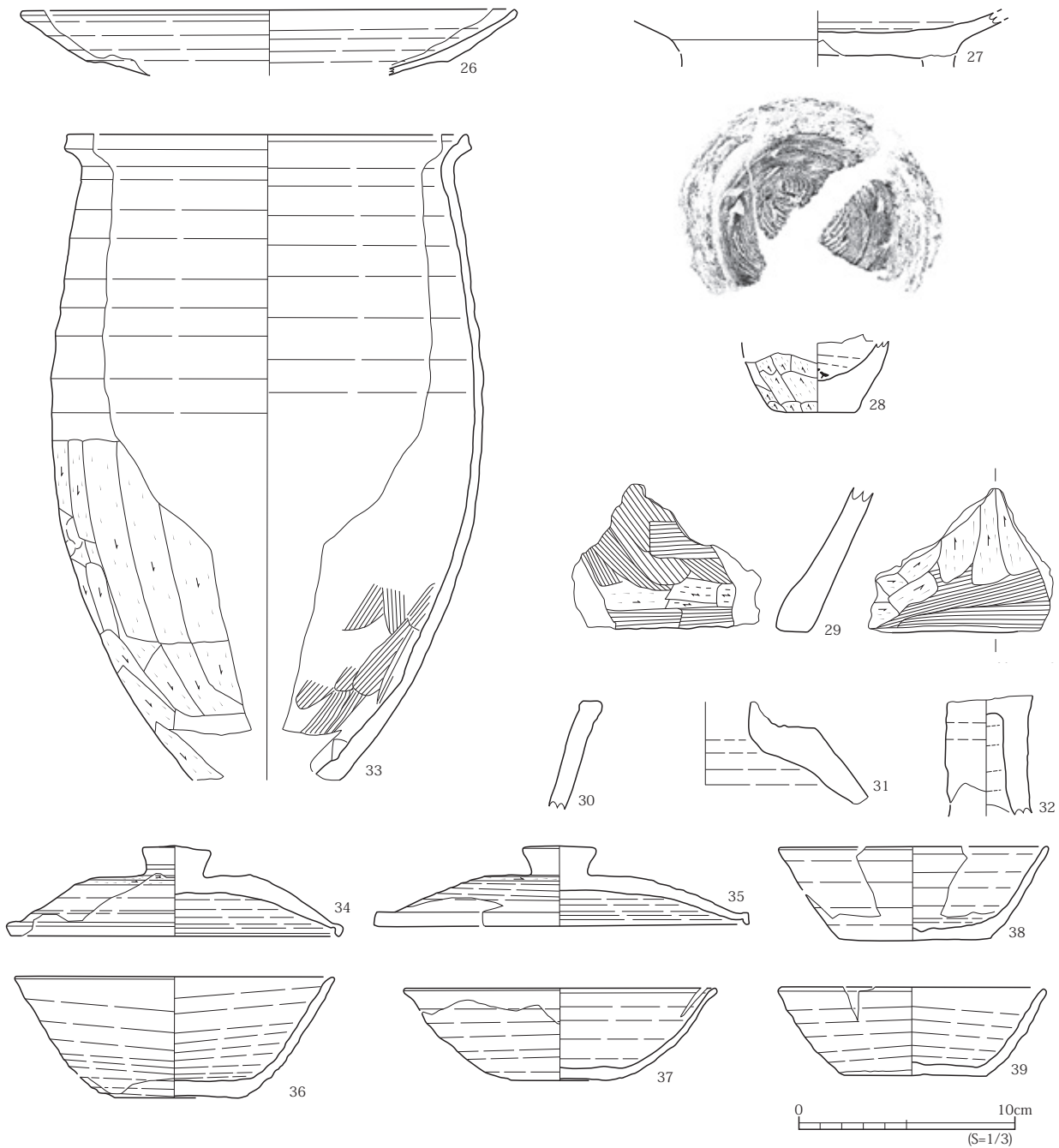
第145図 SX95 堆積層 出土遺物 (3)



0 10cm  
(S=1/3)

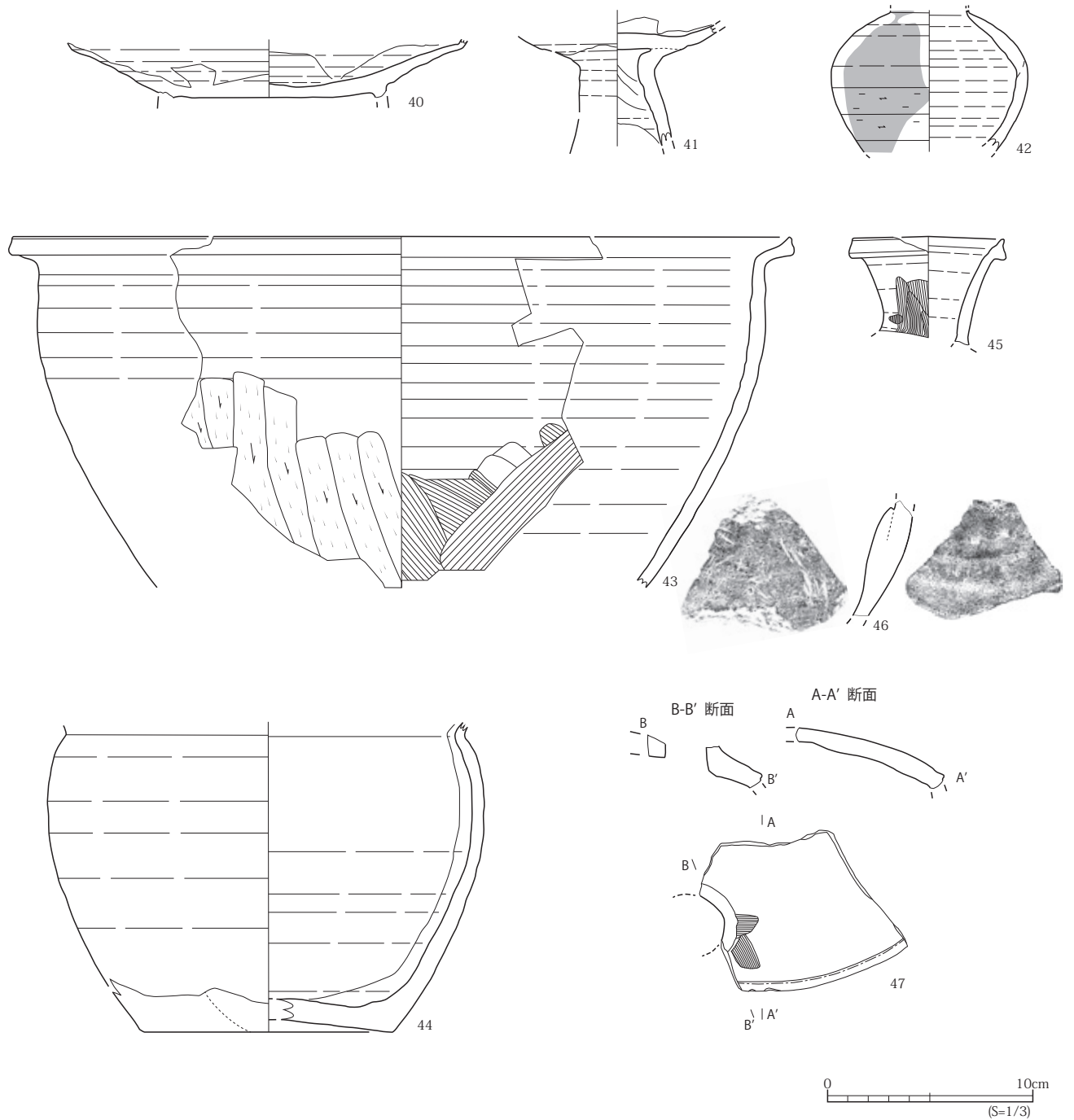
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
23	須恵器 壺	1層	3/4	18.3		13.1	32.2	外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	61-3	1151
24	須恵器 甕	1層	底部～下部			12.8	13.1～	外：平行叩き→ケズリ 内：ナデ		947
25	土錘	1層						長：4.4 幅：1.5 重さ：9.7g	61-4	955

第146図 SX95堆積層 出土遺物(4)



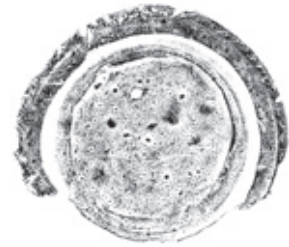
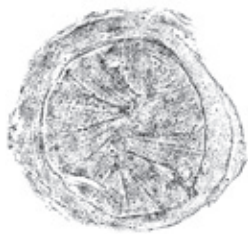
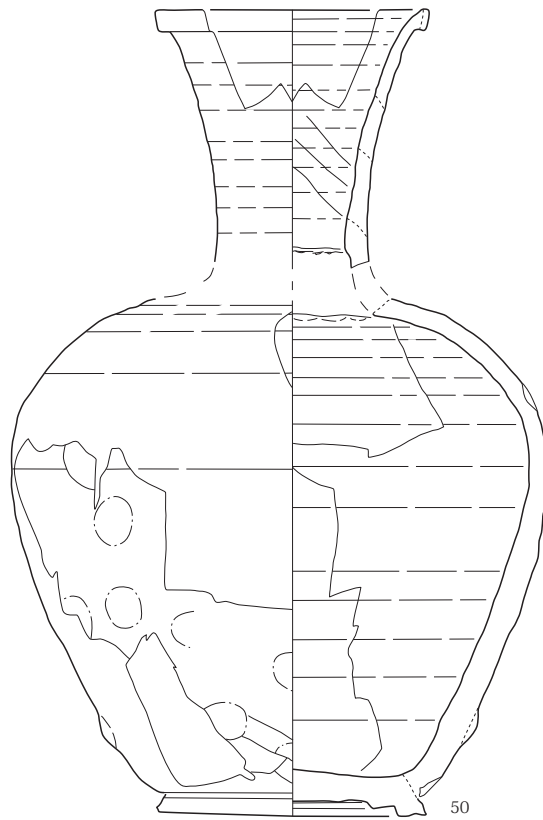
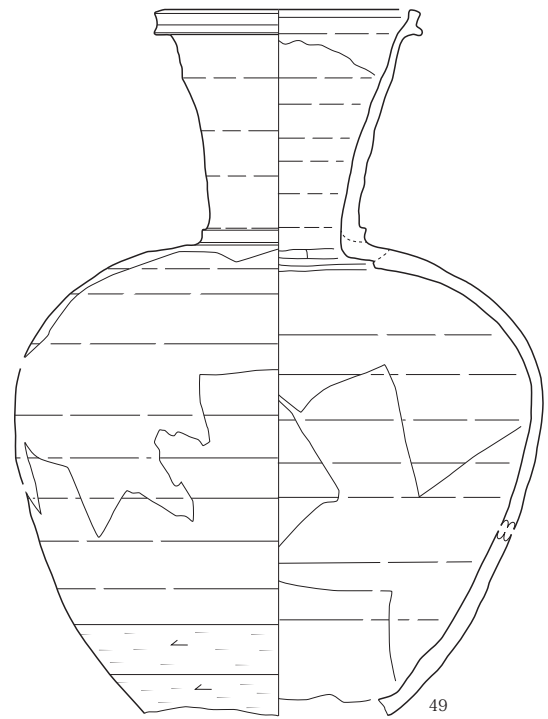
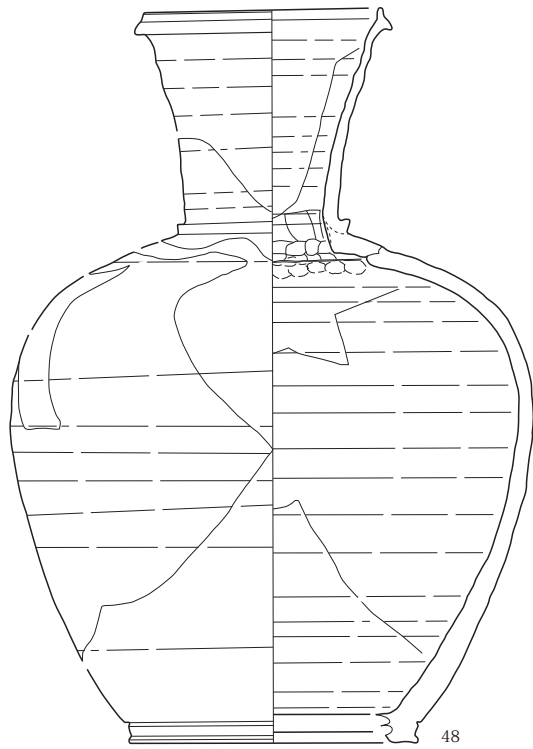
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
26	赤焼土器 皿?	3層	口縁部片	(23.0)			3.0~	外内: :ロクロナデ 31の器台の皿部分か?		1137
27	赤焼土器台付鉢	3層	底部					高台剥離痕明瞭		1133
28	土師器 壺	3層	底部			3.9	3.3~	外:ケズリ 内:ナデ 付着物	61-5,6	1138
29	土師器 甗	3層	底部					外内:ナデ ケズリ		1140
30	土師器 甗?	3層	口縁					外内:ロクロナデ 赤彩?		1136
31	赤焼土器 器台	3層	脚~台部							1141
32	土師器 高杯?	3層	脚					外:ロクロナデ 内:ナデ		1144
33	土師器 甗	3層	1/4	(18.4)		(6.8)	(29.9)	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ		1142
34	須恵器 蓋	3層	3/4	15.2			4.1	平 外内:ロクロナデ→天井ケズリ 外:ロクロナデ→天井ケズリ 内:ロクロナデ		1115
35	須恵器 蓋	3層	2/3	17.2			3.7	平 外内:ロクロナデ→ケズリ 外:ロクロナデ→天井ケズリ 内:ロクロナデ		1116
36	須恵器 坏	3層	2/3	14.6		5.8	5.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		1112
37	須恵器 坏	3層	3/4	(14.4)		4.6	4.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		1117
38	須恵器 坏	3層	1/3	(12.2)		7.0	4.4	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ		1123
39	須恵器 坏	3層	完形	12.4		6.6	4.1	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	61-7	1124

第147図 SX95 堆積層 出土遺物 (5)



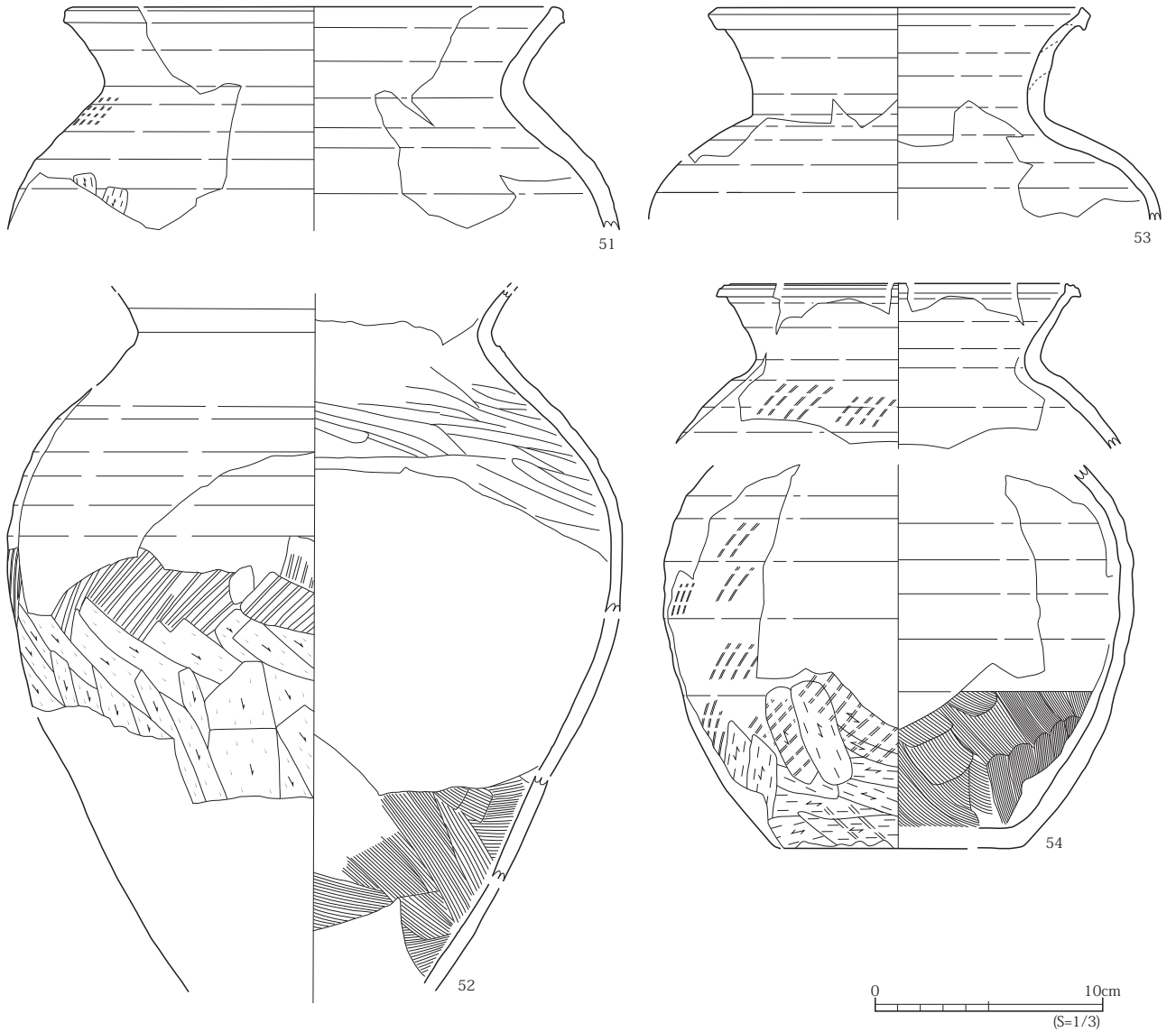
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
40	須恵器 盤	3層	2/3				2.8~	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ		1108
41	須恵器 高坏	3層	脚上~坏下部					外内：ロクロナデ 脚：しぼり		1113
42	須恵器 壺	3層	胴 1/2		(9.6)			外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ	61-8	1104
43	須恵器 鉢	3層	1/4	(37.8)			17.2~	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		1111
44	須恵器 鉢	3層	1/4			12.0	15.1~	外：ロクロナデ 下部は回転ケズリと見られるが釉附着のため不明瞭 内：ロクロナデ 全体に自然釉附着		1382
45	須恵器 瓶	3層	口縁部完形	7.4				外：ロクロナデ→一部にナデ 内：ロクロナデ 体部との接着面が斜め	61-9	1109
46	須恵器 横瓶	3層	胴部側面					外内：ロクロナデ 閉塞円盤	62-1	1380
47	須恵器 瓶	3層	体部破片					外：ロクロナデ 穿孔部近くに一部ナデ 内：ロクロナデ 多口瓶の肩部破片か？	62-2	954

第 148 図 SX95 堆積層 出土遺物 (6)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
48	須恵器 長頸瓶	3層	1/3	(9.2)		(11.4)	29.2	外内：ロクロナデ リング状突帯 接合3段	62-5	1105
49	須恵器 長頸瓶	3層	2/3	9.9			28.0 ~	外：ロクロナデ→回転ケズリ リング状突帯 接合3段 内：ロクロナデ	62-6	1106
50	須恵器 長頸瓶	3層	2/3	(10.8)	(21.2)	(10.7)	(32.0)	外：ロクロナデ 胴部発泡 内：頸ロクロナデ→しぼり指ナデ	62-7	1121

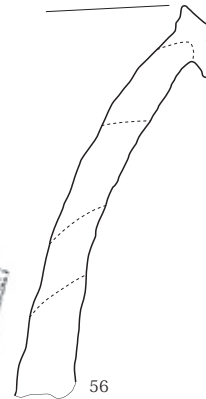
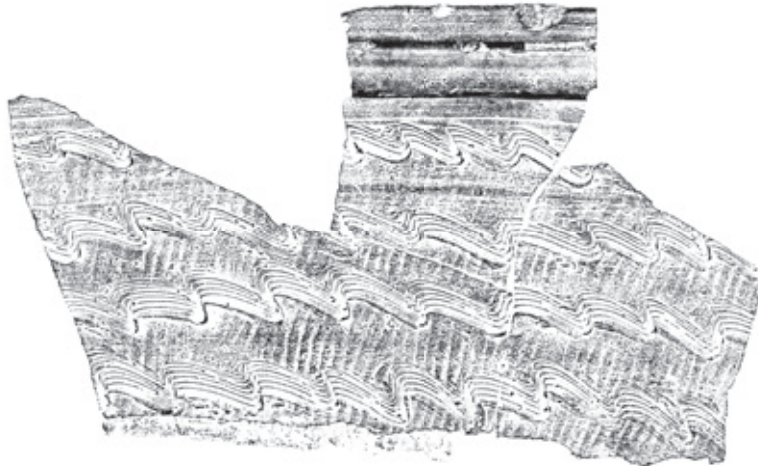
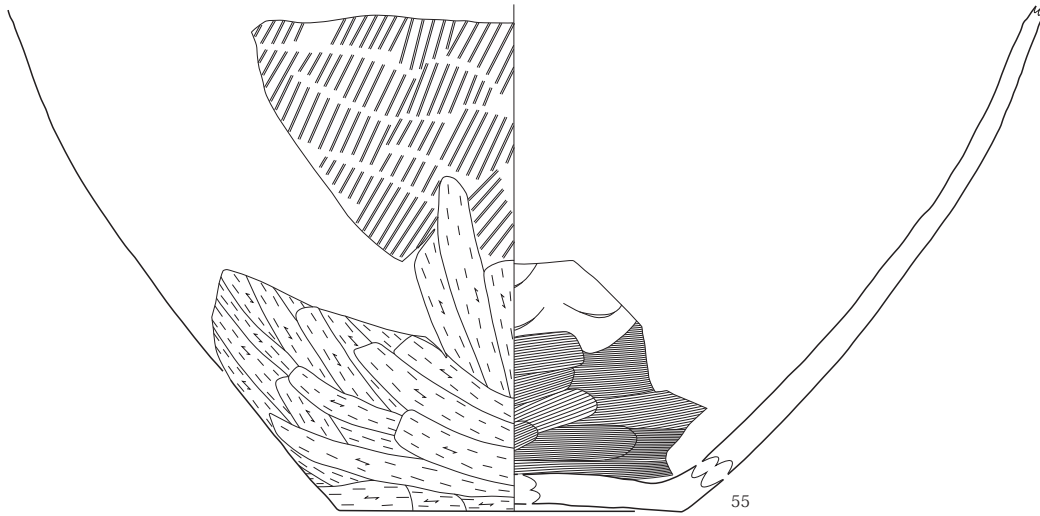
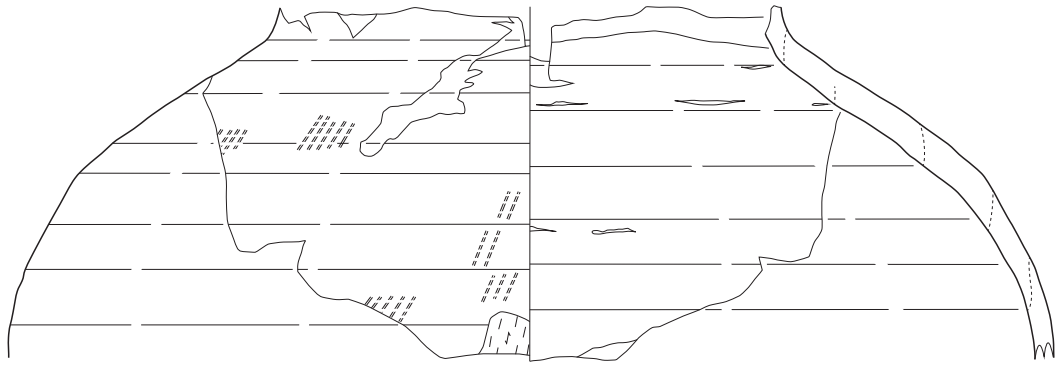
第149図 SX95堆積層 出土遺物(7)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
51	須恵器 甕	3層	口縁部	(21.2)			9.8～	外：平行叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色	62-3	1131
52	須恵器 壺	3層	1/3					外：平行叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ナデ→ナデ	63-6	1107
53	須恵器 壺	3層	4/5 口縁部	16.1			9.3～	外内：ロクロナデ		1119
54	須恵器 壺	3層	1/3 口縁部 肩部～底部	(14.7)		(10.9)	7.3～ 16.9～	外：平行叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	62-4	1122

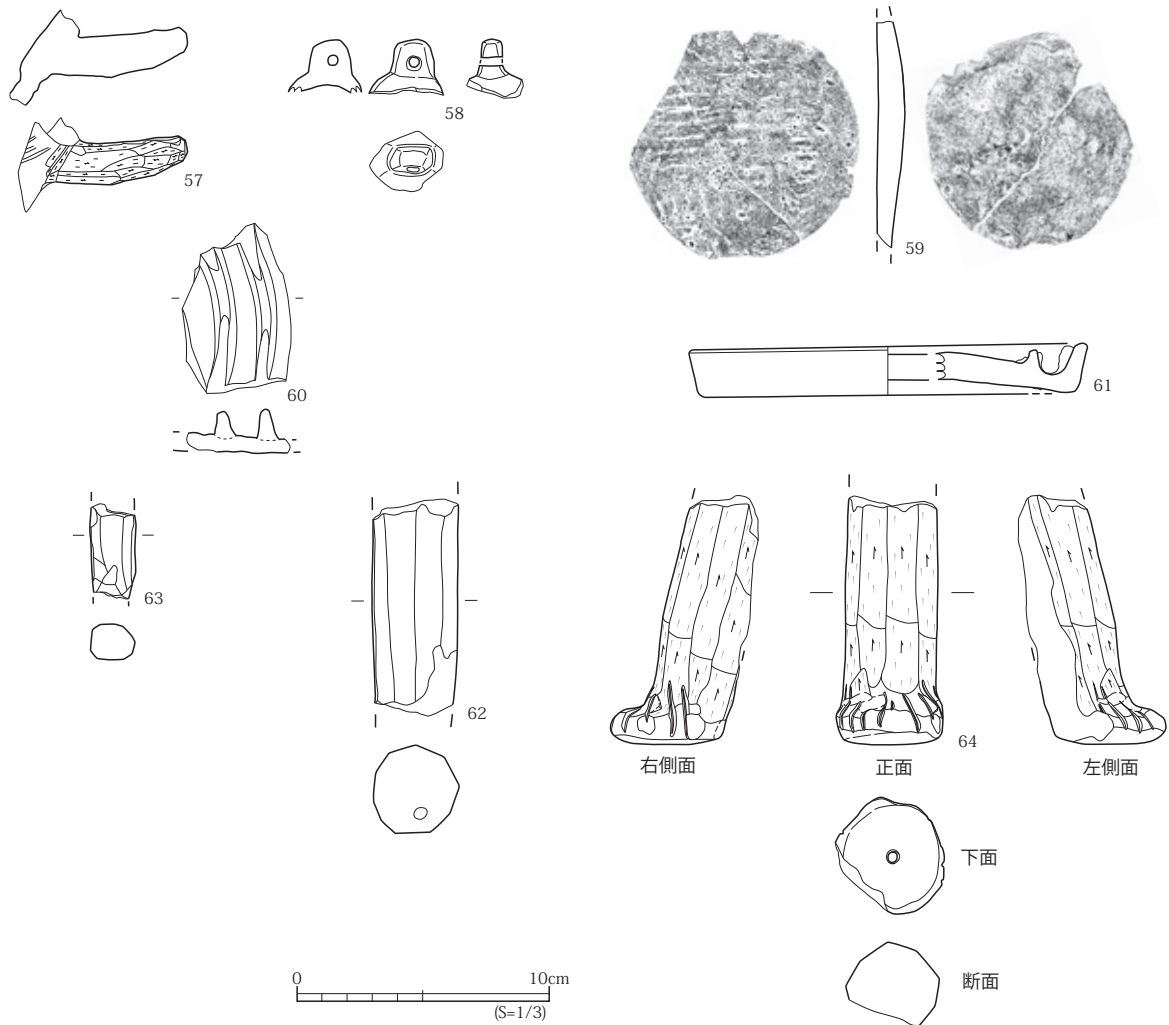
第150図 SX95堆積層 出土遺物(8)





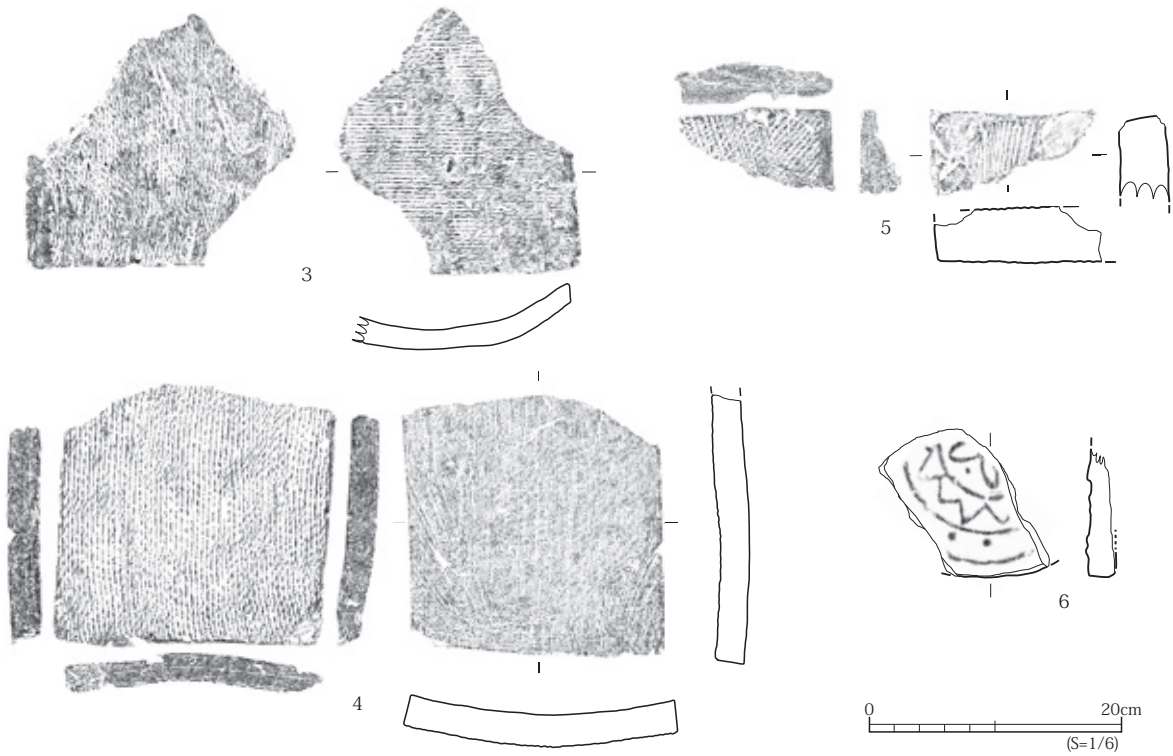
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
55	須恵器 甕	3層	1/3				上 14.1 下 20.1	頸部径(推定) 20.9 外: 上: 平行叩き→ロクロナデ 下: 平行叩き→ケズリ 内: 上: ロクロナデ 下: 無文当て具痕→ロクロナデ 赤褐色		1118
56	須恵器 甕	3層	口縁部					櫛描波状文(櫛歯数6) 外: 平行叩き→ロクロナデ 内: ロクロナデ	63-5	1100

第151図 SX95 堆積層 出土遺物(9)



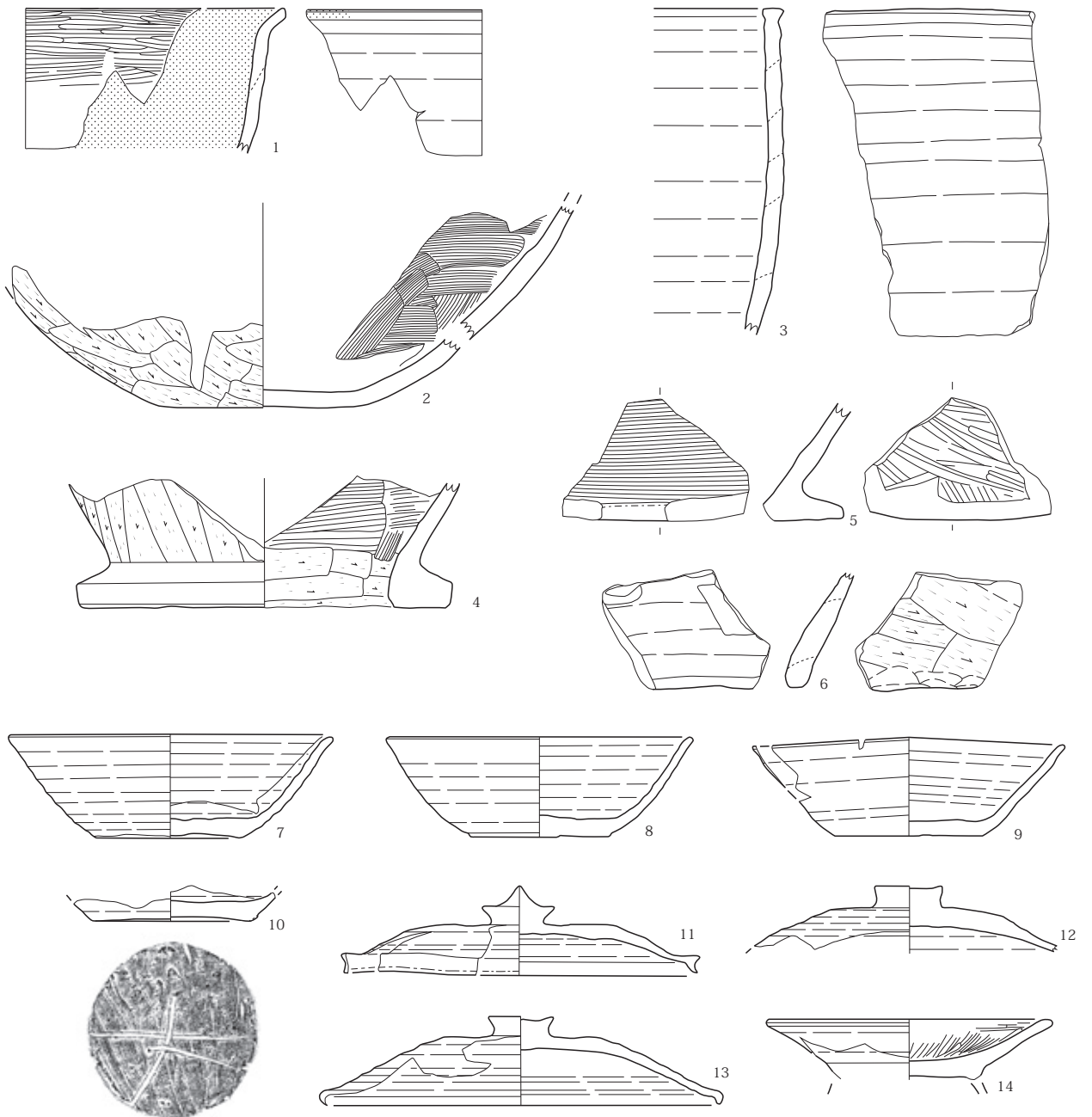
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
57	須恵器 甕?	3層	把手					把手:ケズリ 体部:叩き→ロクロナデ		940
58	土製品 土鈴	3層	紐					残高:2.1	63-1	1114
59	須恵器	3層	体部破片					外:叩き 内:ナデ 指頭圧痕 裏胴部転用?閉塞凹盤?		1381
60	須恵器 円面碗	3層	破片					溝2条 色調:明黄褐~赤褐色	63-2	1120
61	須恵器 円面碗	3層	1/6	(15.0)					63-3	950
62	土製品	3層						棒状品		1135
63	土製品 獣脚	3層	脚部?破片					長さ:(8.6) 最大径:3.4 面取り後ナデ		1110
64	土製品 獣脚	3層	脚部破片					長さ:(9.8) 最大径:4.3 ケズリ→一部ナデ→沈線(足指部) 下面(足裏)中央に径5mmの穴有り	63-4	951

第152図 SX95堆積層 出土遺物(10)



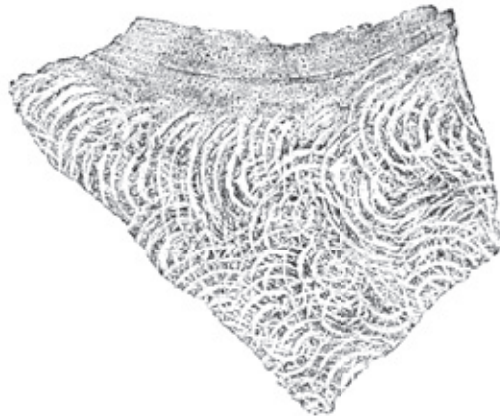
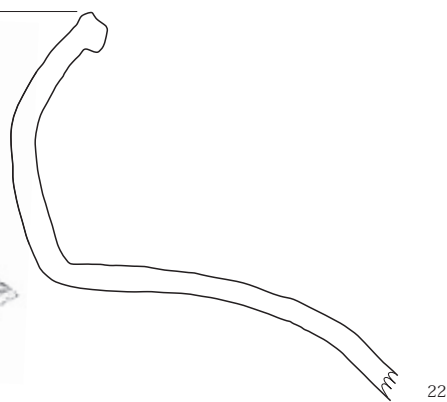
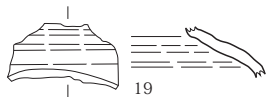
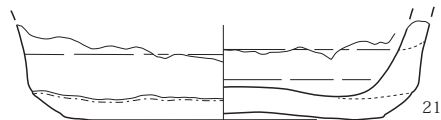
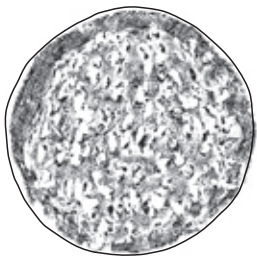
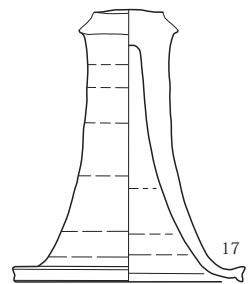
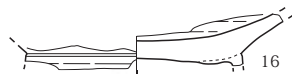
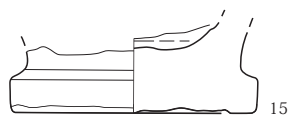
No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
1	平瓦	Ⅱ	1層	1/3	凸面：縄叩目→潰れ+凹型台端部痕 凹面：摸骨痕→布目→叩目 側端・小口：ケズリ	5Y6/1 灰		K46
2	道具瓦 (熨斗瓦?)	Ⅰ	1層	1/2	長：(21.0)cm 幅：21.0cm 厚さ：2.5cm 凸面：縄叩目 凹面：糸切痕→布目 側端・小口：ケズリ	5YR8/2 灰白		K27
3	道具瓦(磚?)	Ⅱ	3層	破片	厚さ：3.2cm 凸面：縄叩目 凹面：糸切痕→布目	7.5YR6/1 灰		K28
4	軒丸瓦	Ⅲ	3層	瓦当破片	周縁：ケズリ 瓦当裏剥落	7.5YR7/6 橙		K41

第 153 図 SX95 堆積層 出土遺物 (11)

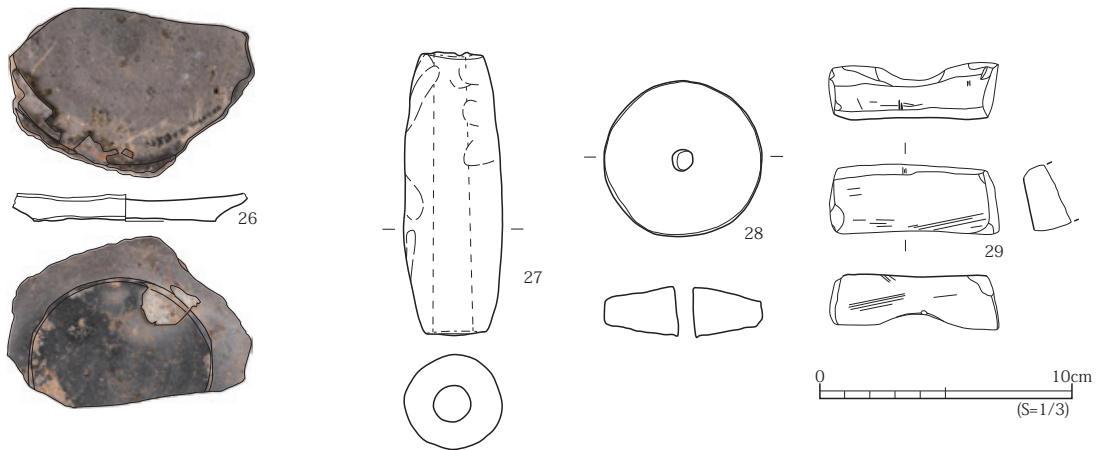
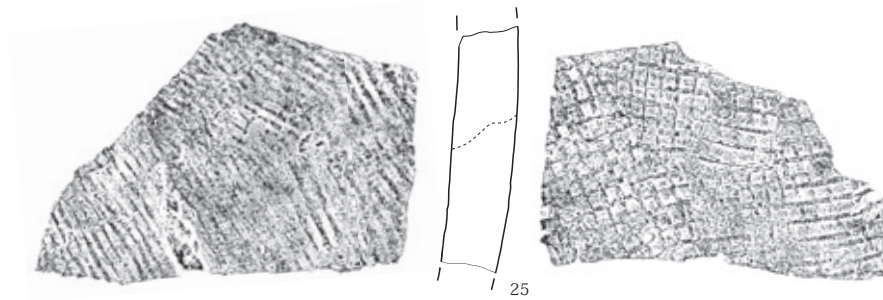
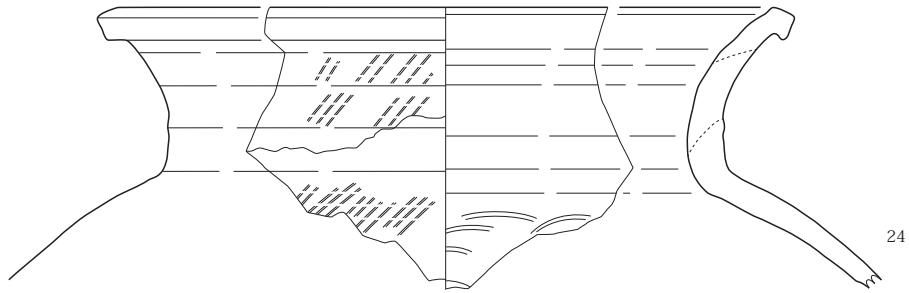


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 鉢	7区検出面	口縁部破片					外：ロクロナデ 内：黒色処理 残存高7.3		1272
2	土師器 鉢?	7区検出面	底部片			9.6		"外：体上部ナデ 体下部ケズリ 内：ナデ 底部：ナデ→ミガキ 体部は大きく外傾する"		1274
3	土師器 甌	7区検出面	口縁部破片					外内：ロクロナデ		1273
4	土師器 甌	6区南検出面			(17.0)	6.0~		"胎土：密 焼成：良好 外：ケズリ→ナデ 内：ヘラナデ (ハケメ) →ケズリ"		705
5	土師器 甌	6区検出面						胎土：密 焼成：良好 外：ナデ 内：ミガキ		706
6	土師器 甌	7区検出面	底部破片					外：ヘラケズリ 内：ロクロナデ		1270
7	須恵器 坏	7区検出面	1/2	14.7		6.8	4.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→薄いナデ		1361
8	須恵器 坏	7区検出面	1/2	(14.2)		6.4	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り無調整 内面に重ね焼き痕		1281
9	須恵器 坏	7区検出面	1/3	(14.4)		6.8	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1288
10	須恵器 坏	7区検出面	底部			7.3		外内：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 「丈」?ヘラ描き		1343
11	須恵器 蓋	7区検出面	3/4	16.3		4.1		摘まみ：宝珠とんがり 外内：ロクロナデ→天井付近回転ケズリ		1284
12	須恵器 蓋	7区土器集中	2/3	(14.2)		3.1~		摘まみ：平 外内：ロクロナデ 内面に重ね焼き痕		1290
13	須恵器 蓋	7区検出面	3/4	(18.2)		4.2		摘まみ：ボタン 外内：ロクロナデ 内面に重ね焼き痕		1283
14	須恵器 高台皿	7区検出面	1/3	(13.0)		2.8~		外：ロクロナデ 内：黒色処理 摩滅著しい		1271

第 154 図 遺構検出面 出土遺物 (1)

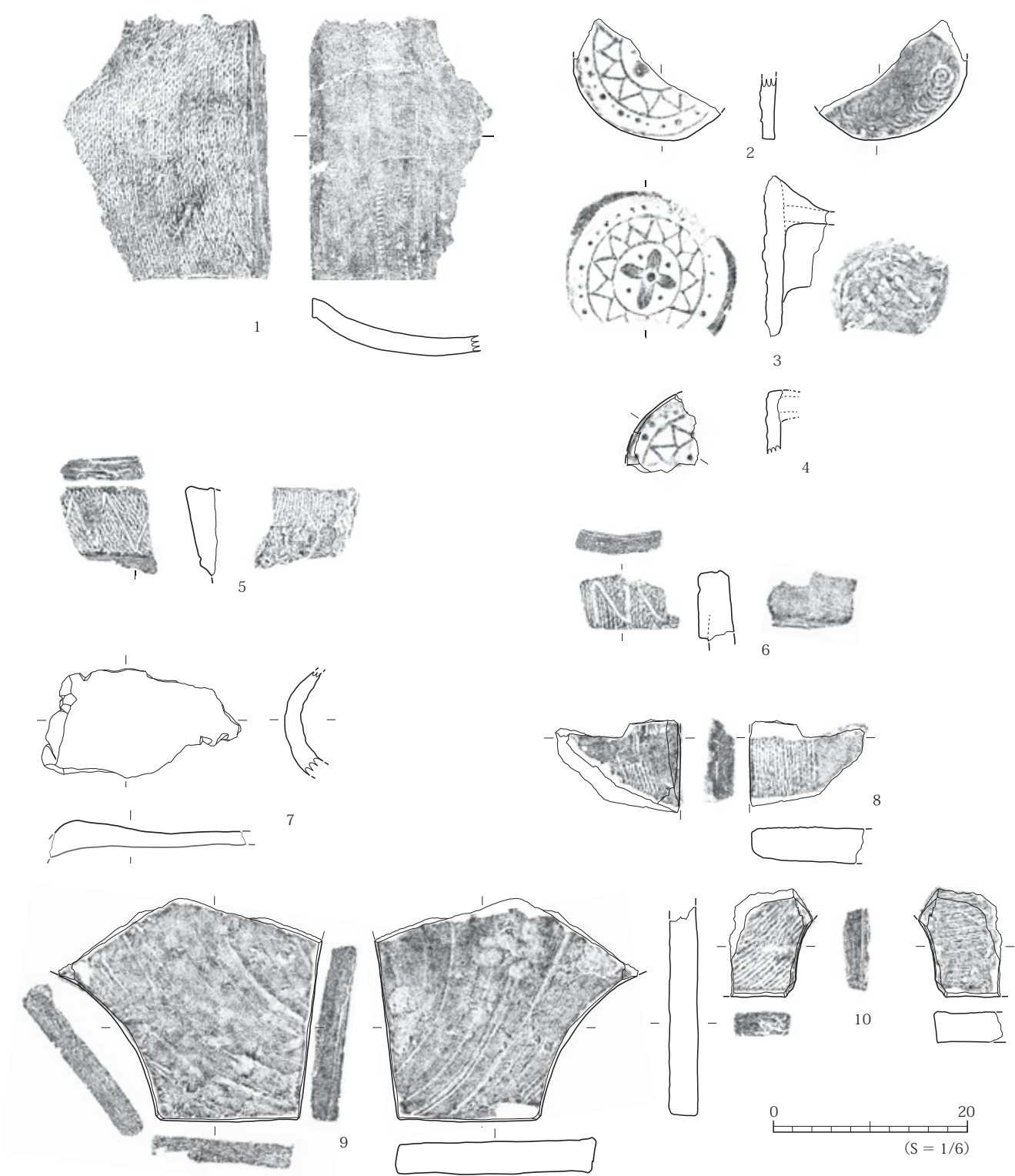


第 155 図 遺構検出面 出土遺物 (2)



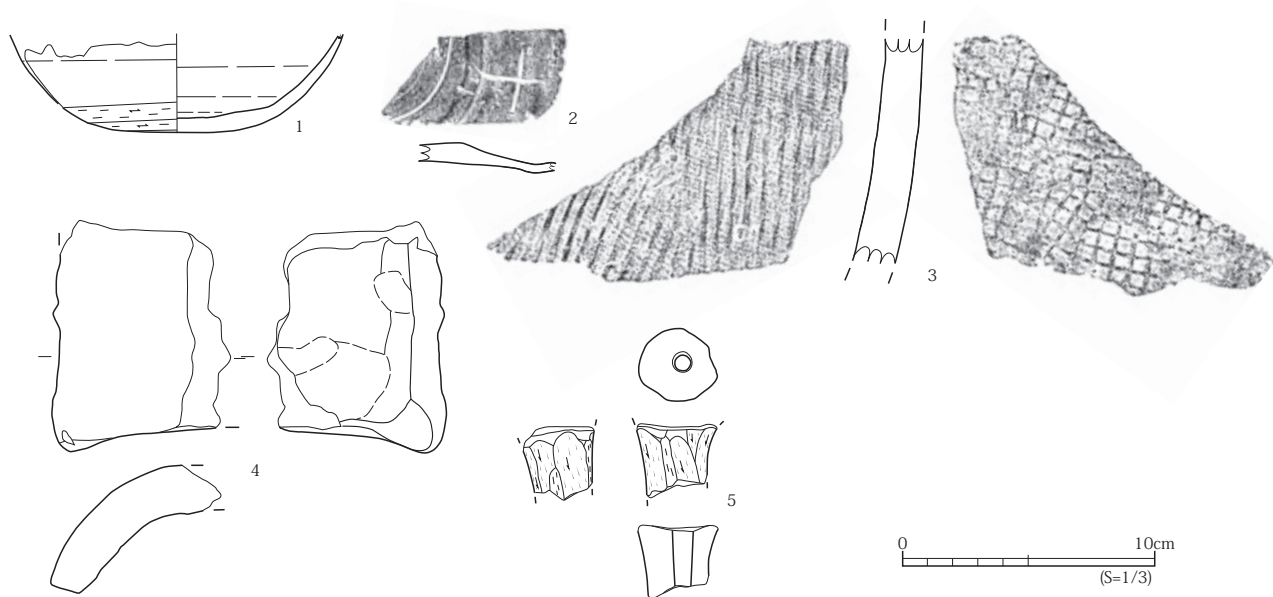
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
15	須恵器 挿鉢	7区検出面	胴部下～底部			9.4		外内：ロクロナデ 底部：外縁部ナデ→外縁部を残し棒状工具で刺突を密に施す ハチの巣	66-2	1340
16	須恵器 高台坏	7区検出面	胴部下～底部					外内：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ→高台貼り付け→ロクロナデ「ニ」?ヘラ描き		1341
17	須恵器 高坏	7区検出面	脚部			9.1	10.8~	外内：ロクロナデ 坏部欠損		1282
18	須恵器 長頸瓶	6区中央検出面	底部			(8.8)		大戸とみられる		704
19	須恵器 壺	7区検出面	肩部片					外内：ロクロナデ		1275
20	須恵器 壺	7区検出面	肩部片					外内：ロクロナデ		1276
21	土師器 甕	7区検出面	底部			(12.7)		外内：ロクロナデ 底部：外内：ナデ		1344
22	須恵器 甕	8区東側検出面	口縁部～胴上部					櫛描波状文(櫛波数3)2段 外：口：叩き→ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：同心円文当て具痕 No.945と接合		942
23	須恵器 甕	7区検出面	胴部片					外：擬格子叩き 内：同心円文当て具痕	66-1	1365
24	須恵器 甕	9区I～III層		(26.0)			11.1~	外：平行叩き→口縁部ロクロナデ 内：ロクロナデ 胴部無文当て具痕→ナデ		1088
25	須恵器 甕	9区I～III層						外：平行叩き 内：格子当て具痕		1083
26	専用焼台	7区検出面						外内：破断面釉	66-3	1483
27	土錘	7区検出面						長さ：11.3 最大幅：3.9 孔径：最大1.6 最小0.75 重さ：162g 体部ナデ(不明瞭) 両端面ヘラケズ		1358
28	土製品 紡錘車	8区検出面						長：6.2 幅：6.3 厚さ：2.0 重さ：76.4g		949
29	石製品 砥石	8区検出面						凝灰岩	70-1	1091

第156図 その他 出土遺物



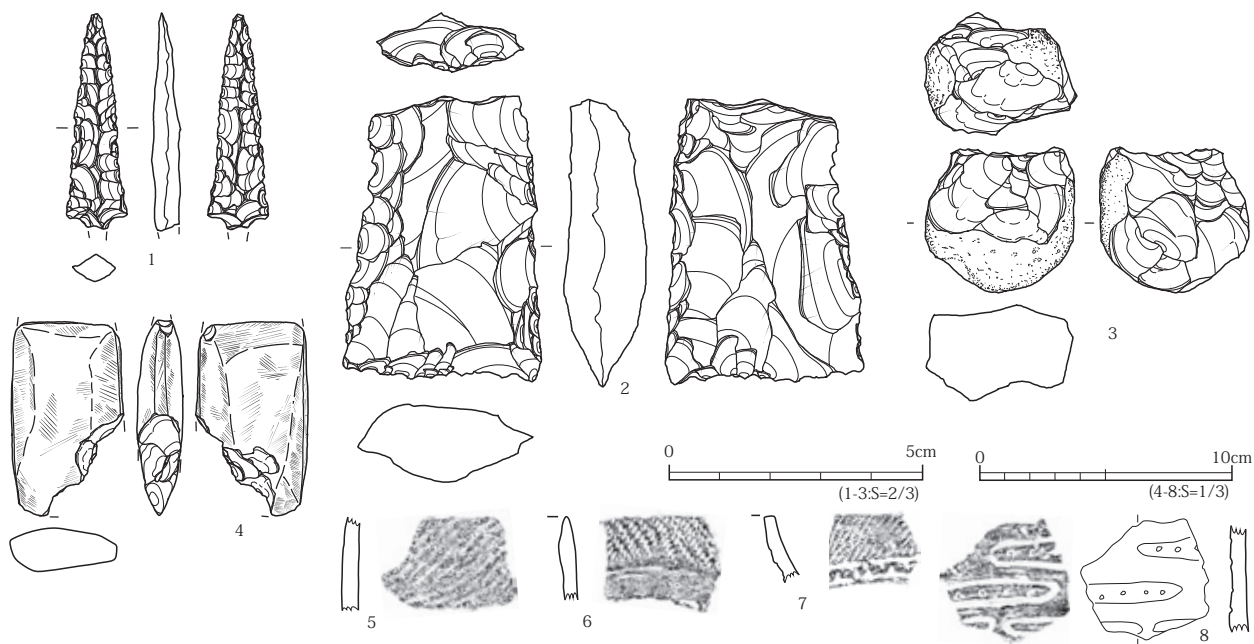
No.	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
1	平瓦	II	I層	1/4	凸面：縄叩き→潰れ+凹型台端部痕 凹面：模骨痕→布目→縄叩目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白		K21
2	軒丸瓦	I	南検出面	瓦当破片 下半のみ	周縁：ケズリ 瓦当裏：同心円文当具痕	7.5Y8/1 灰白	64-1	K12
3	軒丸瓦	II	I層	3/4 瓦当	瓦当裏：縦方向のナデ 【丸瓦】凸面：ナデ（剝落） 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y6/1 灰	64-2	K42
4	軒丸瓦	II	I層	1/4 瓦当破片左上	周縁：ケズリ 瓦当裏：ナデ 丸瓦接合痕	7.5Y8/1 灰白		K40
5	軒平瓦	I	I層	破片 平瓦部欠損	【瓦当】瓦当面：ケズリ→無文 顎面：縄叩目→鋸歯文 段顎	5Y6/1 灰		K43
6	軒平瓦	II	I層	破片	【瓦当】瓦当面：ケズリ→無文 顎面：縄叩目→鋸歯文 段顎	5Y6/1 灰		K44
7	軒丸瓦？	III	I層	1/3	全面摩滅により調整不明 瓦当部剥落か？	10YR5/2 灰黄褐	64-3	K23
8	鬼板	III	I層	破片	表：縄叩目→ナデ 裏：布目→縄叩目	5Y6/1 灰		K26
9	鬼板	I	I層	1/4	表：糸切痕 裏：糸切痕 側端：ケズリ	2.5Y8/2 灰白	64-4	K24
10	鬼板	II	I層	破片	表：縄叩目 裏：糸切痕→布目 側端：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰		K25

第 157 図 SX95 堆積層 その他出土瓦



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器杯 (丸底)	7区表採	1/3					外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り?→回転ケズリ 丸底ケズリの坏焼成は土師質、製作技法は須恵器 色調：橙		1407
2	須恵器 蓋	6区カクラン						「十」ヘラ描き		710
3	須恵器 甕	8区表採	胴部片					外：擬格子叩き 内：格子当て具痕		1090
4	土製品	8区カクラン	端部破片					長さ：(9.1) 幅：(7.1) 厚さ：2.0 支脚?		1089
5	土製品?	7区カクラン溝	破片					残存長：2.9 残存幅：3.2 孔幅：上0.8 下0.65 面取り状にケズリ 但し砂粒の動きは目視で確認できない 中空 獣脚か?		1339

第158図 表採・カクラン 出土遺物



No.	器種	遺構・層	残存	長 mm	幅 mm	底径	重 g	特徴	写真図版	登録
1	石鏃	SD2 3層		42	12		1.9	玉髄	69-5	S1
2	石鏃	SX95 3層		56	39		36.1	珪質頁岩製 両面加工 素材腹面が一部残る	69-6	S5
3	石核	SX95 3層		29	29		19.3	黒曜石 石核 打面が一面、剥離は両面一方向。打面から遠い剥離は古く円礫採集時にはすでに割れていたと考えられる	69-7	S4
4	磨製石斧	SX8 堆積土		77	43		87.5	緑色凝灰岩 刃部・基部欠損。側面面取り。研磨は丁寧で単位が縦方向主体	69-8	S3
5	縄文土器	SI62 2層						縄文RL	69-1	1443
5	縄文土器	SI22 3層						縄文LR	69-2	387
7	縄文土器	7区 検出面						縄文LR	69-3	1444
8	縄文土器	7区 斜面検出面						沈線、刺突	69-4	1445

第159図 石器・縄文土器



### 3. 彦右工門橋窯跡小括

#### 1. 遺物

##### (1) 出土土器の器種

土師器 / 坏、埴、鉢、甕、甗、甗、須恵器 / 坏、高台坏、盤、高坏、蓋、長頸瓶、横瓶、鉢、壺、甕、硯、赤焼き土器 / 台付鉢などの器種がある。それらのうち、全容の判明するものを取り上げて分類する。

##### 【土師器】

###### 1 [坏]

坏状の器形である。いずれもロクロ調整で、内面黒色処理である。底部切離し・調整は、回転ケズリと回転糸切りがある。口径 10～16cm、器高 3～6cm、底径 5～8cm 前後である。

###### 2 [高台皿]

皿状で高台が付く。内面は黒色処理される。口径 13cm、器高 3～4cm、底径 7～8cm 前後である。

###### 3 [甕]

器形から A 長胴形、B 鉢形に分けられる。長胴形の甕 A の調整は、外面が胴上部がロクロナデ、胴中～下部がケズリで、内面が上部がロクロナデ、中部～下部がナデである。同形のものには口径 20～22cm、器高 32～37cm、底径 6～8cm 前後の大形品を基本とする (10) が、口径 15～16cm、器高 16～19cm、底径 6cm 前後の中形品 (11)、口径 13cm、器高 15cm、底径 7cm の小形品 (12) がある。鉢形の甕 B は口径 14～15cm、器高 11～13cm、底径 6～8cm 前後のものが多いが、口径 9～10cm、器高 6～7cm、底径 4～6cm の小形品がある。調整は内外面ロクロナデで、外面下端付近ケズリを基本とするが、ケズリのない資料もある。

###### 4 [その他]

埴、鉢、甗のほか、須恵器蓋 A と同形の土師器蓋、須恵器高台坏と同形の土師器高台坏、須恵器盤と同形の土師器盤がある。須恵器と同形のもの、いずれも内面黒色処理である。

##### 【須恵器】

###### 5 [坏]

坏状の器形である。底部切離し技法は、ヘラ切り、底部回転糸切りがある。再調整は手持ちケズリ、ナデがみられる。ヘラ切り後のナデは明瞭なもの、不明瞭なものがある。回転糸切りは、確認できたものは全て右回転である。まれに糸切り後にナデを施されたものがある。ほかに把手が付く双耳坏 (25)、通常のものより小形のものがある。口径 11～16cm、器高 3～6cm、底径 5～9cm 前後である。

###### 6 [高台坏]

高台の付いた坏である。口径 10～18cm、器高 5～9cm、底径 6～10cm 前後である。

###### 7 [盤]

浅い皿状の坏部に高台がつく。体部に稜線をもち、口縁端部に折り返しをもつ。口径 14～17cm、

器高 3～4cm、底径 8～10cm 前後である。

## 8 [高坏]

裾の開く脚に皿状の坏部をもつ。口径 25cm、器高 19cm、脚端部径 16cm のものがある。

## 9 [蓋]

A：天井部から体部が外傾して口縁端部に折り返しをもつものと、B：天井部と体部がほぼ直角に屈曲するものがある。蓋Aの摘みは、擬宝珠、扁平な擬宝珠、扁平、ボタン状がある。口径 12～23cm、器高 3～6cm 前後である。蓋Bの摘みには擬宝珠と擬宝珠が重なった相輪状の形態がある。口径 13～18cm、器高 5～7cm である。

## 10 [長頸瓶]

長い頸部をもつ瓶である。口径は大小に区分できる。口径の大きなものは頸部にリング状凸帯をもつものがある。口径の小さいものはいわゆる水瓶である。ほかに多口瓶がある。

11 [その他] 横瓶、鉢、甗、播鉢、壺、甕、硯（円面硯と風字硯）、托などがある。

## (2) 土器の年代

土器の年代を検討する。竪穴建物跡の床面から出土した土器と土師器焼成遺構の埋戻し土から出土した土器を 1. 遺構に伴う一括性の高い遺物として取り上げる。ほかに 2. 自然堆積土などからまどまって出土した遺物として、竪穴建物跡の堆積土や河川跡から出土した土器も検討する。対象とした遺構から比較的多く出土している土師器坏、須恵器坏、高台坏を、主な検討対象として用いる（第 161 図）。

### 1. 遺構に伴う一括性の高い遺物

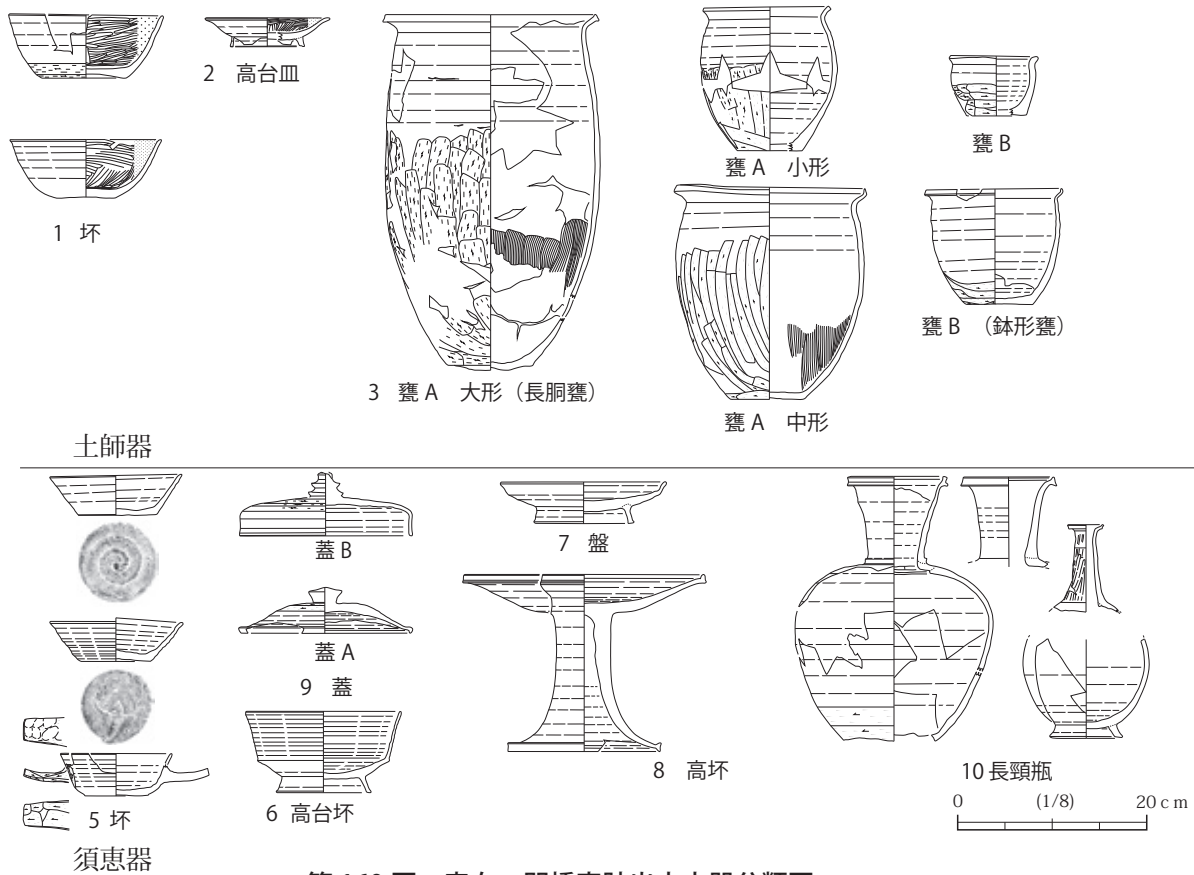
【SI22 竪穴建物跡床面出土土器】須恵器坏 1 点、高台坏 1 点が出土した。須恵器坏の器形は逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施す。高台坏は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひらく。

上記のような特徴をもつ須恵器坏・高台坏は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が 8 世紀後半～9 世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が 8 世紀末頃と考えられている。したがって、SI22 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI23 竪穴建物跡床面出土土器】土師器甕が 2 点、須恵器坏 3 点出土した。須恵器坏の器形は、逆台形である。底部の切離し・調整は、回転糸切り後にナデを施すもの 1 点、回転糸切無調整が 1 点、ヘラ切り無調整が 1 点ある。

上記のような特徴をもつ須恵器坏は、加美町壇の越遺跡 SI2224 住居跡、SI2289 住居跡、SI2477 住居跡（加美町教育委員会 2005）などから出土している。年代については 9 世紀中葉～後葉と考えられている。したがって、SI23 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI24 b 竪穴建物跡床面出土土器】土師器坏 1 点、土師器甕片 1 点、須恵器坏 4 点、須恵器蓋 1 点が出土した。土師器坏の器形は逆台形で、内面黒色処理である。底部の切離し・調整は回転ケズリで、



第 160 図 彦右工門橋窯跡出土土器分類図

体下部までみられる。須恵器杯の器形は逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施すものが2点、ヘラ切り無調整が2点ある。蓋は天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器杯、蓋は、彦右工門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、土師器杯、須恵器杯、蓋は名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右工門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI24 b 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI25 竪穴建物跡床面出土土器】土師器杯3点、土師器甕2点が出土した。土師器杯の器形は逆台形で、内面黒色処理である。底部の切離し・調整は回転ケズリ2点、回転糸切り1点である。前者は、回転ケズリが体下部までみられる。

上記のような特徴をもつ土師器杯は、西手取遺跡第4号住居跡（宮城県教育委員会 1980）、佐内屋敷遺跡第28号住居跡（宮城県教育委員会 1983）などから出土している。佐内屋敷遺跡第28号住居跡の杯は、糸切りと手持ちケズリであり、第Ⅱ群土器と整理され、9世紀中葉以降の年代が与えられている。回転ケズリの SI25 は、これらと比べるとやや後出の特徴をもつ。後述するように SI25 竪穴建物跡より新しい SI26 竪穴建物跡床面から出土した土器が9世紀中葉～後葉の年代が考えられることから、SI25 竪穴建物跡床面出土土器はそれよりも新しい9世紀後葉以降と考えられる。

【SI26 竪穴建物跡床面出土土器】須恵器杯5点が出土した。須恵器杯の器形は、逆台形（第40図3・5・6）、口径に対して底径が小さいもの（第40図1・2）がある。底部の切離し・調整は、回転糸切

りが3点、ヘラ切り無調整が1点、ヘラ切り後にナデを施すものが1点ある。

上記のような特徴をもつ須恵器坏は、加美町壇の越遺跡 SI2224 住居跡、SI2289 住居跡、SI2477 住居跡（加美町教育委員会 2005）などから出土している。年代については9世紀中葉～後葉と考えられている。したがって、SI26 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI78 竪穴建物跡床面出土土器】土師器鉢1点、須恵器坏1点、高台坏1点、高坏1点、蓋4点、壺1点、甕片が出土した。

須恵器坏の器形は、逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施す。蓋はつまみが擬宝珠形で、天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器坏、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI78 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SX15 1～3層出土土器】

土師器焼成遺構を埋め戻した人為堆積層から一括して、土師器甕2点、須恵器坏5点、高台坏5点、蓋2点、鉢2点などが出土した。須恵器坏の器形は逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施すものが主体である。高台坏は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひらく。蓋はつまみが擬宝珠形で、天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器坏、高台坏、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI78 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

## 2. 自然堆積土等からまとまって出土した遺物

【SI29 竪穴建物跡堆積土出土土器】床面から土師器甕が2点出土したが、ほかに検討に耐える土器が出土していないため、堆積土1～7層から出土した土器も検討する。土師器坏2点、高台坏1点、蓋1点、鉢2点、須恵器坏22点、高台坏14点、盤2点、高坏1点、蓋11点を図化した。土師器坏はロクロ成形で内面黒色処理である。器形が分かるものは出土していない。須恵器坏の器形は逆台形で、切離し技法・調整はヘラ切り後にナデを施すものを主体として、再調整（手持ちケズリ）、ヘラ切り無調整がある。底部糸切りのものは22点中、2点ある。また、1点は双耳坏である。高台坏、盤は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひらく。蓋は天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器坏、高台坏、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI24 b 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI60 竪穴建物跡 K 1 土坑出土土器】 K 1 土坑の自然堆積土から土師器高台皿 2 点、床から土師器甕 2 点、須恵器坏 1 点が出土した。須恵器坏の器形は口径に対して底径が小さく、器高が高いもので、底部の切離し・調整は回転糸切りである。

上記のような特徴をもつ須恵器坏は、壇の越遺跡 SI2227 住居跡など、高台皿は、壇の越遺跡 SI2222B 住居跡（加美町教育委員会 2005）などから出土している。年代については、壇の越遺跡 SI2227 住居跡が 9 世紀後葉、壇の越遺跡 SI2222B 住居跡が 10 世紀前葉と考えられている。したがって、SI60 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

#### 【SD2-3 層出土土器】

河川の自然堆積層から土師器碗、鉢、甗、須恵器坏、高台坏、盤、高坏、瓶類、壺、甕が出土した。須恵器坏は器形が逆台形と口径に対して底径が小さいものがある。底部の切離し・調整は、前者がヘラ切り後にナデを施すものと回転糸切り、後者が回転糸切りである。高台坏、盤は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひらく。

上記のような特徴をもつ須恵器坏、高台坏は、壇の越 SI2224・2289・2477 出土土器（加美町教育委員会 2005）がある。年代的には 9 世紀中葉～後葉に位置付けられている。したがって、SD2-3 層出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

#### 【SD2-4 層出土土器】

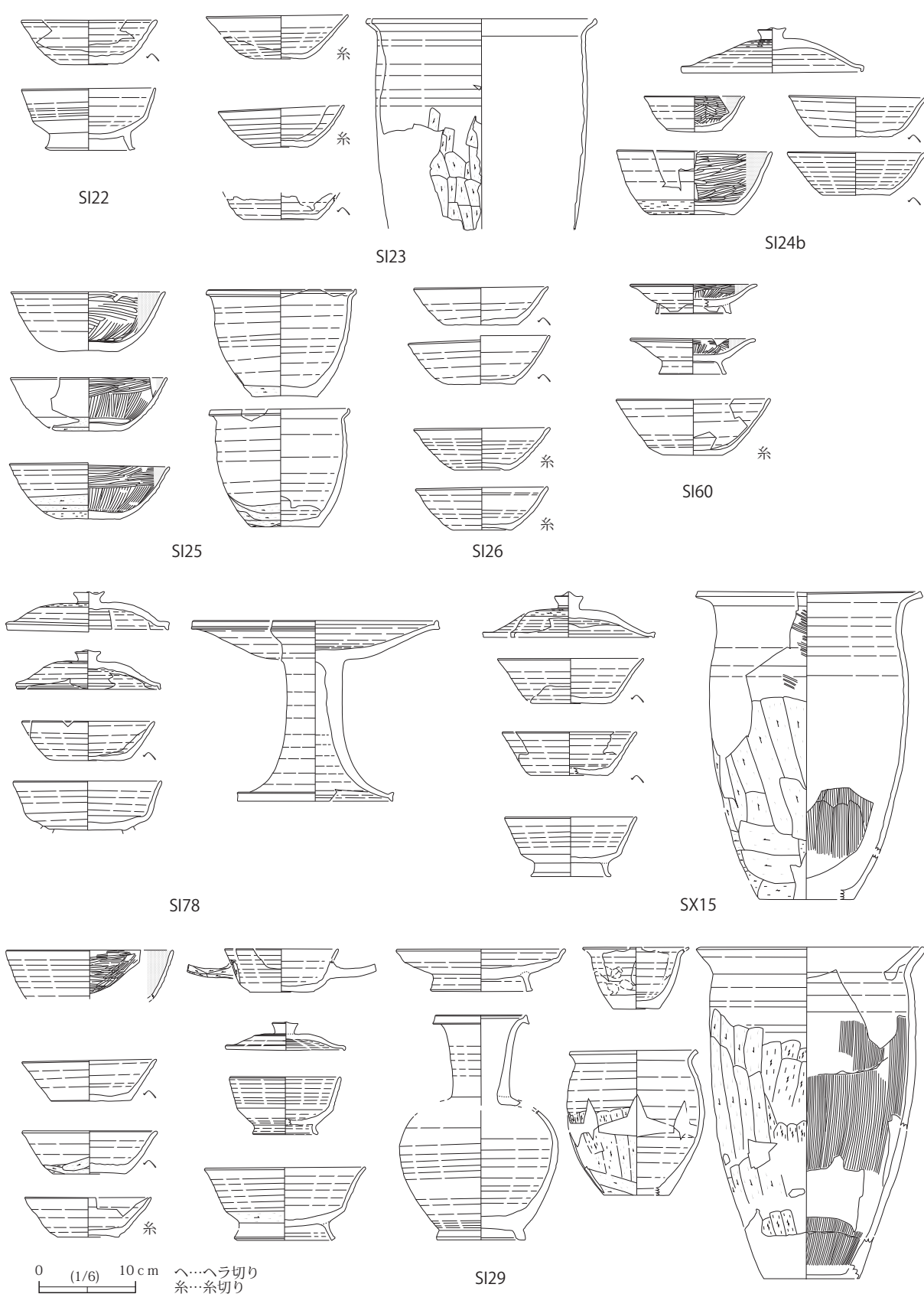
河川の自然堆積層から土師器坏、碗、盤、須恵器坏、高台坏、盤、高坏、蓋、甕が出土した。須恵器坏は器形が逆台形で、切離し技法はヘラ切りを主体として、ヘラ切り後にナデや手持ちケズリを施す。高台坏、盤は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひらく。蓋は口径から高台坏や盤とセットになる。蓋はつまみが擬宝珠形で、天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器坏、高台坏、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が 8 世紀後半～9 世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が 8 世紀末頃と考えられている。したがって、SD2-4 層出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

#### 【SX95 堆積層出土土器】

沢の自然堆積層 4 層から土師器甕、甗、須恵器坏、盤、高坏、蓋、鉢、長頸瓶、壺、甕、赤焼き土器台付鉢、器台などが出土した。須恵器坏の器形は、逆台形、口径に対して底径が小さいものがある。底部の切離し・調整は、前者がヘラ切り後にナデ、後者が回転糸切りである。赤焼き土器は大形の器種が複数出土している。

上記のような特徴をもつ須恵器坏は、これまで検討してきた坏のうち、新旧どちらの特徴も認められる。赤焼き土器は壇の越遺跡 SI2222B 住居跡など 10 世紀前葉と考えられる遺構で出土しているほか、多賀城では第 61 次調査鴻の池第 10 層（多賀城跡調査研究所 1992）から須恵系土器の大形の器種が出土しており、10 層が灰白色火山灰の下層であることと、土器の特徴の検討とを合わせて 9 世紀後半代と考えられている。



第 161 図 年代の検討資料

### (3) 瓦摺類についての総括

今回、彦右工門橋窯跡の調査で出土した瓦摺類は、窯跡に伴う製品ではなく、竪穴建物跡のカマド補強材や周溝蓋として転用されたもの、もしくは溝・土坑埋め土から出土したものなどで、いずれも二次的な使用・出土状況からなる資料である。したがって以下では、出土状況と瓦摺の種類について整理し、軒瓦類について若干の検討を加えることでまとめとしたい。

#### 【出土状況】

転用された瓦：SI24・78 竪穴建物跡では、カマド袖の補強材として丸瓦・軒丸瓦が転用されていた。SI24 では玉縁を欠く丸瓦 2 点（K17・18）、SI78 では丸瓦（K14）と軒丸瓦の瓦当を欠いた丸瓦部（K15）が各 1 点使用されていた。いずれもカマド袖の前端を抑えるように、丸瓦の凸面を外側に向け玉縁部を上にした状態で設置されていた。SI29 竪穴建物跡では周溝の蓋として丸瓦 10 点、平瓦 1 点が転用されていた。

その他の瓦：SI22・90 竪穴建物跡、SK14・15・93 土坑、SD2 溝跡、等の遺構埋土や基本層（北区 I～VII 層）等から瓦摺類が出土しているが出土状況にまともはみられない。

これらの瓦摺類について、種別や残存状態を指標として抽出し、丸瓦 13 点、平瓦 13 点、軒丸瓦 10 点、軒平瓦 4 点、鬼板 5 点、不明道具瓦 5 点、計 50 点を図示した。出土状況は表 3 のとおりである。

表 3 図示した瓦摺類の出土状況

遺構	時期	丸瓦		平瓦		軒丸瓦			軒平瓦		鬼板			不明道具瓦		合計
		I	II	I	II	I	II	III	I	II	I	II	III	I	II	
SI22	II						1									1
SI24	I～II	2														2
SI29	II	4	6		1											11
SI78	I	1		1				1								3
SI90	I～II								1	1					1	3
SK14				1												1
SX15				1												1
SK93															1	1
SD2				3	4	1	1	1		1			1		1	13
SX95 1・3 層					1			1						1	1	4
検出面					1	1	3		1	1	1	1	1			10
合計		7	6	6	7	2	5	3	1	3	2	1	2	1	4	50

#### 【瓦の種類】

丸瓦：図示資料は 13 点で、いずれも玉縁付きである。焼成・技法から 2 種類が識別される

I：灰白色で軟質のもの：7 点（K8・9・10・11・14・17・18）

II：灰色で硬質のもの：6 点（K 1・2・4・5・6・7）

平瓦：図示資料は 13 点で、焼成・整形調整技法から 2 種類が識別される

I：灰白色で軟質 凹面に竹を編み込んだ摸骨状の圧痕がみられるものがある

：6 点（K16・29・31・38・49・50）

Ⅱ：灰色で硬質 凹面が縄叩目による仕上げのもの

：7点 (K3・21・35・36・37・39・46)

軒丸瓦：図示資料は10点で、このうち瓦当面の残るものが7点ある。

瓦当文様はすべて同範の一種類のみであるが、瓦当背面の調整に以下の2種類がある。

I：同心円アテ具痕跡があるもの：2点 (K12・30)

Ⅱ：ナデ仕上げによるもの：4点 (K13・32・40・42)

Ⅲ：瓦当背面の調整が不明のもの：4点 (K15・23・33・41)

軒平瓦：図示資料は4点で、瓦当文様はいずれも無文。

顎面は鋸歯文の1種類のみ。段顎部の幅に違いがあり2種類に分かれる。

I：顎の幅が広い(8cm)もの：1点 (K43)

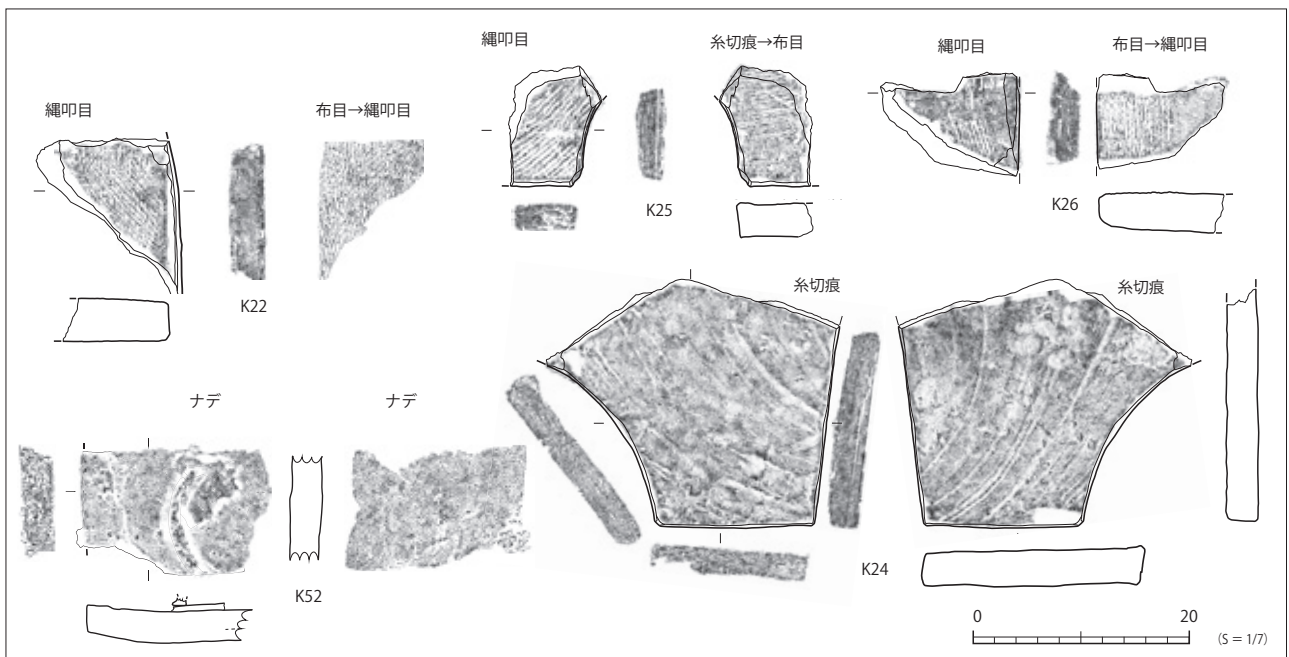
Ⅱ：顎の幅が狭い(6cm)もの：3点 (K19・44・45)

鬼板：図示資料は5(第162図)点で、いずれも破片資料である。扁平で脚部や側辺に丸みのあるものを鬼板として抽出した。文様のあるものはないが表裏の調整痕跡に以下の3種がみられる。

I：縄叩目・布目→縄叩目：2点 (K22・26)

Ⅱ：縄叩目・糸切痕→布目：1点 (K25)

Ⅲ：表裏とも糸切痕→ナデ：2点 (K24・52)

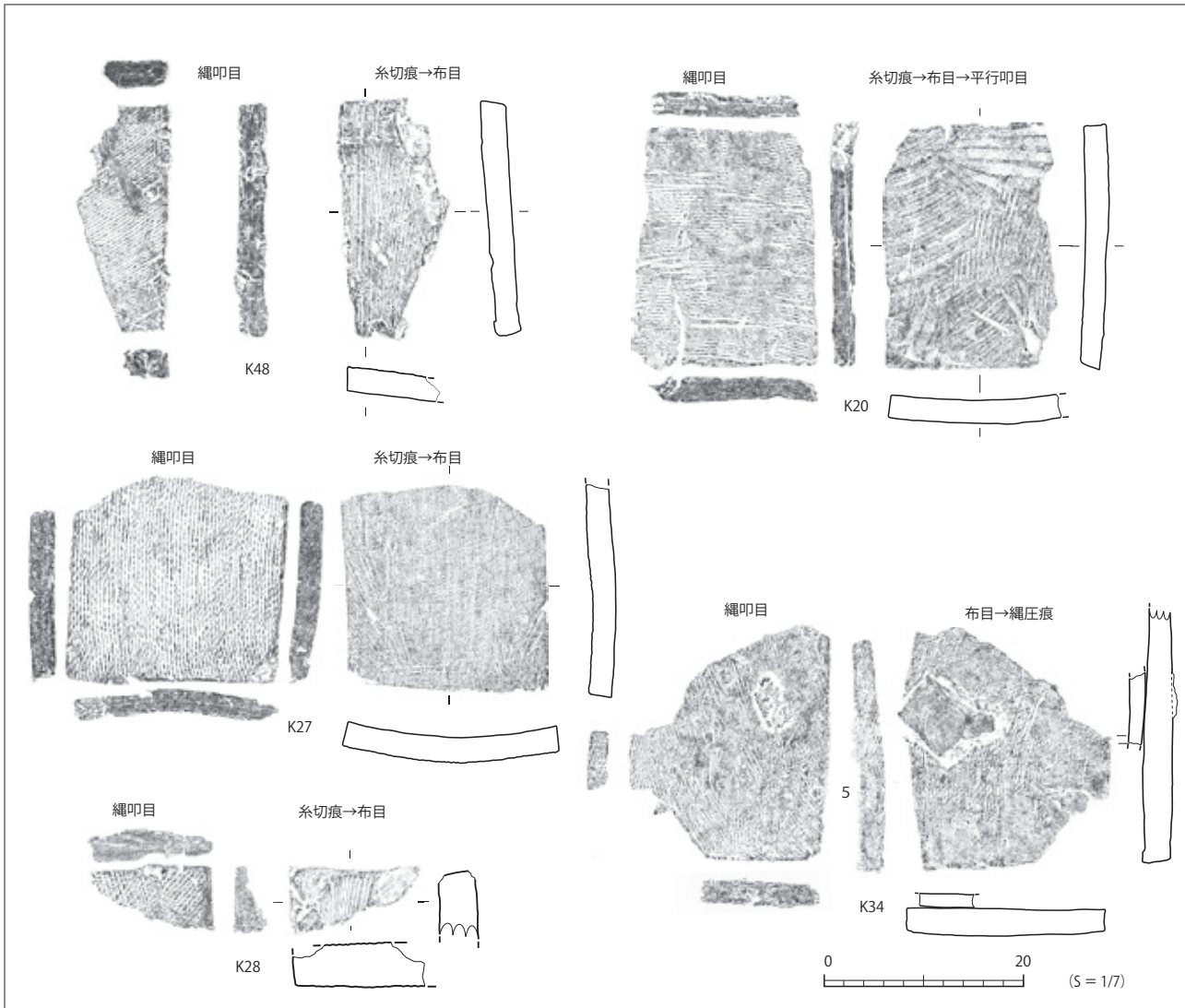


第162図 鬼板集成

用途不明道具瓦：図示したものは5点(第163図)。扁平でごくわずかな反りがある破片を道具瓦として一括した。いずれも破片資料で、須恵器の焼台に転用され、二次的被熱により焼け歪んだものが多い。法量にばらつきがあり、大きさの異なる熨斗瓦の可能性が高いが判然としない。凸面側はいずれも縄叩目で、凹面は糸切痕→布目を基本とし、その上に縄(K34)もしくは平行の叩板状の圧痕(K20)が加わるものがある。焼成から2種類が識別される。



- I : 灰白色で軟質 : 1点 (K27)  
 II : 灰色で硬質 : 4点 (K20・28・34・48)



第 163 図 道具瓦集成

【平瓦の製作技法について】

平瓦については、周辺の古代瓦窯で一般的な多賀城系の平瓦にはみられない2つの特徴が確認できる。一つは（I）の凹面にみられる竹を編み込んだ摸骨状の圧痕、もう一つは（II）の凹面の縄叩目である。（I）の摸骨状圧痕は、桶巻き作りの痕跡である可能性も残るが、凸面側縁に凹型台末端の痕跡がみられることから一枚作りの可能性が高い。凹面の摸骨状の圧痕は竹を編み込んだ素材からなる凸型台で成型された際の痕跡とみられる。（II）の凹面の縄叩目の痕跡は、ランダムに叩いたというよりは規則的に押し付けたような圧痕である。用途不明道具瓦にも同様の痕跡の見られるもの（K34）がある。

【軒丸瓦について】

図示したのは10点で、うち7点は瓦当文様が確認できる。確認された瓦当文様はすべて同範の一

種のみである。

#### 〈瓦当文様〉

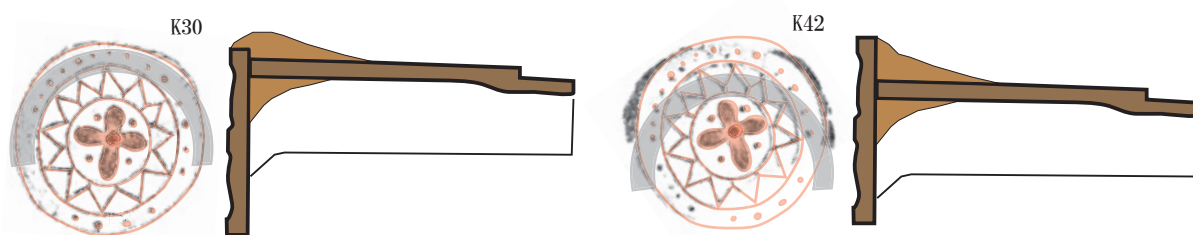
内区中央に四弁の花文を置き、圏線で区画された中区には 12 の山形の突起をもつ鋸歯状の隆線文が巡り、さらにその外側に 25 の珠文からなる外区が配されている（第 165 回 左上）。中央の四葉の花文は、ボタン状に盛り上がった中房から紡錘形の四葉が十字に配され、葉間には粒上の珠文が配されている。この文様については「珠文鋸歯文縁素弁蓮華文」との呼称があった（古川市 1990）が、本報告では「珠文縁素弁四葉蓮花文」と記載する。

模様の特徴として、四葉の長さが微妙に異なり、1 か所だけわずかに長い。周囲の鋸歯状の隆線文の山形部分は割り付けが均等でないため中心の四葉との位置関係が合わず、対称性が崩れている。外区の珠文は径 6mm のものが基本的に 2cm 間隔で配されているが、一部ではその間に径 3mm の小粒の珠文を入れ込んで、大小の珠文が交互に並ぶ部位もみられ、統一性が図られていない。

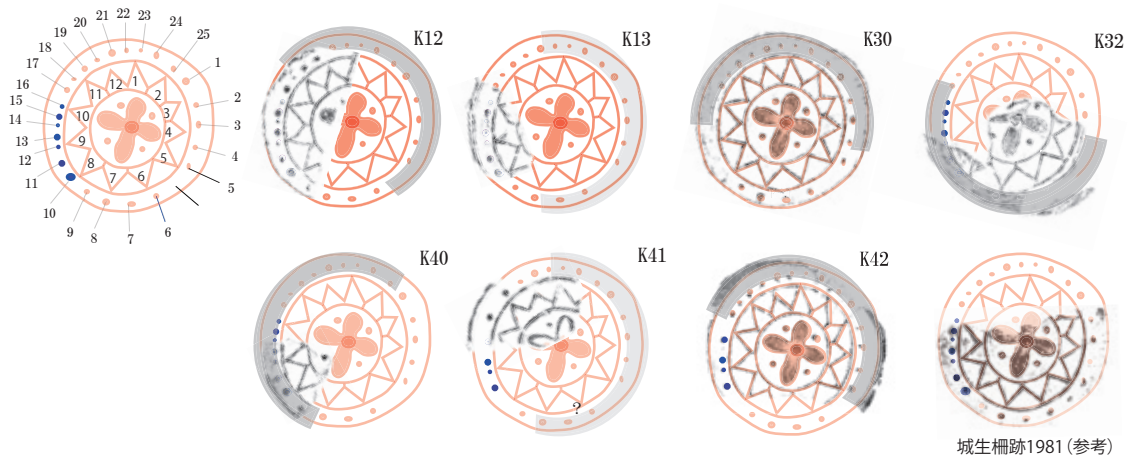
#### 〈製作方法〉

文様を彫り込んだ面径 16.5cm の円盤状の範に粘土塊を押し付けて展ばし、範からはみ出した周縁部を削り取って厚さ 1.5 ～ 2.0cm の円盤状の瓦当を作成する。範に粘土塊を押し付ける際に、須恵器甕などの内面整形に使用された同心円文様のあるアテ具を用いているものがある。次に円盤状の瓦当裏面の任意の位置に丸瓦を接合する。接合部の丸瓦の内外面に粘土を付加し、指で撫でつけて接合するが、丸瓦の外側に付加した粘土がみ出した部分は削り取らずに処理している。このため、丸瓦を瓦当外側寄りに接合したもの（K30）は瓦当面径が上方に広がり、丸瓦を瓦当内側寄りに接合したものの（K42）は瓦当面径が横方向に広がっている（第 164 図）。とくに（K42）は丸瓦凸面と瓦当上端の接合位置がずれているためあたかも鳥衾のような角度になる一方、瓦当面の両側に周縁帯が形成されるなど、個体によって瓦当面の仕上がりにばらつきがみられる。また、丸瓦と瓦当の接合位置が任意であるため、内区の四葉の葉の向きも、上下左右がまちまちである（第 165 図）。さらに周縁の珠文については粘土の押し付けがあまく、完全に描出できていない珠文もみられる。

以上のように全体的に、製作工程の自由度の高さをうかがうことができる。



第 164 図 軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合位置のバラエティー



第 165 図 瓦当と丸瓦の接合位置の比較

〈類例〉

同種の軒丸瓦は、加美町菜切谷廃寺跡・同城生柵跡と色麻町一ノ関遺跡、大崎市伏見廃寺跡、同名生館官衙遺跡出土資料に類例がある。瓦当文様細部を比較検討した結果、これらはいずれも同範であることが判明した（第 165 図 右下）。これら 5 遺跡は窯跡である当遺跡から北北西の旧加美郡・玉造郡内に所在し、一ノ関遺跡が 5km、城生柵跡・菜切谷廃寺跡が 10km、伏見廃寺跡・名生館官衙遺跡が 15km に位置する。

◆一ノ関遺跡 宮城縣史編纂委員會 1981 『宮城縣史 34 史料集 V』

◆城生遺跡 中新田町教育委員會 1981 『城生柵跡』中新田町文化財調査報告書第 5 集 p12

◆名生館官衙遺跡 古川市教育委員會 1990 『名生館官衙遺跡 X』古川市文化財調査報告書第 9 集 p37

古川市教育委員會 1994 『名生館官衙遺跡 XIV』古川市文化財調査報告書第 13 集 p28

◆伏見廃寺跡 未公表資料

◆菜切谷廃寺跡 未公表資料

〈特徴〉

周辺地域において、この種の瓦当文様の明確な系譜はたどれないが、鋸歯文+四葉蓮花文という組み合わせは福島県いわき市梅ヶ作瓦窯跡出土の素文鋸歯文複弁四葉蓮華文にみられる。鋸歯文と珠文の配置については平城宮系とされる多賀城軒丸瓦 230 の意匠との類似性がみられる。瓦の形態上の特徴としては、瓦当面周縁帯がなく、薄い円盤状を呈することが大きな特徴といえる。

【軒平瓦について】

図示したのは 4 点で、いずれも段顎である。顎の幅に違いはみられるが、いずれも瓦当文様はすべて無（素）文で、顎面には縄叩き後、手描きの鋸歯文が描かれている。

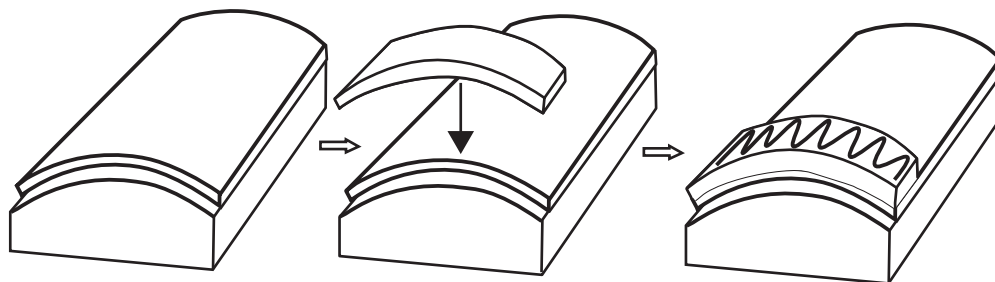
〈瓦当文様〉

いずれも瓦当面を削って平滑にした無（素）文の軒平瓦である。

### 〈製作技法〉

平瓦狭端凸面側に帯状の粘土を付加する。顎部と平瓦部の接合面に刻みなどの加工が加えられたものはない。接合した後、縄叩きにより再度顎上面を叩き締め、瓦当面を平滑に削り無文の瓦当面を作出する。最後に棒状工具により手描きで鋸歯文を施文する（第 166 図）。

なお、軒瓦については、軒丸・軒平とも単一の瓦当文様のみが確認されていることから、これら瓦当文様として組む可能性もあるが、出土状況にまとまりがなく断定はできない。



第 166 図 軒平瓦製作技法模式図

### 〈類例〉

同種の無文軒平瓦は、多賀城市多賀城跡・仙台市蟹沢中窯跡出土資料に類例がある。ただし、多賀城市・仙台市の類例は顎面に鋸歯文が無い点で彦右工門橋窯跡資料とは異なる。

#### ◆多賀城跡（軒平瓦 641）

宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』 p210 図版 330

#### ◆蟹沢中窯跡

古窯跡研究会 1972 『仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書』 研究報告第 1 冊  
【鬼板・道具瓦について】 鬼板を含む道具瓦についてはいずれも破片資料であるため詳しい比較検討ができない。文様を施さず縄叩目・布目や糸切痕跡を残す鬼板や熨斗瓦もしくは埴についてはこれまで周辺地域に類例が少なく、今後資料の増加を待って評価再検討する必要がある。

### 【まとめ】

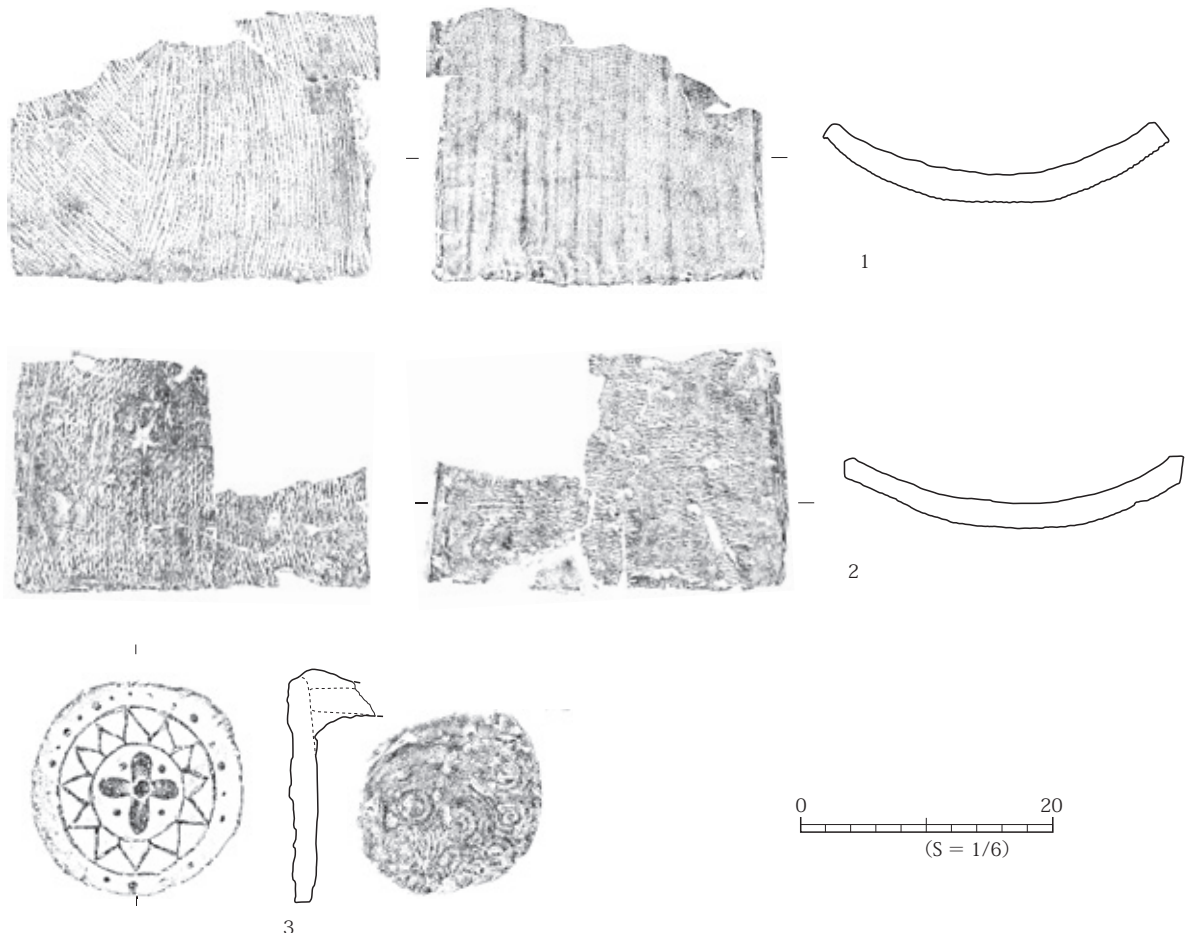
今回の調査における瓦に関する最大の成果は「珠文縁素弁四葉蓮花文」の生産地が大衡窯跡群内の彦右工門橋窯跡周辺にあることが確実となったことである。また、当該瓦の製作年代についても 8 世紀末～9 世紀初頭の土器群が使用された SI29・78 竪穴建物に限り、まとまりをもって転用されているという状況から、これらの出土土器とほぼ同じ時期の生産年代を想定することができたことも重要である。この制作年代想定は同種の瓦が出土した名生館官衙遺跡第 10 次調査 SK1166 の調査成果（古川市教委 1990 p37）とも整合する。

平瓦では、凹面に竹を編み込んだ摸骨状の圧痕（第 167 図－1）や、凹面の縄叩目（第 167 図－2）など、他に例のない製作技法上の顕著な特徴を見出せる。軒丸瓦でも瓦当背面に須恵器の成型に使われたのと同じ同心円アテ具痕跡がみられるもの（第 167 図－3）があり、やはり他に例のない製作技法がみられる。これらの特徴は彦右工門橋窯跡での瓦作りの重要な工程に、瓦を作りなれない須恵

器工人を含む工人が関与していた可能性を示唆している。さらに、軒丸瓦については、文様周囲に突出した縁帯が無いという、軒丸瓦本来の構成を逸脱した要素がみられ、彦右エ門橋窯跡の瓦の製作現場に軒丸瓦の型＝范制作に習熟した技術者がいなかった可能性も示している。文様全体から受ける稚拙な印象も、そうした状況に符合する。以上のように、「彦右エ門橋窯跡ならでは」ともいえる製作技法や軒丸瓦瓦当文様の在り方は、瓦専門工人の不足・欠落を補うため、須恵器工人を含む応急的な工人集団が瓦作りに携わったことで生み出された結果と考えられる。そこに彦右エ門橋窯の臨時的な瓦生産の実情が垣間見える。

遺跡の外に目を転ずると、軒丸瓦については、同じ范で作られた瓦が、色麻町一の関遺跡・加美町菜切谷廃寺跡・大崎市伏見廃寺跡から出土している。これら3遺跡はそれぞれ色麻・加美・玉造といった古代の宮城県北西部に置かれた郡の役所＝郡衙の付属寺院跡と考えられている。一方、同時代の国レベルの施設である、陸奥国府多賀城跡や多賀城廃寺跡、陸奥国分寺・国分尼寺跡では、彦右エ門橋窯跡の製品は確認されていない。これらのことから、彦右エ門橋窯跡の瓦生産は、主に色麻・賀美・玉造郡など宮城県北西部の郡衙付属寺院の屋根の補修など、限定的な需要に対応するために臨時的な生産体制が組まれた可能性が高いと考えられる。

最後に瓦の製作年代については、これらの瓦群を再利用した竪穴建物（SI24・78）がいずれも第I期段階のものであることから、第I期段階もしくはそれ以前に作成された瓦群と考えられる。同范



第 167 図 特徴的な製作技法

の軒丸瓦が出土した名生館官衙遺跡 SK1166 でも、共伴した土器群から 8 世紀末の年代が想定されており、本遺跡の在り方と矛盾しない。

時代背景としては、対蝦夷政策の強化、38 年戦争の遂行の最中であり、宮城県北部の城柵郡衙と付属寺院の修造・維持にも律令国家の威信をかけた心配りが行き届いた時代であった。彦右工門橋窯の瓦の供給体制を見ると、国府多賀城（政庁第Ⅲ期）と付属寺院、陸奥国分寺・国分尼寺の瓦は利府の春日大沢窯跡群や仙台市台原窯跡群で生産し、県北部の郡衙寺院跡の補修瓦は大衡窯跡群で生産する、という分業体制が成立していたと考えられる。

## 2. 遺構

彦右工門橋窯跡で発見した遺構は、掘立柱建物跡 3 棟、竪穴建物跡 14 棟、土坑 22 基、土師器焼成遺構 14 基、焼成土坑 10 基、溝 5 条、整地層 1 か所である。ほかに窪地、河川、堆積層も発見した。大部分の遺構は、出土遺物の年代から 8 世紀後半～10 世紀前葉のものと考えられる。以下では、各遺構の所属時期・年代を整理して、それぞれの概要や問題点について見ておきたい。

### (1) 遺構の時期

前項で示した検討対象遺物「1. 遺構に伴う一括性の高い遺物」「2. 自然堆積土等からまとも出土した遺物」の年代は 8 世紀後半～9 世紀初頭、9 世紀中葉～9 世紀後葉、9 世紀後葉～10 世紀前葉に分けられた。これらと遺構の新旧関係および灰白色火山灰層との前後関係を整理すると、I 期：8 世紀後半～9 世紀初頭、II 期：9 世紀中葉～9 世紀後葉、III 期：9 世紀後葉～10 世紀前葉となる。年代と重複関係を整理すると以下ようになる（第 168 図）。

#### I 期：≪8 世紀後半～9 世紀初頭≫

- ・遺構に伴う遺物の検討から、SI22、SI78、SI24b がこの時期に該当する。
- ・堆積土出土遺物の検討から、SI29、SD 2-4 層もこの時期と想定される。
- ・SX15 は I 期以前と想定される。
- ・遺構との重複関係から、SB24a、SB48 は I 期以前である。

#### II 期：≪9 世紀中葉～9 世紀後葉≫

- ・遺構に伴う遺物の検討から、SI23、SI26 がこの時期に該当する。
- ・堆積土出土遺物の検討から、SD 2-3 層もこの時期から III 期と想定される。
- ・遺構との重複関係から、SK36、SK45 は II 期以降である。

#### III 期：≪9 世紀後葉～10 世紀前葉≫

- ・遺構に伴う遺物の検討から、SI25、SI60 がこの時期に該当する。
- ・上記遺構の下限は灰白色火山灰降下以前の 10 世紀前葉である。
- ・堆積土出土遺物の検討から、SX95 もこの時期と想定される。

・遺構との重複関係から、SX4、SX16、SX17、SD11 はⅢ期以降である。

また、遺構、灰白色火山灰との重複関係から SD84、SD2-2 層はⅢ期より新しい。

なお、いずれの検討もできなかった遺構が複数含まれるが、各遺構の堆積土から出土した遺物は検討対象とした土器群の年代幅の中におさまることから、いずれもⅠ～Ⅲ期の遺構である可能性がある。

## (2) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は 14 棟発見した。SI22、SI24a、SI24 b、SI29、SI78 がⅠ期、SI23、SI26 がⅡ期、SI25、SI60 がⅢ期に属する。

Ⅰ期の竪穴建物跡のうち、SI22、SI24 b、SI78 でロクロ回転台の下部構造とみられるピット（ロクロピット）を発見した。SI29 の P 3 も同様のピットの可能性がある。また、SI24 bからは粘土塊・粘土の広がりが発見されている。彦右エ門橋窯跡の北西約 1.7kmに所在する日の出山窯跡群 C 地点では、2・4a・4b・7・8 号住居で同様のピットが、2・7・9 号住居の床面で粘土が確認されている。日の出山窯跡群 C 地点では、両者の存在から、住居（竪穴建物跡）が土器・瓦の製作・成形に関係した工房としての性格が想定されている。彦右エ門橋窯跡でも同様の状況を確認していることから、竪穴建物跡は土器、瓦製作にかかわった工人の住居、もしくは作業場・工房と想定できる。

Ⅱ期の SI23、SI26 では、ロクロ回転台の下部構造とみられるピット（ロクロピット）は見つかっていないが、粘土塊・粘土の広がりが発見されている。

Ⅲ期の SI25、SI60 では、Ⅱ期までみられていた粘土、Ⅰ期で確認できたロクロピットなどの、土器・瓦製作にかかわる痕跡はみられなくなる。

## (3) その他の遺構

### 【土師器焼成遺構】

土師器焼成遺構は 14 基発見した。竪穴建物跡と重複するものは、いずれも建物跡より新しい。年代は SX15 がⅠ期以前、SX 4 がⅢ期以降である。

平面形は、隅丸長方形、長楕円形、逆台形、二等辺三角形がある。長楕円形を除いて、いずれも各辺は直線的である。いずれの平面形も側壁にあたる辺が長く、奥壁・前壁にあたる辺が短くなる。奥壁はほかの壁と比べて直線的に立ち上がり、長さは、前壁の辺よりやや長くなる。対して前壁は、奥壁、さらには側壁と比べても壁が緩やかに立ち上がる。被熱範囲の分布は、おおむね奥壁側に偏る。原則、斜面上方に奥壁、斜面下方に前壁がつくられる。天井の有無やその構造は不明瞭である。SX 8 で焼成にかかわる層の上に天井に由来するとみられる土（SX8-14 層）が部分的に堆積した状態が確認できた程度である。遺構周囲に天井高架をうかがわせるような小ピットなども確認されていない。また、焼成土坑として報告した SK28、SK32、SK40、SK70、SK74、SK85、SK86 の 7 基は、奥壁の認定ができなかったため、土師器焼成遺構と報告しなかったが、遺構の検出状況から想定される規模や焼け面があることなどから、土師器焼成遺構であった可能性がある。

これらの遺構に伴う土師器片はほとんどが甕片である。出土した破片をみると、黒斑があるものは少なく、赤褐色であることから、酸化焰焼成で比較的高温で焼成されたと考えられる。

#### 【土坑】

SK9、SK10は、鉄滓が廃棄された小規模な土坑である。SK9はSK8、SX13より新しい。SK10は時期を限定できない。重複関係のあるSX13堆積土から輪羽口、隣接するSD11堆積土から椀形鍛冶滓が出土している。上記の土坑を含め、8区西隅周辺に鍛冶関連の遺構・遺物がまとまっているため、周辺で小鍛冶が行われていたとみられる。

#### 【焼成土坑】

SX12、SX16、SX17は下層に炭化物層がみられ、底面や側面に熱を受けた痕跡があった土坑である。平面形は、SX12が隅丸長方形、SX16、SX17が楕円形で、前壁と奥壁の区別がみられない。土坑は、底面上に炭化物層が比較的厚く堆積していたが、何を焼成していたかは不明である。

### 3. 遺跡の性格と変遷

I期を遡る遺物は縄文土器や石器以外出土していない。遺構の重複からは、I期以前の可能性が残るものがあるものの、出土遺物の状況から、I期を大きく遡らないとみられる。

#### 【I期：SB48、SI22、SI24a、SI24 b、SI29、SI78、SX15、SD 2-4層】

竪穴建物跡は須恵器を主とした土器・瓦製作にかかわった人々の住居、あるいは作業場・工房とみられる。土師器焼成遺構は、SX15で8世紀後半～9世紀初頭と考えられる土器がまとまって出土したことから、この時期以前に土師器の焼成が行われていたと考えられる。河川跡SD 2-4層では竪穴建物跡から出土した須恵器と同じ特徴をもつものが大量に出土した。遺物は主に土師器、須恵器、瓦である。とくにI期は須恵器が多く、瓦も出土していることが特徴として挙げられる。須恵器は坏のみでなく、高台坏や盤などの高台の付く器種や硯がある。須恵器には、底部のひび割れや高台の剥がれ、焼け歪みなどが多くみられる。これらの遺構の特徴、遺物の出土状況から、付近に須恵器を焼成した窯跡が存在したと推定できる。

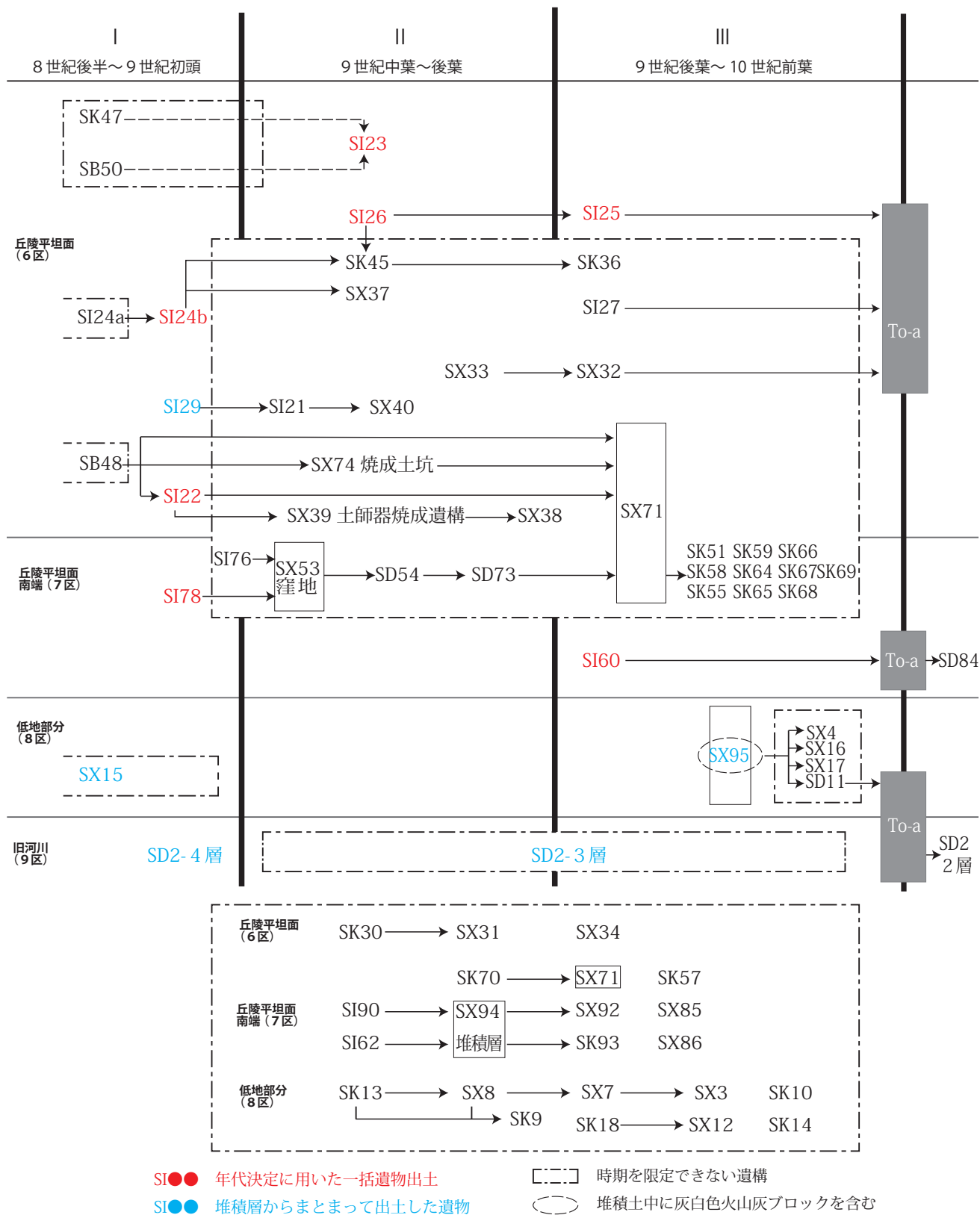
I期は、丘陵上（6・7区）が、土器・瓦製作の作業場・工房にかかわる場、低地（8区）が土師器焼成の場として利用されている。なお、調査地点の北東400mほどには、8世紀後半とされる彦右工門橋窯跡SR 1（宮城県教育委員会1997）が位置する。

#### 【II期：SI23、SI26 III期：SI25、SI60、SX95】

II期の竪穴建物跡では、粘土の広がり・粘土塊を発見したが、I期とは異なり、ロクロピットは見つかっていない。

III期の竪穴建物跡では、土器製作の痕跡がみられなくなる。低地（8区）では、沢部分にSX95堆積層が形成される。河川跡ではSD 2-3層から大量の須恵器が出土している。III期は、丘陵上（6・7区）は竪穴建物跡がつけられる。低地部分では沢に堆積層が形成されるとともに、土師器の焼成の場としての利用が確認できる。河川出土の須恵器坏は底部がひび割れているものが多いため、不良品





第 168 図 遺構の年代・新旧関係

が廃棄されたものであろう。

#### 4. まとめ

(1) 彦右エ門橋窯跡の遺跡範囲西側を南北に縦断して調査した。その結果、遺構はⅠ期：8世紀後半～9世紀初頭、Ⅱ期：9世紀中葉～後葉、Ⅲ：9世紀後葉～10世紀前葉のものがあり、過去の調査と合わせると、奈良・平安時代の土師器・須恵器生産にかかわる遺跡であることが判明した。

(2) 遺跡はⅠ期が土器・瓦製作、土師器焼成の場、Ⅱ・Ⅲ期は竪穴建物跡がある。

(3) Ⅰ期の遺構や河川からは、高台坏・蓋、双耳坏、盤、硯（円面硯・風字硯）などを含む多様な器種からなる大量の須恵器が出土した。その一方で焼け歪みや底切れ、高台のひびなどが多いといった特徴がある。それらは窯跡の製品であると考えられる。

(4) 珠文鋸歯文縁素弁四葉蓮華文軒丸瓦をはじめ、彦右エ門橋窯跡出土の瓦は共伴関係が明らかかなものはⅠ期の遺構に限られることから、須恵器生産を主とする傍ら限定的な需要に応えるかたちで、瓦を生産していたと考えられる。

#### 参考文献

大衡村教育委員会 1995 『亀岡遺跡』大衡村文化財調査報告書第1集

加美町教育委員会 2005 『壇の越遺跡』Ⅶ加美町文化財調査報告書第5集

古窯跡研究会 1972 『仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書』 研究報告第1冊

東北学院大学考古学研究部 1979 『温故』昭和53年度 第12号

中新田町教育委員会 1981 『城生柵跡』中新田町文化財調査報告書 第5集 p12

古川市教育委員会 1990 『名生館官衙遺跡』Ⅹ 古川市文化財調査報告書第9集

古川市教育委員会 1994 『名生館官衙遺跡ⅩⅣ』古川市文化財調査報告書 第13集

宮城県教育委員会 1980 『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅱ宮城県文化財調査報告書第63集

宮城県教育委員会 1981 『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集

宮城県教育委員会 1983 『東北自動車道遺跡調査報告書』8 宮城県文化財調査報告書第93集

宮城県史編纂委員会 1981 『宮城県史34 史料集Ⅴ』

宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』



# 写真図版



1. 彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡 全景（南から）



2. 彦右工門橋窯跡 全景（北から）

図版1 遺跡全景



1. 6区 全景（南東から）



2. 6区 調査区全景（西から）

図版2 6区 全景



1. 7区 全景（南東から）



2. 7区 調査区全景（南から）

図版3 7区 全景



1. 8・9区 全景（南から）



2. 8・9区 全景（西から）

図版4 8・9区 全景





1. SB48 掘立柱建物跡 検出 (南から)



2. SB48 掘立柱建物跡 P2 断面 (西から)



3. SB48 掘立柱建物跡 P1 断面 (西から)



4. SB48 掘立柱建物跡 P4 断面 (南から)



5. SB50 掘立柱建物跡 P1 (P14) 断面 (東から)



6. SB79 掘立柱建物跡 検出 (南から)



7. SB79 掘立柱建物跡 P1 断面 (南から)



8. SB79 掘立柱建物跡 P3 断面 (南から)

図版5 SB48・50・79 掘立柱建物跡



1. SI21 竪穴建物跡 完掘 (南から)



2. SI21 竪穴建物跡 検出 (南から)



3. SI21 竪穴建物跡 カマド残存状況 (南から)



4. SI21 竪穴建物跡 K1 土器出土状況 (南から)



5. SI21 竪穴建物跡 K1 土坑断面 (西から)

図版 6 SI21 竪穴建物跡



1. SI22 竪穴建物跡 完掘（南東から）



2. SI22 竪穴建物跡 検出（南西から）



3. SI22 竪穴建物跡 断面（南西から）



4. SI22 竪穴建物跡 カマド1 完掘（南から）



5. SI22 竪穴建物跡 カマド2 完掘（南から）

図版7 SI22 竪穴建物跡



1. SI22 竪穴建物跡 完掘（北から）



2. SI22 竪穴建物跡 カマド3断面（西から）



3. SI22 竪穴建物跡 ロクロピット1断面（南から）



4. SI22 竪穴建物跡 ロクロピット2・K9断面（北から）



5. SI22 竪穴建物跡 K8断面（西から）

図版8 SI22 竪穴建物跡



1. SI23 竪穴建物跡 完掘（西から）



2. SI23 竪穴建物跡 カマド完掘（西から）



3. SI23 竪穴建物跡 床粘土（北から）



4. SI23 竪穴建物跡 掘方鋤痕（南から）



5. SI23 SB50 SA49 SK47（南から）

図版9 SI23 竪穴建物跡



1. SI24b 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. SI24b・SK36・SX37・SK45 検出（南から）



3. SI24b 竪穴建物跡 P6 ロクロピット断面（東から）



4. SI24b 断面



5. SI24b 竪穴建物跡 カマド下暗渠須恵器甕出土状況（南東から）

図版 10 SI24b 竪穴建物跡



1. SI24a 竪穴建物跡 全景（南から）



2. SI24a 竪穴建物跡断面（西から）



3. SI24a 竪穴建物跡 カマド完掘（西から）



4. SI24b 竪穴建物跡 南半検出（南から）



5. SI24b 竪穴建物跡 カマド（南から）



6. SI24b 竪穴建物跡 煙道入口土師器甕出土状況（東から）



7. SI4b 煙道掘方（西から）



8. SK36・SK45・SI24b 煙道・掘方断面（南から）

図版 11 SI24a・b 竪穴建物跡・SK36・45



1. SI25 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. SI25 竪穴建物跡 検出（南から）



3. SI25 竪穴建物跡 断面（南東から）



4. SI25 竪穴建物跡 カマド完掘（南から）



5. SI25 竪穴建物跡 カマド掘方（南東から）

図版 12 SI25 竪穴建物跡

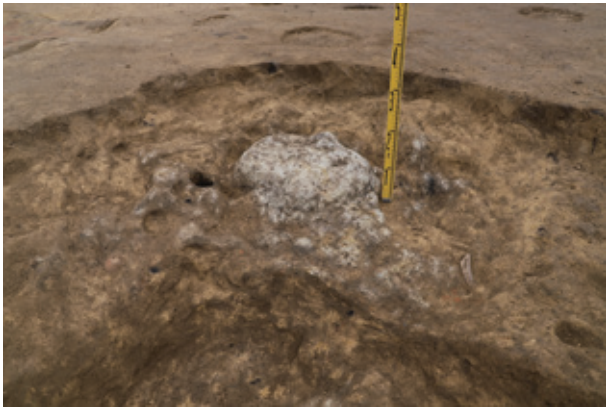




1. SI26 竪穴建物跡 完掘（北から）



2. SI26 竪穴建物跡 カマド完掘（北東から）



3. SI26 竪穴建物跡 粘土塊（北東から）



4. SI27 竪穴建物跡 完掘（西から）



5. SI29 竪穴建物跡 遺物出土状況（東から）

図版 13 SI26・27・29 竪穴建物跡



1. SI29 竪穴建築跡 検出（南から）



2. SI29 竪穴建物跡 断面（南東から）



3. SI29 竪穴建物跡 カマド



4. SI29 竪穴建物跡 カマド下部暗渠瓦（北から）



5. SI29 竪穴建物跡 壁周溝瓦（西から）



6. SI29 竪穴建物跡 P3 断面（西から）



7. SI29 竪穴建物跡焼け面（南から）



8. SI29 竪穴建物跡 K6 断面（西から）

図版 14 SI29 竪穴建物跡



1. SI60 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. SI60 竪穴建物跡 断面（南から）



3. SI60 竪穴建物跡 カマド完掘（南西から）



4. SI60 竪穴建物跡 煙道検出（南から）



5. SI60 竪穴建物跡 煙道完掘（北から）

図版 15 SI60 竪穴建物跡



1. SI60 竪穴建物跡 カマド (南から)



2. SI62 竪穴建物跡 検出 (南から)



3. SI62 竪穴建物跡 焼け面断面 (西から)



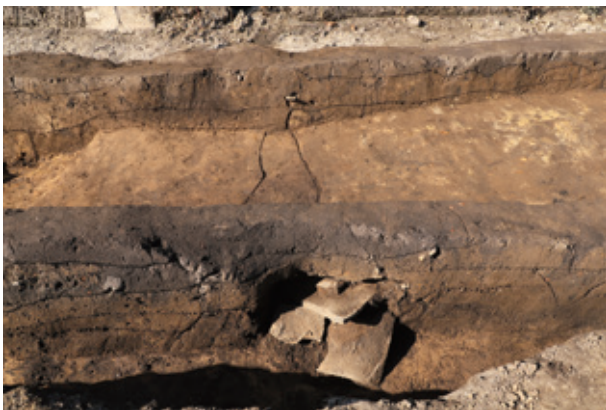
4. SI76 竪穴建物跡 完掘 (南から)



5. SI76 竪穴建物跡 P2・P4 断面 (南から)



6. SI90 竪穴建物跡 完掘 (南から)



7. SI90 竪穴建物跡 断面と瓦 (南から)



8. SI90 竪穴建物跡 軒平瓦検出 (南から)

図版 16 SI60・62・76・90 竪穴建物跡



1. SI78 竪穴建物跡 完掘（南東から）



2. SI78 竪穴建物跡 検出（南から）



3. SI78 竪穴建物跡 煙道断面（東から）

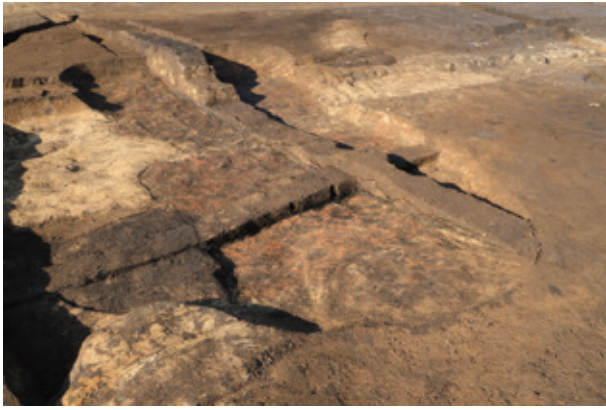


4. SI78 竪穴建物跡 カマド完掘（南から）



5. SI78 竪穴建物跡 P1 ロクロピット断面（南から）

図版 17 SI78 竪穴建物跡



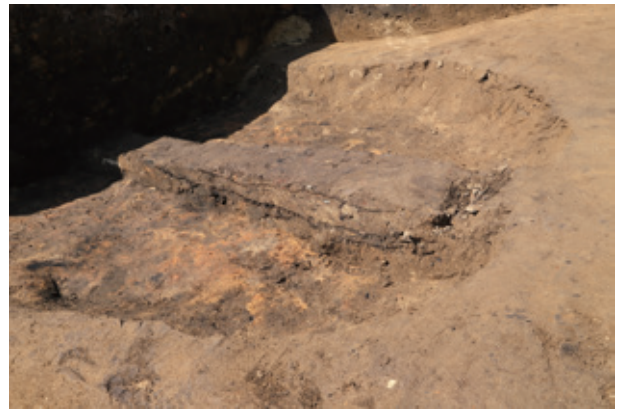
1. SX3・SX7 土師器焼成遺構 断面（南西から）



2. SX4 土師器焼成遺構 断面（西から）



3. SX8 土師器焼成遺構 断面（南から）



4. SX15 土師器焼成遺構 完掘（東から）



5. SK30 土坑・SX31 土師器焼成遺構 完掘（東から）



6. SX34 土師器焼成遺構 完掘（南から）



7. SK32 焼成土坑、SX33 土師器焼成遺構 検出（東から）



8. SK32 焼成土坑、SX33 土師器焼成遺構 断面（東から）

図版 18 土師器焼成遺構



1. SX37 土師器焼成遺構 炭層検出 (南から)



2. SX38・SX39 土師器焼成遺構 完掘 (南から)



3. SK40 焼成土坑 断面 (東から)



4. SK74 焼成土坑 完掘 (南から)



5. SX82 土師器焼成遺構 完掘 (南から)



6. SK85・SK86 焼成土坑 検出 (北から)



7. SX92 土師器焼成遺構 断面 (西から)



8. SX92 土師器焼成遺構 完掘 (南から)

図版 19 土師器焼成遺構・焼成土坑



1. SK12 焼成土坑 断面（南から）



2. SK16 焼成土坑 完掘（南から）



3. SK17 焼成土坑 断面（東から）



4. SK9 土坑 完掘（西から）



5. SK10 土坑 断面（東から）



6. SK14 土坑 完掘（東から）



7. SK14 土坑 須恵器高台坏出土（北東から）

図版 20 土師器焼成遺構・焼成土坑・土坑





1. SX71 (東から)



2. SX71 断面 (北東から)



3. SK56 土坑 土器出土状況 (東から)



4. SK65 土坑 断面 (東から)



5. SK66 土坑 断面 (南から)



6. SK67 土坑 断面 (東から)



7. SK68 土坑 断面 (西から)



8. SK69 土坑 検出 (南から)

図版 21 整地層・土坑



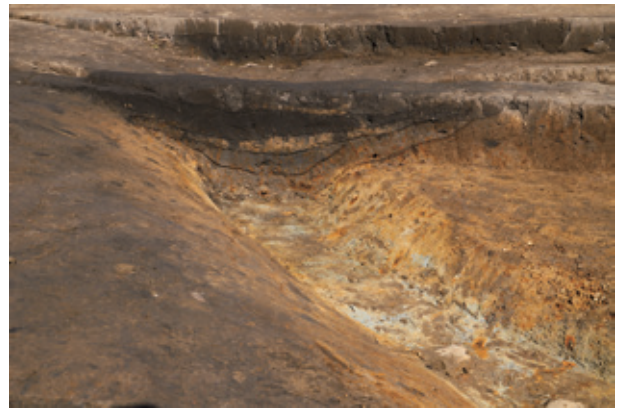
1. SX95 検出 (東から)



2. SX95 D-D' 断面 (北東から)



3. SD54 遺物出土状況 (西から)



4. SD11 溝 断面 (南から)



5. SK47 土坑 検出 (南から)



6. SK47 土坑 断面 (西から)

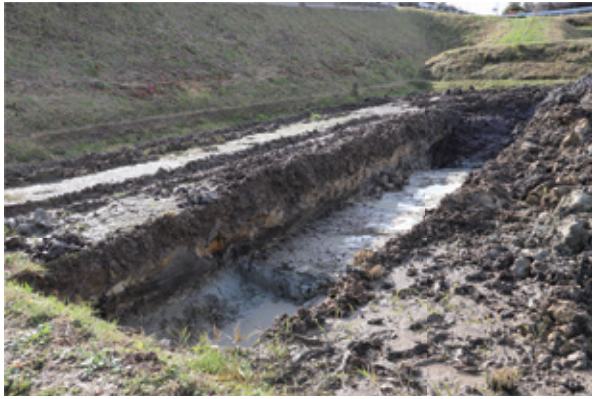


7. SD2 河川跡 断面 (南から)

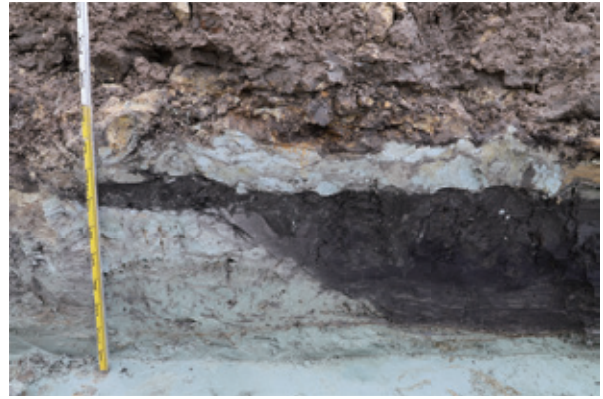


8. SD2 河川跡 3層灰白下出土状況 (南から)

図版 22 土坑・溝・河川



1. T3 沢完掘後全景（北から）



2. T3 沢完掘後東壁（西から）



3. T15 調査区北壁（南から）



4. 1区調査前風景



5. 3区調査前全景（南から）



6. T1（北から）



7. T5・T9 SD1 完掘（北西から）



8. T9 SD1 調査区東壁（北西から）

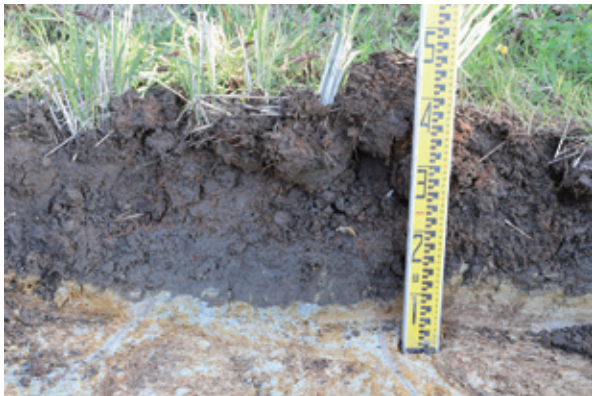
図版 23 彦右工門橋窯跡 1区・3区



1. 4区調査前風景（南から）



2. T1～T4ブロック（北から）



3. T1 調査区東壁（西から）



4. T5 沢検出状況（南から）



5. T5 沢完掘（南から）



6. T5 調査区西壁（東から）



7. 5区全景（南から）



8. 5区調査区東壁（西から）

図版 24 彦右工門橋竅跡4区・5区



1. 10区調査区全景（北から）



2. T1（南から）



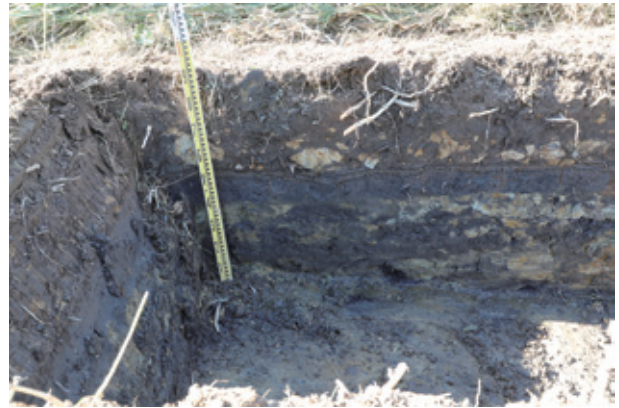
3. 11区調査区全景（南から）



4. T1 沢付近（北東から）



5. T2（北から）



6. T2 西壁南端（東から）



7. T3（北から）

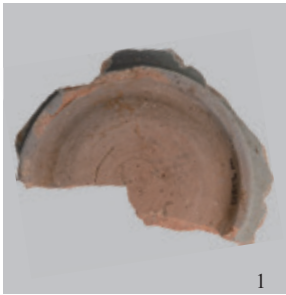


8. T4 西壁北端（東から）

図版 25 彦右工門橋窯跡 10区・11区



SI22 集合写真



1



2



3



4



5



6



7

図版 26 SI21・22 出土遺物



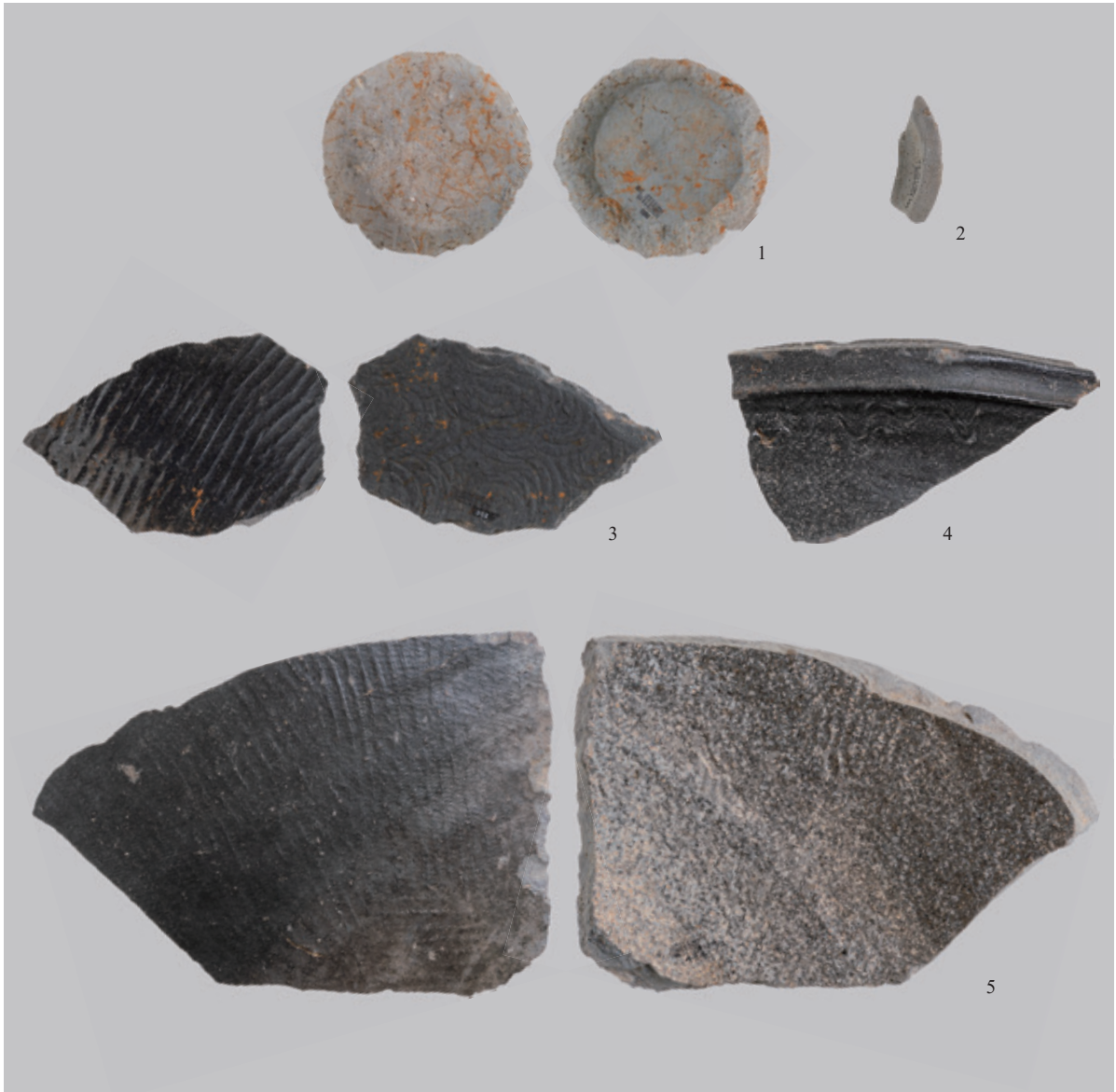
1 : S=1/4

図版 27 SI22 出土遺物 (1)



图版 28 SI22 出土遺物 (2)





图版 29 S122 出土遺物 (3)



SI23 集合写真



SI26 集合写真



図版 30 SI23・26 出土遺物



SI24 集合写真

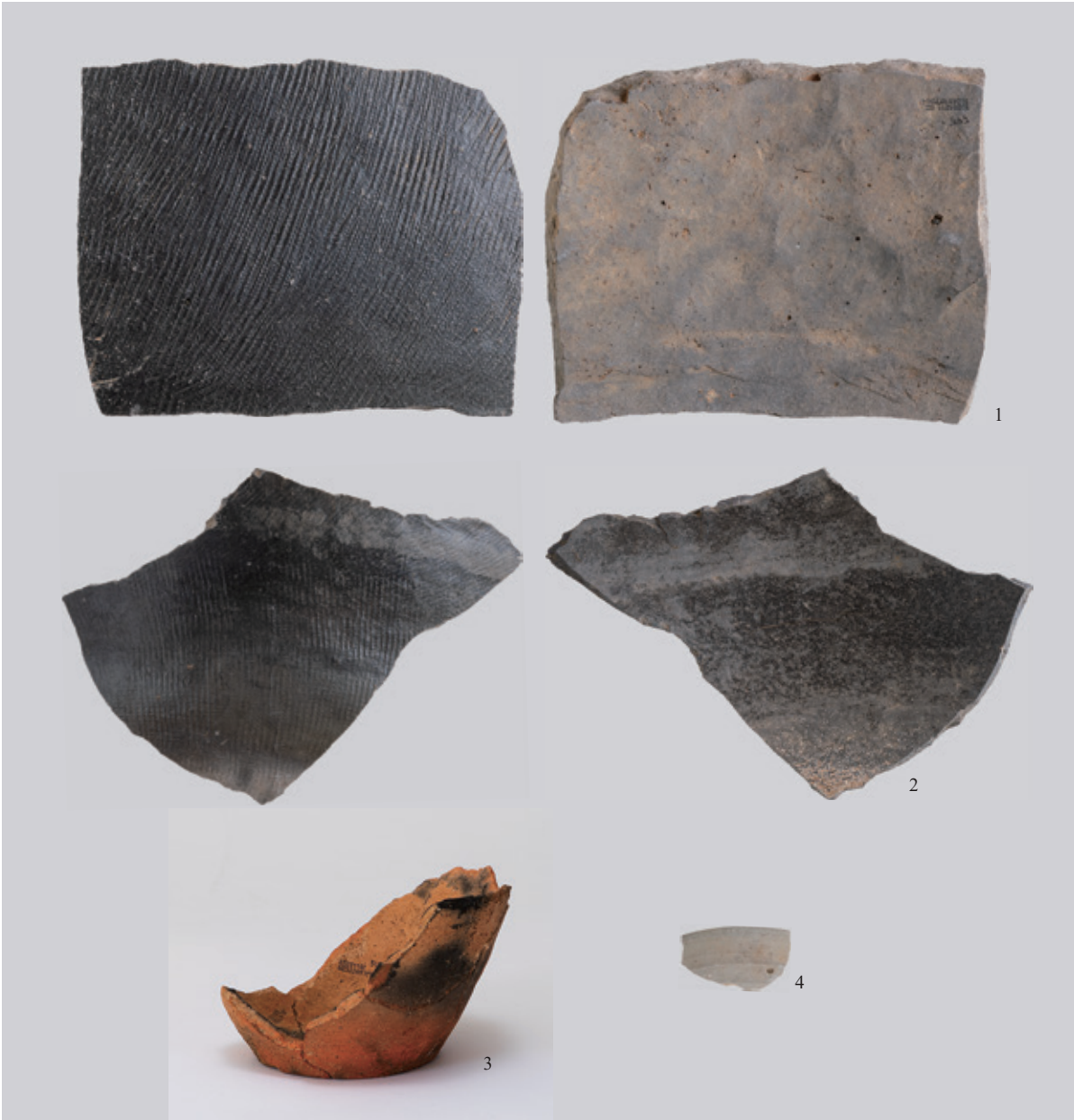


図版 31 SI24b 出土遺物 (1)



1・2:S=1/4, 3・4:S=1/6

図版 32 S124b 出土遺物 (2)



1 : S=1/4, 2 : S=1/6, 3 · 4 : S=1/3

图版 33 SI24b 出土遺物 (3)



SI25 集合写真



1



2



3



4



5



6

图版 34 SI25 出土遺物 (1)



1・3・4 : S=1/4, 2 : S=1/3

図版 35 S125 出土遺物 (2)



SI29 集合写真



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

图版 36 SI29 出土遺物 (1)





图版 37 S129 出土遺物 (2)



1



2



3



4



5



6



7



8

図版 38 S129 出土遺物 (3)



2・3：S=1/4

図版 39 SI29 出土遺物 (4)



图版 40 SI29 出土遺物 (5)



图版 41 S129 出土遺物 (6)



SI60 集合写真



1



2



3



4



5



6

図版 42 SI60 出土遺物 (1)



1



2



3



4



5

5 : S=1/4



6



7

图版 43 SI60 出土遺物 (2)



1-3 : S=1/4

图版 44 S160 出土遺物 (3)





SI78 集合写真



1



2



3



4



5



6



7



8

図版 45 SI78 出土遺物 (1)



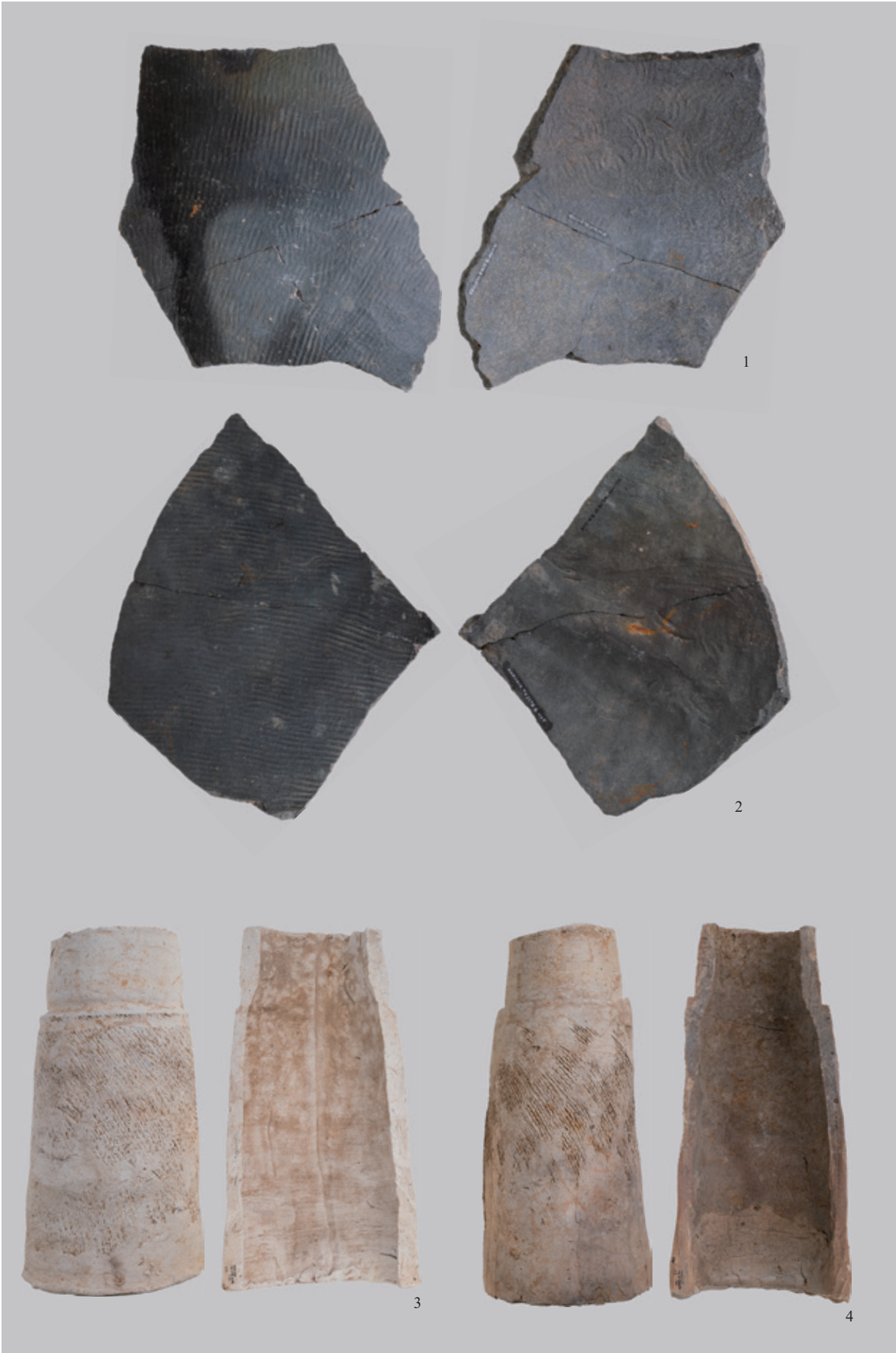
1・2・4：S=1/4

図版 46 S178 出土遺物 (2)



1・2：S=1/4

図版 47 SI78 出土遺物 (3)



1-2 : S=1/4, 3・4 : S=1/6

図版 48 S178 出土遺物 (4)



7-9 : S=1/6

図版 49 SI62・76・90 竪穴建物跡 出土遺物



2-5 : S=1/4

图版 50 SX4・8・SK9・13 出土遺物



图版 51 SX4·15·34 出土遺物

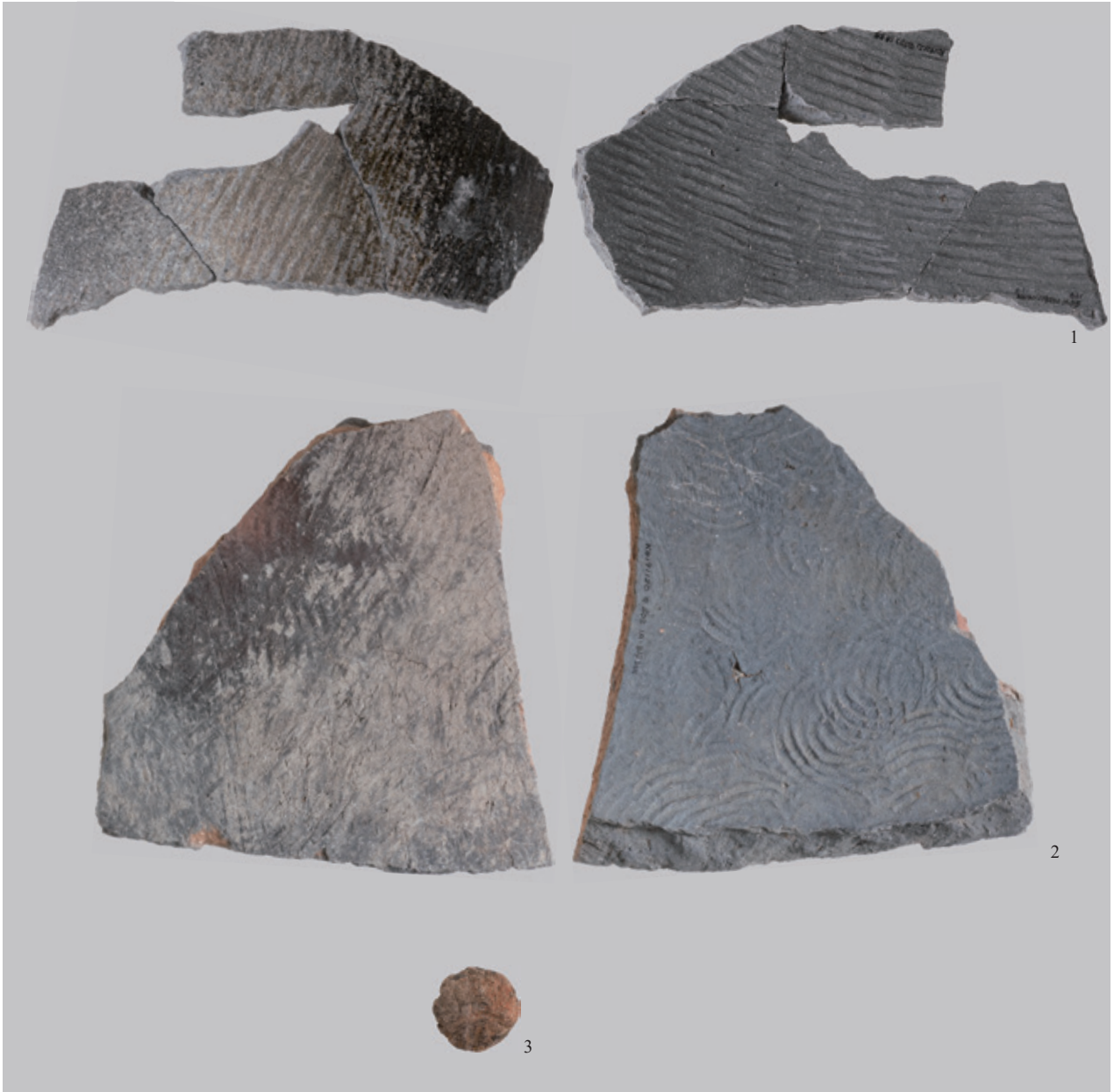


图版 52 SK12 · 32 · 47 · 66 · SX38 · 92 出土遺物





図版 53 SX16・SX53・SD2 大別 1層 出土遺物 (1)



图版 54 SD2 大别 1 层 出土遗物 (2)



SD2 大別3層 集合写真



図版 55 SD2 大別3層 出土遺物 (1)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

図版 56 SD2 大別 3 層 出土遺物 (2)



1



2

1・2 : S=1/6

図版 57 SD2 大別 3層 出土遺物 (3)



SD2 大別4層 集合写真



図版 58 SD2 大別4層 出土遺物 (1)



8・9：S=1/6

図版 59 SD2 大別 4 層 出土遺物 (2)



SX95 集合写真



图版 60 SX95 出土遺物 (1)





图版 61 SX95 出土遺物 (2)



1



2



3



5



4



6



7

5-7 : S=1/4

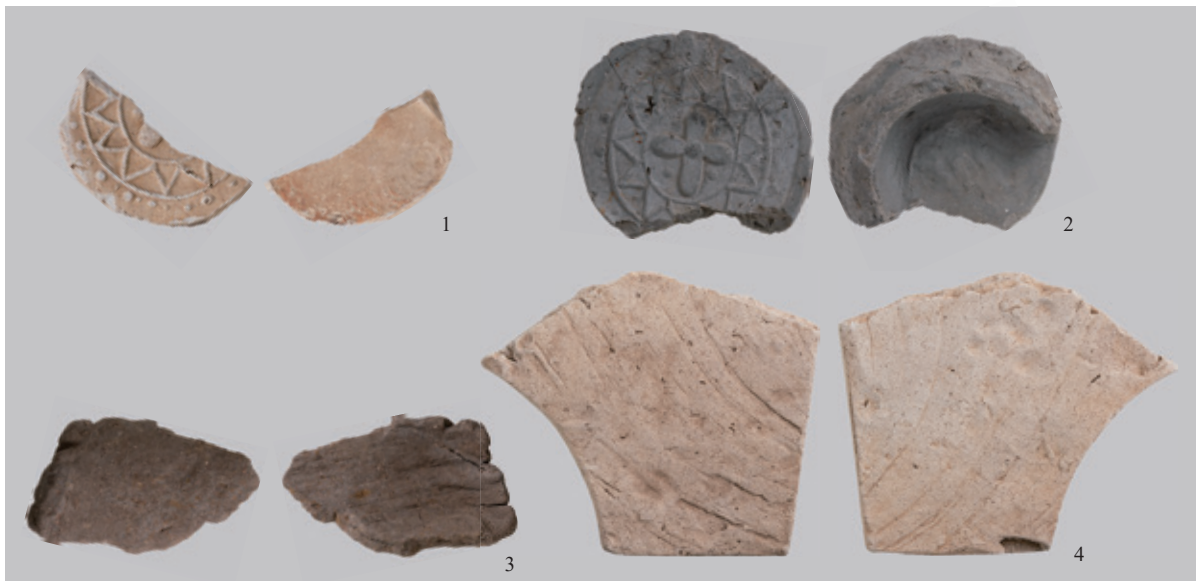
图版 62 SX95 出土遺物 (3)



图版 63 SX95 出土遺物 (4)

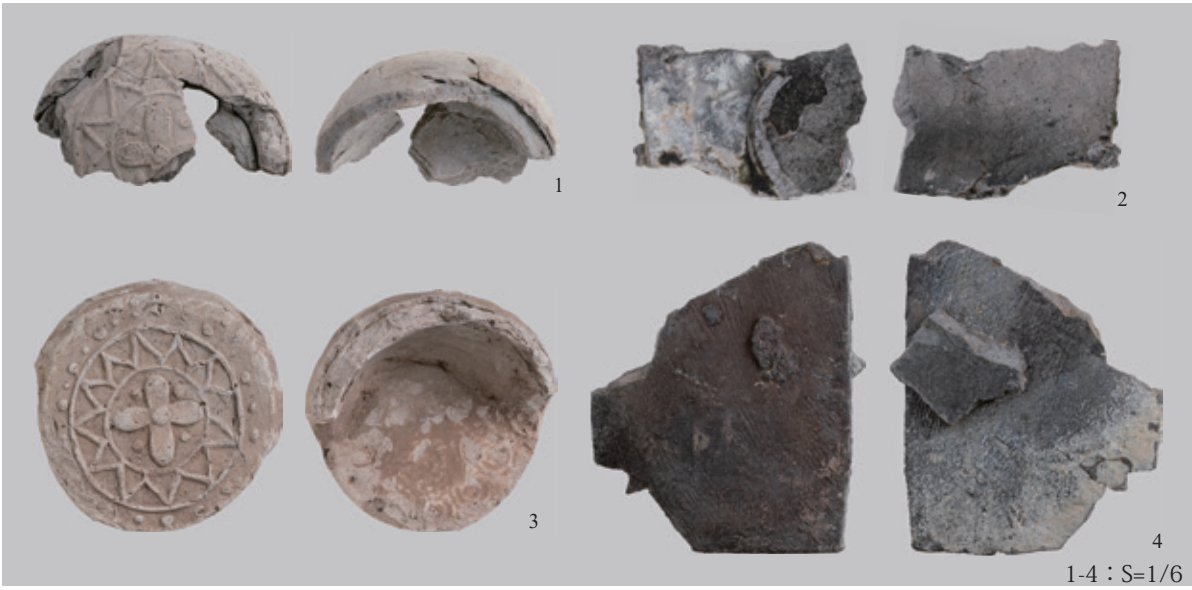


瓦 集合写真



1-4 : S=1/6

图版 64 基本層 瓦 1



図版 65 SD2 出土遺物



図版 66 遺構検出面 遺物



图版 67

SD11 · 54 · 75 出土遺物



1-4: SX15 堆, 5・6: SD2・4 層, 7: SD2-1A 層, 8: SR2- 検出面

図版 68 焼台 集合写真



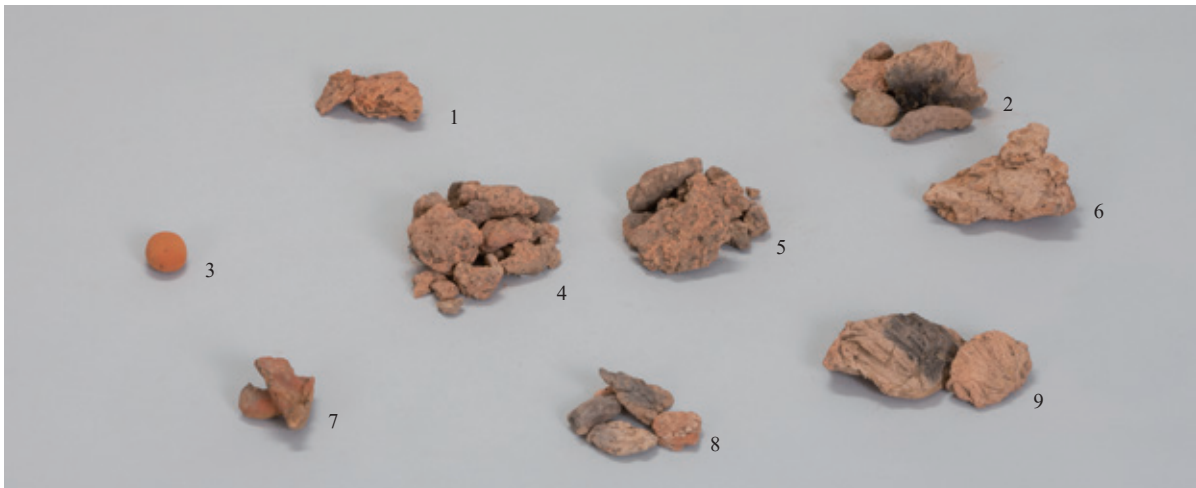
1-4・8 : S=1/3, 5-7・9 : S=2/3

図版 69 縄文土器と石器



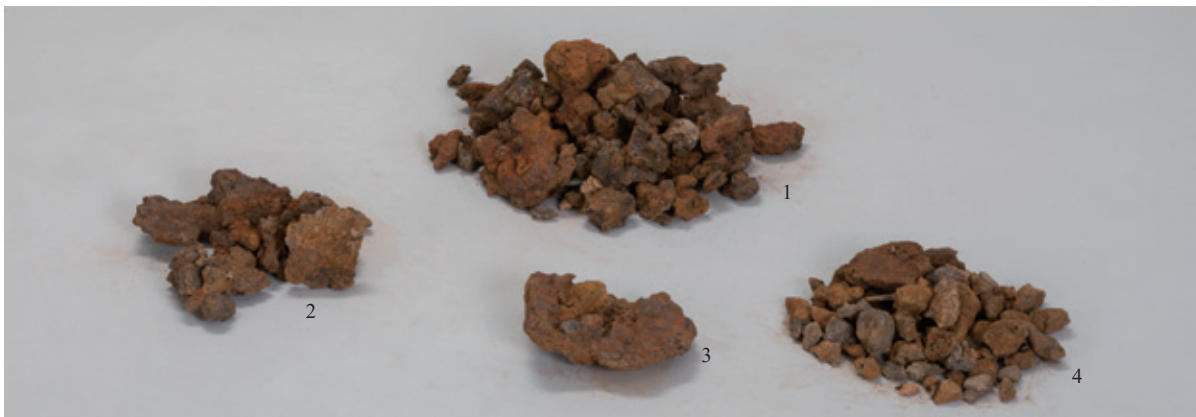
1:No.1091, 2:No.627, 3:No.587, 4:No.343 : S=1/3 5:SI22 P9, 7:SI25 床 : S=1/4

図版 70 石製品 集合写真



1:SI90-7 層, 2:SI29 下層, 3: SX8 下層, 4: SX76・2, 5: SX76-1 層, 6: I22 カマド 3, 7: SI22 ※建物北半の層, 8: SX15 堆, 9: SI29 上層

図版 71 粘土 集合写真



1:SK10 上層, 2:SD11 堆, 3:SD11 堆 No.952, 4: SX9 堆

図版 72 鉄滓 集合写真





1



2



3



4



5



6

1:No.502, 2:No.1228, 3:No.632, 4:No.772, 5:No.1219, 6:No.586 S= 任意

图版 73 墨書拡大写真

# ふ つけ かま あと 吹 付 窯 跡

## 調 査 要 項

遺 跡 名：吹付窯跡（宮城県遺跡地名表記載番号：26011）

所 在 地：宮城県黒川郡大衡村駒場字欠下

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

佐藤涉、伊東博昭、風間啓太、手代勝巳、村上景亮、佐久間光平

調査期間：令和元年 12 月 3 日～12 月 19 日 佐藤涉 村田晃一

令和 2 年 8 月 3 日～8 月 27 日 佐藤涉 伊東博昭 風間啓太 古田和誠

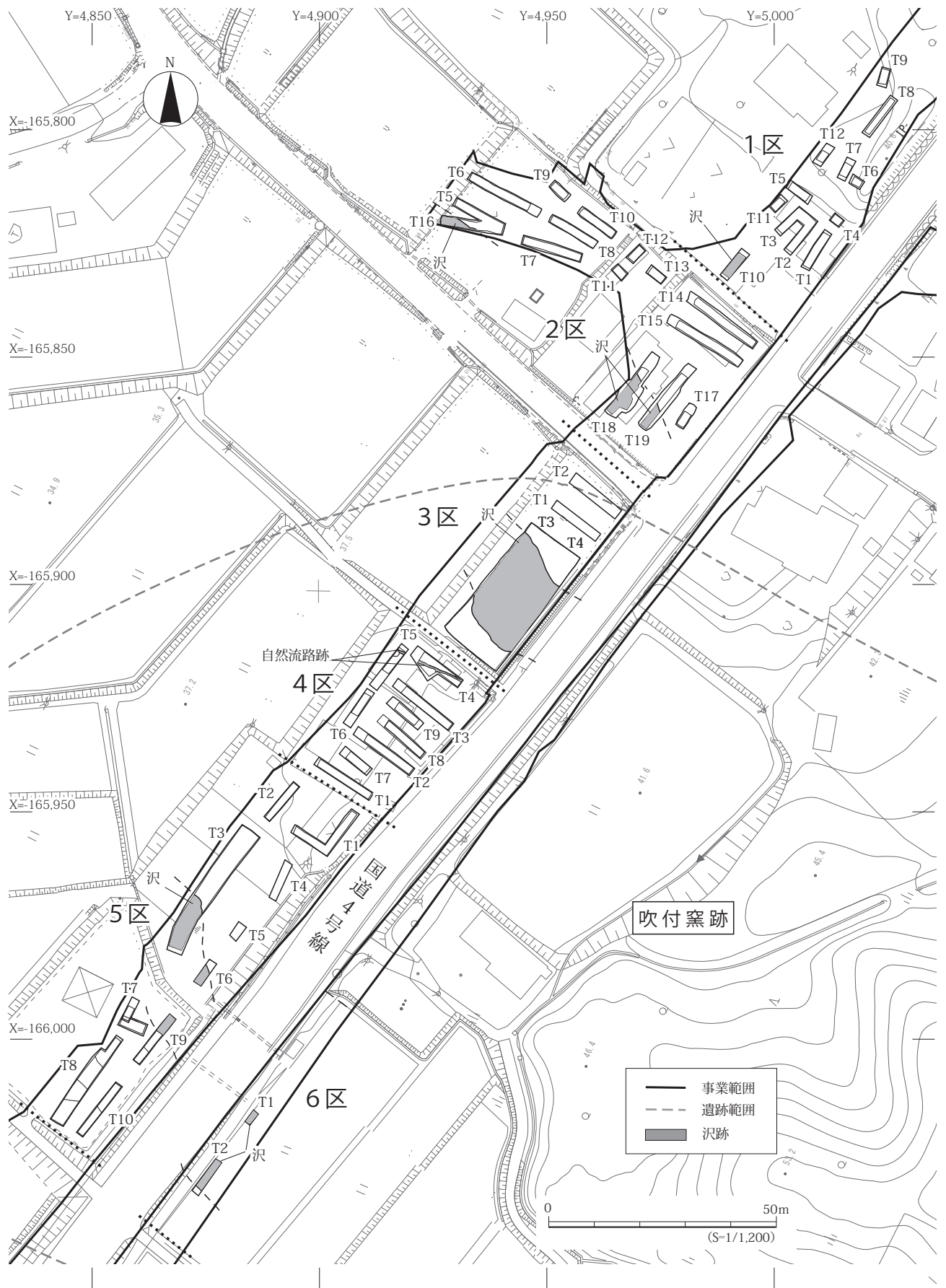
令和 3 年 12 月 7 日～12 月 20 日 佐藤涉 風間啓太 古川一明

令和 4 年 5 月 9 日～5 月 20 日 佐藤涉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

令和 4 年 10 月 18・19 日 佐藤涉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

調査対象面積：約 7098㎡

調査面積：約 1806㎡



第 169 図 吹付窯跡調査区配置図

## 第IV章 吹付窯跡

### 1. 調査の経過と概要

調査対象地は遺跡範囲の西端付近にあたる（第 147 図）。本線部分のほかに取り付き道路や、国道と県道との合流部分を含む。調査は、事業地内における遺跡内および隣接地を対象として、幅 2 m の調査区において遺構・遺物の有無を確認しながら進め、遺構・遺物を発見した場合には調査区を拡張した。各調査区は、現道の東西に並行する拡張部にあたり、便宜的に北から南に向かって現道西側を 1～5 区、東側を 6 区に分けた。

### 2. 各区の調査（第 147 図）

#### 【1区】

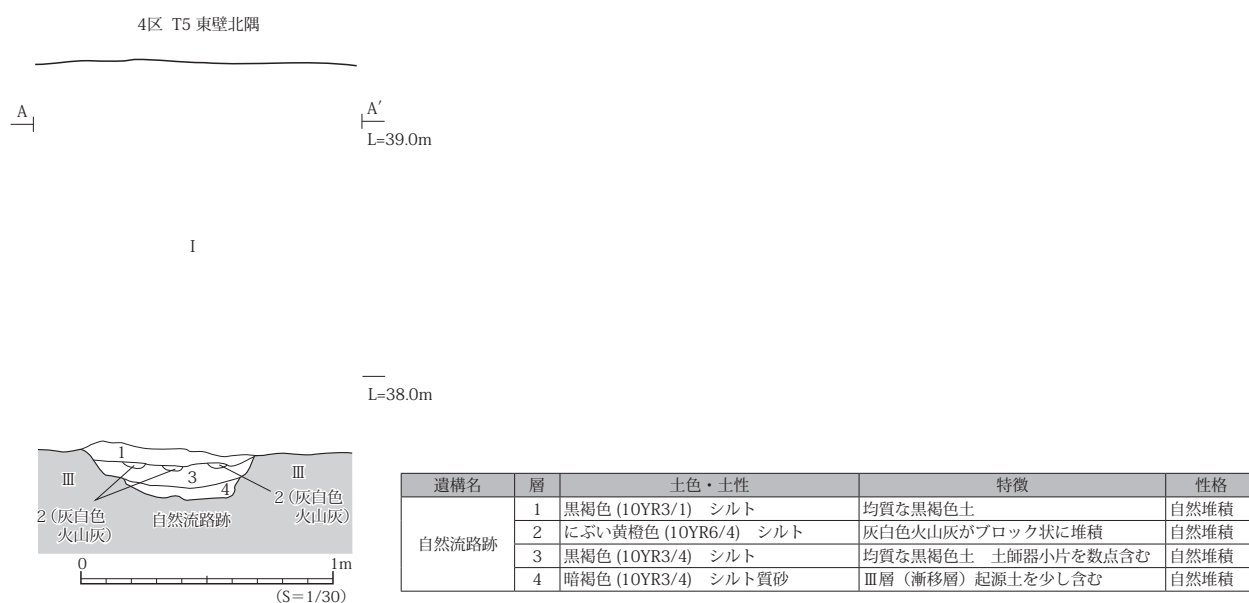
令和元年 12 月 3 日～12 月 19 日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端の隣接地にあたり、丘陵尾根平坦面から南緩斜面に位置する。調査前の現況は宅地である。

遺跡北東側の隣接地に 12 本の調査トレンチ（T 1～T12）を設定した。調査深度は 20～160cm である。T1、T8 では I 層直下で V 層（岩盤）を確認した。一方、T9、T10 では I 層（盛土など）が 50cm 以上堆積しており、層の厚さは北側や東側より南側、西側のほうが厚くなっている。調査区では、宅地造成にさいして元の地形を切土・盛土して平坦に造成していたことが分かった。

遺構・遺物は発見されなかった。

#### 【2区】

令和 2 年 8 月 3 日～8 月 27 日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端の隣接地にあたり、丘



第 170 図 4 区自然流路断面図

陵南緩斜面と西から入る沢部に位置する。調査区は大きく2段に造成されており、調査前の現況は東側にある上段が宅地、西側にある下段が畑地であった。

15本の調査トレンチ（T5～T19）を設定した。調査深度は40cm～290cmである。調査区北東側のT14・15ではⅡ層や沢の堆積層を確認したが、それ以外のトレンチでは原則、地山直上にⅠ層（耕作土や盛土）がなされていた。調査区の大部分は一度地山まで削平されたのち、耕作土や盛土によって造成されていたことが分かった。

遺構・遺物は発見されなかった。

### 【3区】

令和2年8月3日～8月27日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端にあたり、丘陵尾根北西緩斜面に位置する。調査前の現況は水田である。

4本のトレンチによる調査（T1～T4）をしていたところ、T3・T4において灰白色火山灰の広がりを確認したため両トレンチを拡張し、面的な調査を行った。調査深度は20cm～95cmである。その結果、調査区中央付近には、南東から北西方向に向かって沢が横断することがわかった。この沢中央部の堆積土には10～20cmほどの厚さの灰白火山灰が堆積していた。また、調査区の南北では表土直下でⅤ層（岩盤）を確認した。

遺物は、調査区南側の表土・攪乱等から須恵器甕の破片が少量出土した。

### 【4区】

令和4年5月9日～5月20日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端にあたり、丘陵尾根西緩斜面に位置する。調査前の現況は宅地である。

9本の調査トレンチ（T1～T9）を設定した。調査深度は90～160cmほどである。調査区の全体に削平・盛土が及んでおり、盛土は地形的に低い西側ほど厚く、1.5mほどあった。宅地造成に際して、旧地形を切土・盛土により平坦に造成したものとみられる。旧表土とみられるⅡ層（黒褐色土）が残存していたのは北側のT4、T5付近に限られる。

遺構は検出されなかったが、北側のT4・T5では東西方向の自然流路跡1条（幅60～70cm、深さ10～20cm）を確認した。堆積土には灰白色火山灰ブロックが堆積していた。

遺物はこの自然流路跡の堆積土などから、土師器細片が数点出土した。

### 【5区】

令和3年12月7日～12月20日に調査を実施した。調査区は、遺跡南西端にあたり、丘陵尾根西緩斜面に位置する。調査前の現況は宅地や畑地等である。

10本の調査トレンチ（T1～T10）を設定した。調査深度は30cm～170cmほどである。調査区の中央やや南よりのT3・T6付近では、東から西方向に向かって沢が走っていた。この沢の北側（T1・T2）と南側（T8・T10）は地形的にやや高かったため削平が及んでおり、地表から30cmほどで

IV層を確認した。沢付近には1 mを超える盛土がなされている。

遺構・遺物は発見されなかった。

### 【6区】

令和4年10月18・19日に調査を実施した。遺跡南西部に当たり、丘陵西緩斜面に位置する。調査前の現況は旧水田地である。

2本の調査トレンチ（T1・T2）を設定した。調査深度は140～170cmほどである。いずれも厚さ1 mほどの盛土下に沢の堆積土（厚さ：40～50cm、黒褐色～褐灰色のシルト～粘土層）が確認された。地形的により低い西側の5区の沢（T3・T6・T9）へと繋がるものとみられる。

遺構・遺物は発見されなかった。

## 3. まとめ

今回の調査地点は、遺跡の西に位置し、地形的には遺跡が広がる丘陵が西側へ標高を下げる尾根の西端部付近にあたる。調査の結果、全体的に標高が高い地点は削平が及び、より低い地点には厚く盛土がなされるなど後世の地形改変が進んでいるが、もともとは標高の高い東側の丘陵部からより低地の西側へ向かっていくつかの沢が樹枝状に延びる地形であったことが分かった。

この地点では遺構が検出できなかった。遺物は土師器や須恵器の破片が少量出土したが、やや摩耗しているものも含まれており、近辺から流入したものとみられる。したがって、窯跡などの遺構がこの付近に分布することは考えにくく、遺跡の中心はより標高が高い東方の丘陵上にあるものと推定できる。



# 写 真 图 版





1. 1区 T1～T5 トレンチ (北西から)



2. 1区 T8 トレンチ (南から)



3. 1区 T10 トレンチ (北東から)



4. 2区 T5～T13 トレンチ (東から)



5. 2区 T6 トレンチ (西から)



6. T7 トレンチ (南から)



7. 2区 T14・T15 トレンチ (西から)



8. 2区 T14 トレンチ北壁 (南から)

図版 74 吹付窯跡 1・2区



1. 2区 T18 トレンチ (南から)



2. 3区 T3・T4 トレンチ拡張部 (北西から)



3. 4区 T3・T4 トレンチ拡張部 (東から)



4. 3区 T3・T4 トレンチ拡張部 (北西から)



5. 3区 T3・T4 トレンチ拡張部西壁 (北東から)



6. 4区 T1 トレンチ (東から)



7. 4区 T4 トレンチ (西から)



8. 2区 T14 トレンチ北壁 (南から)

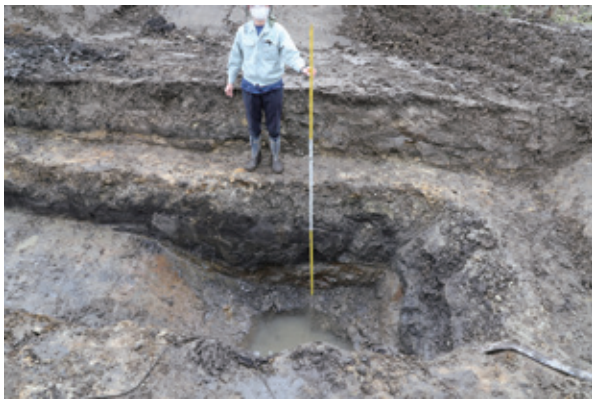
図版 75 吹付窯跡 2～4区



1. 5区T1トレンチ (南東から)



2. 5区T3トレンチ (南西から)



3. 5区T3トレンチ沢断面 (西から)



4. 5区T9トレンチ (南から)



5. 5区T8・T10トレンチ (南から)



6. 6区 (北から)



7. 6区T1トレンチ (西から)



8. 6区T2トレンチ (北西から)

図版 76 吹付窯跡 5・6区

# ふ つけ かま あと 吹 付 C 窯 跡

## 調 査 要 項

遺 跡 名：吹付窯跡（宮城県遺跡地名表記載番号：26092）

所 在 地：宮城県黒川郡大衡村駒場字蕨崎、上横前

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

佐藤渉、黒田智章、風間啓太、手代勝巳、村上景亮、佐久間光平、古川一明

調査期間：令和4年3月7日～3月30日 佐藤渉 風間啓太 佐久間光平

令和4年9月8日～9月15日 佐藤渉 手代勝巳 佐久間光平

令和4年10月25日～11月1日 佐藤渉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

令和5年7月3日～7月4日 黒田智章 手代勝巳 村上景亮 古川一明

調査対象面積：約 1773m<sup>2</sup>

調査面積：約 120m<sup>2</sup>

## 第IV章 吹付C窯跡

### 1. 調査の経過と概要

吹付C窯跡は、国道4号拡幅工事関連遺跡調査のなかで新たに発見し、新規登録した遺跡で、発見の経緯は工事中の不時発見である。

本遺跡に隣接する吹付窯跡1区・2区は、遺跡北西端とその隣接地にあたるが、それぞれ平成31年度・令和2年度の調査で遺構・遺物が発見されなかった。この調査結果と、周知の遺跡が当該箇所になかったため、吹付窯跡1区の北側は調査対象から除外していた。

ところが、令和3年12月17日に仮設道路工事の切土によって造成された法面に、U字形の赤変範囲が発見されたため、当課職員が現地確認を行ったところ、南北方向に延びる仮設道路の西側法面に、窯の横断面とみられるU字形の赤変範囲が2箇所確認され、仮設道路東側では須恵器片を多く含む灰原とみられる黒色土層の広がりを確認した。

同年12月22日、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は現地協議を行った。窯跡部分・灰原部分とも工事予定範囲内にあり、計画変更等が難しいことから、記録保存のための発掘調査を実施する事となった。この協議および窯跡部分の調査成果を受けて、令和4年4月7日に周辺の分布調査を行い、当該遺跡を「吹付C窯跡」として新規登録した。

窯跡部分は、令和4年3月7日～3月30日に調査した。遺跡のほぼ中央、北東緩斜面に立地する。調査前は仮設道路法面、山林である。

現道の西側を1区とし、法面で確認していた窯の周囲に調査区T1を設定した。調査深度は20～30cmである。遺構はⅢ層で検出した。

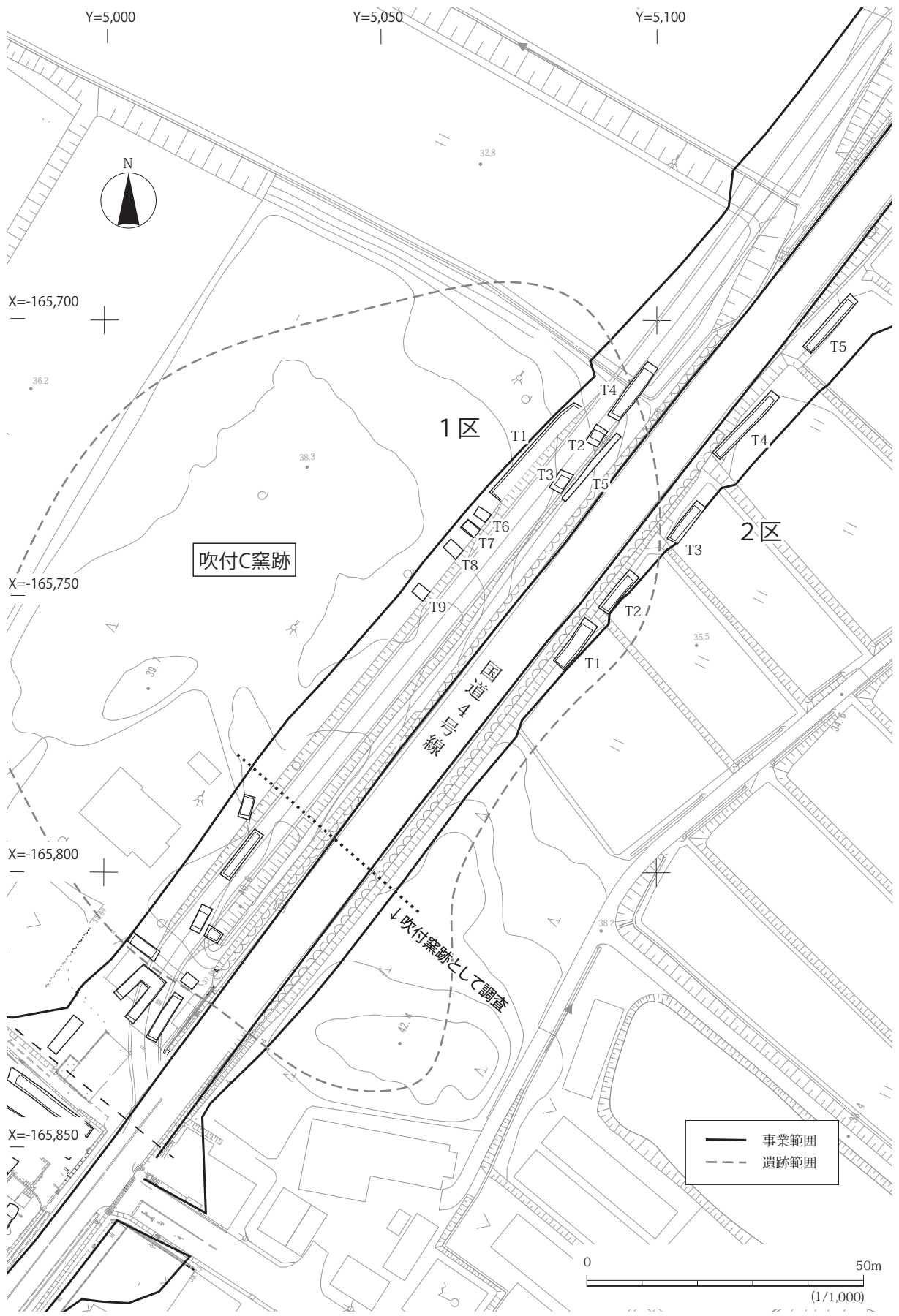
遺構は、窯跡2基、土坑2基を検出した。遺物は主に須恵器坏で、整理用コンテナ13箱分が出土した。

このほか、遺跡の広がりを確認するため窯跡の南側に調査区T6～T9を設定したが、遺構・遺物は発見されなかった。

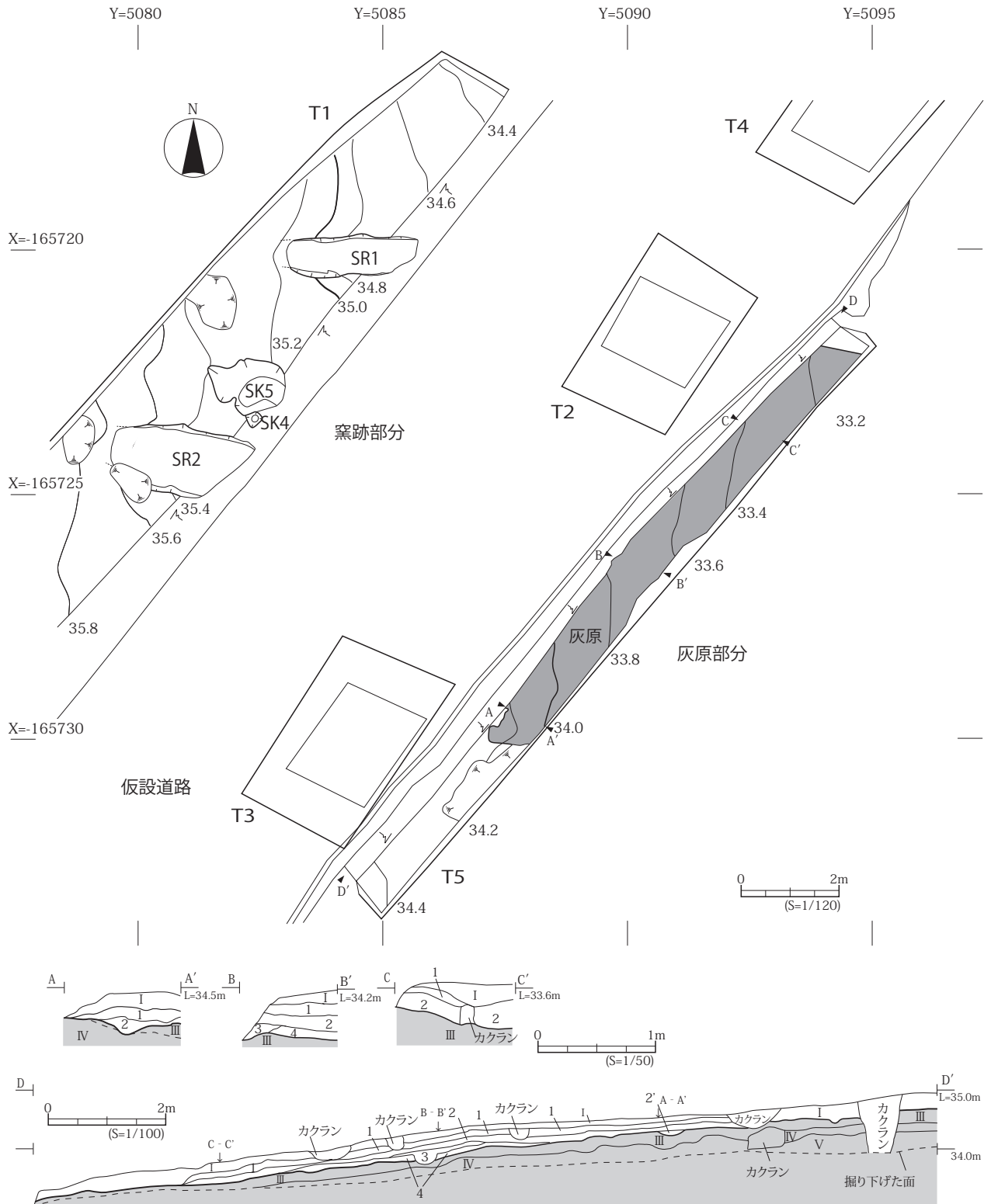
灰原部分は、令和4年9月8日～9月15日に調査した。調査したのは仮設道路をはさんで窯跡部分の東側である。灰原の調査に先立って、仮設道路下の遺構の有無を確認するため調査区T2～4を設定したが、掘削深度80cm前後でⅢ・Ⅴ層を確認した。当該部分は仮設道路建設によって幅7mほどにわたって大きく削平されていることが分かった。

灰原部分は断面に見えていた灰原の堆積範囲より広い調査区を設定して、他の遺構の有無を確認したが、発見できなかった。遺物は、ほとんどが須恵器で整理用コンテナ10箱分が出土した。なお、この調査の結果、灰原が現道擁壁裏まで残っていることが明らかになった。この部分はT5として、工事スケジュールに合わせて10月25日と11月1日に工事立合いで調査し完掘した。

令和5年7月3日～4日には、現道の向かい側を2区として調査した。T1～T5の調査区を設定して調査した。遺構・遺物は発見されなかった。調査深度はいずれも150～200cmで検出面はⅢ層である。近現代のゴミを含む厚いⅠ層（盛土）下でⅤ層（地山）を確認したことから、近現代以降に旧地形が大きく改変されたことが明らかとなった。

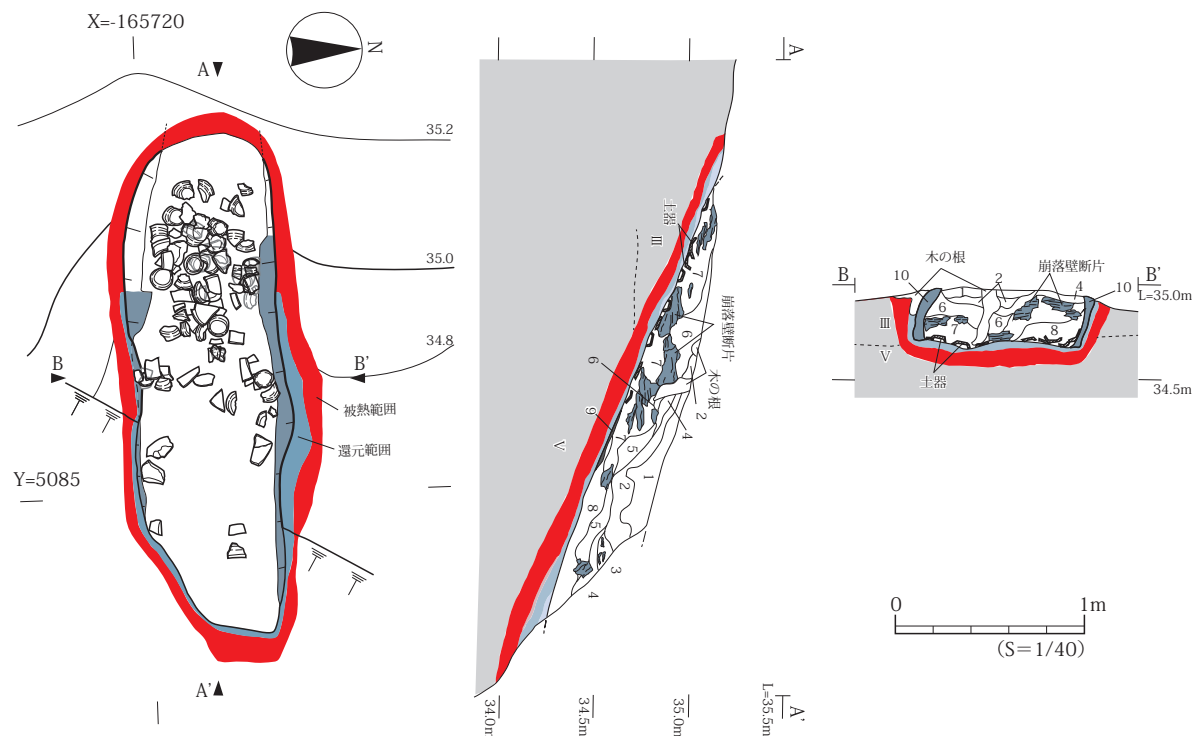


第 171 図 吹付 C 窯跡調査区



層	土色・土性	特徴	性格
I	暗褐色 (10YR3/3) シルト	須恵器細～小片を多く含む	表土
1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物ブロック小・粒、須恵器小片を少し含む	自然堆積
2	黒色 (10YR2/1) シルト	炭化物ブロック中～粒、須恵器ほぼ完形～小片を多く、Ⅲ層ブロック小、炭、窯構造体ブロック、円礫小を少し含む	自然堆積
3	黒色 (10YR2/1) シルト	炭化物ブロック中～粒、須恵器ほぼ完形～小片を多く、Ⅲ層ブロック小、炭、窯構造体ブロック、円礫小を少し含む	自然堆積
4	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物ブロック中～粒、Ⅲ層ブロック小、炭、窯構造体ブロック、円礫小を少し含む	自然堆積

第 172 図 吹付 C 窯跡遺構配置図



層	土色・土性	特徴	性格
1	黒褐色 (7.5YR2/2) シルト	焼土粒を不均質に少し含む	天井・壁崩落後の自然堆積土
2	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土粒を多く、炭化物粒を少し、窯壁の青灰色小ブロックを多く含む	天井・壁崩落後の自然堆積土
3	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	窯壁の青灰色ブロック小を多く、炭化物粒を少し含む	天井・壁崩落土
4	黄褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト	赤化した硬質の赤褐色ブロック小を多く含む	天井・壁崩落土
5	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	窯壁の青灰色ブロック小を少し、炭化物粒、焼土粒を多く含む	天井・壁由来の堆積土
6	にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト	赤化した硬質の明褐色～赤褐色ブロック中～大を不均質に多く、焼土粒を少し含む	天井・壁崩落土
7	褐色 (7.5YR4/4)+ 灰色 (10Y5/1) シルト+ブロック	還元作用を受けた青灰色の窯壁(硬質) からなる	天井・壁崩落土
8	暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト	窯壁の青灰色ブロック小、赤褐色ブロック小、炭化物粒・焼土粒を多く含む	天井・壁由来の堆積土
9	黒色 (7.5YR2/1) (炭化物)	床面直上の炭化物層。部分的に薄く残存(厚さ1~2cmほど)	床面の堆積
10	灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土	スサ入り粘土	窯側壁

第 173 図 SR1 窯跡

## 2. 発見した遺構と遺物

窯跡 2 基、灰原 1 か所、土坑 2 基を検出した。2 基の窯跡は、共に残存していた焼成部を確認した。いずれも窯全体に削平が及んでおり、構造や構築方法の詳細は不明瞭である。

### 【SR1 窯跡】(第 164 図・図版 77)

〔位置・検出面〕 調査範囲北西の北東緩斜面、標高 34.7 ~ 35.2 m ほどにある。Ⅲ層で検出した。SR2 からは北へ 4.6 m ほど離れている。

〔形状と規模〕 残存する焼成部は、床面でみると、残存長 2.8 m、幅 0.9 m である。平面形はやや丸みを帯びた長方形である。断面形は両壁がやや内湾する箱形で、高さは最も残りの良い B-B' ベルト北壁付近で約 40cm である。方向は長軸を主軸方位とすると W-2° -N を示す。周辺遺跡やほか地点でも古代の検出面になっているⅢ層が比較的厚く残っていたにもかかわらず、奥端側では壁が 5 cm ほどしかないことから、半地下式構造であった可能性がある。

〔床・壁〕 床面は 1 枚で、地山を床面としている。床面は、斜面上方の西側に向かって高くなっており、凹凸が若干認められる。その傾斜は 22° ほどで奥壁に向かってやや急になる。床面では厚さ 5 ~



10cm が還元作用で青灰色に変化し、その外側は厚さ 5～15cm が赤変していた。変色範囲は奥壁側が薄く、燃焼部が厚くなっており、燃焼部側では青灰色と赤変の間に明黄褐色の部分があった。いずれも強く硬化している。床には、焼台に転用されたとみられる須恵器が密に並べられていた。それらうち坏には、完形もしくはほぼ完形のもの、半分割されたものがあり、坏の内部は還元したシルトで満たされていた。また、大部分で床面との間に還元したシルトが厚さ 1cm 前後認められた。半分割された坏は、上に向けた底面が水平になるように口縁部を傾斜下方の燃焼部側に向けて置かれており、完形もしくはほぼ完形の坏も同様に上に向けた底面が水平になるように坏の歪みや床との間の土で調整されて置かれていた。

側壁はスサ入り粘土を貼り付けて構築しており、高さは床面から 25～30cm ほど残存する。厚さ 5～10cm が還元作用で青灰色に変化し、その外側は厚さ 5～10cm が赤変していた。いずれもかなり硬化している。壁際では焼台に転用された須恵器坏の一部をスサ入り粘土が覆っていた。

〔堆積土〕 9層に分けられた。1～2層は窯体の天井が崩落した後に形成された窪みに堆積した黒褐色～暗褐色シルトの自然堆積層である。3～8層は天井や側壁の崩落を主体とする堆積層で、7層には壁材の青灰色ブロックを多く含み、8層は焼土粒や炭化物粒などを多く含む。9層は床面直上の薄い炭層である。

〔出土遺物〕 遺物は床面から須恵器が多数、崩落土や崩落後の堆積層からも須恵器片が若干出土した。

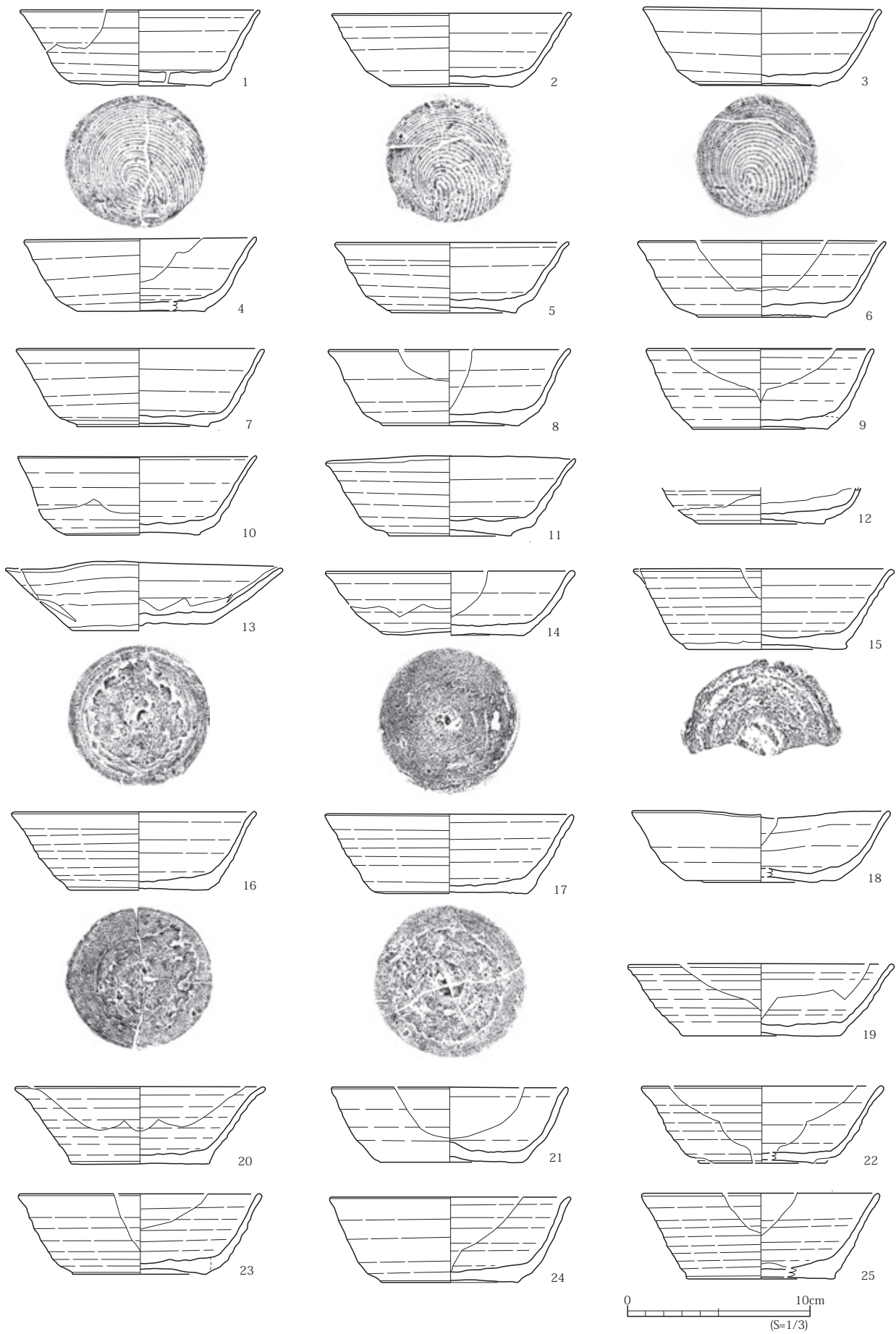
床面からは焼台に転用された須恵器坏が多数出土した（第 152～154 図）。それらの多くは、底面を上に向けた状態で出土している。完形の坏も比較的多く出土しているが、いずれも底部が裂ける、あるいはひびがある。ほぼ半分に割られた坏は、整理作業で接合して完形になったものが一定数あるものの、隙間なく接合したものはなく、完形の坏同様、底部が裂けていたものを半分に割って利用したと考えられる。床から出土した盤や鉢、甕は破断面に釉が付着するものが大半であり、焼台に転用されたか、窯内に残された失敗品の破片とみられる。

#### 【SR2 窯跡】（第 155 図・図版 78）

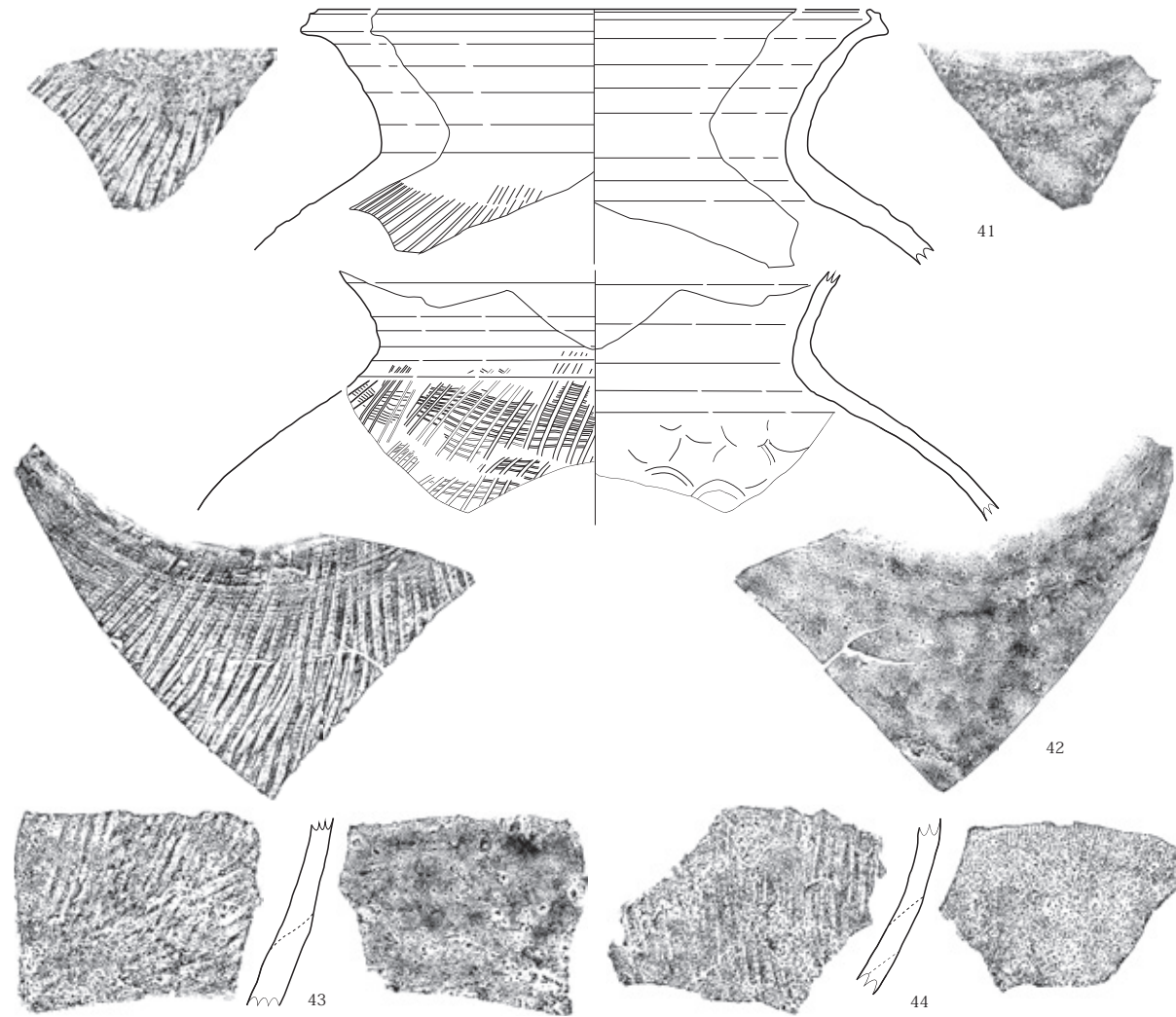
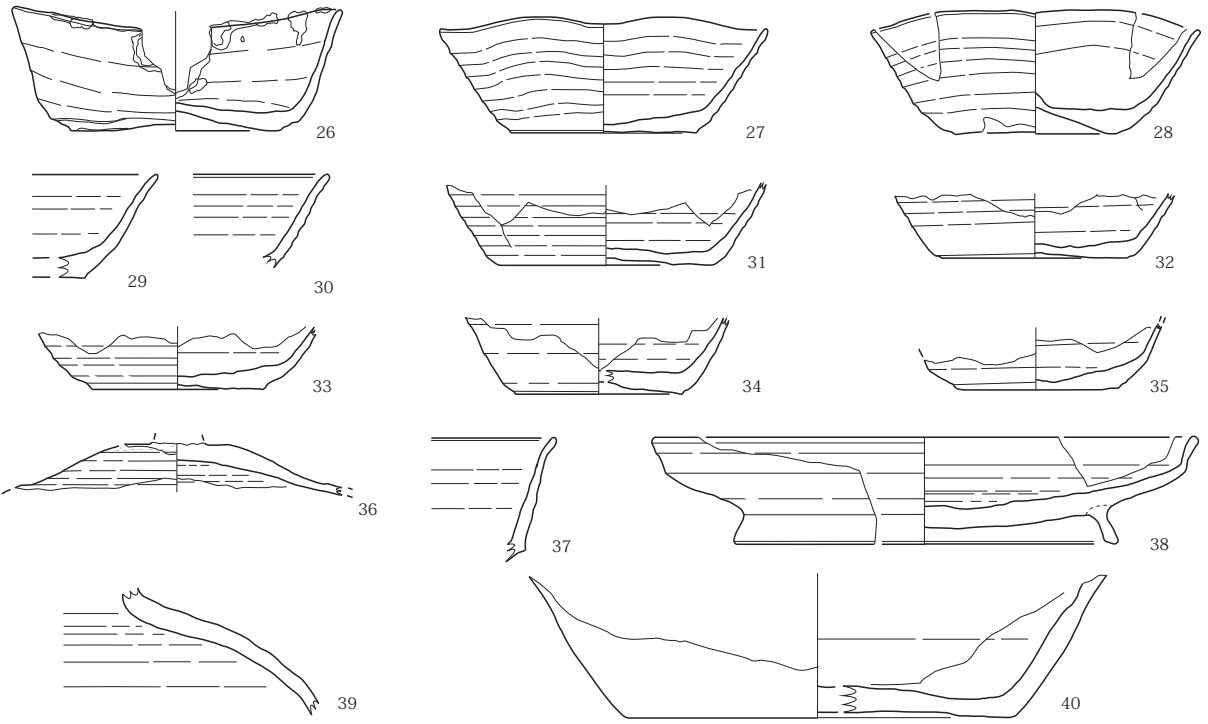
〔位置・検出面〕 調査範囲北西の北東緩斜面、標高 36.8～35.6 m にある。Ⅲ層で検出した。SR1 からは南へ 4.6 m ほど離れている。

〔形状と規模〕 残存する焼成部は、床面でみると、長さ 2.3 m、幅 1.1 m である。平面形はやや胴の張る長方形である。断面形は両壁がやや外傾する逆台形状で、高さは最も残りの良い北壁東側で 30cm ある。方向は長軸を主軸方位とすると W-13°-N を示す。周辺遺跡やほか地点でも古代の検出面になっているⅢ層が比較的厚く残っていたにもかかわらず、奥端側では壁がほとんどないことから、半地下式構造であった可能性がある。

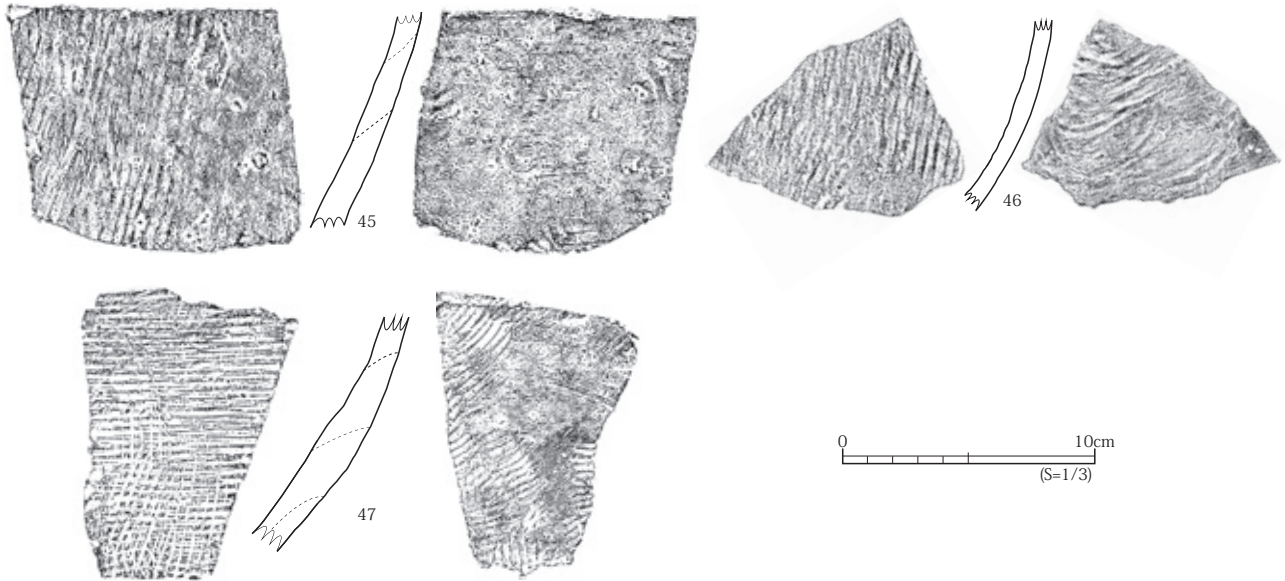
〔床・壁〕 床面は 1 枚で、地山を床面としている。床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦で、斜面上方の西側に向かって高くなっており、凹凸が若干認められる。その傾斜は 23°ほどで、奥壁に向かってややゆるやかになる。床面は赤変して非常に強く硬化している。還元部分は認められない。その外側は、厚さ 5～15cm ほどが赤変していた。赤変範囲は奥壁側が薄く、燃焼部側が厚くなっている。



第 174 図 SR1 窯跡 出土遺物 (1)



第 175 图 SR1 窯跡 出土遺物 (2)



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)		7.4	4.1	外内:ロクロナデ底:回転系切り右底切れ		61
2	須恵器 坏	床	ほぼ完形	12.9		6.7	4.1	外内:ロクロナデ底:回転系切り右		64
3	須恵器 坏	床	完形	12.8		6.8	4.3	外内:ロクロナデ底:回転系切り右ヒビ	81-1	70
4	須恵器 坏	床	3/4	12.6		7.0	4.1	外内:ロクロナデ底:回転系切り右火ダスキ		119
5	須恵器 坏	床	ほぼ完形	12.6		6.8	3.8	外内:ロクロナデ底:回転系切り右二次被熱底切れ	81-2	73
6	須恵器 坏	床	1/4	(13.4)		(7.1)	4.2	外内:ロクロナデ底:回転系切り火ダスキ重ね焼き痕		90
7	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.4		7.2	4.3	外内:ロクロナデ底:回転系切り右ヒビ		74
8	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)		7.3	4.2	外内:ロクロナデ底:離し回転系切り右→外周ナデ外面に糸を引いた痕		111
9	須恵器 坏	床	1/4	(12.3)		(7.4)	4.4	外内:ロクロナデ底:離し回転系切り火ダスキ外面に糸を引いた痕		94
10	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)		7.4	4.3	外内:ロクロナデ底:離し回転系切り右重ね焼き痕外面に糸を引いた痕		82
11	須恵器 坏	床	完形	13.4		6.6	4.4	外内:ロクロナデ底:回転系切り右	81-3	85
12	須恵器 坏	床	底			6.8		外内:ロクロナデ底:離し回転系切り右外面に火ダスキ		114
13	須恵器 坏	床	1/2	(15.0)		7.6	3.8	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り歪みヒビ	81-6	62
14	須恵器 坏	床	1/2	(13.5)		7.6	3.5	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		59
15	須恵器 坏	床	1/2	(14.0)		8.7	4.4	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		65
16	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.3		7.7	4.3	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ	81-5	57
17	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.4		8.2	4.4	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り	81-4	58
18	須恵器 坏	床	1/2	(14.0)		(6.2)	3.9	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り体部歪み		117
19	須恵器 坏	床	1/3	(14.4)		(8.6)	3.9	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ破断面に釉付着		121
20	須恵器 坏	床	1/3	(13.5)		(7.6)	4.3	外:ロクロナデ→ケズリ内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ重ね焼き痕		81
21	須恵器 坏	床	1/3	(12.8)		(7.6)	4.1	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデヒビ破断面に釉付着		120
22	須恵器 坏	床	1/5	(13.0)		(6.8)	4.3	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		107
23	須恵器 坏	床	1/2	(13.1)		7.3	4.4	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り		102
24	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)		(7.4)	4.7	外内:ロクロナデ底:離し回転系切り右火ダスキ重ね焼き痕外面に糸を引いた痕		91
25	須恵器 坏	床	1/3	(12.8)		(7.8)	4.8	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		115
26	須恵器 坏	床	1/2	(12.8)		(8.0)	4.8	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ二次被熱窯体溶着		72
27	須恵器 坏	床	1/2	(12.8)		7.4	4.6	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		83
28	須恵器 坏	床	1/2	(12.9)		(6.3)	4.9	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		38
29	須恵器 坏	床	側面				4.1	外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		104
30	須恵器 坏	床	口縁部付近					外内:ロクロナデ重ね焼き痕		105
31	須恵器 坏	床	1/5			(8.4)		外内:ロクロナデ底:回転ケズリ→外周のみナデ 外内面・破断面に釉付着、ヒビ		78
32	須恵器 坏	床	底			(7.3)		外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		84
33	須恵器 坏	床	底			6.8		外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り		103
34	須恵器 坏	床	1/4			(6.6)		外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ歪み大破断面に釉付着		100
35	須恵器 坏	床	底			(6.5)		外内:ロクロナデ底:回転ヘラ切り→ナデ		101
36	須恵器 蓋	床	1/3					外:ロクロナデ→ケズリ→ナデ内:ロクロナデ外内面に釉付着		88
37	須恵器 高台坏	床	体部片					外内:ロクロナデ		98
38	須恵器 盤	床	1/2	(21.4)		(15.1)	4.2	外内:ロクロナデ底:ケズリ破断面に釉付着	81-7	75
39	須恵器 壺	床	肩付近片					外内:ロクロナデ外面に釉付着	81-9	87
40	須恵器 壺	床	底部			(15.2)		外:ケズリ内:ロクロナデ底部取付のためのナデ破断面に釉付着		93
41	須恵器 甕	床	口縁部~肩	(22.4)				外:平行タタキ→ロクロナデ内:無文当て具→ロクロナデ	81-8	106
42	須恵器 甕	床	肩付近片					外:タタキ→ロクロナデ内:ロクロナデ無文当て具		39
43	須恵器 甕	床	胴部片					外:平行タタキ内:同心円当て具外内面・破断面に釉付着焼台か?		80
44	須恵器 甕	床	胴部片					外:平行タタキ内:無文当て具→ヘラナデ縦破断面に釉付着焼台転用		97
45	須恵器 甕	床	胴部片					外:平行タタキ内:無文当て具外内面・破断面に釉付着焼台転用		92
46	須恵器 甕	床	胴部片					外:平行タタキ内:同心円当て具		116
47	須恵器 甕	床	胴部片					外:疑格子タタキ内:無文当て具→ナデ		99

第 176 図 SR1 窯跡 出土遺物 (3)

側壁は地山を直接壁としており、高さは床面から5～30cmほど残存するが10cm以下の部分が多い。壁の外側は厚さ5～10cmほどが赤変して硬化していた。

〔堆積土〕6層に分けられた。1～4層は窯体の天井が崩落した後に形成された窪みに堆積した黒褐色～暗褐色シルトの自然堆積層である。5層は床上に堆積する層で地山ブロック（V層）からなる。6層は焼土粒と地山（V層）からなる層である。

〔出土遺物〕遺物は堆積層から須恵器片が若干出土している。床からは157-7の須恵器甕片1点が出土した。

#### 【灰原】（第172図・図版79）

〔位置・検出面〕調査地中央東側位置し、丘陵北東緩斜面Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕南北11m、東西1.6mの範囲を確認した。深さは最大で40cm、大部分は20cm前後である。

〔堆積土〕4層に分けられた。1層は黒褐色シルト層、2層は黒色シルト層で灰原全体に分布する。3・4層はSR2の主軸線上の対応する位置にのみ堆積する層で2層と比べて焼土塊や炭化物粒が大きく量も多い。

〔出土遺物〕各層から須恵器坏、双耳坏、蓋、高台坏、壺、短頸壺、長頸瓶、甕が出土した。2層とⅢ層の層理面で比較的大きな破片の須恵器がまとまって出土している。

#### 土坑

##### 【SK4 土坑】（第177図・図版78）

〔位置・検出面〕調査地中央付近のSR1とSR2の間の丘陵北東緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK5と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕直径35cm前後、確認面からの深さは86cmである。平面形は不整な円形で、断面形はU字形である。

〔堆積土〕暗褐色シルトの自然堆積層である。

〔出土遺物〕堆積土中から須恵器片が少量出土した。

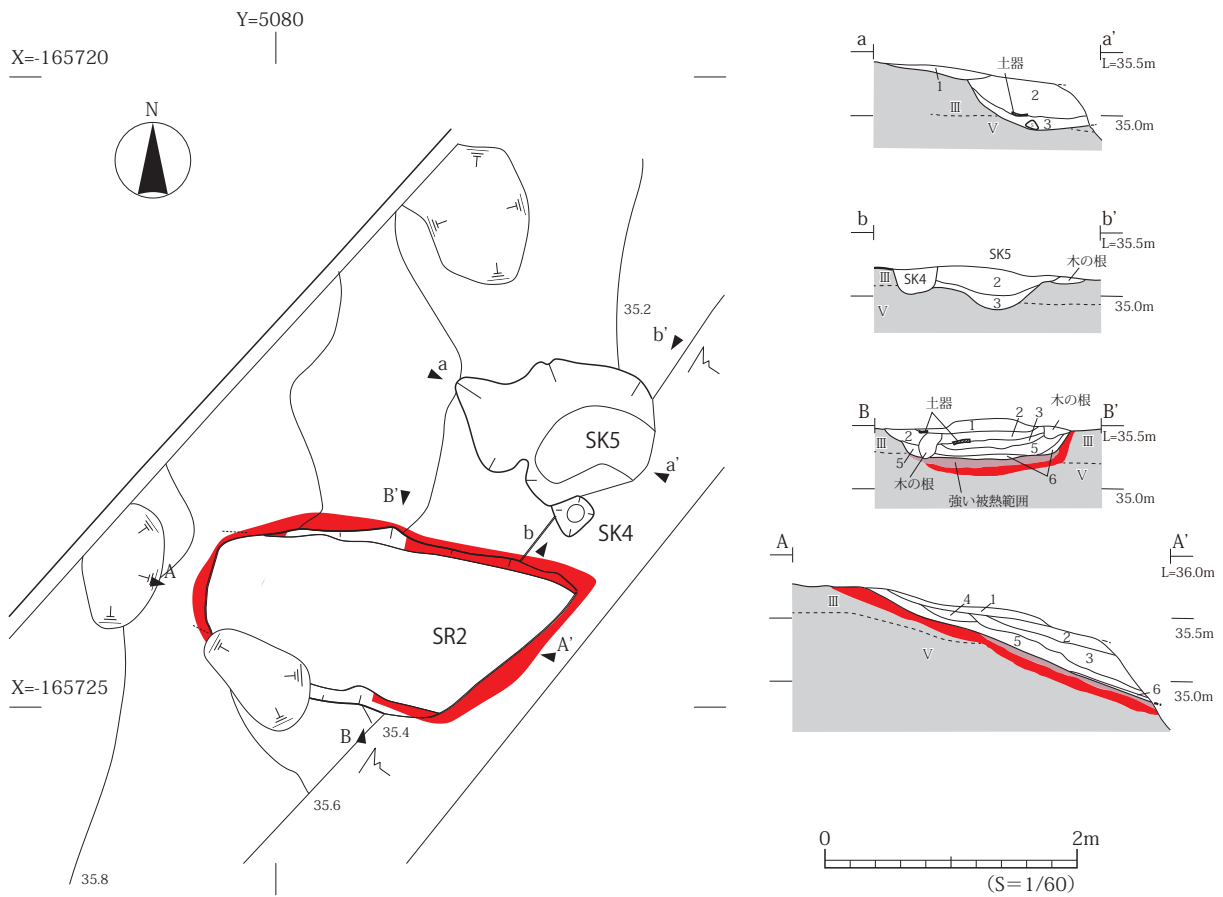
##### 【SK5 土坑】（第177図・図版78）

〔位置・検出面〕調査地中央付近のSR1とSR2の間の丘陵北東緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK5と重複し、これより古い。

〔規模・平面形・断面形〕残存する規模は、東西106cm、南北100cm以上、確認面からの深さは38cmである。平面形は楕円形とみられ、断面形は壁が緩やかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は褐色シルトの自然堆積層である。2層は焼土塊、窯体ブロックからなり、炭化物粒を少し含む人為堆積層である。3層は焼土塊小ブロック・粒、窯体小ブロック、

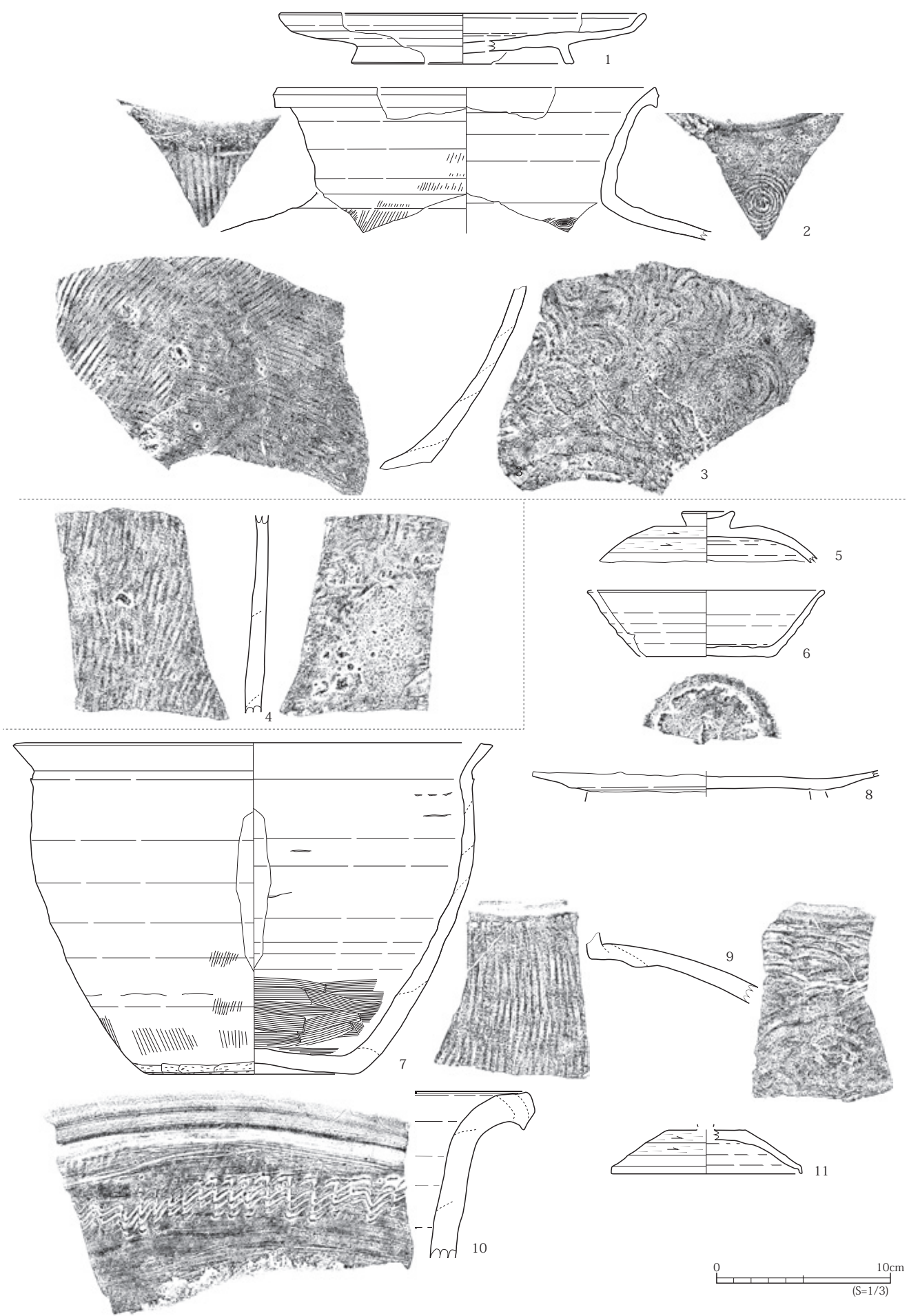


遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SR2	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	焼土粒、地山粒を少し含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	焼土ブロック中、焼土粒、地山粒を少し含む	自然堆積
	3	黒色 (10YR3/2) シルト	焼土ブロック中を少し、焼土粒、地山粒を多く含む	自然堆積
	4	灰褐色 (10YR4/1) シルト	焼土粒、地山粒を多く含む	自然堆積
	5	橙色 (10YR8/6) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる均質な層	壁・天井由来か? 自然堆積
	6	褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト	焼土粒、地山粒からなる層	自然堆積
SK4	1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	焼土粒多く含み、炭化物粒をわずかに含む	自然堆積
SK5	1	褐色 (10YR4/4) シルト	焼土小ブロックを若干含む。	自然堆積
	2	暗赤褐色 (5YR3/4) シルト	焼土小〜大ブロック、窯体ブロック (還元含む) からなる層で、炭化物粒を若干含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	焼土小ブロック、窯体小ブロック、炭化物粒を多く含む	自然堆積

第 177 図 SR2 窯跡 SK4・5 土坑

炭化物粒を多く含む自然堆積層である。

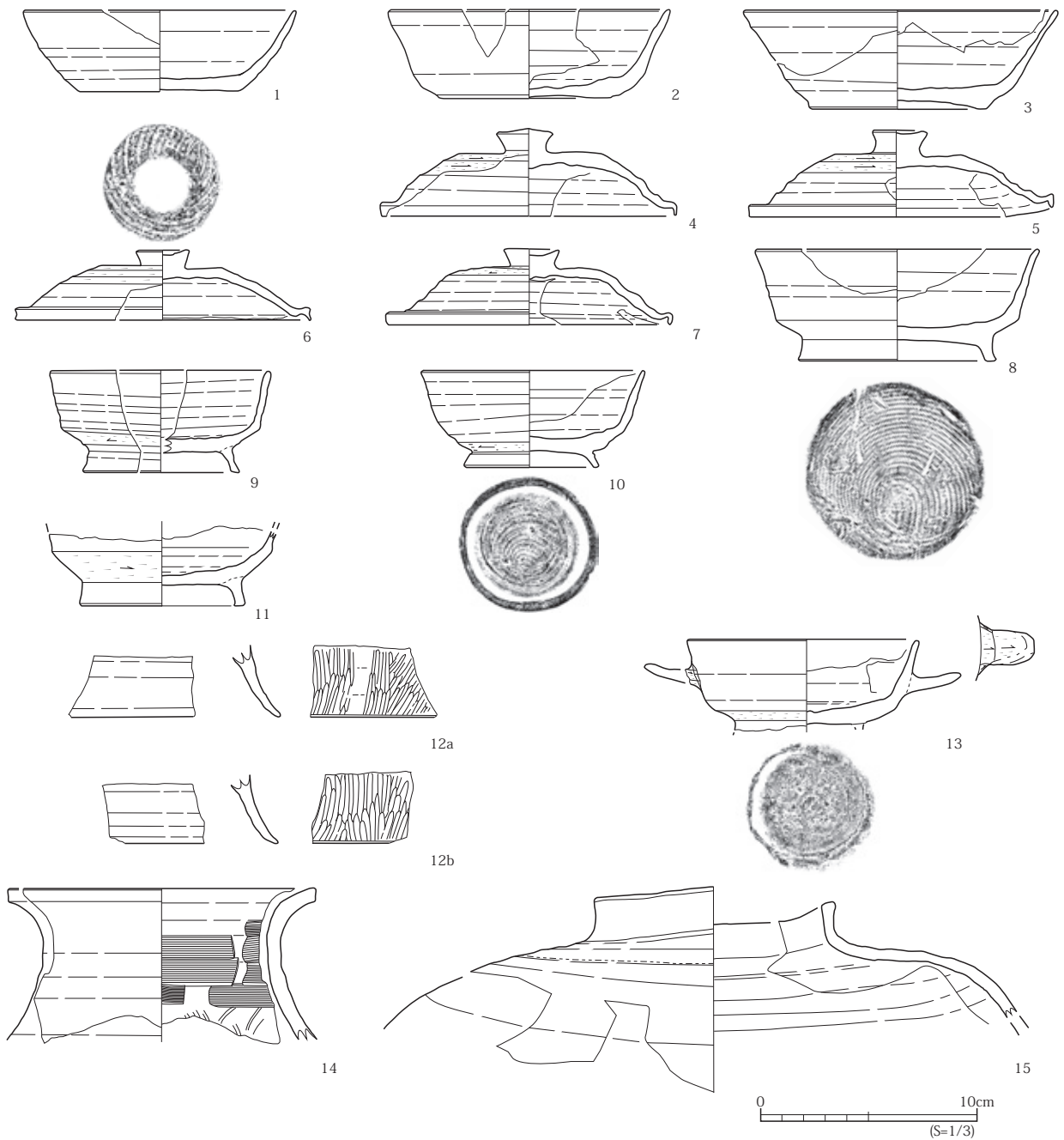
〔出土遺物〕 堆積土中から 157-2 の蓋をはじめ須恵器片が多数、土師器片が少量出土した。



第 178 図 SR1 SR2 その他出土遺物

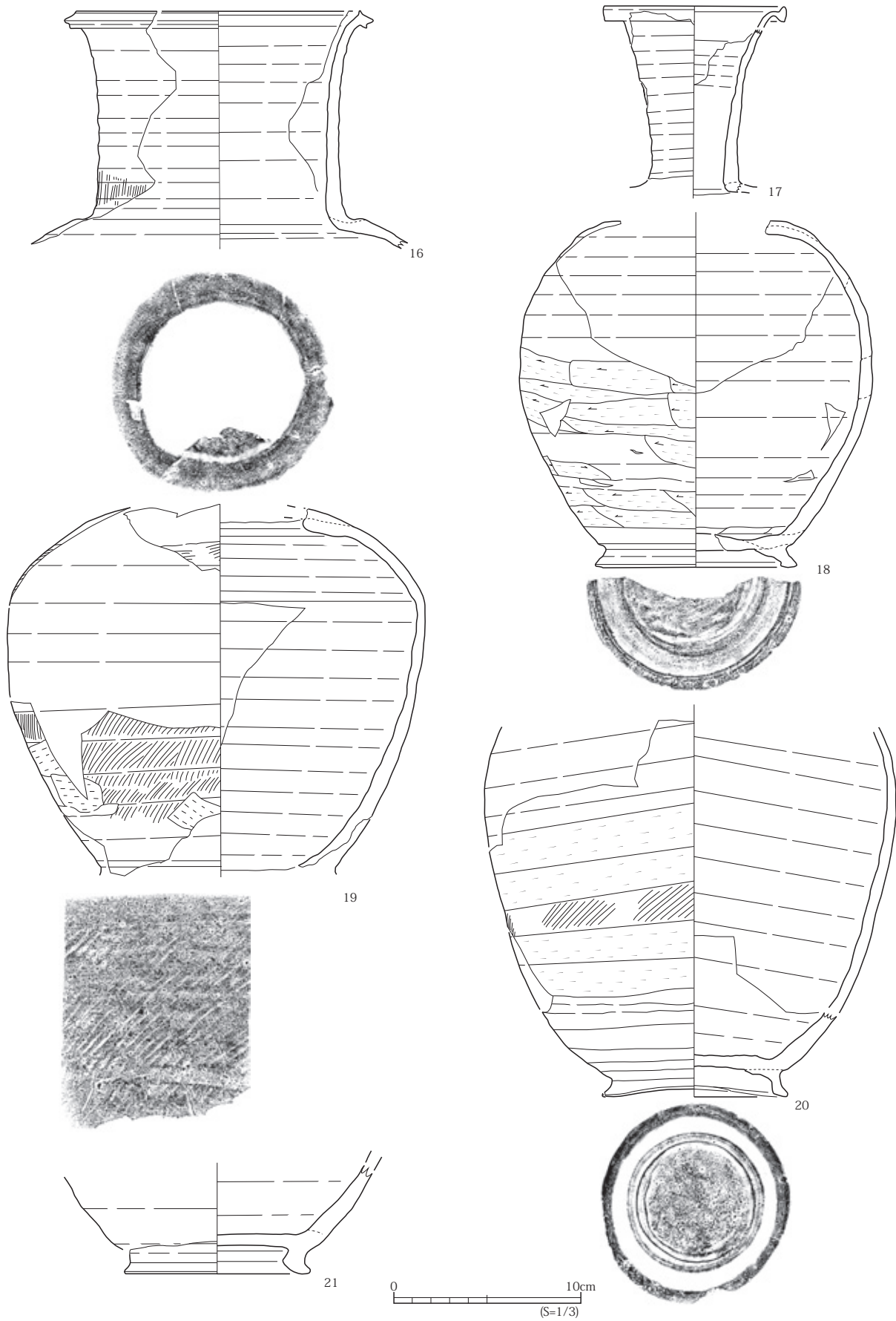
No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 盤	SR1 3～8層	1/8	(20.9)		(12.6)	2.9	外内：ロクロナデ 底：回転へら切り→高台貼付け	84-6	41
2	須恵器 甕	SR1 3～8層	口縁部～肩	(21.8)				外：擬格子タタキ→ロクロナデ 内：同心円当て具→ロクロナデ	84-8	40
3	須恵器 甕	SR1 3～8層	底部付近片					外：平行タタキ 内：同心円当て具		42
4	須恵器 甕	SR2 床	胴部片					外：平行タタキ 内：無文当て具 外内面・破断面に釉付着 焼台転用		51
5	須恵器 蓋	SK5 3層	頂部～体部					外：回転ケズリ 内：ロクロナデ 頂部：糸切り	84-4	54
6	須恵器 坏	倒木痕	1/3	(13.5)		(7.5)	3.8	外内：ロクロナデ 底部：へら切り 「一」へら描き 焼成時のヒビ	84-2	53
7	須恵器 甕	倒木痕	1/4	(26.2)		(11.9)	19.0	外：ケズリ→平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ 底部貼付け	84-7	37
8	須恵器 盤	検出面	底部付近片					外内：ロクロナデ 底部：ケズリ→高台貼付け	84-3	47
9	須恵器 甕	検出面	肩付近片					外：平行タタキ 内：無文当て具		45
10	須恵器 甕	検出面	口縁部					外：櫛描波状文 櫛歯4 1段 内：ロクロナデ	85-1	46
11	須恵器 蓋	表採	破片	(11.0)			2.5-	外：回転ケズリ 内：ロクロナデ 頂部：糸切り	84-5	55



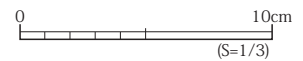
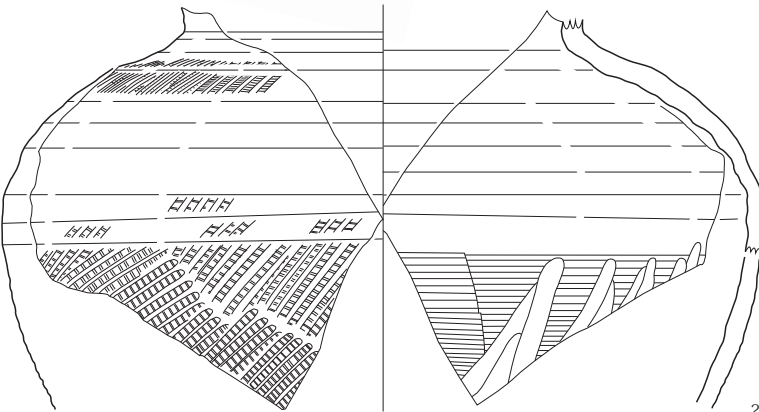
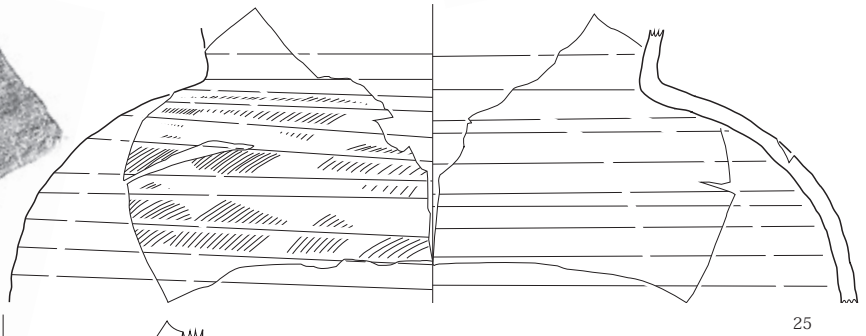
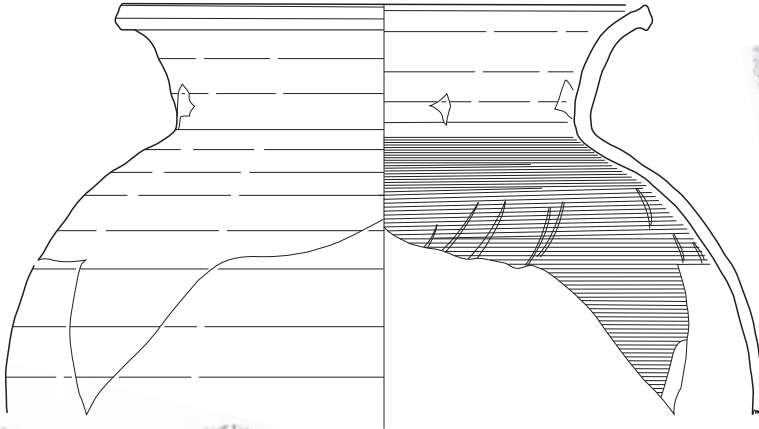
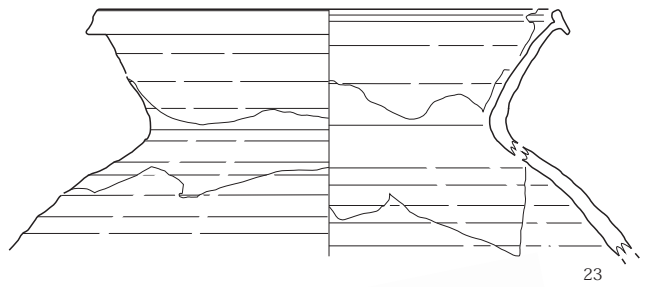
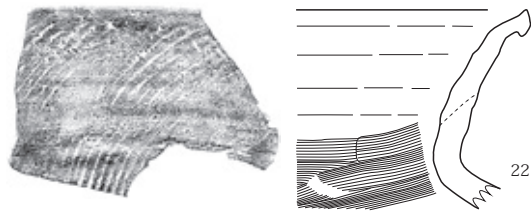


No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	1層	1/2	(12.5)		7.3	3.8	外内：ロクロナデ 底：回転系切り右	82-1	5
2	須恵器 坏	底面		(13.8)		(8.4)	4.4	外内：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り	82-2	26
3	須恵器 坏	2層	底部付近	(14.4)		8.1	4.6	外内：ロクロナデ 底：回転系切り右	82-3	9
4	須恵器 蓋	2層	1/2	13.6			4.1	外内：ロクロナデ 天井：回転ケズリ	82-4	10
5	須恵器 蓋	2層	1/2	14.0			4.0	外：ロクロナデ ケズリ	82-5	11
6	須恵器 蓋	4層	3/4			13.0	3.5	外：回転系切り→ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 摘み：窪み		34
7	須恵器 蓋	下層	ほぼ完形	13.5			3.5	外内：ロクロナデ 天井：回転ケズリ→ナデ 摘み貼付	82-6	17
8	須恵器 高台坏	1層	1/2	5.2		13.0	9.0	外内：ロクロナデ 底：回転系切り右→高台貼付け	82-7	6
9	須恵器 高台坏	4層	1/2	10.0		4.7	7.1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ→回転ケズリ	82-8	20
10	須恵器 高台坏	1層	2/3	10.1		6.0	4.5	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 底：回転系切り	82-9	3
11	須恵器 高台坏	1層	高台				7.4	外：ロクロナデ→ケズリ→ナデ 内：ロクロナデ 底：回転系切り	82-10	4
12a	須恵器 高台	4層	高台					外：ロクロナデ→ミガキ 内：ロクロナデ→カキメ		18
12b	須恵器 高台	4層	高台					外：ロクロナデ→ミガキ 内：ロクロナデ→カキメ		18
13	須恵器 双耳坏	4層	ほぼ完形	(10.6)				外：ロクロナデ ケズリ 内：ロクロナデ ナデ	82-11	19
14	須恵器 壺	1層	口縁部～肩	(14.1)				外：ロクロナデ 内：ロクロナデ→ヘラナデ 下部に当て具	82-12	2
15	須恵器 短頸壺	底面	口縁部付近	(11.0)				外内：ロクロナデ 口縁部に蓋を重ね焼いた痕跡	82-13	24

第179図 灰原 出土遺物(1)

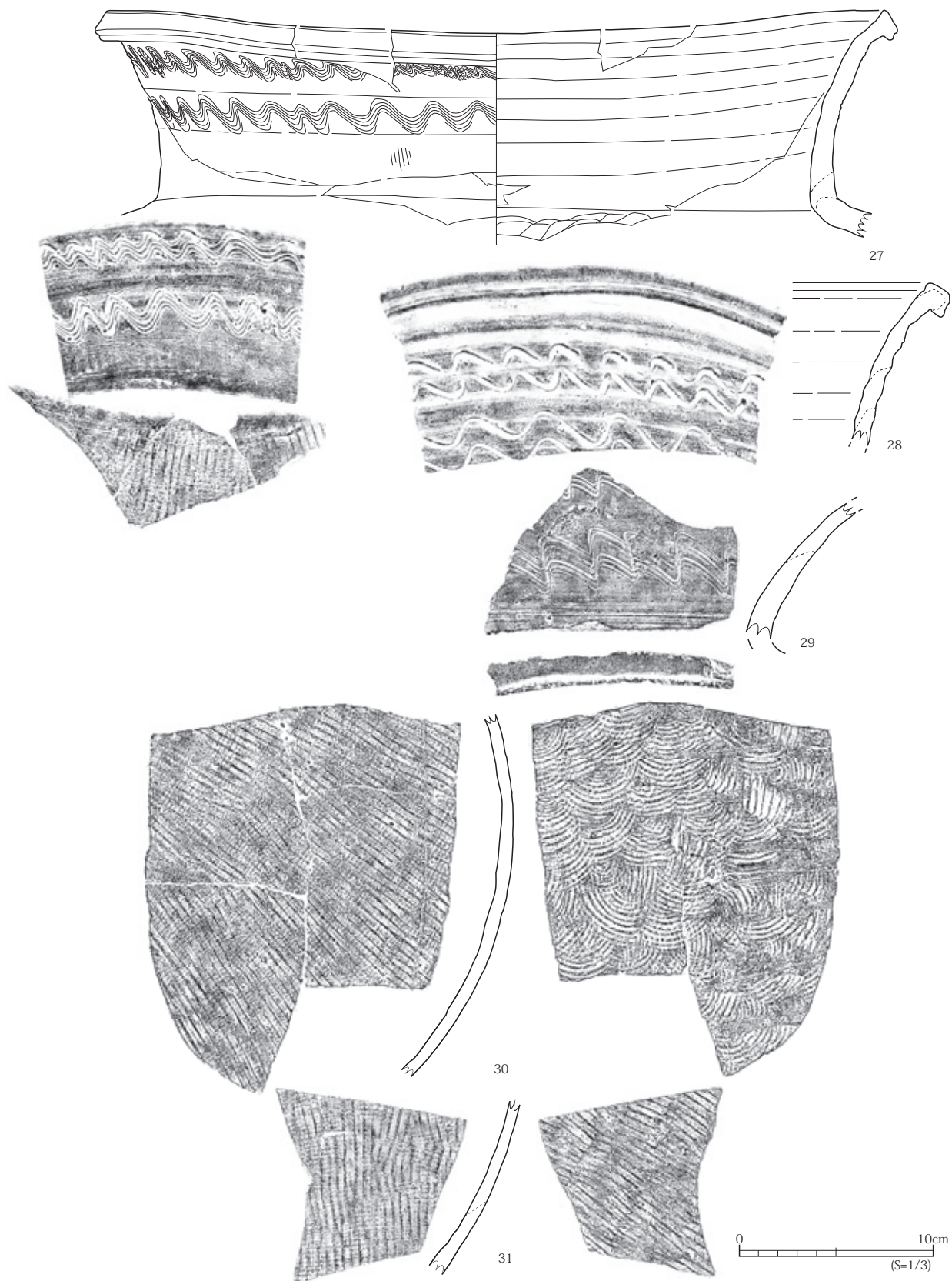


第 180 图 灰原 出土遺物 (2)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
16	須恵器 長頸瓶	下層	頸~口	(15.2)				外：平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	83-3	32
17	須恵器 長頸瓶	3層	頸					外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	83-4	12
18	須恵器 長頸瓶	3層上面	底~肩			10.8		外：ロクロナデ ケズリ 内：ロクロナデ 底：ヘラキリ?	83-2	14
19	須恵器 長頸瓶	1層	胴部 1/2					外：平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	83-1	8
20	須恵器 長頸瓶	底面	底部~肩			9.8		外：タタキ→ロクロナデ 一部ケズリ 内：ロクロナデ	83-5	22
21	須恵器 長頸瓶	底面	底部			9.7		外内：ロクロナデ	83-6	23
22	須恵器 甕	検出面	口縁部					外：擬格子タタキ→ロクロナデ 内：当て具→ナデ→ロクロナデ	83-7	44
23	須恵器 甕	1層	口縁部~肩	(18.2)				外内：ロクロナデ	83-8	7
24	須恵器 甕	3層上面	口縁部~肩	(20.8)				外：ロクロナデ 内：当て具→カキメ→ナデ	84-1	16
25	須恵器 甕	3層上面	口縁部~肩					外：平行タタキ→ロクロナデ		13
26	須恵器 壺	堆積土	胴部					外：平行タタキ 内：ロクロナデ→カキメ→ナデ		29

第 181 図 灰原 出土遺物 (3)



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
27	須恵器 甕	底面	口縁部	(40.0)				外：櫛描波状文 櫛歯5 2段 平行タタキ 内：無文当て具	83-9	25
28	須恵器 甕	表土	口縁部					外：波状文 2条1単位 2段～	85-2	1
29	須恵器 甕	3層上面	口縁部					外：櫛描波状文 櫛歯7 2段～ 2次被熱焼台転用	85-3	15
30	須恵器 甕	4層	胴部片					外：擬格子タタキ 内：同心円文当て具	85-4	21
31	須恵器 甕	検出面	胴部片					外：擬格子タタキ 内：平行文当て具	85-5	43

第 182 図 灰原 出土遺物 (4)

### 3. 吹付C窯跡小括

#### 1. 遺物 (第183図)

SR1では坏、盤、蓋、鉢、壺、甕、SR2では堆積土中から少量の坏、鉢、甕の小破片、灰原では坏、高台坏、盤、蓋、鉢、長頸瓶、壺、甕が出土した。また、灰原や遺構検出面から土師器甕が少量出土した。

##### 【SR1】

須恵器坏の器形は逆台形である(1・2)。口径12.5～13.5cm、器高4.0～4.5cm、底径6.8～8.0cmほどに収まるものが多い。一部、口径が14cmを超える資料は、焼成時の歪みなどに起因するものとみられる。

底部切り離し技法はヘラ切りと糸切りがある。ヘラ切りは底部外周付近や一部を簡素に撫でるものが多い。糸切りは原則、再調整が認められない。ヘラ切りと糸切りの比は、底部1/2以上残存でカウントすると4:3、1/4以上残存でカウントすると2:1となる。どちらもヘラ切りが多くなるが、1/2未満の資料を含まない場合、糸切りがやや多く見える結果になっている。ほかにSR1では、盤、蓋、鉢、壺、甕、SR2では坏、鉢、甕が出土しているが、破片資料が多いため、特徴は灰原の項目で記述する。

##### 【灰原】

1 [坏] …SR1と同様の特徴がみられる(7・8)。灰原でのヘラ切りと糸切りの比は、5:2～3:1でSR1同様、ヘラ切りの方が多い。1点出土した双耳坏は(9)、坏部は高台がほとんど欠損するが、高台坏であり、把手は長さ・幅ともに小さく、小形である。

2 [高台坏] …口径は大きいもので13cm、大部分は10cm、器高は7cmほどである(10・11)。ミガキのある高台破片がある(12)。

3 [盤] …口径20cm、器高4cmほどである。

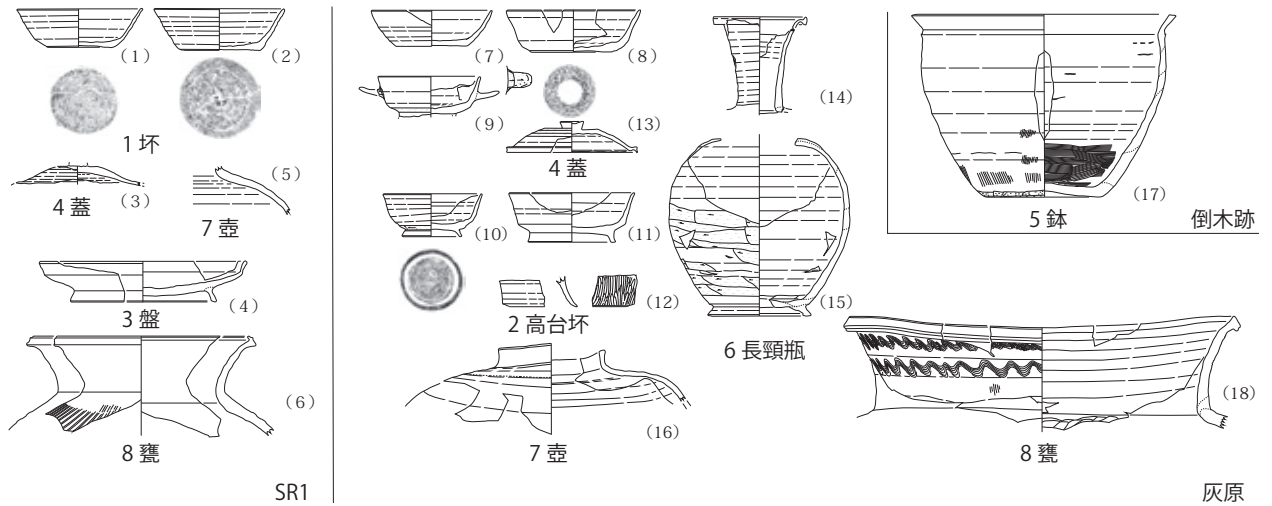
4 [蓋] …口径13～14cm程度のもが多い。セットになるはずの高台坏より大きく、数値上は坏と一致してくる。現状では、出土した高台坏の資料数が少ないため、セットになるものが少なかったと考えておきたい。つまみは擬宝珠である。天井の回転ケズリが不十分で、回転糸切りの痕跡がみられるものがある。

5 [鉢] …全形の判明する資料は倒木痕から出土したものに限られる。口径26cm、器高19cmほどである。SR1、灰原から破片が多数出土している。

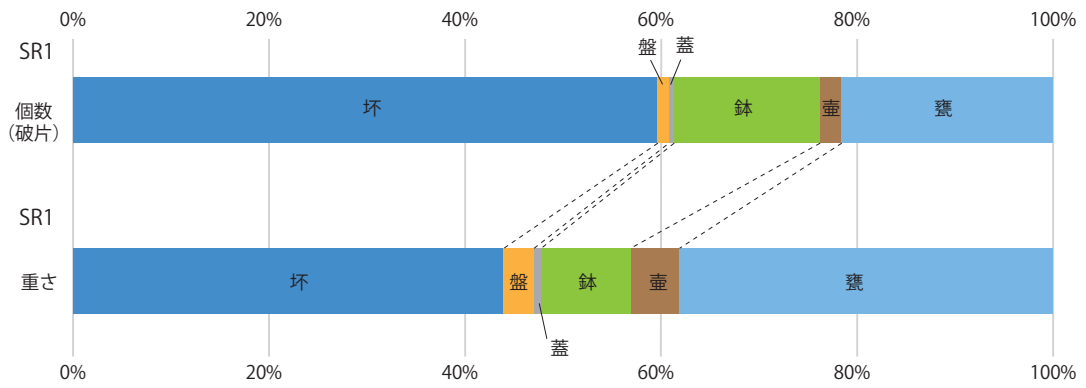
6 [長頸瓶] …口頸部はリング状突帯をもつものはない。胴部上端の頸部との境目には擬口縁が残る。頸部と胴部の接合は3段である。2段のものは確認できなかった。

7 [壺] 口径20cm前後である。ロクロやナデが見られるものを壺とした。叩きや当て具痕の残るものは甕とした。(17)は短頸壺である。自然釉がかかるが、同心円状に口縁部外周～頸部にかけて釉がかからないことからセットになる蓋を被せて窯詰めされていたとみられる。

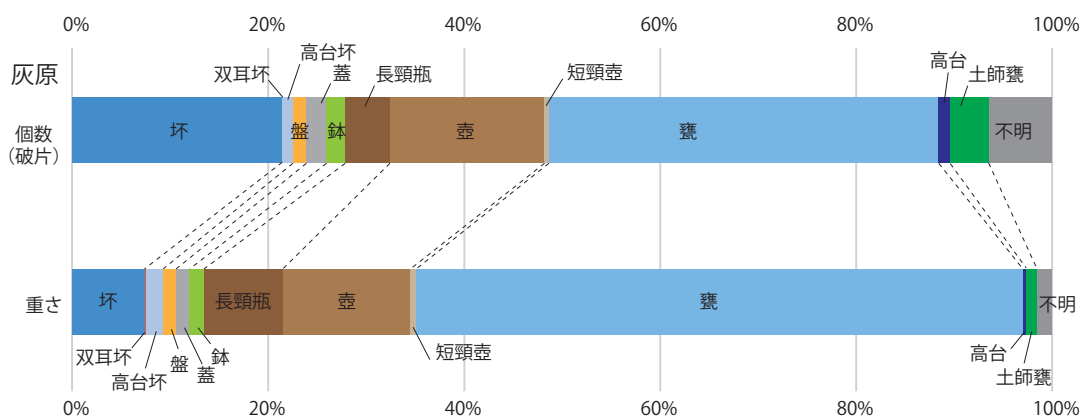
8 [甕] …口径20～40cmほどのものがみられる。(18)は口頸部に櫛描波状文とヘラ描波状文がみられる。甕胴部は外面が擬格子叩き、内面が無文、同心円文、平行線文の当て具痕がある。出土資料



器種	坏	双耳坏	高台坏	盤	蓋	鉢	長頸瓶	壺	短頸壺	甕	高台	土師甕	不明	合計
個数(個)	108	0	0	2	1	27	0	4	0	39	0	0	0	181
重さ(g)	3973	0	0	282	65	825	0	450	0	3448	0	0	0	9043



器種	坏	双耳坏	高台坏	盤	蓋	鉢	長頸瓶	壺	短頸壺	甕	高台	土師甕	不明	合計
個数(個)	544	1	26	34	53	48	116	399	11	1009	28	102	1630	2354
重さ(g)	5767	148	1332	1019	1080	1147	6285	10141	477	48237	296	858	0	77975



(個数 破片)	へら切り		糸切り		
	SR1 (1/2)	(16)	(11)	灰原 (1/2)	(47)
SR1 (1/4)	(24)	(13)	灰原 (1/4)	(106)	(39)

第 183 図 吹付 C 窯跡出土土器・個数と重量の比

中では、無文当て具痕が少ない。平行線の当て具痕は今後、類例に注意を払う必要がある。

## 2. 器種構成とその構成比

灰原とSR1から出土した須恵器の構成比を第183図下半に示した。それぞれ総点数(破片数)・重量・抽出数で提示している。壺の項目は、短頸壺、鉢、長頸瓶、小甕、平底甕に細分できなかった破片をカウントした。甕類は、器形、器壁の厚さ、口縁部の長さや厚さから細分できた破片を大甕や平底甕などとしてカウントした。細分できなかった破片は、項目「甕」でカウントしている。以下では、大甕や平底甕など細分できたものと、できなかった「甕」をまとめて示すさいは甕類とする。なお、灰原では土師器甕が少量出土しており、表にも提示している。本節の目的である須恵器生産の構成比検討では、厳密には除外すべきであるが、少量で影響がないため、灰原出土土器として提示した。

灰原では坏、双耳坏、高台坏、蓋、盤、壺、鉢、長頸瓶、大甕、中甕、小甕、平底甕、土師器甕が出土した。このうち、土師器甕を除く須恵器が窯跡の生産器種である。SR1では焼台転用の坏が多く、SR2ではほとんど須恵器が出土していないため、灰原出土須恵器が吹付C窯跡の生産器種とその比率を最も反映する資料である。

器種構成比を点数でみると、甕類が40%、ついで坏が22%、壺が16%となっている。重量では、甕類が62%、ついで壺が13%、坏が7%となっている。窯の廃棄品といった性格からみた比率のため、各製品の失敗率の違いや焼台への転用を目的とした選抜などによる偏りがあり、正確な生産比を示していないことに注意が必要であるが、個数、重量ともに類似した傾向がみられるため、一定程度の生産比を示すと考えたい。

甕類は重量比にすると割合が高くなるが、個数でも高い割合である。ついで個数では坏が高い割合であるが、重量では壺になる。壺は坏と比べると、甕類ほどではないものの、割合が高くなる傾向がある。また、壺項目には、鉢や長頸瓶、小甕などの破片を少なくない数含んでカウントしていることを踏まえると、本来は坏の方が多き可能性がある。壺は短頸壺、鉢、長頸瓶、小甕、小形の平底甕に細分できなかった破片の個数・重量で、全体で2か3番目に高い割合を示す。

そのほかの器種の比率は点数・重量のどちらでも低く、限定的な生産であったことが分かる。とくに供膳具では、無高台の坏がほとんどで、高台坏、盤、高坏、蓋はかなり限定的である。また、硯や水瓶の出土はない。

吹付C窯跡は、甕類と無高台の坏といった貯蔵具と日用雑器の生産が主で、官衙的器種を含むそのほかの器種は限定的な生産である。

## 3. 須恵器の時期

SR1出土須恵器坏は、個々の坏が焼台に転用されるまでの時間幅が問題にはなるものの、転用されて廃棄された時点では一括性があり、窯跡内での失敗品の転用であることを踏まえると、極端な時間差はないと考えられる。

須恵器坏の器形は逆台形で、ヘラ切りと糸切りが混在し、ヘラ切りが多いものの、一定数の糸切り

が存在する。同様の特徴をもつ土器は周辺では、上新田遺跡第1号住居跡で確認できる。器形は逆台形で底径は比較的大きく、口径に対する底径の割合が小さくなっている資料は認められない。底部切離しをみると、ヘラ切りと糸切りの割合は、床面出土資料では2：1、床面のほかに堆積土やピットも含めると4：5である。上新田遺跡第1号住居では糸切りの割合が高くなっている。

SR1 出土須恵器坏は、さきに検討した彦右エ門橋窯の須恵器坏と比較すると、彦右エ門橋窯跡Ⅰ期～Ⅱ期の特徴をもつ。Ⅰ期の床面出土須恵器坏はヘラ切りのみで糸切りはみられなかった。Ⅱ期の床面出土須恵器坏は、ヘラ切りと糸切りの割合が3：1～2：1程度ある。SR1 出土須恵器坏は、器形が逆台形に限られることから、器形をみるとⅠ期寄りといえるが、底部切離しをみるとヘラ切りと糸切りが混在するⅡ期寄りである。したがって、SR1 出土須恵器坏は、9世紀前葉～9世紀中葉のなかでも前葉寄りとみられることから、おおむね9世紀前半と考えられる。





# 写 真 图 版



1. SR1 完掘 (東から)



2. SR1 転用焼台出土状況 (南から)



3. SR1 転用焼台出土状況 (東から)



4. SR1 堆積状況断面 (南から)



5. SR1 検出状況 (東から)



6. SR1 被熱確認 (東から)



7. SR1 壁断面 (東から)

図版 77 吹付 C 窯跡 SR1



1. SR1、SR2 完堀（東から）



2. SR2 堆積状況断面（南から）



3. SR2 堆積状況断面（南から）



4. SR2 被熱状況（東から）



5. SK4、SK5 断面（東から）

図版 78 吹付 C 窯跡 SR2



1. 灰原土器出土状況（西から）



2. 灰原全景（北西から）



3. 灰原中央（北西から）



4. 灰原 B-B' ベルト（南西から）



5. 灰原調査（南から）

図版 79 吹付 C 窯跡 灰原



1. 調査区全景（北東から）



2. 窯2前確認トレンチ（南から）



3. 仮設道路確認トレンチ（南西から）



4. 調査前（東から）



5. 表土掘削（南から）

図版 80 吹付C窯跡 全景 トレンチ



SR1 集合写真



图版 81 SR1 出土遺物



灰原 集合写真



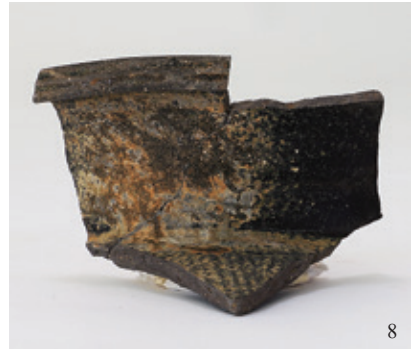
図版 82 灰原 出土遺物 (1)





1・2 : S=1/4

図版 83 灰原 出土遺物 (2)



図版 84 灰原・SR2 出土遺物 (1)



图版 85 灰原・SR2 出土遺物 (2)

## 第Ⅵ章 彦右工門橋窯・吹付窯跡・吹付 C 窯跡まとめ

### 総括

彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付 C 窯跡周辺ではこれまでに、同時期、あるいは前後する時期の窯跡や窯業にかかわる遺跡が調査されている。以下、その中における彦右工門橋窯跡、吹付 C 窯跡の位置を整理しておきたい。

### 年代的な位置

8 世紀前半 日の出山 C 地点

8 世紀中葉 萱刈場 A 地点 SR2 窯跡、SR3 窯跡

8 世紀後半～9 世紀初頭 彦右工門橋窯跡 I 期、彦右工門橋窯跡 SR 1、SK 1、亀岡遺跡

9 世紀前葉～中葉 吹付 C 1 号窯跡・灰原

9 世紀中葉～9 世紀後葉 彦右工門橋窯跡 II 期

9 世紀後葉～10 世紀初頭 彦右工門橋窯跡 III 期

### 調査のまとめ

彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付 C 窯跡を縦断するかたちで約 800 m にわたって調査区、トレンチを設定して調査した。その結果、遺構・遺物の分布が明らかとなった。

#### (1) 彦右工門橋窯跡

彦右工門橋窯跡では遺跡範囲西端付近の丘陵突端、沢、低地にあたる部分を調査した。遺構・遺物を発見した範囲は、丘陵が西に張出す位置にあっており、周辺の中では標高の高い場所を中心として、8 世紀後半～10 世紀初頭にかけて土器・瓦造りと関連の深い竪穴建物跡や土師器焼成遺構が分布する。南側は SD 2 河川跡を境としてそれ以南の 10 区では遺構・遺物が見つからない。北側では 6 区 SI25 竪穴建物跡のある標高 44.0 m 付近を境にして、それ以南では密な遺構分布を示すが、北側では北西側に緩やかに傾斜する斜面が続いていく（第 9 図）。

I 期には恵器とともに瓦も生産されていたと考えられる。瓦の中には、珠文鋸歯文縁素弁四葉蓮華文軒丸瓦があり、これまで一関遺跡、名生館官衙遺跡、伏見廃寺、城遺跡などで出土していたが、生産地は不明であった。今回の調査では、彦右工門橋窯跡が須恵器生産に最も関わっていたとみられる時期の遺構からも出土しており、彦右工門橋窯跡がその軒丸瓦の生産遺跡である可能性が高まった。

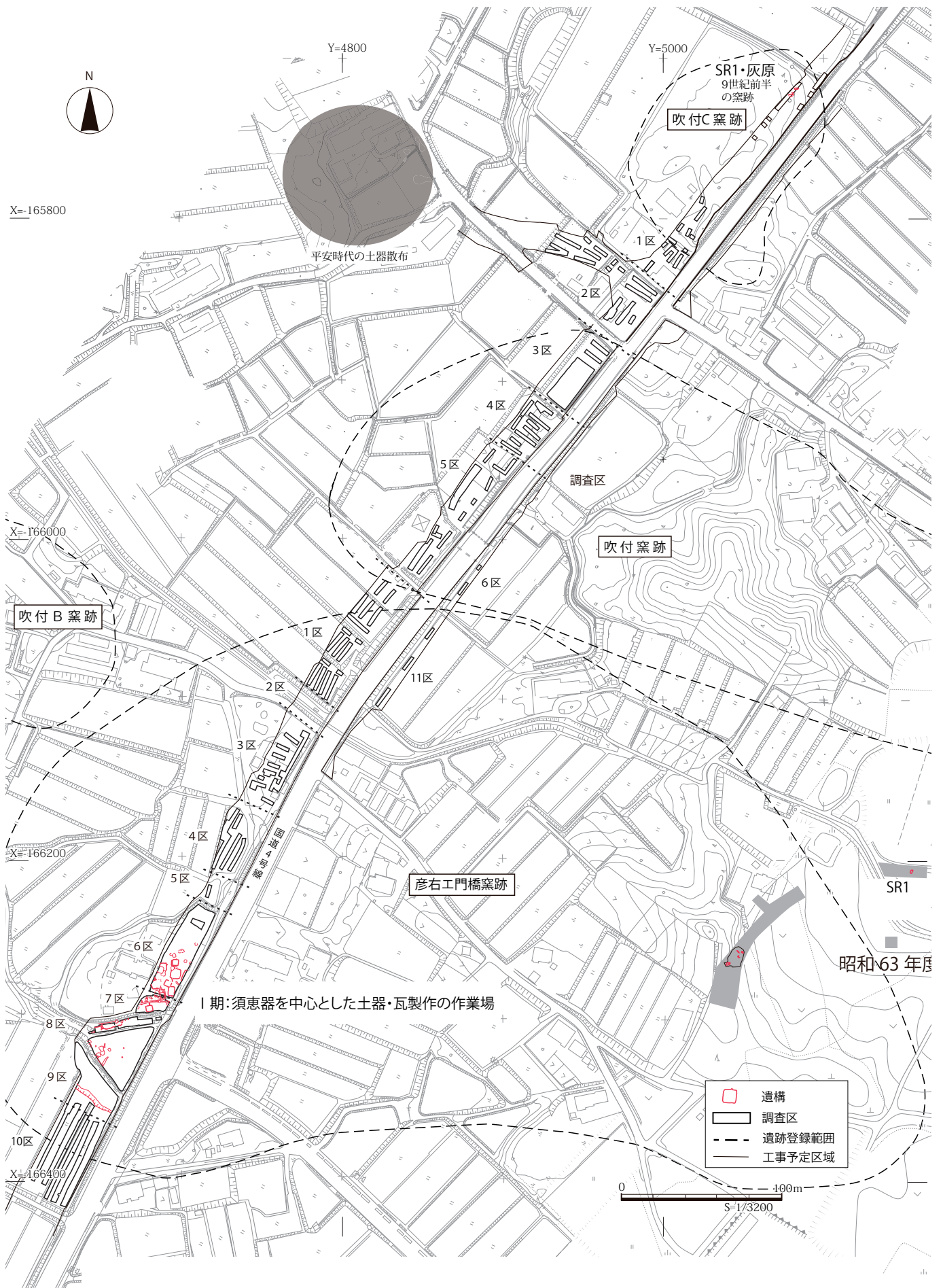
9世紀中葉以降は、竪穴建物跡と土師器焼成遺構が営まれる状況を確認した。また、河川跡から9世紀後半の須恵器坏がまとまって出土した。灰白色火山灰降下前の9世紀末～10世紀前葉までの遺構・遺物は確認できるが、火山灰降下以降といえる遺物はみられなかった。

#### (2) 吹付窯跡

吹付窯跡では、遺跡範囲西端付近の丘陵突端、谷、沢にあたる部分を調査した。土師器・須恵器片が少量出土したものの、遺構は発見されなかった。調査範囲より西側では、沢、谷、低地が広がるため遺構が分布する可能性が低いと考えられる。一方、調査範囲の東側では、過去に須恵器が採集されているほか、地形的にもより標高が高く、丘陵北西～西斜面にあたるため、遺構・遺物が分布する可能性が高い。

#### (3) 吹付C窯跡

吹付C窯跡は今回の調査時に発見した遺跡であり、発見・調査した窯跡と灰原の位置と周囲の地形から遺跡範囲を設定した。なお、遺跡範囲内とその周辺を踏査したが、顕在遺構や遺物は発見していない。北西に傾斜する斜面に9世紀前葉の窯跡が分布する。



第 184 図 彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡遺構分布図

# 報告書抄録

ふりがな	ひこうえもんばしかまあと・ふつけかまあと・ふつけしーかまあと							
書名	彦右エ門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡							
副書名	国道4号大衡道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第258集							
編著者名	佐藤渉、廣谷和也、黒田智章、熊谷亮介、古川一明、佐久間光平							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3丁目8-1 TEL 022-211-3684							
発行年月日	西暦2024年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひこうえもんばしかまあと 彦右エ門橋窯跡	黒川郡大衡村 駒場字彦右エ 門橋大衡字吹 付		26010	38度30分 7秒	140度53 分13秒	2019.0803～ 2022.10.13	4937㎡	国道4号大衡道路拡幅 工事
ふつけかまあと 吹付窯跡	黒川郡大衡村 駒場字駒場字 欠下		26011	38度30分 19秒	140度53 分22秒	2019.12.03 ～2022.10.19	1806㎡	
ふつけしーかまあと 吹付C窯跡	黒川郡大衡村 駒場字蕨崎、 上横前		26092	38度30分 26秒	140度53 分30秒	2022.03.07 ～2023.07.04	120㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
ひこうえもんばしかまあと 彦右エ門橋窯跡	窯跡	古代		掘立柱建物3、竪穴 建物跡14、土師器焼 成遺構14、焼成土坑 10、土坑22、溝5ほ か		土師器、須恵器、瓦、土製品、 石製品、石器、縄文土器		8世紀後半～9世紀初 頭の須恵器生産にかか わる窯場を確認した。
ふつけかまあと 吹付窯跡	窯跡	古代		なし		土師器、須恵器		遺跡範囲の西側を調査 した結果、遺構は確認 できなかった。
ふつけしーかまあと 吹付C窯跡	窯跡	平安		窯跡2、灰原1ほか		土師器、須恵器		9世紀前半の窯跡と灰 原を調査した。窯跡の 製品である須恵器が出 土した。
要約	<p>国道4号大衡道路拡幅工事に先立ち、令和元年～令和5年に実施した彦右エ門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡の発掘調査報告書である。彦右エ門橋窯跡では8世紀後半～9世紀初頭の須恵器生産にかかわる窯場を発見した。また、これまで一の関遺跡や名生館官衙遺跡で出土していた珠文鋸歯縁素弁四葉蓮華文軒丸瓦の生産遺跡であることが判明した。吹付C窯跡では9世紀前半の窯跡2基と灰原1箇所を発見した。</p>							

---

宮城県文化財調査報告書第 258 集

彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡

— 国道 4 号大衡道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書 1 —

令和 6 年 3 月 12 日印刷

令和 6 年 3 月 18 日発行

発行 宮城県教育委員会

〒 980-8423

宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号

印刷 株式会社 東北プリント

〒 980-0822

宮城県仙台市青葉区立町 24-24

☎ 022-263-1166

---



